

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 XIV

— 印西市鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡 —

平成12年 3月

都市基盤整備公団千葉地域支社
千葉ニュータウン事業本部
財団法人 千葉県文化財センター

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 XIV

— いんざい 印西市 なるかみやま 鳴神山遺跡III・しろいたにおく 白井谷奥遺跡 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第392集として、都市基盤整備公団千葉地域支社の千葉北部地区新市街地造成整備事業関連に伴って実施した印西市鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良・平安時代の遺構群や多数の墨書土器・線刻土器が検出され、この地域の古代史を知る上で貴重な成果が得られています。

刊行にあたり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成12年 3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理 事 長 中 村 好 成

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	3
1 調査の経緯と経過	3
第2節 遺跡の位置と環境	5
1 遺跡周辺の地理的環境	5
2 遺跡の位置と歴史的環境	5
第2章 鳴神山遺跡III	7
第1節 遺構	9
1 古墳時代の竪穴住居	9
2 奈良・平安時代の竪穴住居	12
3 中世の遺構	58
4 溝・道路状遺構	63
5 その他の遺構	66
第2節 遺物	69
1 古墳時代遺構出土遺物	69
2 奈良・平安時代遺構出土遺物	72
3 中世の遺構出土遺物	161
4 溝・道路状遺構出土遺物	163
5 その他の遺構出土遺物	165
6 グリッド一括遺物及び表採遺物	165
7 その他の遺物	166
第3章 白井谷奥遺跡	171
第1節 遺構	173
1 弥生時代の竪穴住居	173
2 奈良・平安時代の竪穴住居	173
3 古代の道路状遺構	178
4 中世の遺構	180
5 溝状遺構	190
6 その他の遺構	192
第2節 遺物	196
1 弥生時代遺構出土遺物	196
2 奈良・平安時代遺構出土遺物	196
3 中近世遺構出土遺物	205
4 その他の遺物	206

第4章	まとめ	209
第1節	集落構成について	211
1	奈良・平安時代の集落構成	211
2	鳴神山遺跡M004道路状遺構・白井谷奥遺跡029道路状遺構について	212
3	中世遺構群について	213
第2節	奈良・平安時代の遺物様相について	213
1	須恵器と土師器	213
2	畿内産土師器	214
3	施釉陶器	214
4	文字・記号資料	215
	報告書抄録	

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺地形図	4	第23図	220竪穴住居	40
第2図	遺跡地形図	6	第24図	222竪穴住居	41
第3図	186・206竪穴住居	10	第25図	224・225竪穴住居	42
第4図	206竪穴住居遺物出土状況図	11	第26図	226A・226B竪穴住居	44
第5図	171・172竪穴住居	13	第27図	226A・226Bカマド，227竪穴住居	45
第6図	174竪穴住居	14	第28図	228・229竪穴住居	47
第7図	179竪穴住居	16	第29図	230・231・232竪穴住居	48
第8図	182・183竪穴住居	17	第30図	233・236竪穴住居	50
第9図	183遺物出土状況図，184竪穴住居	19	第31図	237・238A・B・C竪穴住居	52
第10図	185・187竪穴住居	20	第32図	239・240・241竪穴住居	53
第11図	188・189竪穴住居	22	第33図	242竪穴住居	55
第12図	190・191竪穴住居	23	第34図	251・252・261竪穴住居	57
第13図	193・207竪穴住居	25	第35図	243・234土壇	59
第14図	207遺物出土状況図・カマド	26	第36図	253溝，254～259・262・263土壇	61
第15図	208竪穴住居	27	第37図	235地下式壇，223・269土壇	62
第16図	208カマドA・B，209竪穴住居	29	第38図	247・245・246道路，244溝状遺構	64
第17図	209カマド，210竪穴住居	30	第39図	266・267溝，M002道路状遺構	67
第18図	211竪穴住居	32	第40図	192・177・194・248・265土壇，17Q-86グリ ッドピット群，212炭窯	68
第19図	213・214竪穴住居	33	第41図	186・206竪穴住居出土遺物	71
第20図	215竪穴住居	35	第42図	171竪穴住居出土遺物	73
第21図	216・217竪穴住居	37	第43図	172・174竪穴住居出土遺物	75
第22図	217カマド，218・219竪穴住居	38			

第44図	174竪穴住居出土遺物	77	第80図	238竪穴住居出土遺物	151
第45図	174竪穴住居出土遺物	79	第81図	238・239竪穴住居出土遺物	154
第46図	179竪穴住居出土遺物	81	第82図	240竪穴住居出土遺物	156
第47図	182竪穴住居出土遺物	83	第83図	241竪穴住居出土遺物	158
第48図	182・183竪穴住居出土遺物	85	第84図	242・251・252・261竪穴住居出土遺物	160
第49図	184・185竪穴住居出土遺物	87	第85図	234・243・254・263土壌, 253・245・246溝状遺構出土遺物	162
第50図	185・187竪穴住居出土遺物	89	第86図	M002溝, 265土壌, グリッド一括・表採遺物	164
第51図	188竪穴住居出土遺物	91	第87図	石器	166
第52図	188・190竪穴住居出土遺物	94	第88図	縄文土器	167
第53図	190竪穴住居出土遺物	96	第89図	弥生土器	169
第54図	191・193竪穴住居出土遺物	98	第90図	041・006竪穴住居	174
第55図	193・207竪穴住居出土遺物	101	第91図	007・010・012竪穴住居	176
第56図	207竪穴住居出土遺物	103	第92図	012・026竪穴住居	177
第57図	208竪穴住居出土遺物	105	第93図	029道路状遺構	179
第58図	208竪穴住居出土遺物	107	第94図	中世遺構群配置図	181
第59図	209・210・211竪穴住居出土遺物	109	第95図	016・035・017地下式墳	182
第60図	211竪穴住居出土遺物	111	第96図	018・019・021地下式墳	183
第61図	213竪穴住居出土遺物	113	第97図	030・032・034土壌, 037ピット群	185
第62図	214・215竪穴住居出土遺物	115	第98図	022・031・038・023A・023B・024・025土壌	187
第63図	216・217竪穴住居出土遺物	117	第99図	020道路状遺構	189
第64図	217・218竪穴住居出土遺物	119	第100図	009・011・013溝状遺構	191
第65図	219竪穴住居出土遺物	121	第101図	033・028溝状遺構	193
第66図	220竪穴住居出土遺物	123	第102図	039方形周溝, 008・014・015・027・042土壌, 036土壌群	195
第67図	222竪穴住居出土遺物	125	第103図	041・007・010・012竪穴住居出土遺物	197
第68図	222竪穴住居出土遺物	127	第104図	026竪穴住居出土遺物	199
第69図	224・225竪穴住居出土遺物	129	第105図	029道路状遺構出土遺物	201
第70図	225竪穴住居出土遺物	131	第106図	029・020道路状遺構出土遺物	203
第71図	225竪穴住居出土遺物	133	第107図	013・019・021・030・033・036・042, グリッド一括遺物	207
第72図	225・226A竪穴住居出土遺物	135	第108図	縄文土器	207
第73図	226A・226B竪穴住居出土遺物	137	附図	全測図	
第74図	227・228・229竪穴住居出土遺物	139			
第75図	229・230・231・232竪穴住居出土遺物	141			
第76図	233竪穴住居出土遺物	143			
第77図	233竪穴住居出土遺物	145			
第78図	236・237竪穴住居出土遺物	147			
第79図	237・238竪穴住居出土遺物	149			

図版目次

- 図版1 遺跡周辺航空写真
—鳴神山遺跡III—
- 図版2 186竪穴住居全景，206竪穴住居全景
206竪穴住居炭化材出土状況
- 図版3 206竪穴住居遺物出土状況，171竪穴住居全
景，172竪穴住居全景
- 図版4 174竪穴住居全景，174竪穴住居カマド
179竪穴住居全景
- 図版5 182・183竪穴住居全景，184竪穴住居全景，
185竪穴住居全景
- 図版6 187竪穴住居全景，187竪穴住居カマド
188竪穴住居全景
- 図版7 188竪穴住居カマド，189竪穴住居全景
190竪穴住居全景
- 図版8 191竪穴住居全景，193竪穴住居全景
207竪穴住居全景
- 図版9 207竪穴住居遺物出土状況，208竪穴住居全
景，209竪穴住居全景
- 図版10 210竪穴住居全景，211竪穴住居全景
211竪穴住居ベッド状遺構近景
- 図版11 213竪穴住居全景，214竪穴住居全景
215竪穴住居全景
- 図版12 216竪穴住居全景，216竪穴住居カマド内遺
物出土状況，217竪穴住居全景
- 図版13 218竪穴住居全景，219竪穴住居全景
220竪穴住居全景
- 図版14 222竪穴住居全景及び遺物出土状況
224竪穴住居全景，225竪穴住居全景
- 図版15 225竪穴住居炭化材出土状況，カマド内遺物
出土状況，遺物出土状況
- 図版16 226A・226B竪穴住居全景，227竪穴住居全
景，228竪穴住居全景
- 図版17 229竪穴住居全景，229竪穴住居カマド，
230竪穴住居全景
- 図版18 232竪穴住居全景，236竪穴住居全景，
236竪穴住居遺物出土状況
- 図版19 237竪穴住居全景，217・237・238A・
238B・238C・240・241竪穴住居全景，
238B竪穴住居カマド
- 図版20 239竪穴住居全景，239竪穴住居カマド
240竪穴住居全景
- 図版21 240竪穴住居カマド内遺物出土状況，
241竪穴住居全景，241竪穴住居遺物出土状
況
- 図版22 242竪穴住居全景，252竪穴住居・265土壌全
景，261竪穴住居全景
- 図版23 243土壌全景，234土壌遺物出土状況，
253・260溝状遺構・254・259・263土壌全景
- 図版24 233・251竪穴住居・255～258・262・
268土壌全景，262土壌全景，
235地下式壙全景
- 図版25 235地下式壙竪坑近景，223土壌全景，
269土壌全景
- 図版26 244溝状遺構全景，245・246道路状遺構全景，
002道路状遺構及び調査風景
- 図版27 192陥穴全景，177土壌全景，
194土壌全景
- 図版28 206・171・172・174竪穴住居出土遺物
- 図版29 174・179竪穴住居出土遺物
- 図版30 179・182・183・184・185竪穴住居出土遺物
- 図版31 187・188竪穴住居出土遺物
- 図版32 190・191・193・207竪穴住居出土遺物
- 図版33 207・208・209・210・211・213竪穴住居出
土遺物
- 図版34 215・216・217・218竪穴住居出土遺物
- 図版35 219・220竪穴住居出土遺物
- 図版36 220・222竪穴住居出土遺物
- 図版37 222・224・225竪穴住居出土遺物

- 図版38 225・226A・226B・227・229竪穴住居出土遺物
- 図版39 229・232・233・236・237竪穴住居出土遺物
- 図版40 237・238・240竪穴住居出土遺物
- 図版41 241・245・251・261竪穴住居出土遺物，
213・219・229竪穴住居出土畿内産土師器，
171竪穴住居出土羽口
- 図版42 238・191・207・206竪穴住居出土性格不明土製品
- 図版43 206竪穴住居出土土製品，263土壙出土青磁，
鉄製品，文字資料(1)
- 図版44 文字資料(2)
- 図版45 文字資料(3)
- 図版46 文字資料(4)，石器
- 図版47 縄文土器(1)，(2)
- 図版48 弥生土器(1)，(2)
- 図版49 鉄器(1)，(2)
- 図版50 砥石，紡錘車
- 図版51 土製品，234土壙出土短刀，
206竪穴住居出土土器，
222竪穴住居出土土製紡錘車
- 白井谷奥遺跡—
- 図版52 041竪穴住居付近全景，041竪穴住居全景，
041竪穴住居遺物出土状況
- 図版53 006竪穴住居全景，007竪穴住居全景，
010竪穴住・011溝状遺構全景
- 図版54 012竪穴住居全景，026竪穴住居全景，
026竪穴住居カマド内遺物出土状況
- 図版55 029道路状遺構全景，016地下式壙全景，
017地下式壙全景
- 図版56 018地下式壙全景，019地下式壙全景，
021地下式壙全景
- 図版57 030土壙全景，032土壙・037ピット群全景，
023A・B土壙全景
- 図版58 020道路状遺構全景，033溝状遺構全景，
039方形周溝全景
- 図版59 008陥穴全景，014土壙全景，
015土壙全景
- 図版60 007・012・026・029竪穴住居出土遺物
- 図版61 縄文土器，弥生土器
- 図版62 文字資料，鉄製品

第 1 章

は じ め に

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

鳴神山遺跡Ⅲは住宅・都市整備公団（現 都市基盤整備公団千葉地域支社）の委託により、財団法人千葉県文化財センターが平成2年度から平成10年度まで4次にわたって発掘調査を行い、白井谷奥遺跡は平成5・10年度に発掘調査を行った。

鳴神山遺跡全体は千葉北部地区新市街地造成整備事業に関連して昭和63年度より調査を開始している。鳴神山遺跡は全4地点に分けて調査を実施し、鳴神山遺跡Ⅲは遺跡の東部及び南部の外周部分を占めており、表1に記したとおり平成2年度より発掘調査を開始している。また、白井谷奥遺跡は鳴神山遺跡の西に広がる遺跡で、平成5年度より発掘調査を開始している。遺跡の性格、また鳴神山遺跡Ⅲ遺跡へと伸びる直線道路状遺構の存在から考えても、鳴神山遺跡と有機的につながりをもって展開した集落遺跡であると考えられる。

鳴神山遺跡Ⅲ及び白井谷奥遺跡の発掘調査開始から報告書刊行に至るまでの発掘調査・整理概要、及び各年度の調査担当者等は表1・表2のとおりである。

表1 鳴神山遺跡Ⅲ発掘調査・整理概要

調査年度	発掘調査・整理内容	期 間	調査部長	所 長 (* 班長)	調 査 担 当 者
平成2年	確認調査 上層329/3,290m ² 下層128/3,290m ² 本調査 上層3,290m ²	2/1～3/30	堀部昭夫	上野純司*	高橋博文
平成4年	確認調査 下層104/2,600m ² 本調査 上層2,600m ²	2/1～3/31 4/1～6/30	天野 努	田坂 浩*	高田 博 大石理子
平成5年	確認調査 下層160/3,950m ² 本調査 上層3,430m ²	8/10～8/31 4/1～6/15	高木博彦	田坂 浩	及川淳一 岡田誠造
平成8年	整理作業 水洗・注記・図面修正・写真整理	8/1～12/13	西山太郎	谷 旬	香取正彦
平成9年	整理作業 実測	4/1～12/26	西山太郎	折原 繁	香取正彦
平成10年	本調査 上層520m ² 確認調査 下層20/520m ² 整理作業 実測～原稿執筆	8/10～9/30 4/1～2/26	沼澤 豊	折原 繁	沖松信隆 鳴田浩司
平成11年	整理作業 復元・図面修正～原稿執筆 報告書刊行	7/16～12/28	沼澤 豊	折原 繁	岡田誠造 榊原弘二 萩原恭一



- 1 鳴神山遺跡
- 2 白井谷奥遺跡
- 3 向新田遺跡
- 4 船尾白幡遺跡
- 5 船尾町田遺跡
- 6 大塚前遺跡
- 7 泉北側第二遺跡
- 8 上宿古墳
- 9 曾谷窪瓦窯跡
- 10 木下別所庵寺
- 11 馬込遺跡
- 12 道作古墳群
- 13 駒形北遺跡
- 14 竜腹寺跡
- 15 向辺田遺跡
- 16 松崎遺跡群
- 17 逐昌路遺跡
- 18 子の神台遺跡
- 19 上谷遺跡
- 20 萱田遺跡群
- 21 村上込ノ内遺跡
- 22 萱橋遺跡
- 23 西ノ台遺跡
- 24 八幡台遺跡
- 25 白井城跡
- 26 白井南遺跡
- 27 師戸城跡
- 28 江原台遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺地形図 (1/50,000)

表2 白井谷奥遺掘調査・整理概要

調査年度	発掘調査・整理内容	期 間	調査部長	所 長	調 査 担 当 者
平成5年	確認調査 上層577/5,770㎡ 下層230/5,770㎡ 本調査 上層2,880㎡	6/1～8/25	高木博彦	田坂 浩	岡田誠造
平成10年	確認調査 上層292/2,800㎡ 下層56/2,800㎡ 本調査 上層400㎡ 整理作業 図面修正～挿図	7/1～8/31 3/1～3/31	沼澤 豊	折原 繁	沖松信隆 鳴田浩司
平成11年	整理作業 復元～原稿執筆 報告書刊行	4/1～7/15	沼澤 豊	折原 繁	榊原弘二 萩原恭一

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡周辺の地理的環境

鳴神山遺跡及び白井谷奥遺跡は、北総公団線「千葉ニュータウン中央駅」の南約1kmに位置し、印旛沼の西端に注ぎ込む神崎川の支流戸神川右岸の標高25mの台地上に展開する遺跡である。鳴神山遺跡は東西300m、南北600mほどの平坦な台地上に広がり、白井谷奥遺跡はその西に浅い谷を挟んで広がる遺跡である。

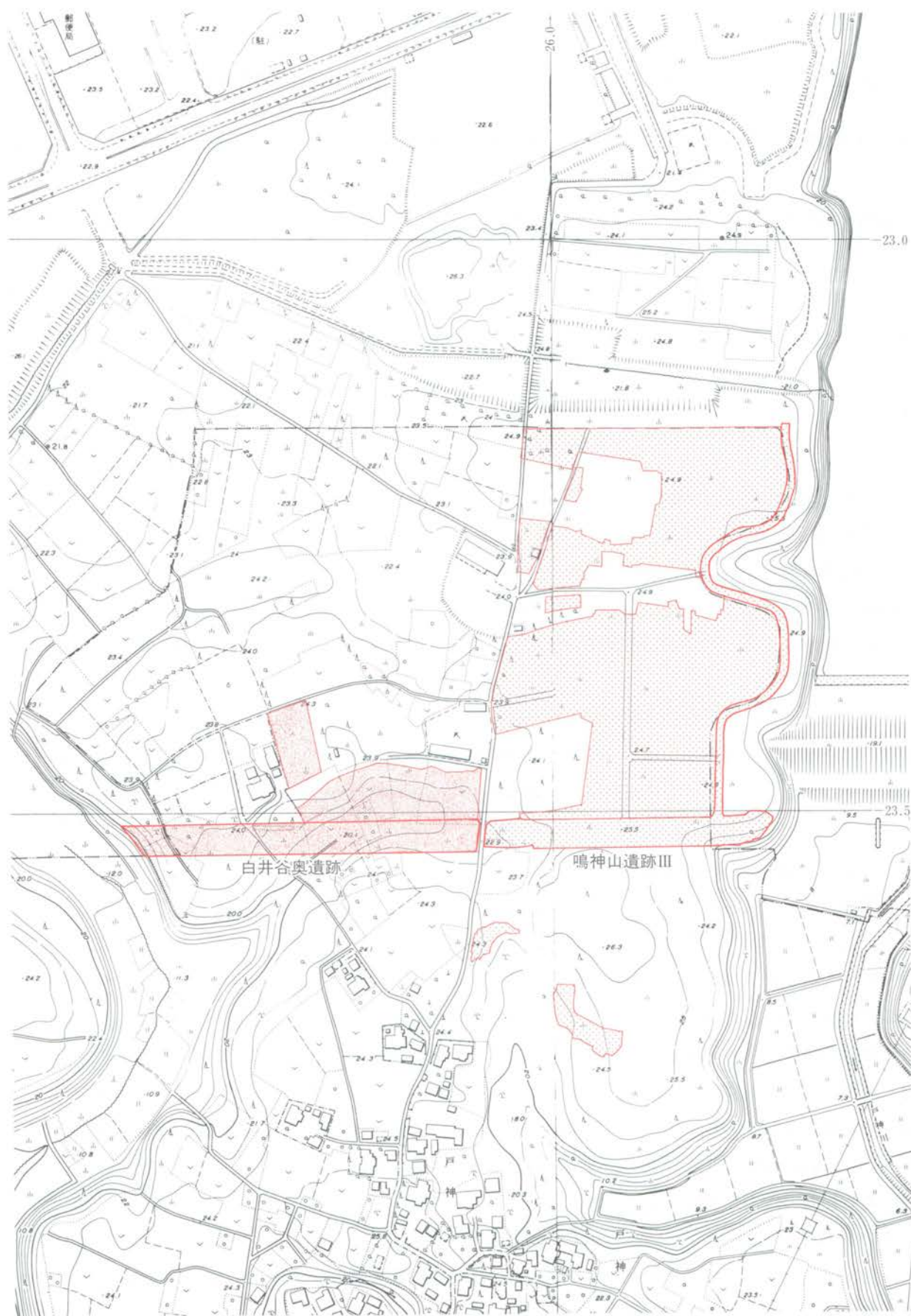
両遺跡を含む周辺地域は千葉県企業庁及び住宅・都市整備公団（現 都市基盤整備公団）により、昭和40年代から千葉ニュータウンとして大規模な宅地開発や鉄道・道路といった関連する市街地化整備が行われており、千葉県内においても比較的早い時期から大規模な発掘調査の行われている地域である。

2 遺跡の位置と歴史的環境

鳴神山遺跡、白井谷奥遺跡の位置する地域は、すぐ東に船尾の地名が存在することから、古代「倭名類聚抄」に見える印旛郡船穂郷の地域に該当すると考えられていた。しかし、千葉ニュータウン開発関連事業に伴う大規模発掘調査が長く行われてきたにもかかわらず、鳴神山遺跡・船尾白幡遺跡の奈良・平安時代の大規模集落遺跡が発掘調査されるまでは、船穂郷の実態は不明のままであった。

「倭名類聚抄」記載の郷名としては周辺に同じく印旛郡の村神郷・言美郷・三宅郷が見える。船穂郷の南に隣接する村神郷については八千代市村上込ノ内遺跡・萱田遺跡群の調査によってその実態がかなりの部分まで復元されている。また北東に隣接する言美郷については、畿内産土師器の検出等で知られる印西市駒形北遺跡調査成果と近接する鳥見神社の組合せ、さらに瓦塔の優品が出土した馬込遺跡の調査成果から、ある程度の予測が可能になってきている。

その他印西市内では木下別所廃寺や大塚前遺跡等の寺院遺跡、及び曾谷窪瓦窯跡が調査されており、古代仏教関連遺跡を多数擁する地域である。さらには白井谷奥遺跡から鳴神山遺跡を貫く直線道路状遺構の延長線上には本埜村龍腹寺跡も存在する。



第2図 遺跡地形図 (第Ⅸ座標系 1/5,000)
 (太枠内が本書収録部分)

第 2 章

鳴神山遺跡 III

第2章 鳴神山遺跡III

第1節 遺構

1 古墳時代の竪穴住居

186竪穴住居（第3図，図版2）

東側道路予定部分中位の12W-56・57・66・67グリッドに所在する。重複する遺構，近接する遺構のいずれも存在しない。平面形は隅丸方形で，遺構規模は南北3.1m，東西3.35m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.1m～0.2mである。南西壁の走行方位を住居主軸方位と見なすと，N-39°-Wとなる。牛蒡作付けのトレンチャーのために，壁・床ともにズタズタにされていた。壁溝は巡らされておらず，床面には焼土を多く散布する炉跡と考えられるものが北隅近くに検出されている。この炉跡については，焼土の散布は見られたものの床面の被熱の度合いは弱いものであった。このほか床面の硬化部分・柱穴のいずれも確認されていない。

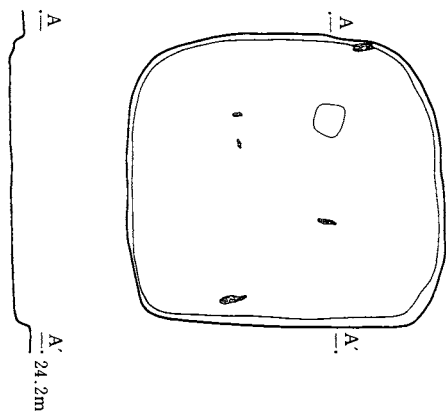
遺物はほとんど検出されておらず，図示できた1点が比較的大きな破片資料であっただけである。北西壁東隅寄りと南東壁西寄りのところに炭化材が検出されているが，量は少なく意味不明である。

206竪穴住居（第3・4図，図版2・3）

南側道路予定部分東寄りの17V-74・75・84・85・94・95・96グリッドに所在する。215竪穴住居・223土塙などが近接しているが，重複する遺構はない。平面形はやや隅丸気味の方形で，遺構規模は南北6.9m～7.1m，東西6.9m～7.3m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.7m，住居主軸方位はN-13°-Wである。本竪穴住居の最大の特徴は額縁状に巡るいわゆる「ベッド状遺構」である。中央一段下がった床部分は南北4.7m，東西4.4m～4.6m，周囲のベッド状部分との段差は0.1m前後である。ベッド状部分の幅は0.5m～1.1mである。一段下がった床状部分について先に記すと，四隅には径0.3m～0.4m，深さ0.65m～1.0mの支柱穴が検出されている。また，北壁側中央北寄りのところには炉が設けられている。長径0.85m，短径0.7m，深さ0.1mで，底面に明瞭な火床被熱部分が見える。周縁のベッド状部分はほぼ平坦で，北壁中央部分を除き壁溝が巡らされている。南東隅には貯蔵穴と考えられる掘り込みが確認されている。やや隅丸の長方形で，上端長軸1.2m，短軸1.0m，下端長軸0.7m，短軸0.6m，深さ0.45mである。また，南壁際東寄りの部分には径0.25m，深さ0.1mの柱穴様掘り込みが確認されているが，これ以外には確認されておらず，性格不明である。

遺構平面図・土層断面図からわかるように，遺構内西寄りの広い範囲には覆土中層に厚さ0.1m～0.2mほどの焼土散布層が確認されている。一方炭化材と土器の大半は中央床面直上で検出されている。炭化材の量の少なさおよび床面に被熱痕跡のないことの二点から判断すると，焼失住居でなく，住居廃棄後の焼却痕跡と考えるのが最も妥当であろうと思われる。ただし，その場合，床面直上で検出されている多くの完形に近い遺物の解釈が問題になる。床面出土の完形に近い遺物の多くはミニチュア土器ではないかと考えられるものであり，当該時期の普遍的な供膳具である高杯は実測可能個体わずかに1個のみである。

186

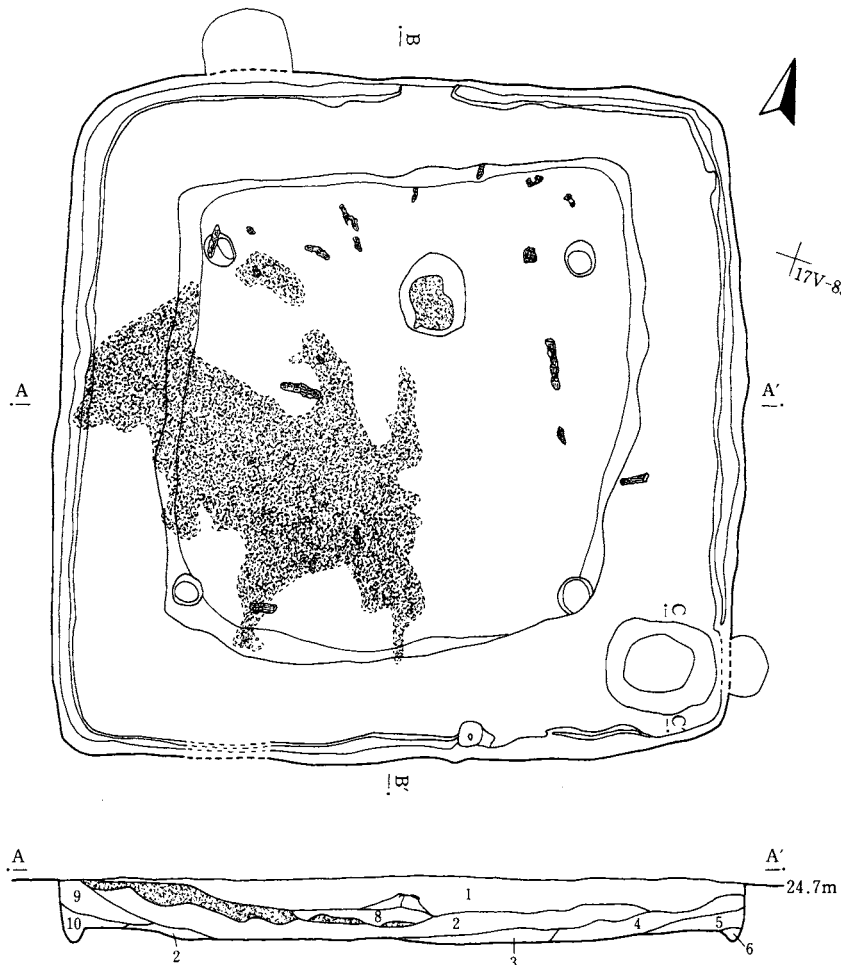
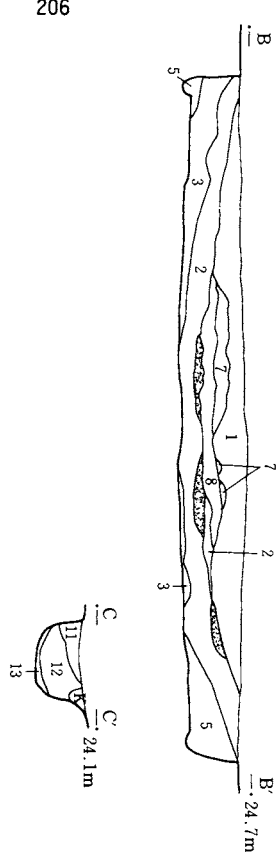


112W-77

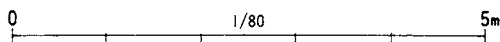
<206竪穴住居土層説明>

- 1 黒褐色土：ローム粒・焼土粒を多く含む
- 2 黒色土：ローム粒を少量、焼土粒を多量に含む
- 3 暗褐色土：ローム粒を多量に、焼土粒を少量含む
- 4 暗褐色土：ローム粒を多量に、焼土粒を少量含む
- 5 暗褐色土：ローム粒を多量に、焼土粒・炭化物粒を少量含む
- 6 暗褐色土：ローム粒を多量に含む
- 7 黒褐色土：焼土粒を多量に含む
- 8 黒褐色土：焼土粒・炭化物粒を微量に含む
- 9 黒褐色土：ローム粒を微量に含む
- 10 黒褐色土：ローム粒を含む
- 11 黒色土：ローム粒を微量に含む
- 12 黒褐色土：ローム塊を少量含む
- 13 暗褐色土：ローム粒を微量に含む

206

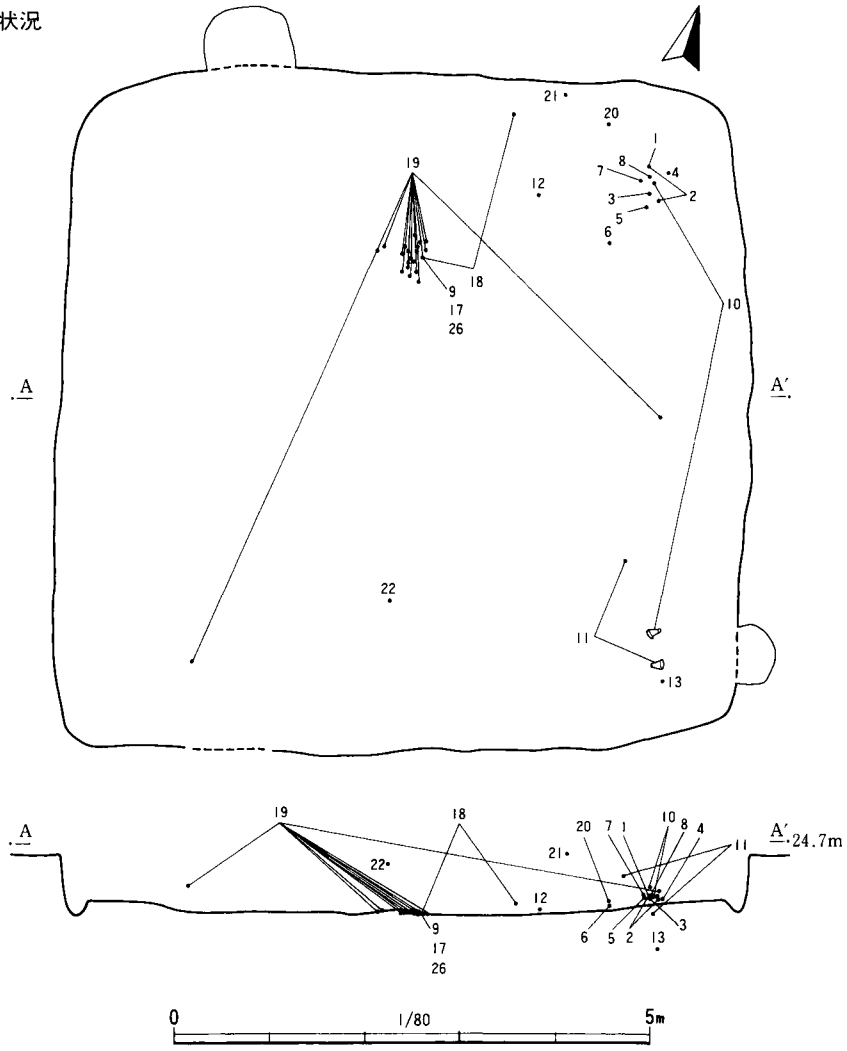


117V-85

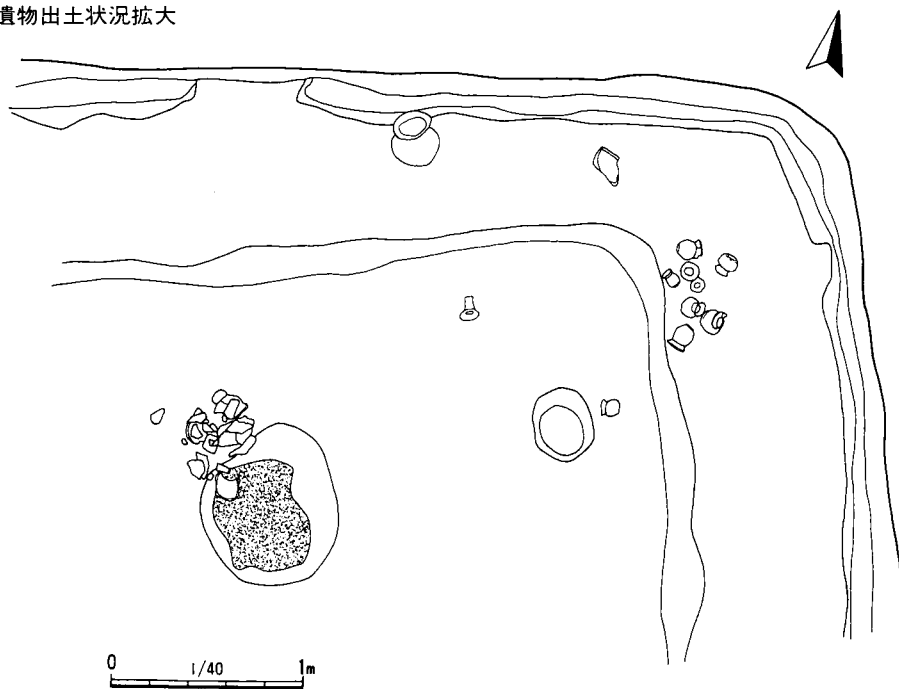


第3図 186・206竪穴住居

206遺物出土状況



206北東隅遺物出土状況拡大



第4図 206竪穴住居遺物出土状況図

2 奈良・平安時代の竪穴住居

171竪穴住居（第5図，図版3）

東側道路予定部分中ほどの15X-14・15グリッドに所在する。重複する遺構はない。平面形はほぼ正方形で、カマドは西壁に付設されている。遺構主軸方位はS-81° -Wである。遺構規模は南北、東西ともに3.2m～3.4mで、確認面から床面までの掘り込みの深さは0.2m前後である。カマドに相対する東壁際床面には0.6m～0.9mほどの焼土粒の散布範囲が見られる。壁溝はまったく巡らされておらず、4本の支柱穴はすべて壁際に設けられている。ただし、これらの支柱穴はみな床面の精査段階では検出されておらず掘り込み検出のための床面除去作業を行った際に検出されたものである。柱穴径は最小0.3m，最大0.7m，掘り込みの深さは0.22m～0.26mである。床面には硬化範囲は見られなかった。

カマドの遺存状況は不良である。西壁ほぼ中央に設けられており、焼土の散布は見られるが、カマド袖や火床面の明確な遺存部位は検出されなかった。遺物実測図中の羽口はカマド内において支脚として転用されていたものである。

遺物はカマドに近い北西部の床面直上で検出されたものが大半である。覆土中位以上の部分から検出された破片のみで構成されているのは8・9の甕のみである。

172竪穴住居（第5図，図版3）

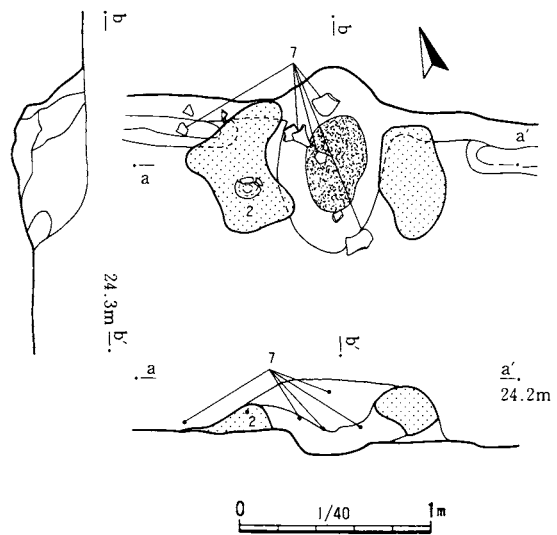
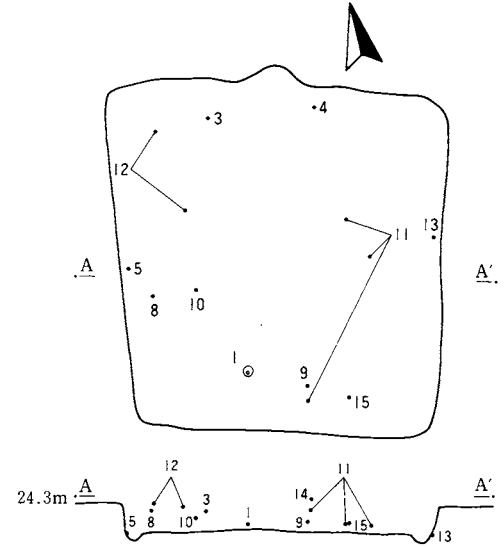
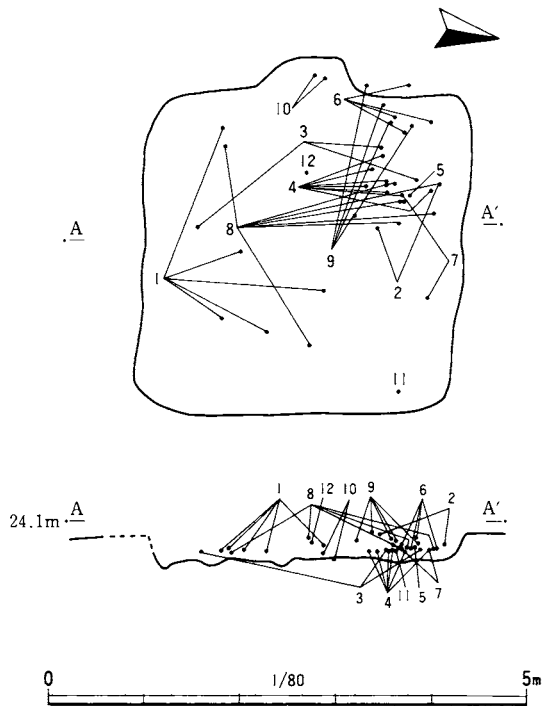
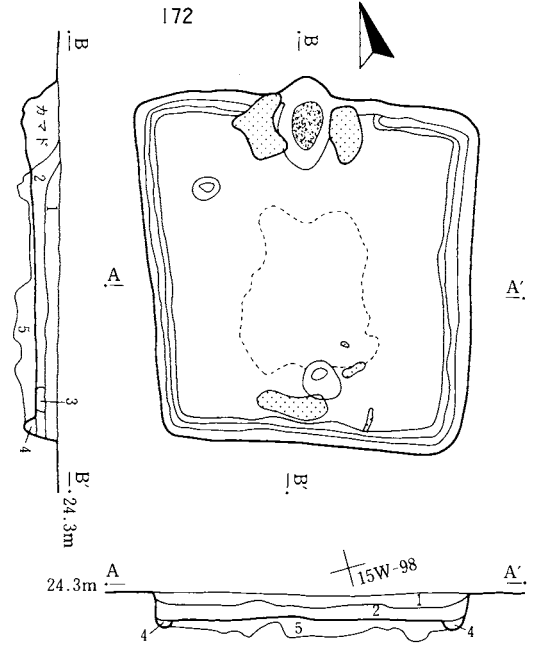
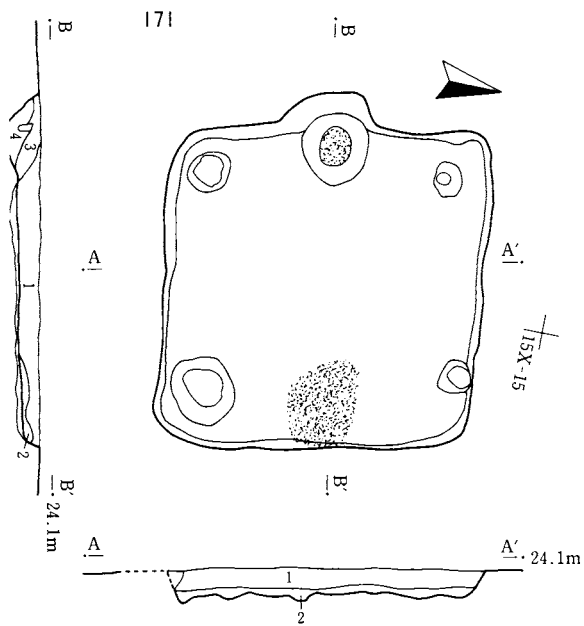
東側道路予定部分やや南寄りの15W-77・78・87・88グリッドに所在する。重複する遺構はない。平面形は不整形で、カマドは北壁に付設されている。遺構主軸方位はN-18° -Eである。遺構規模は南北3.6m，東西3.1m～3.6mで、確認面から床面までの掘り込みの深さは0.2m～0.3mである。カマド東側のごく一部を除き壁溝はほぼ全周している。床面中央部分には硬化部分が確認されている。また、カマドと相対する南壁側の床面には山砂の散布が見られる。支柱穴と考えられるのは床面北西部に掘り込まれているものだけである。径0.25m，深さ0.3mである。南壁際床面の径0.4m，深さ0.24mの柱穴様掘り込みは出入口施設に伴うものと考えられる。

カマドは天井材は遺存せず両袖部・火床面が遺存している。

遺物はほぼ全体にまばらに散った状態で検出されている。多くは床面直上であるが、12・14は覆土上層での検出である。

174竪穴住居（第6図，図版4）

東側道路予定部分やや南寄りの15W-98，16W-08グリッドに所在する。重複する遺構はないが、西壁中央付近が攪乱によって破壊されている。平面形はほぼ正方形で、遺構主軸方位はN-6° -Eである。カマドはまず東壁中央部に設けられ、次に北壁中央に設けられた。はじめに東壁中央に設けられたカマドは居住時に完全に壊されており、壁面への煙道側掘り込みが残っただけである。住居規模は南北4.1m～4.2m，東西3.75m～3.9m，確認面から床面までの深さは0.5m～0.6mである。支柱穴は4本検出されている。西列の2本は基本的な位置で検出されているが、東列の2本は床面精査段階では検出されず、貼床除去後に壁溝付近部分で検出された。また、西壁際やや北寄りの部分で検出された出入口施設の痕跡と考えられる柱穴様掘り込みも、やはり貼床除去後に検出されている。支柱穴の径は0.3m～0.45mである。深さは東列の2本が0.65m程度，西列の2本が0.4m程度で、明瞭に差異が見られる。西壁際の出入口施設痕跡と考



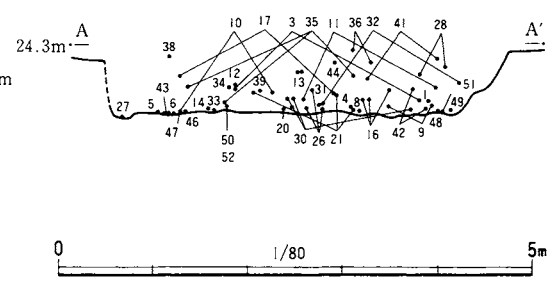
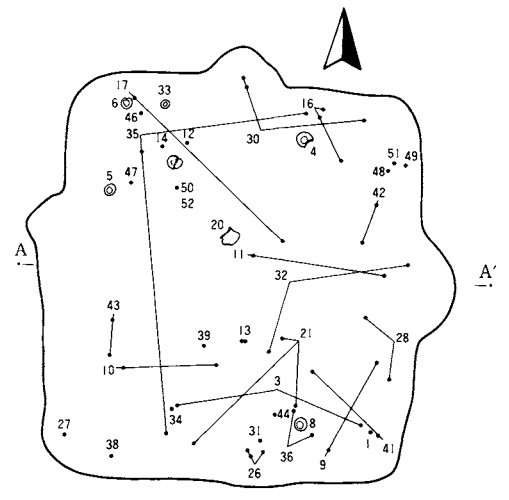
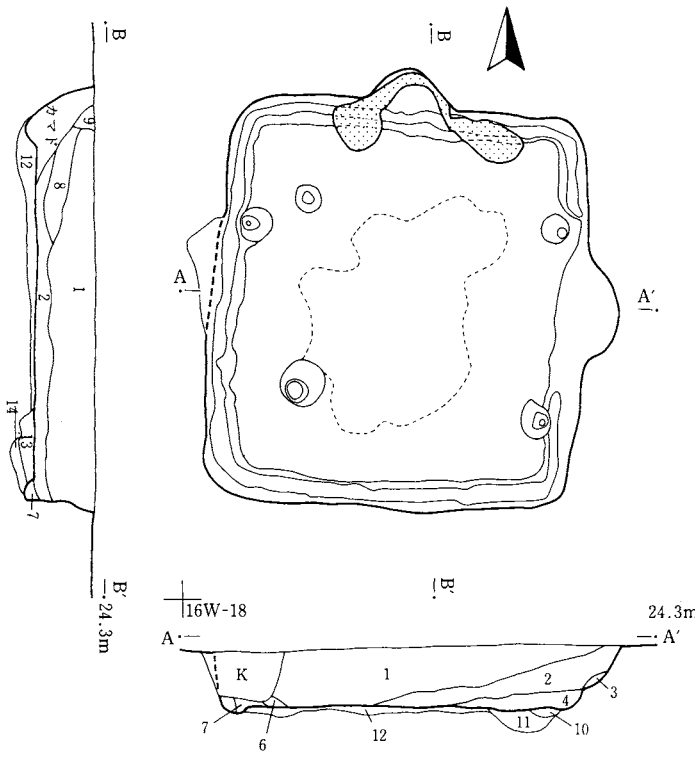
<171竪穴住居土層説明>

- 1 黒褐色土：ローム粒を微量に含む
- 2 赤褐色土：焼土粒を多量に含む
- 3 灰白色土：山砂を多量，焼土粒を少量含む
- 4 赤褐色土：焼土粒・焼土塊を多量に含む
- 5 暗褐色土：ローム塊を少量含む(貼床層)

<172竪穴住居土層説明>

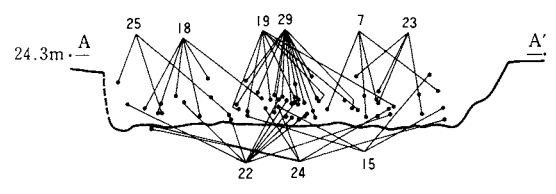
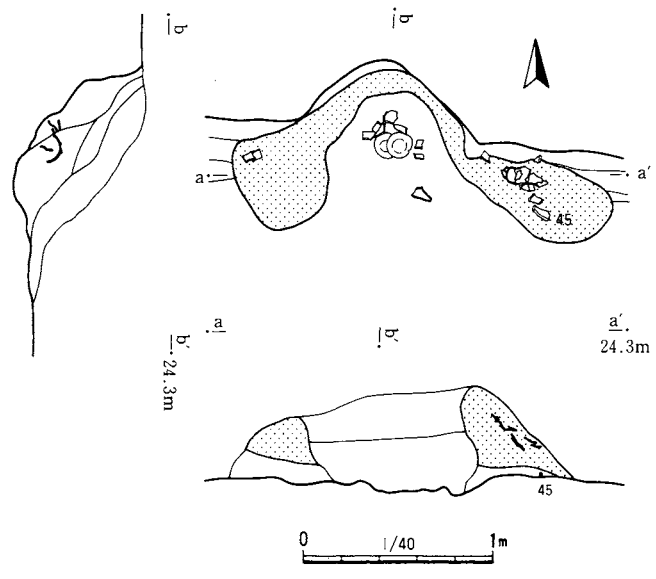
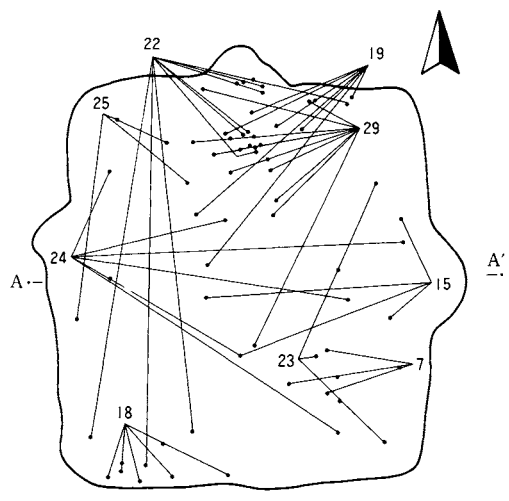
- 1 黒褐色土：ローム粒・ローム塊・焼土粒を少量含む
- 2 黒褐色土：ローム粒・ローム塊を少量含む
- 3 灰褐色砂質土
- 4 暗褐色土：ローム粒を多量，ローム塊を少量含む
- 5 暗褐色土：ローム塊を多量に含む(貼床層)

第5図 171・172竪穴住居



<174竪穴住居土層説明>

- 1 黒褐色土：ローム粒を多量，焼土粒を少量含む
- 2 明褐色土：焼土粒を多量，ローム粒・山砂を少量含む
- 3 褐色土：焼土粒を多量に含む
- 4 暗褐色土：焼土粒を微量に含む
- 5 黄褐色土：ローム主体
- 6 暗褐色土：混和物なし
- 7 黒褐色土：ローム塊をわずかに含む
- 8 暗褐色土：山砂を多量，焼土粒を微量に含む
- 9 黒色土：混和物なし
- 10 灰白色砂：焼土粒を少量含む(貼床層)
- 11 黒褐色土：焼土粒・ローム塊を少量含む(貼床層)
- 12 暗褐色土：ローム塊を多量に含む(貼床層)
- 13 暗褐色土：焼土粒・山砂を少量含む(貼床層)
- 14 暗褐色土：ローム塊・焼土粒を少量含む(貼床層)



第6図 174竪穴住居

えられる柱穴はさらに浅く0.22mである。壁溝は東側カマド部分を除いてほぼ全周している。床面中央には広く硬化範囲が見られる。

カマドは先述のように北壁中央部に設けられたもののみが遺存していた。カマドの遺存状況はやや不良で、両袖構築材の山砂が確認できた程度であるが、カマド内からは比較的多くの遺物が検出されている。

遺物の出度量は住居規模から考えた場合、極めて多い部類に入る。遺物はほぼ全面から検出されているが、西壁際中央にやや小さな希薄域が見える。出土層位が床面直上から覆土上端まで幅広く散らばっていることを考えあわせると、検出遺物ほとんどは投棄行為を行われたものと考えられる。

179竪穴住居（第7図，図版4）

東側道路予定部分やや南寄りの16W-66・67グリッドに所在する。「調査報告第358集」において報告した178竪穴住居により北東隅覆土上半を切られている。平面形は長方形で、カマドは北壁ほぼ中央に設けられており、遺構主軸方位はN-7°-Wである。また、平面図南西隅の柱穴を囲むように描かれた線は、本竪穴住居と重複する土坑である。但し、本遺構との前後関係は調査段階において把握できなかった。本竪穴住居の規模は南北3.5m～3.6m，東西4.0m～4.1m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.35m～0.4mである。壁溝はカマド部分を除き全周している。柱穴は床面精査段階においては南壁際中央の出入口施設痕跡と考えられるもののみで、貼床除去後において四隅に2本乃至4本集中した状況で支柱穴が検出された。支柱穴は径0.25m～0.4mで、最終床面からの深さは0.34m～0.45mである。南壁際中央の出入口施設痕と考えられる柱穴は径0.4m，深さ0.2mである。床面中央には南北に細長く硬化面が広がっている。

カマドは両袖の山砂が短くブロック状に残っていた。火床面中央と考えられる部分には土製支脚が正立の状態で見出されたが、脆弱で取上げることができなかった。

遺物は遺構内ほぼ全面から満遍なく検出されており、検出層位も床面直上から覆土上端までほぼ均等に散っている。このことから、検出遺物のほとんどは投棄行為を行われたものと考えられる。

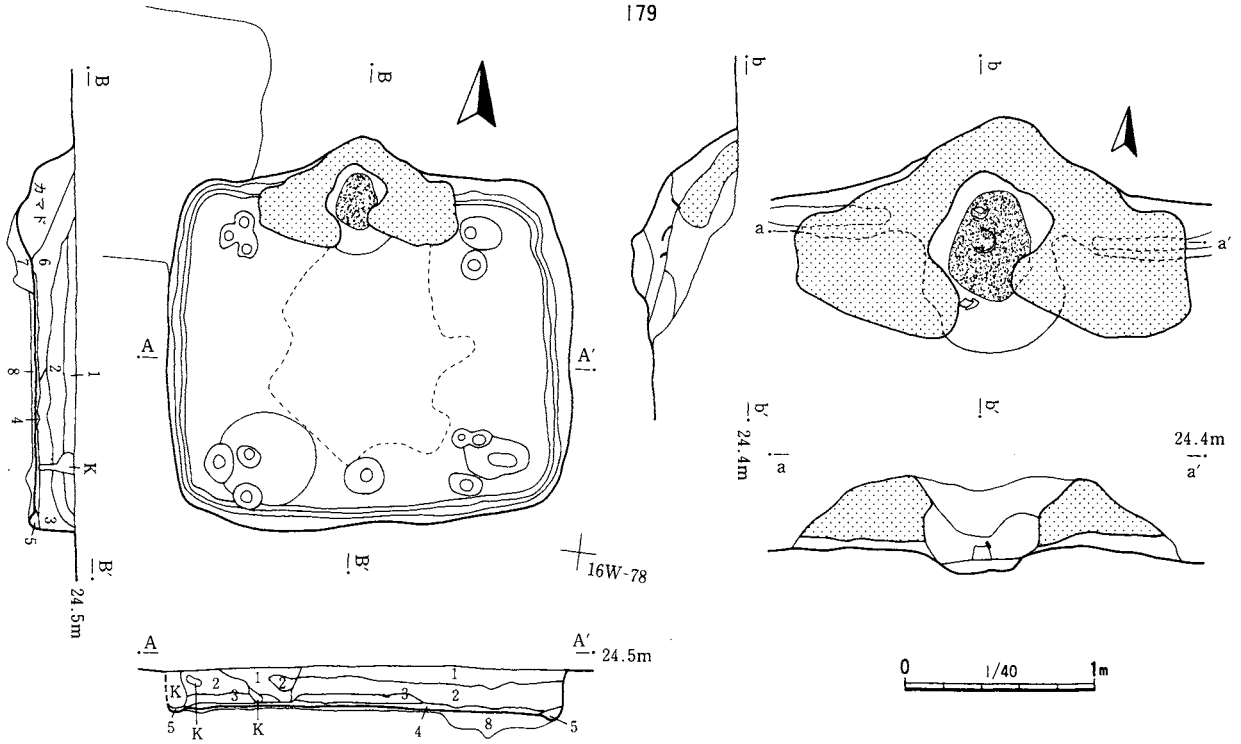
182竪穴住居（第8図，図版5）

東側道路予定部分中ほどの14Y-60・70グリッドに所在する。本遺構は183竪穴住居の南側1/3ほどを破壊している。平面形はほぼ正方形である。遺構主軸方位はN-0°-Wで、ほぼ真北を向いている。カマドは北壁やや西寄りの所に設けられている。壁溝はカマド部分を除いてほぼ全周しており、床面中央には南北方向に細長く硬化面が広がっている。床面精査段階のみでなく、貼床除去後においても支柱穴等の柱穴は検出されなかった。遺構規模は南北2.9m～3.0m，東西2.9m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.4m～0.5mである。

カマドの遺存状況は比較的良好である。カマド本体の大部分を壁外に突き出す形態で、火床部分がほぼ壁溝線状に位置する。

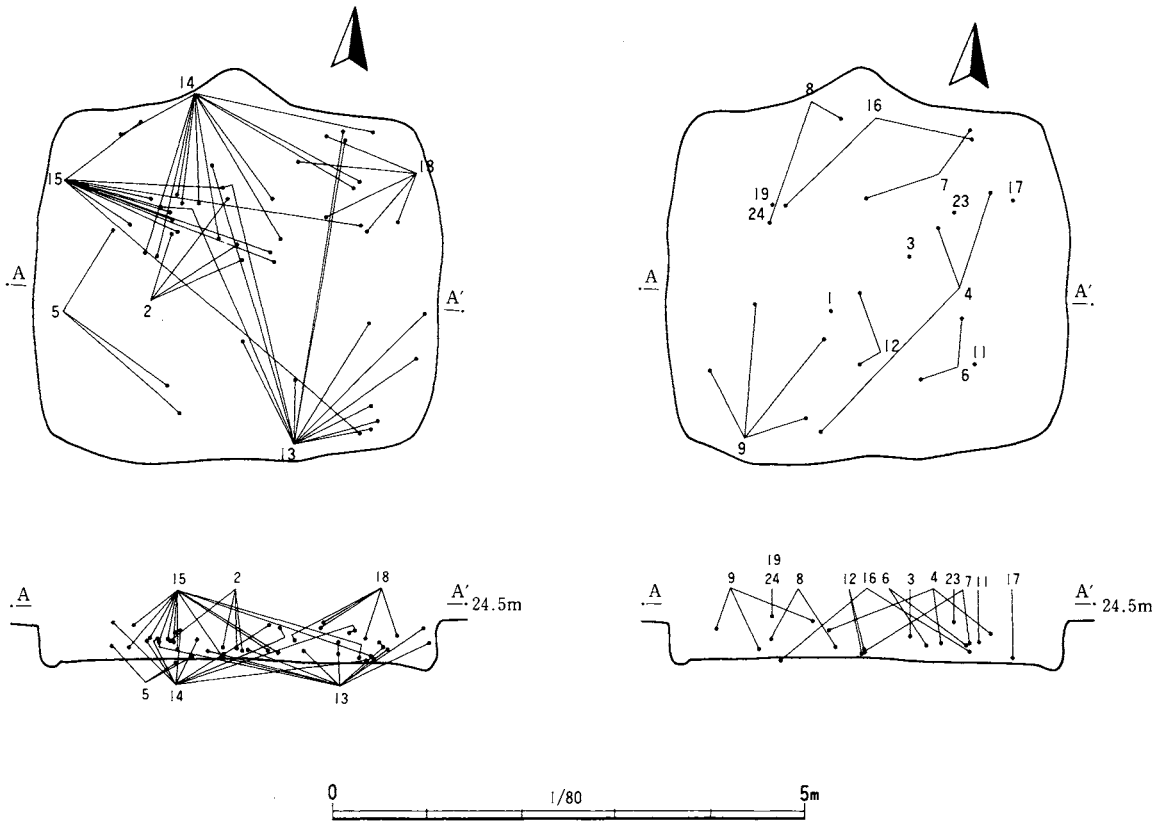
遺物は遺構北半に集中して検出されている。出土層位は床面直上から覆土上端までほぼ満遍なく散っており、やはり投棄行為の結果と考えられる。

179

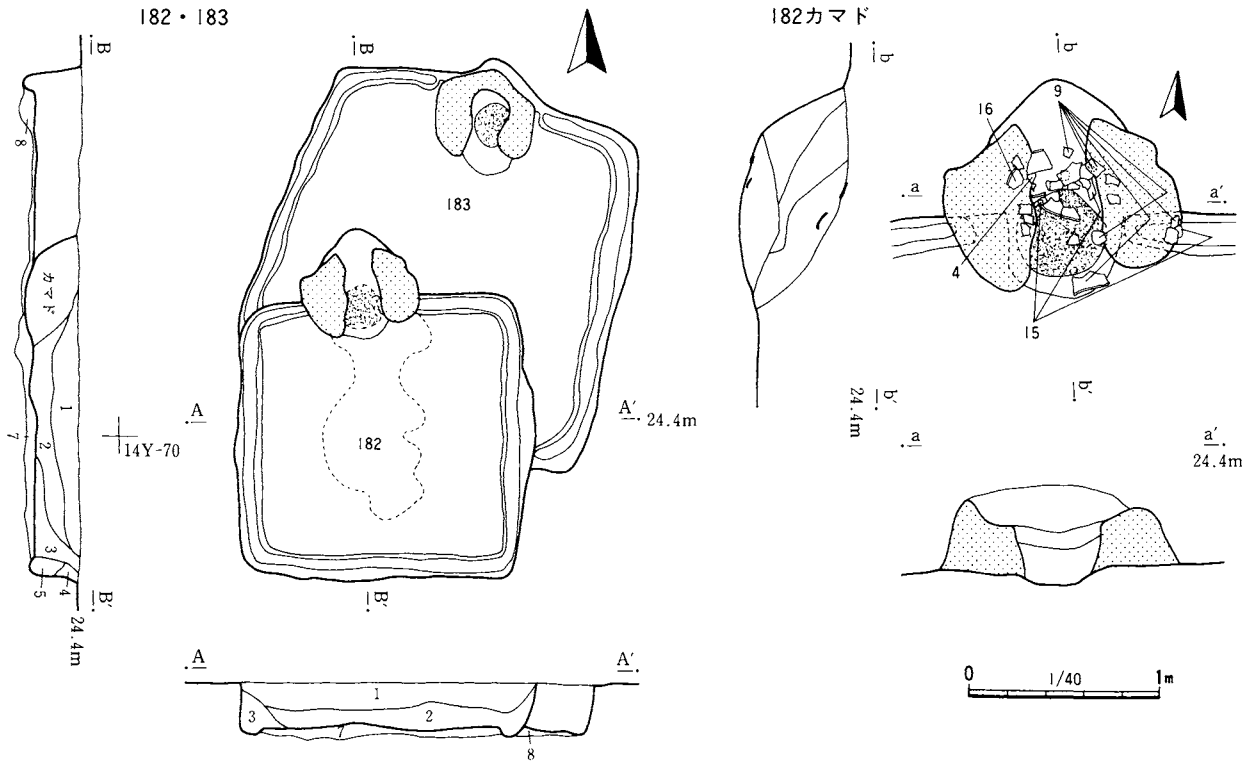


<179竪穴住居土層説明>

- 1 黒褐色土：焼土粒を少量含む
- 2 暗褐色土：ローム粒・焼土粒を含む
- 3 暗褐色土：ローム粒・焼土粒・山砂を含む
- 4 暗褐色土：緻密。ローム塊・ローム粒をやや多く含む
- 5 暗褐色土：ローム塊多く含む
- 6 暗褐色土：山砂を多量、焼土粒を少量含む
- 7 黒褐色土：焼土粒・ローム塊を多量に含む(貼床層)
- 8 暗褐色土：ローム塊を多く含む(貼床層)

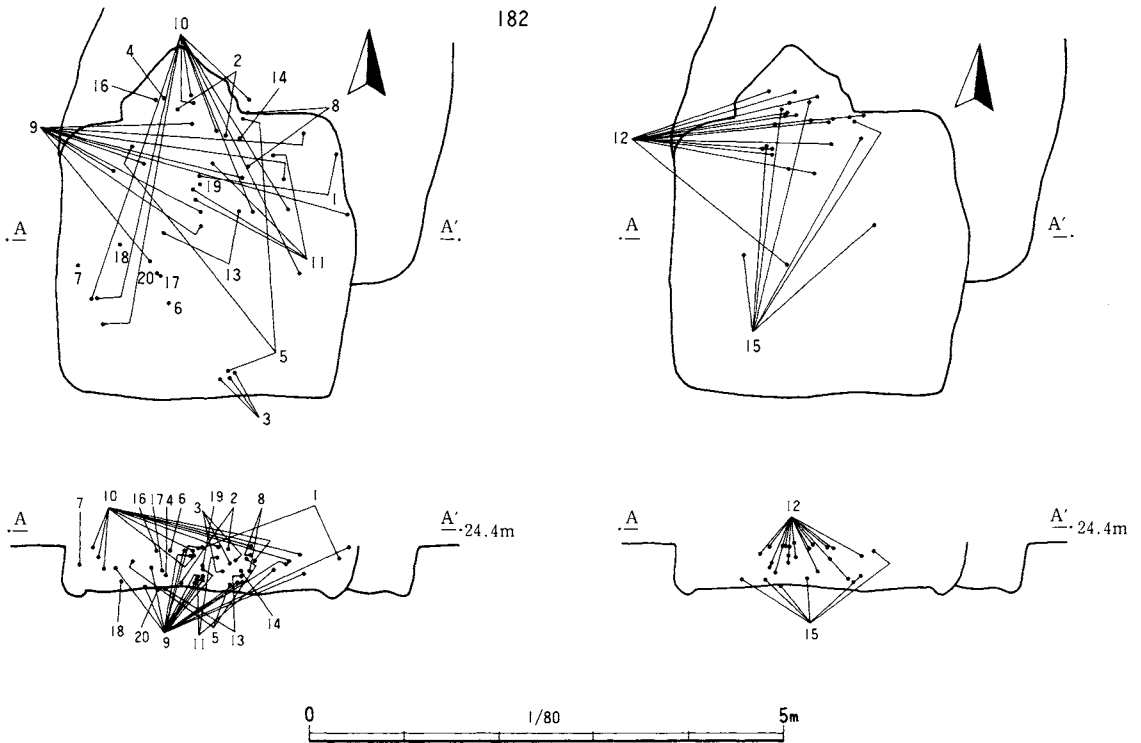


第7図 179竪穴住居



<182・183竪穴住居土層説明>

- 1 黒褐色土：ローム塊・焼土粒を少量含む
- 2 黒褐色土：ローム粒を少量含む
- 3 黒色土：ローム粒・ローム塊を微量に含む
- 4 暗褐色土：ローム粒を微量に含む
- 5 黄褐色土：ローム主体
- 6 暗褐色土：山砂を少量含む
- 7 暗褐色土：ローム塊を多量に含む(182貼床層)
- 8 暗褐色土：ローム塊を多量に含む(183貼床層)



第8図 182・183竪穴住居

183竪穴住居（第8・9図，図版5）

東側道路予定部分中ほどの14Y-60・61グリッドに所在する。本遺構は182竪穴住居によって南側1/3ほどを破壊されている。平面形はやや台形気味である。カマドは北壁ほぼ中央に付設されており，遺構主軸方位はN-16°-Eである。壁溝はカマド部分を除き全周しているものと考えられる。床面の硬化範囲は検出されなかった。支柱穴等の柱穴は床面精査段階だけでなく，貼床除去後においても検出されなかった。遺構規模は南北3.7m，東西3.2m～3.8m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.45mである。

カマドは両袖構築材と焼土が厚く堆積した火床面とが遺存していた。

遺物はカマド周辺で集中して検出された。

184竪穴住居（第9図，図版5）

東側道路予定部分南端の17W-36・37グリッドに所在する。重複する遺構は存在しないが，180・185竪穴住居が近接している。平面形は長方形である。カマドは北壁中央やや西寄りのところに付設されており，遺構主軸方位はN-2°-Wで，ほぼ真北を向いている。壁溝はまったく巡らされておらず，支柱穴等の柱穴は床面精査段階のみでなく，貼床除去後においても一切検出されなかった。床面硬化範囲は中央よりもやや西側に寄った部分に広がっており，カマドの付設位置と対応している。遺構規模は南北3.35m～3.6m，東西3.95m～4.05m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.2mである。

カマドの遺存状況は不良で，東側袖構築材と火床面が検出できたのみである。カマド覆土内には支脚が正立の状態で検出されている。

遺物検出量は多くはなく，全体に疎らに散っているが，実測可能個体は遺構北半に散在している。

185竪穴住居（第10図，図版5）

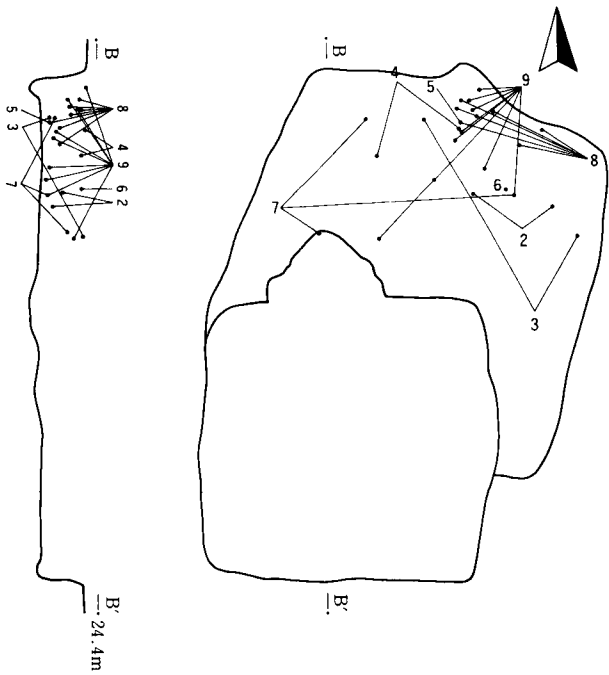
東側道路予定部分南端の17W-47・48・57・58グリッドに所在する。重複する遺構は存在しないが，184・213竪穴住居が近接している。平面形はやや台形気味である。カマドは北壁ほぼ中央に設けられており，遺構主軸方位はN-12°-Wである。壁溝はカマド部分を除き全周していた。床面硬化範囲は4本の支柱穴に囲まれた部分にほぼ対応する。支柱穴は床面精査段階においてはカマド対面の南壁際の2本が検出されたのみで，貼床除去後に北壁際カマド袖材両脇の2地点のものが検出された。南壁側の2本は径0.25m，深さ0.3m～0.4m，カマド両脇のものは径0.25m～0.5m，深さ0.35m～0.55mで，カマド東側のものは掘り込み2本が重複している。遺構規模は南北3.6m～3.9m，東西3.5m～3.9m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.6mである。

カマドは比較的良好な遺存を示し，両袖構築材・火床面の他に天井材崩落層が一部確認できた。

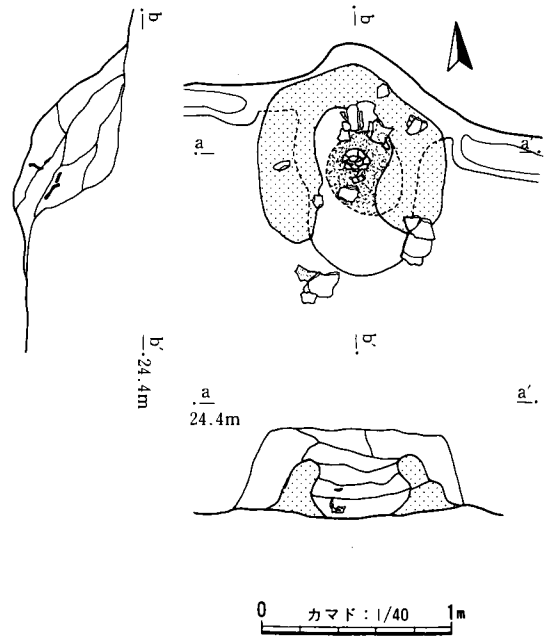
遺物はほぼ全面から満遍なく検出されているが，図化可能な個体は南壁際や北東壁際等にやや集中する傾向を見せる。また，出土層位も床面直上から覆土上端まで広く分散している。

187竪穴住居（第10図，図版6）

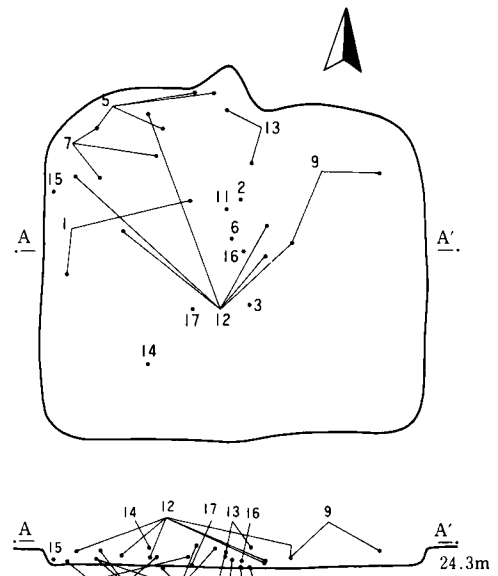
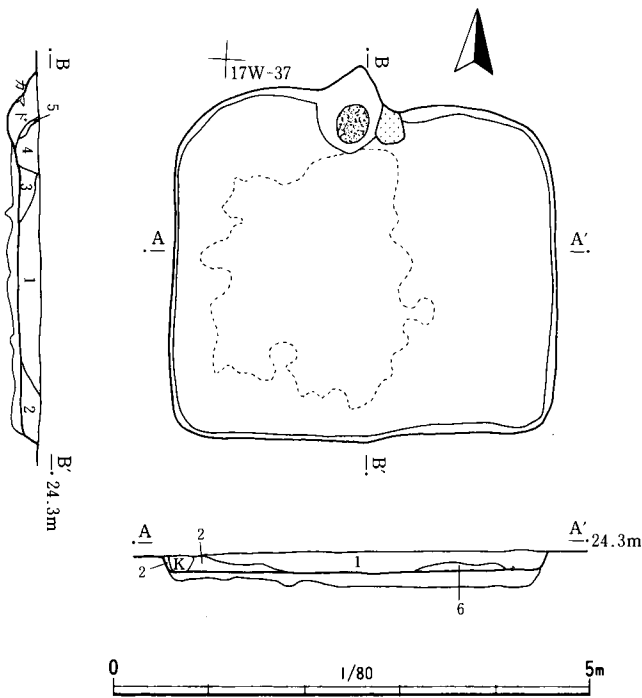
東側道路予定部分北端に近い10Y-34・35・44・45グリッドに所在する。重複する遺構は存在しない。平面形は長方形で，遺構主軸方位はN-11°-Wである。カマドは北壁ほぼ中央に設けられている。遺構の規模は南北2.2m～2.25m，東西2.9m～3.1m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.35mである。壁溝はカ



183

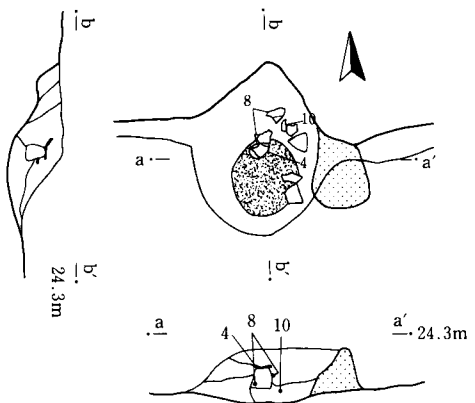


184

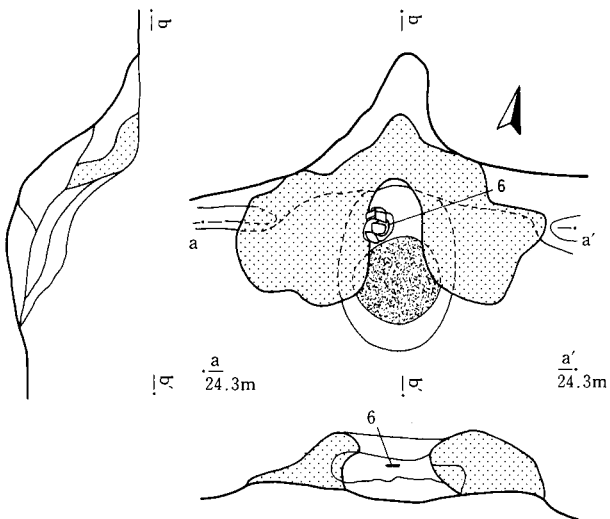
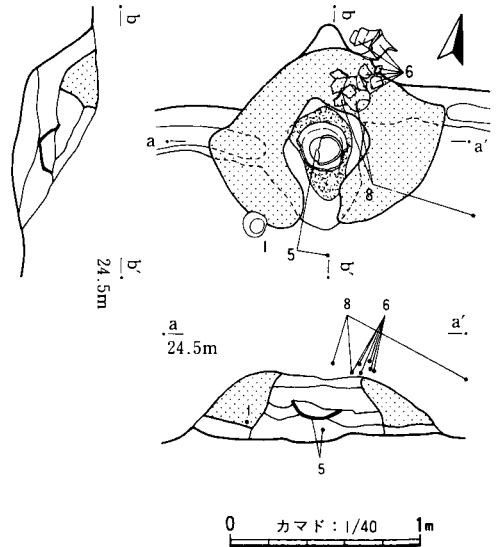
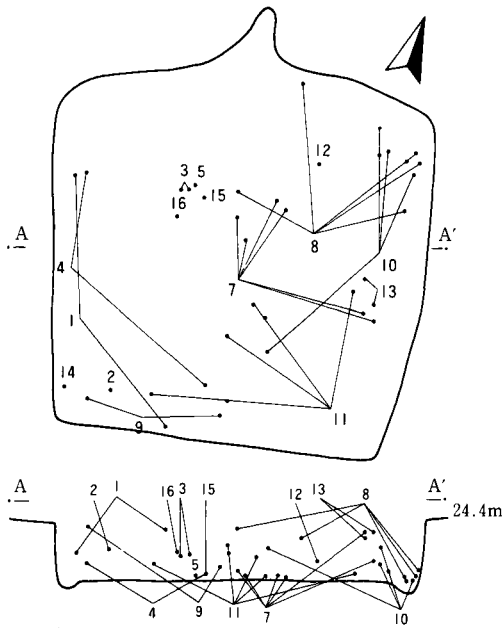
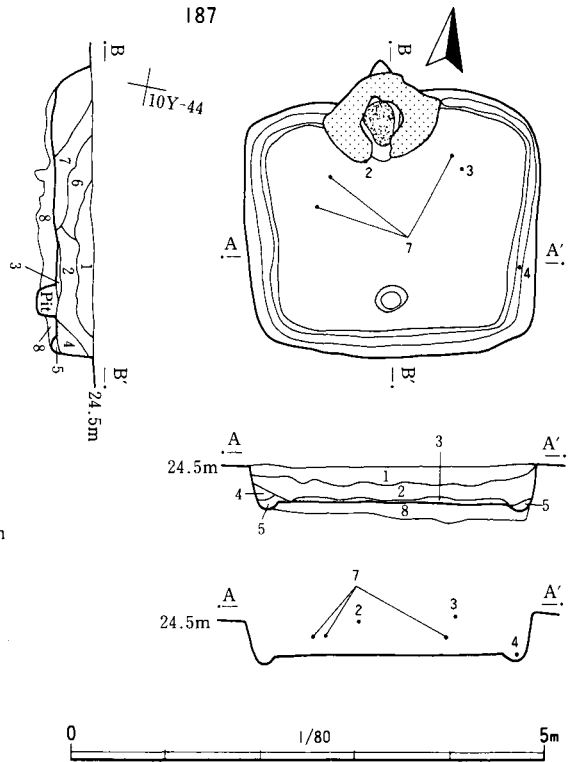
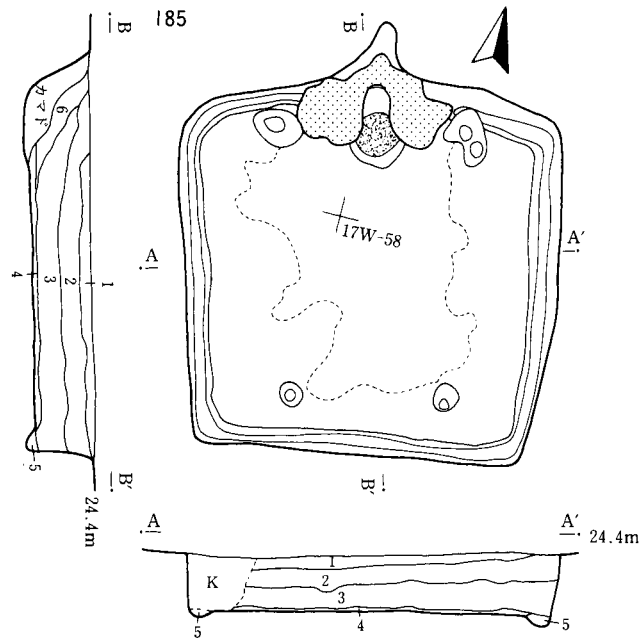


<184竪穴住居土層説明>

- 1 黒褐色土：ローム粒・焼土粒を微量に含む
- 2 暗褐色土：ローム粒を微量に含む
- 3 暗褐色土：ローム粒・焼土粒を少量含む
- 4 黒褐色土：焼土粒を少量含む
- 5 灰白色砂：山砂主体
- 6 暗褐色土：ローム粒を多量に含む



第9図 183遺物出土状況図, 184竪穴住居



<185竪穴住居土層説明>

- 1 暗褐色土：ローム粒・焼土粒を少量含む
- 2 暗褐色土：ローム粒を多量、焼土粒を少量含む
- 3 暗褐色土：褐色土塊・山砂を多量、焼土粒を少量含む
- 4 暗褐色土：緻密、山砂を多量、ローム粒を少量含む
- 5 暗褐色土：ローム粒を多量に含む
- 6 暗褐色土：粘性、山砂を多量に含む
- 7 暗褐色土：ローム塊を多量に含む(貼床層)

<187竪穴住居土層説明>

- 1 黒色土：ローム粒を少量含む
- 2 黒褐色土：ローム粒・褐色土塊を含む
- 3 暗褐色土：緻密、ローム粒・ローム塊を少量含む
- 4 暗褐色土：緻密、ローム粒・ローム塊を含む
- 5 暗褐色土：ローム粒を多量、ローム塊を少量含む
- 6 暗褐色土：粘性、山砂・焼土粒を少量含む
- 7 暗褐色土：粘性、山砂・焼土塊を少量含む
- 8 暗褐色土：ローム塊を多量に含む(貼床層)

第10図 185・187竪穴住居

マド部分を除き全周している。支柱穴は床面精査段階においても貼床除去後においても検出されていない。カマド対面の南壁際中央には、出入り口施設痕跡と考えられる柱穴が検出されている。柱穴は径0.25m～0.35m、深さ0.2mである。床面硬化範囲は確認できなかった。

カマドは比較的良好な遺存状況を示し、両袖構築材・火床面の他に天井材崩落層が一部確認できる。カマド内中央部火床面直上に、5の須恵器甕底部が正立の状態を検出された。

遺物出土量は少なく、4の須恵器蓋破片が壁溝中から検出されている以外は、ほとんど覆土中層から上層においての検出である。

188 竪穴住居（第11図，図版6・7）

東側道路予定部分北端に近い10Y-14・15・24・25グリッドに所在する。重複する遺構は存在しない。平面形はほぼ正方形で、カマドは北壁中央やや東寄りに付設されている。遺構主軸方位はN-6°-Wである。壁溝は巡らされておらず、床面硬化範囲も確認されなかった。支柱穴等の柱穴は床面精査段階においても、貼床除去後においても検出されなかった。遺構の規模は南北3.3m～3.4m、東西3.2m～3.5m、確認面から床面までの掘込みの深さは0.4mである。

カマドは両袖構築材が比較的良好に遺存していた。カマド内ほぼ中央部に土製支脚が正立の状態出土している。

遺物出土量は多く、特に文字資料の量は本書報告遺構中でも最多量級のものである。出土位置、出土層位はほぼ満遍なく全体に散っている。

189 竪穴住居（第11図，図版7）

東側道路予定部分最北端の9Y-02・03・12・13グリッドに所在する。重複する遺構は存在しない。平面形はほぼ正方形で、掘り込みは浅い。カマドは住居北西隅に設けられているいわゆる「隅カマド」である。従って通常の主軸方位を求めることはできず、代わりに西壁走行方位で計測するとN-11°-Eである。遺構の規模は南北2.7m～3.0m、東西3.0m～3.1m、確認面から床面までの掘り込みの深さは0.1m前後である。壁溝はまったく巡らされておらず、床面に柱穴を検出することはできなかった。床面の4か所には焼土堆積地点がある。焼土層の厚さは5cm～10cmで、南壁際中央部の焼土堆積地点中にはやや大型の炭化材が混じっている。床面硬化範囲は検出されなかった。

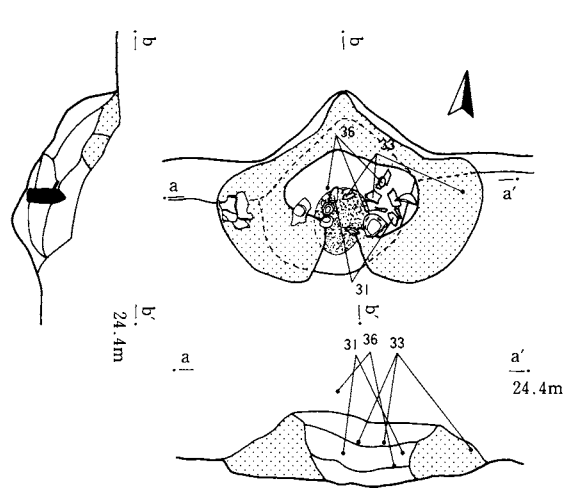
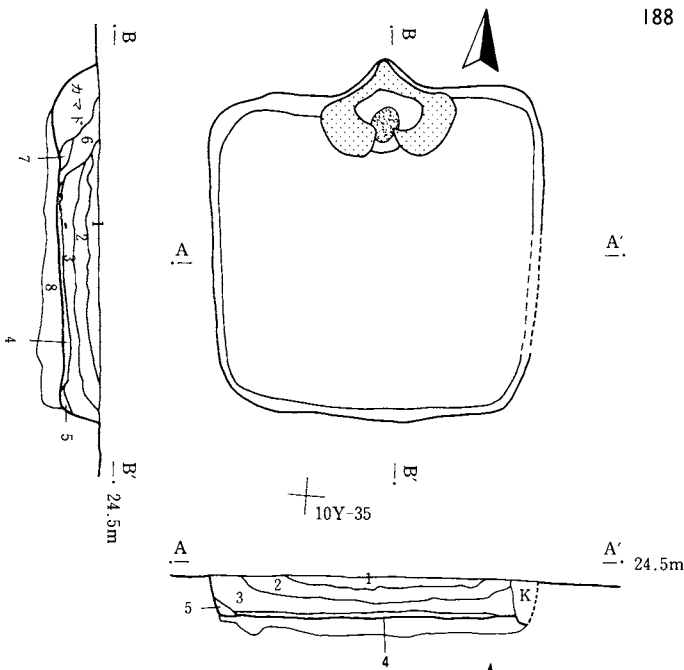
カマドは遺存状況が極めて悪く、両袖構築材がわずかに検出されたのみである。

遺物はまったく検出されていない。

190 竪穴住居（第12図，図版7）

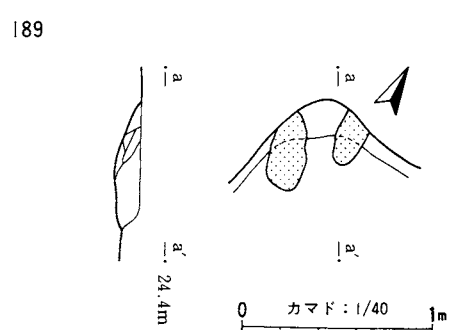
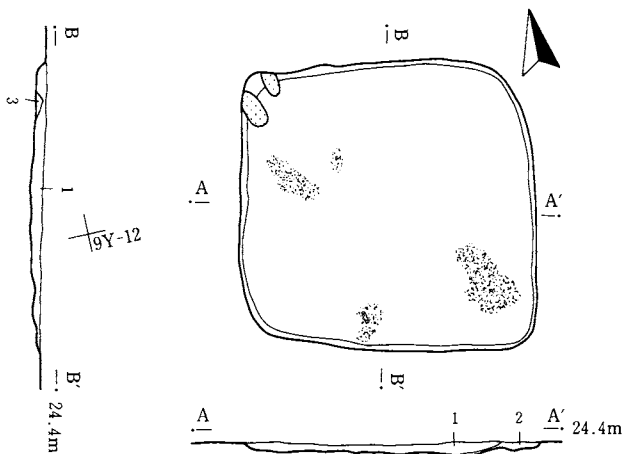
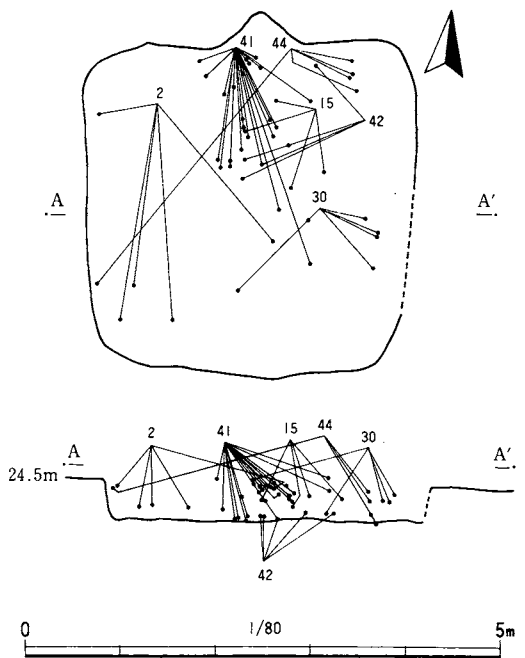
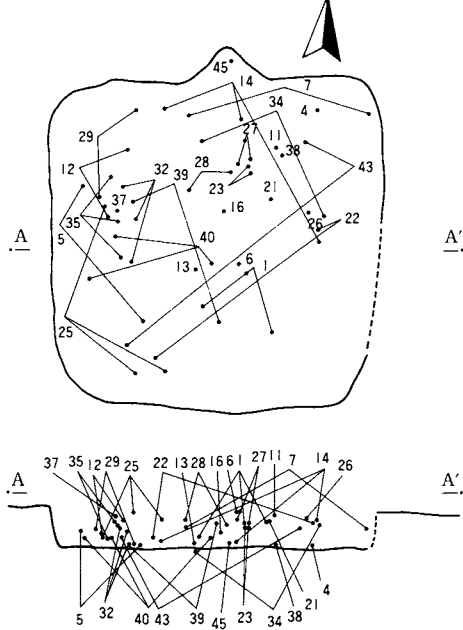
東側道路予定部分北寄りの11X-09・19，11Y-00・10グリッドに所在する。重複する遺構は存在しない。平面形は長方形である。カマドは東壁南隅に近い場所に設けられており、山砂の分布から見ると一見「隅カマド」のようであるが、火床部の位置がカマドの中央であるという常識から考えると「隅カマド」とは呼べない。遺構主軸方位はN-75°-Eである。遺構の規模は南北3.1m、東西4.15～4.5m、確認面から床面までの掘り込みの深さは最深部で0.8mである。壁溝は存在せず、床面硬化範囲も検出されなかった。

カマドは先述のとおり両袖構築材と考えられる山砂の分布範囲と、火床部の位置が微妙にずれており、



<188竪穴住居土層説明>

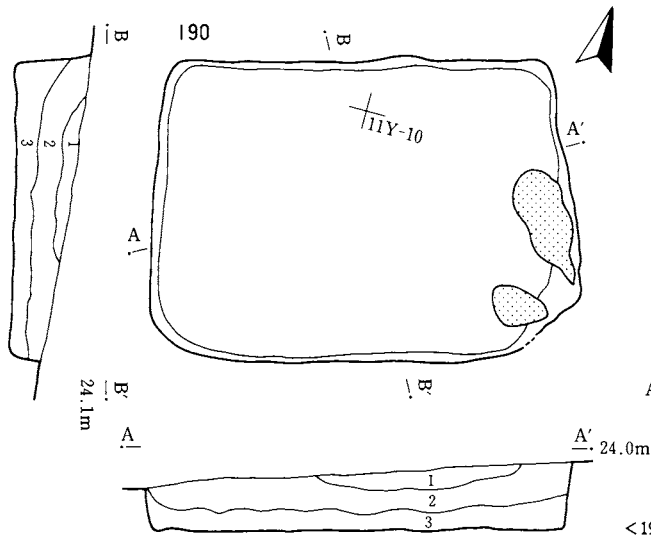
- 1 黒色土：ローム粒を少量含む
- 2 黒褐色土：ローム粒・褐色土塊を含む
- 3 暗褐色土：緻密、ローム粒・ローム塊を少量含む
- 4 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 5 暗褐色土：ローム粒を多量、ローム塊を少量含む
- 6 暗褐色土：粘性、山砂・焼土粒を少量含む
- 7 暗褐色土：粘性、山砂・焼土塊を少量含む
- 8 暗褐色土：ローム塊を多量に含む(貼床層)



<189竪穴住居土層説明>

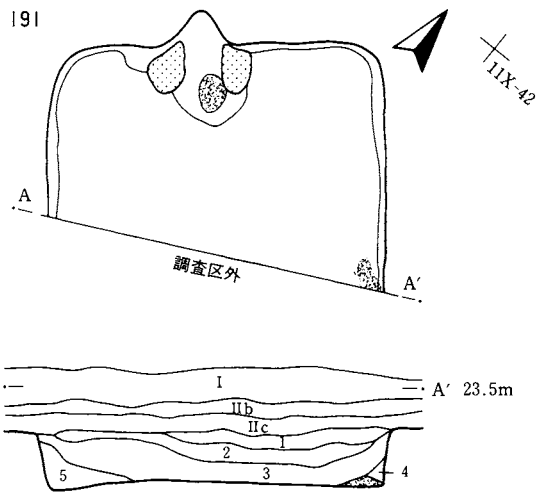
- 1 黒褐色土：焼土粒を微量に含む
- 2 黒褐色土：焼土粒を多量に含む

第11図 188・189竪穴住居



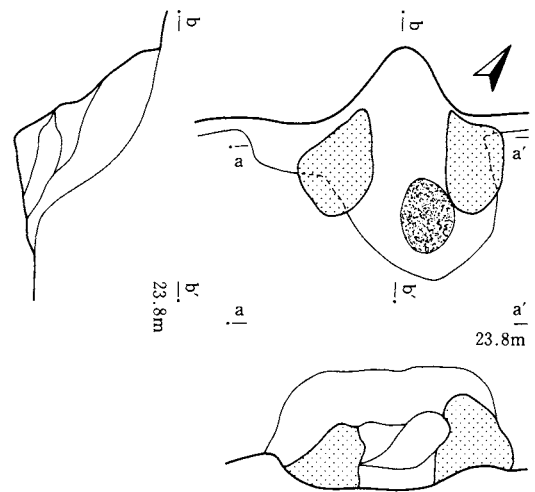
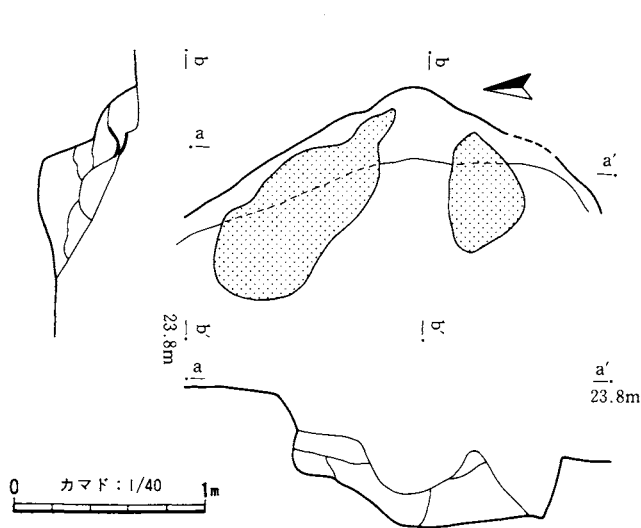
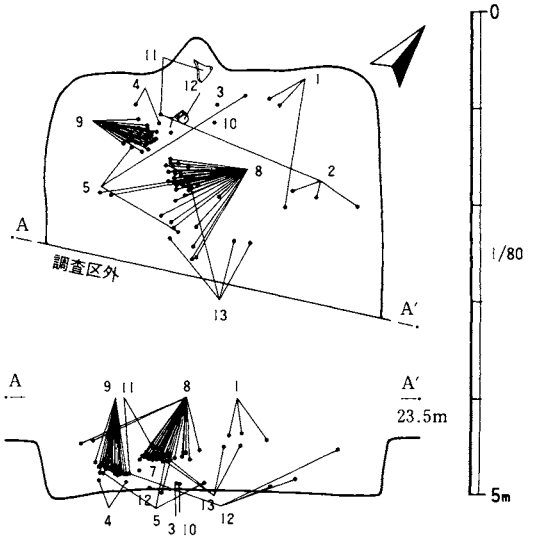
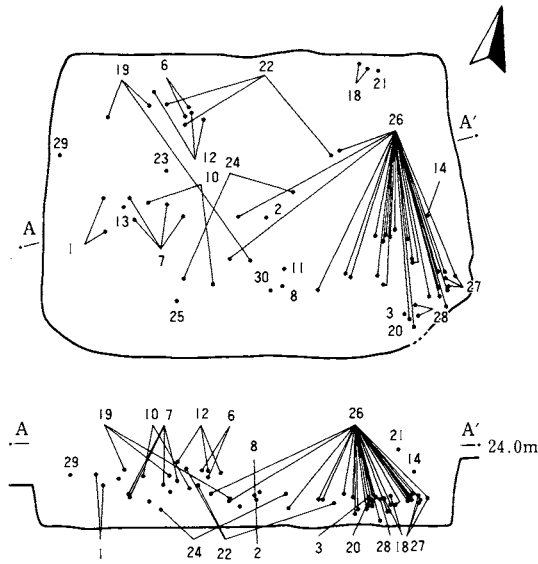
<190竪穴住居土層説明>

- 1 黒色土：ローム粒を微量に含む
- 2 暗褐色土：ローム粒を多量，ローム塊を少量，焼土粒を微量に含む
- 3 暗褐色土：ローム粒を多量，ローム塊を少量含む



<191竪穴住居土層説明>

- 1 暗褐色土：ローム粒を含む
- I 表土層
- IIb 新規テフラ層
- IIc 表土腐植土層
- 2 暗褐色土：ローム粒を多量に含む
- 3 暗褐色土：ローム粒を多量に含む
- 4 褐色土：ローム粒・ローム塊主体
- 5 明褐色土：ローム粒・ローム塊主体



第12図 190・191竪穴住居

遺存状況は良好とは言えない。

遺物は遺構覆土上層に集中しており、床面直上出土の遺物はほとんど無い。また、平面分布で見ると南壁際に空白域がある。

191竪穴住居（第12図，図版8）

東側道路予定部分北寄りの11X-41・42グリッドに所在する。192陥穴が北側に近接して検出された。遺構の南東側半分は調査区域外にかかっており調査することはできなかった。カマドは北西壁やや西寄りのところに設けられている。住居主軸方位はN-37°-Wである。遺構規模は北西壁側で3.4m，直角方向は不明，確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深い部分で0.6mである。調査できた範囲内では壁溝や支柱穴は検出されなかった。床面の硬化範囲も確認されなかった。調査範囲南東端床面において焼土堆積部分が検出された。

カマドは両袖構築材と、火床面が検出されている。

遺物はカマド前面に集中が見られる。床面直上出土の遺物と覆土中・上層出土の遺物に極端に分かれ、中・上層出土遺物のうち8・9の土師器甕は細片の状態で検出されている。

193竪穴住居（第13図，図版8）

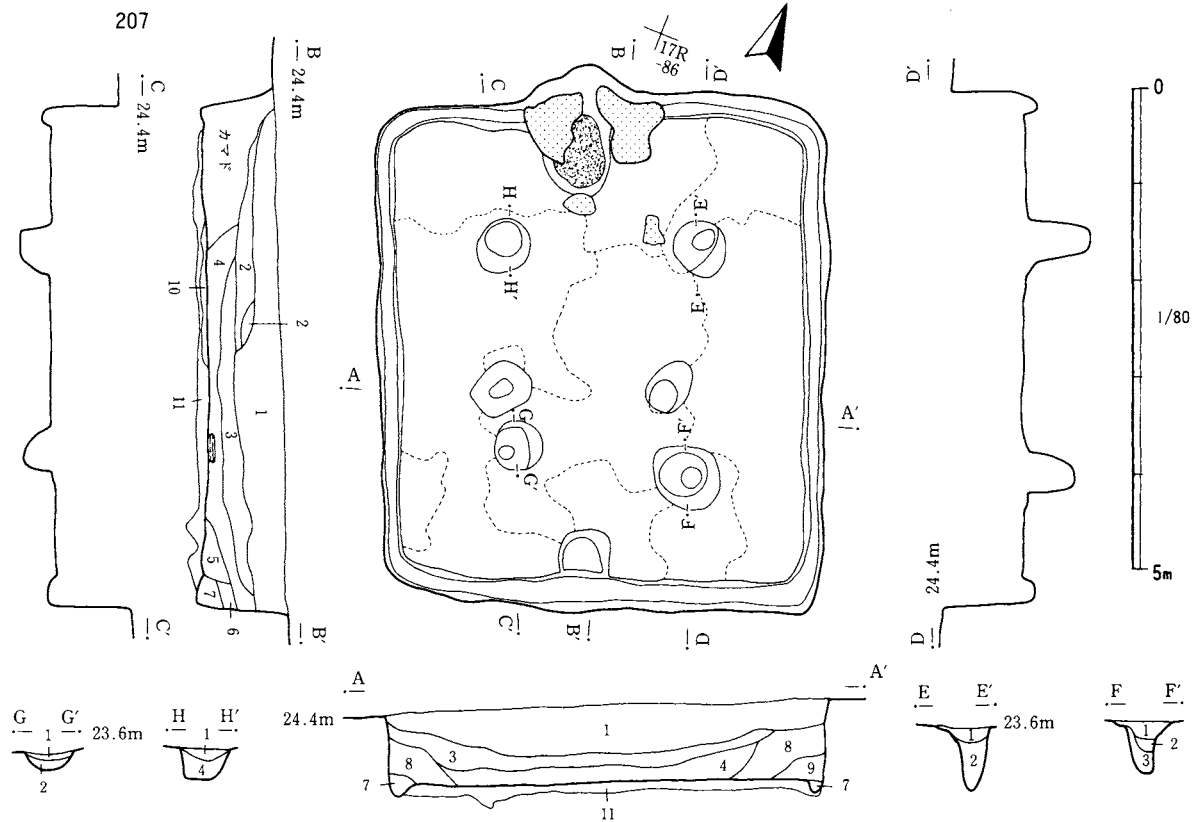
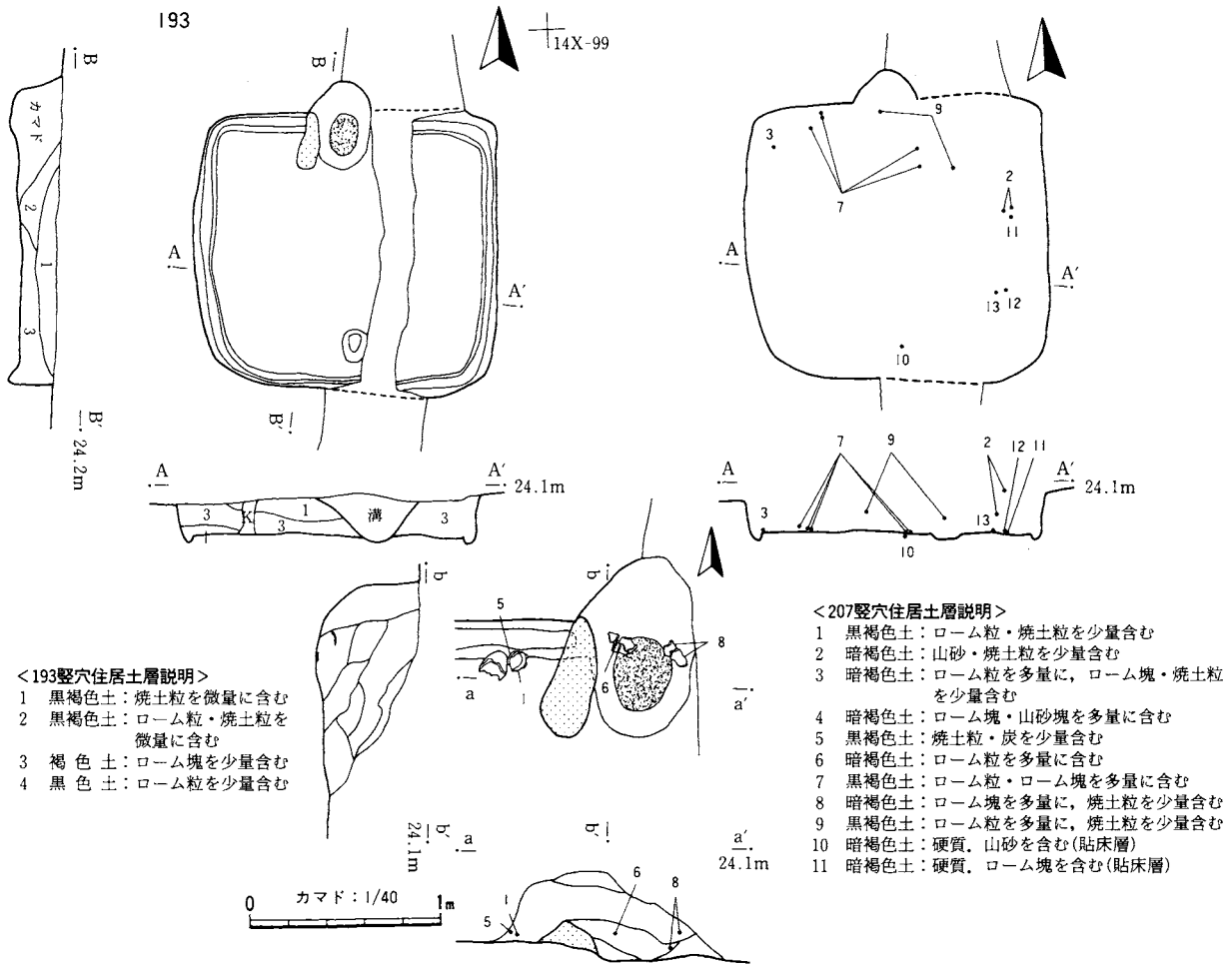
東側道路予定部分中ほどの14X-98グリッドに所在する。遺構中央やや東寄りの部分が001溝によって南北に破壊されている。平面形はほぼ正方形で北壁のほぼ中央にカマドが設けられている。住居主軸方位はN-1°-Eである。遺構規模は南北2.9m，東西3.1mで，確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深い部分で0.45mである。壁溝はカマド部分を除き全周し，床面には支柱穴は検出されなかった。南壁際中央のところに出入口施設痕跡と考えられる柱穴が検出されている。径0.3m，深さ0.15mである。床面の硬化範囲は確認されなかった。

カマドは東側の袖を001溝によって破壊されており，西側袖構築材と火床面が検出されたのみである。

遺物は北壁カマド西袖の西側と東壁際に集中が見られる。覆土中位以上出土の個体も若干見られるが，多くは床面直上で検出されている。

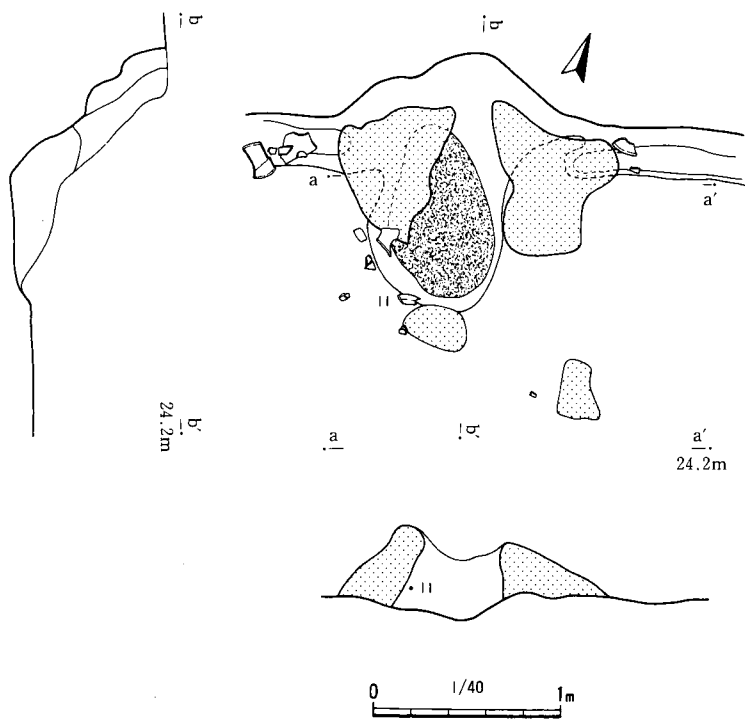
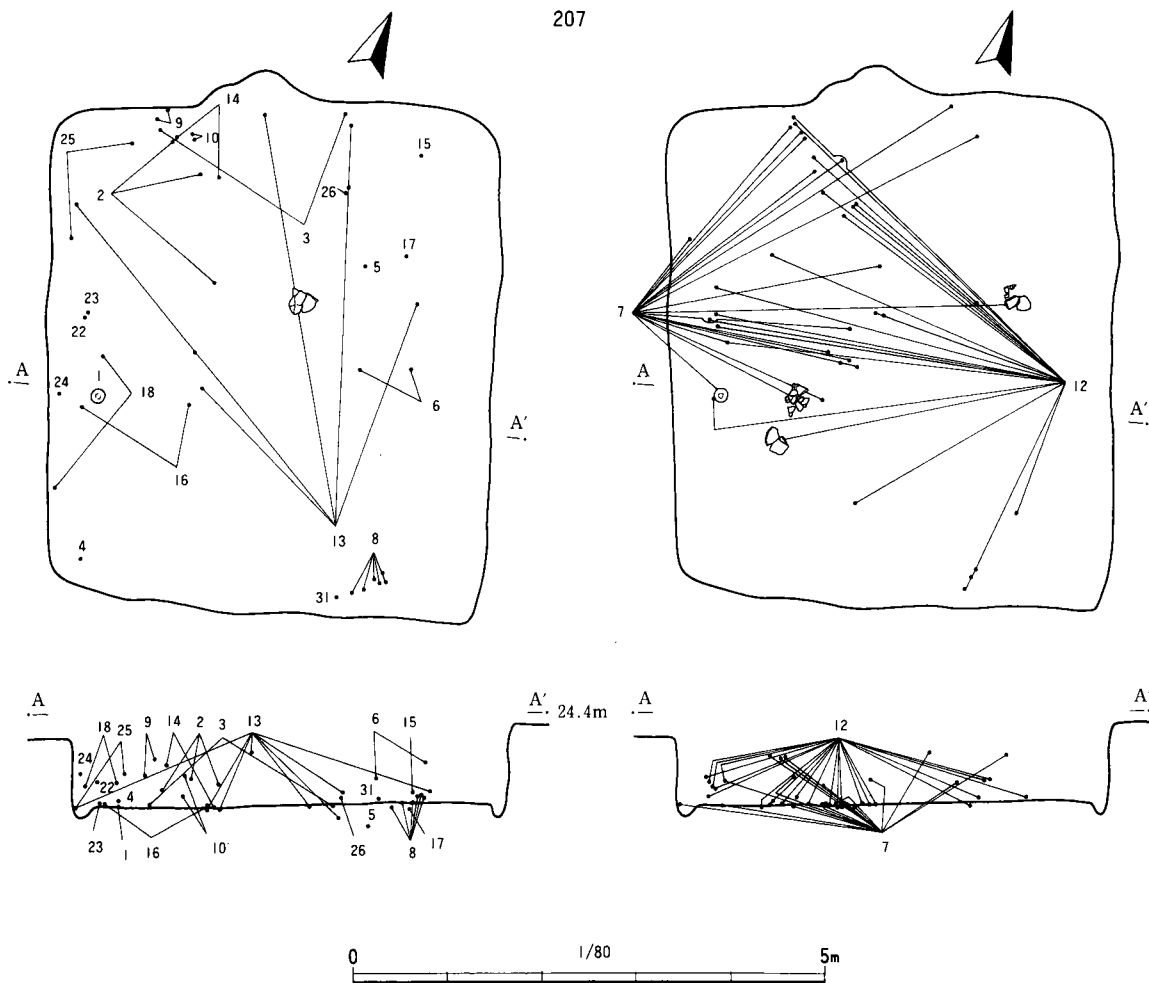
207竪穴住居（第13・14図，図版8・9）

南側道路予定部分ほぼ中央の17R-85・86・95・96グリッドに所在する。重複する遺構はない。平面形は長方形で，カマドは北壁中央よりやや西に寄ったところに設けられている。住居主軸方位はN-22°-Wである。遺構規模は南北5.0m～5.35m，東西4.6～4.8m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.9m前後で，本遺跡の竪穴住居としてはかなり掘り込みの深いものである。壁溝はカマド部分を除き全周している。床面には6本の支柱穴が検出されているが，このうち中央の一对は床面除去後に検出されたものである。支柱穴径は0.4m～0.8m，深さは0.3m～0.65mで，径，深さともにばらつきが大きい。南壁際中央よりやや西寄りのところには出入口施設痕跡と考えられる柱穴が検出されている。径0.5mで，深さ0.05mというかなり浅い掘り込みである。床面には硬化範囲が複雑に広がっている。カマド両脇と床面中央部が広く硬化しており，そのほかにもところどころ硬化部分が見られる。カマド両脇の部分の貼床には山砂・焼土が混和されている。カマド前面の床面には山砂の散布ブロックが二か所見られる。



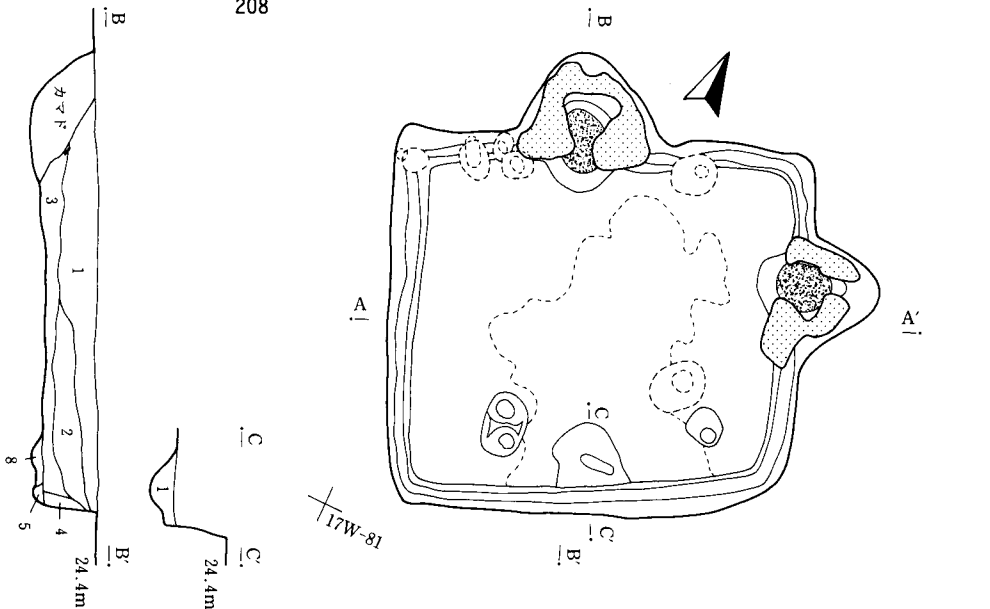
第13図 193・207竪穴住居

207



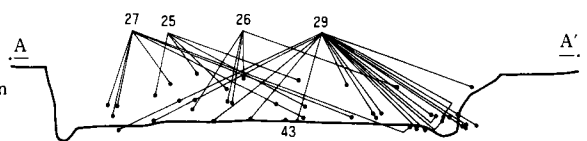
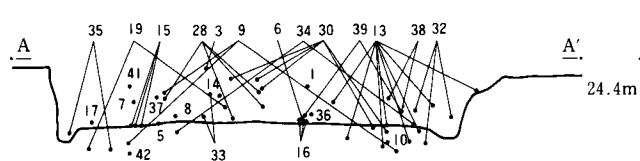
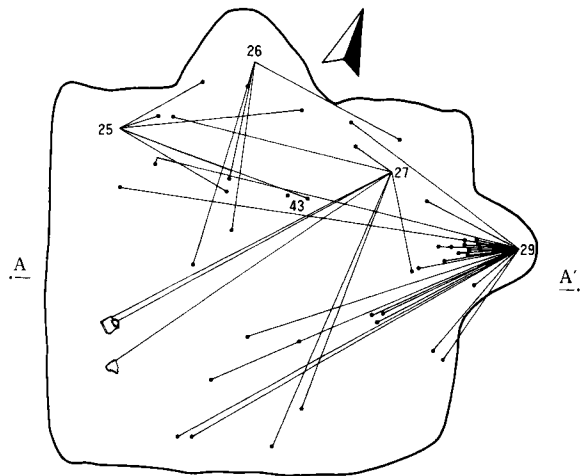
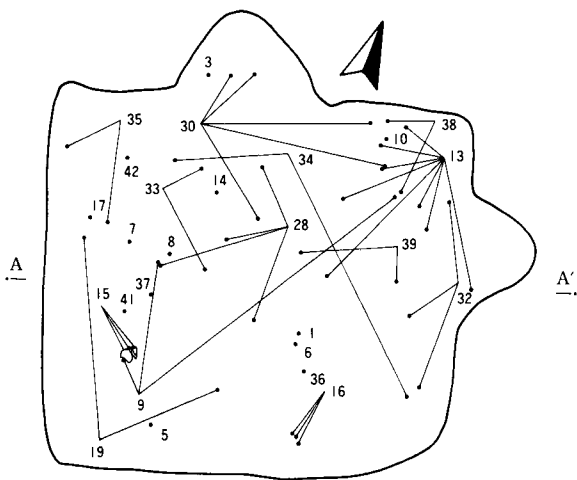
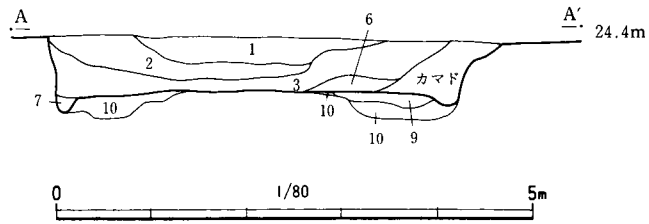
第14図 207遺物出土状況図・カマド

208



<208竪穴住居土層説明>

- 1 暗褐色土：焼土粒を多量に、炭を微量に含む
- 2 黒褐色土：焼土粒・ローム粒を多量に、炭を少量含む
- 3 暗褐色土：焼土粒・ローム粒を多量に含む
- 4 暗褐色土：ローム塊を多量に含む
- 5 暗褐色土：軟質、ローム粒を多量に含む
- 6 暗褐色土：焼土粒を微量に含む
- 7 暗褐色土：軟質、焼土粒を微量に含む
- 8 暗褐色土：ローム塊を少量含む
- 9 暗褐色土：硬質、ローム塊・焼土塊を含む(貼床層)
- 10 暗褐色土：硬質、ローム塊を含む(貼床層)



第15図 208竪穴住居

カマドは両袖と火床面が検出されているが、遺存状況はあまり良好ではない。カマド内からの遺物検出量もほとんどない。

遺物は遺構西半分に集中する傾向が見られる。覆土上半での検出はほとんどなく、覆土中層以下床面直上の間で検出されている。手捏ね土器が大量に出土している。

208竪穴住居（第15・16図，図版9）

南側道路予定部分東寄りの17W-61・70・71・72グリッドに所在する。カマドが北壁・東壁の二か所に設けられており、双方ともに両袖・火床面を明瞭に留めていることから考えて、居住時には双方ともに機能していた可能性が高い。平面形は長方形で、遺構規模は南北3.7m～3.9m，東西4.2m～4.5m，確認面から床面までの掘込みの深さは0.6m平均である。北壁側のカマドを軸方位の中心と仮定した場合、遺構主軸方位はN-19° -Wである。主柱穴はあるものは単体で、あるものは複数固まって都合四箇所を検出されているが、このうち床面精査段階で検出されたのは実線で示した南西の2本結合した柱穴と、南東端の1本で、他の破線で示したものはすべて貼床除去後に検出されている。なお、北西隅壁溝下部で検出されたものは掘り込みの深さが極端に浅いことから、主柱穴以外の柱穴痕跡と考えられる。径は0.35m～0.6m，深さは0.35m～0.65mである。南壁際中央には出入口施設痕跡と考えられる柱穴があり、径0.6m，深さ0.3mである。床面硬化範囲は床面中央のほぼ南北に広がっている。

カマドは北壁側のものをA，東壁側のものをBと呼称する。形態・遺存状況ともに酷似しており、火床面が壁溝線上から外側にあり、袖の山砂は掘り込み壁面の上位にのみ架される。

遺物は平面的にも垂直的にもほぼ全域で検出されている。「丈」の墨書土器が多く検出されている。

209竪穴住居（第16・17図，図版9）

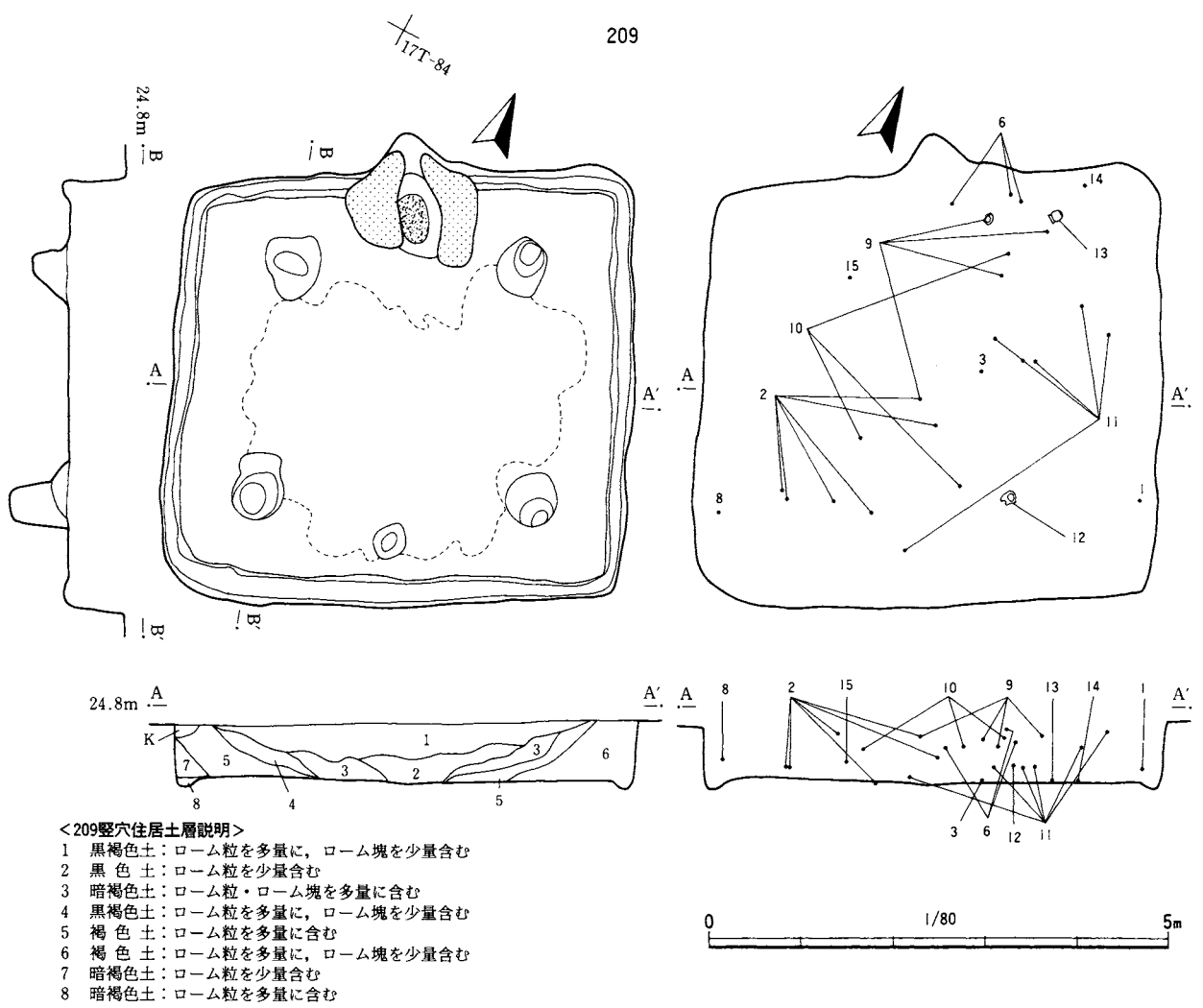
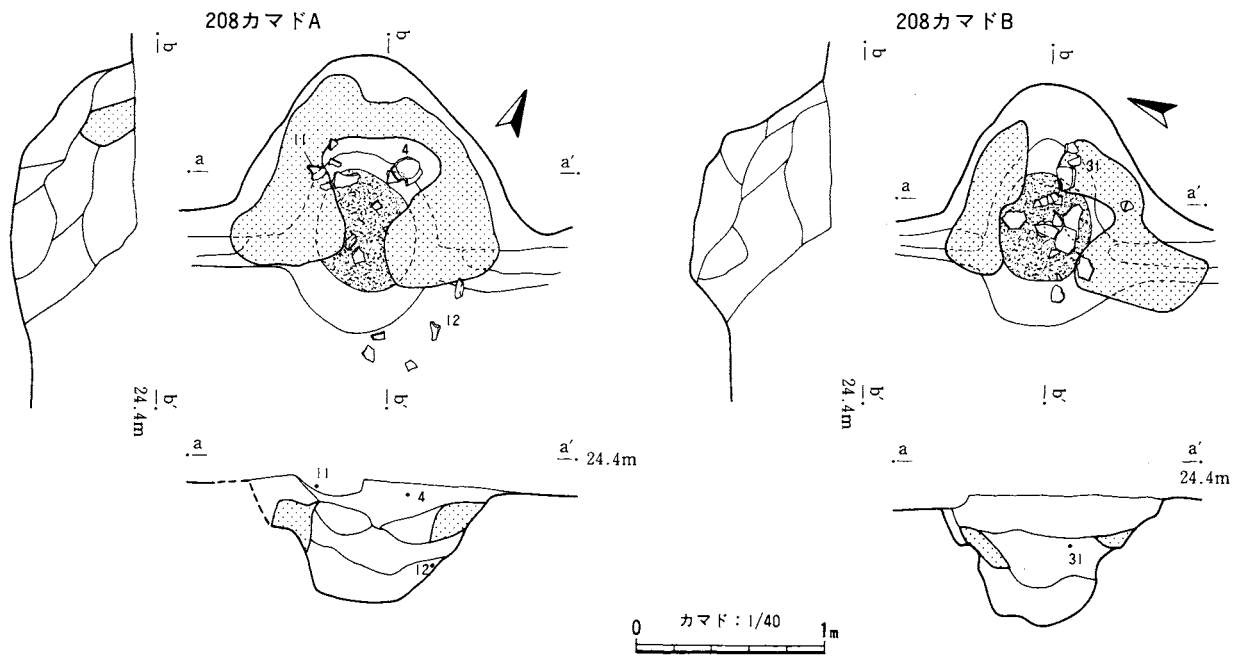
南側道路予定部分東寄りの17T-83・84・85・93・94・95グリッドに所在する。重複する遺構はない。カマドは北壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-24° -Wである。平面形はやや長方形気味で、遺構規模は南北4.6m，東西4.85m～5.05m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.55m～0.65mである。壁溝はカマド部分を除き全周しており、床面には4本の主柱穴が検出されている。径0.5m～0.7m，深さは北列が浅く0.35m～0.45m，南列は0.65mとやや深めである。南壁際には出入口施設痕跡と考えられる柱穴が設けられている。径0.4m，深さ0.13mとかなり小型である。床面硬化範囲はかなり広く、4本の主柱穴内側のほとんどが硬化している。

カマドは両袖が低く遺存している他に火床面が検出されている。

遺物は遺構北西部を除きほぼ全面で検出されているが、量的には少ない。床面直上での出土は少なく、大半は覆土中・上層からの検出である。

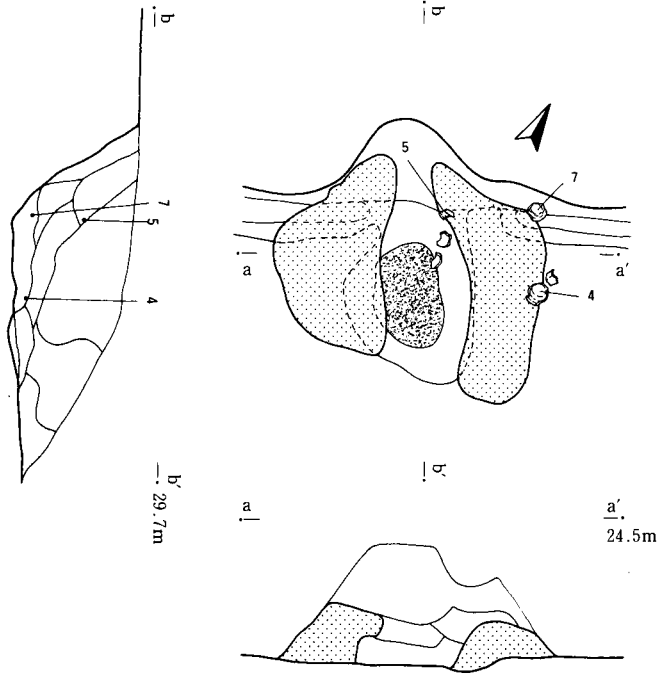
210竪穴住居（第17図，図版10）

南側道路予定部分中央やや東寄りの17R-89・99グリッドに所在する。重複する遺構はない。カマドは北西壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-36° -Wである。平面形はほぼ正方形で、遺構規模は南北2.9m，東西2.7m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.35mで、かなり小型の住居である。壁溝はカマド部分を除き全周している。主柱穴は床面精査段階においても貼床除去後においても全く検出されなかつ

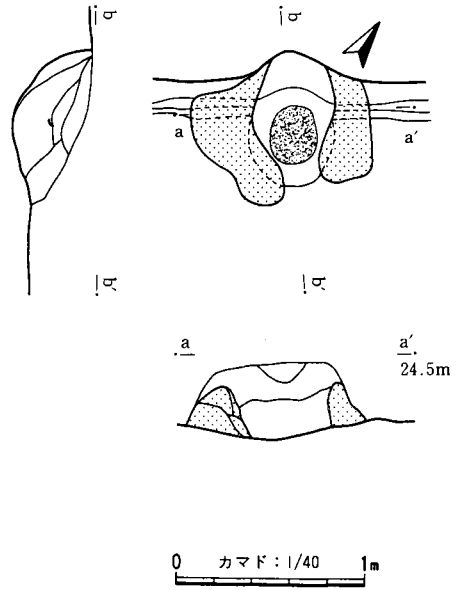


第16図 208カマドA・B, 209竪穴住居

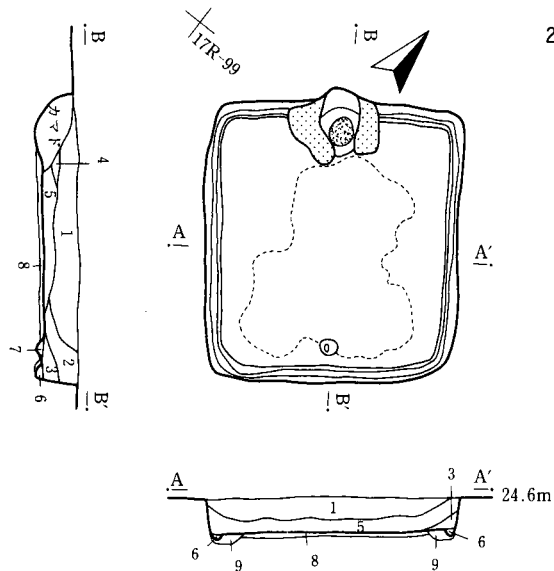
209カマド



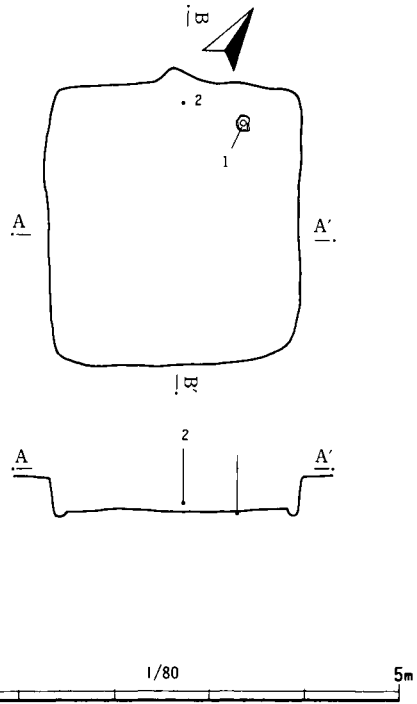
210カマド



0 カマド: 1/40 1m



210



<210竪穴住居土層説明>

- 1 黒褐色土：ローム粒を少量含む
- 2 黒褐色土：混和物なし
- 3 黒褐色土：ローム粒を多量に含む
- 4 暗褐色土：山砂を多量に含む
- 5 暗褐色土：焼土粒・ローム粒・山砂を微量に含む
- 6 黒褐色土：ローム塊を少量含む
- 7 黒褐色土：ローム粒を多量に含む
- 8 暗褐色土：硬質。ローム塊を含む(貼床層)
- 9 暗褐色土：ローム塊を含む(貼床層)

第17図 209カマド, 210竪穴住居

た。南東壁際中央に出入口施設痕跡と考えられる小柱穴が検出されており、径0.15m、深さ0.1mである。床面硬化範囲は比較的広く、住居西隅・北隅を除くほとんどの範囲が硬化している。

カマドは両袖と火床面が確認されたが、東側袖は袖幅がかなり細くなっており、遺存状況は良好ではない。

遺物検出量はきわめて少なく、カマド周辺に若干の集中を見せる。図化できた以外にわずかな破片が出土したのみである。

211 竪穴住居（第18図，図版10）

南側道路予定部分東寄りの17V-89・99・17W-80・81・90・91グリッドに所在する。遺構東隅の一部を235地下式墳によって破壊されている。カマドは西壁ほぼ中央に付設され、住居主軸方位はS-65° -Wである。平面形はほぼ正方形で、遺構規模は東西5.3m、南北5.2m、確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深い部分で0.4m、最も浅い部分では0.15mである。本遺構の最大の特徴は北壁際に見られる通常「ベッド状遺構」と呼ばれている高まり部分である。住居床面から0.1m前後高くなった平坦部分が築かれており、この平坦面は堅く締まっている。規模は上端面で東西2.9m、南北0.9mである。壁溝はカマド部分を除き「ベッド状遺構」部分脇も含め全周しているが、235地下式墳によって破壊されている部分は不明である。床面には4本の支柱穴が検出されている。径0.3m～0.6m、深さはカマド側の2本が0.35m、反対側の2本が0.45mである。床面硬化範囲はカマド前面から反対側の壁までの柱穴を結ぶ延長線上に広がっており、「ベッド状遺構」前面まできれいにつながっている。

カマドは南袖の遺存状況がきわめて悪い。南袖内側に小柱穴が検出されており、径0.3m、深さ0.15mである。

遺物は遺構のほぼ全面から検出されているが、大型破片は東壁側に集中する傾向を見せる。掘り込みの深さが浅いので、床面直上とか覆土のどの層位からかという傾向を見ることは、本遺構においてはあまり意味がない。

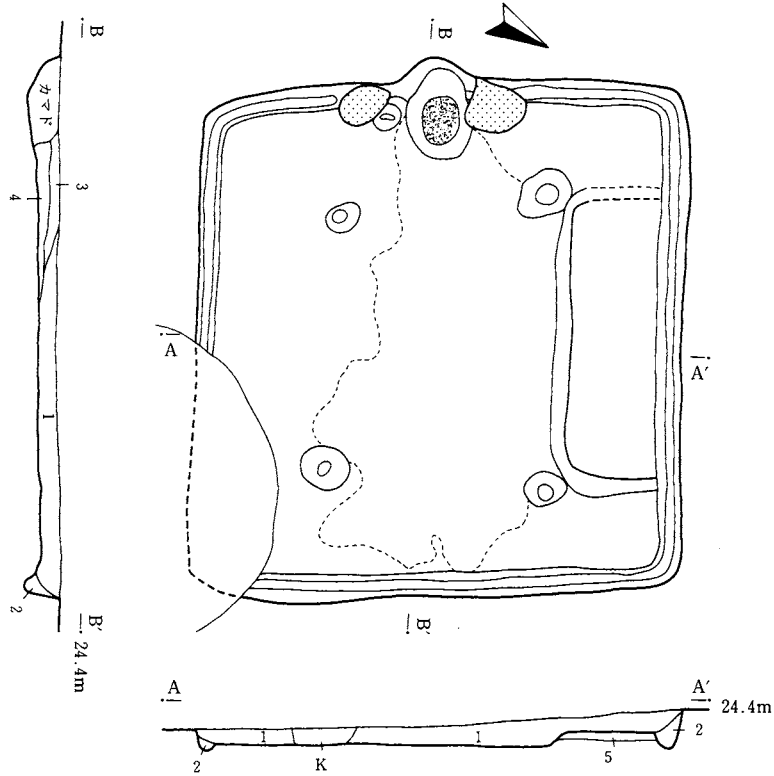
213 竪穴住居（第19図，図版11）

南側道路予定部分東端寄りの17W-67・68・69・78・79グリッドに所在する。M002溝によって床面と覆土の一部が破壊されている。カマドは北壁ほぼ中央に設けられており、住居主軸方位はN-29° -Wである。住居平面形はほぼ正方形で、遺構規模は南北4.8m、東西4.7m、確認面から床面までの掘り込みの深さは0.65mである。壁溝はカマド部分を除き全周していたものと考えられる。床面には4本の支柱穴の他に、北西隅の支柱穴に隣接して2本の柱穴が検出されている。支柱穴は4本とも掘形が大きく、径0.75m～1.05m、深さ0.45m～0.75mである。北西隅支柱穴に隣接する2本は西壁際のもので径0.5m、深さ0.2m、南東に隣接するものが径0.65m、深さ0.3mである。床面硬化範囲は住居中央から西壁際までである。

カマドは火床西半から西袖までがM002溝によって破壊されている。また、東袖も袖構築材の基部が遺存しているのみである。

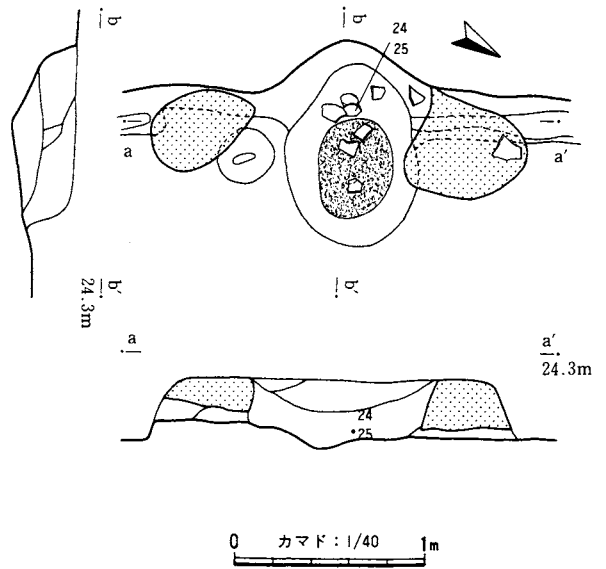
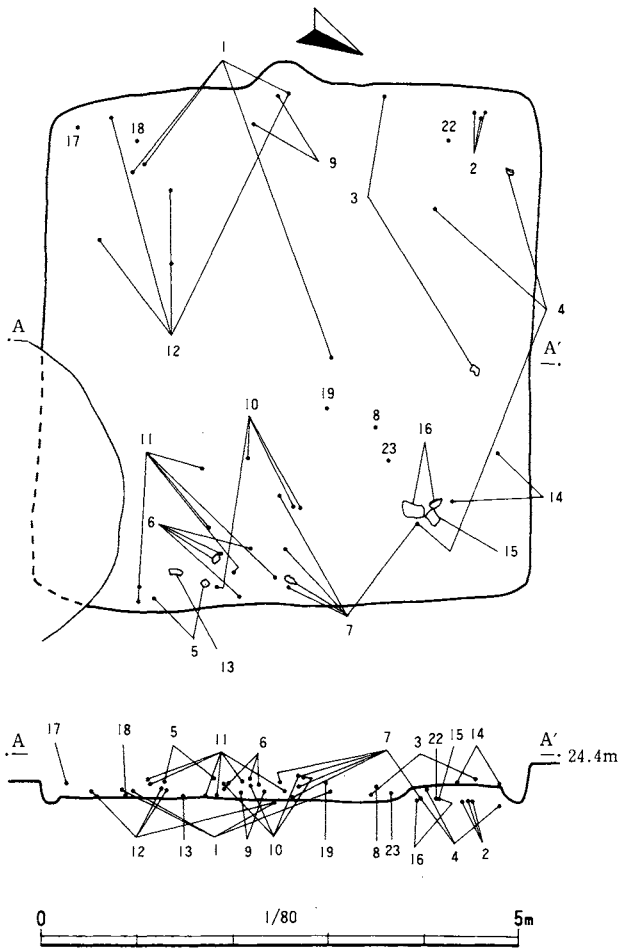
遺物は002溝によって破壊されている以外の部分を見る限り、平面的にはほぼ全面で検出されている。また、出土層位も床面直上から覆土上層までに散っている。

211

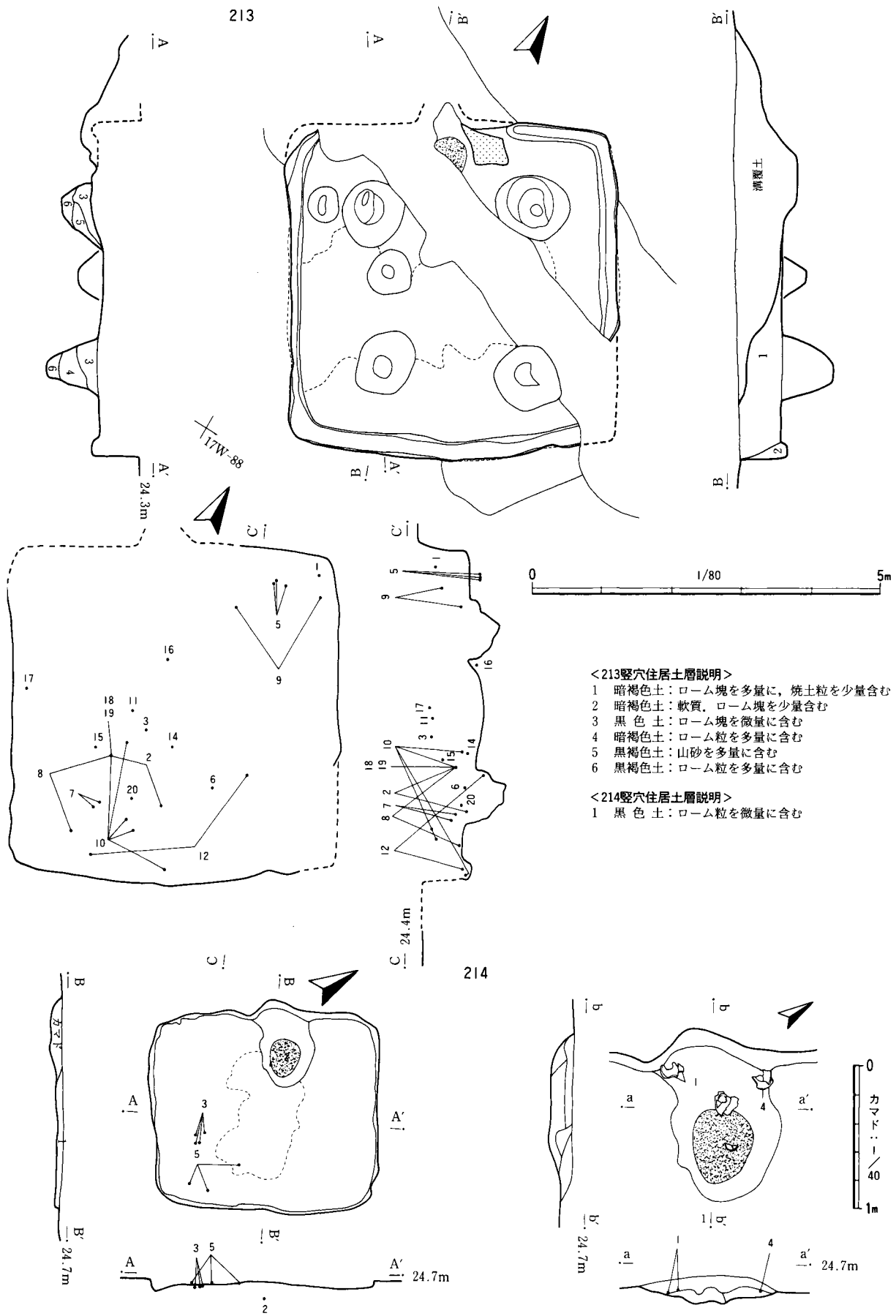


<211竪穴住居土層説明>

- 1 暗褐色土：緻密，ローム粒・ローム塊を少量含む
- 2 暗褐色土：ローム粒を少量含む
- 3 暗褐色土：山砂をブロック状に含む
- 4 暗褐色土：混和物なし
- 5 暗褐色土：硬質，ローム塊を多量に含む



第18図 211竪穴住居



第19図 213・214竪穴住居

214 竪穴住居（第19図，図版11）

南側道路予定部分中央の17T-79，17V-70グリッドに所在する。中近世と考えられる002土壙と重複しているが，002土壙そのものがきわめて浅い掘込みのため，破壊はほとんど受けていない。カマドは北西壁中央やや北寄りに設けられており，住居主軸方位はN-63° -Wである。平面形はやや長方形気味で，遺構規模は南北3.15m～3.3m，東西2.8m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.1mで極端に浅い。壁溝は一切設けられていない。支柱穴も全く検出されておらず，床面硬化範囲は中央付近に限定されている。

カマドは袖構築材が全く遺存しておらず，火床面が検出されたのみである。

遺物出土量は少なく，大半は小片である。

215 竪穴住居（第20図，図版11）

南側道路予定部分東寄りの17V-72・73・82・83グリッドに所在する。重複する遺構はない。カマドは北壁ほぼ中央に設けられており，住居主軸方位はN-32° -Wである。平面形はやや崩れた正方形で，遺構規模は南北4.4m～4.6m，東西4.5m～4.6m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.7m～0.8mである。壁溝はカマド部分を除き全周している。床面には4本の支柱穴が検出されており，径0.5m～0.7m，深さ0.55m～0.6mである。南壁際中央には出入口施設痕跡と考えられる柱穴が検出されている。径0.5m，深さ0.2mである。床面硬化範囲は比較的広く，北壁側・東壁際を除きほぼ硬化している。

カマドの遺存状況はあまり良好ではない。両袖とも構築材の遺存はかなり低い部分までである。

遺物は平面的にも垂直的にもほぼ全面に散った状態で検出されている。ただし，図化可能個体については北半に集中する傾向を見せる。

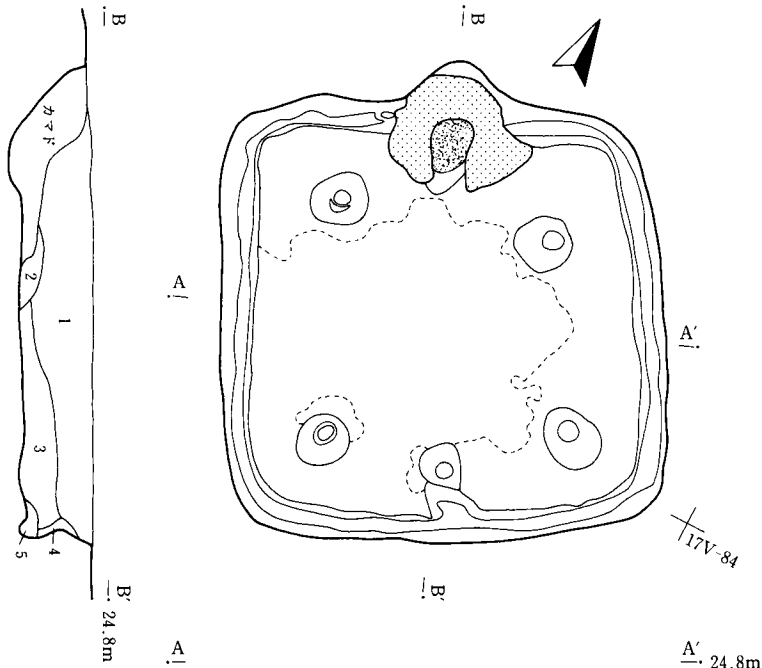
216 竪穴住居（第21図，図版12）

南側道路予定部分東端に近い17W-75に所在する。遺構の東半分を後世の浅い溝によって破壊されている。図の中段に示した平面図は貼床除去後の状況であり，床面精査段階の最上段のものとの格差の大きさが注目される。カマドは北壁中央やや西寄りのところに設けられており，住居主軸方位はN-8° -Eである。平面形はほぼ正方形で，遺構規模は南北2.9m～3.2m，東西3.0m，確認面から床面まで掘り込みの深さは最も深いところで0.25m，貼床除去後の床面までの深さは最も深いところで0.4mである。床面精査段階においては壁溝・柱穴ともに全く確認されておらず，床面中央からカマド前面にかけての狭い部分に床面硬化範囲が確認できたのみである。貼床除去後においてカマド部分を除き全周する壁溝，南壁際両端に設けられている支柱穴，南壁際中央に設けられている出入口施設痕跡と考えられる柱穴，さらに西壁際中央に設けられている小柱穴が確認できた。支柱穴は掘方規模に差が見え，東壁際のものが径0.7m～1.0m，深さ0.2m，西壁際のものが径0.6m，深さ0.3mである。出入口施設痕跡と考えられる柱穴は径0.5m，深さ0.2m，西壁際中央の柱穴は径0.25m，深さ0.3mである。

カマドは住居廃絶段階にほとんどが破壊し尽くされ，東側袖構築材のごく一部と火床部分が確認されたのみである。

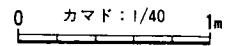
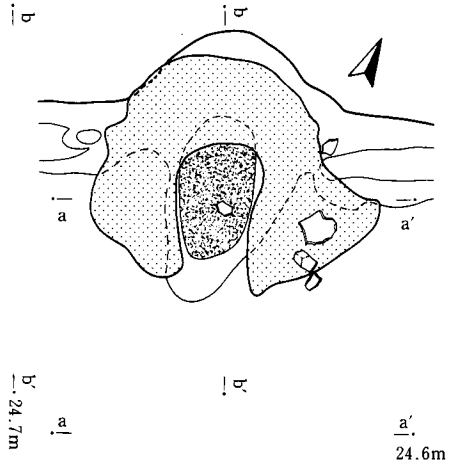
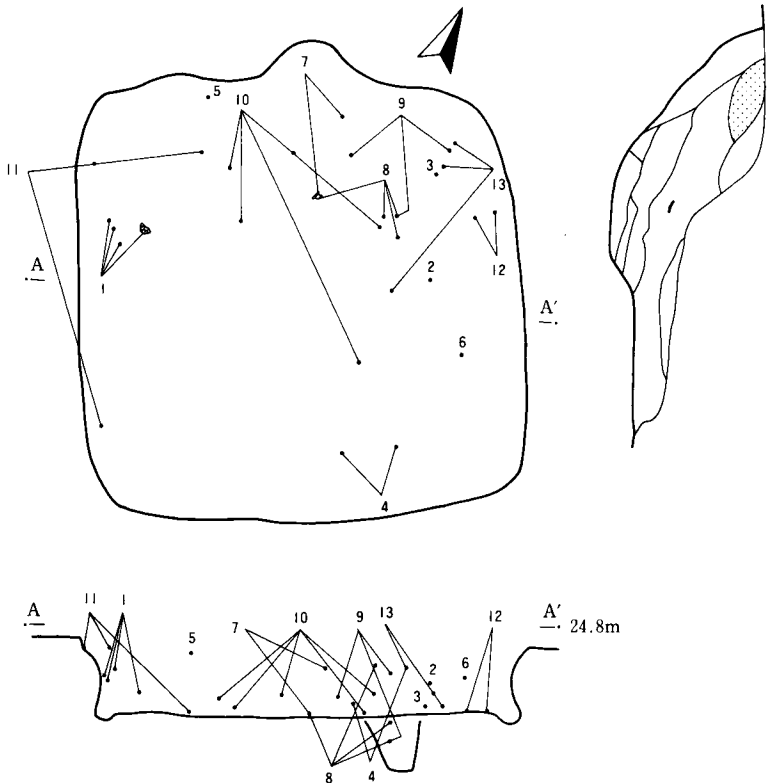
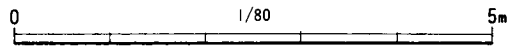
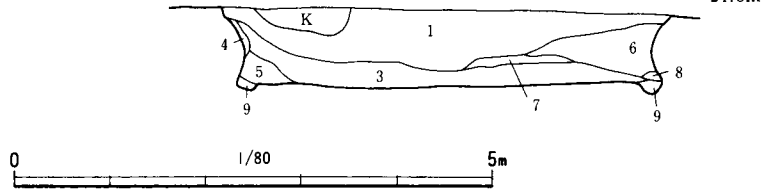
遺物は溝に破壊されていない部分のほぼ全面の全層位中から検出されている。

215



<215竪穴住居土層説明>

- 1 黒色土：ローム粒を多量に，焼土粒を微量に含む
- 2 暗褐色土：山砂を多量に，焼土粒を微量に含む
- 3 黒褐色土：ローム粒を多量に，焼土粒を少量含む
- 4 暗褐色土：ローム粒を多量に含む
- 5 黒色土：混和物なし
- 6 黒褐色土：ローム粒・焼土粒を多量に含む
- 7 黒色土：ローム粒を少量含む
- 8 明褐色土：ロームを主体とする
- 9 暗褐色土：緻密。ローム粒を多量に含む



第20図 215竪穴住居

217 竪穴住居（第21・22図，図版12）

南側道路予定部分東端の17X-75・76・85・86グリッドに所在する。237・240・241竪穴住居，002溝が近接しているが重複する遺構はない。カマドは北西壁ほぼ中央に設けられており，住居主軸方位はN-36°-Wである。遺構平面形はほぼ正方形で，遺構規模は南北3.4m，東西3.6m，確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深いところで0.7mである。壁溝はカマド部分を除きほぼ全周しており，支柱穴はまったく検出されなかった。北東隅壁際床面に長径0.7m，短径0.5m，深さ0.25mの楕円形の掘り込みが検出されている。付設位置から考えて貯蔵穴と判断するのが最も妥当であるのだろうが，本遺跡においては当該期の貯蔵穴様掘り込みはほとんど円形であり，長方形のものは見あたらず断定できない。

カマドは両袖ともに前半分が遺存しておらず，壁側掘り込み部分の山砂遺存状況も良好ではない。

遺物は平面的にも層位的にもほぼ全体に散らばった状況で検出されているが，量は少ない。

218 竪穴住居（第22図，図版13）

南側道路予定部分中央の18R-15グリッドに所在する。246溝が西側に隣接するが，重複する遺構はない。西壁と西側床面の一部に攪乱を受けている。カマドは住居北東隅に設けられているいわゆる「隅カマド」である。西壁の走行方位はN-6°-Wである。平面形は台形に近い方形で，遺構規模は南北2.2m～2.4m，東西2.1m～2.2m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.2mである。壁溝はまったく設けられておらず，柱穴・床面硬化範囲もまったく確認できなかった。

カマドは北東隅の壁外に突き出すように築かれており，袖構築材，火床面ともに完全に壁外にある。カマド内には1の須恵器蓋と7・8の2個体の須恵器甕が正位で置かれていた。

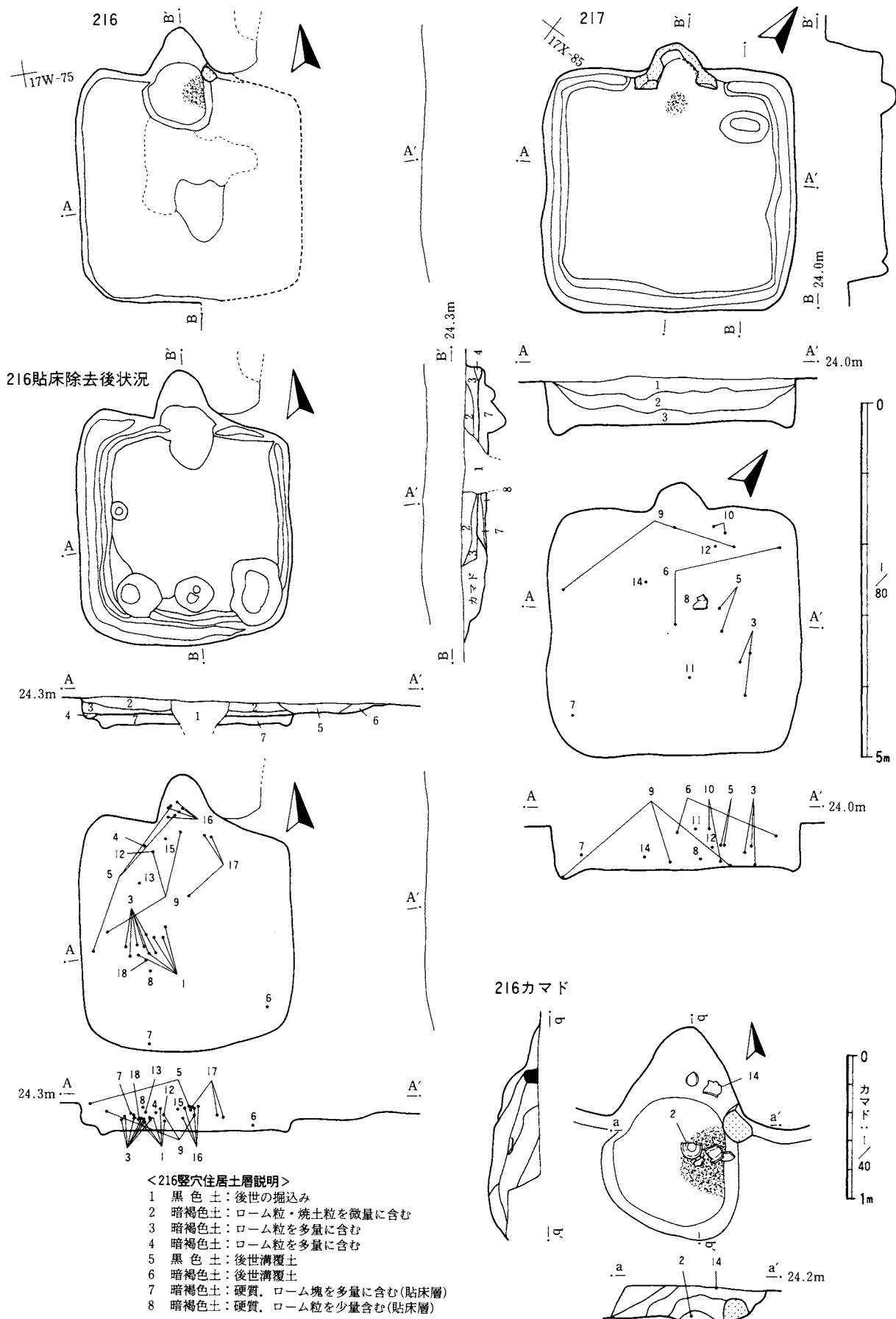
検出された遺物の量は少ないが，全体に床面直上でつぶれたような状況で検出されている。

219 竪穴住居（第22図，図版13）

南側道路予定部分中央の18R-07・08・17・18グリッドに所在する。重複する遺構は存在しないが，南壁から南側の床面にかけて攪乱を受けている。カマドは218竪穴住居同様，住居北東隅に設けられた「隅カマド」である。北東壁の走行方位はN-19°-Wである。平面形はやや台形に近い正方形で，遺構規模は南北2.9m～3.1m，東西3.0m～3.2m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.3mである。壁溝は部分的に設けられており，東壁・北壁・西壁に断続的に検出されている。床面精査段階においては支柱穴は検出されなかったが，貼床除去後において北壁側両端に不整形の掘込みが確認されているが，一般的な柱穴掘形とは考えられず性格不明である。北西側のものが長径1.2m，短径0.7m，深さ0.25m，北東側のものが長径1.2m，短径0.7m，深さ0.2mである。床面南東寄りのところには焼土のブロックが確認された。床面硬化範囲は存在しなかった。

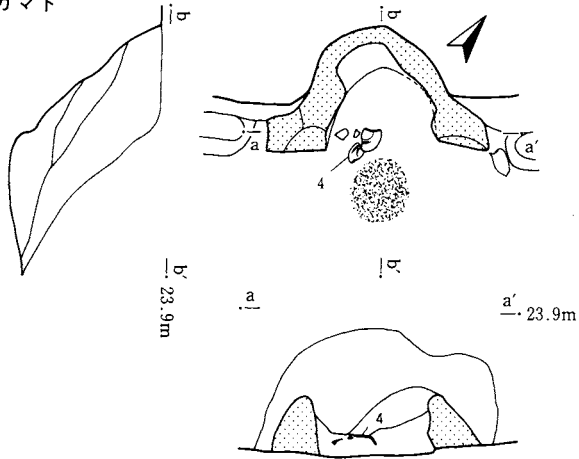
カマドは北東隅に壁から突き出すように築かれているが，218竪穴住居のそれに比べると突出度は弱く，袖・火床面ともに内側に存在する。

遺物はカマド前面に集中している。床面直上の検出遺物が多く，全体につぶれたような状況で出土している。

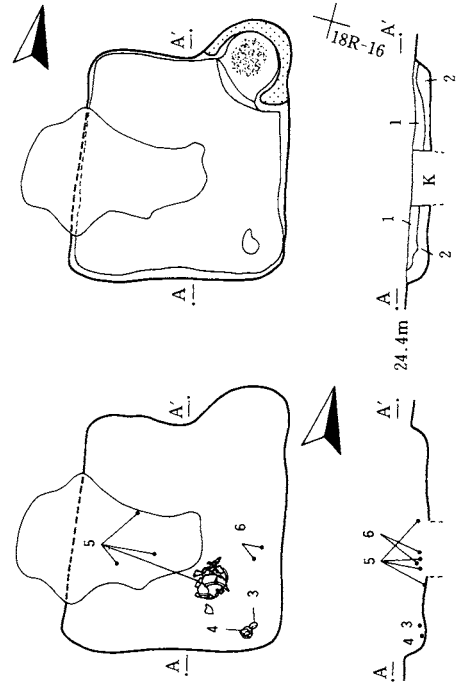


第21図 216・217竪穴住居

217カマド



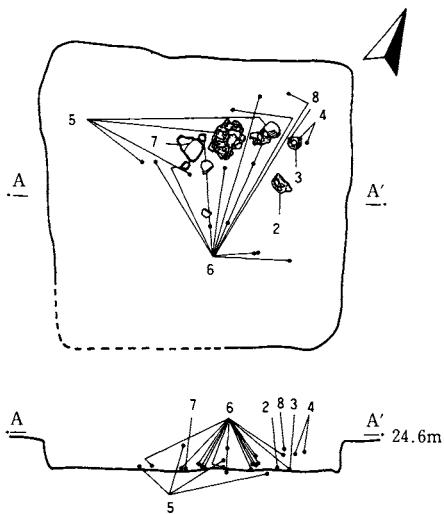
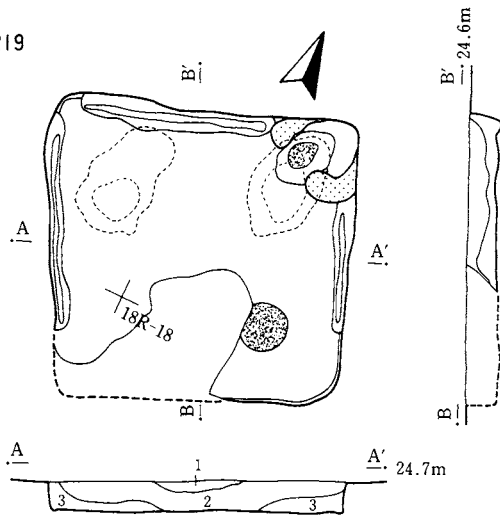
218



<218竪穴住居土層説明>

- 1 黒褐色土：ローム粒を含む
- 2 暗褐色土：ローム粒・ローム塊主体

219



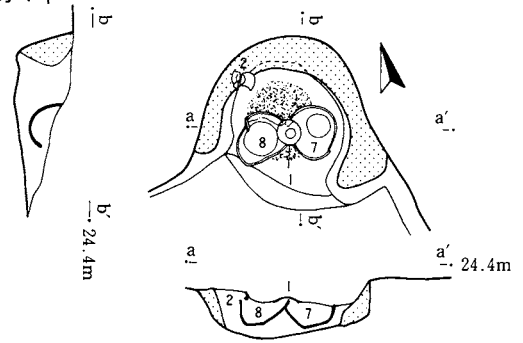
<217竪穴住居土層説明>

- 1 黒褐色土：ローム粒主体
- 2 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 3 明褐色土：ローム塊主体

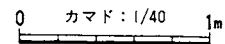
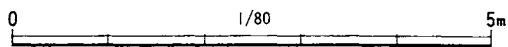
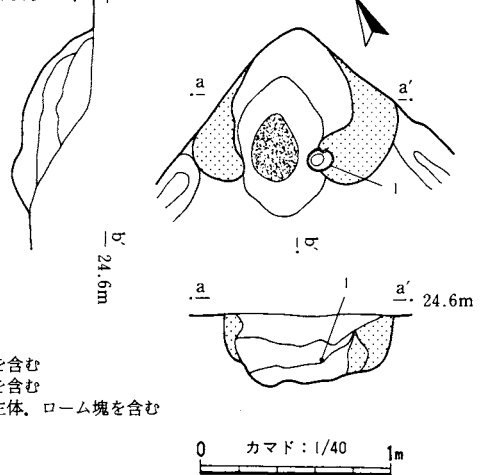
<219竪穴住居土層説明>

- 1 暗褐色土：ローム塊を含む
- 2 黒褐色土：ローム粒を含む
- 3 暗褐色土：ローム粒主体、ローム塊を含む

218カマド



219カマド



第22図 217カマド，218・219竪穴住居

220竪穴住居（第23図，図版13）

南側道路予定部分中央やや東寄りの18S-02・03・12・13グリッドに所在する。重複する遺構はない。カマドは北西壁ほぼ中央に設けられており，住居主軸方位はN-30°-Wである。平面形はやや長方形気味で，遺構規模は南北4.1m，東西4.4m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.6mである。壁溝はカマド部分を除き全周している。床面には4本の支柱穴と南東壁際中央に出入口施設痕跡と見られる柱穴，さらに北東壁際やや南寄りのところに小型の柱穴が確認されている。支柱穴は径0.45m～0.75m，深さ0.65m～0.7mである。出入口施設痕跡と考えられる柱穴は径0.4m，深さ0.2mである。北東壁際やや南寄りのところの柱穴は下端が二つになっており，上端での径は長径0.4m，短径0.2m，深さ0.2mである。平面図中央付近に見える炭化物の集中は床面直上ではなく覆土中のものであり，床面から0.2mほど浮いた層で確認されたものである。

カマドは壁外への掘り込みが弱く，全体に構築材が広がってしまっている。

遺物は出土地点に偏りが見られ，カマド付近から遺構中央部には遺物の空白域が見られる。

222竪穴住居（第24図，図版14）

南側道路予定部分東端寄りの17W-81・82・83・91・92・93グリッドに所在する。隣接する遺構はあるが，重複する遺構はない。カマドは北壁中央に設けられており，住居主軸方位はN-9°-Wである。平面形はほぼ正方形で，遺構規模は南北6.1m～6.0m，東西5.8m～6.0m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.6mである。壁溝はカマド部分を除いて全周している。床面には4本の支柱穴と南壁際中央に出入口施設痕跡と考えられる柱穴が検出されている。支柱穴は4本ともやや隅に寄ったところに設けられている。径0.6m～0.9m，深さは南西隅のものが極端に深く1.05mで，それ以外のものは0.75m～0.8mである。出入口施設痕跡柱穴は径0.3m，深さ0.2mである。床面硬化部分は記録が残っていないため不明である。

カマドは両袖構築材が比較的良好に遺存しており，本書所収のカマドの中では遺存状況の良好なものの部類に入る。

遺物は平面的にはほぼ全面から検出されており，層位的には床面直上から覆土中層に集中しており，床面直上のものは遺存状況の良好なものが多い。住居南西隅床面には炭化材と焼土の集中が見られる。

224竪穴住居（第25図，図版14）

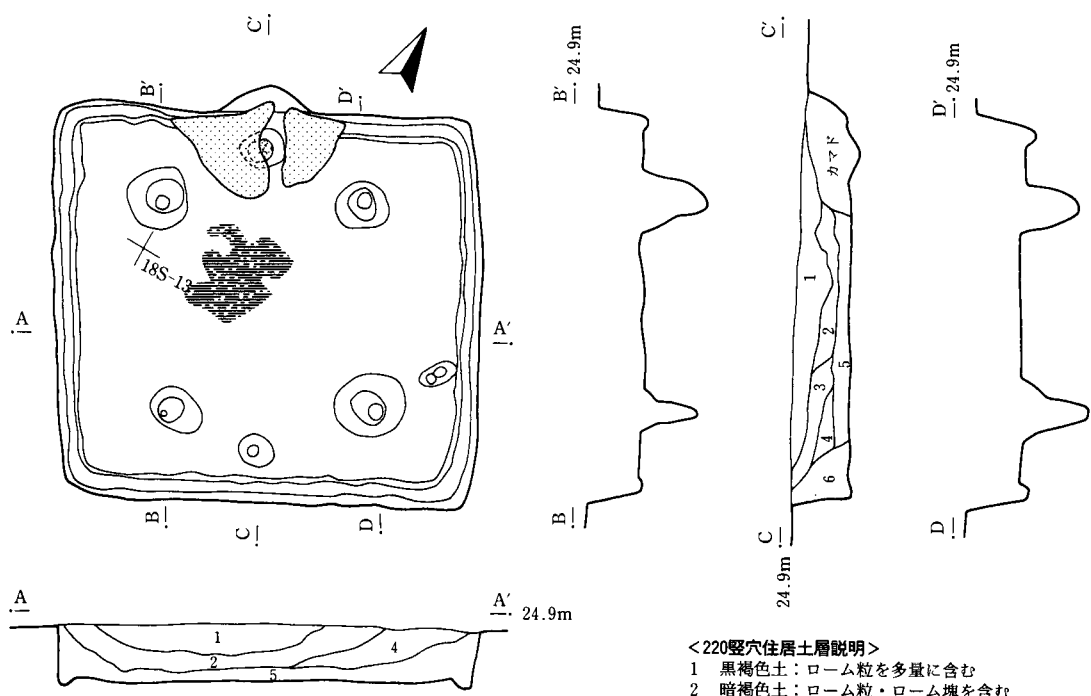
南側道路予定部分中央の18S-20・21・30・31グリッドに所在する。カマドは北西壁ほぼ中央に設けられており，住居主軸方位はN-27°-Wである。平面形はほぼ正方形で，遺構規模は南北3.8m～3.95m，東西3.0m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.6mである。壁溝はカマド部分を除き全周しているが柱穴・床面硬化部分はまったく確認されていない。

カマドの遺存状況は比較的良好で，両袖はかなり高く残っており火床面も明確に確認できた。

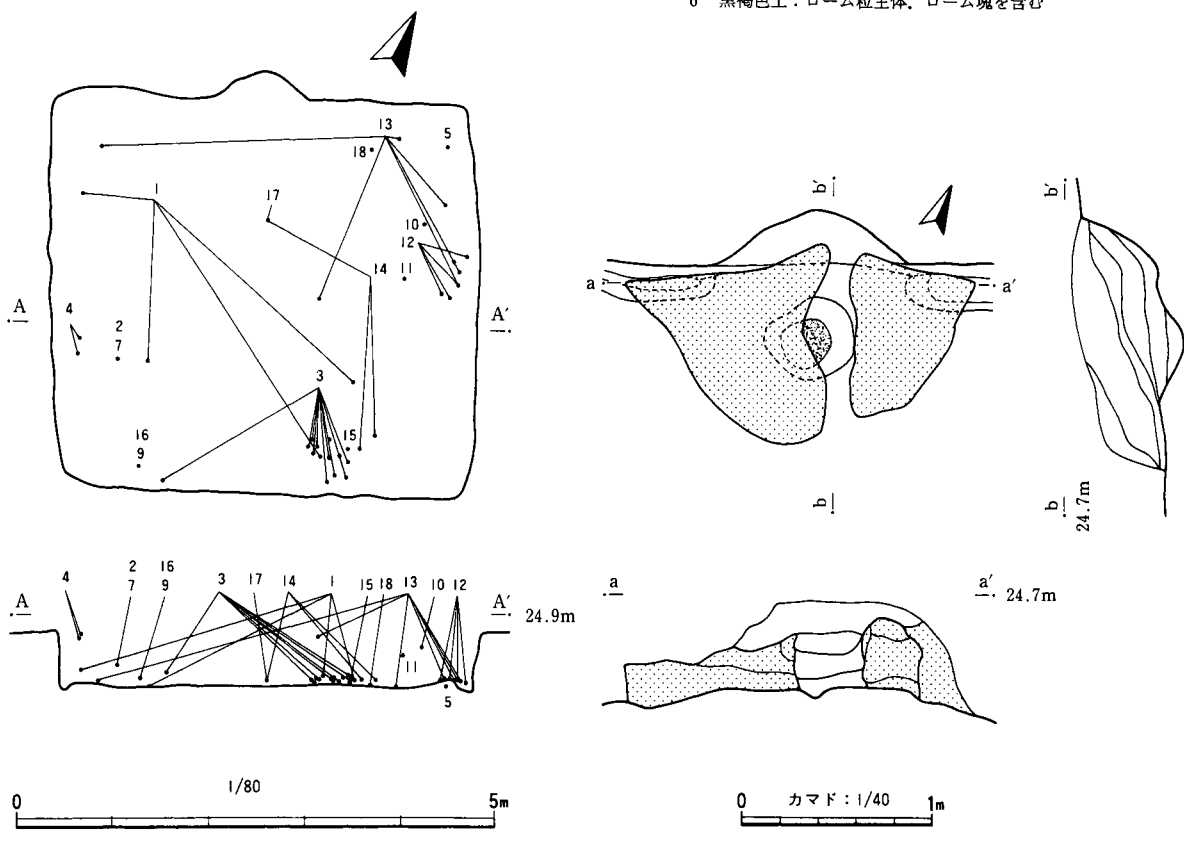
遺物の出土量はきわめて少なく，非実測個体も含めてもわずかである。

225竪穴住居（第25図，図版14・15）

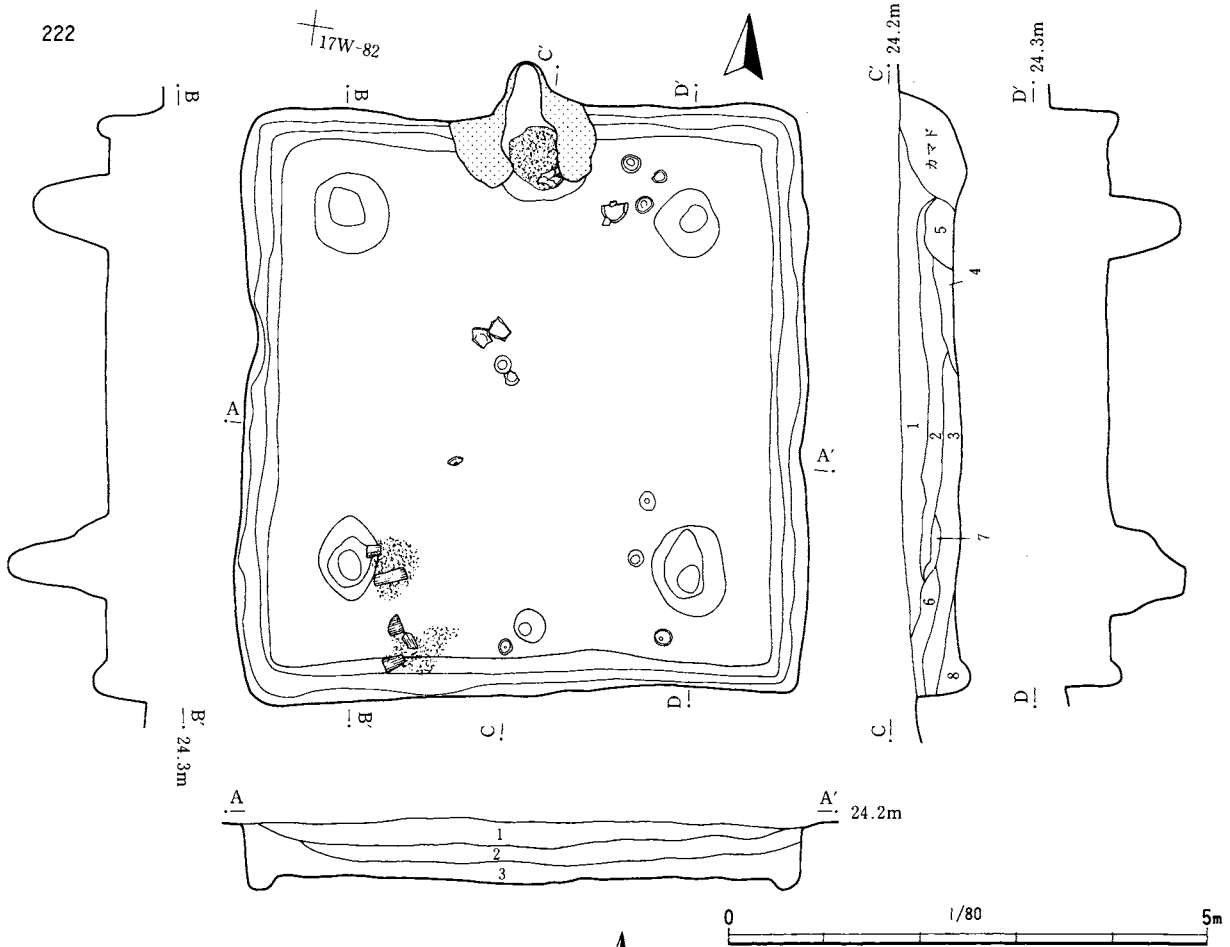
南側道路予定部分東端寄りの17X-90・91，18X-00・01グリッドに所在する。重複する遺構はない。カマドは北壁ほぼ中央に設けられており，住居主軸方位はN-21°-Wである。平面形はほぼ正方形で，遺構規模



- <220竪穴住居土層説明>
- 1 黒褐色土：ローム粒を多量に含む
 - 2 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
 - 3 褐色土：ローム塊主体、ローム塊を含む
 - 4 黒褐色土：ローム粒を含む
 - 5 暗褐色土：ローム粒・ローム塊主体
 - 6 黒褐色土：ローム粒主体、ローム塊を含む

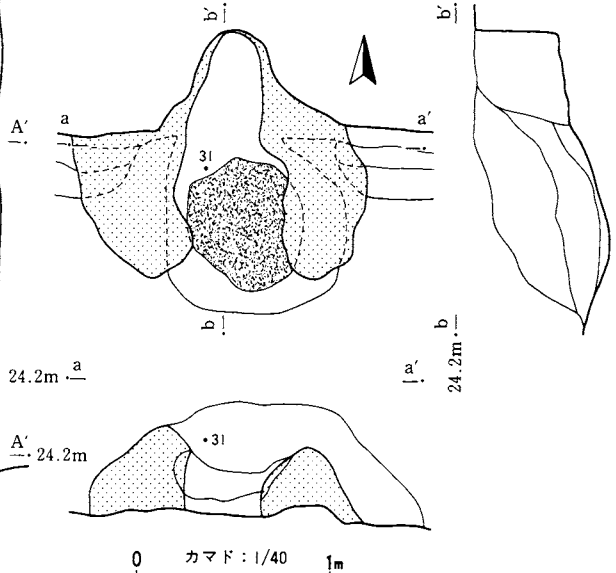
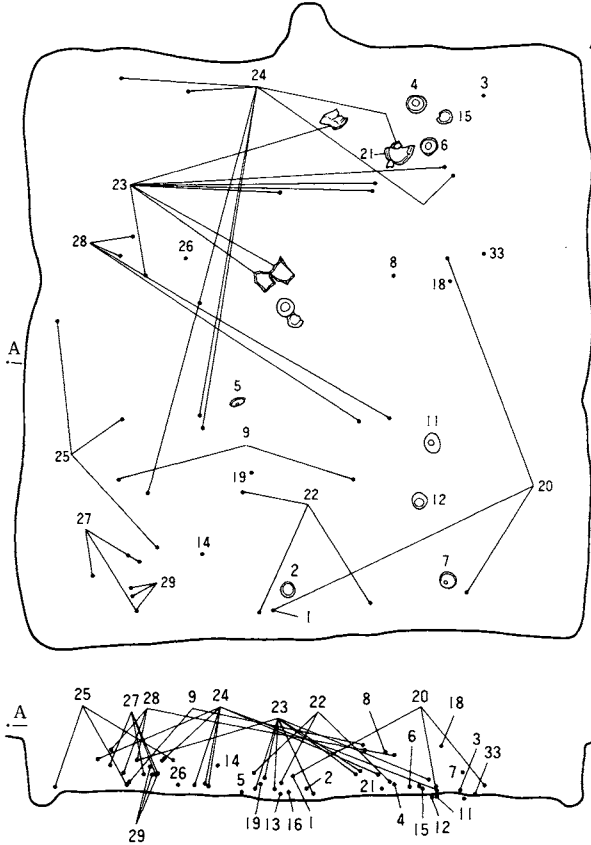


第23図 220竪穴住居

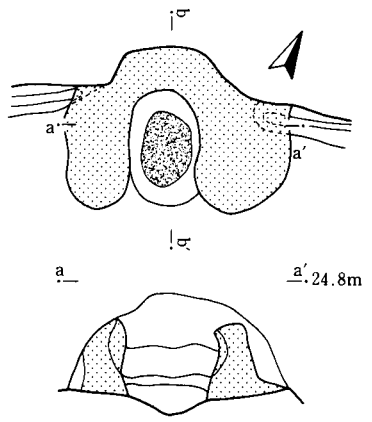
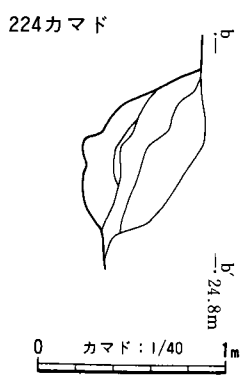
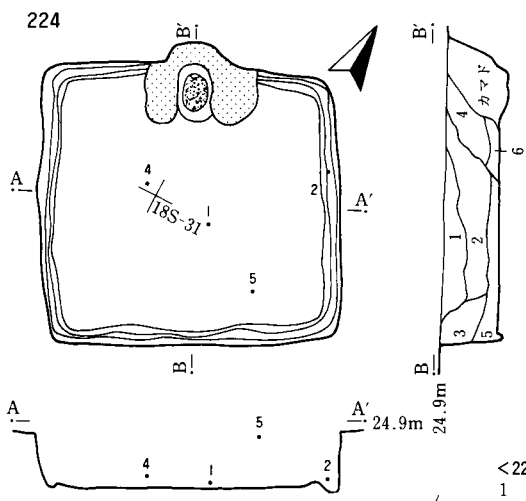


<222竪穴住居土層説明>

- 1 黒色土：軟質、焼土粒・ローム粒を少量含む
- 2 暗褐色土：ローム塊を少量、ローム粒を少量含む
- 3 褐色土：ローム塊を多量に含む
- 4 暗褐色土：3に準じ炭化物粒を少量含む
- 5 暗褐色土：山砂主体、ローム塊を少量含む
- 6 褐色土：ローム塊を多量に含む
- 7 褐色土：ローム塊主体
- 8 暗褐色土：ローム塊を多量に含む

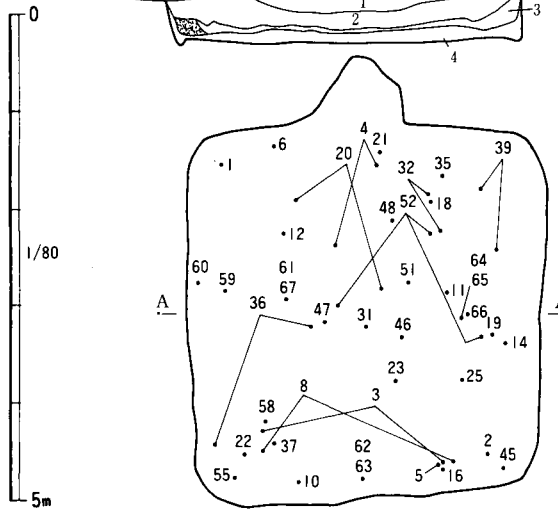
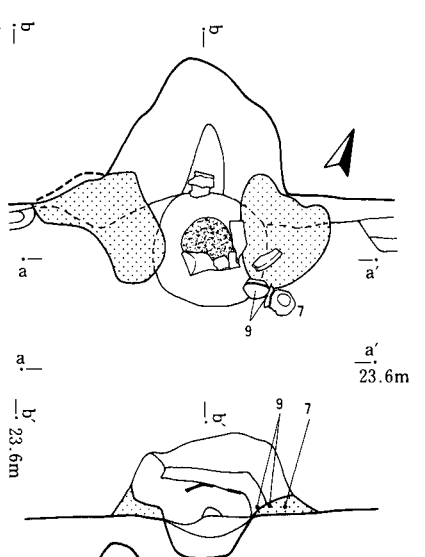
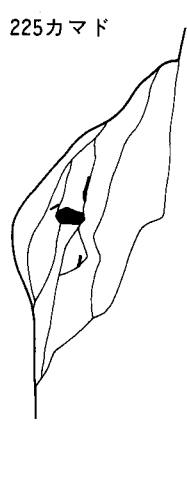
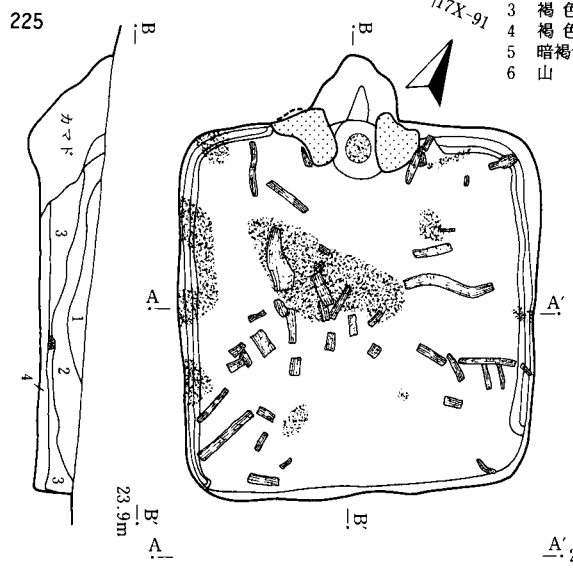


第24図 222竪穴住居

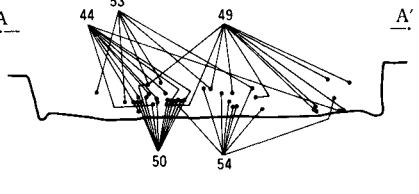
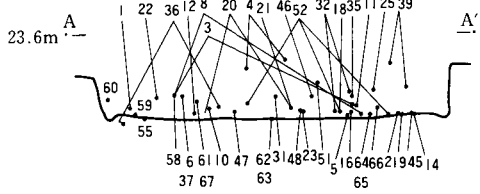
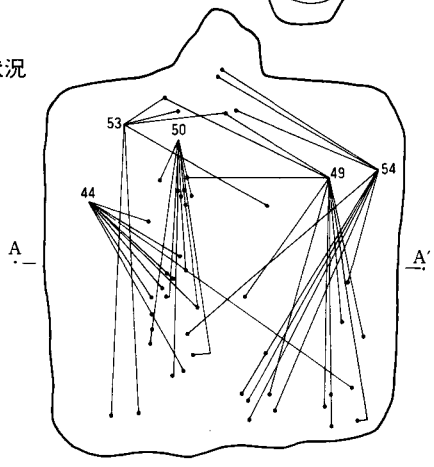


<224竪穴住居土層説明>
 1 黒褐色土：ローム粒を含む
 2 褐色土：ローム塊主体、ローム粒を含む
 3 褐色土：ローム塊主体
 4 褐色土：ローム塊主体、山砂を含む
 5 暗褐色土：ローム粒主体、山砂を含む
 6 山砂

<225竪穴住居土層説明>
 1 暗褐色土：ローム粒を含む
 2 褐色土：ローム塊主体
 3 褐色土：ローム塊・山砂・焼土粒を含む
 4 記載なし



225遺物出土状況



第25図 224・225竪穴住居

は南北3.7m～3.9m，東西3.7m，確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深い部分で0.65mである。壁溝はカマド部分及び南壁側を除く部分に巡らされている。支柱穴等の柱穴は一切検出されなかった。また、床面硬化部分も確認されなかった。

カマドは両袖構築材の山砂が低く残っていた程度の遺存状態であった。

本遺構からは土層断面図3層部分から炭化材および焼土層が検出されている。床面直上でなく、また焼失家屋とするには炭化材の量が少ないことを考えると、本遺構に直接関わるものかどうか不明であるが、上屋部材等の焼却痕跡と推定できる。遺物は面的にも層位的にもほぼ全面で検出されており、実測個体としては本遺跡における竪穴住居中屈指の量である。

226A竪穴住居（第26・27図，図版16）

南側道路予定部分東寄りの18V-16・17・26・27グリッドに所在する。226B竪穴住居によって、遺構西側の一部を破壊されている。東壁側は攪乱を受けており、明確にすることはできなかった。カマドは北壁中央と西壁やや南寄りの箇所との二か所に設けられており、北壁側のカマドを基準にすると住居主軸方位はN-2°-Wである。東壁推定線は攪乱のために奇妙な部分を走ってしまっているが、支柱穴とカマドの位置から復元するとほぼ正方形の住居であったろうと考えられる。遺構規模は南北6.2m，東西は復元で6.0m，確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深い部分で0.45mである。壁溝は確認できた範囲では全周していた。床面には4本の支柱穴が確認されており、径0.4m～0.7m，深さ0.5m～0.7mである。床面硬化部分は確認されていない。

カマドは北壁側のものの方が遺存状況が良好である。西壁側のものは226A竪穴住居により破壊を受けているにもかかわらず、カマド袖材の基部と火床面が遺存していることを考えると、居住時においては2基のカマドが同時存在で機能していた可能性が高い。

遺物は全体に広くまばらに分布していたが、大半は小片であり、実測可能個体は壁際に若干存在する程度である。

226B竪穴住居（第26・27図，図版16）

226A竪穴住居の西壁部分上位を破壊して構築されている。床構築面は226A竪穴住居に比べ0.15mほど高い。カマドは北壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-33°-Wである。平面形はほぼ正方形で、遺構規模は南北3.3m，東西3.4m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.3mである。壁溝は巡らされておらず、支柱穴等の柱穴も全く検出されていない。床面の硬化範囲は図示したとおりで、床面積に占める割合は高い。

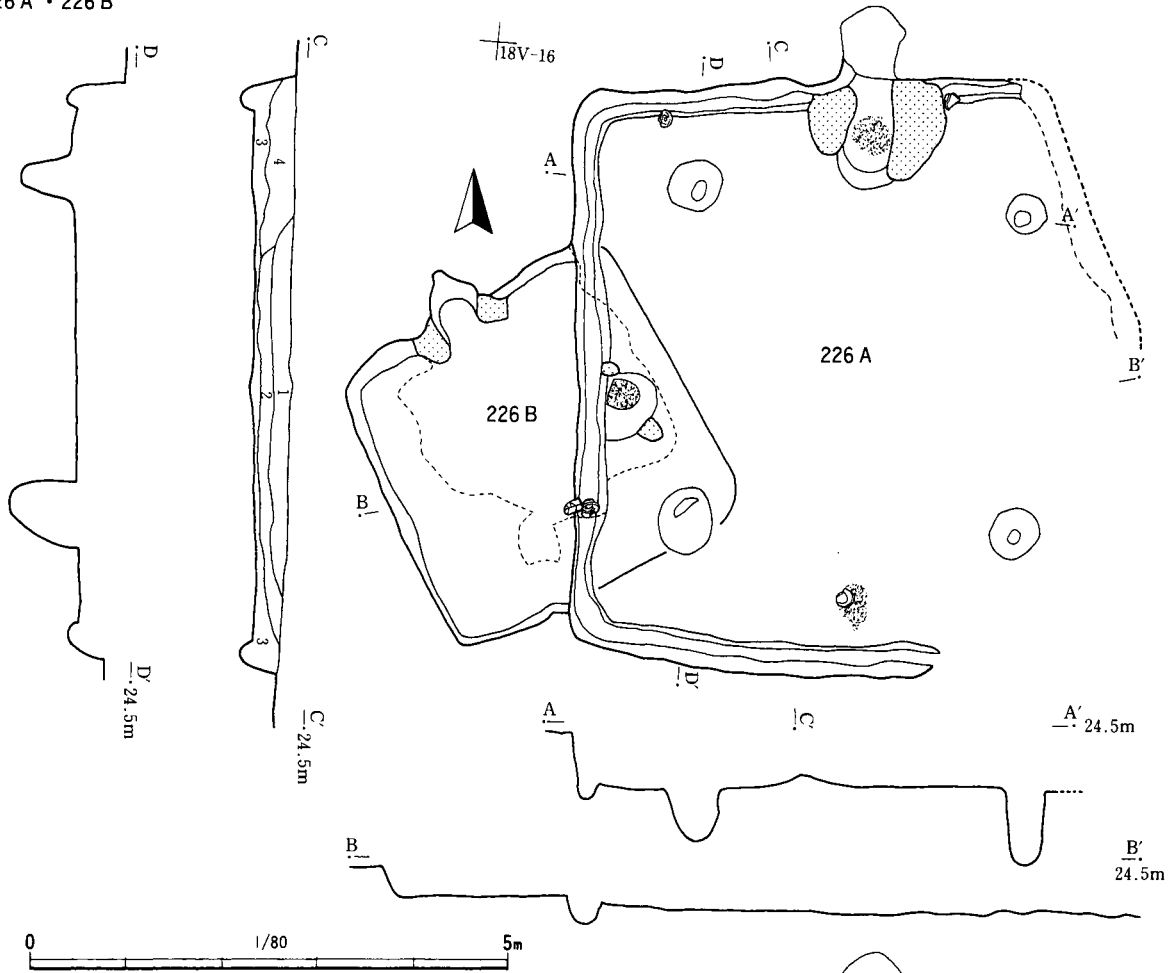
カマドはやや壁外への張り出しの強い形態のものである。

小型住居の割には遺物出土量は多く、平面的にも層位的にもほぼ全面に散った状態で検出されている。

227竪穴住居（第27図，図版16）

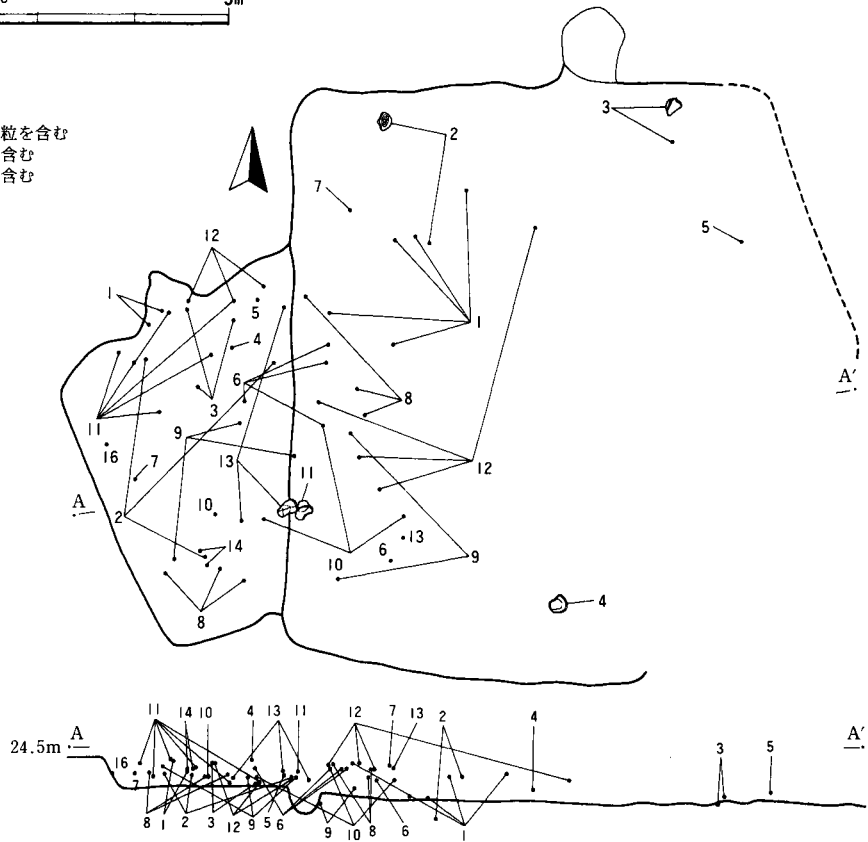
南側道路予定部分東寄りの18T-05・06・15・16グリッドに所在する。253溝に東側1/5を破壊されている。カマドは北東壁に設けられており、住居主軸方位はN-36°-Eである。平面形はやや台形気味の方形で遺構規模は南北3.8m，東西3.5m～復元4.0m，確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深い部分で0.15

226 A・226 B



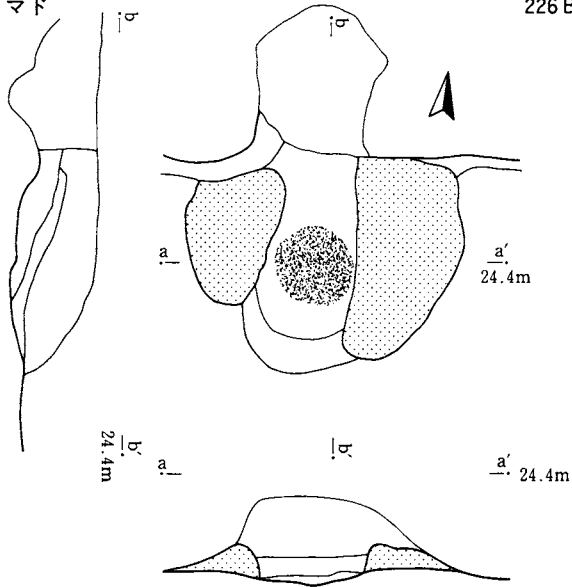
<226 A 竪穴住居土層説明>

- 1 暗褐色土：ローム粒を含む
- 2 黒褐色土：ローム塊・ローム粒を含む
- 3 褐色土：山砂・ローム塊を含む
- 4 黒褐色土：山砂・ローム塊を含む

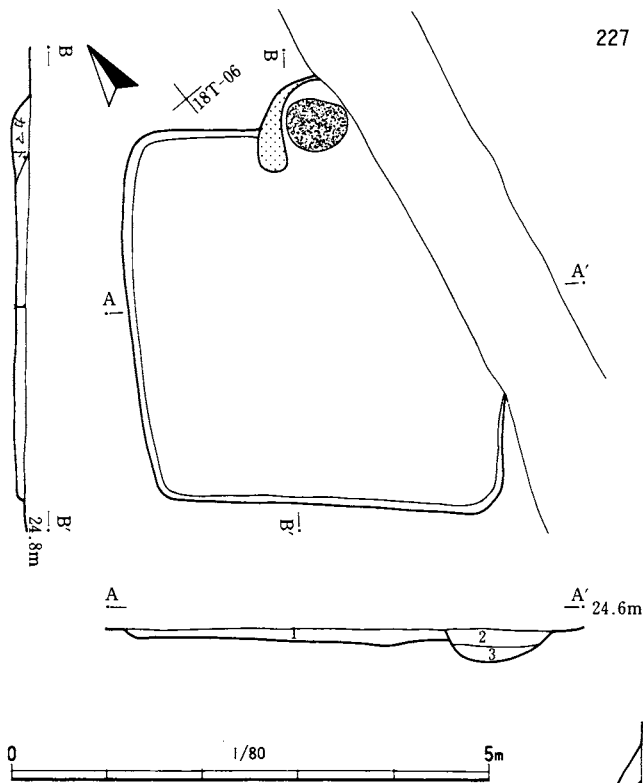
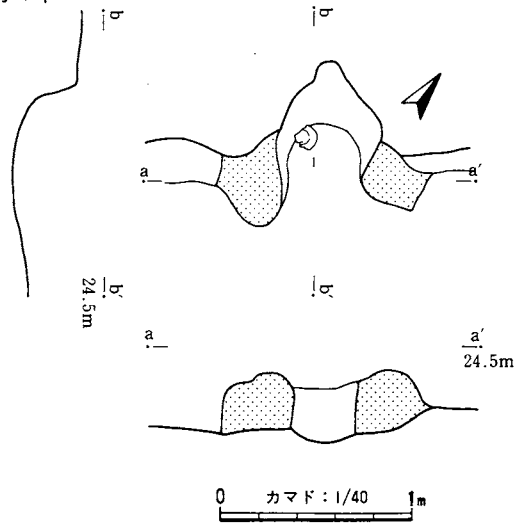


第26図 226A・226B竪穴住居

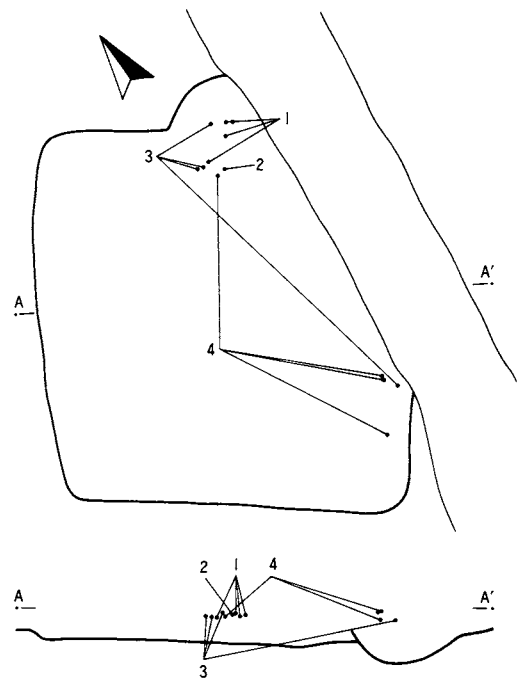
226A カマド



226B カマド



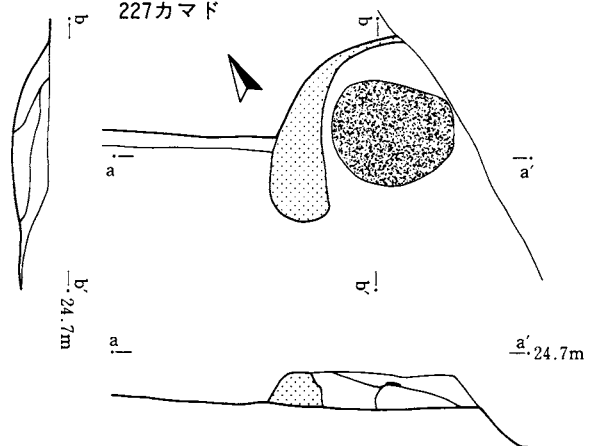
227



<227竪穴住居土層説明>

- 1 暗褐色土：ローム粒主体、山砂を含む
- 2 暗褐色土：ローム粒を含む(M002覆土)
- 3 黒褐色土：ローム粒・ローム塊を含む(M002覆土)

227カマド



第27図 226A・226Bカマド，227竪穴住居

mである。壁溝は巡らされておらず、支柱穴・床面硬化部分も確認されなかった。

カマドは西側の袖と火床部が検出された。火床は半分以上が壁外に突き出ている。

遺物出土量は少なく、カマドと南東壁際の覆土上層で若干検出されたのみである。

228竪穴住居（第28図，図版16）

南側道路予定部分東端の18W-08・09・18・19グリッドに所在する。229竪穴住居が南東側の一部を破壊していると考えられるが、遺構の南半分は自然地形の傾斜のために床面も壁も検出できなかった。カマドは北壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-7°-Wである。遺構規模は東西3.4m，南北不明，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.2mである。壁溝・柱穴・床面硬化部分のいずれも検出されていない。

カマドは壁外への掘込みがほとんどない形態のもので、両袖構築材が確認されているのみである。

遺物の出土はごくわずかで、3個体が図示できたのみである。

229竪穴住居（第28図，図版17）

南側道路予定部分東端の18W-19・29，18X-10グリッドに所在する。228竪穴住居の一部を破壊している。遺構南側半分は自然傾斜のために遺存していなかった。カマドは東壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-83°-Eである。平面形は方形と考えられ、遺構規模は東西3.5m，南北不明，確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深い部分で0.7mである。壁と床面の確認できた部分においては壁溝は全周しているが、柱穴・床面硬化部分は確認されていない。

カマドは壁外への掘込みのほとんどない形態で、中央に9の常総型甕が正立の状態を検出されている。

遺物は平面的にはほぼ全面で検出されており、出土層位は床面直上から覆土中層である。

230竪穴住居（第29図，図版17）

南側道路予定部分東端の18X-11・21グリッドに所在する。重複する遺構は存在しないが、北西隅に攪乱を受けている。遺構南東部分は自然傾斜のために遺存していなかった。カマドは北西壁の中央よりやや東寄りのところに設けられており、住居主軸方位はN-29°-Wである。平面形は正方形と考えられ、遺構規模は東西2.7m，南北不明，確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深い部分で0.4mである。壁溝・柱穴・床面硬化部分はまったく確認されていない。

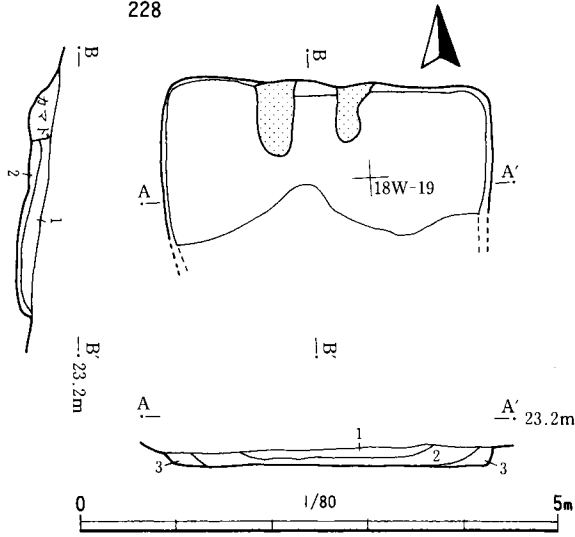
カマドは両袖構築材の山砂が確認されている程度である。

遺物ほとんど検出されておらず、図示できる資料も1点のみである。

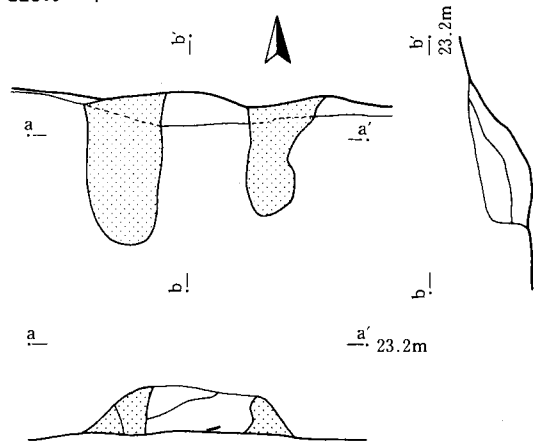
231竪穴住居（第29図）

南側道路予定部分東端の17X-83グリッドに所在し、大半の部分をM002溝によって破壊されている。遺存しているのは北東壁と北西壁の一部、それにカマド東袖である。住居主軸方位はN-50°-Wで、カマドが北西壁中央に設けられていたという前提で復元すれば、遺構規模は一辺3m前後と復元できる。確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深いところで0.6mである。遺存部分においては壁溝・柱穴・床面硬化部分のいずれも確認されなかった。検出遺物は図化資料のみである。

228



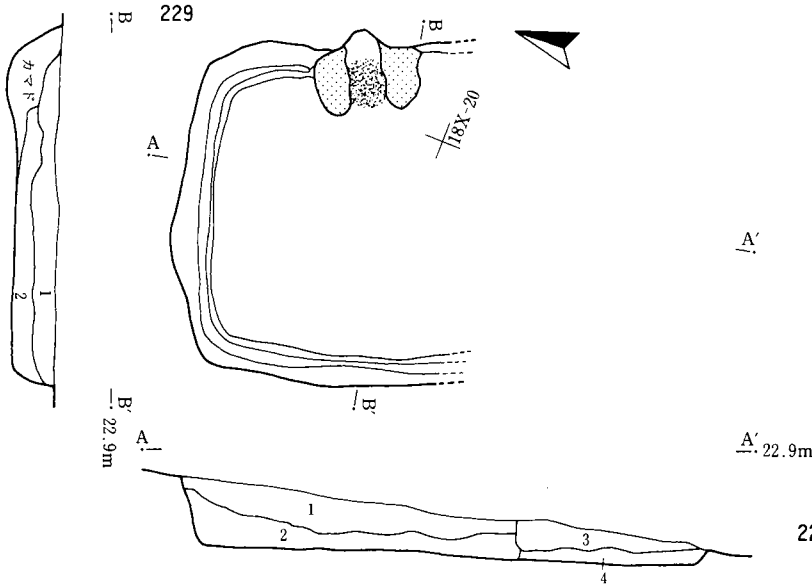
228カマド



<228竪穴住居土層説明>

- 1 褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 2 暗褐色土：ローム粒・山砂を含む
- 3 褐色土：ローム粒主体

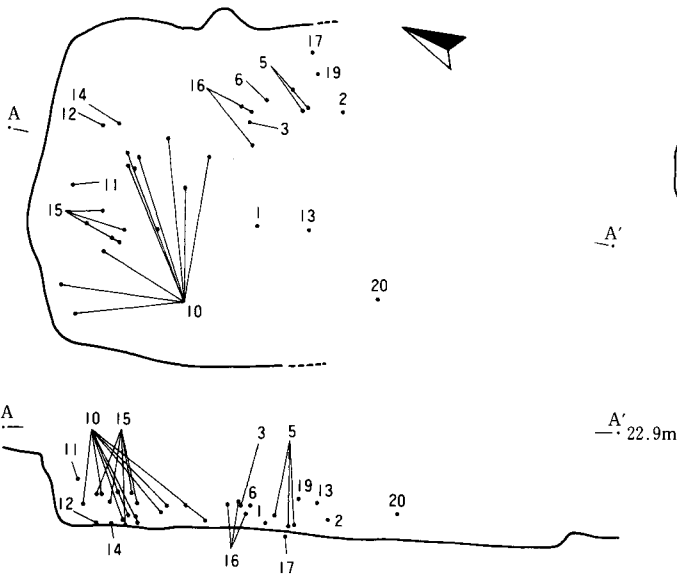
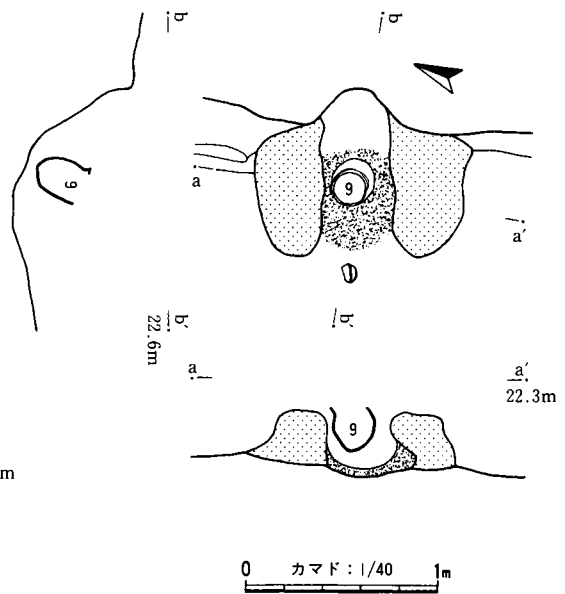
229



<229竪穴住居土層説明>

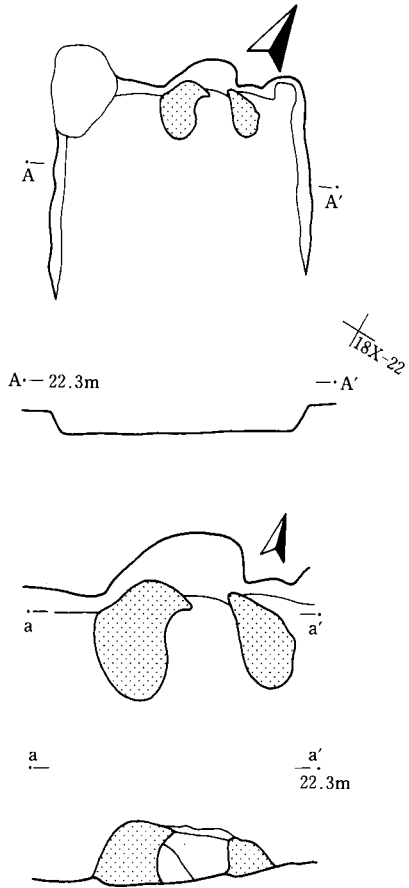
- 1 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 2 暗褐色土：ローム塊主体、ローム粒を含む
- 3 褐色土：ローム粒主体
- 4 黒褐色土：ローム粒を含む

229カマド

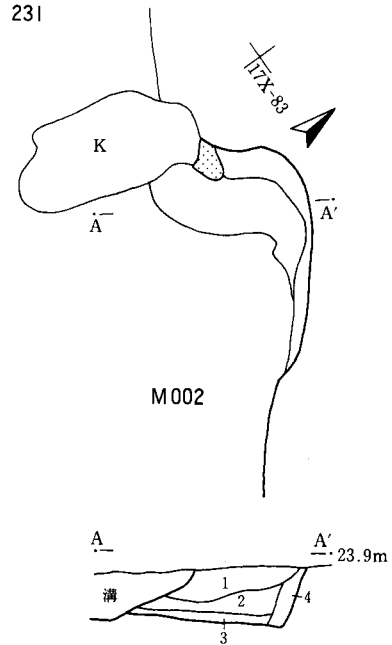


第28図 228・229竪穴住居

230



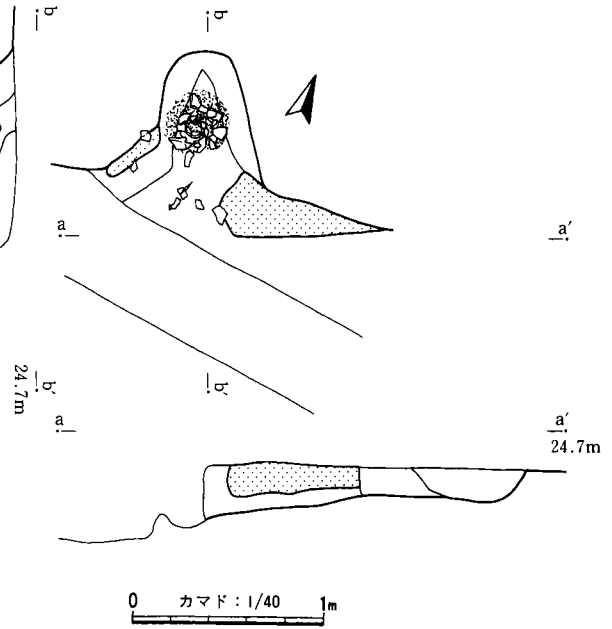
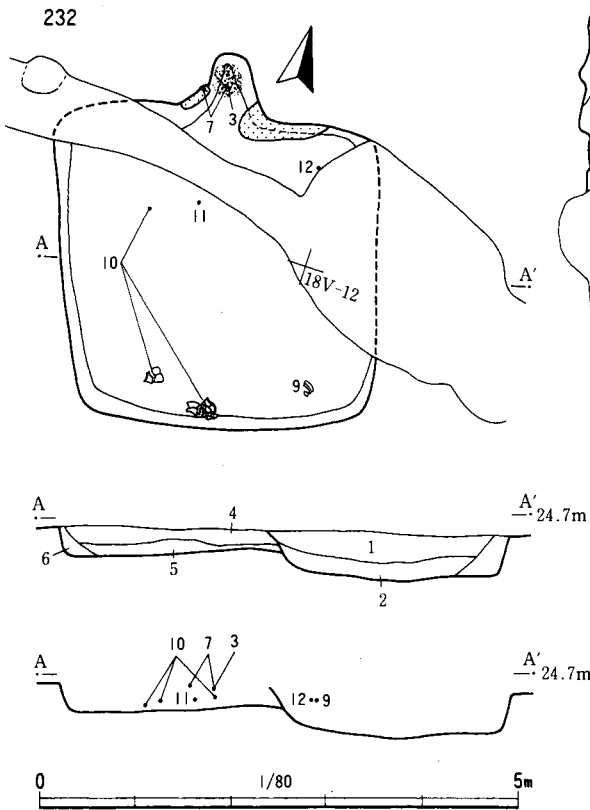
231



<231竪穴住居土層説明>

- 1 暗褐色土：山砂・ローム粒を含む
- 2 暗褐色土：ローム塊主体、ローム粒を含む
- 3 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 4 暗褐色土：ローム粒主体

232カマド



<232竪穴住居土層説明>

- 1 暗褐色土：ローム粒を含む(溝覆土)
- 2 黒褐色土：ローム粒・ローム塊を含む(溝覆土)
- 3 暗褐色土：ローム塊を含む(溝覆土)
- 4 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 5 暗褐色土：ローム粒主体、山砂を含む
- 6 褐色土：ローム粒を含む

第29図 230・231・232竪穴住居

232 竪穴住居（第29図，図版18）

南側道路予定部分東寄りの18V-01・02・11・12グリッドに所在する。遺構の中央からやや北側の部分を道路と考えられる溝状の遺構によって破壊されている。カマドは北壁中央に設けられており，住居主軸方位はN-15° -Wである。平面形はやや台形気味の方形で，南北3.3m，東西3.0m～3.5m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.3mである。壁溝・柱穴・床面硬化部分のいずれも確認されていない。

カマドは壁外に大きく突き出しており，袖構築材の山砂と火床部分が検出されている。

出土遺物は少ないが，図化資料のほとんどはカマド内，南壁際につぶれたような状態で検出されている。

233 竪穴住居（第30図）

南側道路予定部分東寄りの18T-13・14グリッドに所在する。遺構中央付近を境に北半を平成5年度に，南半を平成10年度にというように二度に分かれて調査している。住居南隅を258・257土壌によって破壊されている。カマドは北西壁中央に設けられており，住居主軸方位はN-25° -Wである。平面形はやや崩れた正方形で，南北3.2m，東西3.2m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.4mである。壁溝は北西壁のカマド以東部分を除きほぼ全周している。柱穴は全く検出されておらず，床面硬化部分は南寄りの部分に確認されている。

カマドの遺存状況はきわめて悪く，西袖構築材の一部と火床面が確認できたのみである。

遺物はほぼ全面・全層位にわたって出土しているが，図化できた資料についてのみ見ると住居西隅域に空白域が生じている。

236 竪穴住居（第30図，図版18）

南側道路予定部分東端の17X-54・55・64・65グリッドに所在する。竪穴住居の密集地域で，本遺構は237竪穴住居のカマドによって南西隅の一部を破壊されている。カマドは北壁ほぼ中央に設けられており，住居主軸方位はN-18° -Wである。平面形はほぼ正方形で，南北3.5m～3.7，東西3.5m～3.7，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.35mである。壁溝はカマド部分を除きほぼ全周している。床面には4本の主柱穴が検出されているがどれもみな径が小さく0.15m～0.25m，深さは0.4m平均である。床面硬化部分は確認されていない。

カマドの遺存状況は比較的良好である。両袖が高く残っていたほかに，火床面が明瞭に確認されている。壁外への掘り込みはごくわずかである。

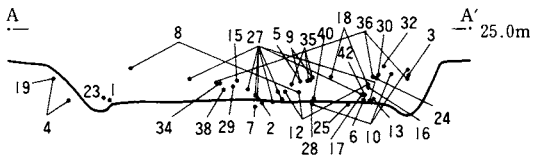
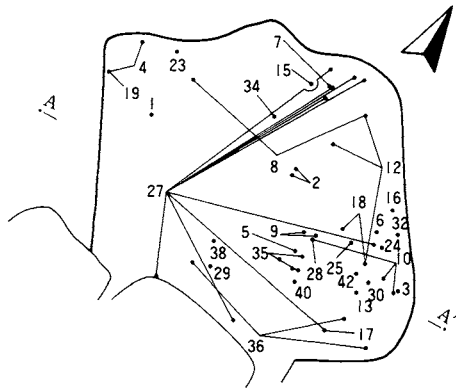
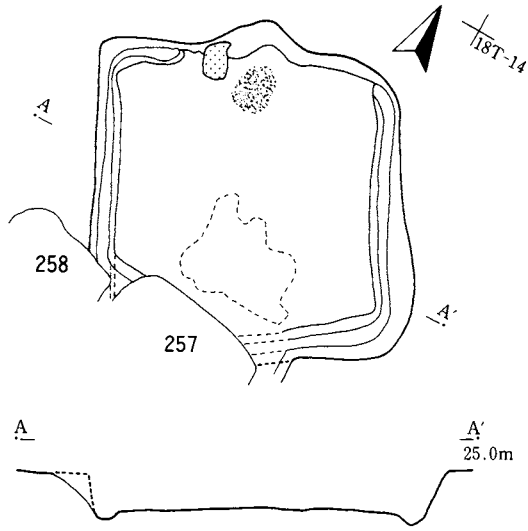
遺物はカマド西側の北壁際床面直上で検出されているが，量的には少ない。

237 竪穴住居（第31図，図版19）

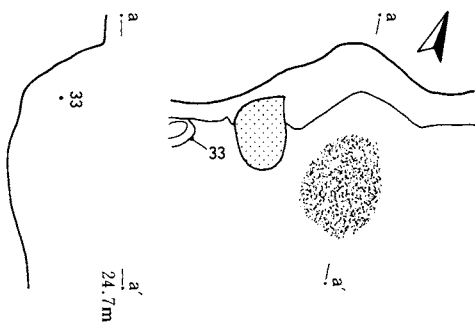
南側道路予定部分東端17X-64・65・74・75グリッドに所在する。236・240竪穴住居の一部を破壊している。カマドは北壁ほぼ中央に設けられており，住居主軸方位はN-12° -Wである。遺構平面形はやや崩れた長方形で，遺構規模は南北3.0m～3.4m，東西3.0m，確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深いところで0.5mである。壁溝はカマド部分を除き全周している。床面においては柱穴も硬化部分も確認できなかった。

カマドの遺存状態は比較的良好であった。壁溝延長線上に火床部の中心を置き，煙道を壁外に突き出

233

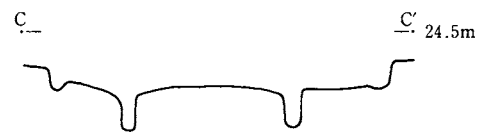
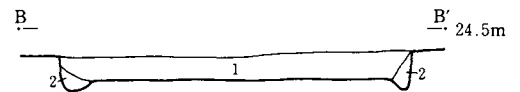
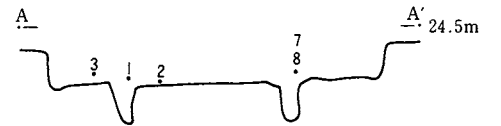
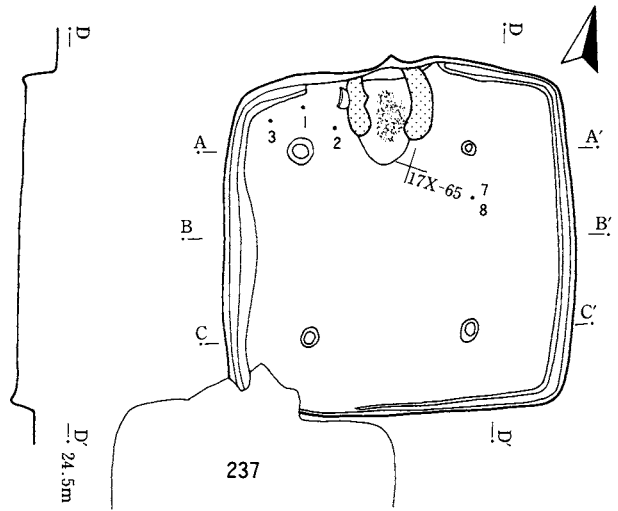


233カマド



0 カマド：1/40 1m

236

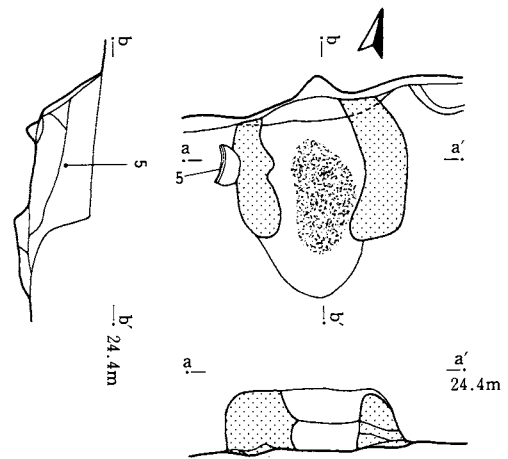


0 1/80 5m

<236竪穴住居土層説明>

- 1 褐色土：ローム塊を微量に含む
- 2 褐色土：ローム粒を含む

236カマド



第30図 233・236竪穴住居

す形態で、両袖・火床面の他に崩れた天井材も確認されている。

遺物検出量は多くはないが、カマド両脇、西壁際の床面直上で検出されている。

238A・B・C竪穴住居（第31図、図版19）

南側道路部分東端17X-65・66・75・76・77・85・86グリッドに所在する。1軒の竪穴住居番号で処理しているが、内容的にはA・B・Cの3軒の竪穴住居が複合している。239・240・241の3軒の竪穴住居と重複しており、平面図からは239・240竪穴住居を破壊し、241竪穴住居には破壊されているような記録となっているが、出土遺物の内容を見る限りにおいては重複する3軒の竪穴住居よりも本遺構の方が新しい。ただし、複合するA・B・C出土の遺物はすべて238竪穴住居出土として処理されているので、明確にはできない。240竪穴住居覆土内において検出されているカマドは、主軸の方向から238B竪穴住居に伴うカマドであると考えられる。239竪穴住居に入り込んでいるカマドは間違いなく238C竪穴住居に伴うものである。238A竪穴住居に伴うと考えられるカマドは全く検出されていないので、この複合する238A・B・Cの3軒の中では238Aが最も古く、238B・Cはその後に築かれているが、記録を見る限りにおいてはこの2軒の前後関係は不明である。それぞれの住居の遺構規模を復元すると、Aは南北4.4m、東西4.3m、Bは南北5.8m、東西4.4m、Cは南北3.7m、東西3.7mである。床面中央において四角形を結ぶ4本の支柱穴は、238B竪穴住居に伴うものであると考えられる。径は0.25m～0.4m、深さは0.7m～0.9mである。

カマドはBに伴うものに袖材の山砂が確認できた程度である。

遺物は緑釉陶器・灰釉陶器を含め相当数が検出されている。しかし、かなり複雑に絡み合った遺構の調査であるためと考えられるが、残念なことに一括資料としての取扱いを受けているものばかりである。

239竪穴住居（第32図、図版20）

南側道路予定部分東端の17X-67・77グリッドに所在する。西壁部分を238C竪穴住居によって破壊され、南東隅を攪乱によって破壊されている。カマドは北壁中央と考えられる位置に設けられており、住居主軸方位はN-15° -Wである。平面形はやや崩れた方形で、遺構規模は南北3.2m～3.4m、東西不明、確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深い部分で0.6mである。壁溝は北壁・東壁に巡らされているが、南壁においては検出されなかった。床面においては柱穴・硬化部分のいずれも確認されていない。

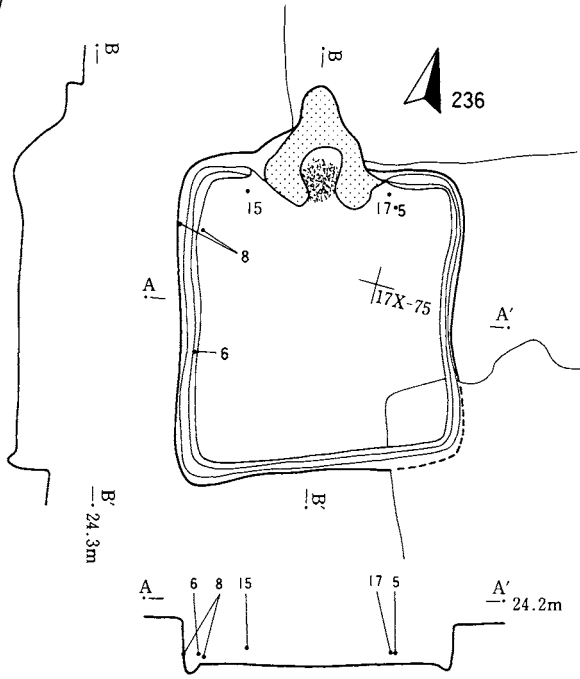
カマドは断面図中にはかかっていないが、袖付け根部分に若干のローム掘り残しによる袖芯があり、その上に山砂による本体の構築がなされていたようである。

遺物は出土量が少なく、カマド内において1の常総型土師器甕の胴部下半が検出されている。

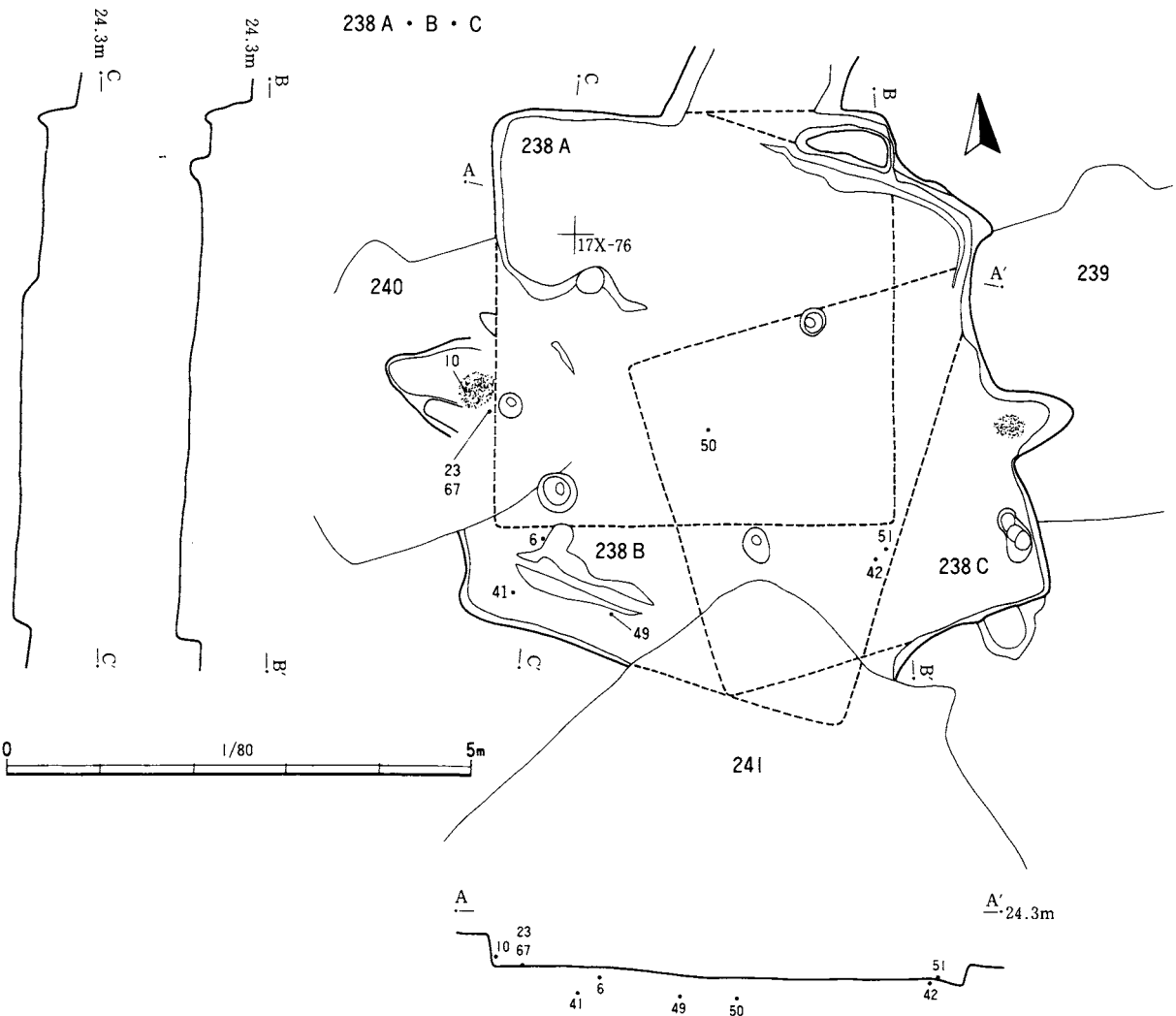
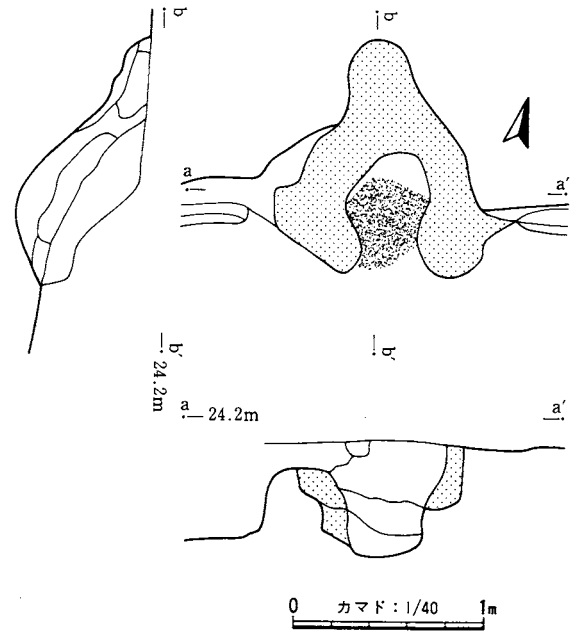
240竪穴住居（第32図、図版20・21）

南側道路予定部分東端の17X-75グリッドに所在する。240竪穴住居によって北西隅を、238A・B竪穴住居によって東壁を破壊されている。カマドは北壁ほぼ中央に設けられており、住居主軸方位はN-24° -Wである。平面形はほぼ正方形であったと復元でき、遺構規模は南北3.0m、東西3.0m、確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深い部分で0.4mである。西壁・南壁に壁溝がきれいに残っていることから考えて、カマドを除く部分にはすべて壁溝が巡らされていたものと思われる。床面には支柱穴・硬化部分のいずれも確認されなかった。

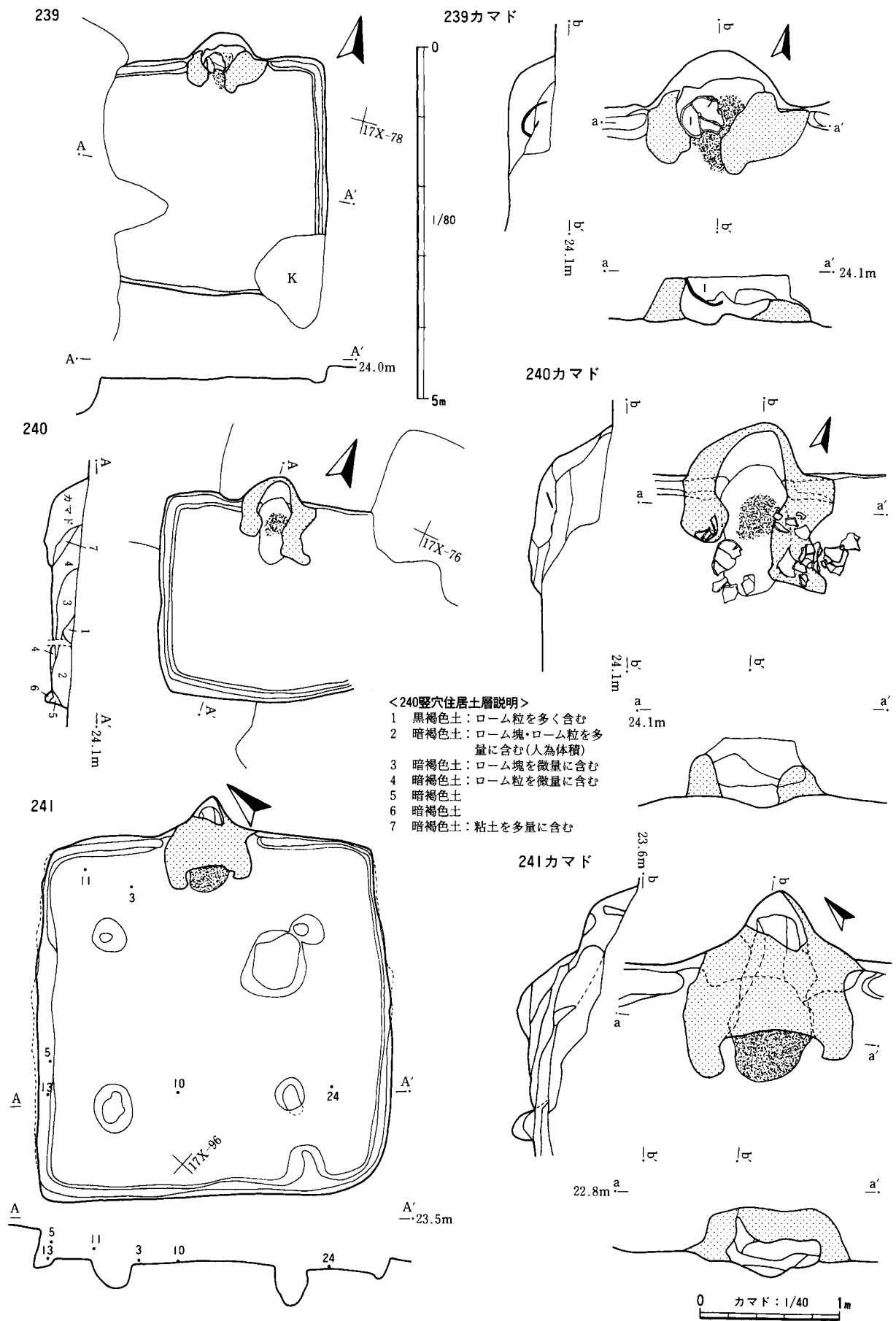
237



237カマド



第31図 237・238A・B・C竪穴住居



第32図 239・240・241竪穴住居

カマドは両袖および天井部後部の山砂が遺存し、火床面も確認できた。

出土遺物中には実測可能個体としての土師器甕が6点存在するが、その大半はカマド前面床面において検出されている。

241 竪穴住居 (第32図, 図版21)

南側道路予定部分東端の17X-76・85・86・87・95・96・97グリッドに所在する。北西隅壁・覆土上部を238B・C竪穴住居によって破壊されている。カマドは北東壁ほぼ中央に設けられており、住居主軸方位はN-48°-Eである。南東壁の線に歪んだ膨らみが見えるが平面形はほぼ正方形で、遺構規模は南北5.2m, 東西4.7m~5.0m, 確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深い部分で0.5mである。壁溝は西壁のごく一部で分かりづらくなっているが、基本的にはカマド部分を除いて全周していたものと考えられる。床面には4本の支柱穴が検出された。東隅支柱穴の西側に隣接する掘り込みは後世のものである。支柱穴の規模は径0.4m~0.7m, 深さ0.35m~0.6mである。壁溝南隅やや西寄りの部分に柱穴様掘り込みと壁溝が連結してしまったような部分があるが、深さは壁溝とほとんど変わりがなく、性格不明である。床面硬化部分は確認できなかった。

カマドは天井部が崩壊した状況で検出されたが、内部からの検出遺物はない。

遺物は壁際床面直上で大半が検出されている。

242 竪穴住居 (第33図, 図版22)

南側道路部分中央の17Q-77・78・87・88グリッドに所在する。重複する遺構はないが、壁北東隅上端を一部攪乱によって破壊されている。南西隅に細く浅い溝状遺構がつながっているが、覆土の状況から見てそれほど異なる時期のものとは考えられないが、本竪穴住居に直接関連するものとも考えられず、性格は不明である。カマドは北壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-10°-Eである。平面形はやや長方形気味で、遺構規模は南北3.7m~3.9, 東西4.2m, 確認面から床面までの掘り込みの深さは0.5m~0.6mである。壁溝は全く設けられていない。床面には4本の支柱穴と南壁際中央の出入口施設痕跡と考えられる柱穴、それに南東隅支柱穴際に2基の柱穴様掘り込みが検出されている。支柱穴の内北西隅のものは掘形上端が大きく広がり、一見貯蔵穴が絡んでいるかのような形態になってしまっているが、調査途中で大雨のため冠水し、著しく崩壊してしまった結果である。支柱穴は径0.35m~0.5m, 深さ0.4m~0.6mである。出入口施設痕跡と考えられる柱穴は短径0.4m, 長径0.6mで深さは記録がないため不明である。床面硬化範囲は図示したようになりに広い範囲に広がっている。

カマドは煙道部がわずかに壁外に突き出る形態のもので、両袖および火床面が確認されている。

遺物は面的にも層位的にもほぼ全面に散った状態で検出されているが、量的には多くない。

251 竪穴住居 (第34図, 図版24)

南側道路予定部分東寄りの18T-23・33グリッドに所在する。255・262土壌によって一部を破壊され、遺構南側1/4は調査区域外にかかっており調査されていない。遺構床面中央に見られる楕円形の掘り込みは後世のものである。カマドは北西壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-41°-Wである。平面形はほぼ方形で、遺構規模は南北3.0m, 東西2.7m, 確認面から床面までの掘り込みの深さは0.25mである。壁

溝は北東壁側と南東壁側には確認されているが、他の二辺では検出されていない。支柱穴は床面には設けられていなかったようで、北東壁側の壁溝の中に径0.2m、深さ0.1mの小さな柱穴様掘り込みが見られるだけである。床面硬化範囲は図示した範囲である。

カマドは火床部が壁の延長線より外側に突き出した部分に位置しており、両袖構築材の山砂もほとんどが壁延長線の外側で検出されている。

遺物の検出量はきわめて少ないが、大半は床面直上で検出されている。

252竪穴住居（第34図，図版22）

南側道路予定部分東寄りの18T-22グリッドに所在する。西壁側を風倒木によって破壊され、東壁やや南寄りのところは性格不明の土壌によって破壊されている。掘り込みが浅く遺存状況のかなり悪い遺構であった。カマドは東壁中央やや北寄りのところに設けられており、住居主軸方位はN-77° -Eである。遺構平面形は長方形で、遺構規模は東西2.65m、南北2.9m、確認面から床面までの掘り込みの深さは0.05m平均である。壁溝は北東隅と北西隅でのみ確認されている。柱穴と考えられるものは床面に5本ほど確認されている。径0.2m～0.5m、深さ0.07m～0.2mとかなり貧弱なものばかりで、いずれも支柱穴とはしづらいものばかりである。床面硬化範囲は図中破線で示した範囲である。

カマドの遺存状況はきわめて不良で、痕跡に近いものである。

遺物はわずかに検出されたのみである。

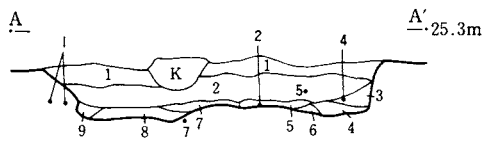
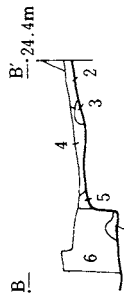
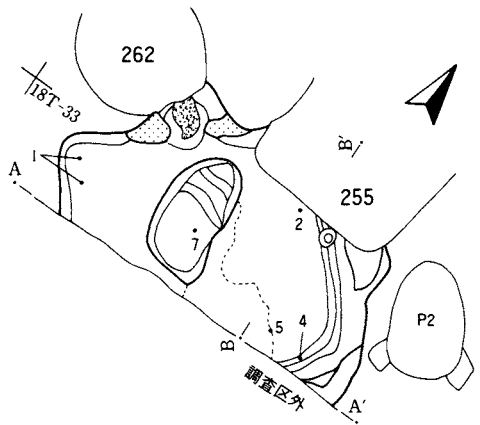
261竪穴住居（第34図，図版22）

南側道路予定部分東寄りの18V-22・23・32グリッドに所在する。遺構南側1/5は調査区域外となっているために調査されていない。また、カマド煙道部分は後世溝状の掘り込みによって、東壁中央は後世のピット群によって破壊されている。カマドは北壁ほぼ中央に設けられており、住居主軸方位はN-18° -Wである。平面形は方形であることは確実であるが、正方形か長方形かは不明である。遺構規模は東西2.5m、南北不明、確認面から床面までの掘り込みの深さは0.35mである。本遺構の最大の特徴は北壁カマド両脇の壁面に貼り付けられている粘性の強い砂質土である。カマド袖と解釈して調査は行われているが、袖とするにはあまりにも横に伸びすぎている。壁溝はカマド部分と北壁東半とを除き巡らされている。床面には3本の柱穴様掘り込みが見られるが、このうち確実に本住居に伴うと考えられるのは南壁側調査区境中央に設けられているもののみである。これはカマド対面にあることから出入口施設痕跡の柱穴であろうと考えられる。径0.3m、深さ0.13mである。床面硬化範囲は図中破線で示した範囲内である。

カマドはほとんど痕跡のみで、壁線上に見える焼土が火床面痕跡と考えられる。

遺物は出土量が少なく、平面的にはほぼ全体に散っているが、出土層位は覆土中層に偏っている。

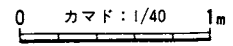
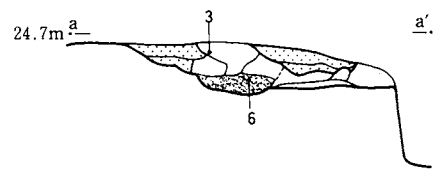
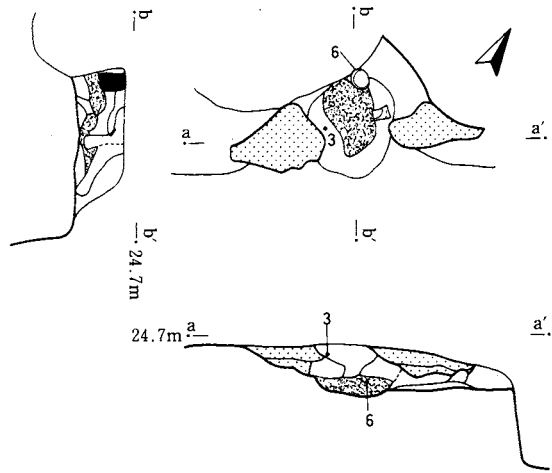
251



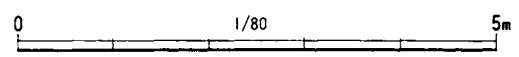
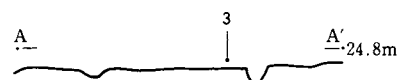
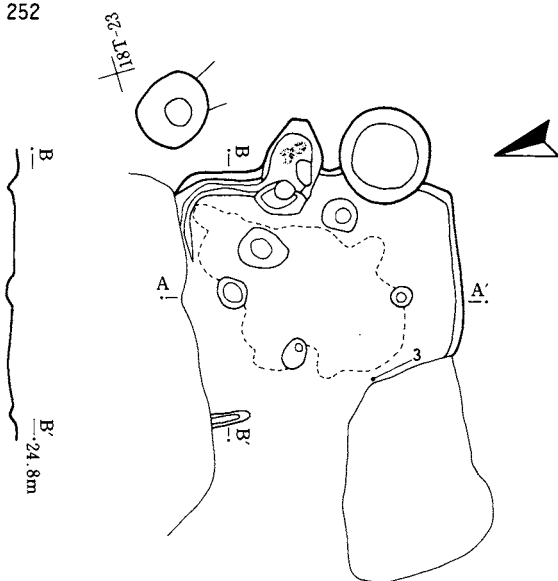
<251竪穴住居土層説明>

- 1 暗褐色土：ローム粒を微量に含む
- 2 暗褐色土：ローム粒・焼土粒・炭化物粒を微量に含む
- 3 暗褐色土：焼土粒・ローム粒・山砂を微量に含む
- 4 暗褐色土：ローム粒を微量に含む
- 5 暗褐色土：硬質，ローム粒・ローム塊・炭化物粒・山砂を含む
- 6 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 7 暗褐色土：ローム粒・ローム塊・炭化物を含む
- 8 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を微量に含む
- 9 褐色土：混和物なし

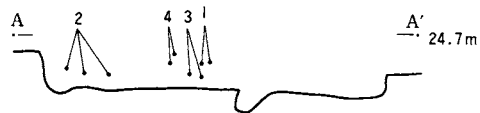
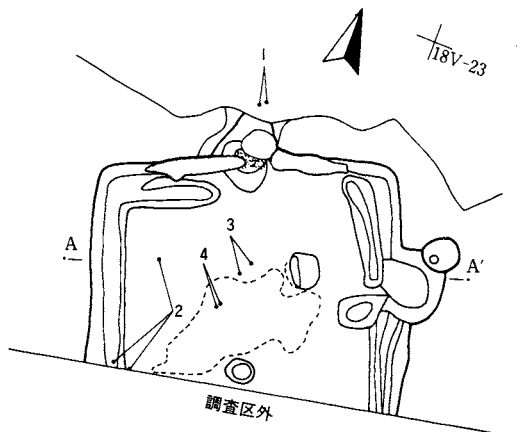
251カマド



252



261



第34図 251・252・261竪穴住居

3 中世の遺構

中世と考えられる遺構群のうち、伴出遺物によって確実に中世と断定しているものは本遺跡においてもわずかである。しかし、白井谷奥遺跡も含め、遺構形態等から判断して中世と考えて問題ないと思われる遺構群の集中する地点が、南側道路予定部分には点在している。以下は遺構番号が順不同になってしまうが、西側から東側に向かって説明する。

243土壙（第35図，図版23）

南側道路予定部分17R-60・61・70・71グリッドに所在する。245溝によって一部破壊されている。遺構北半は調査区域外のため調査できなかった。検出部分で見える限りにおいては平面形は隅丸方形であった可能性が高い。遺構規模は東西5.6m前後で、確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは1.4mである。遺構底面はほぼ平坦で、壁面はやや傾斜をもって起ち上がっている。土層断面観察によれば、大半の覆土土層の中にはローム粒・ローム塊が含まれており、人為堆積であることが読みとれる。覆土上層の平面図中に図示した部分には、焼土の分布が確認された。遺構底面および壁面には柱穴等の掘り込みは一切検出されなかった。

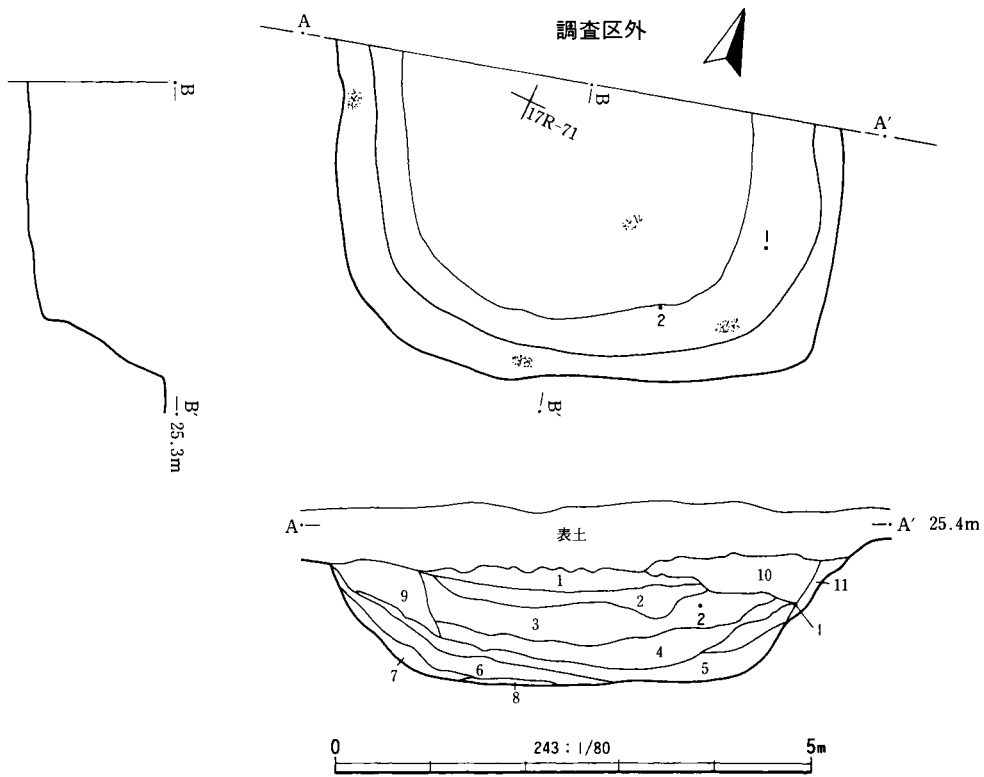
遺物は覆土上層でごくわずかに検出されたのみである。図化できたものは須恵器杯、土製紡錘車が各1点のみである。これだけを見ると、本遺構を中世と断定することはできないが、周辺に中世の遺構が散在することと本遺構の形態から判断すれば、中世の方形竪穴遺構と考えるのが最も妥当であろうと思われる。

234土壙（第35図，図版23）

南側道路予定部分やや東寄りの18T-00・01・10・11グリッドに所在する。調査段階においては2基に対して1遺構番号を付して処理しているが、明らかに時期の異なる土壙の複合である。本体となるのは南側のやや大型のものの方で、こちらが古く、北側の小型の土壙が新しい。南側土壙の平面形はやや楕円に近い長方形で、上端長軸1.75m、短軸1.1m、下端長軸1.5m、短軸1.0m、確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.4mである。底面中央には内耳を持つ深めの鑄造鉄鍋が倒位で置かれており、その北西側には全面に鞘及び柄の木質の付着する小刀が置かれていた。鉄鍋の形態から中世のものであることは確実である。倒位の鉄鍋と、鞘に納められた小刀が伴出していることから見て、墓壙でまちがいない。

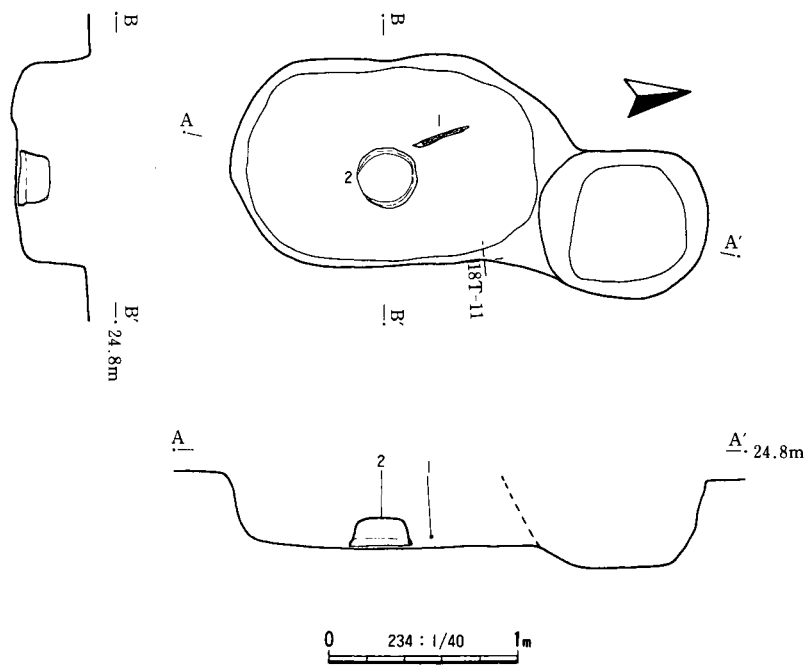
254土壙（第36図，図版23）

南側道路予定部分やや東寄りの18T-26・36グリッドに所在する。253・260溝に挟まれた部分に259・263土壙と重複・密集して検出されている。土層断面観察によると269土壙が253溝に一部を切られているのが確認できる。このことから、この区域の土壙群は253溝より古いと想定しても良いかと考えられる。ただし、253・254・260土壙の前後関係は不明である。254土壙は東西に3基の土壙が入り組んだ形態となっているものを一遺構として処理している。便宜的に最も東側のものをA、中央のものをB、西側のものをCと呼称する。土層断面観察ではCが最も新しいことがわかっているだけである。平面形はAが隅丸正方形、Bは不明、Cは長方形である。遺構規模はAが南北1.5m、東西1.45m、確認面から底面までの掘り込みの深さ0.4m、Bが南北1.5m、東西不明、深さ0.35m、Cが南北1.9m、東西1.5m、深さ0.35mである。覆土中には全体にローム塊・ローム粒の混入が見られ、人為堆積である可能性が高い。



<243土壌土層説明>

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1 褐色土：ローム塊・ローム粒主体 | 6 暗褐色土：ローム粒を含む |
| 2 暗灰褐色土：ローム粒を含む | 7 黒褐色土：ローム粒・ローム塊を含む |
| 3 黒褐色土：ローム粒を含む | 8 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む |
| 4 暗褐色土：ローム粒を含む | 9 黒褐色土：ローム塊・灰褐色土を含む |
| 5 暗褐色土：ローム塊・ローム粒を含む | 10 暗褐色土：ローム粒を含む |
| | 11 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む |



第35図 243・234土壌

259土壙（第36図，図版23）

254土壙の北側に隣接している。253溝によって西端を破壊されている。263土壙と一部重複しているが、前後関係は不明である。本土壙も254土壙同様1基の土壙として処理しているが、実際は2基の土壙の複合体と考えられる。東側をA，西側をBとすると，平面形はAがほぼ正方形，Bが長方形であったと考えられる。Aは南北1.2m，東西不明，確認面から底面までの掘り込みの深さ0.25m，Bは南北1.6m，東西不明，深さ0.25mである。

263土壙（第36図，図版23）

254・259土壙，253溝のすべてと重複する土壙である。平面形は長方形で，遺構規模は南北0.7m，東西不明，確認面から底面までの掘り込みの深さは0.45mである。

255土壙（第36図，図版24）

南側道路予定部分東寄りの18T-23グリッドに所在する。233・251竪穴住居によって南北を挟まれた区域に本土壙のほかに256・257・258・262土壙が密集している。本土壙は256・257土壙と重複しているが，それぞれの前後関係は不明である。平面形は長方形で，遺構規模は南北2.35m，東西1.7m，確認面から底面までの掘り込みの深さは0.7mである。

256土壙（第36図，図版24）

255・257土壙をつなぐような形で一部分が検出されているのみで，全容の復元はまったく不可能な遺構である。掘り込みの深さは0.55mである。

257土壙（第36図，図版24）

255・256土壙の北側に所在する。両土壙と一部重複しているが，前後関係は不明である。平面形は長方形で，遺構規模は南北1.4m，東西1.7m，確認面から底面までの掘り込みの深さは0.6mである。

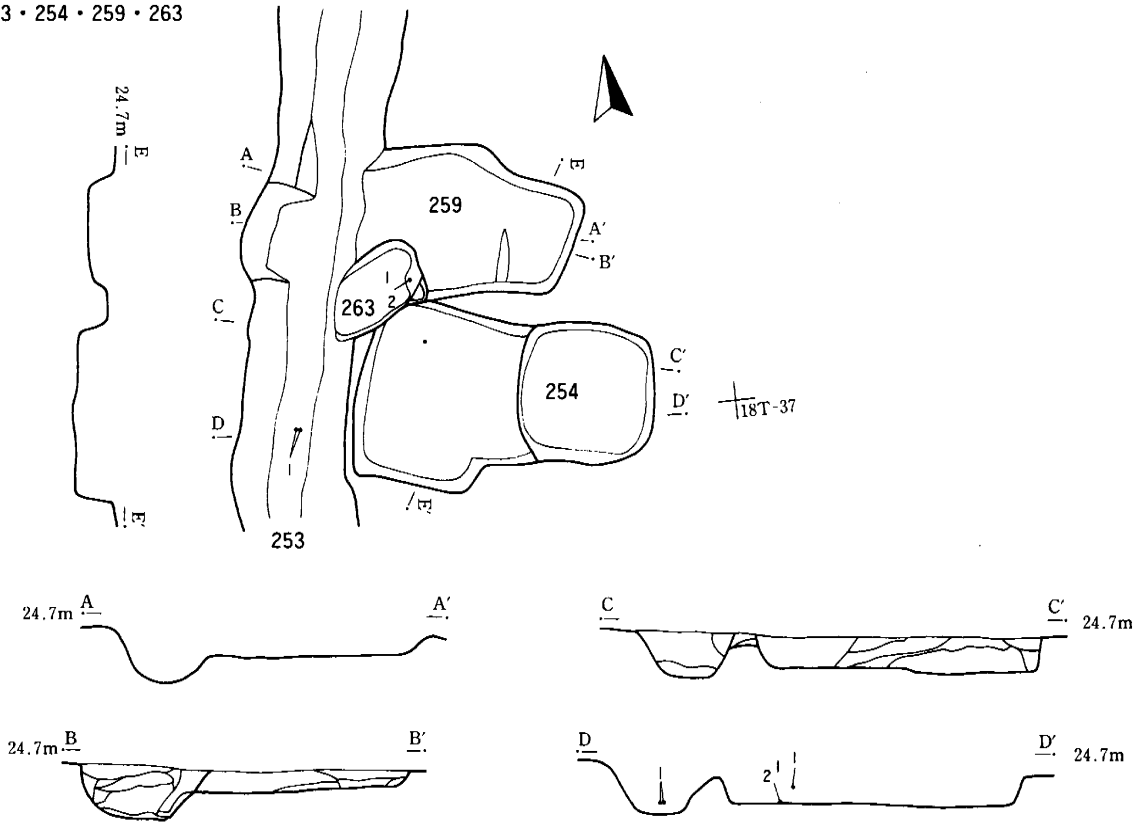
258土壙（第36図，図版24）

255・256・257・262土壙と近接しているが，これらの遺構との重複関係はなく，北側の233竪穴住居の一部を破壊している。平面形は長方形で，長軸はほぼ真北を向いている。遺構規模は南北2.3m，東西1.3m，確認面から底面までの掘り込みの深さは0.5mである。覆土中には多くのローム粒・ローム塊が混入していることから考えて，人為堆積としてまちがいないと思われる。

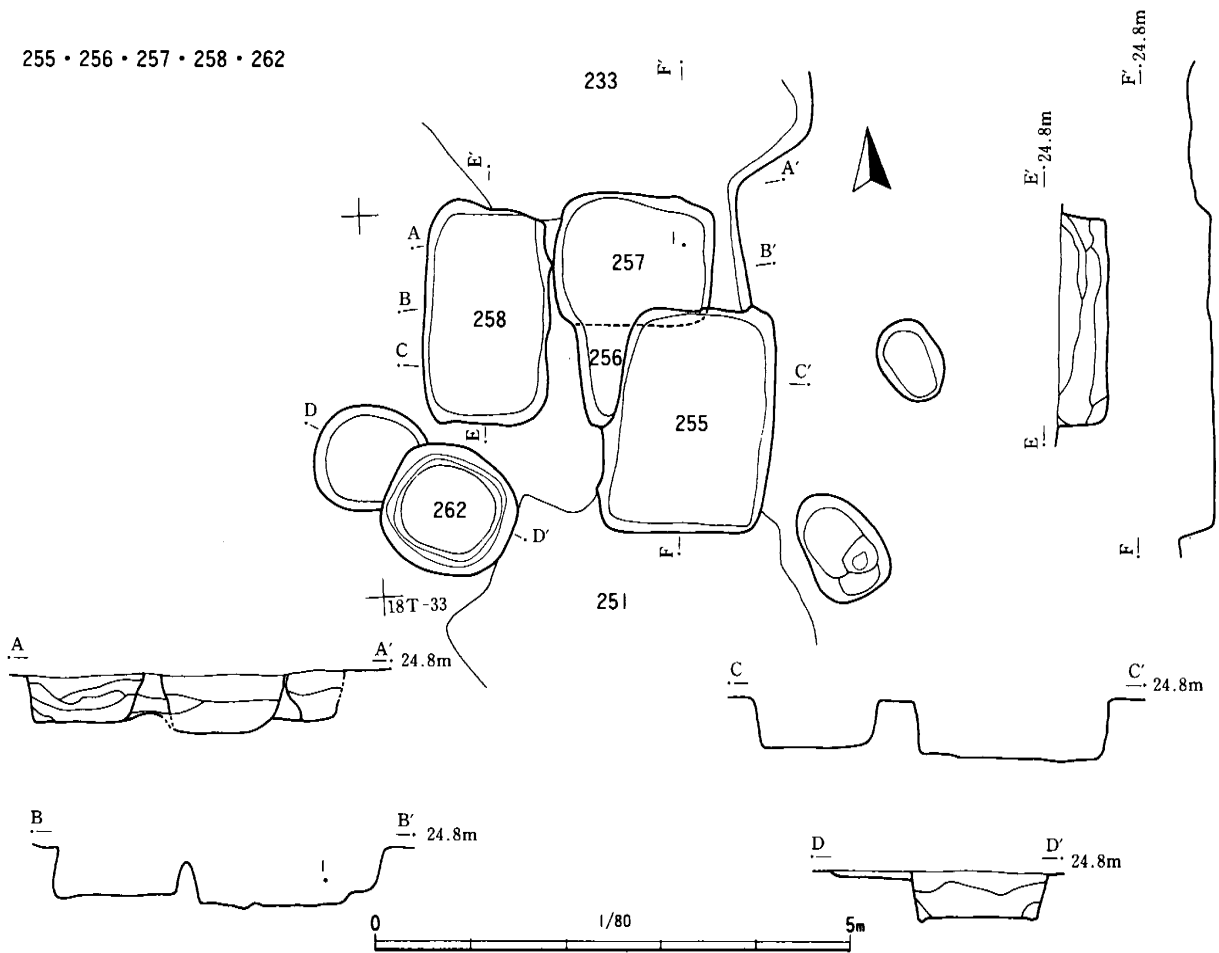
262土壙（第36図，図版24）

258土壙と隣接し，251竪穴住居の一部を破壊している。平面円形の土壙2基の複合したものに対して262土壙と呼称しているので，東側のものを262A，西側のものを262Bと仮称する。262Aは上端径1.35m，確認面から底面までの掘り込みの深さ0.5mで，住居の壁溝に類似したものが底面周囲に巡らされている。262Bは上端径1.1m，深さ0.1mという極端に浅い遺構である。

253 · 254 · 259 · 263

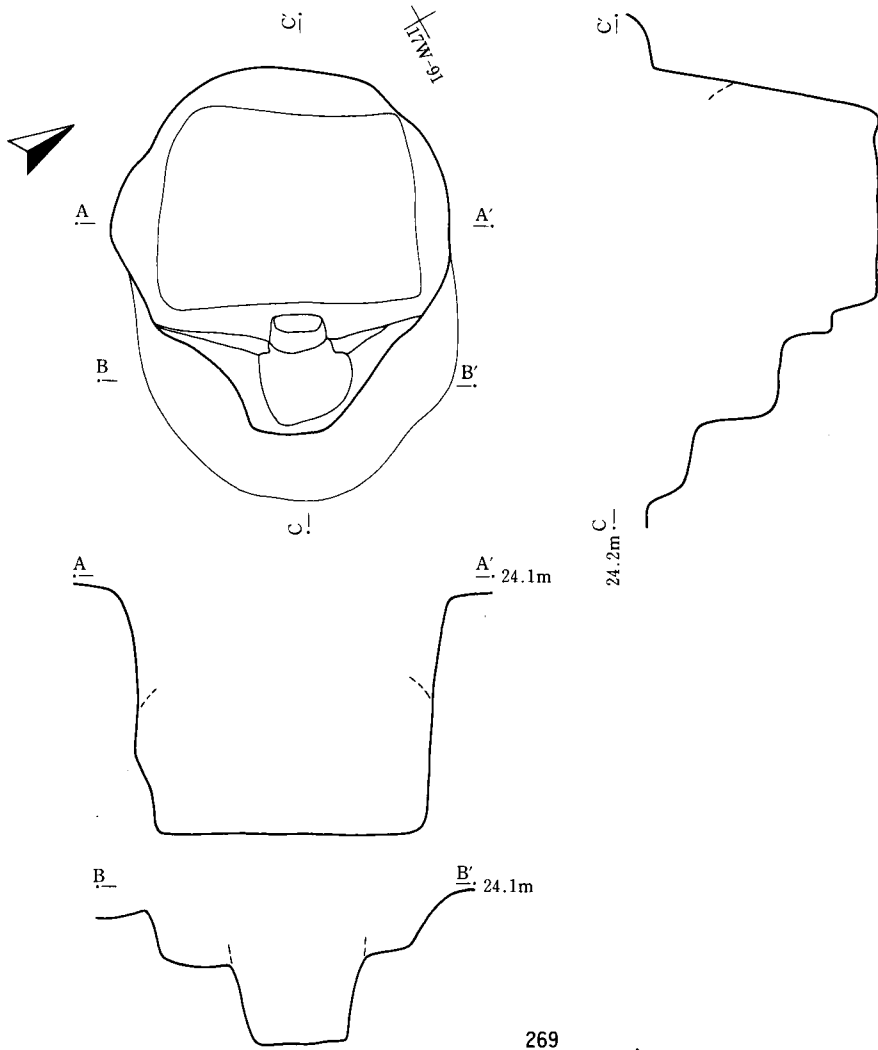


255 · 256 · 257 · 258 · 262

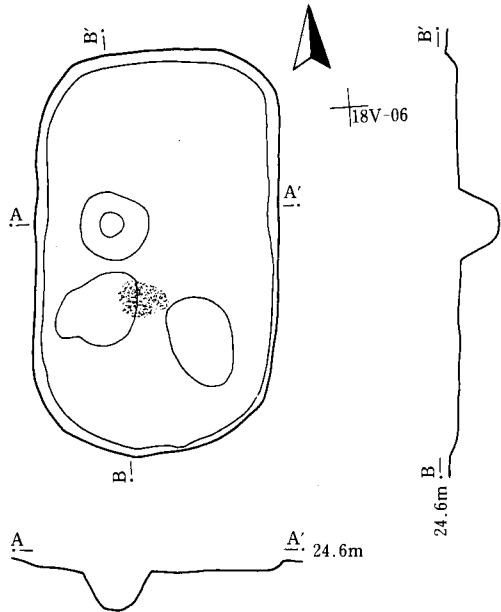


第36图 253溝, 254~259 · 262 · 263土坑

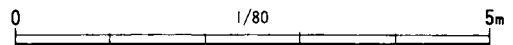
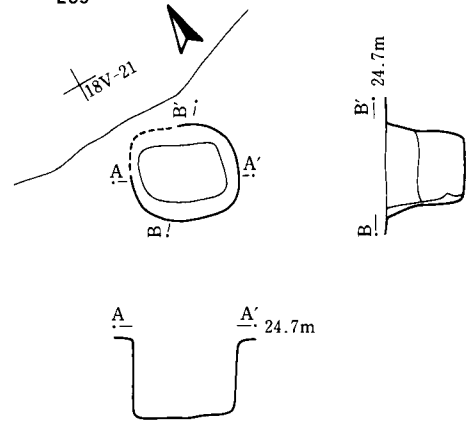
235



223



269



第37图 235地下式墳，223・269土墳

235地下式墳（第37図，図版24・25）

南側道路予定部分東端寄りの17W-90・91グリッドに所在する。211竪穴住居と一部重複し，同竪穴住居の南東部を破壊している。北西側に台形の土壙本体を持ち，南東側に出入口施設と考えられる竪坑＝階段状施設が連結している。遺構主軸方位はN-72° -Wである。土壙本体の天井部は崩落しており，A-A'，C-C'エレベーション図中に破線で示した部分が天井部傾斜変換復元線である。土壙本体の規模は底面奥行き1.9m～2.2m，横幅2.1m～2.8m，確認面から底面までの深さ2.4m，天井傾斜変換線から底面までの深さ1.5mである。出入口施設はやや大きめのテラス状部分と中段の小さな段状部分とからなっている。テラス状部分下端面は奥行き0.7m，横幅1.0m，確認面からの掘込みの深さ1.3m～1.4m，段状部分下端面は奥行き0.2m，横幅0.5m，テラス状部分との段差0.5m，土壙底面との段差0.5mである。

223土壙（第37図，図版25）

南側道路予定部分東寄りの17V-95，18V-05グリッドに所在する。重複する遺構は存在しないが，255～258中世土壙群が南東にわずかに離れたところに存在する。平面形は隅丸長方形で，長軸方位はN-4° -Eである。遺構規模は南北4.2m，東西2.6m，確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.1mである。遺構底面には中央やや南寄りのところに焼土散布ブロックと，中央やや西寄りのところに柱穴が検出されている。柱穴は径0.7m，深さ0.4mである。性格想定はかなり難しい。

269土壙（第37図，図版25）

南側道路予定部分東寄りの18V-21グリッドに所在する。小型長方形の土壙で，遺構規模は長軸1.1m，短軸0.9m，遺構底面までの深さは0.8mである。覆土下層にローム粒・塊が多く見られる。

4 溝・道路状遺構

247道路状遺構（第38図）

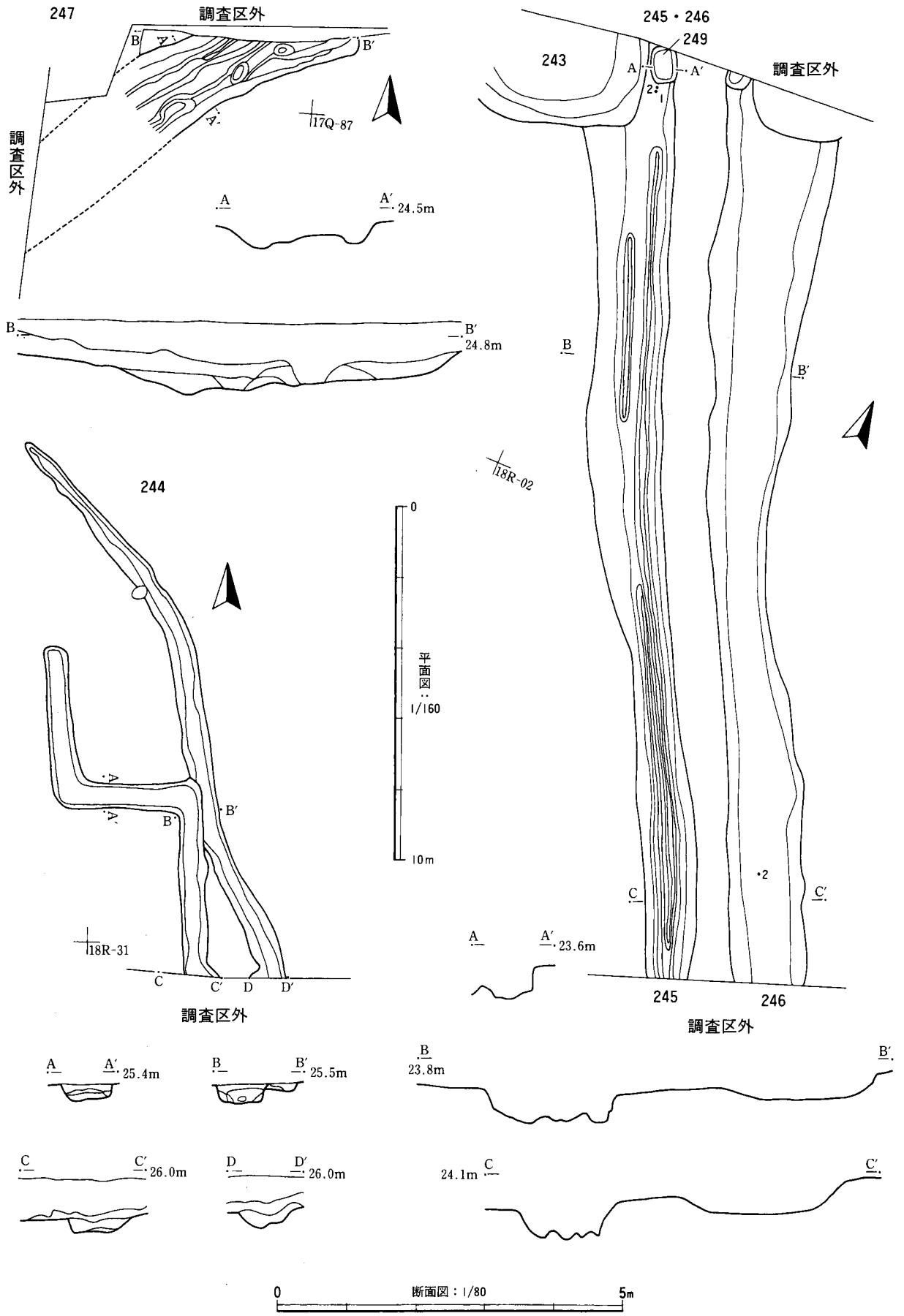
南側道路予定部分の白井谷奥遺跡に接する部分に所在し，白井谷奥遺跡の020道路状遺構の延長である可能性が高い。直線部分での遺構走行方位はN-70° -Eである。遺構底面には2条の轍痕跡が平行に走っている。遺構上端幅は1.8m～2.0m，確認面から轍下端面までの掘り込みの深さは0.35mである。

244溝状遺構（第38図，図版26）

南側道路予定部分の18R大グリッド北西部に所在する。南北にやや円弧を描きながら走行する東側溝状遺構と，ほぼ南北に走行し，途中直角に二度ほど大きく屈曲する西側の溝の双方に対して本遺構番号が付与されている。ここでは便宜的に西側のものを244A，東側のものを244Bとする。土層断面B-B'を見ればわかるように244Aの方が掘込みが深く，244Bを切って築かれている。

244Aの長さは北から屈曲部位までが4.0m，屈曲部位が4.2m，屈曲部位から南端の調査区域境界までが5.5mである。断面形態は長方形で，壁面立ち上がり角度は直角に近い。上端幅は0.6m～0.8m，確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.1m～0.2mで，平均的な深さは0.2m前後である。

244Bは延長17m，上端幅0.3m～0.8m，深さ0.05m～0.1mのかなり掘り込みの浅い遺構である。



第38図 247・245・246道路，244溝状遺構

245道路状遺構（第38図，図版26）

17R・18R大グリッドを大きく貫いている道路状遺構で、246溝状遺構と並行している。遺構走行方位はN-20°-Wである。本遺構は調査区域外南側畑地の根切り溝の延長線上に延びており、畑地区画として機能していた可能性も考えられる。調査区北端において243土壌と一部重複しており、同土壌を一部破壊している。北端においては249土壌とも重複しているが、その前後関係は不明である。246溝状遺構と完全に並行していることから、同時に機能していたか、または一方を廃絶した後に他方に機能を移行した可能性もある。しかし、245道路状遺構は底面に轍状のくぼみが2条走っているのに対し、246溝状遺構は遺構底面がほぼ平坦である。調査部分での延長距離は26.4m、遺構上端幅は1.4m～2.7m、遺構底面轍状部分幅は0.3m～0.4m、遺構確認面から轍部分下端面までの掘り込みの深さは0.6m～0.7mである。

246溝状遺構（第38図，図版26）

245道路状遺構の東側に並行して走っている遺構である。調査区域内での延長距離・走行方位は245道路状遺構と全く同じである。遺構上端幅は1.6m～3.2m、下端幅は0.8m～2.2m、確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.4m～0.5mである。245道路状遺構と比較すると、遺構底面が平坦で、確認面から底面までの掘り込みの深さが平均0.2mほど浅い。

266溝状遺構（第39図）

17S・18S大グリッドを南北に走る溝状遺構である。先の245・246同様267溝状遺構が西側に並行して走っている。直線部分での走行方位はN-3°-Eであるが、全体には北に行くに従って東側に反る弱い円弧を描いて走行している。南側は調査区域外へとつながっている。遺構上端幅は0.7m～0.9m、下端幅は0.4m平均、確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.4m平均である。

267溝状遺構（第39図）

17S・18S大グリッドを南北に走る溝状遺構である。先の245・246同様266溝状遺構が東側に並行して走っている。直線部分での走行方位はN-3°-Eであるが、全体には北に行くに従って東側に反る弱い円弧を描いて走行している。遺構上端幅は0.8m～1.0m、下端幅は0.2m～0.3m、遺構底面までの深さは0.1m～0.15mである。遺構確認面よりかなり浮いた状態で、図示したように硬化部分が検出されている。

M002溝状遺構（第39図，図版26）

「調査報告第358集」においても報告されているとおり、主要部分を「コの字」状に取囲むように走っている溝である。17X-83グリッドにおいて、231竪穴住居を大きく破壊している。調査区東端においては東側傾斜面肩部まで検出されているが、この先は調査区域外であり、さらに直線的に続くものなのかどうか判別不能である。遺構上端幅は3.4m～4.2m、確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは1.1m～1.5mで、かなりしっかりした掘り込みである。覆土各層ともにローム粒・塊が含まれており、人為的に埋め戻されている可能性が高い。溝立ち上がり面にはいくつかの大小の土壌様、柱穴様掘り込みが見られるが、性格は不明である。

5 その他の遺構

192陥穴（第40図，図版27）

東側道路予定部分北寄りの11X-41グリッドに所在する。191竪穴住居によって一部破壊されている。平面楕円形で、長軸方位はN-79°-Wである。遺構規模は上端長軸2.2m，短軸1.4m，下端長軸1.3m，短軸0.3m，確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは3.0mである。

177土壙（第40図，図版27）

東側道路予定部分南寄りの16W-37・47グリッドに所在する。重複する遺構はない。性格不明土壙である。遺構規模は東西1.6m～2.4m，南北2.5m～2.6m，確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.3mである。覆土上層に焼土を少量含む他はローム粒・ローム塊を含み，人為的埋め戻しと考えられる。

194土壙（第40図，図版27）

東側道路予定部分南端の17W-17・18グリッドに所在する。重複する遺構は存在しない。平面形はやや隅丸気味の方形で，遺構規模は南北1.75m，東西1.5m，遺構底面までの掘り込みの深さは0.55mである。

248土壙（第40図）

南側道路予定部分18R-01・02・11・12グリッドに所在する。244溝状遺構と245道路状遺構に挟まれている。平面楕円形で，長軸1.95m，短軸1.6m，確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.35mである。遺構覆土はどの層にもローム粒・ローム塊を含み，人為堆積と考えられる。

265土壙（第40図，図版22）

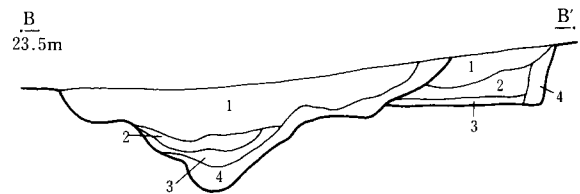
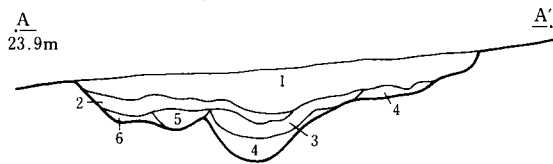
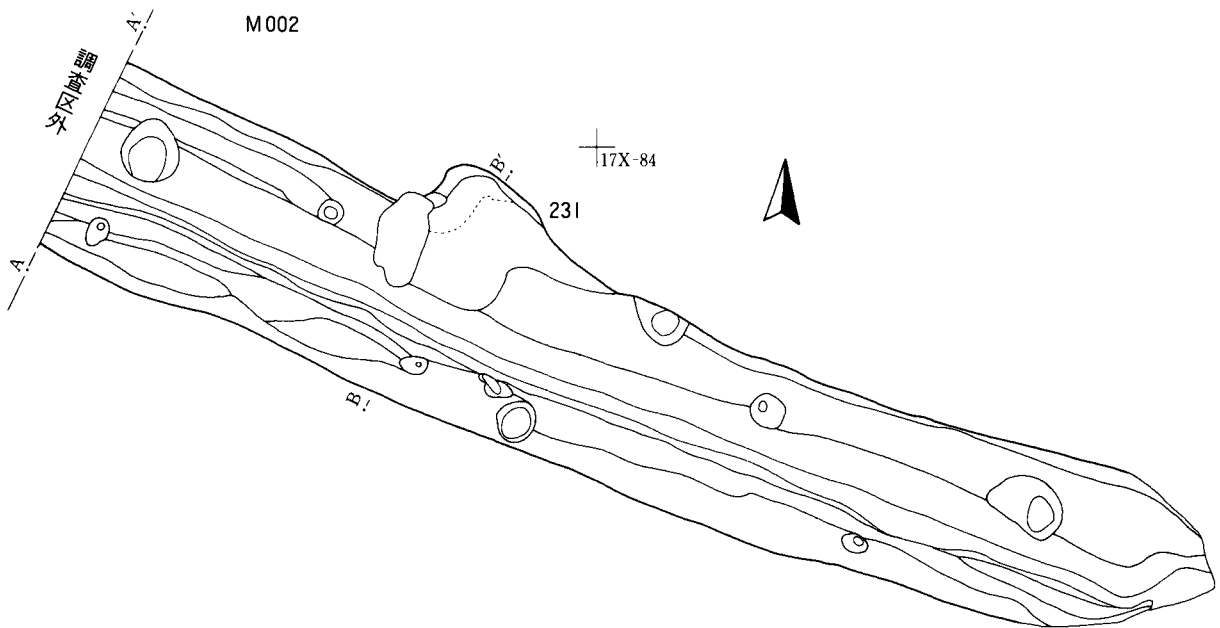
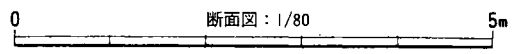
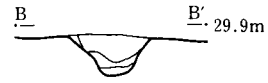
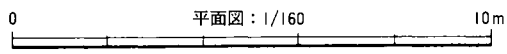
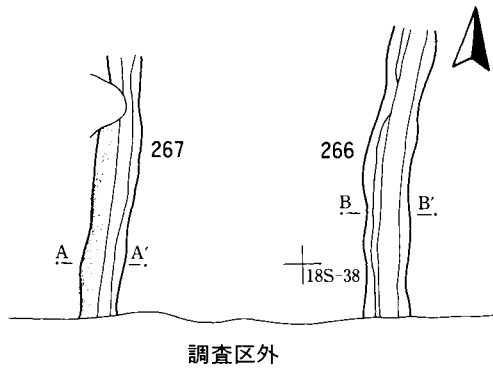
南側道路予定部分18T-11・21グリッドに所在する。長方形炭窯である可能性が高い。遺構規模は長軸1.5m，短軸1.2m，掘り込みの深さは0.15mである。

17Q-86グリッドピット群（第40図）

南側道路予定部分17Q-86グリッドに所在する。P1を要とするとP2・P3は丁度直角に配置されているが，南西隅のものは外れる。P1～P3はほぼ円形で，径0.7m～1.0m，深さは0.15m～0.3mである。

212炭窯（第40図）

南側道路予定部分17S-64・65・73・74・75グリッドに所在する。近世以降の炭窯と考えられる。円形の焚き口部と逆長台形の窯体からなっている。煙道も明瞭に遺存している。



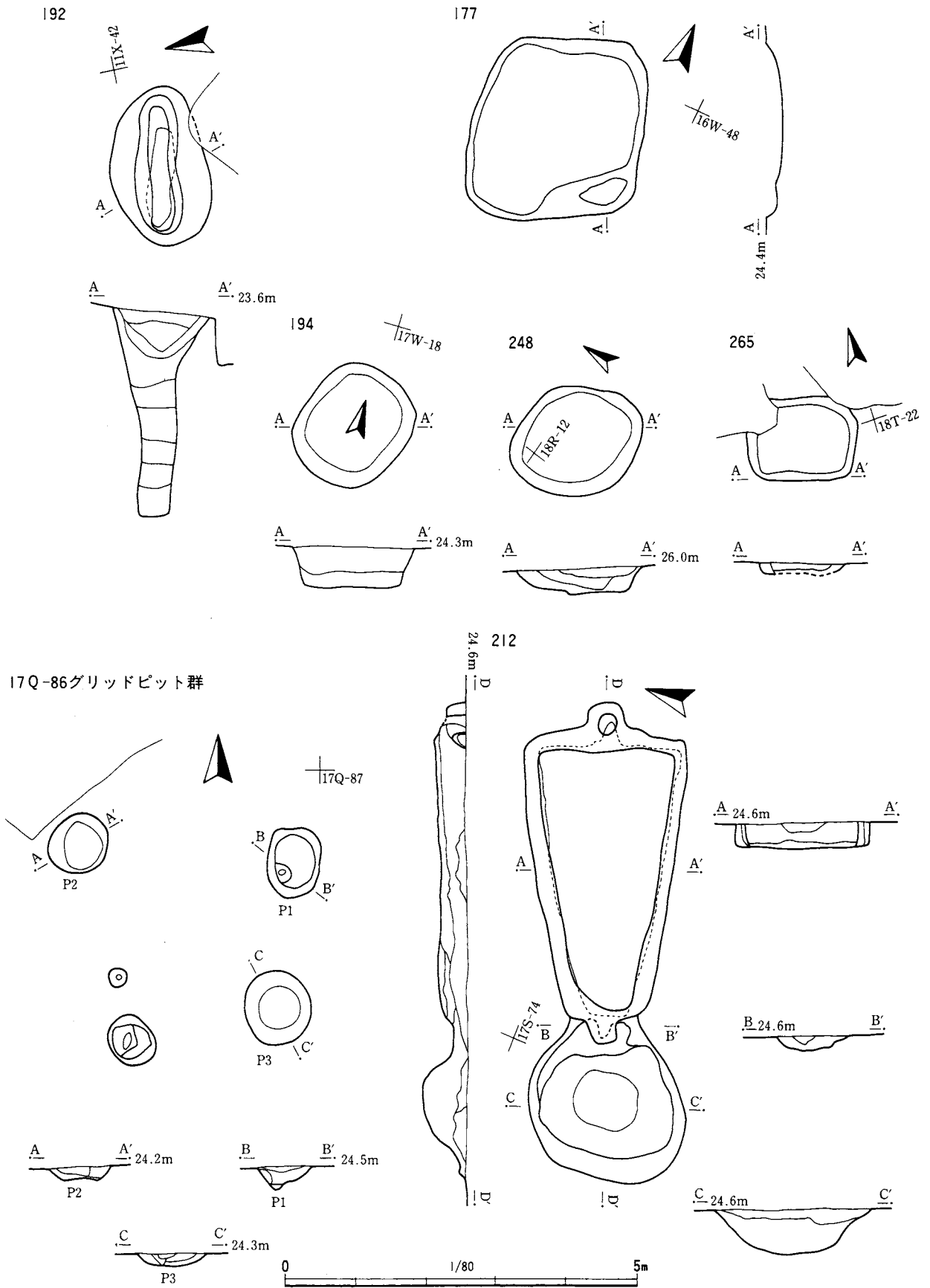
<M002溝状遺構土層説明>

- 1 黒褐色土：ローム粒を含む
- 2 褐色土：ローム粒主体
- 3 暗褐色土：ローム塊を含む
- 4 褐色土：ローム塊主体
- 5 黒褐色土：ローム塊主体
- 6 褐色土：ローム粒主体

<231竪穴住居土層説明>

- 1 暗褐色土：山砂・ローム粒を含む
- 2 暗褐色土：ローム塊主体、ローム粒を含む
- 3 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 4 暗褐色土：ローム粒主体

第39図 266・267溝，M002道路状遺構



第40図 192・177・194・248・265土壇，17Q-86グリッドピット群，212炭窯

第2節 遺物

1 古墳時代遺構出土遺物

186竪穴住居出土遺物（第41図）

1は台付甕脚部と考えられる。外面脚部は結合部分板目工具調整、それ以外の部分はナデ調整、脚部内面は横方向のハケ目調整、甕部内面はヘラミガキ調整である。ホゾ式の結合で、色調は甕部内面黒色、それ以外は淡赤褐色である。少量の石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。

206竪穴住居出土遺物（第41図、図版28）

1～8は土師器小型甕である。8以外はほぼ完形である。1の口唇部のみ上方に摘み上げられているが、他の個体はすべて素口縁である。また、成形技法においては5が胴部下位に、他の個体は胴部中位に明瞭な乾燥単位をもっている。

1は口縁部内外面横ナデ、胴部は外面横方向のヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、内面は底部にいたるまで横方向のヘラナデ、底部外面はヘラケズリ調整である。色調は橙褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。2は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向の板目工具調整、内面は底部にいたるまで横方向のヘラナデで、外面底部はナデ調整である。色調は外面橙褐色、内面暗橙褐色で、雲母粒・酸化鉄粒の他に微量の長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。3は調整技法は2とほぼ同様である。外面橙褐色、内面淡橙褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。4は調整技法はやはり前二者と同様である。色調は外面橙褐色、内面淡橙褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒をわずかに含み、焼成は良好である。5は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面はハケ目調整を行った後にヘラケズリを行い、その後にヘラミガキ調整を行っている。内面は胴部から底部にかけて板目工具調整で、外面底部はヘラケズリ調整である。色調は橙褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。6はさらに小型で、胴部中位には故意と考えられる打ち欠きが見られる。口縁部は内面に横方向のハケ目調整を行った後に、外面全体から内面上半にかけてヘラナデ調整を行っている。胴部は外面縦方向のハケ目調整の後に下半部横方向のナデ調整、内面横方向のナデ調整で、底部外面はナデ調整である。色調は淡褐色で、雲母粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。7は口縁部内面にハケ目が見えない以外はほぼ6と同様の調整である。8は口縁部を欠失しているが、胴部の形態、調整技法は1に酷似している。色調は淡橙褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

9は底部状の部分のみの遺存で、底部が横に張り出す形態である。胴部の立ち上がり角度から壺又は鉢かと考えられるが、高杯の杯部資料である可能性もある。胴部外面横方向のヘラケズリ後内外面全面ミガキ調整である。色調は暗赤褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

10・11は器台状脚形土師器である。10は扁平球状の受部が遺存しており、上端は円形に空けられており、脚部との結合部は、棒状のものを巻き込むか又は突き刺すかのいずれかの方法によって中空になっている。受部内面を除く内外面ほぼ全面にハケ目調整が行われており、ナデ調整を行っているのは受け部内面・外面結合部分・内面結合部分で、外面脚端部の平坦面にまでハケ目は及んでいる。色調は大半が灰褐色で、部分的に橙褐色である。多量の石英粒・長石粒の他に雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好で

ある。11は受け部上面が10に比べやや平坦であるが、脚部の形態・調整技法・胎土の状況は10とほぼ同様である。色調は全体に橙褐色で、焼成は10が極端に硬質であるのに対して、11はやや軟質である。この二個体の他に図化不能な破片資料はさらにもう一個体分あり、やはり3個セットでの使用の可能性が高いと考えるべきであろう。

12は土師器高杯脚部である。外面は基礎調整にハケ目を用いているが、その後のヘラケズリ、ヘラミガキ調整によってほとんど消えている。内面は脚部がヘラケズリ調整、杯部がナデ調整である。色調は器表面が暗褐色で、器肉は淡褐色である。多量の石英粒・長石粒、微量の雲母末・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

13～17は手捏ね土器である。13はかなり薄手の作りで、全面ナデ調整である。色調は淡橙褐色で、少量の石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。14は円筒状で、底部外面が木葉痕無調整である以外はナデ調整である。暗褐色で、微量の雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。15は浅い皿状のもので、全面ナデ調整である。赤褐色で、微量の石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。16も浅い皿状で、全面ナデ調整である。色調は黒灰色で、微量の石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。17はひときわ小型で、薄手のつくりである。外面口縁部と内面底部にハケ目が見える以外はナデ調整である。淡褐色で、微量の雲母末・石英粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。

18・19は土師器甕である。18は口縁部内面下半ヘラケズリ後内面上半から内面全体にかけてヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ後ヘラミガキ調整、内面横方向のヘラナデ調整で、底部外面はナデ調整である。全体に暗褐色で、底部付近のみ内外面赤褐色である。少量の長石粒・酸化鉄粒、微量の雲母末・海綿骨針を含み、焼成は良好である。19は口縁部を欠失している。胴部は外面横方向のヘラケズリ後ヘラミガキ調整、内面横方向のヘラナデ調整で、底部外面はナデ調整である。外面暗褐色、内面淡褐色で、少量の石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の雲母末を含み、焼成は良好である。

20は有段口縁壺の口縁部片で、外面には刻目を施した縦に4本の棒状浮文が貼付されているが、内2本は剝離し痕跡だけになっている。淡褐色で、石英粒・長石粒を多めに含み、焼成は良好である。

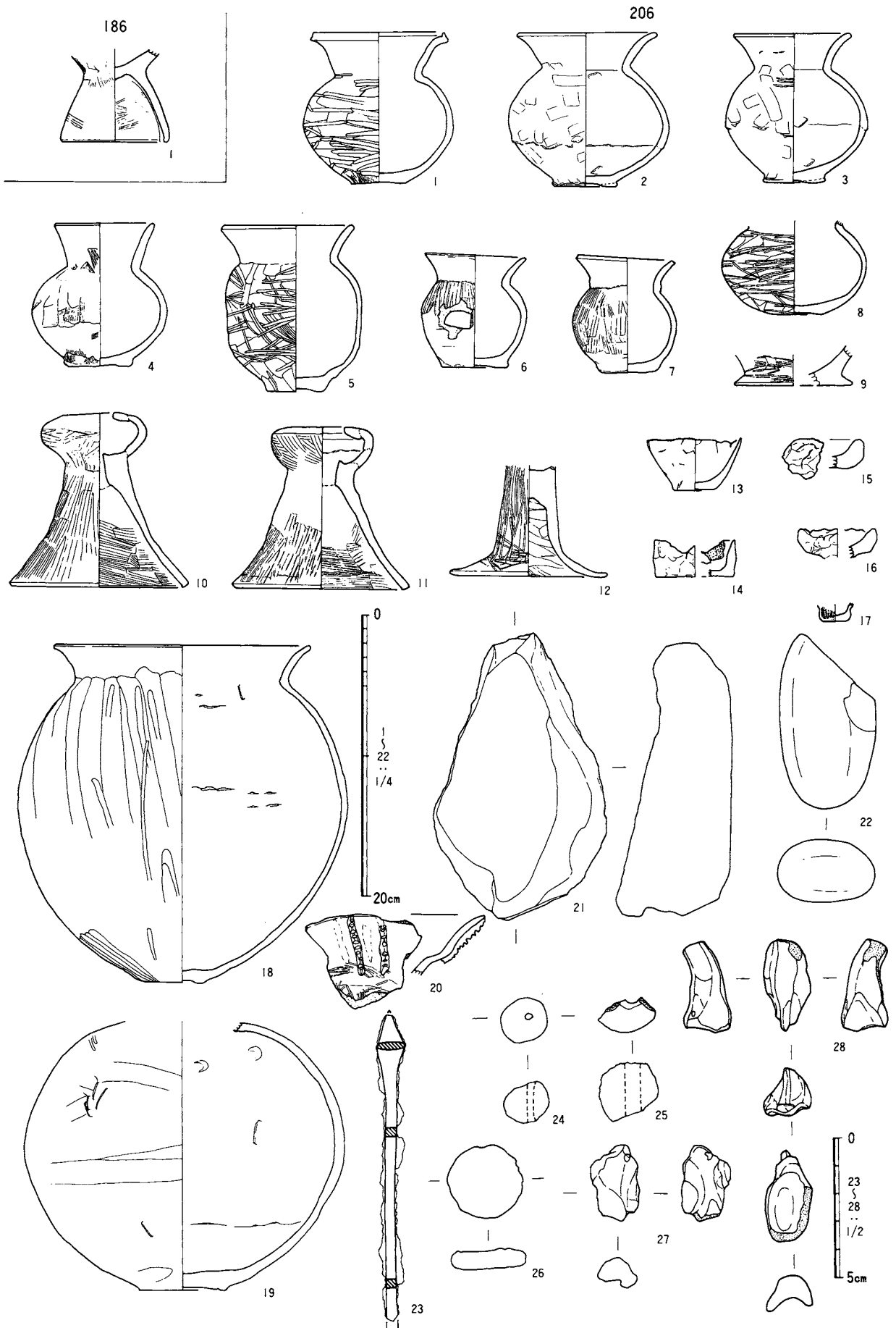
21・22は石製品である。21は閃緑岩製の石皿もしくは砥石と考えられる。底面が平らで、側面には平滑な面が残っている。上面は荒れており、使用痕跡と思われる部分がまったく見えない。22は砂岩製の敲石と考えられる。使用痕跡は図の下端面のみである。

23は鉄鏝で、明らかな混入品である。菱形の鏝身をもつ。篋被と考えられる部分（茎である可能性も否定はできない）は断面正方形である。

24・25は土玉である。

26は土製円盤である。

27・28は性格不明の土製品である。26は手捏ね成形の土製品である。淡褐色で、混和物はほとんど無く、焼成は良好である。意図された形状の復元は困難である。27は烏帽子状に尖った部分を持ち、内面は抉れたようなアーチ状に作られている。淡褐色で、混和物はほとんど無く、焼成は良好である。鳥形土製品の可能性が考えられる。



第41图 186·206竖穴住居出土遺物

2 奈良・平安時代遺構出土遺物

171竪穴住居出土遺物（第42図，図版28・41）

1・2はロクロ土師器である。1は高台付椀である。椀部内面は黒色処理を施している。椀部は外面下半に回転ヘラケズリを行い、内面は全面に丁寧なヘラミガキを行っている。貼付け高台である。色調は外面が暗褐色、内面が黒色で、胎土中には雲母粒・石英粒・長石粒を含む。焼成は良好である。2は杯の底部片である。外面底部は回転糸切りの後に、底部周縁から口縁部下端にかけて回転ヘラケズリを行っている。色調は明褐色で、胎土中には雲母粒・長石微粒を含む。焼成は良好である。

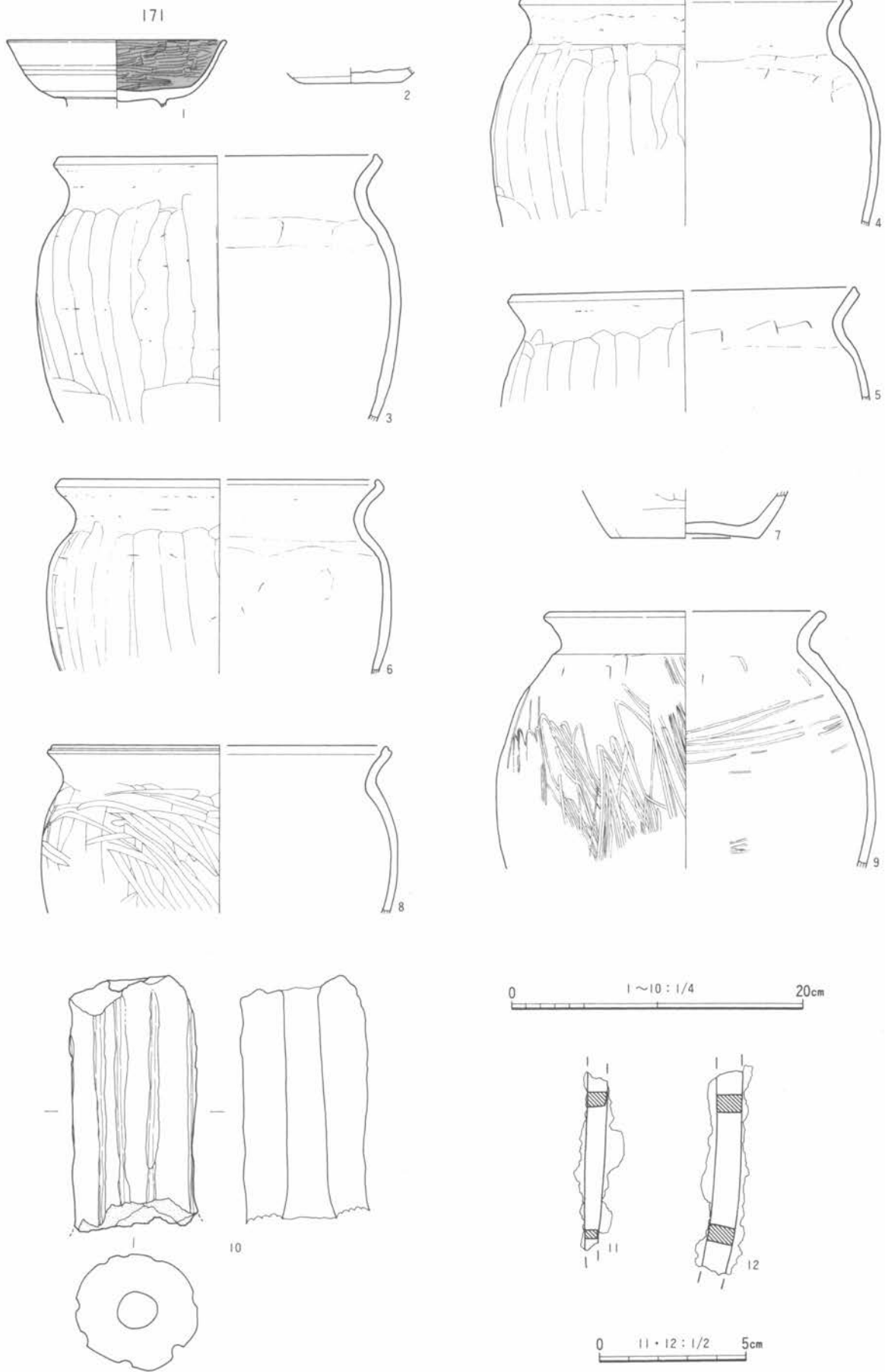
3から9は土師器甕である。3は口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部は外面が上部縦方向のヘラケズリ下部横方向のヘラケズリ、内面ヘラナデで調整している。外面の所々に粘土紐接合痕が見える。口唇部は上方にやや突出している。色調はやや赤褐色で、胎土中には雲母粒、少量の石英粒・長石粒を含む。焼成は良好である。4も調整技法は3と同様である。外面口縁部から肩部にかけて粘土紐接合痕が見える。口唇部は上方にやや突出している。色調は暗褐色で、胎土中には雲母粒・石英粒・長石粒を含む。焼成は良好である。5は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。外面口縁部上位に粘土紐接合痕が見える。口唇部は上方にやや突出している。色調は赤褐色で、胎土中には雲母粒、少量の石英粒を含む。焼成は良好である。6は調整技法は5と同様で、外面口縁部から肩部付近に粘土紐接合痕が見える。口唇部はやはり上方に軽く突出し、内面に屈曲線をもつ。色調は外面が淡褐色、内面が赤褐色である。胎土中には雲母粒・石英粒を少量含み、焼成は良好である。7は底部付近破片である。底部外面回転糸切り後周縁を手持ちヘラケズリしている。胴部は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデである。色調は外面が明褐色、内面が赤褐色で、胎土中には雲母粒・石英粒・長石粒を含む。焼成は良好である。8は口縁部内外面ともにヨコナデで、胴部は外面縦方向のヘラケズリの後に斜方向のヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。口唇部は軽く上方に突出しており、外面に沈線が一周する。9は他の個体と異なり口唇部の突出はない。口縁部内外面ヨコナデで、胴部は外面が縦方向のヘラケズリの後にヨコナデさらに縦方向のヘラミガキという複雑な調整をし、内面はヘラナデの後に横方向のヘラミガキ調整である。色調は内外面ともに赤褐色で、胎土中には雲母粒、少量の石英粒・長石粒を含む。

10は羽口である。下端部が欠失している以外はほぼ完形である。外面には縦方向に8条の沈線が走っているが、それぞれは完全には平行ではなく間隔もまちまちである。先端から5cmほどまでのところは被熱により暗灰色になっており、特に端部は発泡して随所に気泡があいている。先端の一部が一度欠失して変形した後も使用され続けている。外面の調整はケズリの後にナデと考えられる。断面に植物繊維と考えられる痕跡が多く見えることから、スサを多量に混入しているものと考えられる。

11・12は鉄製品である。11は遺存部の形状から考えて鉄鏃の茎と考えられる。12は若干の曲線をもっている。形状からは冑金具などが想定できるが断定はできない。

172竪穴住居出土遺物（第43図，図版28）

1～4は土師器杯である。調整技法は共通で口唇部は内外面ともにヨコナデ、口縁部から底部にかけては外面手持ちヘラケズリ、内面ヘラナデである。1は色調は明褐色で、胎土中には雲母粒・石英粒を含み、焼成は良好である。2は色調は外面が赤褐色で、内面は黒褐色、胎土中には雲母微粒・石英粒を含み、焼成は良好である。3は内外面共に口縁部上位が赤味がかった褐色、口縁部下半から底部は黒褐色である。



第42図 171竪穴住居出土遺物

胎土中に少量の雲母粒と石英粒を含み、焼成は良好である。4は明褐色で胎土中に少量の石英粒を含み、焼成は良好である。

5は須恵器高台付杯である。高台は貼高台で完全に欠失している。底部の高台内側は回転糸切り後手持ちヘラケズリ、それ以外の部分は回転ナデ調整である。色調は灰白色で胎土中に長石粒を含み、焼成は良好である。南比企産かと考えられる。

6・7は須恵器甕である。6は遺存部分は全て回転ナデ調整、色調は外面暗褐色、外面黒褐色で、砂粒を含み焼成は良好である。千葉市域産と考えられる。7は口縁部が水平に開く形態で、調整は口縁内面から外面側端面まで回転ナデ、外面口縁部下側面から胴部全体にかけて横位平行タタキ、内面胴はヘラナデ調整である。色調は青灰褐色で、雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。新治産かと考えられる。

8～10は土師器甕である。8は口縁端部で上方に屈曲し、口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部は外面が縦方向のヘラケズリ、内面がヘラナデである。色調は赤褐色で、部分的に暗褐色である。胎土中には多量の雲母粒と少量の長石粒を含み、焼成は良好である。9は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整、色調は赤褐色で、胎土中に雲母粒・長石粒を含む。焼成は良好である。10は調整技法は9と同様で、色調は外面暗褐色、内面赤褐色で胎土中に石英粒を含む。焼成は良好である。

11は土師器甕で胴部最下端内面及び底部下端面をヘラケズリする以外は9・10と同様の調整技法である。色調は明褐色で、胎土中に雲母粒・長石粒を少量含み、焼成は良好である。

12は土師器高杯脚部と考えられる。粘土紐の接合方向は通常と逆であるが、当該地域には類例があり高杯と判断した。外面は上半ヘラケズリ、下半ナデ、内面ヘラナデ調整である。色調は外面暗褐色、内面赤褐色で、胎土中に雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

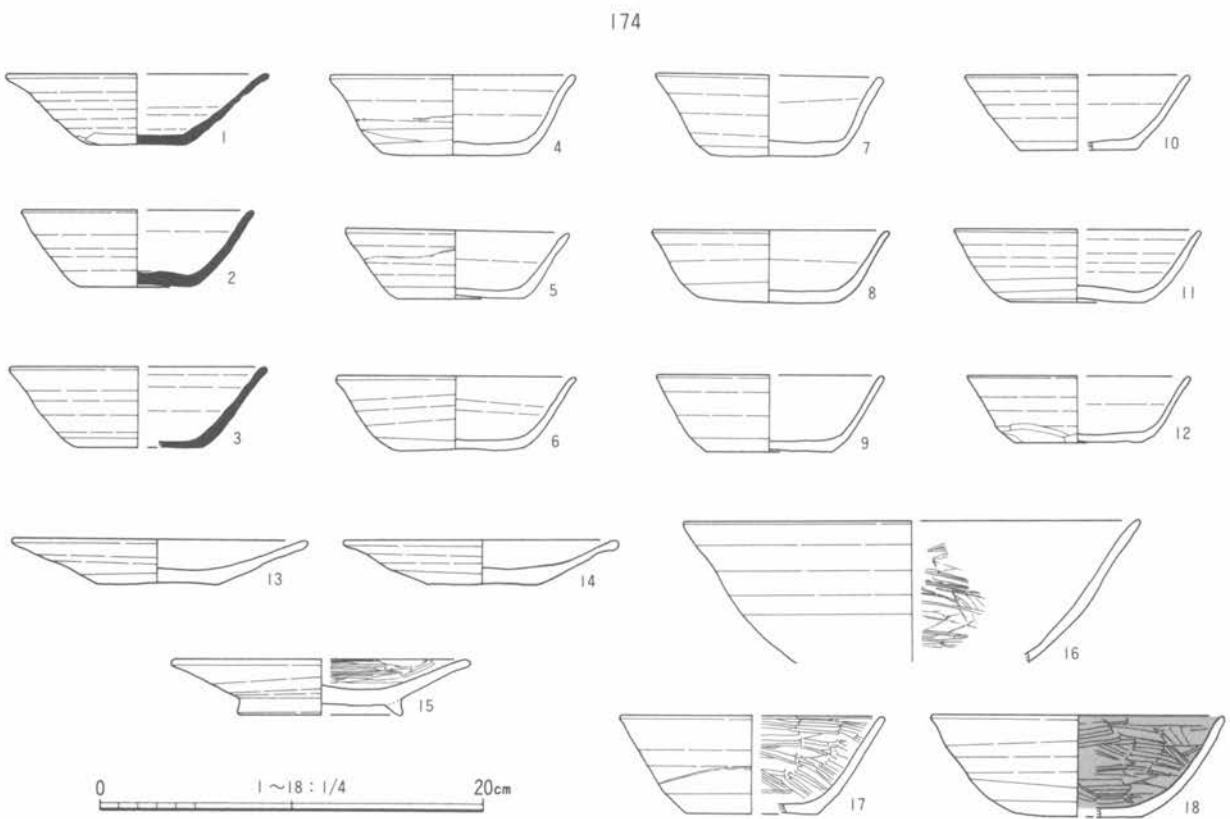
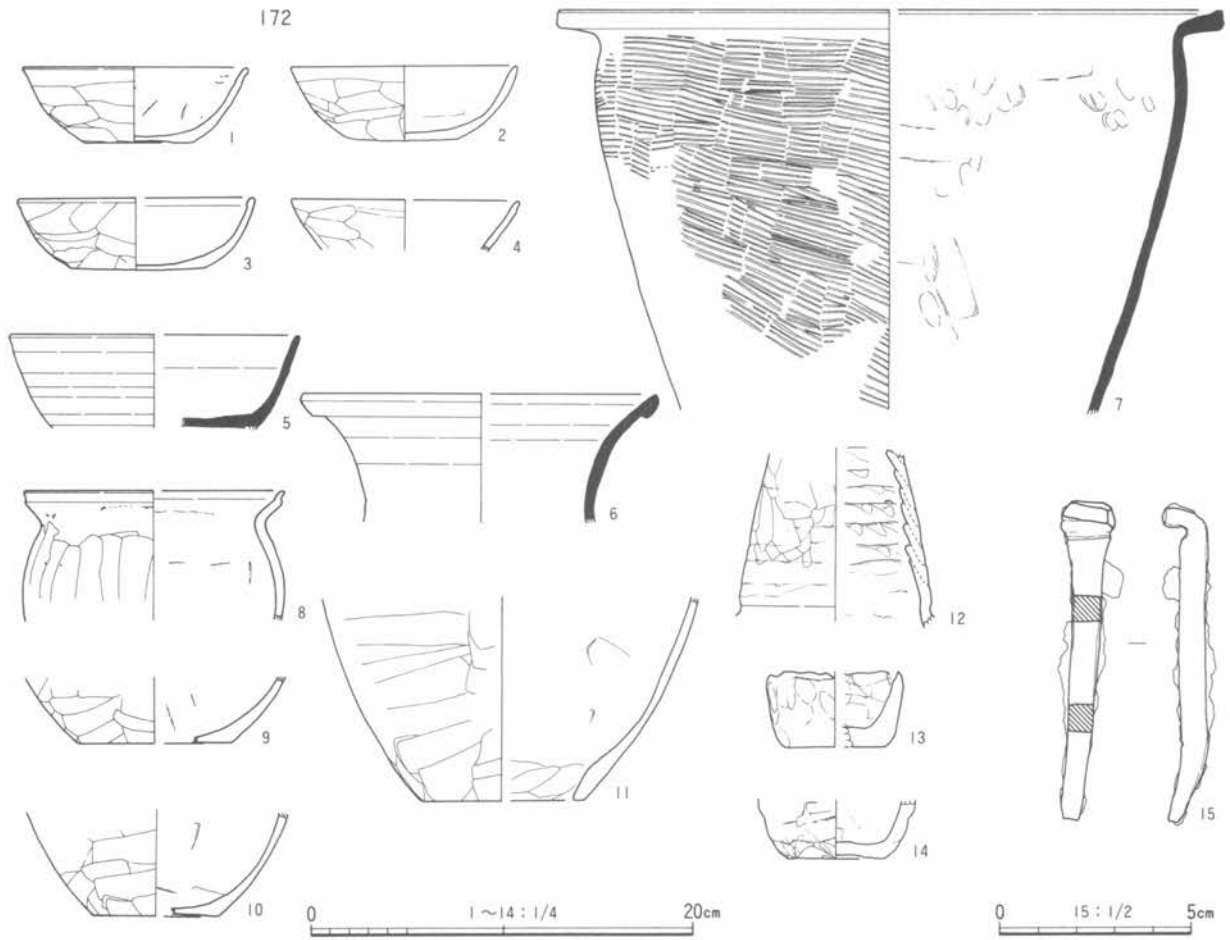
13・14は手捏ね土器である。14は底部外面に木葉痕が見える。色調はともに淡褐色で、雲母粒・石英粒を含む。焼成は良好である。

15は鉄釘である。形態上折釘と分類されるものである。

174 竪穴住居出土遺物（第43～45図、図版28・29）

1～3は須恵器杯である。1は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整で、色調は暗青灰色、胎土中に雲母粒、多量の石英粒・長石粒を含み焼成は良好である。2は武蔵産と考えられる。外面底部全面が回転糸切り後無調整でそれ以外の部位はロクロ調整である。暗橙色で雲母粒、多量の長石粒を含み、焼成は良好である。3は外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整で、色調は灰白色、多量の雲母粒を含み、焼成は良好である。

4から12はロクロ土師器杯である。調整技法は4～11までが共通で底部外面回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリである。4は赤褐色で、多量の雲母粒、微量の長石粒を含み、焼成は良好である。5は明褐色で、多量の雲母粒、少量の石英粒・長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。6は褐色で、多量の雲母粒、少量の海綿骨針を含み、焼成は良好であるが、器面はやや風化している。7は赤褐色で、多量の雲母粒、微量の石英粒を含み、焼成は良好である。8は明褐色で、多量の雲母末、微量の長石粒、酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。9は橙褐色で、雲母粒を多く、他に石英粒、長石粒、酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。10は明褐色で、多量の雲母粒、微量の石英粒、酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。11は赤褐色で、雲母粒・石英粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。12は底部外面回



第43図 172・174竪穴住居出土遺物

転糸切り後に外面口縁部下端から底部周縁部にかけて手持ちヘラケズリを行っている。橙褐色で、雲母粒を多く、他に石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

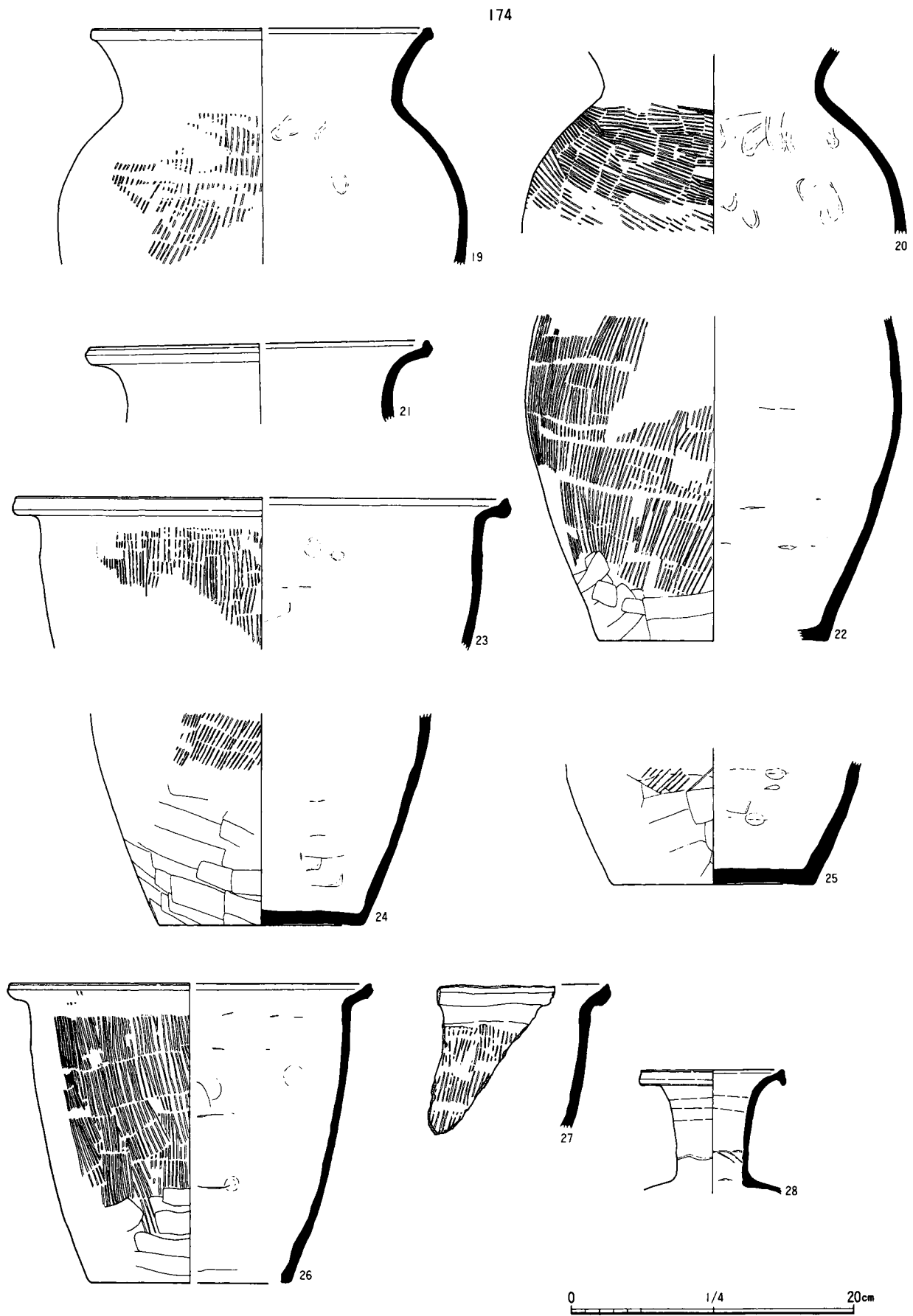
13～15はロクロ土師器皿である。うち15は高台付皿である。13は底部外面回転糸切りで外面口縁部下端から底部周縁部にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。部分において明褐色及び赤褐色で、多量の雲母粒、ほかに微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。14は外面口縁部下端から底部全面にかけては回転ヘラケズリを行っており、橙褐色で、多量の雲母粒、微量の石英粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。15は外面底部回転糸切り後周縁部を回転ヘラケズリ調整している。皿部内面はへらミガキ調整である。赤褐色で、雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

16～18は内面にへらミガキを施したやや大型の土師器杯である。16は赤褐色で、多量の雲母粒、微量の石英粒・海綿骨針、少量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。17は外面底部回転糸切り後に口縁部下端から底部周縁部にかけて回転ヘラケズリを施している。色調は外面が淡褐色で、内面は黒褐色であるが黒色処理ではない。多量の雲母粒の他に石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含む。焼成は良好である。18は内面黒色処理で外面は赤褐色である。外面口縁部下端から底部前面にかけて回転ヘラケズリを行っている。微量の長石粒を含み、焼成は良好である。

19～25は須恵器甕である。19～22は頸部が括れる形態のものである。19は口縁部内外面回転ナデで、胴部は外面平行タタキ、内面は当具痕をへらナデで消している。青灰色から灰褐色で、多量の石英粒・長石粒と酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。千葉市域産と考えられる。20は頸部内外面回転ナデで、胴部は外面横方向の平行タタキで、内面は当具痕をへらナデで消している。色調は外面青灰色、内面灰色で、雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。21は全面回転ナデ調整で、灰褐色である。多量の石英粒・石英粒・長石粒酸化鉄粒、少量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。新治産と考えられる。22は外面胴部縦方向の平行タタキ、下端がヘラケズリ、底部はナデ調整である。内面はへらナデで、色調は淡灰色、雲母粒を少量、微量の石英粒、海綿骨針、酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。千葉市域産と考えられる。23～25は頸部をもたず、口縁部が水平方向に外反する形態である。23は口縁部回転ナデ調整で、胴部は外面縦方向のタタキ、内面は当具痕をへらナデで消している。灰褐色で、多量の雲母粒、石英粒を含み、焼成は良好である。新治産と考えられる。24は外面胴部上半が縦方向の平行タタキ、下半がヘラケズリ、底部は圧痕のみである。内面は全面へらナデである。色調は暗褐色で、雲母粒、微量の海綿骨針、多量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。25は外面胴部上半が縦方向の平行タタキ、下半がヘラケズリ、底部は圧痕のみである。内面は上半に当具痕が見えるが、後に全面にへらナデ調整を施しているために消えている。青灰色で、石英粒を含み、焼成は良好である。千葉市域産かと考えられる。

26は須恵器甕である。底部は五孔式であるが実測による表現が可能なほどには遺存していない。口縁部は内外面回転ナデ調整で、胴部は外面縦方向の平行タタキ、下端ヘラケズリで、内面は当具痕をへらナデで消して、下端のみヘラケズリ調整である。色調は外面暗灰褐色、内面灰褐色で、多量の雲母粒、石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。新治産と考えられる。27は小片のために甕か甗か不明である。口縁部は内外面ともに回転ナデ、胴部は外面縦方向の平行タタキ、内面はへらナデ調整で、色調は暗褐色である。少量の雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。千葉地域産と考えられる。

28は須恵器長頸瓶である。遺存部位はすべて回転ナデ調整である。青灰色で、胎土中の混和物はほとんど無い。焼成は良好である。東海産と考えられる。



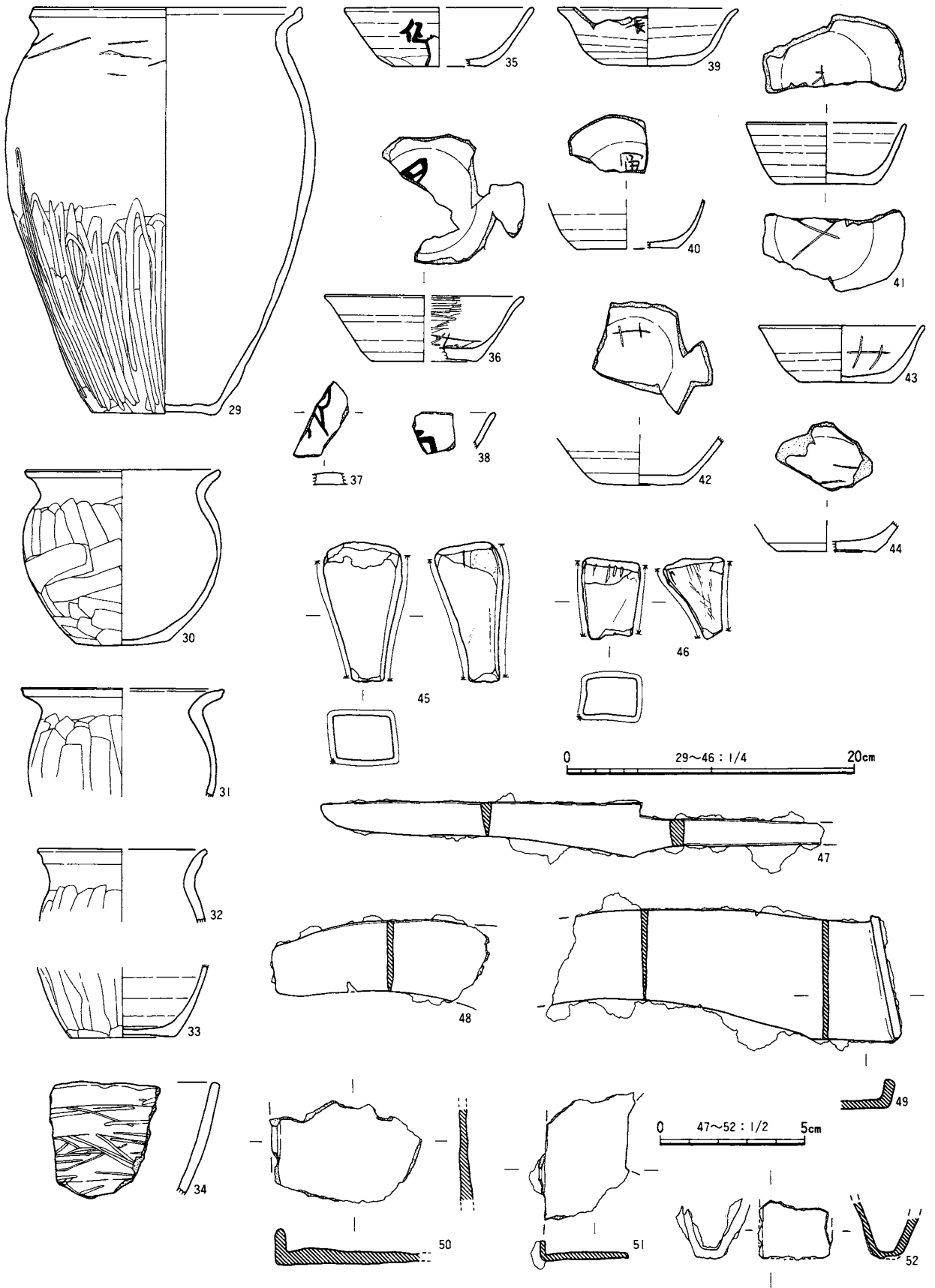
第44图 174竖穴住居出土遺物

29～33は土師器甕である。29はいわゆる常総型甕である。口縁部は内外面ヨコナデ、外面胴部は上半がヘラケズリの後にナデ、下半が縦方向のヘラミガキ調整、底部がヘラナデ、内面がヘラナデ調整である。胴部中位以上には粘土紐接合痕が何条か見える。淡褐色で、多量の雲母粒の他に石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含む。焼成は良好である。30・31は小型甕である。30は口縁部は内外面ヨコナデ、胴部外面は上半が縦方向、下半から底部にかけてが横方向のヘラケズリである。内面胴部から底部にかけてはヘラナデ調整である。色調は褐色から赤褐色で、多量の雲母粒の他に石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。31は口縁部は内外面ヨコナデで、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。暗褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒多量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。32は口縁部が緩いS字を描き上方に摘み上げる形態の口唇部をもつ。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面がヘラナデ調整である。33は底部周辺のみが残存である。外面胴部は縦方向のヘラケズリ、下端が横方向のヘラケズリ、底部が回転糸切りのみで、内面は回転ナデ調整である。外面赤褐色、内面暗褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒の他に多量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

34は内黒の土師器鉢である。外面口縁部は上位ヨコナデ、下位ヘラミガキ、内面は全面ヘラミガキ調整である。外面褐色、内面黒色で、多量の雲母粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

35～44は文字及び記号を有するロクロ土師器杯である。35は外面口縁部に正位で「□（人肩に乙カ）」と墨書されている。外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整、それ以外は回転ナデ調整である。色調は明褐色で、多量の雲母粒の他に少量の海綿骨針、酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。36は内面底部に墨書が一字見えるが釈読不能である。外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整、内面ヘラミガキ調整で、色調は明褐色である。多量の雲母粒と少量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。37は底部内面に墨書が見えるが一字であるか二字であるか不明で、釈読も不能である。外面底部回転ヘラケズリ調整で、色調は淡褐色である。少量の雲母粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。38は口縁部外面に一字の墨書があるが釈読不能である。赤褐色で、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。39は口縁部外面に正位で「長」の線刻がある。外面底部回転糸切り後に口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整である。多量の雲母粒、少量の長石粒を含み、焼成は良好である。40は底部内面に「冨」の線刻がある。外面底部は回転糸切りで、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を施している。多量の雲母粒の他に石英粒・長石粒、少量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。41は底部内外面に線刻がある。内面は一字と考えられるが釈読不能、外面は「×」である。外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリを施している。暗褐色で、雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。42は底部内面に「キ」字状の線刻がある。外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。淡褐色で、雲母粒、酸化鉄粒、多量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。43は口縁部内面に「キ」字状の線刻がある。外面底部回転糸切り後に底部周縁のみ回転ヘラケズリを施している。赤褐色で、多量の雲母粒、少量の長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。44は底部内面に二本の平行線が線刻されている。外面底部回転糸切り後に口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ、内面全面にヘラミガキを施している。明褐色で、多量の雲母粒、微量の海綿骨針、酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

45・46は流紋岩製砥石である。47～52は鉄製品で、47は刀子、48・49は鎌、50～52は不明である。



第45図 174竪穴住居出土遺物

179 竪穴住居出土遺物（第46図，図版29・30）

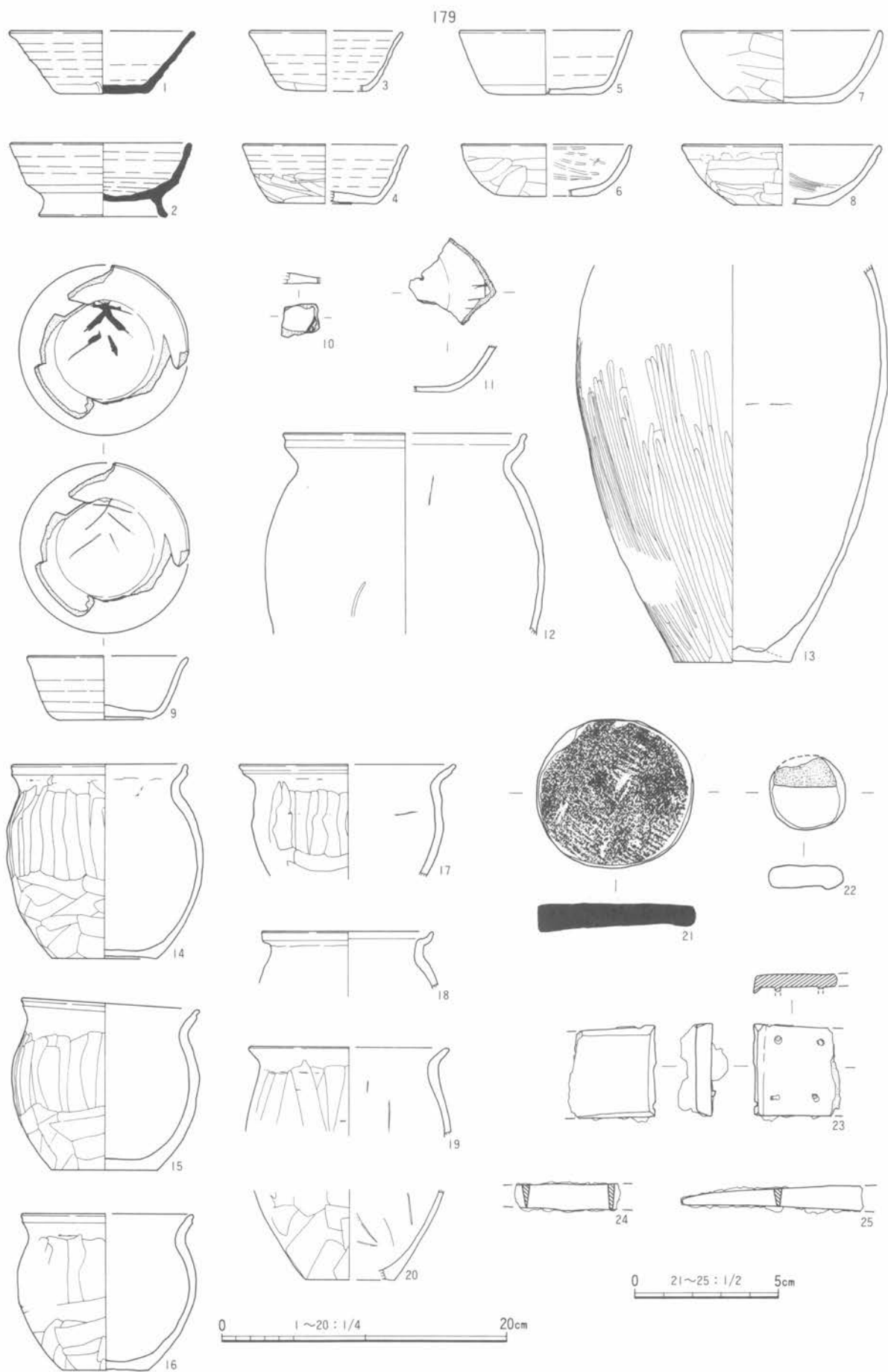
1・2は新治産と考えられる須恵器杯である。1は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。灰色で，白色雲母末を含み，焼成は良好である。2は高台をもつ。外面底部回転ヘラケズリの後に，高台部は回転ナデ，口縁部下端のみ回転ヘラケズリ調整である。灰色で，多量の長石粒を含み，焼成は良好である。

3～5はロクロ土師器杯である。3は底部の大半を欠失しており，外面口縁部下端から底部遺存部までは手持ちヘラケズリ調整である。外面褐色，内面赤褐色で，雲母粒，長石粒を含み，焼成は良好である。4は外面口縁部下半から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。外面褐色，内面赤褐色で，微量の雲母粒，長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。5は外面底部静止糸切りで，口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整である。赤褐色で雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。

6～8は土師器杯である。6は外面口縁部上端ヨコナデ，口縁上位から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ，内面は全面ヘラミガキ調整である。外面淡褐色，内面褐色で，長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。7は口唇部を除き外面全面手持ちヘラケズリ，内面ナデ調整で，色調は赤褐色である。雲母末・長石粒を含み，焼成は良好である。8は外面口縁部上端のみ横ナデ，以下は底部全面にかけて手持ちヘラケズリ，内面は全面ヘラミガキ調整である。外面赤褐色，内面暗褐色で，長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。

9～11は文字及び記号をもつ土師器杯である。9は内面底部に線刻・墨書で「大八」と記している。線刻の中に墨痕の見えることから，線刻→墨書の順と考えられる。外面底部回転糸切り後に，口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整を施している。暗褐色で，雲母末・石英粒を含み，焼成は良好である。10は底部外面に墨書が見える。部分資料であるが，他の資料との比較から「依」かと考えられる。外面底部は回転糸切りで，内面はナデ調整である。赤褐色で焼成は良好である。11は口縁部内面に「卅」の線刻が見える。外面口縁部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリが施されている。淡褐色で，少量の雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。

12～20は土師器甕である。12・13はいわゆる常総型甕，14～20は小型甕である。12は胴部中位以上の資料で，口縁部は内外面横ナデ，胴部は外面縦方向のヘラケズリ後に荒いヘラナデ，内面ヘラナデ調整である。外面褐色，内面灰褐色で，雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。13は底部外面に木葉痕が見える。胴部外面は上半が縦方向のヘラケズリ，下半が横方向のヘラケズリの後に，下半は縦方向のヘラミガキ，内面は全面ヘラナデ調整である。色調は外面が暗褐色，内面が灰褐色で，多量の雲母粒・長石粒を含み，焼成は良好である。14は口縁部が内外面横ナデ，外面は胴部上半が縦方向，胴部下半から底部全面にかけてヘラケズリ，内面は胴部から底部にかけてヘラナデ調整である。赤褐色で，長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。15も14同様の器面調整である。外面暗褐色，内面黒褐色で，長石粒・酸化鉄粒，少量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。16も前二者と同様の器面調整である。外面暗褐色，内面褐色で，少量の雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針を含み，焼成は良好である。17は口縁部が斜め上方に開き，胴部はやや短めの形態である。調整技法は同様である。内面はやや剝離が進んでいる。外面赤褐色，内面暗赤褐色で，微量の雲母末，石英粒・長石粒を含み，焼成は良好である。18はやや受口状の口縁部をもつ。口縁部内外面横ナデ，胴部内外面ヘラナデ調整で，色調は黒褐色である。雲母末・長石粒を含み，焼成は良好である。19は素口縁である。口縁部は内外面横ナデ，胴部は外面縦方向のヘラケズリ，



第46図 179竪穴住居出土遺物

内面横方向のヘラナデ調整で、色調は外面明褐色、内面暗褐色で、長石粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。24は底部資料で外面は全面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整で、色調は暗褐色である。酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

21は須恵器甕転用の円盤状品、22は円盤状土製品である。21は外面に平行タタキが見える。

23から25は鉄製品である。23は方形版状製品で裏面と考えられる面には4箇所には鋌痕跡が見える。24・25は刀子片である。

182 竪穴住居出土遺物（第47・48図、図版30）

1・2は須恵器杯である。整形技法は共通で、外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリを施している。1は灰白色で、多量の雲母粒と酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。2は淡褐色で、少量の長石粒と酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

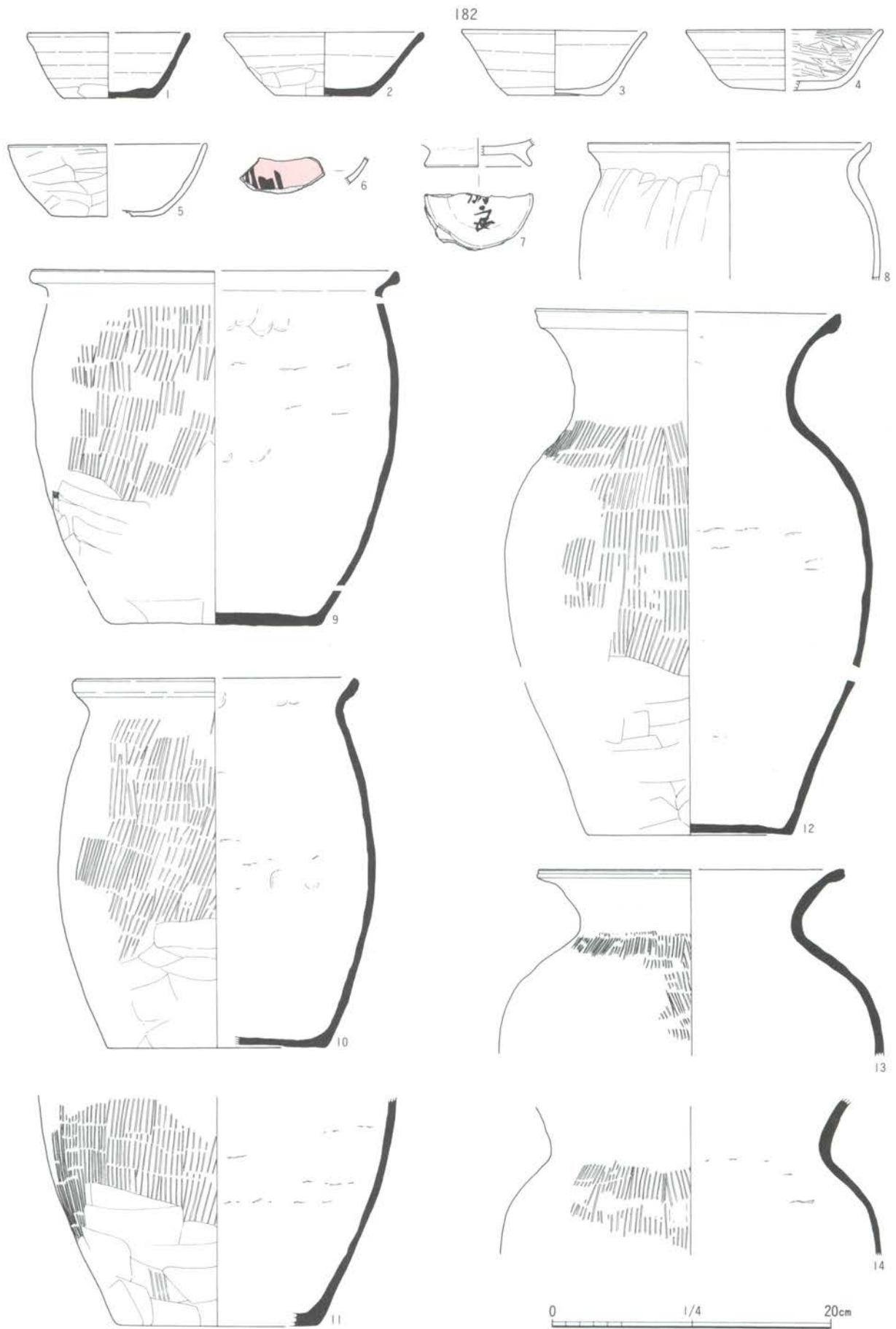
3・4はロクロ土師器である。3は外面底部回転糸切り後に口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリを行っている。淡橙色で、少量の雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。4は外面底部糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリを施している。内面はヘラミガキである。色調は赤褐色で、雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

5は土師器杯である。口縁部は内外面ともに上端のみを横ナデしている。外面は口縁部上位から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ、内面は全面ヘラナデ調整である。色調は淡橙色で、少量の石英粒、多量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

6・7は文字資料である。6は全面赤彩ロクロ土師器杯で、口縁部内面に墨痕が見える。部分資料であるために文字であるのか人面であるのか穂先揃えであるのか不明である。外面下半回転ヘラケズリ、内面ヘラミガキ調整で、器肉色調は淡褐色、混和物はほとんど無く、焼成は良好である。7はロクロ土師器高台付杯で、外面底部に「□良」と墨書されている。当該遺跡の他の文字資料から見て、「久弥良」と記されていたものと考えられる。外面底部の高台内側のみ回転糸切り後無調整で、他はすべてロクロ調整である。淡橙色で、雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

8は土師器甕である。口縁部は内外面ヨコナデで、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。淡褐色で、酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

9～14は須恵器甕である。整形技法はほぼ共通で、口縁部は内外面ロクロナデ、胴部は外面が縦の平行タタキで、下半部に横方向のヘラケズリ、内面は当具痕をヘラナデで消している。底部調整に差異が見られ、10・12は圧痕のみ、11はナデ調整である。9は図上で三部位を復元結合したものである。灰褐色で、雲母粒・石英粒を含み、焼成は良好である。新治産と考えられる。10は外面淡橙色、内面黒褐色で、多量の石英粒と酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。千葉市域産と考えられる。11は暗褐色で、多量の石英粒と酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。千葉市域産と考えられる。12は上半と下半を図上復元したものである。灰白色で、微量の海綿骨針と酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。千葉市域産と考えられる。13は青灰色で、多量の石英粒・長石粒、少量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。頸部内面に砥石転用痕跡が見える。千葉市域産と考えられる。14は暗褐色で、多量の雲母粒・石英粒・長石粒と酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。外面胴部のタタキ調整は胎土がかなり軟らかいうちに行っているようで、深くかつ細かく施されており、他の個体に比べ異質な雰囲気をもっている。



第47図 182竖穴住居出土遺物

15は須恵器と考えられる甕である。外面は胴部から底部にかけて全面ヘラケズリ、内面はヘラナデである。色調は外面淡褐色、内面赤褐色で、多量の雲母粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。下半部のみの資料であるので確定的ではないが、千葉市域産に見られるタタキを完全に消し去る部類の須恵器甕と考えられる。

16は湖西産須恵器短頸壺である。灰白色で外面肩部上面に自然釉がのっている。混和物はほとんど無く、焼成は良好である。17は土師器鉢である。外面口縁部上半から内面全体がヨコナデ、外面口縁部下半は手持ちヘラケズリ調整である。外面赤褐色、内面橙色で、少量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

18・19は紡錘車である。18は流紋岩製で、擦痕が多く見える。19は土製である。

20・21は鉄製品である。20は柳葉型鉄鏃と考えられる。21は刀子片である。背の部分に関をもつ形態である。

183 竪穴住居出土遺物（第48図，図版30）

1・2は須恵器杯である。1は外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリを行っている。灰白色で、長石粒を含み、焼成は良好である。2は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリを行っており、灰色で多量の長石粒と雲母末を含み、焼成は良好である。ともに新治産と考えられる。

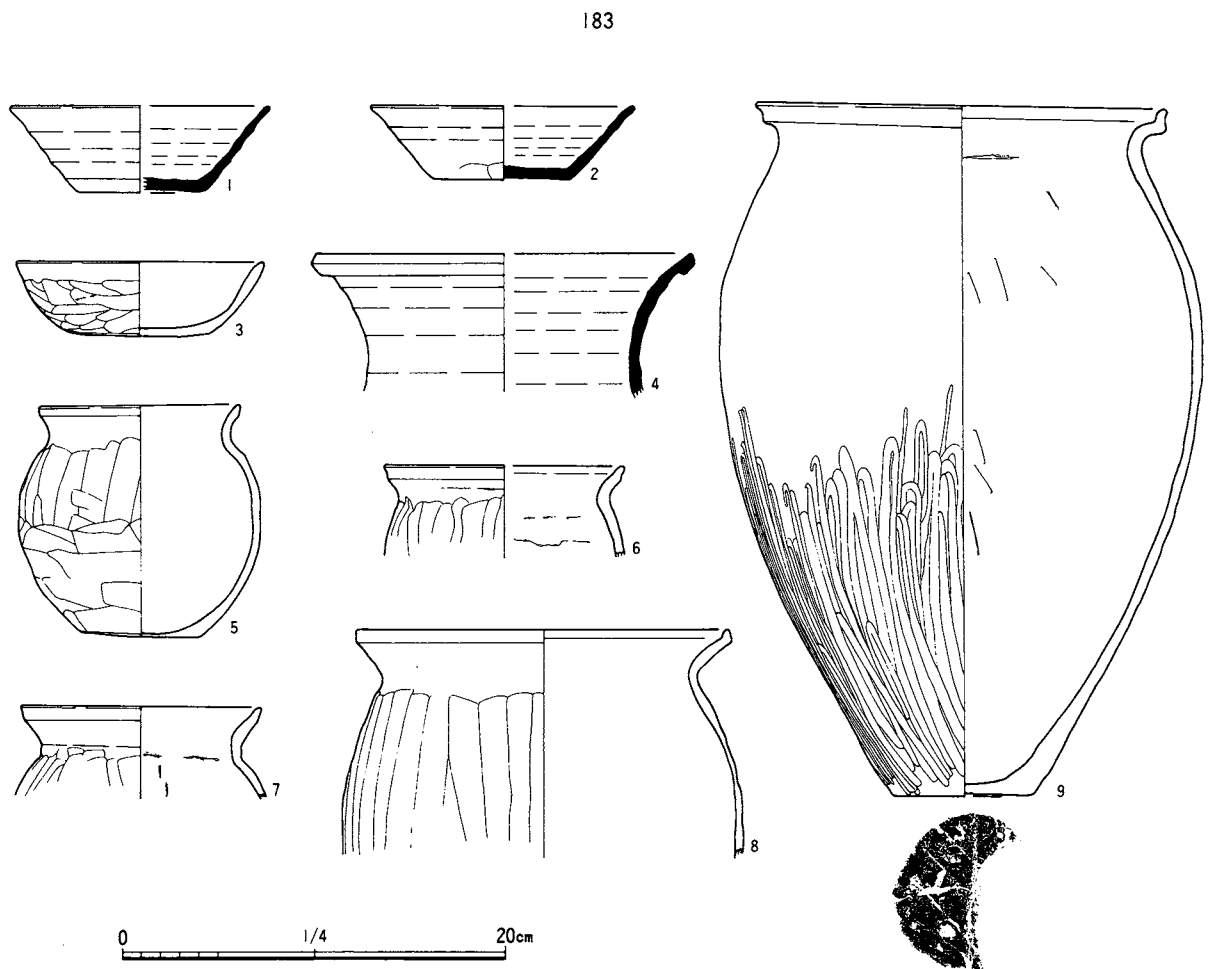
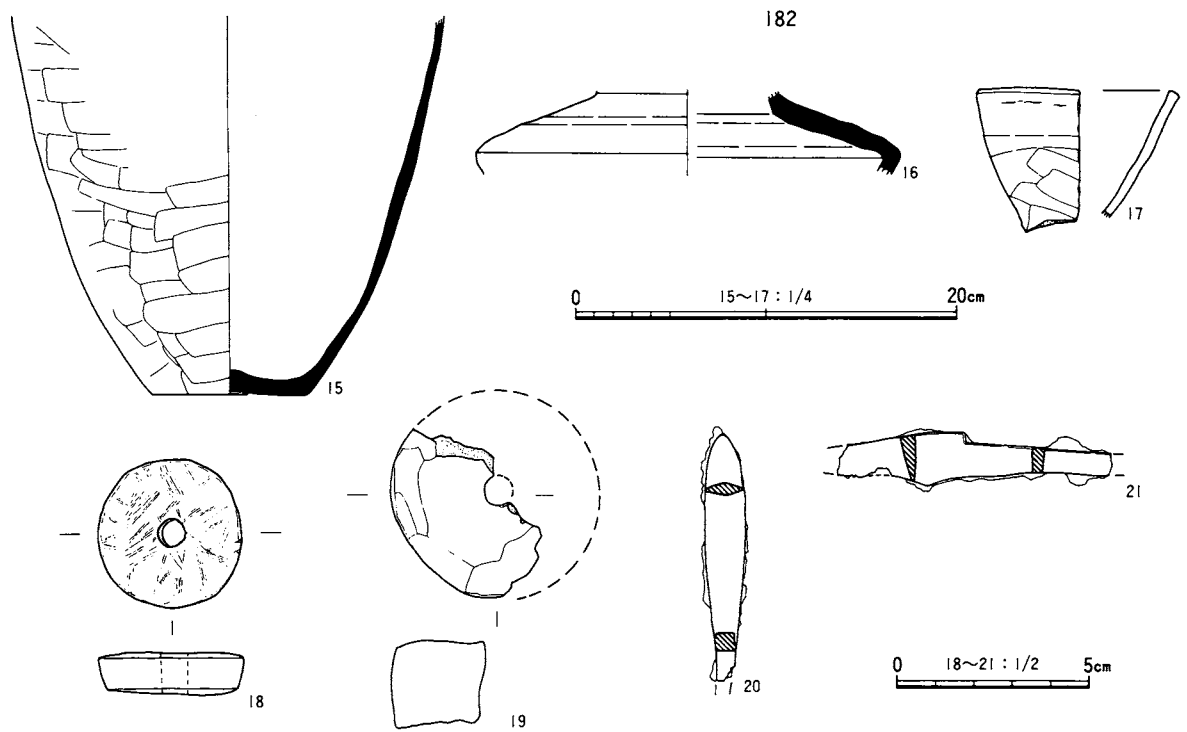
3は土師器杯である。外面口縁部上半から内面全面にかけて横ナデ、外面口縁部上位から底部全体にかけては手持ちヘラケズリ調整である。暗赤褐色で、少量の雲母粒と石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

4は須恵器甕である。頸部が括れる形態で、色調は黒褐色、長石・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。千葉市域産と考えられる。

5～9は土師器甕である。5～7は小型甕である。5～8は整形技法は共通で、口縁部は内外面ヨコナデ、外面胴部から底部はヘラケズリ、内面はヘラナデである。5は外面褐色、内面赤褐色で、石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。6は暗褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。7は外面暗褐色、内面赤褐色で、石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。8は大型の甕で、色調は赤褐色である。石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。9はいわゆる常総型の甕である。底部外面に木葉痕が見える。口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部は外面がヘラケズリの後にヘラナデを行い、下半部は縦方向のヘラミガキを施している。胴部内面は全体に横方向のヘラナデ調整である。色調は黄褐色で、雲母粒・長石粒と少量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

184 竪穴住居出土遺物（第49図，図版30）

1から10はロクロ土師器杯である。1～7は形態的に非常に酷似しており、口縁部を強く水平方向に張り出しており、いわゆるヘルメット型の形態を見せている。1～5は共通の整形技法で、底部外面回転糸切り後に外面口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリを施している。1は外面明褐色、内面淡褐色で、雲母粒・末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。2は内外面ともに暗褐色である。微量の雲母粒の他に海綿骨針、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。3は明褐色で、微量の雲母粒の他に石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。4は外面淡褐色、内面褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5は内外面淡褐色で、雲母末・長石粒の他に微量の酸化鉄粒を含み、



第48図 182・183竪穴住居出土遺物

焼成は良好である。6は全体に器形に歪みが見られる。外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリが施されている。その内、底部の手持ちヘラケズリは一方向のケズリである。色調は黄褐色で、少量の雲母粒の他に、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。7も全体にやや歪みがあり、前6個体に比べると器形的には酷似しているが大型である。外面底部糸切りの後に口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリを行っている。外面赤褐色、内面淡褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。8は口縁部が軽く内彎する形態である。外面底部は回転糸切り後無調整で、外面口縁部下端のみ回転ヘラケズリ調整を行っている。9は内面黒色処理を施している。外面口縁部下端は回転ヘラケズリ、内面は遺存部全面ヘラミガキ調整である。色調は外面黒褐色、内面黒色で、海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。10は外面口縁部下端から底部遺存部位までは回転ヘラケズリ、内面はヨコナデの後に全面粗めのヘラミガキ調整である。

11は須恵器高台付杯である。外面高台周辺はロクロ調整で、それを除く底部は回転ヘラ切り後無調整、口縁部下端は回転ヘラケズリ調整である。色調は青灰色で雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。

12は須恵器甌である。底部はほとんど残存していないが五孔式である。調整は外面は底部を含めヘラケズリ、内面はヘラナデを行っており、底部外面には砂目が見える。色調は明褐色で、胎土中には雲母末・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。

13は土師器甕である。外面は全面ヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。色調は暗赤褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

14は灰釉碗である。外面の一部に釉が垂れており、いわゆる漬け掛けによる施釉である。高台は断面長台形の付け高台で、全面にロクロ整形を施している。内面底部には重ね焼き痕跡が見え、全体は淡灰色で、内面中心部だけ円形に灰白色になっている。胎土中には混和物はほとんど無く、焼成は良好である。

15は当該竪穴住居の他の遺物とは時期が全く異なり、古墳時代の製品で混入遺物である。外面は全体に赤味が強く、赤彩を施しているものと考えられる。外面は丁寧なヘラミガキ、内面はヘラナデ調整で、色調は外面赤褐色、内面明褐色で、長石と微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

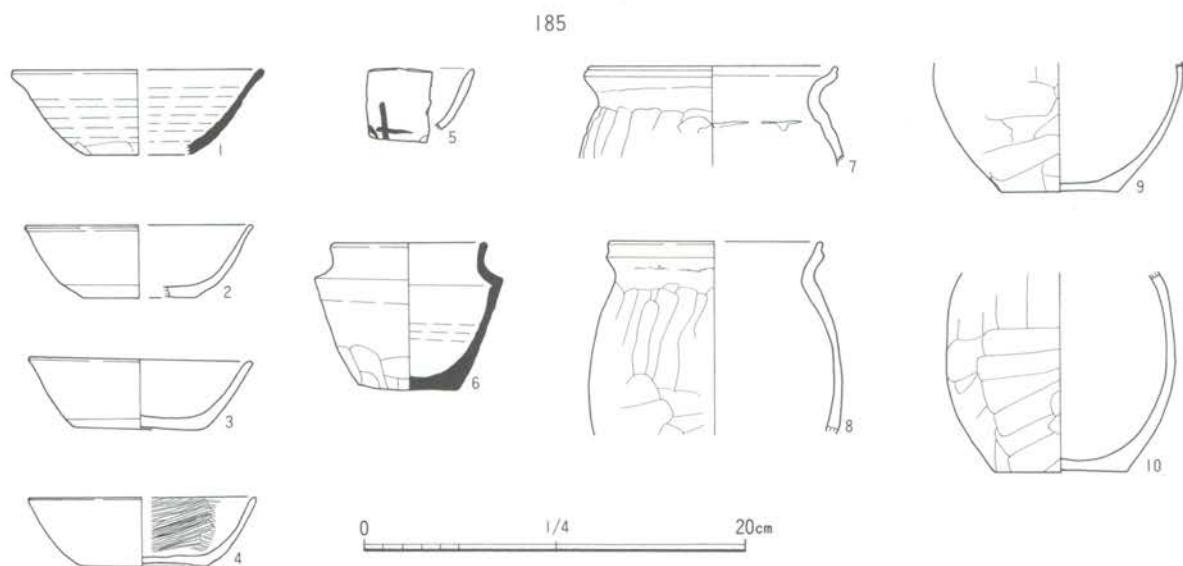
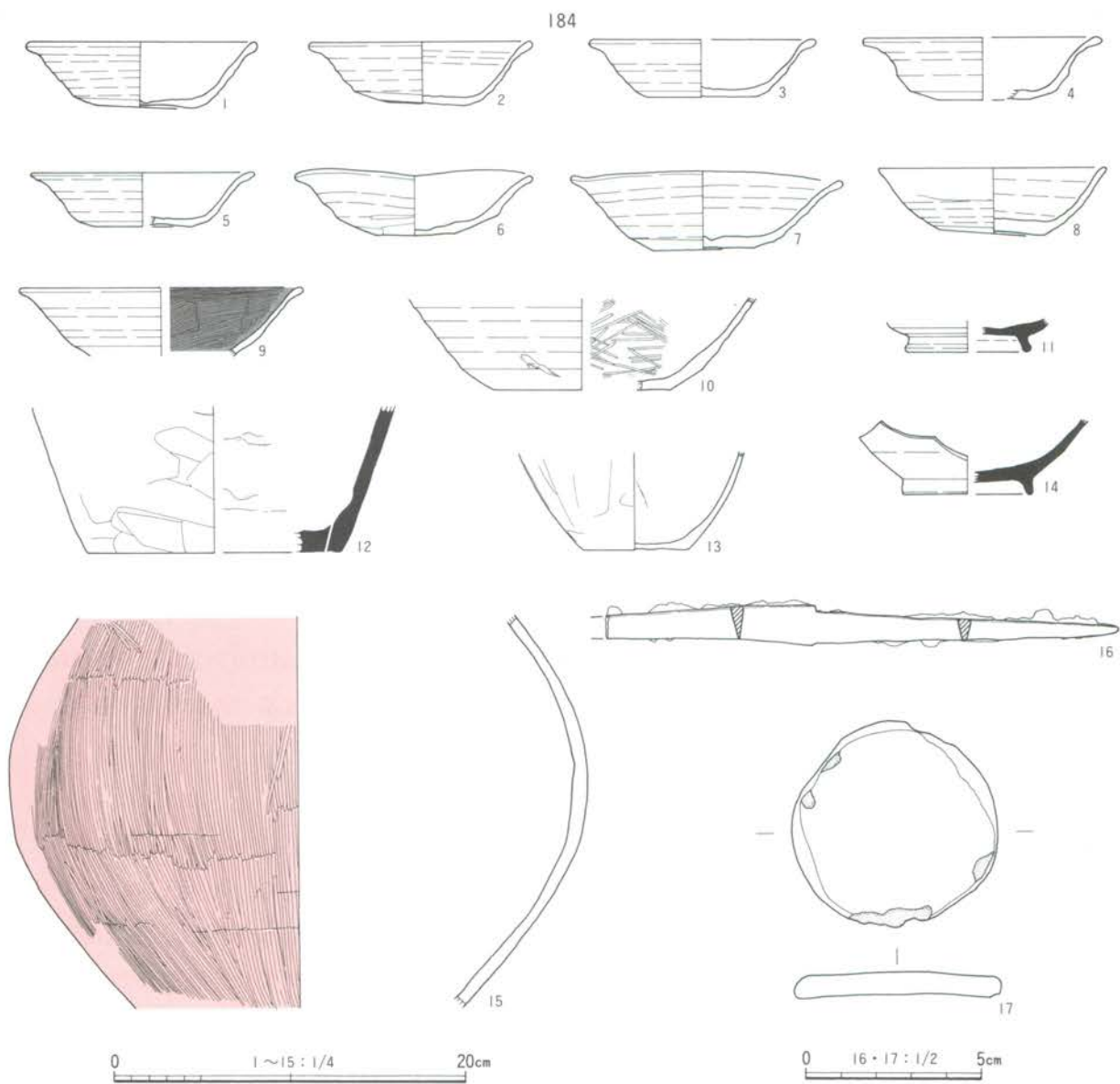
16は鉄製の刀子である。刃部先端は残存せず、茎の長大な形態である。

17は土師器片転用の円盤状製品である。片面に回転ヘラケズリの痕跡が見える。

185竪穴住居出土遺物（第49・50図、図版30）

1は須恵器杯である。外面口縁部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリ調整を施している。色調は灰色で、白雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。

2～5はロクロ土師器杯である。2は外面口縁部下端のみ回転ヘラケズリ、底部は手持ちヘラケズリ調整で、内面は剝離が進んでいる。色調は内面褐色、外面明褐色で、少量の雲母粒・酸化鉄粒と長石粒を含み、焼成は良好である。3は外面底部回転糸切り後に口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整である。内面は器面の剝落が進んでいる。淡褐色で、多量の雲母粒と長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。4は外面底部回転糸切り後無調整で、内面は全面ヘラミガキ調整である。色調は淡褐色、雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。5は外面口縁部に横位で「千」と墨書が見える。外面口縁部上端から内面にかけてナデ、外面口縁部上位以下は手持ちヘラケズリ調整である。淡褐色で、雲母粒少量、長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。



第49図 184・185竪穴住居出土遺物

6は須恵器小型短頸壺(平城分類壺E)である。外面胴部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。灰色で、微量の白色雲母粒の他に長石粒を含み、焼成は良好である。

7～12は土師器甕である。7～10は小型甕で調整技法は共通である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面上半が縦方向、下半が横方向のヘラケズリで、内面は底部までヘラナデ、底部外面はヘラケズリである。7は外面赤褐色、内面暗褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。8は外面暗褐色、内面黒褐色で、雲母粒、長石粒を含み焼成は良好である。9は外面赤褐色、内面暗褐色で、雲母末・海綿骨針を少量の他に長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。10は外面黒褐色、内面淡褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。11・12は常総型甕である。調整技法は共通で、外面は胴部ヘラケズリ後縦方向のヘラミガキ、底部木葉痕、内面はヘラナデ調整である。11は外面暗褐色、内面明褐色で、多量の長石粒の他に雲母粒を含み、焼成は良好である。12は外面暗褐色、内面褐色で、多量の長石粒の他に雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

13は土師器甕の口縁部小片である。外面には瘤状の把手痕が見える。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。色調は淡褐色で、微量の雲母末の他に、長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

14は砥石である。ほぼ全面に使用痕が見える。15・16は鉄製刀子である。15は図上でほぼ全形が復元できる、切先は丸まり、背に関をもち、茎端部には柄の木質が残っている。16は茎のみの資料である。

17は用途不明の棒状土製品である。

187竪穴住居出土遺物(第50図, 図版31)

1・2は須恵器杯とともに新治産と考えられる。1は内外面に油煙煤が見える。外面底部回転ヘラ切り後口縁部下端を回転ヘラケズリ、底部全面を手持ちヘラケズリ調整をしている。赤褐色で、多量の雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。2は外面口縁部下端を回転ヘラケズリ、底部全面を手持ちヘラケズリ調整している。暗褐色で、多量の雲母粒と石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

3はロクロ土師器杯である。底部を欠失しており、外面口縁部下端は回転ヘラケズリ調整である。赤褐色で、多量の雲母粒と石英粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

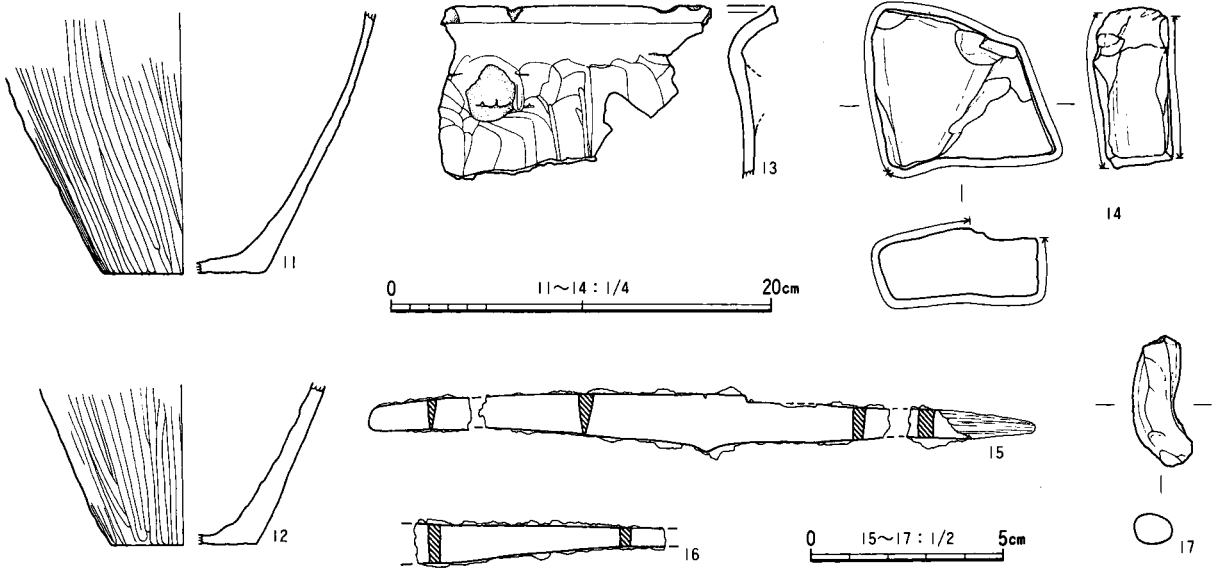
4は須恵器蓋小片である。図示部分の外面上半は回転ヘラケズリ調整で、外面橙褐色、内面暗褐色で、微量の石英粒・酸化鉄粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。

5は須恵器甕である。頸部をもたない寸胴型の形態である。調整は口縁部内外面ともに回転ナデ、胴部外面は上半が縦方向の平行タタキ、下半が横方向のヘラケズリ、底部外面は圧痕が見える。内面は胴部に当具痕が見えるが、胴部から底部にかけてのヘラナデで消している。淡褐色で、多量の雲母粒・長石粒の他に酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。新治産と考えられる。

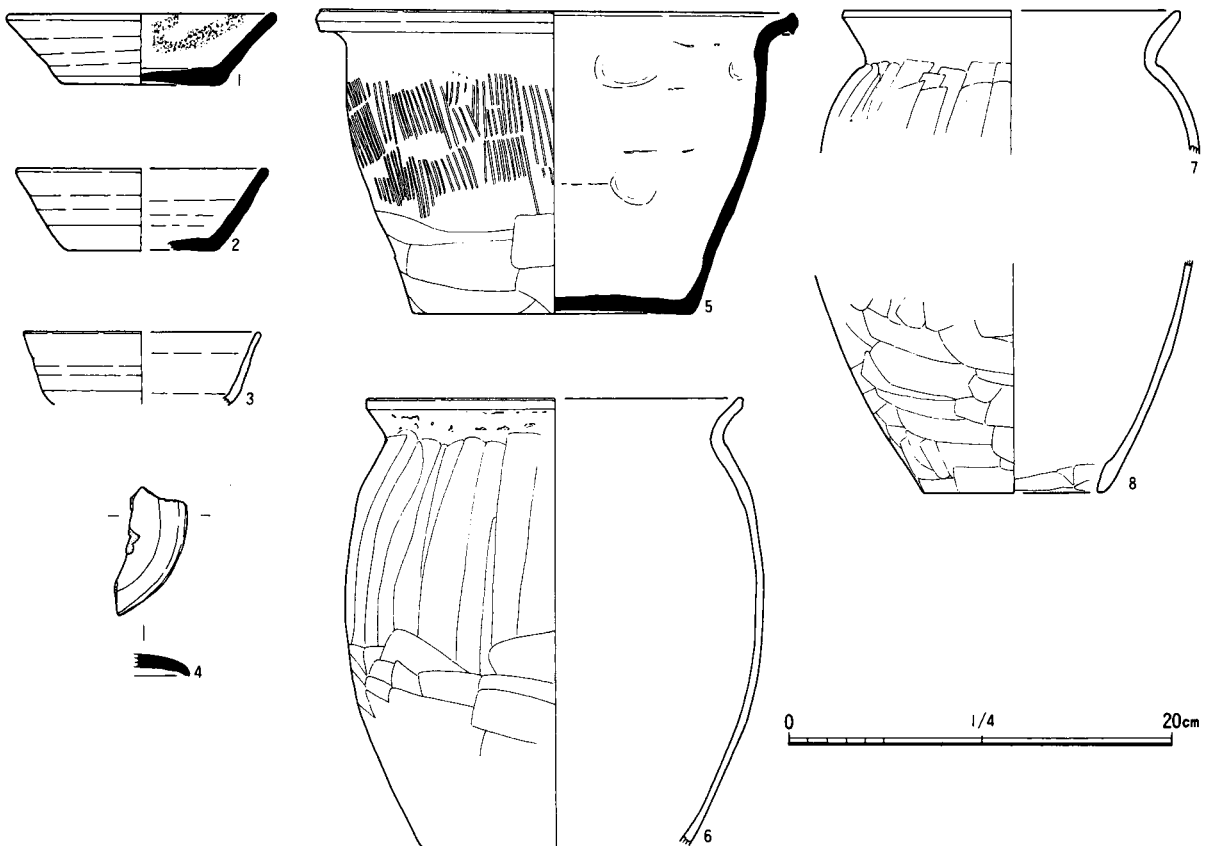
6・7は土師器甕である。調整技法は共通で、口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部は外面が上半縦方向、下半横方向のヘラケズリで、内面はヘラナデである。6は外面赤褐色、内面淡褐色で、多量の雲母粒・酸化鉄粒の他に石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。7は外面赤褐色、内面暗褐色で、少量の雲母粒・石英粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

8は土師器甕である。外面から内面底部下端にかけてヘラケズリ、内面はヘラナデである。淡褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

185



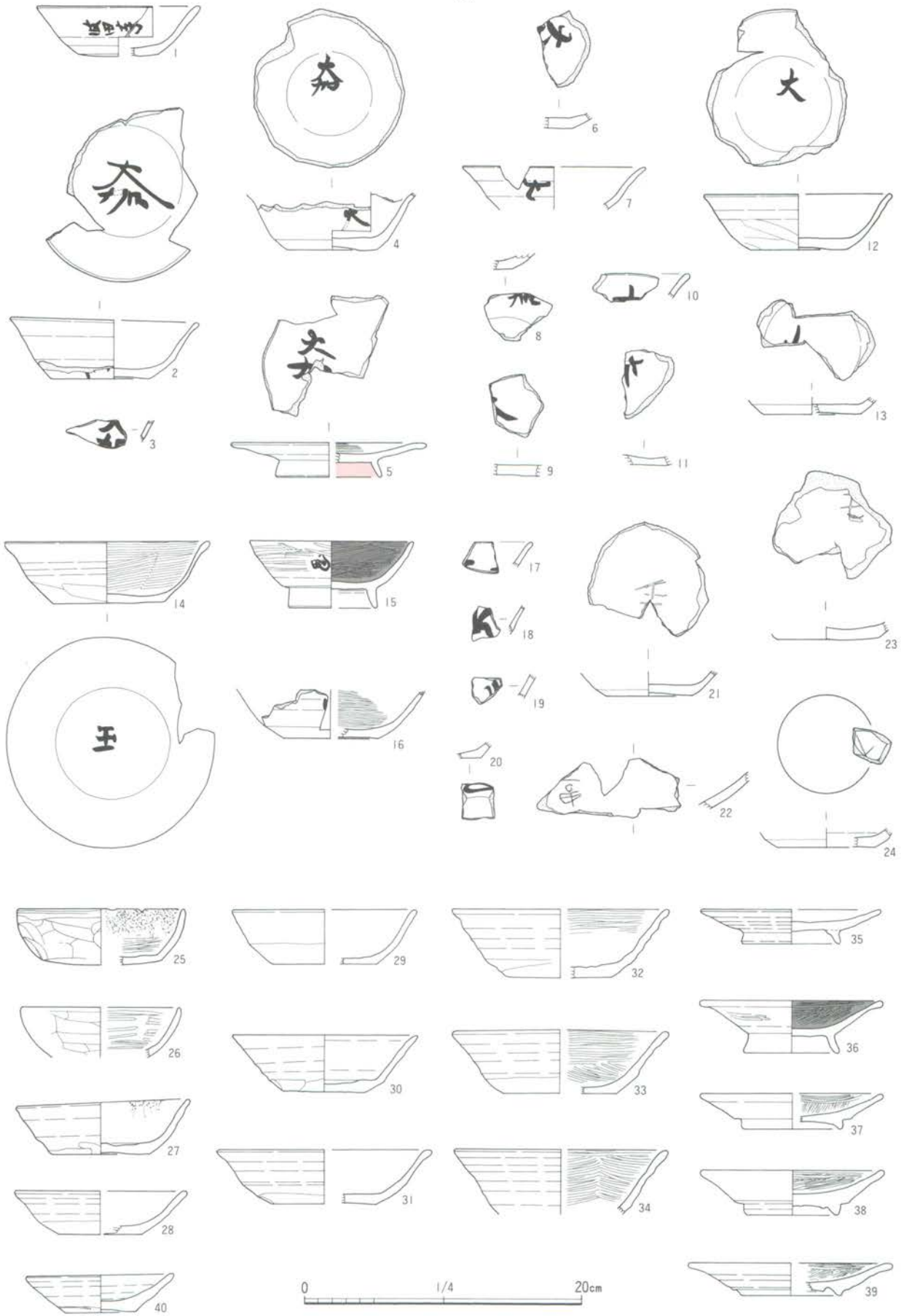
187



第50図 185・187竪穴住居出土遺物

188竪穴住居出土遺物（第51・52図，図版31）

1～24はすべてロクロ土師杯器で文字もしくは記号が記された資料である。1は杯で外面口縁部に横位で「波田寺」と墨書されている。外面底部回転糸切り後，口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整をしている。褐色で，多量の雲母粒の他に長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。2は杯で，外面口縁部下端に若干の墨痕と内面底部に「大加」の墨書が見える。調整は1と同様で，色調は褐色，微量の雲母粒・海綿骨針と酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。3は杯小片で部分的ではあるが「大加」と考えられる墨書が口縁部外面に正位で記されている。色調は褐色で，雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。4は杯で，口縁部外面に正位で「大」，底部内面に「大加」と墨書されている。調整技法は1と同様で，色調は暗褐色，長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。5は高台付皿で，皿部の内面中央に「大加」と墨書されている。外面底部回転糸切り後周縁部のみ回転ヘラケズリ，内面は全面ヘラミガキである。全体は褐色だが，底部外面高台の内側は赤色である。赤彩ではなく朱墨を溶いた可能性が高い（研磨痕は無い）。長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み，焼成は良好である。6は杯で，底部内面に「大□（加カ）」の墨書が見える。調整は1と同様である。褐色で，雲母粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。7は杯で，口縁部外面に横位で「大」と墨書されている。褐色で，雲母粒・酸化鉄粒の他に多量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。8は杯小片で，口縁部外面下に正位で「加」と墨書されている。上に「大」があった可能性が高い。明褐色で，雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。9は杯で底部内面に「□（大カ）」の墨書が見える。外面底部回転糸切り後，口縁部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリを行っている。外面淡褐色，内面暗褐色で，雲母粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。10は杯で口縁部外面上位に正位で「□（大カ）」の墨書が見える。外面褐色，内面赤褐色で，雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。11は杯で底部内面に「大」の墨書が見える。調整技法は1と同様で，外面淡褐色，内面暗褐色で，雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。12は杯で，底部内面に「大」の墨書が見える。外面底部回転糸切り後，口縁部下端から底部周縁にかけて回転糸切りを施している（図化部分はヘラの継ぎ目である）。色調は淡褐色で，長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。13は杯で底部内面に「□（大カ）」と墨書されている。調整技法は1と同様で，色調は褐色，多量の雲母粒と長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。14は大型の杯で，底部外面に「□（玉カ）」と墨書されている。外面底部回転糸切り後，口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ，内面全体にヘラミガキ調整を行っている。外面褐色，内面淡褐色で，微量の海綿骨針の他に長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。15は内面黒色処理の高台付杯である。口縁部外面に横位で「冨」と墨書されている。内面全体から外面口縁部にかけてはヘラミガキで，外面のヘラミガキは内面に比べて粗い。外面底部高台の内側は回転糸切り後無調整である。色調は外面褐色，内面黒色で，雲母粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。16は14同様大型の杯で，整形技法も14同様である。口縁部外面に墨痕が見えるが一部のみで遺存であるので釈読は不能である。色調は外面褐色，内面淡褐色で，雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含む。17は杯で口縁部外面に墨書があるが，部分的な資料であるために，釈読はおろか一字なのか二字なのか不明である。色調は褐色で，雲母末・海綿骨針を含み，焼成は良好である。18は杯で口縁部外面に墨書が見えるが，小片のために字数の確認，釈読は不能である。色調は淡褐色で，雲母粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。19は杯である。口縁部外面に横位で墨



第51図 188竪穴住居出土遺物

書が記されているが、小片のために字数の確定・釈読は不能である。色調は褐色で、雲母粒・長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。20は杯で、口縁部外面下端に墨書が見えるが、釈読不能である。遺存部位は外面回転ヘラケズリ調整である。色調は褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。21は杯で、底部内面に線刻が見えるが釈読は不能である。調整技法は1と同様である。色調は外面褐色、内面黒褐色で、雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。22は杯で、外面口縁部に「冨」の線刻がある。調整は外面下半部が回転ヘラケズリ、内面はミガキである。23は杯で、底部内面に「×」の線刻がある。調整は外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ、内面はヘラミガキである。色調は外面褐色、内面黒褐色で、雲母粒・石英粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含む。焼成は良好である。24は内面底部と口縁部の境付近に線刻があるが、小片のため記号であるのか文字であるのか不明である。外面底部は回転糸切り後無調整、口縁部下端は回転ヘラケズリである。褐色で、雲母末・石英粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

25・26は土師器杯である。25は口縁部内面の図示部分に油煙煤が付着している。外面口唇部はヨコナデ、口縁部上位から底部全面にかけては手持ちヘラケズリ、内面は全面ヘラミガキ調整である。色調は外面赤褐色、内面暗褐色で、雲母末を含み、焼成は良好である。26は口唇部のみヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ヘラミガキ調整である。淡褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針の他に多量の酸化鉄粒を含む。焼成は良好である。

27～34はロクロ土師器杯である。27は内面口縁部の図示部分に油煙煤が付着している。外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリを行っている。全体に明褐色で、部分的に暗褐色である。少量の雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。28は外面底部回転ヘラケズリ後、口縁部下位から底部周縁にかけて回転ヘラケズリを行っている。色調は内面全体から外面口縁部上位にかけてが黒褐色（黒色処理ではない）、それ以外の部分が淡褐色である。雲母末・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。29は外面口縁部下半から底部にかけて回転ヘラケズリを行っている。色調は明褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。30は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整を行っている。色調は淡褐色で、雲母末・石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。31はやや歪みが大きい。外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。外面赤褐色、内面暗褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。32は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ、内面ヘラミガキ調整である。内面底部付近の器面はやや摩耗している。色調は内外面黒褐色で、いわゆるクスベ焼きの色調に近いが、土師器としてまちがいないと考えられる。雲母粒・末・石英粒・長石粒の他に微量の酸化鉄粒を含む。焼成は良好である。33は外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ、内面全面はヘラミガキ調整を行っている。色調は淡褐色で、雲母粒・末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。34は底部を欠失しており、遺存部分の外面はロクロ調整のみ、内面はヘラミガキ調整である。色調は内外面ともに赤褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。

35～39はロクロ土師器高台付皿である。35は全面ロクロ調整を施してあり、色調は黄褐色、雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。36は内面黒色処理で、皿部は内外面ヘラミガキ、それ以外の部分はロクロ調整である。器面は摩耗が進んでいる。雲母粒・末を含み、焼成は良好である。37は全体に黒褐色で

あるが、黒色処理ではない。外面底部は回転ヘラケズリ後無調整で、それ以外の部分はロクロ調整である。雲母粒・末・石英粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。38は皿部内面ヘラミガキで、それ以外の部分はロクロ調整である。色調は外面が褐色で、内面が黒褐色であるが黒色処理ではない。雲母粒・末・石英粒・長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。

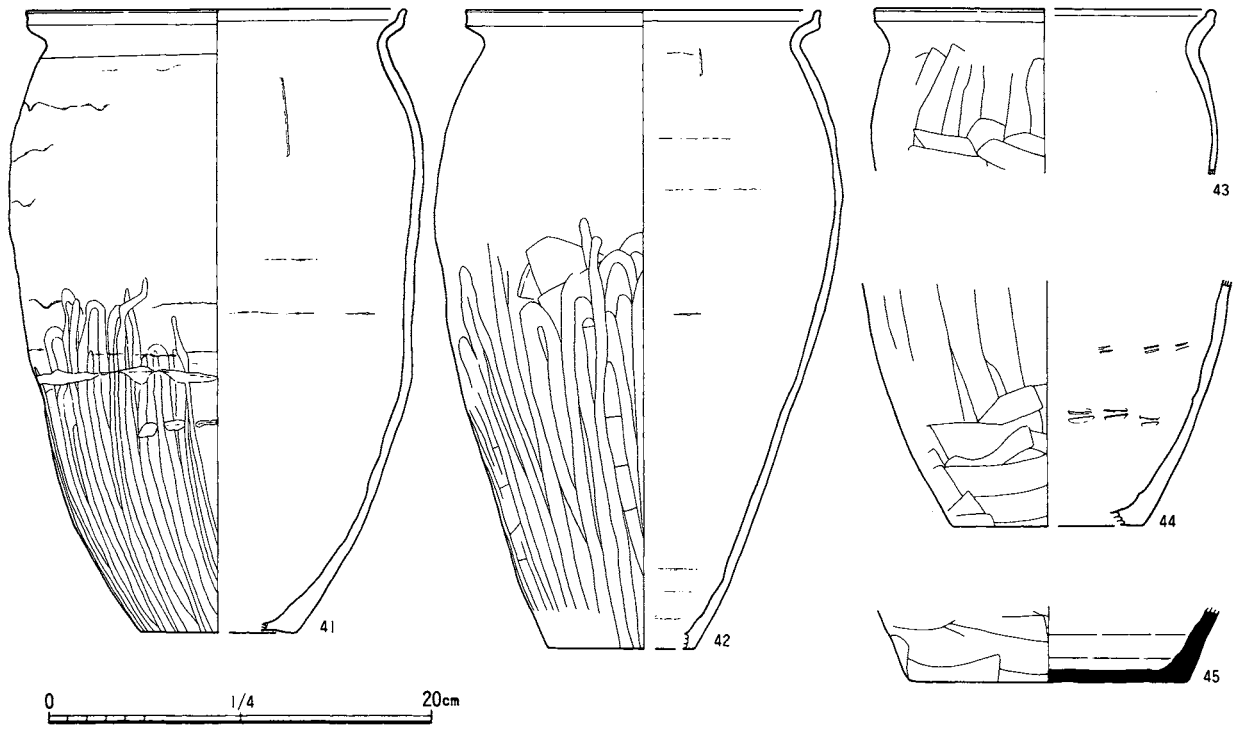
40はロクロ土師器皿である。外面は底部回転糸切り後口縁部下端から底部の一部にかけて回転ヘラケズリ調整を行っており、それ以外の部分はロクロ調整である。雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

41～44は土師器甕である。その内41・42は常総型甕で共通の整形技法を行っている。口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部は外面が上半ヘラナデ、下半はヘラケズリ後縦方向のヘラミガキで、内面は底部にいたるまでヘラナデ、底部外面は工具不明であるがナデ調整である。41は全体に暗褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。42は、外面黄褐色、内面暗褐色で、少量の雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。43は口縁部内外面ともにヨコナデ、胴部は上位外面縦方向・下位横方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。色調は全体に赤褐色で、雲母粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。44は外面は胴部上位が縦方向・下位が横方向のヘラケズリで、胴部もヘラケズリ、内面は全面ヘラナデ調整である。色調は全体に暗褐色で、焼成は良好である。

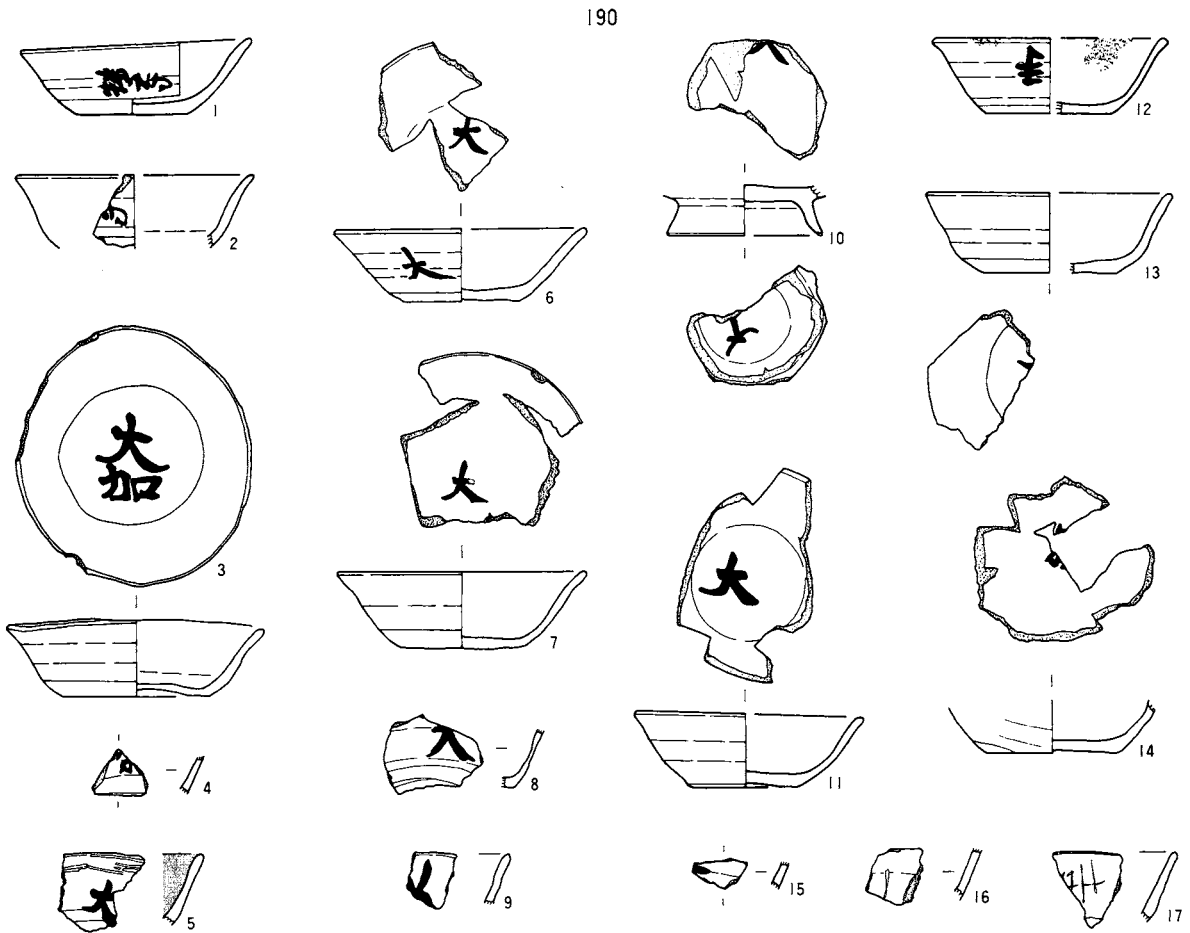
45は須恵器甕底部片である。色調は暗灰褐色で、調整は外面胴部横方向のヘラケズリ、底部無調整で、内面は全体にヘラナデである。雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

190 竪穴住居出土遺物 (第52・53図, 図版32)

1～17はロクロ土師器杯ですべて文字を有する資料である。1は口縁部外面に横位で「播寺」と墨書されている。外面口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ、底部中央は手持ちヘラケズリ調整である。色調は全体に橙色で、多量の雲母粒、長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含む。焼成は良好である。2は外面口縁部に横位で「□(寺カ)」と墨書されている。筆筋から見て1と同様に「幡寺」である可能性が高い。外面口縁部下端回転ヘラケズリ調整で、色調は橙色、多量の雲母粒、微量の海綿骨針の他に、酸化鉄粒を含む。焼成は良好である。3は内面底部に「大加」の墨書が見える。外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整で、色調は褐色、多量の雲母粒・長石粒の他に酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。4は外面口縁部に墨書があるが釈読不能である。外面口縁部下端は回転ヘラケズリ、色調は橙褐色で、多量の雲母粒と酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5は内面黒色処理を行っている。口縁部外面に正位で「大」の墨書がある。外面口縁部下端回転ヘラケズリ、内面全体から外面口縁部上位にかけてヘラミガキ調整を行っている。外面褐色、内面黒色で、雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。6は底部内面と口縁部外面に正位で「大」と墨書されている。外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整で、色調は橙色、胎土中には多量の雲母粒、微量の海綿骨針の他に酸化鉄粒を含む。焼成は良好である。7は底部内面に「大」の墨書をもつ。外面底部糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。外面橙褐色、内面暗褐色で、多量の雲母粒と酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。8は口縁部外面に正位で「大」と墨書されている。外面口縁部下端は回転ヘラケズリ、底部周縁遺存部は手持ちヘラケズリ調整である。色調は橙褐色で、雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。9は口縁部外面に横位で「□(大カ)」と墨



0 1/4 20cm



190

第52図 188・190竪穴住居出土遺物

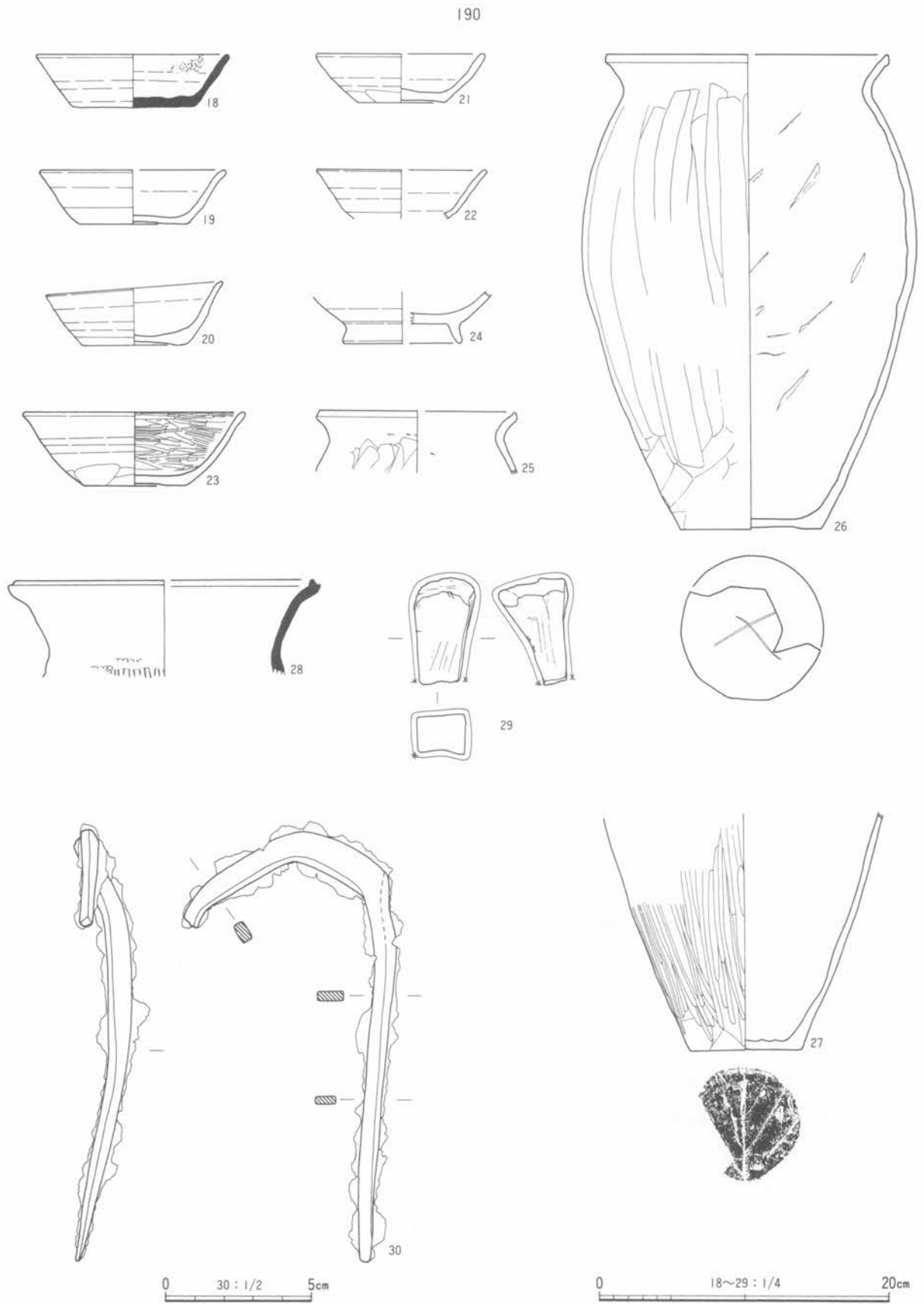
書されている。遺存部分はすべてロクロ調整である。色調は淡橙色で、雲母粒の他に少量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。10は高台付杯で、底部外面に「大」、内面に「□大カ）」と墨書されている。内面はミガキ、それ以外の部分はロクロ調整である。色調は橙色で、多量の雲母粒の他に酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。11は底部内面に「大」と墨書されている。外面底部糸切り後、外面口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整である。外面灰褐色、内面暗褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。12は口縁部内外面のスクリーントーン図示部分に油煙煤が付着している。口縁部外面には倒位で「手」と墨書されている。色調は淡橙色である。外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。13は底部外面に墨書がある。遺存部分からの推定及び他の文字との比較から「大」の可能性が高い。色調は橙色である。外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を行い、多量の雲母粒の他に、少量の海綿骨針・酸化鉄粒を含む。焼成は良好である。14は底部内面に墨書が見られるが、部分資料のため釈読不能である。遺存部位は外面はすべて手持ちヘラケズリ、内面はすべてロクロ調整である。色調は内面赤褐色、外面淡橙色である。雲母末、微量の海綿骨針、多量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。15は口縁部中位の小片である。外面に墨書が見えるが、小片のために釈読は不能である。遺存部分はすべてロクロ調整である。色調は橙褐色で、雲母粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。16は口縁部中位の小片で、外面に線刻が見える。小片のために文字であるのか、記号であるのかも不明である。遺存部分はすべてロクロ調整である。色調は赤褐色で、雲母末・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。17は口縁部上半の資料で、外面に線刻がなされている。部分資料であるが「寺」と刻まれている可能性が高い。外面口縁部下端は回転ヘラケズリ、他の部分はロクロ調整で、色調は淡褐色である。雲母粒と少量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。

18は須恵器杯である。口縁部内面上位に油煙煤の付着が見られる。外面底部は手持ちヘラケズリ、それ以外の部分はすべてロクロ調整である。色調は外面が部分的に灰褐色、それ以外は全体的に青灰色である。酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。

19～23はロクロ土師器杯である。19は外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。色調は橙色で、多量の雲母粒の他に酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。20は外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整である。色調は外面橙色で内面は黒味が強く黒褐色に近く、もともとは黒色処理であった可能性もある。雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。21はやや小型で、器肉も厚く、やや鈍重な印象を受ける。外面口縁部下端から底部全面にかけては手持ちヘラケズリ調整である。色調は暗褐色で、多量の雲母粒の他に、石英粒・酸化鉄粒を含み、その他の石粒も多めに含む。焼成は良好である。22は底部を欠失した口縁部のみの復元資料である。外面口縁部下端は回転ヘラケズリ調整、それ以外の部分はロクロ調整である。色調は淡褐色で、雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。23は大型で、無高台の椀と呼んでもよい器形である。外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリで、内面は全面ヘラミガキ調整である。色調は全面橙色で、多量の雲母粒を含み、焼成は良好である。

24はロクロ土師器高台付杯である。杯部内面はミガキで、それ以外の部分はすべてロクロ調整である。色調は橙色で、雲母粒・長石粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。

25～27は土師器甕である。25は口縁部のみの小片の復元実測である。口縁部は内外面横ナデ、胴部は外



第53图 190竖穴住居出土遺物

面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。色調は橙色で、雲母粒・石英粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。26は口縁部は内外面横ナデ、胴部は下端が斜めから横方向のヘラケズリ、それより上の部分は縦方向のヘラケズリ調整である。内面胴部から底部にかけては斜方向のヘラナデ、底部外面はヘラケズリの後に「×」の線刻が記されている。色調は全体に橙色で、多量の雲母粒・酸化鉄粒、少量の長石粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。27は常総型甕の胴部中位以下の資料で、外面底部には木葉痕が見える。調整は胴部外面が縦方向のヘラミガキ、内面がヘラナデである。色調は淡褐色で、多量の石英粒・砂粒の他に雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

28は須恵器甕又は甗の口縁部資料である。口唇部は内側を上方に摘み上げる形態で、口縁部は全体に開いた後に、口唇部付近で外側に広げながら内彎している。調整は口縁部が内外面ともにロクロ調整、胴部は外面が縦方向の平行タタキ、内面がヘラナデである。色調は橙色で、多量の雲母粒、微量の海綿骨針の他に長石粒を含む。焼成は酸化焰焼成であるが、良好である。

29は砥石である。石材は流紋岩で、遺存部破断面以外はほぼ全面に使用痕がある。

30は鉄製品である。断面細身の長方形である。屈曲状況からくる錠の鑰との可能性も考えられるが、屈曲状況が直角でないこと、断面が細身の長方形であることなどから断定はできない。

191 竪穴住居出土遺物 (第54図, 図版32)

1は永田・不入窯産須恵器高台付杯である。底部外面に二条のヘラ書き線が見える。内面はすべてロクロ調整、外面は底部中央が回転ヘラケズリで、口縁部から高台内側周縁部までロクロ調整である。色調は灰白色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

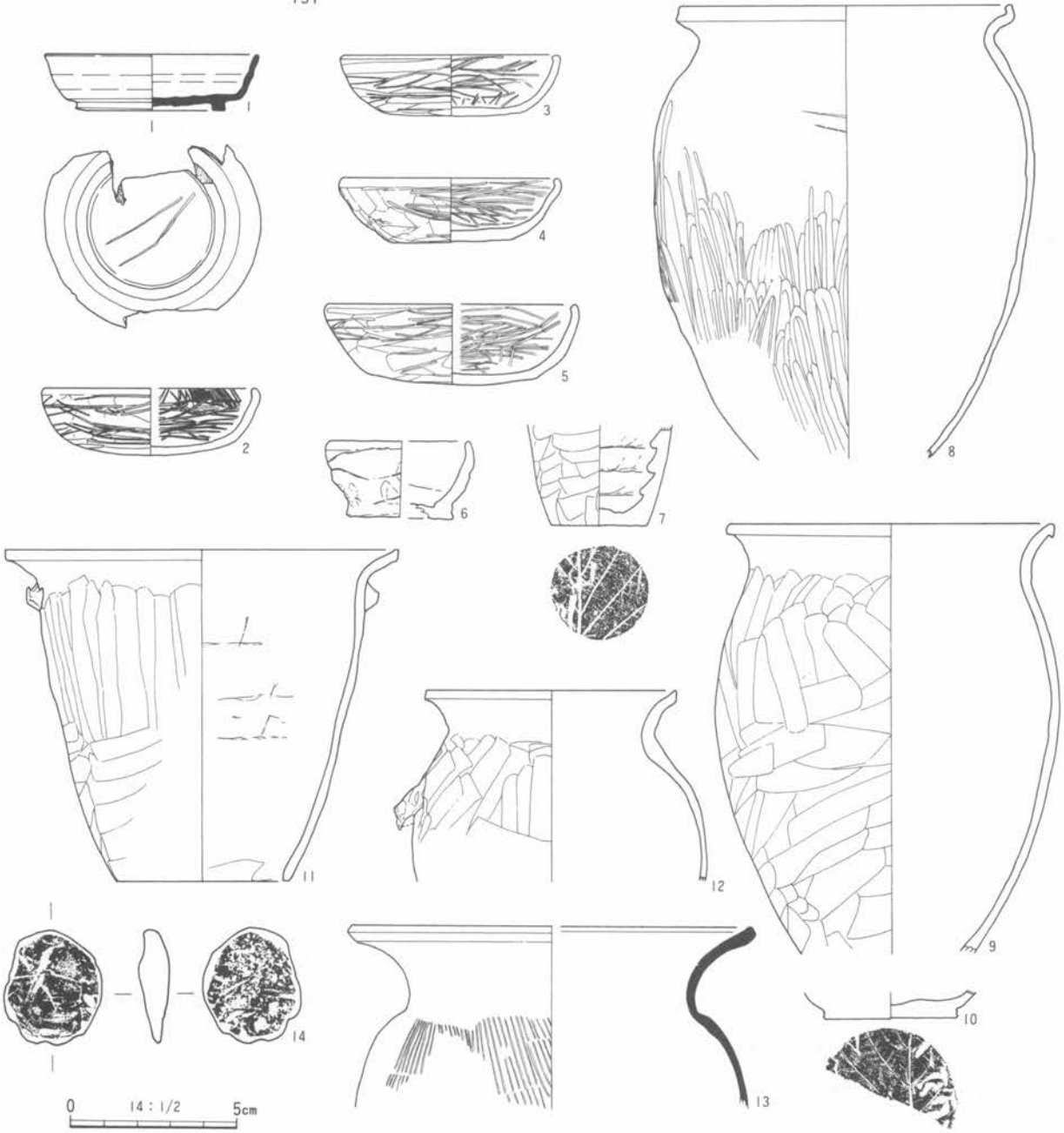
2～5は土師器杯である。2は内外面ともに暗褐色で、色調から見て当遺跡では数少ない器面樹脂仕上げの可能性が高い。調整は外面口唇部ヨコナデ、外面は全面手持ちヘラケズリの後に粗いミガキ、内面は全面丁寧なヘラミガキ調整である。多量の雲母末、微量の石英粒を含み、焼成は良好である。3は色調橙褐色で、調整技法は2と同様である。多量の雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。4は他の個体に比べ口唇部がやや強く内彎する形態である。橙褐色で、調整技法は前二者と同様である。多量の雲母粒の他に石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5は比較的大型である。調整技法は前三者と同様である。色調は淡橙色で、雲母末・石英粒・長石粒の他に多量の酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含む。焼成は良好である。

6は手捏ね土器である。底部外面にわずかに木葉痕が見える。淡褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を少量含み、焼成は普通である。

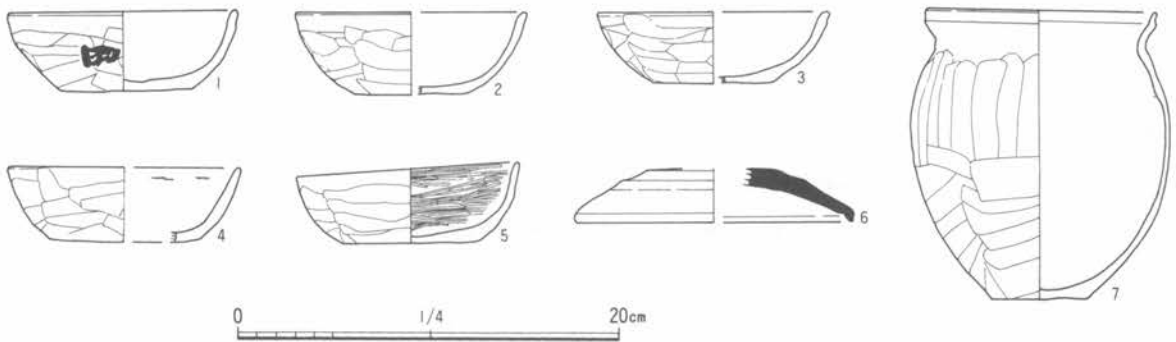
7はコップ型の形状であるが、口縁部を欠失しており、器形の断定はできない。外面は体部横方向のヘラケズリ、底部木葉痕、内面は粘土紐接合痕を明瞭に残し、そのあとを斜方向のナデで調整している。通常の粘土紐とは逆の積み方であるが、木葉痕の存在からこの上下の復元で問題無いと思われる。色調は淡橙色で、多量の雲母粒の他に長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

8～10は土師器甕である。8は常総型甕である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面全体をヘラケズリの後に、上半ヘラナデ、下半縦方向のヘラミガキ、内面ヘラナデ調整である。橙褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。9・10は同一個体と考えられるが、接合点がない。9は口縁部内外ともにヨコナデ、胴部は外面上位縦方向、下位横方向のヘラケズリで、内面はヘラナデ調整であ

191



193



第54図 191・193竪穴住居出土遺物

る。色調は淡褐色で、雲母粒・石英粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。10は内面ヘラナデで、外面には木葉痕が見える。色調は外面淡褐色、内面暗褐色である。

11は堅緻で焼成も良好な点は須恵器であるが、色調・整形技法からここでは土師器として認識する。器形は甗で外面口縁部と胴部の境に方形の把手があり、底部は単孔式である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面上半が縦方向、下半が横方向のヘラケズリで、内面は横方向のヘラナデ後ヘラミガキを行っている。底部はヘラケズリ調整である。色調は淡橙色の部位と暗褐色の部位があり、多量の雲母粒の他に石英粒・長石粒・酸化鉄粒と微量の海綿骨針を含む。千葉市域産と考えられる。

12は土師器で、本来甗として製作したものと考えられる。外面胴部上位片面に粘土瘤が見える。亀裂補修と考えるが、一見メダイオン状の瘤である。口縁部は内外面ロクロナデ、胴部は外面上位縦方向、下位横方向のヘラケズリで、内面はヘラナデ調整である。口縁部は内外面橙褐色で、胴部は内外面ともに黒褐色である。雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒・海綿骨針を含み、焼成はきわめて堅緻である。

13は須恵器甗である。口縁部は内外面ロクロ調整、胴部は外面縦方向の平行タタキ、内面はヘラナデ調整である。色調は橙色で、酸化焰焼成であるが、焼成は堅緻である。多量の雲母粒・長石粒の他に酸化鉄粒を含む。

14は用途・性格不明の土製品である。指で成形し、表裏に植物繊維圧痕が見える。

193 堅穴住居出土遺物 (第54・55図, 図版32)

1～5は土師器杯である。1～4は整形技法が共通で、口縁部上端は内外面ヨコナデ、外面口縁部上位以下底部まで手持ちヘラケズリ、内面はナデ調整である。1は外面口縁部に正位で「田」の墨書が記されている。色調は外面赤褐色、内面淡橙色で、雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含む。焼成は良好である。2は暗褐色で、いわゆるクスベ風の焼上がりである。雲母粒・酸化鉄粒の他に微量の長石粒・海綿骨針を含む。焼成は良好である。3は淡橙色で、多量の酸化鉄粒、少量の雲母末、微量の石英粒を含み、焼成は良好である。4は外面赤褐色、内面淡褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5は外面の調整は前四者と同じであるが、内面はミガキ調整を行っている。色調は全体に暗褐色で、内面の状況からは樹脂仕上げのように見える。少量の雲母粒と多量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

6は須恵器杯蓋である。ツマミ部分を欠失している小片で、外面上半は回転ヘラケズリ、それ以外の部分はロクロ調整である。胎土中には大粒の石英粒、多量の雲母粒を含み、全体にザラザラした仕上がりである。焼成は良好である。

7は土師器小型甗である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面上半縦方向、下半横方向のヘラケズリで、内面は胴部から底部にかけて全面ヘラナデ、外面底部はヘラケズリ調整である。雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、色調は赤褐色で、内外面ともに上半に煤の付着が見られる。焼成は良好である。

8・9は土師器常総型甗である。8は口縁部横ナデ、胴部は外面全面にヘラナデを行った後に下半に縦方向のヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。多量の雲母粒・石英粒・長石粒のほかに酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。9は外面胴部縦方向のヘラミガキ、底部木葉痕を一部ナデで消している。内面は全面にヘラナデ調整である。多量の石英粒・長石粒の他に雲母末・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

10は土師器杯の底部と考えられる。破断面に研磨痕が見えることから、意図的な整形かと考えられる。

11は流紋岩製の砥石である。下端破断面以外の部分にはすべて使用による研磨痕が見える。

12・13は鉄製品である。12は断面正方形で、直角に曲がる形態からくる錠の鑰の可能性が高いと考えられる。13は刀子茎尻の部分資料である。

207 竪穴住居出土遺物（第55・56図，図版32・33）

1はロクロ土師器杯である。内外面全面に赤彩が施されている。外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整を施している。雲母粒・長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。

2は土師器杯である。外面はすべて手持ちヘラケズリ，内面はすべてナデ調整である。外面褐色，内面赤褐色で，雲母末・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。

3は土師器皿である。外面は全面に赤彩が施されている。外面底部のみ手持ちヘラケズリをした後に内外面全面に丁寧なヘラミガキを施しているが，使用によって器表面の摩耗が進んでいる部分は器肉本来の砂っぽいザラザラした器面になっている。胎土中には多量の砂粒と長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。

4～6は新治産と考えられる須恵器杯である。4は外面口縁部下端～底部周縁にかけて手持ちヘラケズリを行っている。灰白色で，白雲母粒・長石粒を含み，焼成はやや甘く器面の摩耗が進んでいる。5は底部外面に線刻が見える。外面底部は回転ヘラ切り後摩耗が進み調整は見えない。外面口縁部下端は手持ちヘラケズリ調整である。白雲母粒・長石粒を含み，焼成は良好であるが，部分的に摩耗が進んでいる。6は底部外面に「×」の線刻が見える。外面底部回転ヘラ切り後底部周縁のみ手持ちヘラケズリ調整を行っている。

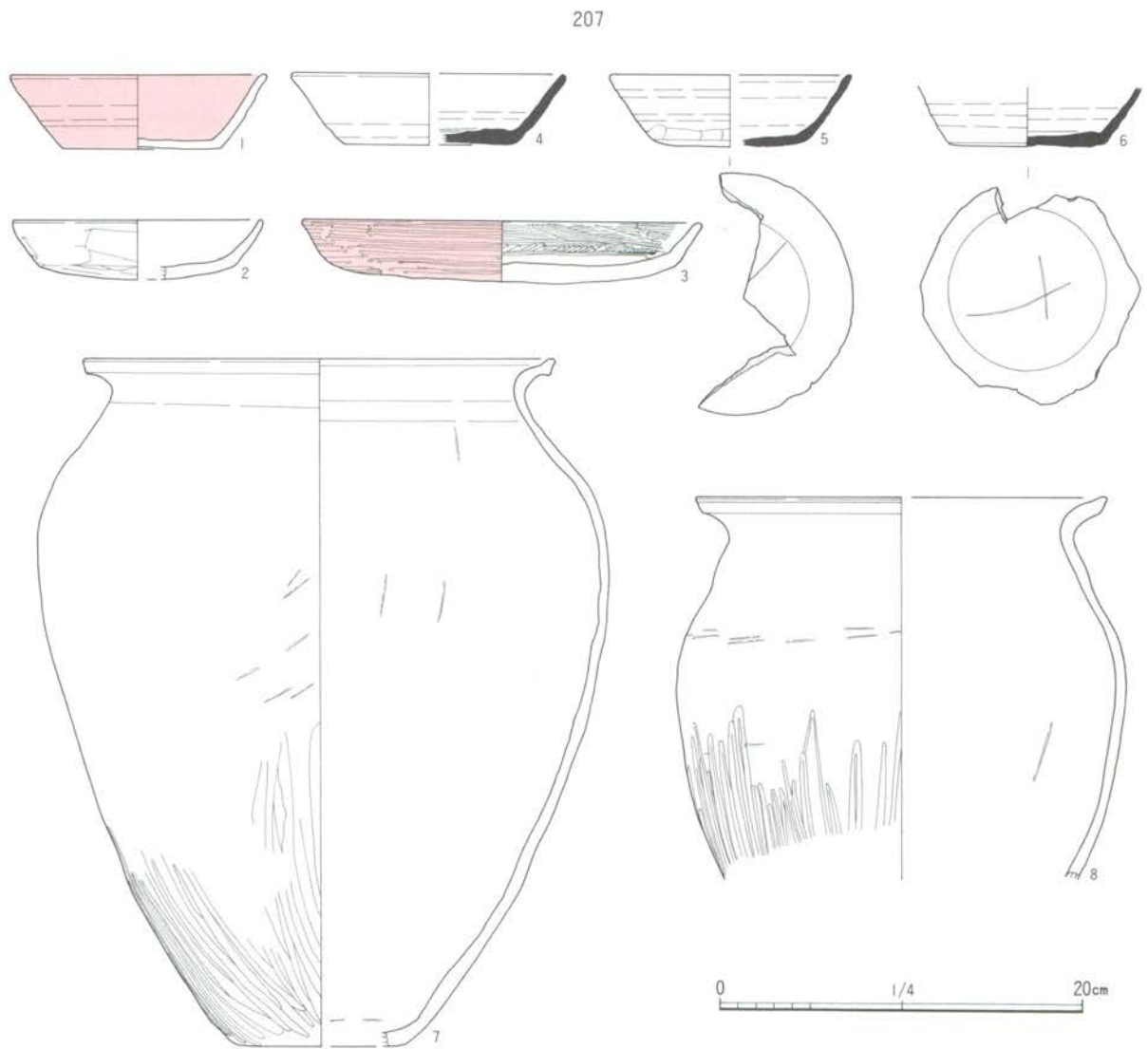
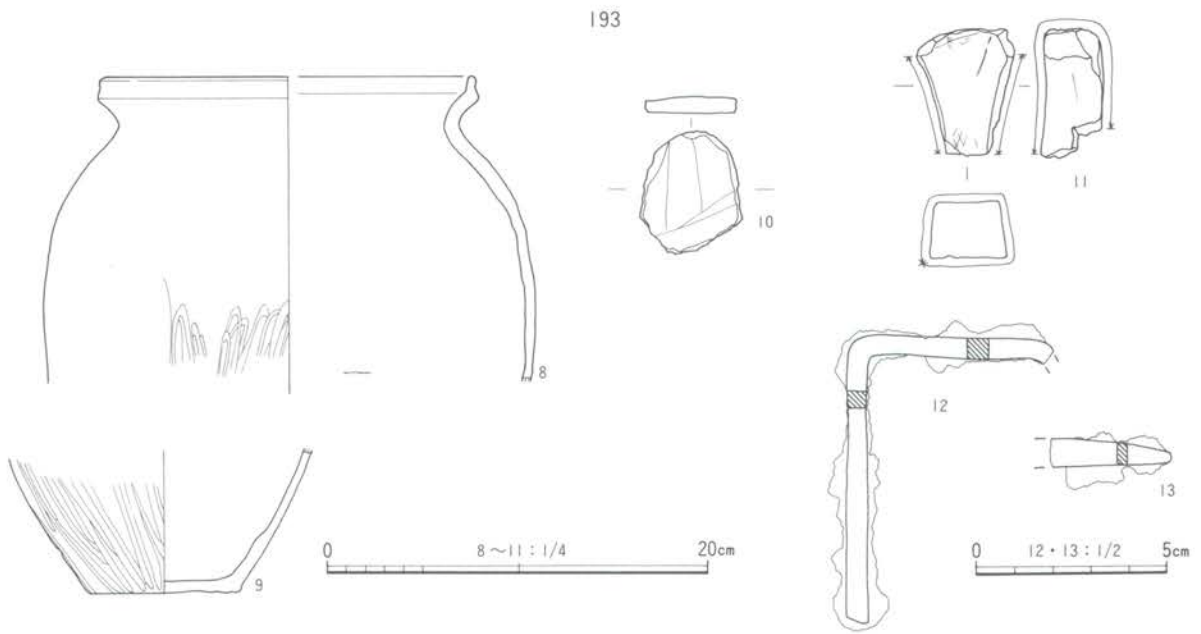
7・8は土師器常総型甕である。調整技法は共通で，口縁部内外面ヨコナデ，胴部は外面がヘラナデ後半部に縦方向のヘラミガキ，内面が底部までヘラナデ，外面底部はヘラナデ調整である。7は暗赤褐色で，雲母粒少量，長石粒多量，砂粒多量の他に酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。外面胴部中位はやや摩耗が進んでいる。8は雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。

9・10は土師器甕である。9は口縁部ヨコナデ，胴部内外面ヘラナデ調整である。外面赤褐色，内面暗褐色で，石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。10は底部資料で，外面はすべてヘラケズリ，内面はすべてヘラナデ調整である。

11は須恵器と考えられる甕である。口縁部は内外面ヨコナデ，胴部は外面縦方向の平行タタキ，内面ヘラナデ調整である。色調は褐色で，雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。

12～14は土師器甕である。13は底部を欠失しているために不明であるが，12から考えて12・13ともに単孔式と考えられる。12は口縁部内外面ともにヨコナデ，胴部は外面ヘラケズリ後にヘラナデ，内面ナデ，底部下端面はヘラケズリ後ナデ調整である。色調は淡褐色で，多量の長石粒・砂粒を含み，焼成は良好である。13は口縁部内外面ヨコナデ，胴部は外面ヘラナデ後下位のみ横方向のヘラケズリ，内面はヘラナデ調整である。色調は褐色で，多量の長石粒・砂粒，少量の雲母粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。14は外面胴部最上部に円形の突起状把手が付けられらいる。口縁部内外面横ナデ，胴部外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ調整である。色調は外面褐色，内面赤褐色で，長石・砂粒・酸化鉄粒を含み焼成は良好である。

15は須恵器長頸瓶口縁部と考えられる。口径が16.5cmとやや大型であるので，長頸瓶であれば大型でや



第55図 193・207竪穴住居出土遺物

や寸胴気味の器形が予想される。器形としては他に平瓶も想定できるが、この口径ではかなり大型になってしまい考慮しづらい。遺存部分はすべてロクロ整形で、色調は灰色、長石粒を少し含み、焼成は良好である。

16～25は手捏ね土器である。16～23は腰部に屈曲をもつか否かの差異はあるが、すべて皿形の器形である。指頭圧痕を強く残しているが、ナデ調整を施している。本遺構からはこのほかに多量の同器形手捏ね土器を出しており、その破片数は図示した以外に15点である。平均的様相としては色調は褐色から赤褐色で、胎土中には長石粒・砂粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。24は図示していないが外面底部に木葉痕が残っており、それ以外の部分はナデ調整である。色調は褐色で、長石粒・砂粒を含み、焼成は良好である。25も図示していないが、底部外面に木葉痕が見える。調整としては全体に丁寧なナデで、指頭痕もほとんど見えないことから、粗製小型甕の可能性もある。褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

26・27は羽口片である。

28は凝灰岩製の砥石片である。

29・30は性格不明の土製品である。通常これらのような形態の土製品には植物繊維や植物種子などが混入しているものであるが、両者にはどちらも混入していない。29は一部欠失しているが、ほぼ完形品である。楕円形に整形した断面三日月形の粘土板を右手で二回繰り返して握ったようで、指の痕跡が明瞭に残っている。指の太さから見て子供もしくは細身の女性のものであると考えられる。褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。30は断面中空になっており、これのみで単体の製品なのか、何かから剥落した部品であるのかは不明である。中空側の折れ曲がった端面には平行に篲の子状の沈線が走っている。橙褐色で、雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

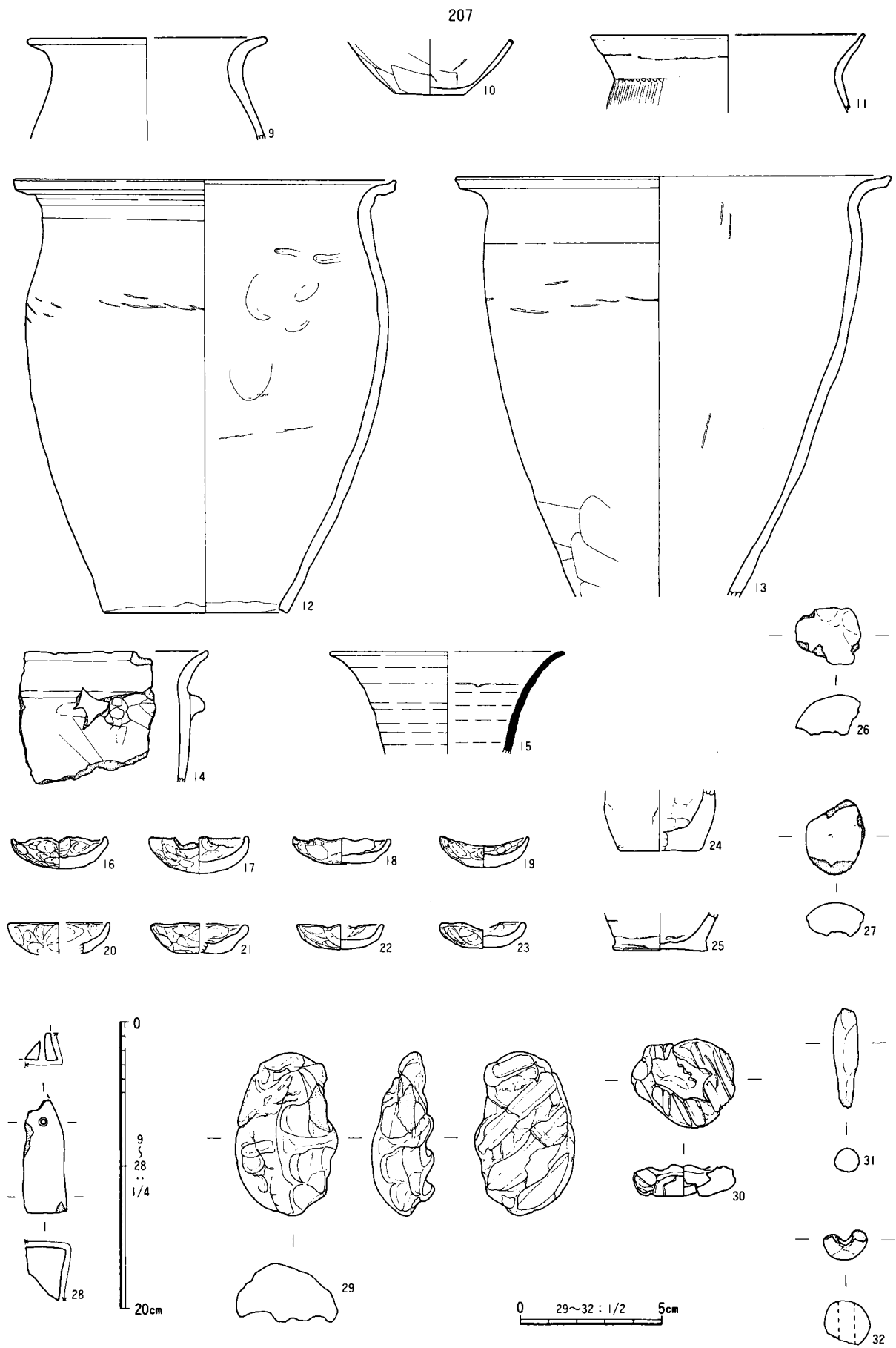
31は性格不明の棒状土製品である。下端は欠失している。

32は土玉である。

208竪穴住居出土遺物（第57・58図、図版33）

1・2は新治産と考えられる須恵器杯である。1は外面底部回転ヘラ切り後無調整、口縁部下端のみ回転ヘラケズリ調整である。色調は灰褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。2は外面口縁部下端から底部遺存部位まで全面手持ちヘラケズリ調整を行っている。色調は灰色で、多量の長石塊と少量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

3～9はロクロ土師器杯である。3は外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整である。淡褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。4は調整技法は3と同様である。褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5も調整技法は前二者と同様である。淡褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。6は外面底部回転糸切り後無調整で、外面口縁部下端のみ回転ヘラケズリ調整である。淡褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み焼成は良好である。7は調整技法は3～5と同様である。褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒の他に少量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。8も調整技法は7と同様である。褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。9は外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリが施されている。色調は淡褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。



第56图 207竖穴住居出土遺物

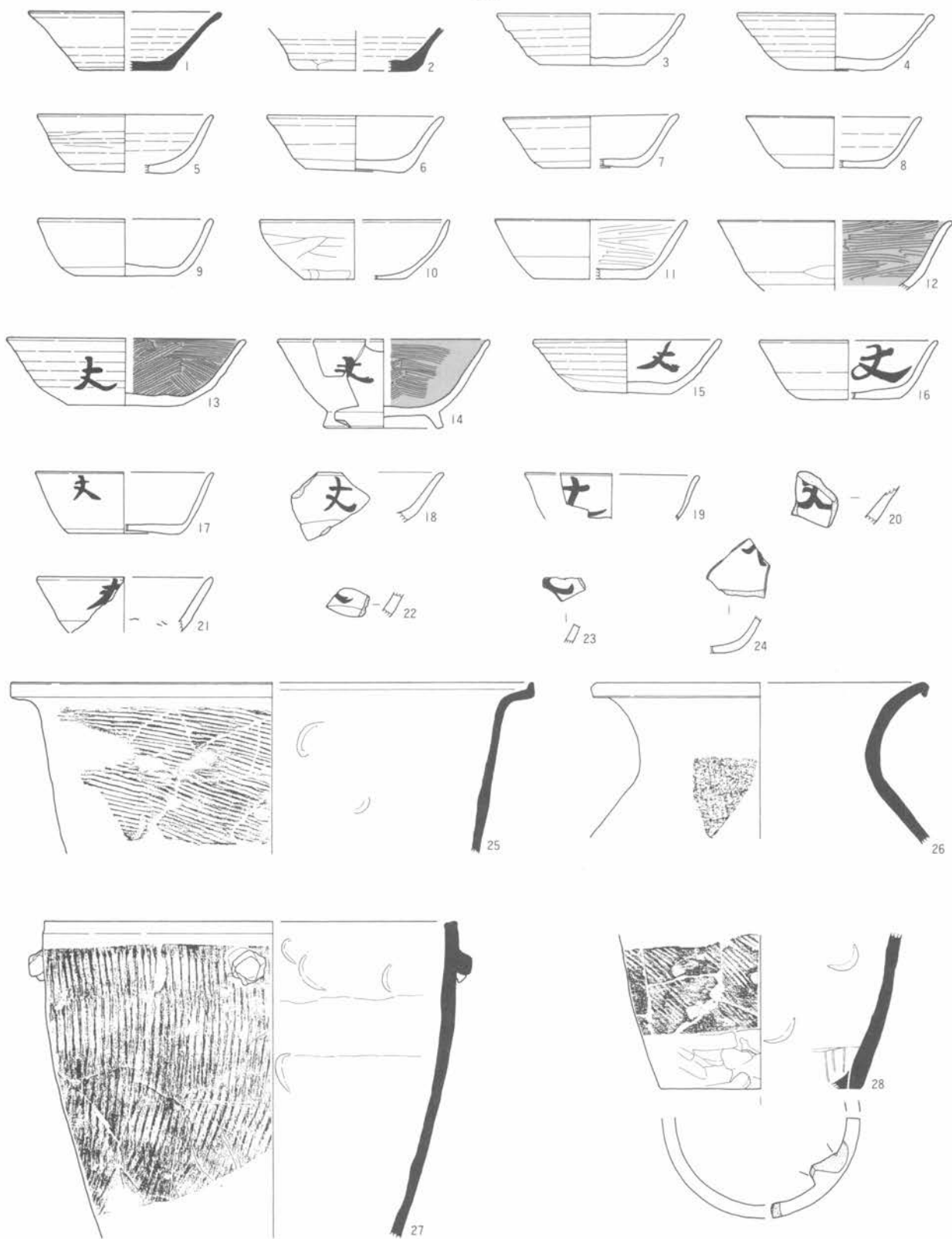
10は土師器杯である。外面口縁部上位から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ、外面口縁部上位から内面全面にかけてナデ調整である。色調は暗褐色で、微量の雲母末の他に長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。

11・12は内面ミガキ調整のロクロ土師器杯である。11は外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を施している。色調は赤褐色で、微量の雲母末の他に長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。12は内面に黒色処理を施している。底部を欠失しており、外面口縁部下端は回転ヘラケズリ調整である。外面は淡褐色で、海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

13～24はロクロ土師器で、すべて墨書が記されている。13は杯で、口縁部外面中位に正位で「丈（または「大」）」と墨書されている。内面にはヘラミガキの後に黒色処理が施されており、外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。外面は淡褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。14は高台付杯で、外面口縁部やや上寄りの部位に正位で「丈」と墨書されている。内面はミガキの後に黒色処理が施されている。外面高台内側は回転糸切り後無調整、口縁部下端は回転ヘラケズリ調整である。外面は淡褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。15は杯で、口縁部内面に正位で「丈（または「大」）」と墨書されている。調整は3～5などと同様である。褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。16は杯で口縁部内面に「丈」と墨書されている。調整は15などと同様である。褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。17は杯で口縁部外面上位に「丈」と墨書されている。調整は15などと同様である。褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。18は杯口縁部小片で外面上位に「丈」と墨書されている。外面下端は回転ヘラケズリ調整を行っている。褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。19も口縁部小片である。外面に「□（大又は丈）」と墨書されている。褐色で、微量の雲母末・酸化鉄粒の他に長石粒を含み、焼成は良好である。20は杯口縁部小片で、外面に「□（丈カ）」と墨書されている。褐色で、雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。21は杯口縁部片で外面に「□（丈カ）」と墨書されている。外面口縁部下端は回転ヘラケズリ調整である。褐色で、雲母末・長石粒を含み、調整は良好である。22は杯口縁部中位の小片で、外面に墨書が施されている。「大」又は「丈」のいずれかであろう。褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。23は杯口縁部小片で内面に墨書が見える。やはり「大」又は「丈」のいずれかと考えられる。褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。24は杯で底部内面に「大」又は「丈」と墨書されている。調整は3などと同様で、色調は褐色、雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。

25～28は須恵器である。27・28は甑と断定できるが25・26は甕か甑か断定できない。25は口縁部内外面ロクロ調整、胴部外面横方向の平行タタキ、内面は当具痕をヘラナデで消している。白雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。26は頸部をもつ形態で、口縁部は内外面ロクロ調整で、胴部外面は縦方向の平行タタキで、内面は当具痕をヘラナデで消している。色調は淡褐色で、微量の雲母粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。27は素口縁で、外面よりわずかに下位に張り付け把手が4単位付けられている。口縁部は内外面ロクロ調整、胴部は外面縦方向の平行タタキ、内面は当具痕をヘラナデで消している。色調は淡褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。28は五孔式底部をもつ。胴部下端付近は内外面ともにヘラケズリ、それ以上の部位は外面斜方向の平行タタキ、内面は当具痕をヘラナデで消している。色調は淡褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好

208



0 1/4 20cm

第57図 208竪穴住居出土遺物

である。

29～42は土師器甕である。

29～31は常総型である。調整技法は共通で、口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面ヘラナデの後下半部を縦方向のヘラミガキ、内面横方向のヘラナデである。29は外面淡褐色、内面暗褐色で、胎土中に微量の雲母粒の他に、石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。30は内外面明褐色で、胎土中に多量の砂粒・石英粒・長石粒の他に雲母粒・酸化鉄粒を含む。焼成は良好である。31は胴部上位以上の残欠資料で、色調は外面淡褐色、内面暗褐色、胎土中には雲母末・長石粒の他に微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

32は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。色調は外面暗褐色、内面褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

33は常総型の胴部下端付近資料である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。色調は外面暗褐色、内面褐色で、胎土中には雲母粒・石英粒・酸化鉄粒の他に多量の砂粒を含み、焼成は良好である。

34～38は中型の甕である。34は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。内外面暗赤褐色で、微量の雲母末の他に長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。35は調整技法は34と同様である。内外面赤褐色で、微量の雲母末の他に長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。36は調整技法は前二者と同様であるが、胴部外面の縦方向ヘラケズリはかなり高い部位から行っている。色調は外面暗褐色で、内面褐色、微量の雲母末の他に長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。37はやはり同様の調整技法を施しており、色調は内外面赤褐色である。胎土中には微量の雲母末の他に海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。38は胴部下端から底部にかけての破片資料である。外面は胴部が横方向のヘラケズリ、底部はナデ調整で、内面は全面ヘラナデ調整である。色調は外面暗褐色、内面黒褐色で、胎土中に雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

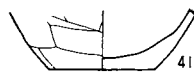
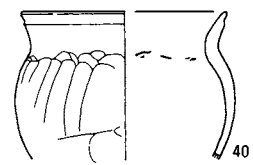
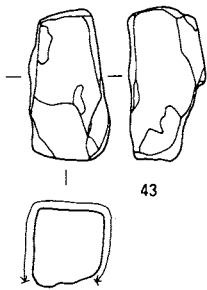
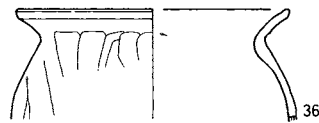
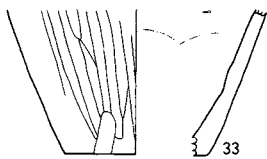
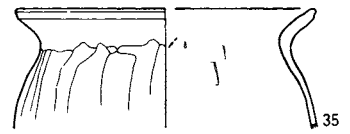
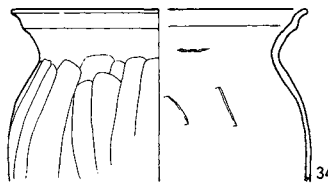
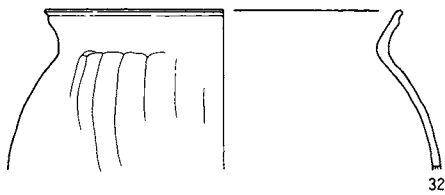
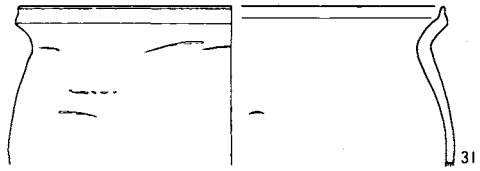
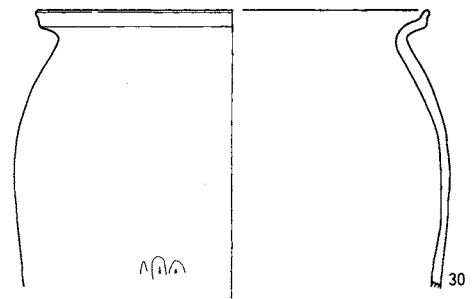
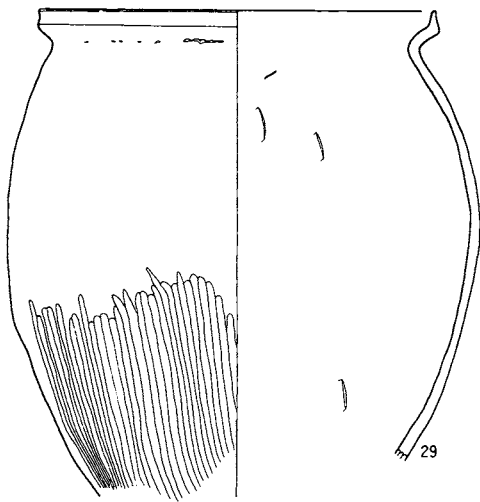
39～42は小型甕である。39は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。色調は内外面赤褐色で、胎土中には微量の雲母末の他に長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。40は39とほぼ同様の調整であるが、遺存部位が39よりも多いため外面胴部下半に横方向のヘラケズリが見える。外面赤褐色、内面暗褐色で、微量の雲母末・酸化鉄粒の他に長石粒・海綿骨針を含む。焼成は良好である。41・42は胴部下端から底部にかけての資料である。調整技法は共通で外面は全面ヘラケズリ、内面は全面ヘラナデ調整である。41は内外面暗褐色で、微量の雲母末の他に長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。42は内外面赤褐色で、微量の雲母末の他に、長石粒・酸化鉄粒を含む。焼成は良好である。

43は砂岩製の砥石である。

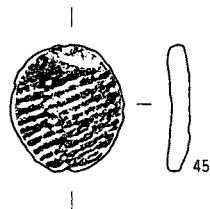
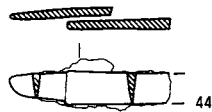
44は鉄製刀子の刃部である。途中から破断したものが再び折り重なって錆着している。茎部分は遺存していない。

45は混入品である。撚糸文土器片を加工転用した土製円板である。

208



0 29~43 : 1/4 20cm



0 43·44 : 1/2 5cm

第58图 208竖穴住居出土遺物

209 竪穴住居出土遺物 (第59図, 図版33)

1～7は須恵器杯である。全点新治産と考えられる。1は口縁部内外面に線刻が見え、外面は縦三本横三本の格子状、内面は十字の線刻である。外面底部静止ヘラ切り後、口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整を行っている。淡灰色で、白雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。2は口縁部内面に十字の線刻が記されている。調整技法は1と同様である。灰色で、部分的に赤味がかっている。雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。3は口縁部内面に線刻が記されているが、キの字に斜線が一本加えられたようなものである。外面青灰色、内面灰色で、長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。4は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。全面灰色で、多量の長石粒の他に海綿骨針を含み、焼成は良好である。5は4と同様の調整である。灰色で、微量の雲母粒・海綿骨針と多量の長石粒を含み、焼成は良好である。6は調整技法は前二者と同様である。灰色で、微量の雲母粒と多量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。7は外面底部静止ヘラ切り後口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。外面灰褐色、内面淡灰褐色で、白雲母粒の他に多量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好であるが器面はややザラザラした器質である。

8・9は土師器杯である。8は外面全面手持ちヘラケズリの後に内外面全面にヘラミガキ調整を行っているが、内面は器面の摩滅のために図化不能である。赤褐色で、微量の雲母末・石英粒を含む。焼成は良好である。9は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリである。外面に粘土紐接合痕が二条明瞭に見える。暗褐色で、微量の雲母末・海綿骨針、少量の石英粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

10～15は土師器甕である。10は素口縁で口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。赤褐色で、微量の雲母末・酸化鉄粒、少量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。11は10と同様の調整技法である。暗褐色で、微量の雲母末・海綿骨針の他に長石粒を含み、焼成は良好である。12は外面全面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整で、赤褐色である。雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。13は小型甕である。素口縁で、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部から底部は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデである。外面暗褐色、内面は上半黒褐色・下半褐色で、白雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。14は調整技法は13と同様である。暗褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。15はさらに小型で、外面底部中央に木葉痕がわずかに見える以外は、13と同様の調整である。赤褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

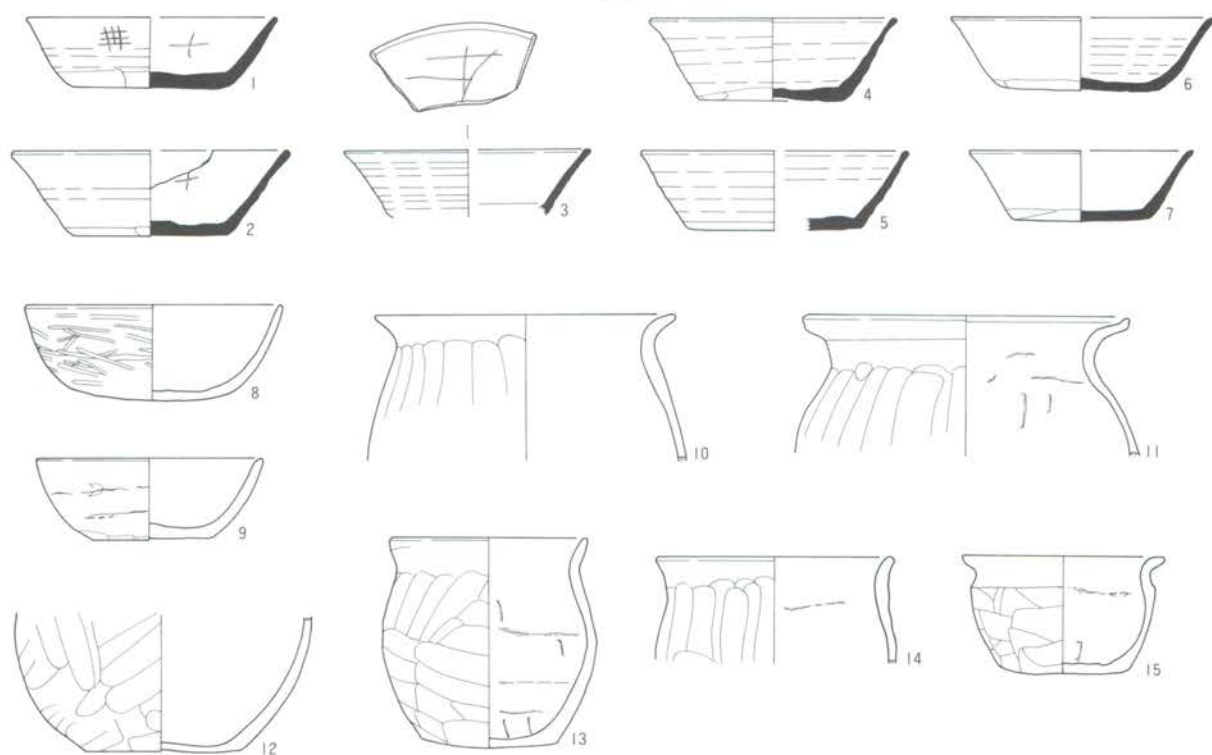
210 竪穴住居出土遺物 (第59図, 図版33)

1は土師器杯で、内外面全面に赤彩が施されているが摩耗が進み赤色が残るのは部分的である。外面口縁部上位から内面全面にかけて横ナデ、外面口縁部上位以下は手持ちヘラケズリで、器面全面にヘラミガキが入っている。赤彩遺存部位以外の色調は淡褐色から黒褐色で、雲母末・石英粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み焼成は良好である。2はロクロ土師器杯で、外面底部のみ手持ちヘラケズリで、色調は暗褐色、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好であるが、器面の摩耗が進んでいる。

211 竪穴住居出土遺物 (第59・60図, 図版33)

1～4はロクロ土師器杯である。1は外面底部回転ヘラ切り後無調整、外面口縁部下端回転ヘラケズリ

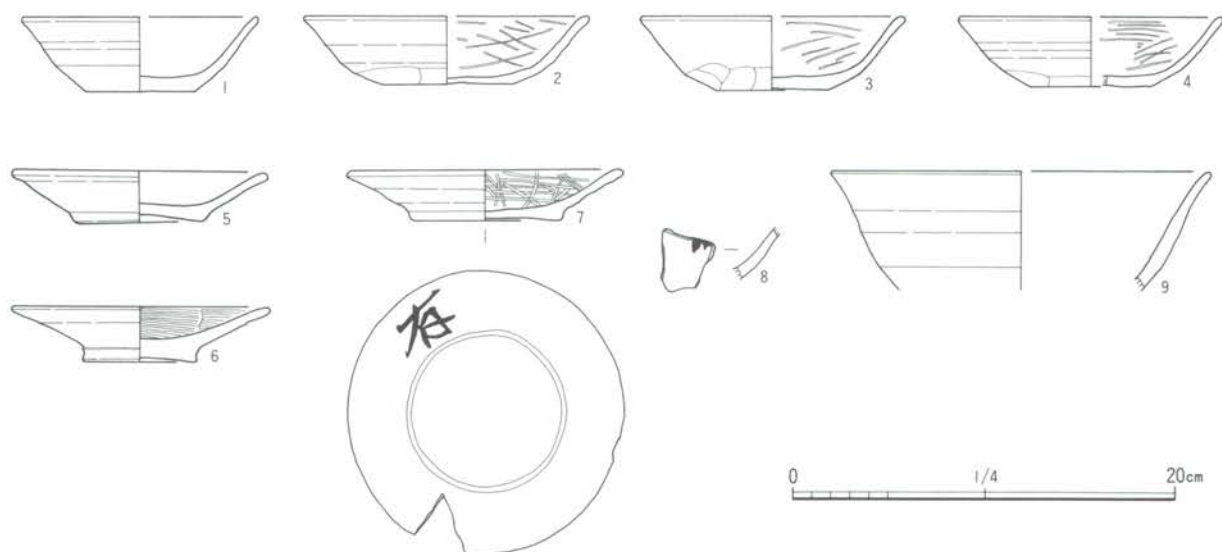
209



210



211



第59図 209・210・211竪穴住居出土遺物

調整である。褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。2～4は共通の調整技法で外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ調整である。2は外面黒褐色、内面淡褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。3は外面褐色、内面淡褐色で、内面のヘラミガキ調整はやや粗く、雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を微量、石英粒・長石粒を少量含み、調整は良好である。4は淡褐色で、長石粒・酸化鉄粒を微量、雲母末・海綿骨針を少量含み、焼成は良好である。内面は一部剝離している。

5～7はロクロ土師器高台付皿である。5は高台部分円柱技法で、底部外面回転糸切り後無調整である。歪みが著しい。淡褐色で、多量の雲母末の他に長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。6は高台部分は円盤状の付高台で、底部外面回転糸切り後無調整である。色調は器表全面橙褐色、器肉淡褐色で、雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。7は口縁部外面に正立で「□(有カ)」の墨書が見える。高台部分は円柱技法で、底部外面回転糸切り後無調整、皿内面はミガキ調整である。淡褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

8・9はロクロ土師器杯である。8は口縁部外面に墨書があるが釈読不能である。雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。9は外面口縁部下端回転ヘラケズリ、内面はミガキ調整であるが剝離が進んでいる。褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

10～14は土師器甕である。調整技法は共通で、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面は底部までヘラナデ、底部外面は回転糸切り後無調整である。10は淡褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。11は外面暗褐色、内面褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。12は全面暗褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。13は外面褐色、内面暗褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。14は褐色で、多量の雲母末の他に長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

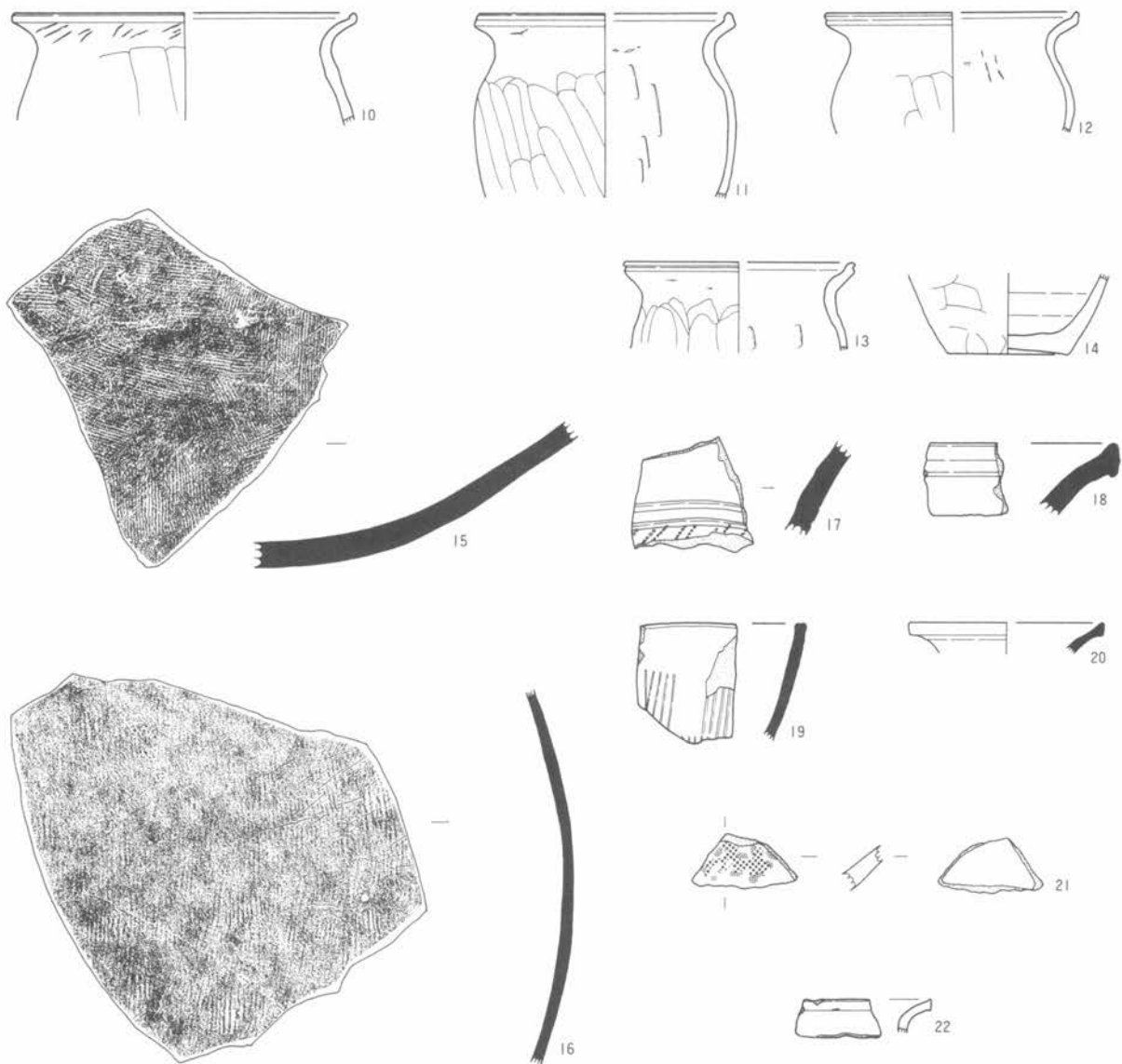
15から19は須恵器甕である。15は大甕の底部に近い胴部片である。外面は平行タタキを縦横に行い、内面は当具痕をナデ消している。暗青灰色で多量の石英粒を含み、焼成は良好である。16は甕胴部片で、外面は縦方向の平行タタキ、内面は当具痕をナデ消しており、外面上部には自然釉がのっている。灰白色で、微量の長石粒と還元鉄粒を含み、焼成は良好である。17は強い括れをもつ甕の口縁部片である。外面下部には二条の平行沈線の下にカキ目工具原体の角を用いた連続刺突文が見える。灰白色で、混和物はほとんど無く、焼成は良好である。18は口縁部小片で、色調は灰白色、混和物はほとんど無く、焼成は良好である。19は素口縁の甕で、外面には縦方向の平行タタキが見える。外面赤褐色、内面褐色で、石英粒・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。

20は灰釉陶器長頸瓶口縁部片である。素地は青灰色で、遺存部全面に釉がのっている。混和物はほとんど無く、焼成は良好である。

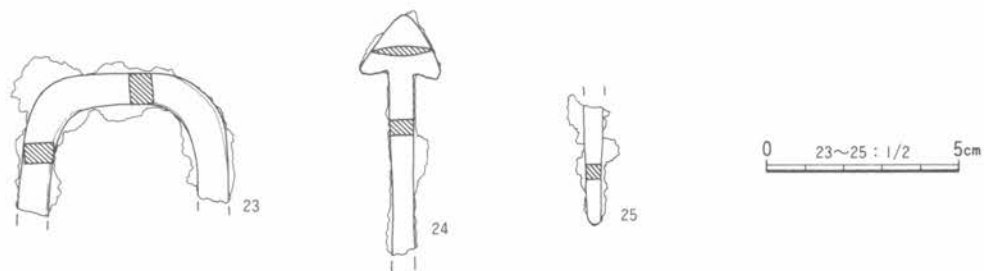
21は葉壺形奈良三彩陶器片である。素地は灰白色で、胎土中に混和物はほとんどなくサラサラした胎土である。

22は畿内産土師器甕の口縁部小片である。

23～25は鉄製品である。23はコの字型に曲がっており、門金具の可能性が考えられる。24・25は鉄鏃である。24はほぼ正三角形の鏃身で、わずかに腸抉りがある。25は茎端部片である。



0 10~22 : 1/4 20cm



第60图 211竖穴住居出土遺物

213竪穴住居出土遺物（第61図，図版33）

1～4は文字もしくは記号を有する資料である。1は須恵器杯底部片で、内面に「×」、外面に「×」に二本斜めの線が入り「木」字状になるヘラ書きが記されている。外面は手持ちヘラケズリ調整で、色調は灰色、多量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。2は須恵器杯で、口縁部外面にヘラ書きが見えるが記号であるか文字であるか判別不能である。外面は底部静止ヘラ切り後、口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。灰色で、多量の雲母末の他に長石粒を含み、やや不良である。3はロクロ土師器杯で、外面遺存部位はすべて手持ちヘラケズリ調整である。外面褐色、内面淡褐色で、微量の雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。口縁部下端付近には焼成後（壊れた後も含む）に穿孔されたかと思われる部分がある。4はロクロ土師器杯口縁部小片で、外面に墨書が記されているが、判読不能である。淡褐色で、微量の雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。

5～9は新治産須恵器杯である。5は口縁部内面に油煙煤の付着が見える。外面は底部静止糸切り後口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。色調は灰色で、多量の白雲母末と少量の長石粒を含み、焼成は良好である。6は底部外面回転ヘラ切り後口縁部下端のみ手持ちヘラケズリ調整を行っている。色調は灰色で、大粒の石英粒と長石粒を多量に含み、焼成は良好である。7は外面口縁部下端のみ手持ちヘラケズリ調整である。灰色で、白雲母粒と大粒の長石を多量に含み、焼成は良好である。8は淡青灰色で、白雲母粒・石英粒・長石粒を多量に含み、焼成は良好であるが、器面の摩耗が進んでいる。9は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整で、色調は灰色である。多量の白雲母粒と少量の長石粒・還元鉄粒を含み、焼成は良好であるが、器面の摩耗は進んでいる。

10・11は新治産須恵器高台付杯である。10は外面付高台部分を除く口縁部屈曲線以下底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。淡青灰色で、大粒の長石粒を多量に含み、焼成は良好である。11は外面すべて手持ちヘラケズリ、それ以外はロクロ調整である。灰色で、大粒の石英粒・長石粒を多量に、雲母末を微量に含む。焼成は良好である。図示部分は破断面を砥石として転用している。

12は内面黒色、外面褐色という色調から土師器かとも考えられるが、ロクロ使用が明瞭な点と胎土・焼成硬度が良好な点の二点から須恵器鉢と判断した資料である。口縁部は内外面ロクロ調整、胴部は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。多量の白雲母粒・石英粒・長石粒を含む。焼成は良好である。

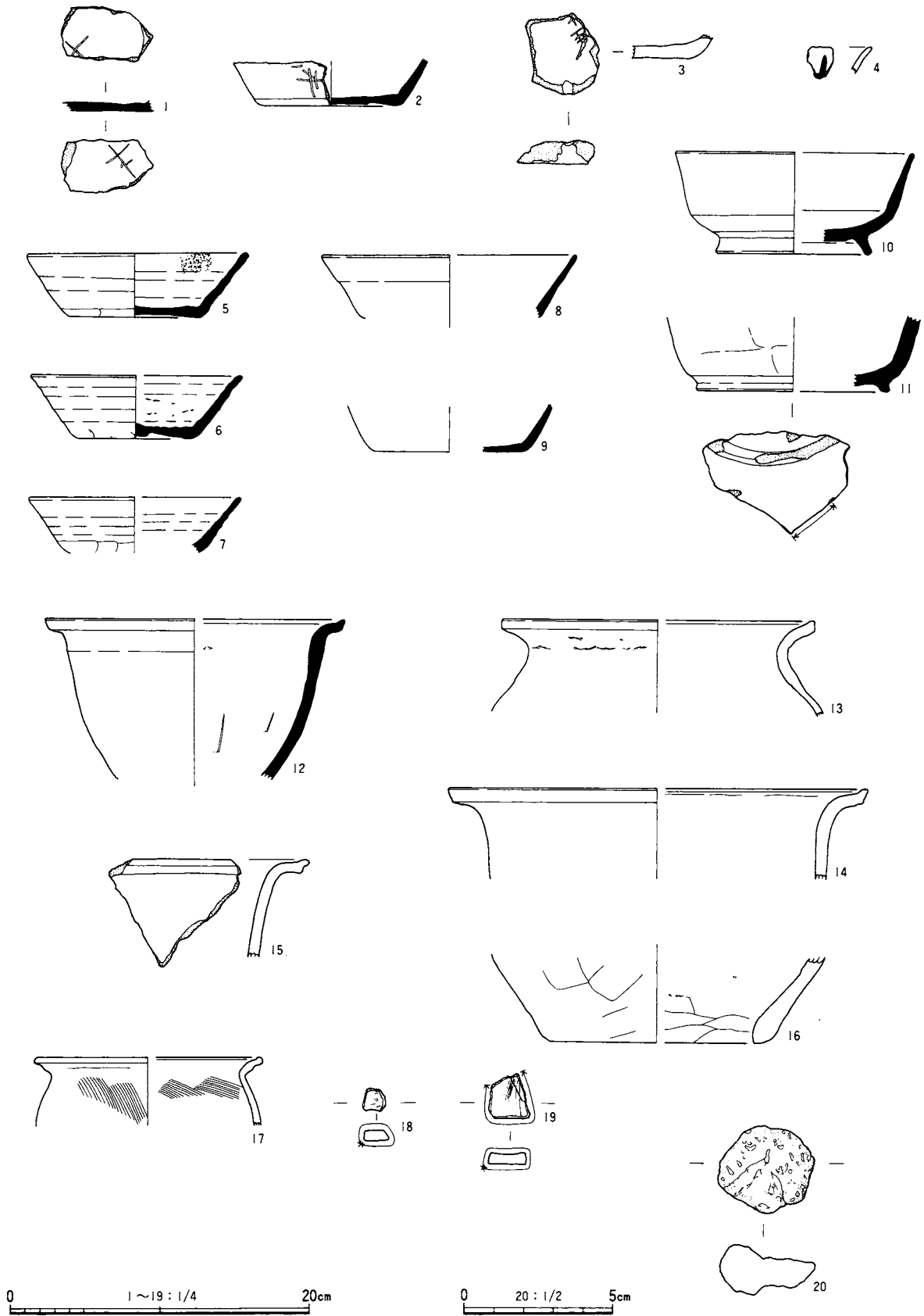
13は土師器常総型甕である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面手持ちヘラケズリ後ヘラナデ、内面ヘラナデ調整である。暗褐色で、微量の雲母末・酸化鉄粒、多量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

14～16は土師器甕である。14は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ヘラナデ調整で、色調は淡褐色である。多量の雲母末・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。15は調整技法は14と同様である。淡褐色で、雲母末・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。16は底部片で、外面全体から底面及び内面下半にかけてはヘラケズリ、内面上半はヘラナデ調整である。多量の雲母末・石英粒・長石粒、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

17は畿内産と考えられる土師器小型甕の口縁部破片資料である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面斜方向・内面は横に近い斜方向ハケ目調整で、色調は淡橙褐色である。金雲母粒・石英粒・酸化鉄粒を微量含み、焼成はよいが、全体にとろとろした器質である。

18・19は流紋岩製砥石、20は軽石である。

213



第61図 213竪穴住居出土遺物

214 竪穴住居出土遺物 (第62図)

1・2はロクロ土師器杯である。1は歪みがひどく、口縁部が開くいわゆるヘルメット形の器形である。外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。2は器形・調整技法が1と同様である。外面褐色、内面暗褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針を少量含み、焼成は良好である。

3は土師器甕である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。暗褐色で、雲母末・長石粒、海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。

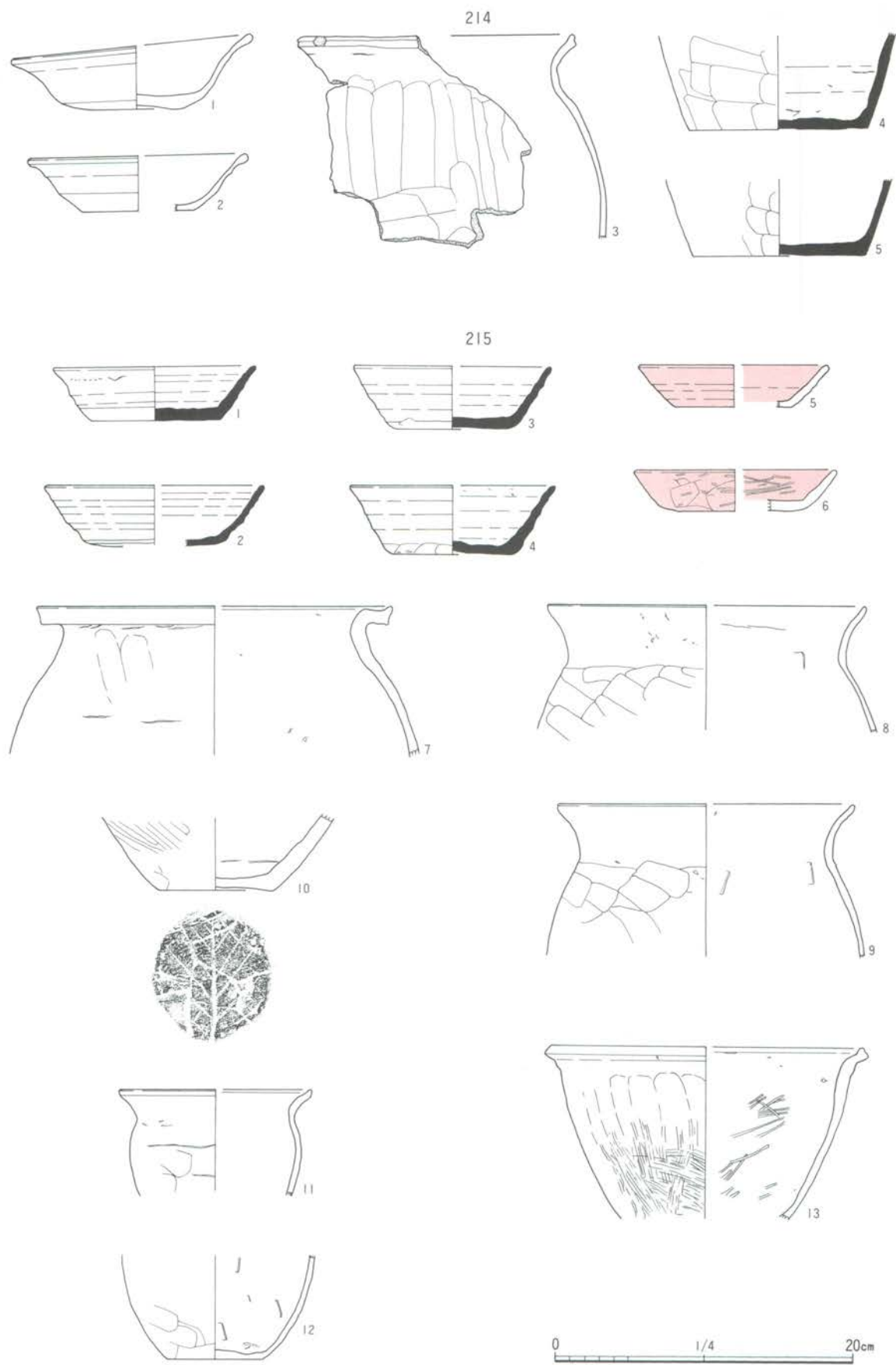
4・5は須恵器甕底部資料である。4は外面ヘラケズリ、内面ロクロ調整で、色調は暗褐色である。雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。5は底部外面回転糸切り後外面全面ヘラケズリ、内面はロクロ調整である。暗褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。

215 竪穴住居出土位遺物 (第62図, 図版34)

1～4は須恵器杯である。2～4は胎土中に白雲母粒が多く含まれ確実に新治産であるが、1は雲母粒はまったくないが石英粒が多く、常陸(堀之内窯?)産と考えられる。1は底部外面回転ヘラ切り後口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。内面灰色、外面一部暗灰色で、焼成は良好である。2は外面底部手持ちヘラケズリ調整で、色調は灰色である。色調は淡灰色で、口縁部上端のみ内外面暗灰色である。多量の雲母末と微量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。3・4は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整を行っている。底部は内外面灰色、口縁部は内外面暗灰色である。雲母末・石英粒・長石粒・還元鉄粒を含み、焼成は良好だが、器面はかなりざらついた器質である。

5・6は内外面赤彩の土師器杯である。5はロクロ土師器で外面底部手持ちヘラケズリ、石英粒・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。6は非ロクロで、外面は全面手持ちヘラケズリ後粗いミガキ、内面はヨコナデ後粗いミガキで、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。

7～13は土師器甕である。7は常総型甕で、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ後ヘラナデ、内面ヘラナデ調整である。淡褐色で、多量の雲母末・石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。8は武蔵型甕の口縁部である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面横方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。赤褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。9も武蔵型の甕で、調整技法は8と同様である。暗赤褐色で、雲母末・石英粒・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。10は常総型の底部付近である。胴部外面は上半縦方向のヘラミガキ、下半斜方向のヘラケズリ、内面は全面ヘラナデ調整で、底部外面には木葉痕が見える。外面褐色、内面淡褐色で、多量の石英粒・長石粒と少量の雲母末・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。11・12は小型甕である。11は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面横方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針を少量含み、焼成は良好である。12は底部外面ヘラケズリで他の部位の調整は11と同様である。外面暗褐色、内面淡褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。13は甕もしくは甗のいずれかである。口縁部は内外面ヨコナデ。胴部は外面縦方向のヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラナデ後ヘラミガキ調整である。外面赤褐色、内面淡褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。



第62図 214・215竪穴住居出土遺物

216 竪穴住居出土遺物（第63図，図版34）

1～7はロクロ土師器杯である。1～5は共通の調整技法を施しており，外面底部回転糸切り後，口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリを行っている。1は褐色で，多量の雲母粒の他に長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。2は外面淡褐色，内面暗褐色で，雲母粒・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。3は赤褐色で，雲母粒・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。4は赤褐色で，雲母粒・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。5は口縁部外面の図示した広い範囲に油煙煤が付着している。外面褐色，内面灰褐色で，多量の雲母粒の他に長石粒・酸化鉄粒及び微量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。6は外面底部回転ヘラケズリ後，口縁部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリ調整である。外面黒褐色，内面暗褐色で，長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。7は内面黒色処理を行っている。外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ，内面ヘラミガキ調整である。外面は淡褐色で，雲母粒・長石粒の他に微量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。

8はロクロ土師器高台付皿である。外面底部回転糸切り，内面はヘラミガキ調整である。外面橙褐色，内面淡褐色で，雲母粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。

9～12は文字又は記号を有する土師器である。9はロクロ使用の杯で，口縁部外面に正位で「□(古カ)」，内面底部にも一字墨書で記されているが判読不能である。調整技法は1～5と同様で，色調は淡褐色，雲母粒・海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み，焼成は良好である。10はロクロ使用の杯で，口縁部外面に横位で「□(万カ)」と墨書されている。褐色で，雲母粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。11は甕胴部上位片で，外面に「×」状の線刻が見える。外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ調整で，色調は外面黒褐色，内面褐色で長石粒を含み焼成は良好である。12はロクロ使用の杯で，底部内面に「太」と線刻されている。外面遺存部位はすべて回転ヘラケズリ調整である。外面暗褐色，内面赤褐色で，雲母粒・長石粒・海綿骨針を含み，焼成は良好である。

13～15は土師器甕である。13は口縁部は内外面ヨコナデ，胴部は外面縦方向のヘラケズリ，内面ヘラナデ調整である。外面暗褐色，内面褐色で，長石粒の他に微量の雲母粒・海綿骨針を含み，焼成は良好である。14は調整技法は13と同様である。外面褐色，内面暗褐色で，雲母粒・長石粒・海綿骨針を含み，焼成は良好である。15はコの字口縁の武蔵型甕である。口縁部は内外面ヨコナデ，胴部は外面横方向のヘラケズリ，内面ヘラナデ調整である。色調は橙褐色で，長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。

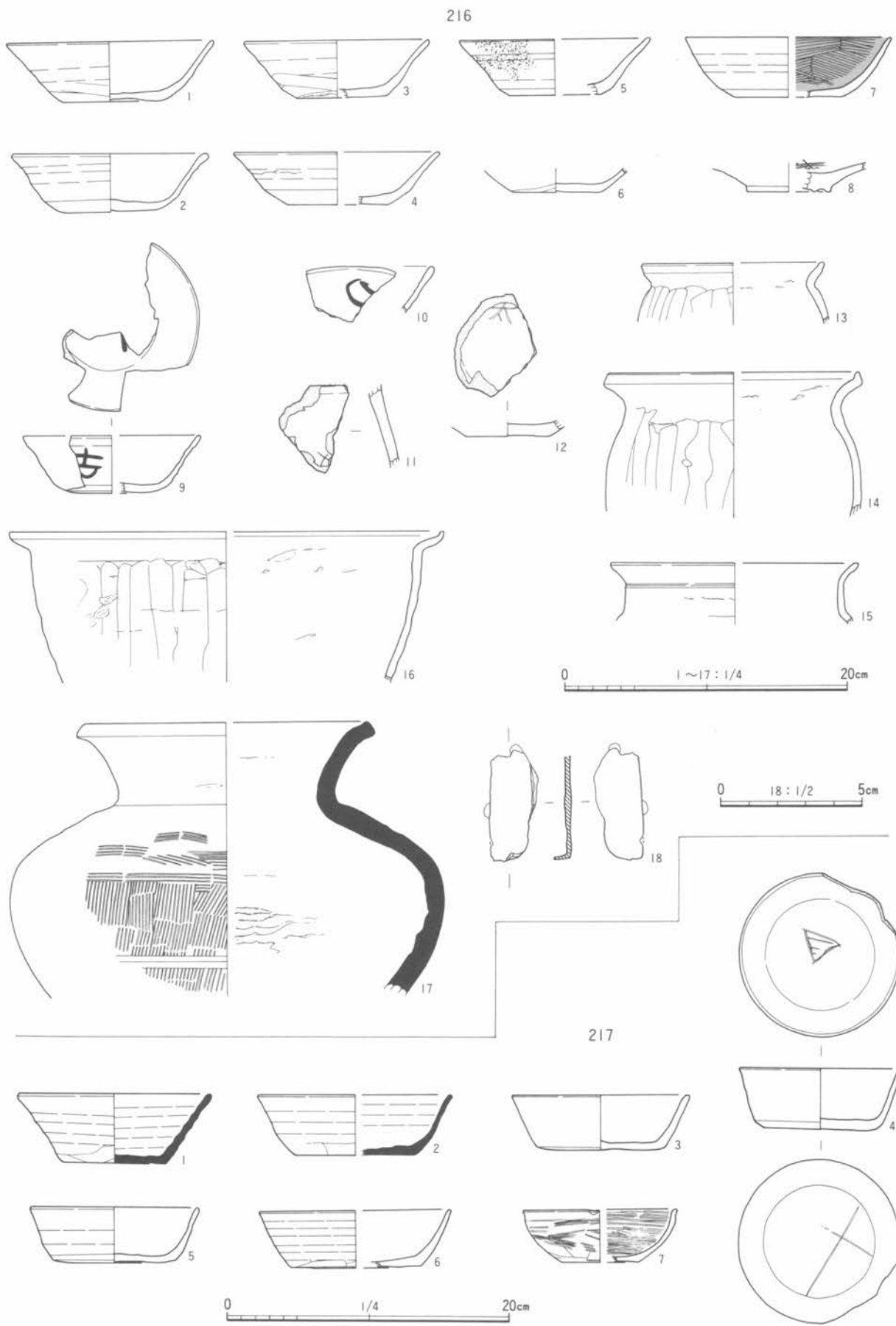
16は土師器甕かと考えられる。口縁部は内外面ヨコナデ，胴部は外面縦方向のヘラケズリ，内面ヘラナデ調整である。淡褐色で，雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。

17は新治産と考えられる須恵器甕である。器肉がかなり厚く，全体にボテツとした質感である。口縁部は内外面ロクロ調整，胴部は外面肩部以上が横方向の平行タタキ，それ以下は縦方向のタタキで，内面はヘラナデ調整である。灰色で，白雲母粒・長石粒を含み，焼成は良好である。

18は用途不明の鉄製品である。

217 竪穴住居出土遺物（第63・64図，図版34）

1・2は新治産須恵器杯である。調整技法は共通で外面底部回転ヘラ切り後口縁部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリを行っている。1は灰色で，大粒の長石粒を多量に含み，焼成は良好である。2



第63図 216・217竖穴住居出土遺物

は灰色で、大粒の長石粒を多量に、その他に雲母末・還元鉄粒を含み、焼成は良好である。

3～6はロクロ土師器杯で、3～5は箱形杯として分類されるものである。3は外面底部回転糸切り後、底部周縁のみ手持ちヘラケズリ調整である。褐色で、雲母末・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。4は底部外面に「十」内面に「△+三本線」の線刻が記されている。外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を施している。赤褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5は外面底部静止糸切り後、口縁部下端回転ヘラケズリ、底部周縁手持ちヘラケズリ調整である。暗褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。6は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整を行っている。外面灰褐色、内面褐色で、長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

7は土師器杯である。外面は口縁部上位ヨコナデ、以下底部まで手持ちヘラケズリ後に口縁部上位以下をヘラミガキ調整、内面は全面ヘラミガキ調整である。暗灰色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

8は須恵器甕である。外面は斜方向の平行タタキの後に下端のみ横方向のヘラケズリ、内面は当具痕をナデ消しており、下端のみ横方向のヘラケズリ調整である。暗褐色で、白雲母粒・長石粒の他に微量の鉄分を含み、焼成は良好である。

9～11は土師器甕である。9は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整、褐色で長石粒・酸化鉄粒を含み、良好である。10は遺存部位全面ロクロ調整である。褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含みサラサラの胎土である。焼成は良好だが、器面の摩耗が進んでいる。11は調整は9と同様である。外面赤褐色、内面暗褐色で、石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

12・13は須恵器長頸瓶で、同一個体の可能性が高い。遺存部位はすべてロクロ調整である。器肉色調は灰色で、13は外面全面に自然釉がのっている。長石粒を若干含み、焼成は良好である。

14は流紋岩製紡錘車である。

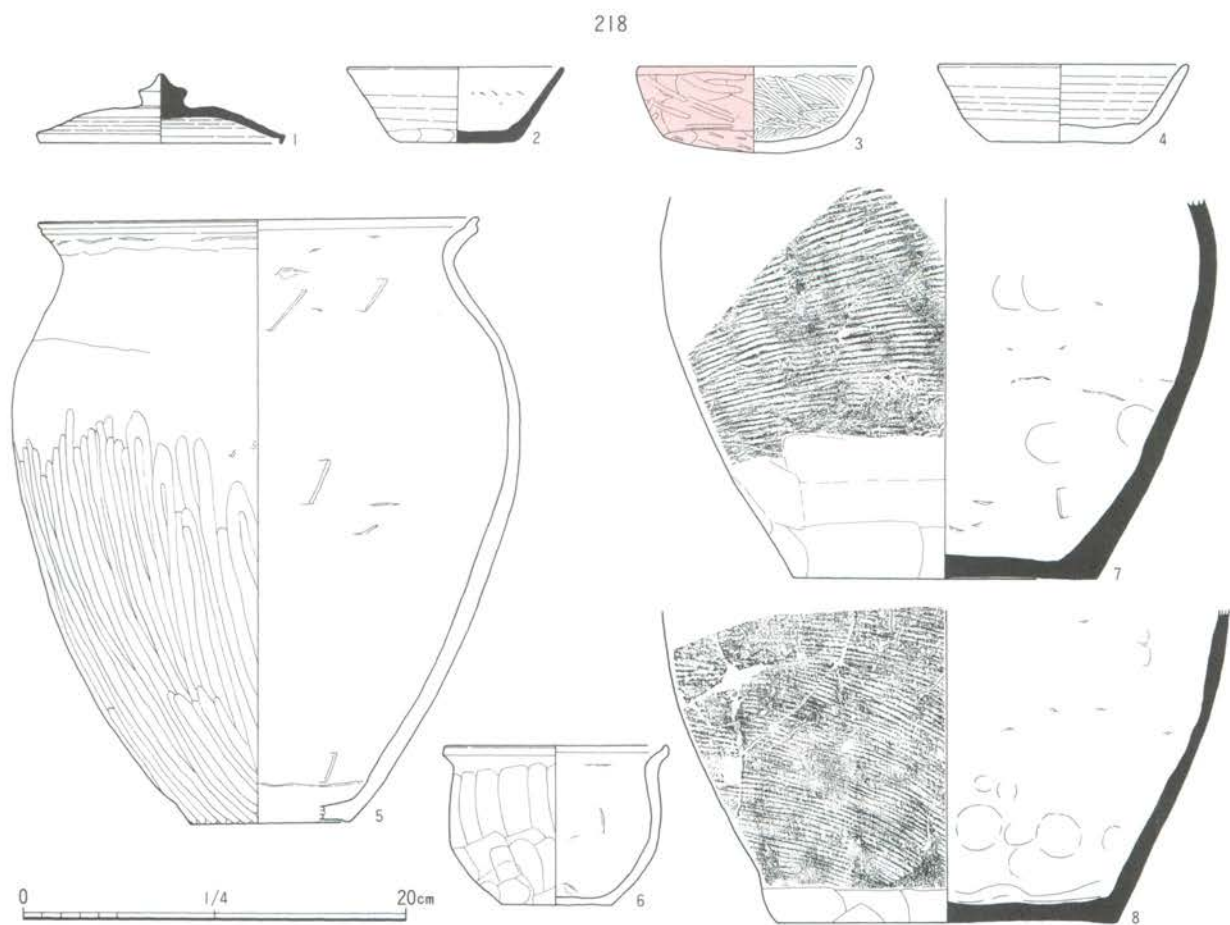
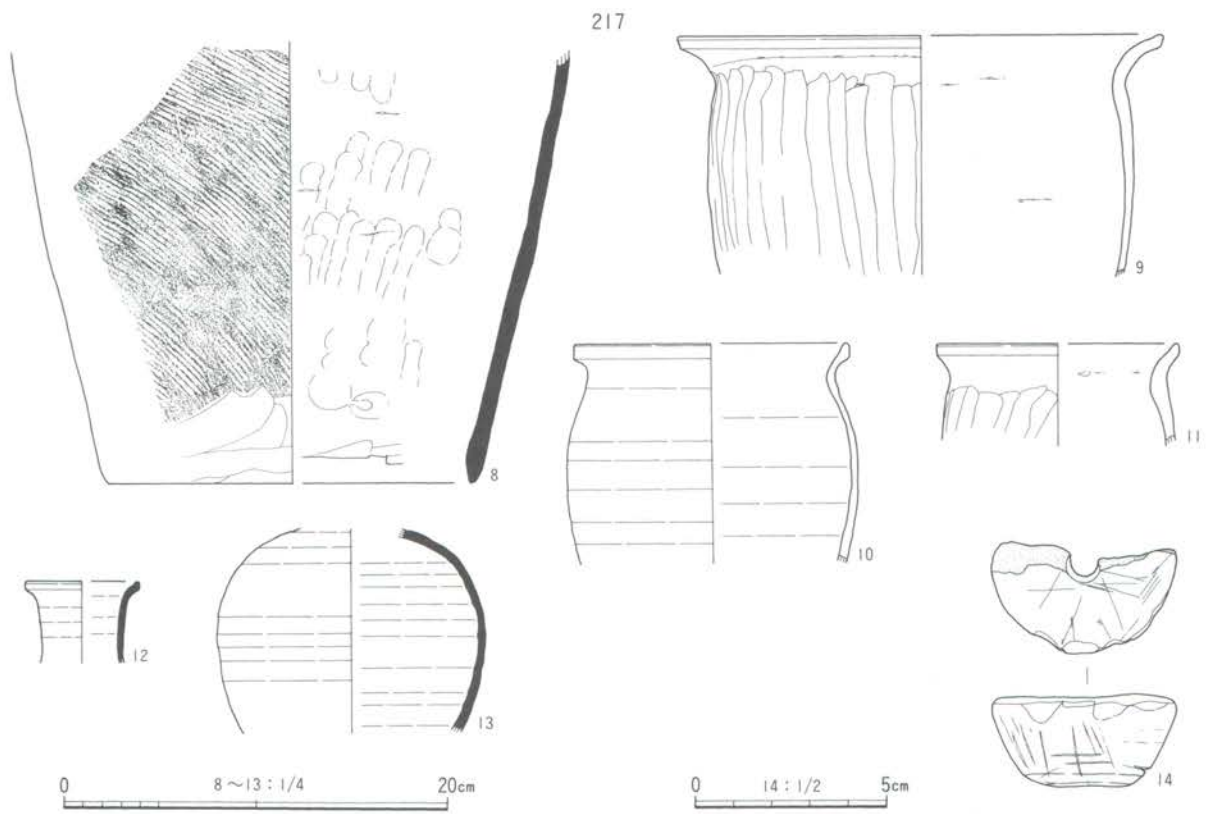
218 竪穴住居出土遺物（第64図、図版34）

1は須恵器蓋、2は須恵器杯で、新治産の組み合わせ個体と考えられる。1は突出度の高い擬宝珠形つまみを持ち、外面肩部のみ回転ヘラケズリ調整である。灰色で、白雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。2は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。灰色で、白雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

3は土師器杯である。口唇部内外面ヨコナデ、外面は全面手持ちヘラケズリの後にヘラミガキ、内面は全面ヘラミガキ調整である。外面は部分的に赤彩痕が見える。内面は暗褐色で、雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を微量、石英粒を少量含み、焼成は良好である。

4はロクロ土師器杯である。外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整で、色調は暗褐色、微量の雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒、少量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

5・6は土師器甕である。5は常総型で、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面ヘラケズリ後にヘラナデを行い下半部は縦方向のヘラミガキ、内面は全面ヘラナデ、底部外面には木葉痕が見える。淡褐色で、雲母末・石英粒・長石粒の他に海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。6は小型甕で、口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面上半縦方向・下半横方向のヘラミガキ、内面は底部まで横方向のヘラナデ、



第64図 217・218竪穴住居出土遺物

底部外面ヘラケズリ調整である。微量の雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

7・8は須恵器甕である。調整技法は共通で、胴部は外面横方向の平行タタキで下端のみ横方向のヘラケズリ、内面は当具痕をナデ消して、底部外面は周縁部回転ヘラケズリ、中央部分には砂目が見える。

7は灰色で、多量の雲母粒・石英粒・長石粒と還元鉄粒を含み、焼成は良好である。8は灰色で雲母粒・石英粒・長石粒をやや多めに、そのほかに還元鉄粒を含み、焼成はやや軟質である。

219 竪穴住居出土遺物（第65図，図版35）

1はロクロ土師器杯である。底部外面に「キ」字状の線刻が記されている。底部外面持ちヘラケズリで、それ以外はロクロ調整である。色調は外面暗褐色、内面褐色で、長石粒・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。

2は新治産と考えられる須恵器高杯である。長脚で、一段三方向長方形透孔を有する脚部である。杯部外面下半に回転ヘラケズリ、それ以外はロクロ調整である。灰色で、微量の雲母末・還元鉄粒、多量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

3～5は土師器甕である。3・4は小型甕である。3は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面上半縦方向・下半横方向のヘラケズリ、内面は底部までヘラナデ、外面底部はヘラナデ調整である。暗褐色で、長石粒の他に微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。4は底部外面に木葉痕の残骸が見え、その後ヘラケズリ調整を行っている。褐色で、長石粒の他に微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5は常総型である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面がヘラケズリ後上半ヘラナデ・下半縦方向のヘラミガキ、内面が底部までヘラナデで、外面底部は木葉痕無調整である。色調は褐色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

6は新治産と考えられる須恵器甕である。底部は部分的な遺存であるが五孔式と考えられる。口縁部は内外面ロクロ調整、胴部は外面上半横方向の平行タタキ、下半横方向のヘラケズリ、内面は当具痕をヘラナデでナデ消している。灰色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

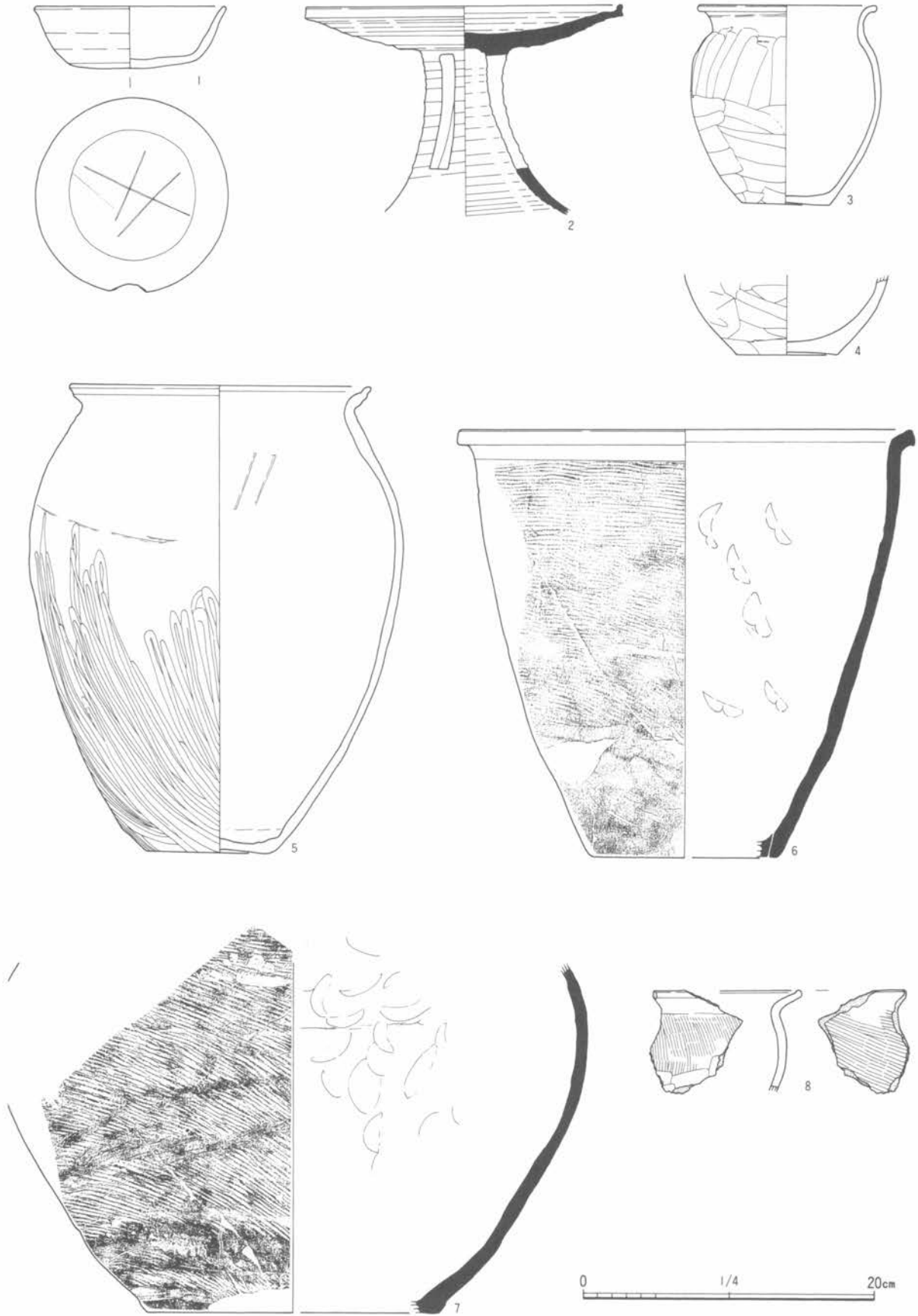
7は新治産と考えられる須恵器甕である。口縁部を欠失しているが、頸部に括れをもつ形態である。胴部は外面斜方向の平行タタキ、内面は当具痕をヘラナデでナデ消している。外面胴部下端から底部遺存部位にかけてはヘラケズリ調整である。色調は灰褐色で、白雲母粒・長石粒の他に微量の還元鉄粒を含む。焼成は良好である。

8は畿内産（南伊勢産か？）と考えられる土師器甕である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面上半縦方向のハケ目調整・下半横方向のヘラケズリで、内面は斜方向のハケ目調整である。色調は外面橙褐色、内面灰褐色で、長石粒と微量の酸化鉄粒を含み、胎土は全体にサラサラである。焼成は良好である。

220 竪穴住居出土遺物（第66図，図版35・36）

1・2は新治産と考えられる須恵器杯である。1は外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ後、底部外面のみ手持ちヘラケズリを再度行っている。灰白色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。2は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整を施している。色調は灰色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

219



第65図 219竪穴住居出土遺物

3・4は内外面全面に赤彩を施したロクロ土師器杯である。調整技法は共通で、外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整、内面は全面ヘラミガキ調整である。混和物・焼成も共通で、長石・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

5はロクロ土師器杯である。外面底部のみ手持ちヘラケズリで、他の部位はすべてロクロ調整である。色調は赤褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

6～9は文字もしくは記号を有する資料である。6・7は須恵器杯である。ともに杯部外面に線刻が見えるが小片のため記号であるのか文字であるのかさえも判別できない。6は外面口縁部下端回転ヘラケズリ調整、底部ヘラケズリ調整で、色調は灰褐色、雲母末・長石粒・還元鉄粒を含み、焼成は良好である。7は外面口縁部下端回転ヘラケズリ調整で、色調は灰色、長石粒を含み、焼成は良好である。8・9は土師器甕胴部片である。8は小型甕で胴部外面に墨書が記されているが、小片のため判読は勿論、一字であるのか二字であるのかさえも判別できない。色調は褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。9は甕胴部外面に横位で墨書が記されている。「□□□」と離れて三字確認できる。口縁部はヨコナデ、胴部は外面横方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。色調は褐色で、多量の雲母末の他に、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

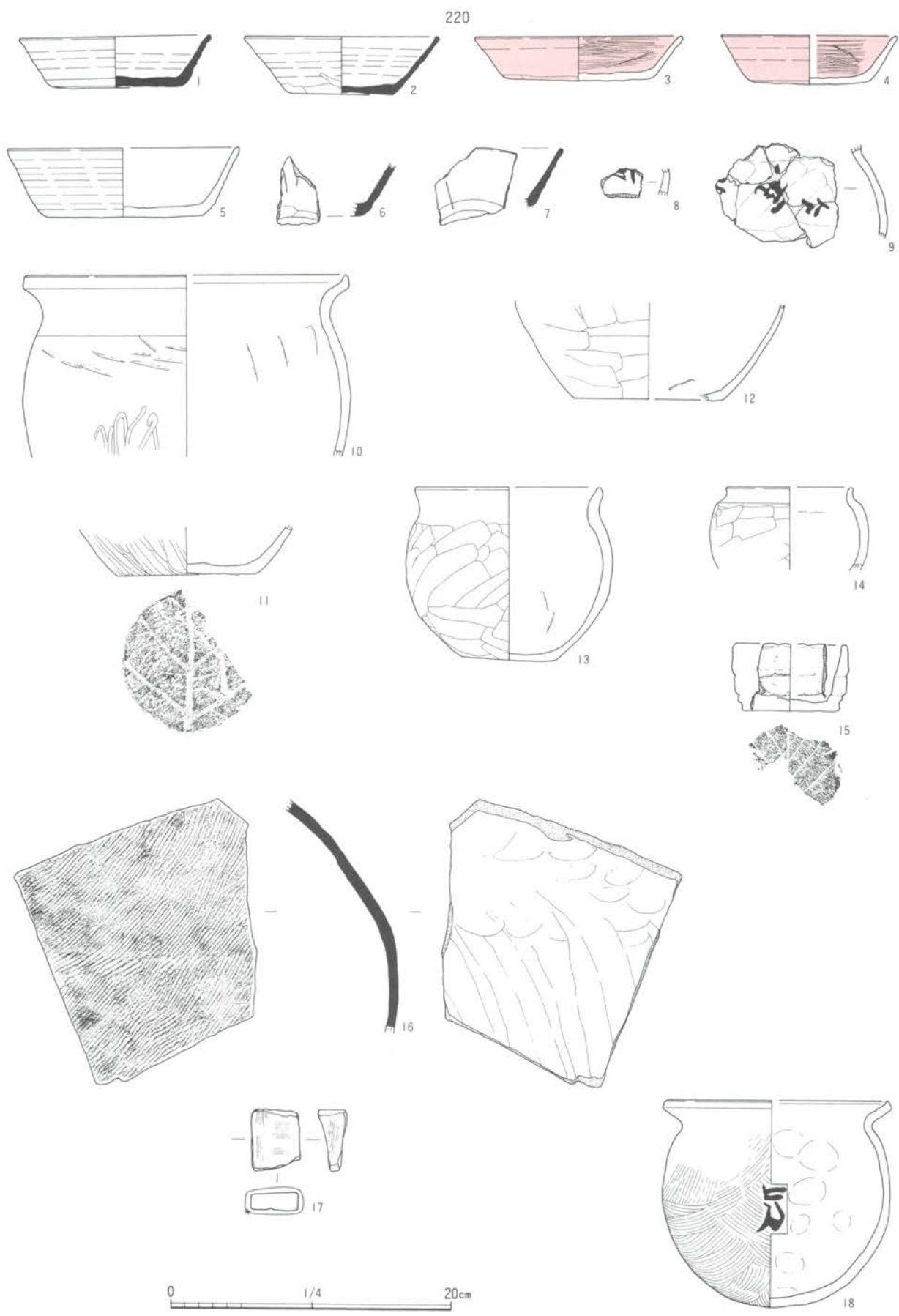
10～14は土師器甕である。10・11は常総型である。10は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面ヘラナデ後下半部縦方向のヘラミガキ、内面横方向のヘラナデ調整である。暗褐色で、微量の雲母末の他に長石粒を含み、焼成は良好である。11は底部付近で、外面胴部は縦方向のヘラミガキ、底部は木葉痕無調整、内面は全面ヘラナデ調整である。色調は外面暗褐色、内面褐色で、雲母末・長石粒の他に微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。12は胴部下半から底部にかけての資料である。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整で、色調は内外面ともに暗褐色である。長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。13・14は小型甕である。13は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面上半斜方向のヘラケズリ・下半横方向のヘラケズリ、内面は底部までヘラナデ、底部外面はヘラケズリ調整である。外面赤褐色、内面は暗褐色と褐色の部位に分かれ、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。14は直立気味の口縁部をもつ。口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面横方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整で、色調は褐色である。長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

15は手捏ね土器である。口縁部には内外面に粘土紐接合痕が明瞭に見え、底部外面は木葉痕無調整である。褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

16は須恵器大甕胴部片である。外面斜方向の平行タタキ、内面は上半に当具痕、下半はナデ調整である。内面上半部に研磨痕が見える。墨痕はないが、状況から見て転用硯の可能性が高い。色調は灰色で、還元鉄粒を含み、焼成は良好である。

17は流紋岩製の砥石である。

18は畿内産と考えられる土師器甕である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は弧状の横方向ハケ目、内面は当具痕状のへこみが並び、ヘラナデが行われている。色調は乳橙色から橙褐色で、内面中位には焦げ目らしい炭化物の付着がみえる。石英粒・長石粒・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。外面胴部上端に大きな剝離痕が見える。外面に墨痕があるが判読不能である。平城分類の甕Aである。



第66图 220竖穴住居出土遺物

222竪穴住居出土遺物（第67・68図，図版36・37）

1～17は胎土の特徴から茨城県三和窯跡群産須恵器蓋杯と考えられる。個体によっては窯の状態が原因と考えられるが，酸化焰焼成になっているものが見られ，酸化焰焼成のもののみ酸化焰と記す。

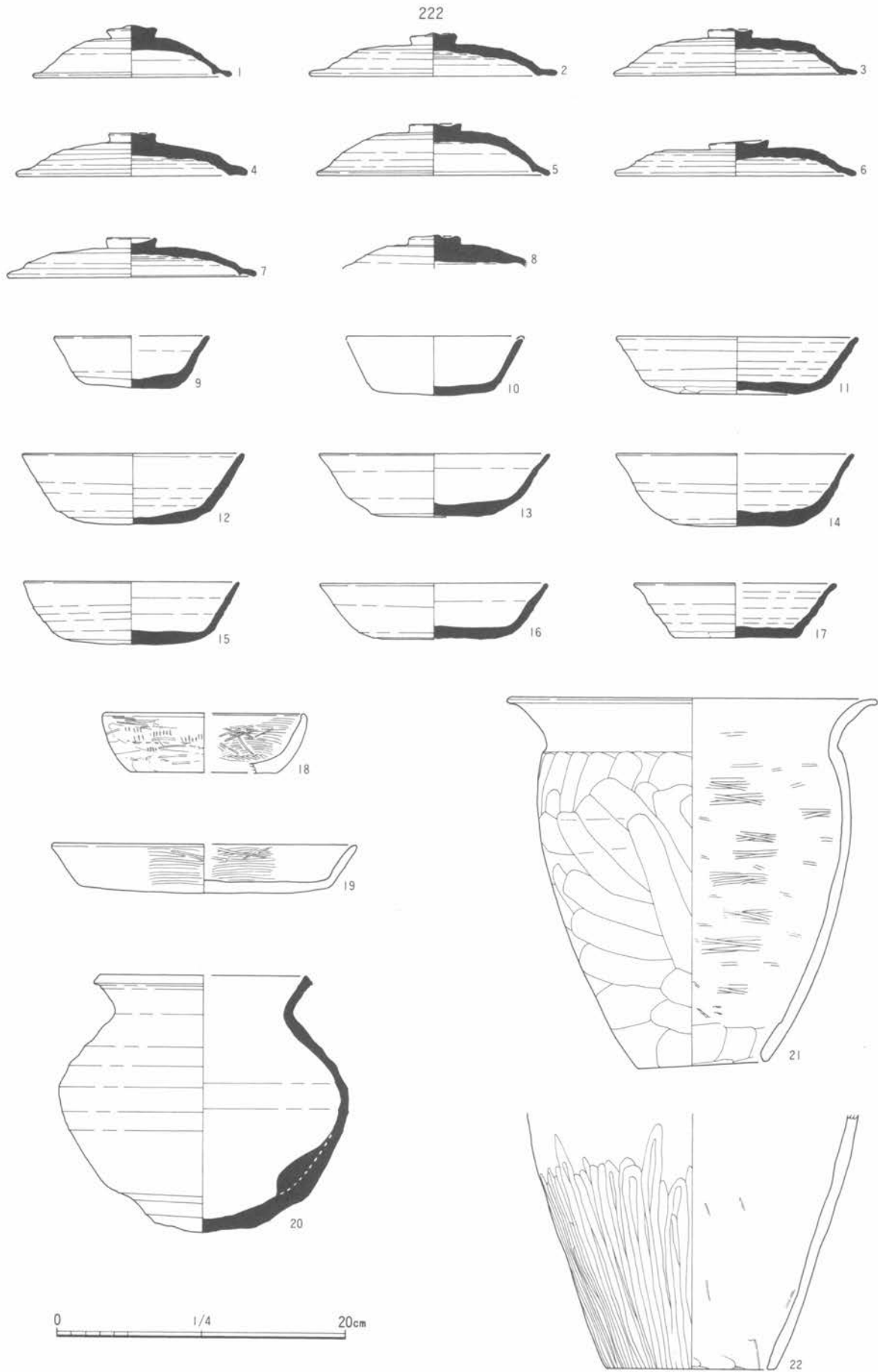
1～8は杯蓋である。つまみは扁平な擬宝珠形で，突出度は個体によって若干異なり，低いものによっては疑似円環状を呈する。全個体とも内面周縁端部付近にかえりを有する。調整技法は共通で，外面上半に回転ヘラケズリ調整をもちそれ以外はロクロ調整である。1はやや深めの形態で，色調は灰色，微量の白雲母粒・海綿骨針の他に多量の石英粒・長石粒を含み，焼成は良好である。2は1に比べると浅めにかえりの突出度も弱い。淡褐色で，多量の白雲母粒・石英粒・長石粒を含み，焼成は新治産須恵器としてはやや軟質である。3は灰色で，多量の白雲母粒・石英粒・長石粒を含み，焼成はやはり新治産須恵器としてはやや軟質である。4はかえりがかなり弱い。淡褐色で，多量の白雲母粒・石英粒・長石粒を含み，焼成は酸化焰であるが良好である。5はやや深めの形態で，色調は淡褐色である。白雲母末・石英粒・長石粒を多量に含み，焼成は新治産須恵器としてはやや軟質である。6はかなり浅めで扁平である。灰色で，多量の白雲母粒・石英粒・長石粒・還元鉄粒を含み，焼成はやや軟質である。7もかなり扁平な形態である。褐色で，多量の白雲母粒・石英粒・長石粒の他に微量の還元鉄粒を含み，焼成は良好である。8は縁辺部を欠失している。灰色で，多量の白雲母末・石英粒を含み，焼成は良好である。

9～17は杯である。9はやや小型で外面口縁部下端回転ヘラケズリ，底部手持ちヘラケズリ調整である。灰色で，少量の白雲母末，多量の石英粒・長石粒を含み，焼成はやや不良である。10もやや小型で，外面底部のみ回転ヘラケズリ調整である。色調は灰色，少量の白雲母末・石英粒・長石粒を含み，焼成はやや不良である。全体に摩耗が進んでいる。11は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。淡褐色で，多量の白雲母末・石英粒と酸化鉄粒を含み，焼成は酸化焰で良好である。12は底部外面下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。淡褐色で，多量の白雲母粒・石英粒・長石粒を含み，焼成は酸化焰で良好である。13は外面底部のみ回転ヘラケズリ調整である。淡褐色で，少量の白雲母粒，多量の石英粒・長石粒を含み，焼成は酸化焰で良好である。14は外面底部回転ヘラケズリ調整で，多量の白雲母末・石英粒・長石粒と微量の還元鉄粒を含み，焼成は良好である。15は外面底部回転ヘラケズリ調整で，色調は淡褐色，多量の白雲母粒・石英粒・長石粒を含み，焼成は酸化焰で良好である。16は外面底部回転ヘラケズリ調整で，色調は灰色，多量の石英粒・長石粒を含み，焼成は良好である。17は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。灰色で，多量の白雲母粒・石英粒・長石粒を含み，焼成は良好である。

18・19は土師器杯である。18は外面口縁部から底部手持ちヘラケズリ後，外面口縁部から内面全面にかけてヘラミガキ調整を行っている。色調は淡褐色で，微量の雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。19は外面全面手持ちヘラケズリ後，内外面全面ヘラミガキ調整を行っている。橙色で，微量の雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。

20は湖西産の須恵器甕である。底部付近は焼き歪みが激しい。外面底部のみ回転ヘラケズリ調整で，内面胴部下位で気泡が原因の胎土の膨張が見られ，内面口縁部と底部には自然釉がのっている。灰白色で，少量の長石粒と還元鉄粒を含み，焼成は良好である。

21・22は土師器甕である。21は口縁部内外面ヨコナデ，胴部は外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ・下端ヘラケズリ後全面横方向のヘラミガキ調整である。褐色で，微量の雲母末，少量の石英粒・長石粒・海綿骨



第67図 222竖穴住居出土遺物

針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。22は常総型甕の器形・調整技法を用いた甕である。外面ヘラケズリ後縦方向のヘラミガキ、内面ヘラナデ調整である。多量の雲母粒・石英粒・長石粒、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

23～29は土師器甕である。

23～25は常総型である。調整技法は共通で、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面ヘラケズリ後上半ヘラナデ・下半縦方向のヘラケズリで、内面横方向のヘラナデ、底部は23のみの遺存であるが、木葉痕無調整である。23は胴部中位に直径2cm弱の焼成後穿孔が見られるが、意味・性格は不明である。色調は外面淡褐色、内面黒褐色（使用痕跡）で、多量の雲母末・石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。24は褐色で、多量の雲母粒・石英粒・長石粒、少量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。25は頸部以上のみの破片資料である。色調は外面褐色、内面淡褐色で、多量の雲母末・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

26は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。色調は褐色で、少量の雲母粒・石英粒・長石粒・海綿骨針、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。27は頸部が強くすぼまる形態である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面斜方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。色調は橙色で、多量の石英粒・長石粒、微量の雲母末・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。28は外面全面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。色調は外面暗褐色、内面淡褐色で、多量の石英粒・雲母粒、少量の雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。29はやや丸みを帯びた底部で、外面は全面ヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ調整で、色調は内外面橙色である。多量の石英粒・長石粒、少量の雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

30は手捏ね土器である。全面ナデ調整で、粘土紐接合痕を明瞭に残す。色調は黒褐色で、雲母末・石英粒・海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。

31は土製支脚である。底面は無調整で、他の部分はナデ調整で、指頭痕が随所に見られる。赤褐色で、雲母粒・酸化鉄粒・石英粒・長石粒の他に多量の砂粒を含む。焼成は良好である。32は砂岩製砥石である。33は蛇文岩製紡錘車である。側面・上面に擦痕に混じって線刻様のものが見られる。

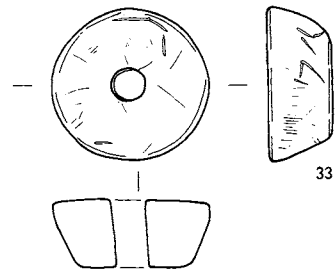
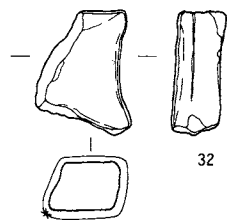
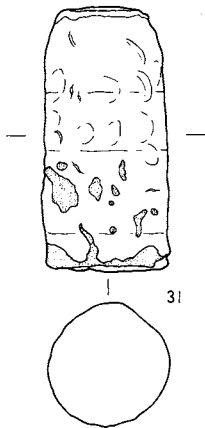
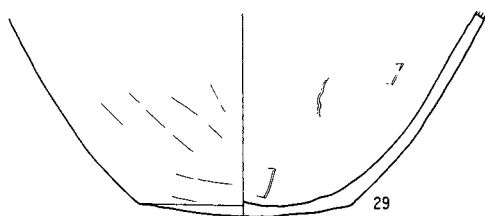
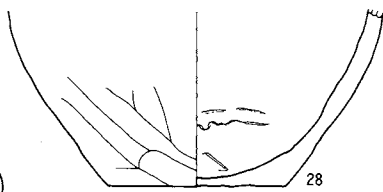
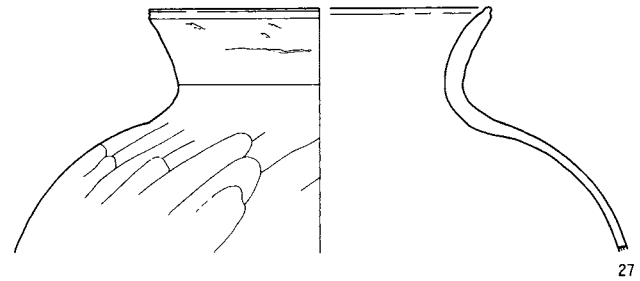
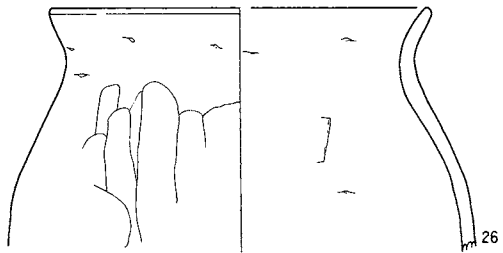
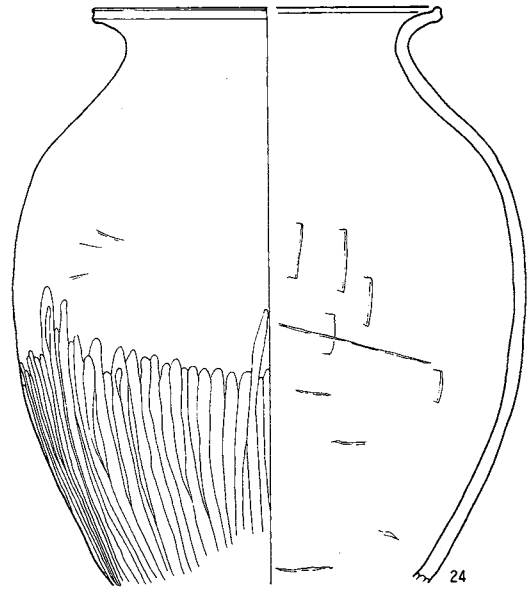
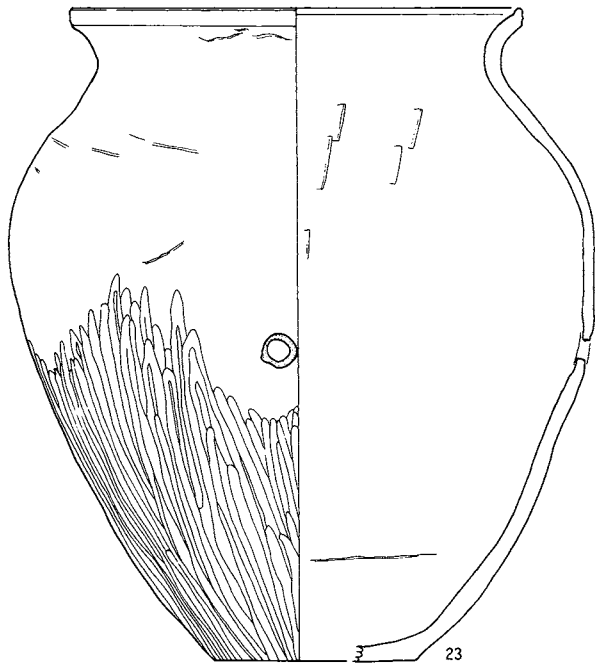
224 竪穴住居出土遺物（第69図、図版37）

1・2は須恵器杯である。ともに新治産と考えられる。1は内面底部にヘラ書きで記号様のものが記されている。外面は口縁部下端回転ヘラケズリ、底部手持ちヘラケズリ調整で、色調は灰色である。多量の白雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は須恵器としてはやや軟質である。2は外面底部静止糸切り後、口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。色調は灰色で、少量の雲母末、多量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

3・4は土師器甕である。3は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。内外面赤褐色で、やや多めの雲母末、少量の石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良である。4は調整技法は3と同様だが、二次被熱のために器面の剝離が著しい。色調は内外面赤褐色で、少量の石英粒・長石粒、微量の雲母末・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

5は手捏ね土器である。底部外面は木葉痕無調整、口縁部は外面ナデ、内面ヘラナデ調整で、色調は褐色である。雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。

222



0 23~32 : 1/4 20cm

0 33 : 1/2 5cm

第68図 222竪穴住居出土遺物

225竪穴住居出土遺物（第69～72図，図版37・38）

1～11は千葉市域産のロクロ土師器杯である。1～8はほぼ共通の調整技法で、外面底部回転糸切り後（痕跡の見えるものと見えないものがある）口縁部下端から底部周縁もしくは全面回転ヘラケズリ調整である。1は赤褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。2は外面赤褐色，内面褐色で、雲母粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。3は外面黒褐色，内面暗褐色で、雲母粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。4は内外面明褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5は外面黒色と橙褐色に二分され、内面は一部橙褐色を除きほぼ黒色である。いわゆるクスベ焼きの須恵器である可能性もあるが、全体に判別は難しい。雲母末・長石粒の他に微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。6は口縁部内外面の半分ほどが黒色で、他は淡褐色である。雲母末・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。7はやや灰色がかった褐色である。雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。8は淡褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。9は外面底部回転ヘラケズリ後，口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。全体に淡褐色で、わずかに黒褐色の部分がある。長石粒・酸化鉄粒の他に少量の雲母末を含み、焼成はきわめて良好である。10は調整技法は9と同様である。褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。11も調整技法は前二者と同様である。赤褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

12はほぼ全面黒色でいわゆるクスベ焼きの須恵器杯であるが、色調を除けば前11個体のロクロ土師器杯と何ら変わるところはない。外面底部回転糸切り後，底部のみ粗くヘラケズリ調整を行っている。雲母末・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

13～16は内面ヘラミガキ調整のロクロ土師器杯である。13は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。外面赤褐色で、内面暗褐色，雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。14は外面底部回転糸切り後，口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。暗褐色で、長石粒・酸化鉄粒の他に微量の雲母粒を含み、焼成は良好である。15は底部を欠失し，外面底部周辺の調整技法は不明である。外面暗褐色，内面褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒の他に少量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。16はやや大型の製品で，外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。内外面淡褐色で，多量の雲母粒の他に長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

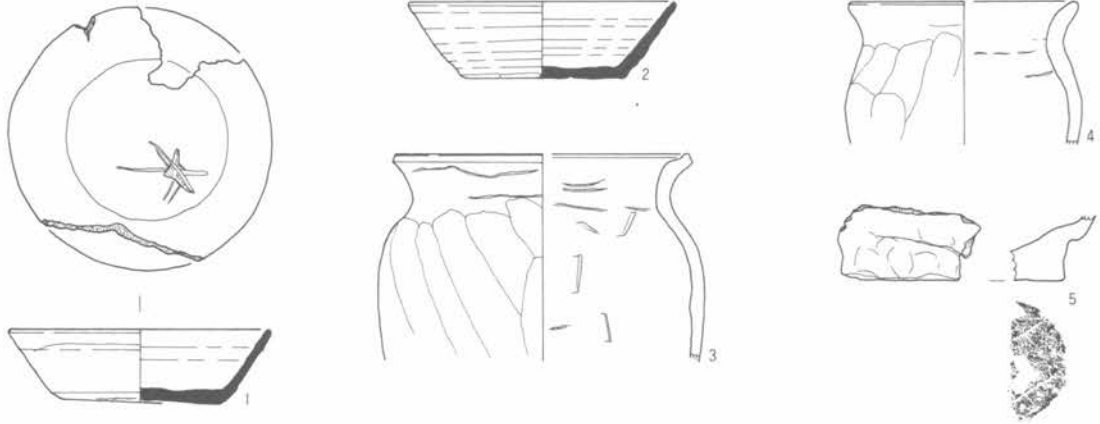
17はロクロ土師器高台付杯の高台部である。外面底部中央に回転ヘラ切り痕が見える以外はロクロ調整である。褐色で，長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

18～21はロクロ土師器高台付皿である。一見削り出し高台のように見えるものもあるが，みな付高台で，内面はヘラミガキ調整という共通点をもつ。外面底部切り離し技法は19が回転ヘラ切りで，それ以外は回転糸切りである。18は明褐色で，長石粒・酸化鉄粒・海綿骨針の他に多量の雲母末を含み、焼成は良好である。19は外面暗褐色，内面褐色で，雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。20は全面褐色で，雲母粒・長石粒・酸化鉄粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。21は底部中央付近を欠失している。色調は外面褐色，内面赤褐色で，雲母粒・長石粒の他に微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

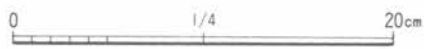
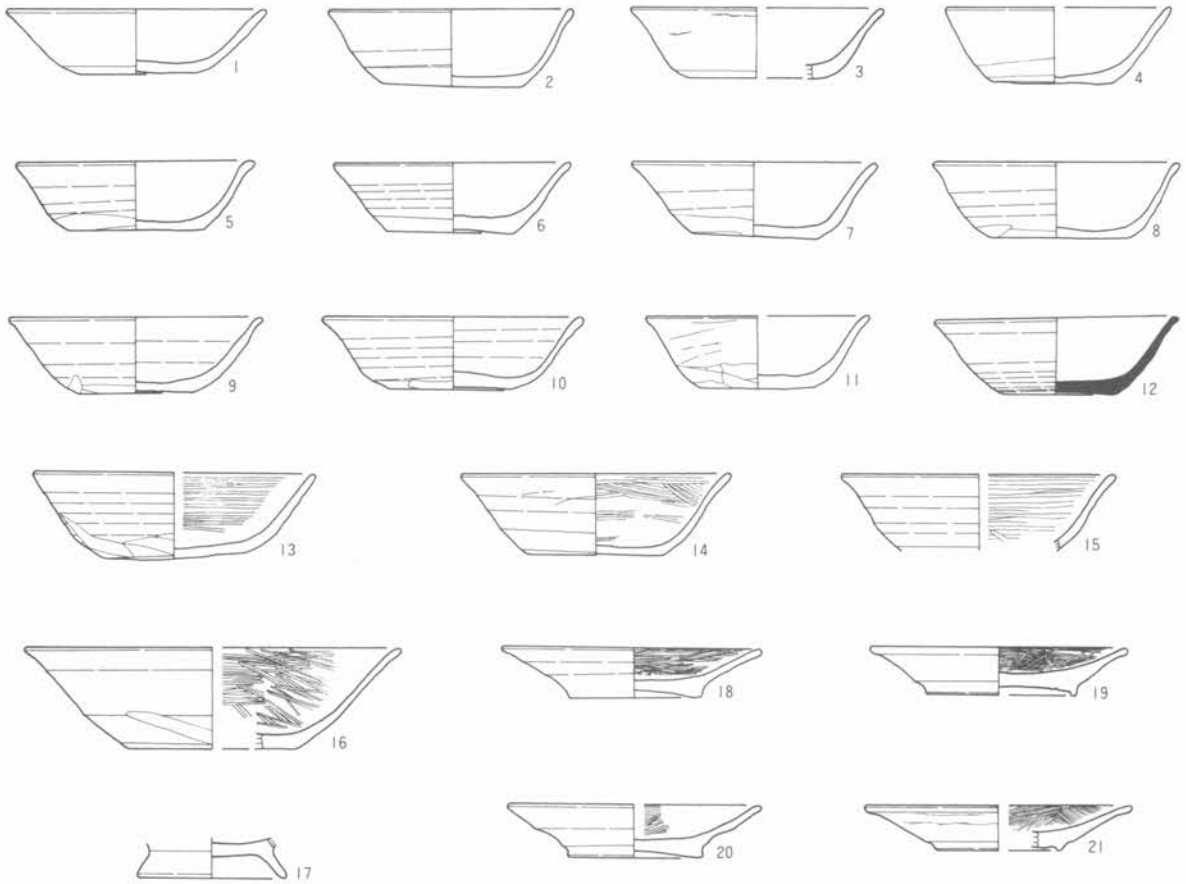
22～43は文字又は記号を有する資料である。43が須恵器である以外はすべてロクロ土師器である。

22～29は墨書資料である。22は杯で底部内面に「□（男カ）」もしくは「□□（田丙カ）」の文字が記さ

224



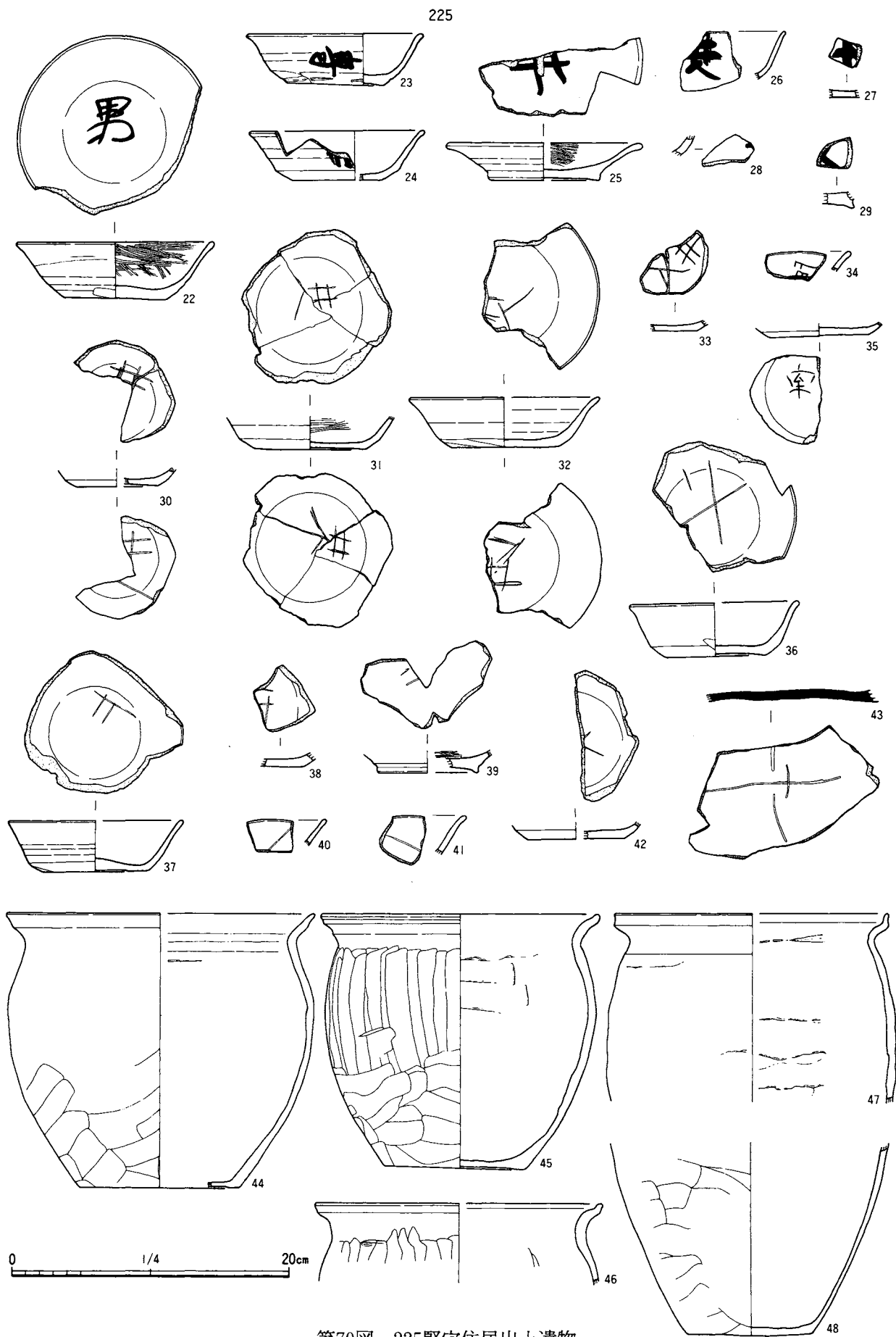
225



第69図 224・225竪穴住居出土遺物

れている。外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ、内面ヘラミガキ調整である。淡褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。23は杯で、口縁部外面に横位で「専」の文字が見える。外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。24は杯で、口縁部外面に横位で文字が記されている。小片のため断定は無理であるが、本遺跡出土文字から類推すると「千万」もしくは「手」のいずれかである可能性が高い。調整技法は23と同様である。淡褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。25は高台付皿で、皿部内面底部に墨書があり、遺存部分では「キ」字状に見える。外面は底部中央に回転糸切り痕が見えそれ以外はロクロ調整、内面はヘラミガキ調整である。明褐色で、多量の雲母末、微量の酸化鉄粒の他に長石粒を含み、焼成は良好である。26は杯で、口縁部外面に正位で「井人」と墨書されている。外面口縁部下端のみ手持ちヘラケズリ調整で、色調は灰褐色、長石粒・酸化鉄粒の他に微量の雲母粒を含み、焼成は良好である。27は杯で、内面底部に「□（千カ）」の墨書が見える。外面は手持ちヘラケズリ調整で、色調は褐色、雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。28は杯で、口縁部外面に墨痕の一部が見える。外面口縁部下端は回転ヘラケズリ調整で、色調は暗褐色、長石粒と微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。29は高台付皿で、底部内面に墨書がなされているが判読は不能である。外面底部中央部は回転糸切り痕が見え、内面はヘラミガキ調整である。褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

30～42は線刻資料である。30は杯で、底部内面に「井」、底部外面に「井カ人カ」の線刻が見える。外面口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。褐色で、多量の雲母粒の他に長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。31は杯で底部内外面に「井人」の線刻が記されている。外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ、内面粗いミガキ調整である。淡褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。32も杯で底部内外面に「井人」の線刻が見える。外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整である。褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。33は杯で、底部内面に線刻で「井人」と記されている。外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。淡褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。34は杯で、口縁部外面に線刻があるが判読不能である。暗褐色で、雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。35は杯で、底部外面に「室」の異体字が線刻されている。外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリを行い、色調は外面褐色、内面暗褐色である。雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。36は杯で、内面底部に「×」の線刻が記されている。外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリを施している。褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。37は杯で、底部内面に「π」状の線刻が記されている。外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を行い、色調は赤褐色で、多量の雲母粒の他に長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。38は杯で、底部内面に線刻があるが、判読不能である。外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整で、外面褐色、内面褐色である。雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。39は高台付皿で、底部内面に線刻が見えるが判読不能である。外面底部中央には回転糸切り痕が見え、内面はヘラミガキ調整である。内外面褐色で、多量の雲母粒の他に長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。40は杯で、口縁部外面に線刻があるが判読不能である。淡褐色で、



第70図 225竖穴住居出土遺物

雲母粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。41は杯で、やはり口縁部外面に線刻が見えるが判読不能である。灰褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。42は杯で、底部内面に線刻が見えるが判読不能である。赤褐色で、長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

43は須恵器甕底部である。底部外面に記号様のヘラ書きが見える。色調は褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、酸化焰焼成であるが焼成は良好である。

44～48は土師器甕である。44はやや寸胴気味で、口縁部は緩く屈曲しながら広がる。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面上半ナデ、下半斜方向のヘラケズリ、内面底部までヘラナデで、外面底部はヘラケズリ調整である。外面褐色、内面黒褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。45はやや寸胴形で、口縁部ヨコナデ、胴部は外面上半縦方向、下半横方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ、外面底部は木葉痕をヘラケズリで消している。内外面暗褐色で、雲母粒・長石粒の他に多量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。46は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整で、色調は淡褐色、長石粒・海綿骨針の他に少量の雲母粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。47は常総型である。口縁部は内外面横ナデ、胴部遺存部は内外面ヘラナデ調整である。暗褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。48は外面全面ヘラケズリ、内面全面ヘラナデ調整で、色調は外面暗褐色、内面淡褐色で、長石粒の他に多量の海綿骨針、少量の雲母末を含み、焼成は良好である。

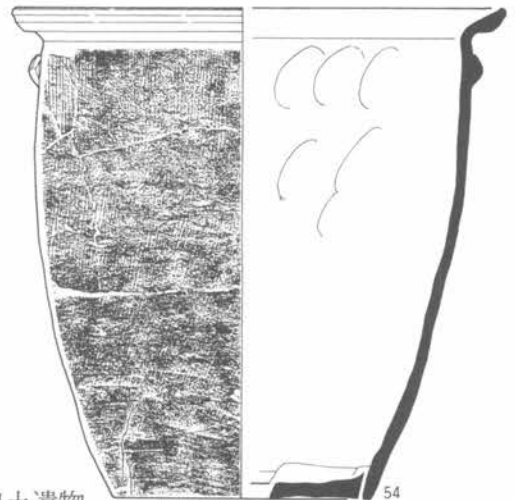
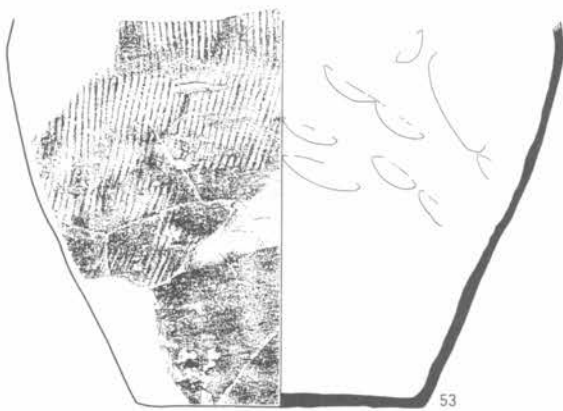
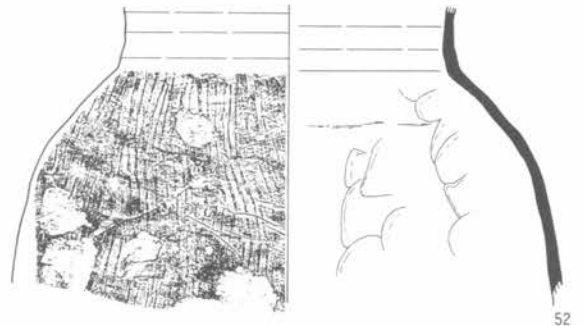
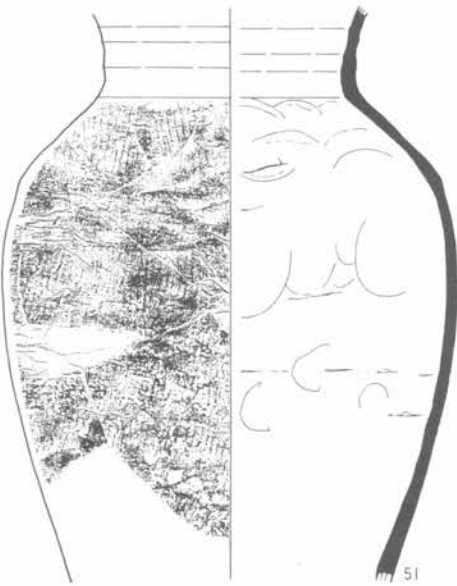
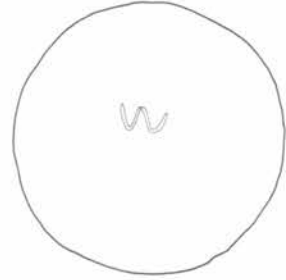
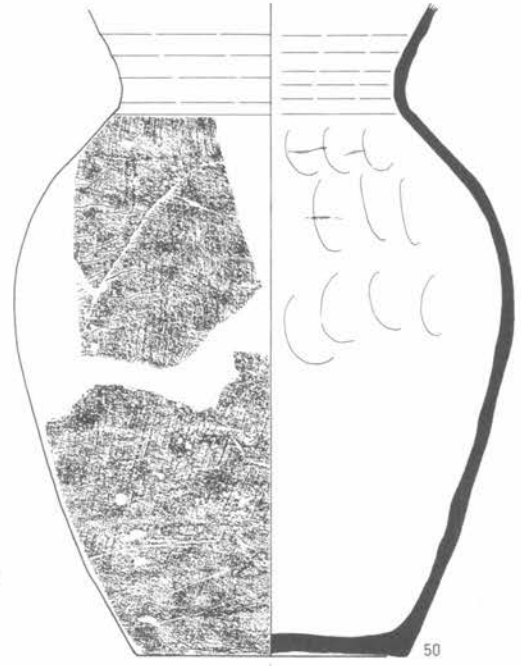
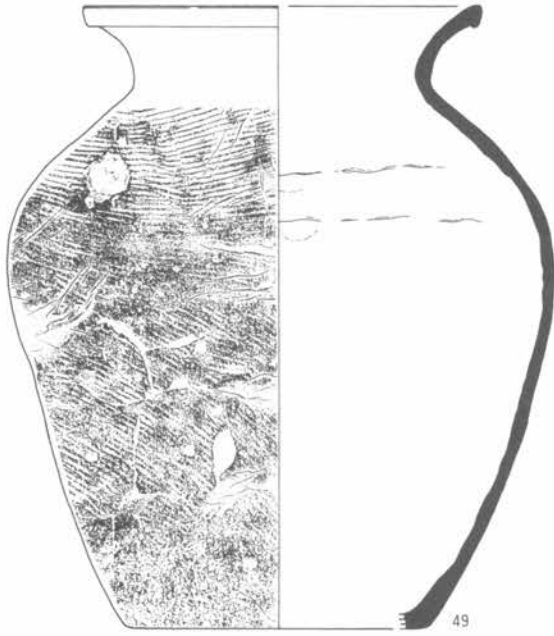
49～53は須恵器甕である。49は新治産、他は千葉市域産と考えられる。49は口縁部内外面ロクロ調整、胴部は外面横方向の平行タタキ後に胴部下端から底部までヘラケズリ調整、内面は当具痕をヘラナデでナデ消している。外面暗赤褐色、内面暗褐色で、白雲母末の他に多量の長石粒を含み、焼成は良好である。50は底部外面に「弓」状のヘラ書きがある。口縁部内外面ロクロ調整、胴部は外面縦方向のヘラケズリ後下端から底部にかけてヘラケズリ調整、内面は当具痕が明瞭で全面にヘラナデを施している。内外面暗赤褐色で、長石粒・還元鉄粒を含み、焼成は良好である。51は口縁部上端と底部を欠失しているが、遺存部分の調整技法は50と同様である。赤褐色で、長石粒・還元鉄粒を含み、焼成は良好である。52は頸部から胴部上半にかけての資料で、遺存部位の調整技法は前二者と同様である。暗褐色で、長石粒・還元鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。53胴部上位以下の資料で、底部外面が無調整である以外は50と同様の調整技法である。灰褐色で、長石粒と微量の雲母粒を含む。焼成は良好である。

54は五孔式の須恵器甕である。

55は頸部以上を欠失している灰釉陶器長頸瓶（折戸10号窯式期）である。外面胴部上半は施釉されている。底部外面中央には回転ヘラ切り痕が見え、胴部外面下位は回転ヘラケズリ調整、他の部分はロクロ調整である。素地は灰色、釉色は暗緑色で、胎土中に少量の石英粒・還元鉄粒を含み、焼成は良好である。56も灰釉長頸瓶の胴部下位から底部資料で、色調は灰色、長石粒・還元鉄粒を含み、焼成は良好である。

57は流紋岩製砥石である。研ぎ減りが激しく、下端欠失部分以外はすべてに研磨痕がある。

58～67はすべて鉄製品である。58・59は刀子である。58は茎尻を欠失するがほぼ完形に近い遺存である。関の遺存は背の部分だけであるが、刃部の研ぎ減りが進んでいることを考えると本来は両関であった可能性もある。茎の一部には柄の木質が付着している。59は刃部中位程度の部位から刃先までの部分を欠失しているが、茎は尻の部分まで遺存している。関は背と刃の双方につく両関である。60は折り返し式の袋状鉄斧である。先端刃部は撥状に軽く開く形態である。袋状の部分には柄の木質の一部が付着遺存している。61は断面方形で図の左端から右端に向かって細くなる形態の棒状のものである。用途の断定はできない。



第71図 225豎穴住居出土遺物

62は現状では図の上端に向かって大きく開く形態であるが、X線写真を見ると本体が錆で三本に分かれて膨れた結果の形状であり、本来の開き方はずっと弱いものであったことがわかっている。断面長方形で、用途・名称は不詳である。63は断面長方形で、ほぼ直角に曲がった状態で遺存しているが、本来は直線状のものであった可能性が高い。やはり、用途・名称は不詳である。64～67は紡錘車で、同一個体が四つに分かれたものであると考えられる。

68は土製紡錘車である。褐色で、全面ナゲ調整である。雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

226A 竪穴住居出土遺物（第72・73図，図版38）

226Bの住居と重複しているために遺物の混入が生じている。1～4は本住居に確実に伴う時期の資料で、5～11は226Bに伴う時期の資料と考えられる。

1～4は須恵器蓋杯で、3は高台付杯、4は無高台である。組合せ関係は1と3、2と4で、前者は湖西産、後者は新治産である。1は明瞭な擬宝珠形のつまみをもち、つまみ部分を除く外面上半には回転ヘラケズリが施されている。灰白色で、若干の石英粒と還元鉄粒を含み、焼成は良好である。2は扁平で環状に近い擬宝珠形つまみをもち、つまみ部分を除く外面上端に回転ヘラケズリがなされている。灰色で、微量の雲母末、多量の石英粒・長石粒を含み、焼成はやや軟質で、器面はざらついている。3は外面底部下端が高台下端よりも下に出ており、この時期の湖西産須恵器高台付杯の典型的形態である。外面のいわゆるロクロ目がかなりきつく、外面底部中央部分にのみ回転ヘラケズリ痕跡が見える。灰白色で、長石粒・還元鉄粒を若干含み、焼成は良好である。4は丸底に近い形態で、外面底部は回転ヘラケズリ調整である。灰褐色で、少量の雲母末、多量の石英粒・長石粒を含み、器面の摩耗が進んでいて、焼成はやや不良である。

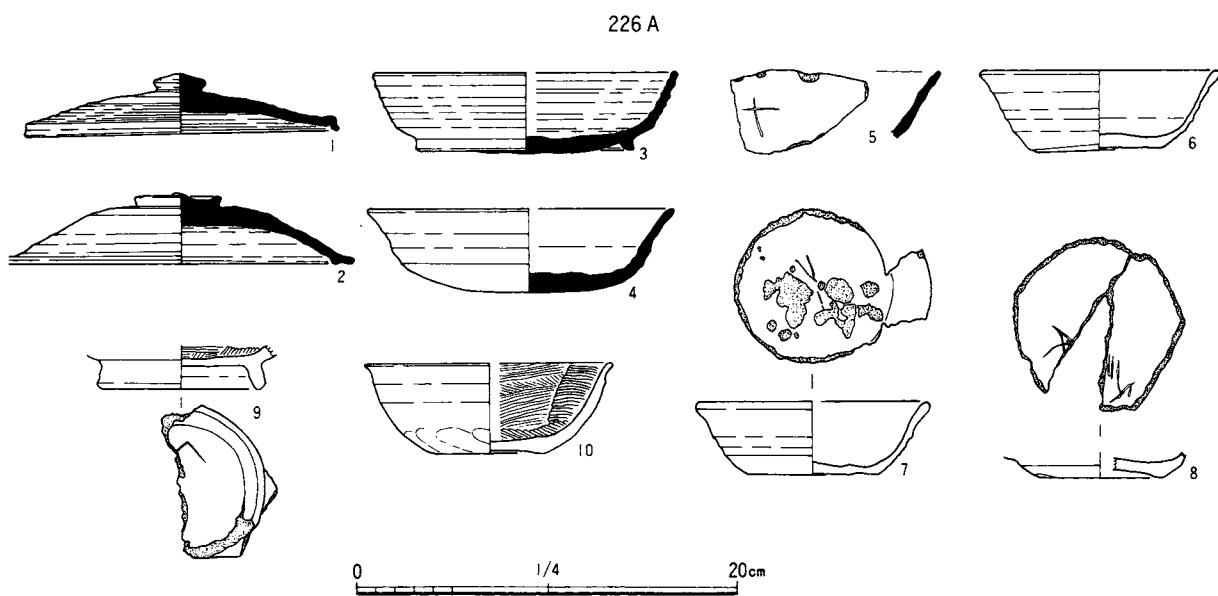
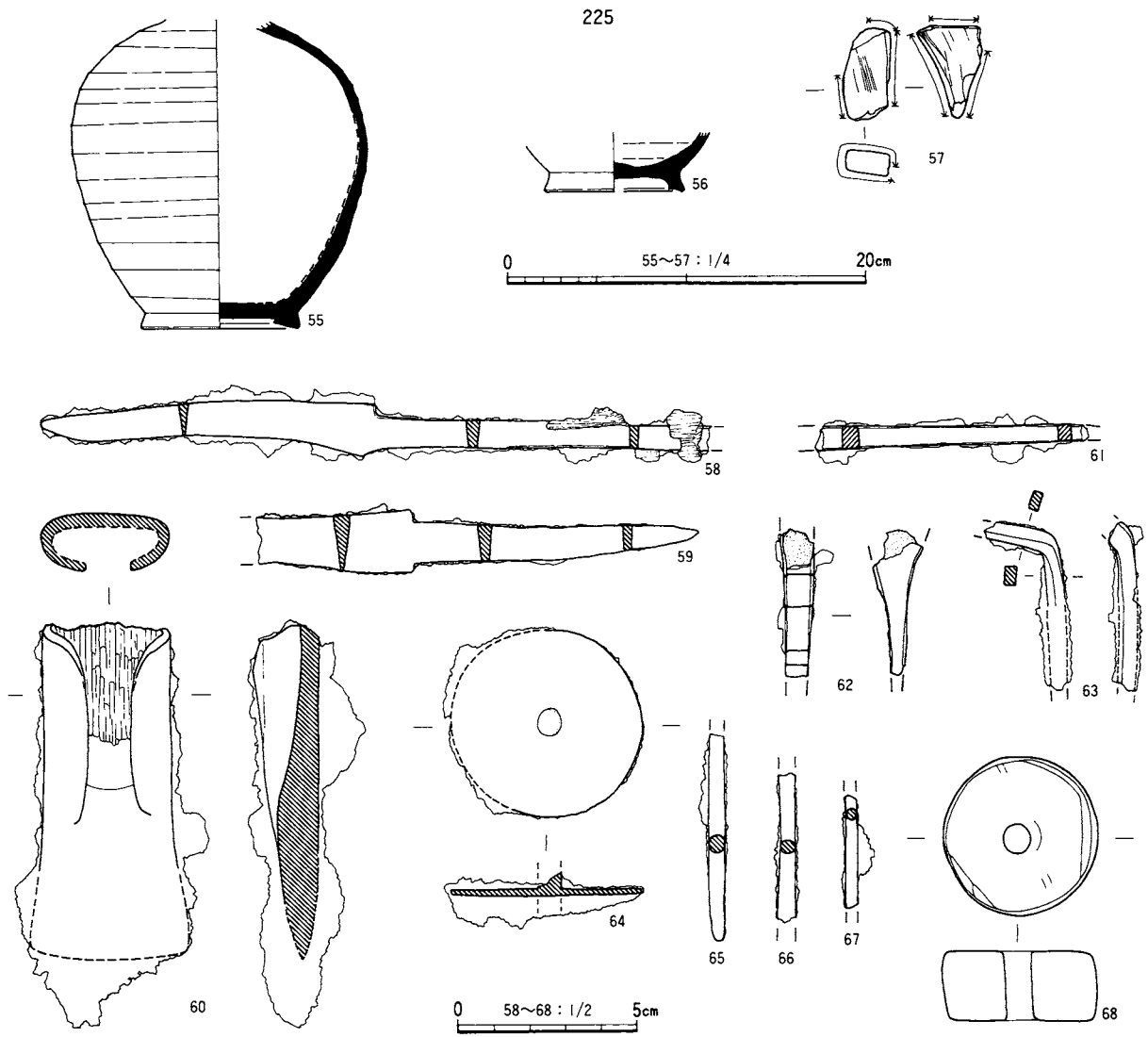
5は須恵器杯の口縁部小片で、外面に「十」字形の線刻が記されている。灰色で、多量の雲母末・長石粒を含み、焼成は不良である。

6～8はロクロ土師器杯である。6は底部外面回転糸切り後口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリを行っている。外面褐色、内面淡褐色で、雲母粒の他に多量の長石粒、少量の海綿骨針・酸化鉄粒を含む。焼成は良好である。7は6と同様の調整で、底部内面に「Y」字状の線刻が記されている。褐色で、雲母末の他に微量の石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含む。焼成は良好であるが器面の剝離が進んでいる。8は外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。底部内面に「久□□」の線刻が見え、本遺跡の他の文字資料から類推して「久弥良」である可能性が高い。

9は内面黒色処理のロクロ土師器高台付杯である。外面底部に「へ」字状の線刻が記されている。外面底部は回転ヘラケズリ、内面はヘラミガキ調整である。外面は褐色で、雲母粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。10はロクロ土師器杯である。外面は底部回転糸切り後無調整で、口縁部下端手持ちヘラケズリ、内面全面ヘラミガキ調整である。外面褐色、内面暗褐色で、微量の雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

11は釉は見えないが、器形から考えて灰釉陶器長頸瓶である。外面底部のみ回転ヘラケズリ調整を行っている。灰白色で、少量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

12は酸化焰焼成の須恵器甕である。外面底部無調整、胴部遺存部全体から底部周縁にかけて手持ちヘラ



第72図 225・226A竪穴住居出土遺物

ケズリで、内面は指頭状の圧痕をナデ消している。淡褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。

13は鉄製刀子刃部である。

226B 竪穴住居出土遺物（第73図，図版38）

1～8はロクロ土師器である。1は杯で、底部外面に「中」の線刻が記されている。外面底部糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。淡褐色で、やや多めの雲母粒の他に、少量の石英粒・長石粒・海綿骨針、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。2は杯で、調整技法は1と同じである。褐色で、少量の雲母末・石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。3は杯で、外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。淡褐色で、少量の雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。4は杯で、外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ後、底部のみ再度手持ちヘラケズリを施している。淡褐色で、やや多めの雲母末、少量の石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含む。焼成はやや不良である。5は杯で、調整技法は1と同様である。淡褐色で、多量の酸化鉄粒、少量の雲母末・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は不良である。6は杯で、外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ、内面全面丁寧なヘラミガキ、外面口縁部粗いヘラミガキ調整である。赤褐色で、少量の雲母末・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。7は杯で、外面は口縁部上位以下底部まで手持ちヘラケズリ、内面は全面ヘラミガキ調整である。暗褐色で、少量の雲母末・石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。8は高台付皿である。付高台で、外面底部中央のみ回転糸切り後無調整、他の部位はロクロ調整である。赤褐色で、少量の雲母末・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

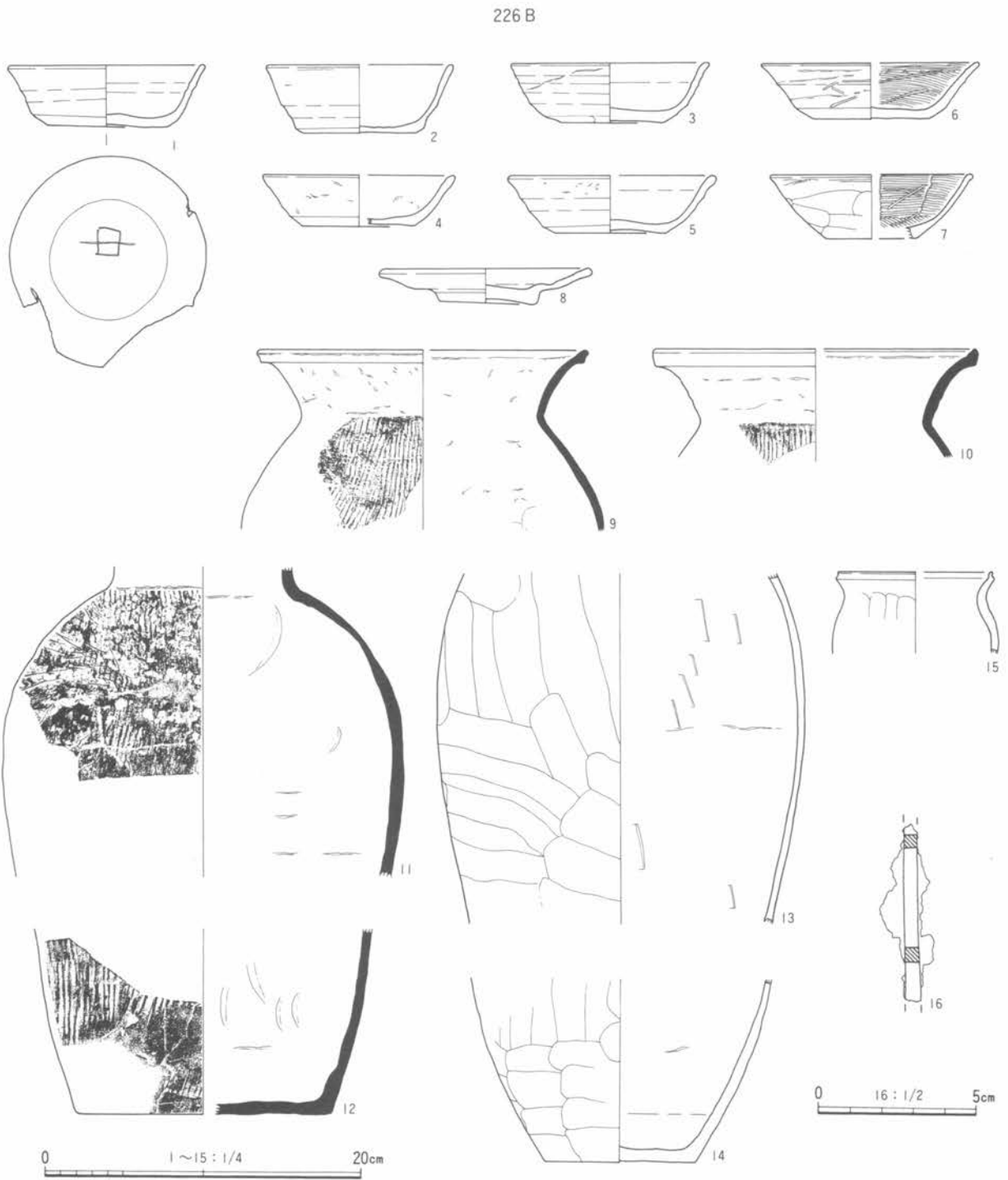
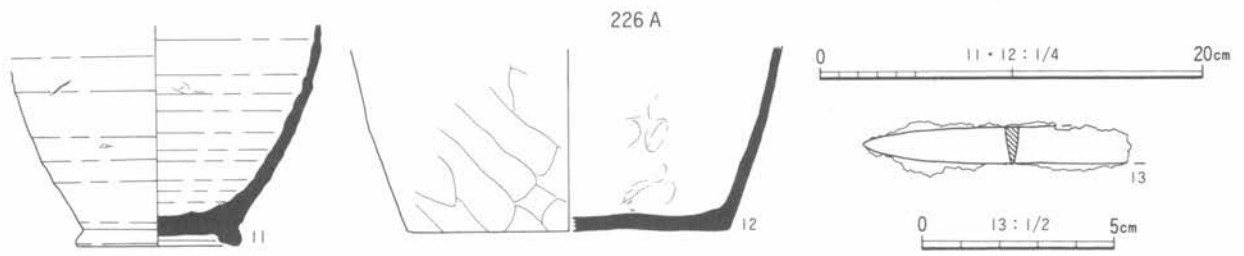
9～12は新治産須恵器甕である。口縁部は内外面ロクロ調整、胴部は外面縦方向のタタキの後胴部下端横方向のヘラケズリ、内面当具痕をナデ消し、底部外面は無調整である。9は暗灰色で、白雲母粒・長石粒をやや多めに含み、焼成は良好である。10は暗灰色で、少量の白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。11は淡褐色で、やや多めの白雲母末、少量の石英粒・酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良である。12は淡褐色で、やや多めの白雲母粒・石英粒・長石粒、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

13～15は土師器甕である。13・14は長胴で、ともに口縁部を欠失している。胴部は外面上半縦方向・下半横方向のヘラケズリ、内面は底部まで横方向のヘラナデ、底部外面は一方向のヘラケズリ調整である。13は褐色で、少量の雲母粒・石英粒・長石粒・海綿骨針、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。14は赤褐色で、多量の雲母末、少量の長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。15は小型甕で、口縁部は内外面ヨコナデ、他の部位の調整は前二者と同様である。淡褐色で、跳梁の雲母粒・石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

16は断面方形の棒状鉄製品である。用途・名称は断定できない。

227 竪穴住居出土遺物（第74図，図版38）

1は新治産と考えられる須恵器杯である。外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整で、色調は灰色である。少量の雲母末、多量の石英粒・長石粒を含み、焼成はやや不良である。



第73図 226A・226B竪穴住居出土遺物

2は全面赤彩のロクロ土師器杯である。外面底部静止糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリ調整を行っている。微量の長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

3・4は土師器甕である。3は口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラナデ調整である。褐色で、多量の石英粒・長石粒、やや多めの雲母粒、微量の酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良である。4は口縁部内外面横ナデ、胴部は外面上半縦方向・下半横方向のヘラケズリで、内面は横方向のヘラナデ調整である。淡褐色で、少量の雲母粒・酸化鉄粒、多量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

228 竪穴住居出土遺物 (第74図)

1・2は土師器杯である。調整技法は共通で外面手持ちヘラケズリ調整後口縁部のみ粗いミガキ、内面は全面丁寧なヘラミガキ調整である。1は暗褐色で、多量の石英粒・長石粒、少量の雲母粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。2は皿としても良い器形である。少量の雲母末・石英粒・長石粒、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

3は須恵器甕または甑である。口縁部は内外面ロクロ調整、胴部は外面にヘラ工具の痕跡らしいものが見えるが調整不明、内面は横方向のヘラナデ調整である。淡褐色で、多量の石英粒、やや多めの白雲母末、微量の酸化鉄粒を含む。焼成は酸化焰であるが、良好である。

229 竪穴住居出土遺物 (第74・75図, 図版38・39)

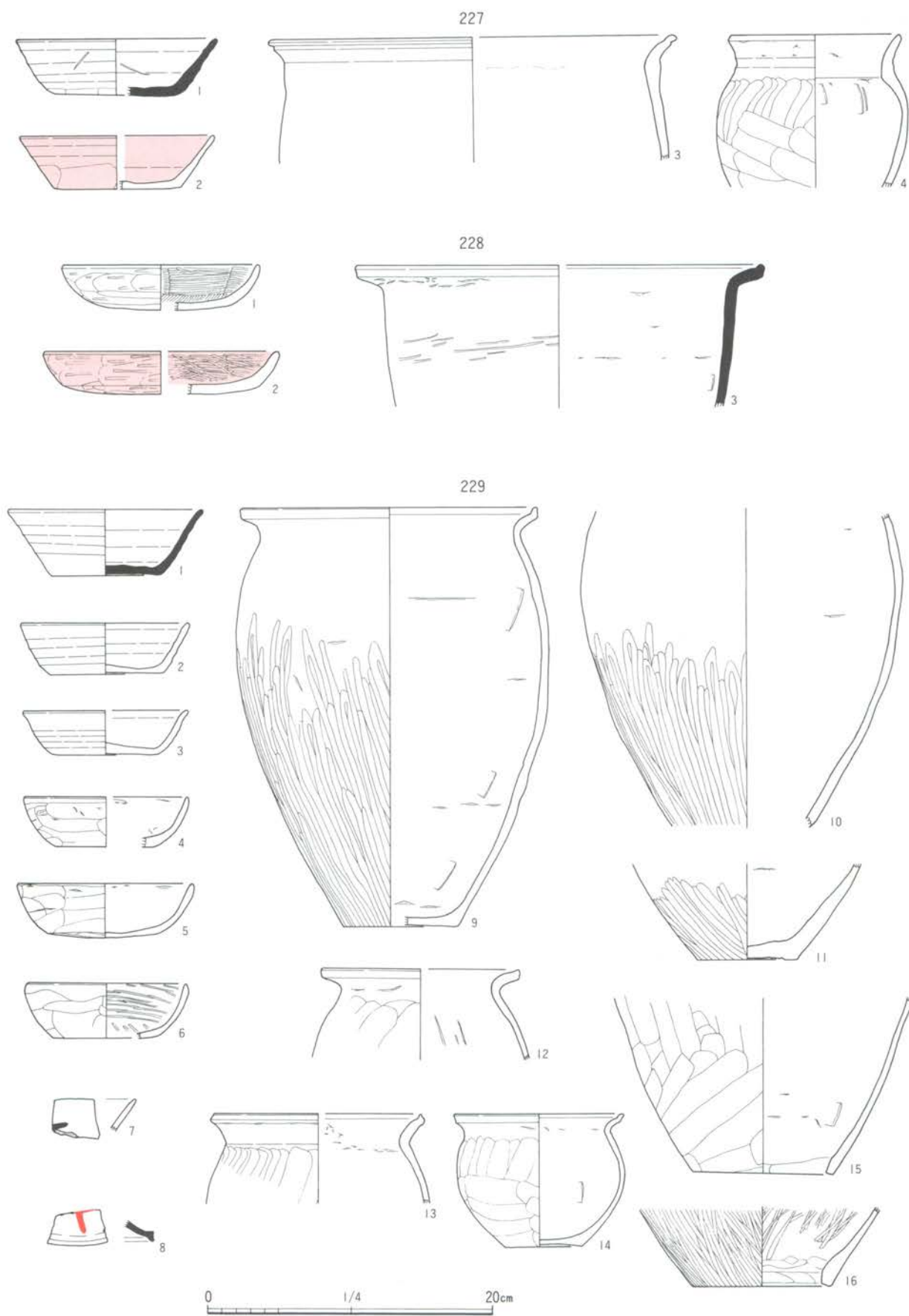
1は新治産と考えられる須恵器杯である。外面口縁部下端は回転ヘラケズリ、底部は全面手持ちヘラケズリ調整である。灰褐色で、多量の白雲母末・石英粒を含み、焼成は良好である。

2・3はロクロ土師器杯である。2は外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整である。淡褐色で、少量の石英粒・長石粒、微量の雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。3は外面底部回転糸切り後、底部周縁のみ回転ヘラケズリ調整である。淡褐色で、やや多めの海綿骨針・酸化鉄粒、少量の雲母末、微量の長石粒を含み、焼成は良好である。

4～6は土師器杯である。4・5は外面手持ちヘラケズリ、内面ヘラナデ調整、6は同様の調整の後に内面のみヘラミガキ調整である。4は淡褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。5は赤褐色で、少量の酸化鉄粒、微量の雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。6は淡褐色で、少量の石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の雲母末・海綿骨針を含み、焼成は良好である。

7・8は文字資料である。7はロクロ土師器杯で口縁部外面に墨書があるが、小片のため判読不能である。褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を微量含み、焼成は良好である。8は須恵器蓋で、外面に朱墨があるが、小片のため判読不能である。色調は灰色で、やや多めの長石粒を含み、焼成は良好である。

9～14は土師器甕である。9～11は常総型である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面ヘラケズリ・ヘラナデ後胴部上位以下に縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラナデ、外面底部は木葉痕無調整である。9は褐色で、多量の石英粒・長石粒、少量の雲母末、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。10は褐色で、多量の石英粒・長石粒・雲母粒、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。11は外面暗褐色、内面淡褐色で、多量の石英粒・長石粒、少量の雲母末、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。12・



第74図 227・228・229竪穴住居出土遺物

13は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。12は外面淡褐色、内面暗褐色で、多めの酸化鉄粒、少量の雲母末、微量の石英粒・長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。13は外面淡褐色、内面暗褐色で、多めの酸化鉄粒、少量の雲母末、微量の石英粒・長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。14は小型甕で、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面上半縦方向・下半横方向のヘラケズリ、内面は底部まで横方向のヘラナデ、外面底部はヘラケズリ調整である。石英粒・長石粒の他に微量の雲母末・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

15・16は土師器甕である。15は図示部分外面上半縦方向・下半斜方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデで、下端から底面にかけて横方向のヘラケズリ調整である。褐色で、多めの酸化鉄粒、少量の石英粒・長石粒、微量の雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。16は内面下端から底面にかけて横方向のヘラケズリでそれ以外の部位はすべてヘラミガキ調整である。淡褐色で、多めの酸化鉄粒・長石粒、微量の雲母末・海綿骨針を含み、焼成は良好である。

17は土師器で、鉢状の甕と考えられる。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。外面赤褐色、内面淡褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を微量含み、焼成は良好である。

18は畿内産と考えられる土師器小型甕である。頸部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向・内面横方向のハケ目調整である。淡褐色で、石英粒・長石粒の他に少量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

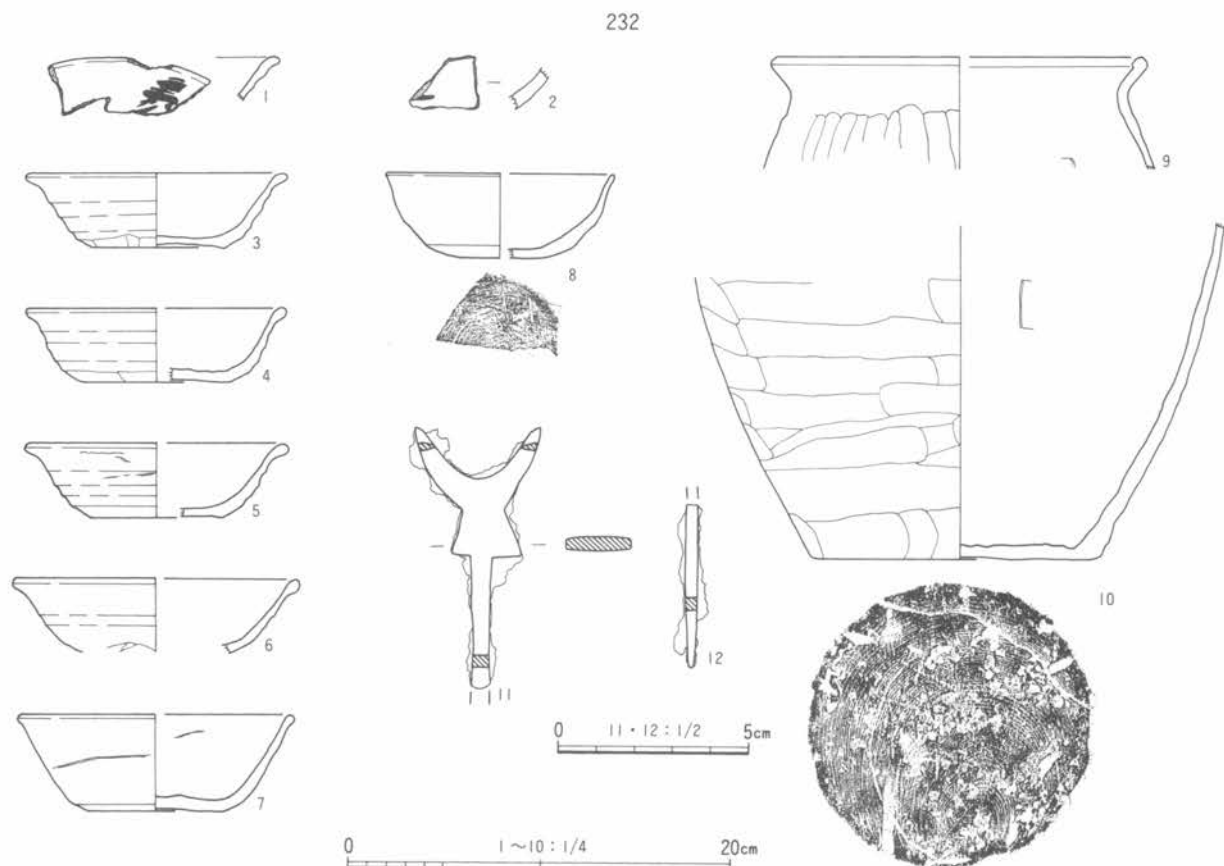
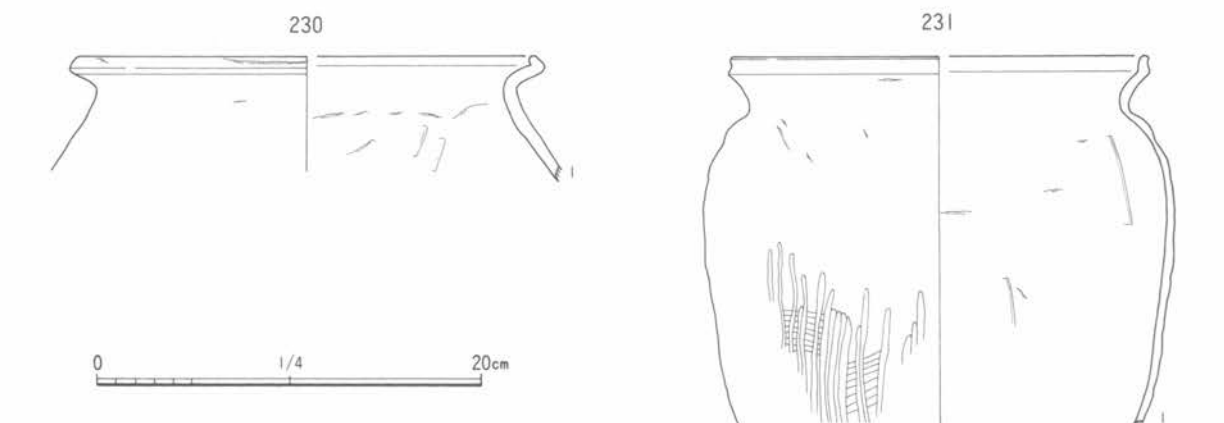
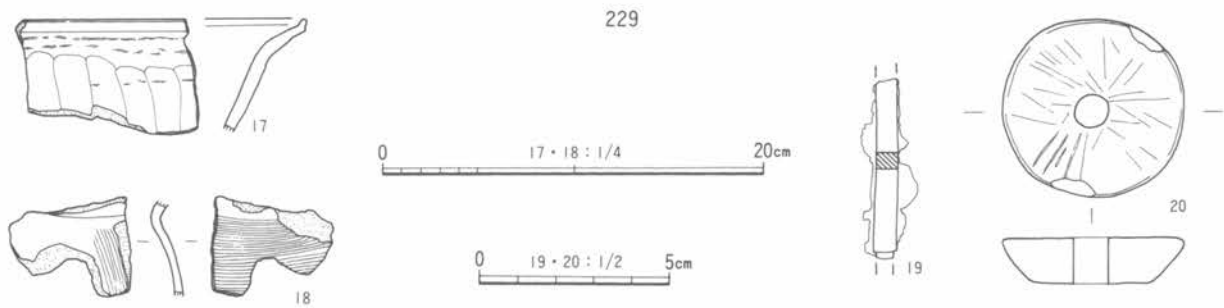
19は鉄鍬の篋被から茎にかけての資料で、篋被と茎の間は全面に段差がある。篋被は断面方形である。

20は滑石製紡錘車で、全面に擦痕や線状の大きめの傷があるが、文字等として断定できるものは無い。

232 竪穴住居出土遺物（第75図、図版39）

1～8はロクロ土師器杯である。1は口縁部外面に墨書部分があるが、判読は不能である。淡褐色で、石英粒・長石粒の他に少量の雲母粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は不良である。2は口縁部外面下端付近に墨書痕跡が見えるが判読不能である。褐色で、石英粒・長石粒の他に少量の雲母粒、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。3は外面底部回転糸切り後口縁部下端手持ちヘラケズリ、底部周縁回転ヘラケズリ調整で、色調は淡褐色、少量の石英粒・長石粒、微量の雲母末・海綿骨針を含み、焼成はやや不良である。4は外面底部回転糸切り後底部下端回転ヘラケズリ、底部周縁手持ちヘラケズリ調整で、色調は淡褐色、やや多めの雲母末、少量の石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5は外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整で、色調は淡褐色、少量の雲母末・石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良である。6は底部を欠失しており、外面口縁部下端のみ手持ちヘラケズリ調整である。淡褐色で、少量の長石粒、微量の雲母粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良である。7は外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整である。外面褐色、内面淡褐色で、少量の石英粒・長石粒、微量の雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。8は外面底部回転糸切り後無調整で、外面褐色、内面暗褐色である。石英粒・長石粒の他に少量の雲母末、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

9・10は土師器甕である。9は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデで、外面褐色、内面暗褐色、少量の長石粒、微量の雲母末・海綿骨針を含み、焼成は良好である。10は外面底部回転糸切り無調整、胴部は外面横方向のヘラケズリ、内面は全面横方向のヘラナデ調整であ



第75図 229・230・231・232竪穴住居出土遺物

る。外面黒色，内面褐色で，雲母粒・石英粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。

11・12は鉄鏝である。11は雁股鏝で，両関の三角鏝の先端に雁股が付く形態である。12は莖尻である。

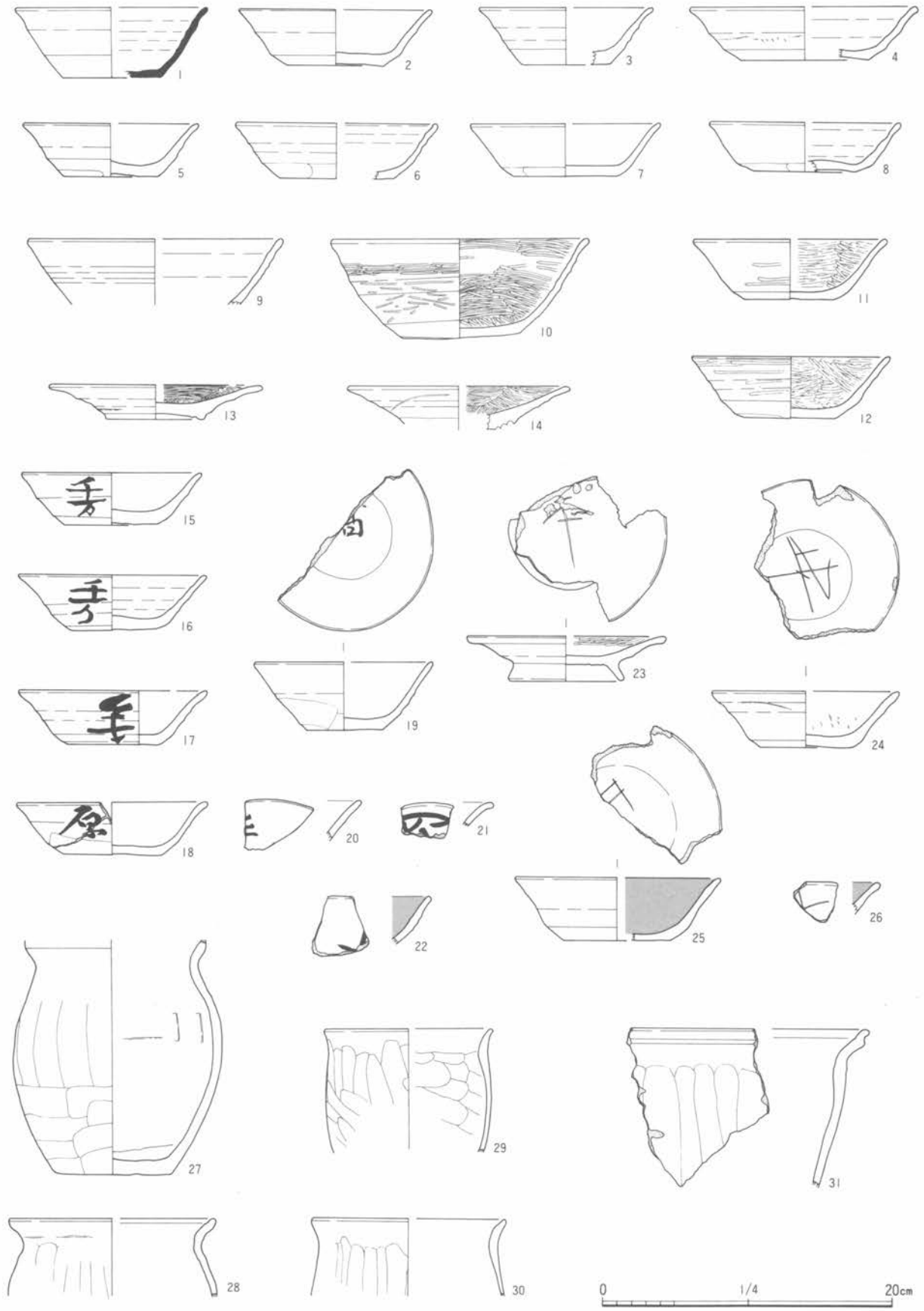
233竪穴住居出土遺物（第76・77図，図版39）

1は須恵器杯である。外面口縁部下端回転ヘラケズリ，底部手持ちヘラケズリ調整で，色調は灰褐色である。多めの石英粒・長石粒，微量の雲母末・海綿骨針を含み，焼成は良好である。

2～12はロクロ土師器杯である。2は外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。淡褐色で，多めの雲母末・石英粒・長石粒，微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。3は2と同様の調整技法で，褐色，少量の雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。4も調整技法は前二者と同様で，淡褐色，多めの雲母末・石英粒・長石粒，微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。5は外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整で，淡褐色，多めの雲母末・石英粒・長石粒，微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。6は5と同様の調整で，淡褐色，雲母末・石英粒・長石粒，微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。7は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整，淡褐色で，石英粒・長石粒の他に少量の雲母末，微量の酸化鉄粒を含み，焼成は不良である。8は7と同様の調整である。褐色で，雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を少量含み，焼成は良好である。9は底部を欠失したやや大型のものである。褐色で，多量の石英粒・長石粒，少量の雲母粒・酸化鉄粒，微量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。10は外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ後口縁部中位に粗いヘラミガキ，内面全面に丁寧なヘラミガキを行っている。外面赤褐色，内面暗褐色で，やや多めの雲母粒・酸化鉄粒・石英粒・長石粒，微量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。11は10と同様の調整で，内外面淡褐色，少量の雲母末・石英粒・長石粒，微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。12は前二者と同様の調整で，淡褐色，多めの酸化鉄粒の他に微量の雲母末・海綿骨針を含み，焼成は良好である。

13・14はロクロ土師器高台付皿である。13は外面は底部のみ回転糸切り後無調整，内面は全面ヘラミガキ調整である。暗褐色で，石英粒・長石粒・雲母末の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。14は高台及び底部を欠失している。遺存部外面はロクロ調整のみ，内面はヘラミガキで，色調は暗褐色である。やや多めの雲母末・海綿骨針と微量の酸化鉄粒を含み，焼成はやや不良である。

15～26は文字または記号を有する資料で，すべてロクロ土師器である。15は杯で，口縁部外面に正位で「千万」の墨書がある。外面は底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ，内面褐色，外面暗褐色で，雲母末・石英粒・長石粒の他に少量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。16は杯で口縁部外面に正位で「千万」と墨書されている。調整技法は15と同様である。褐色で，多量の雲母粒，少量の石英粒・長石粒，微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。17は杯で口縁部外面に倒位で「千万」と墨書されている。調整技法は前二者と同様である。淡褐色で，少量の雲母末・石英粒・長石粒，微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。18は杯で口縁部外面に正位で「原」と墨書されている。調整技法は前三者と同様である。淡褐色で，多量の雲母粒，少量の石英粒・長石粒，微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。19は杯で底部内面に墨書があるが釈読不能，一字か二字かの判別も不能である。外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整で，褐色，少量の雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒，微量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。20は杯で，口縁部外



第76図 233竪穴住居出土遺物

面に正位で墨書が記されているが、釈読不能である。褐色で、少量の雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。21は杯で口縁部外面に横位で墨書が記されている。「口」の中に「本」の可能性が高いかと考えられる。褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。22は杯で口縁部外面に墨書が見えるが、判読不能である。内面黒色処理、外面褐色で、石英粒・長石粒を少量、酸化鉄粒を微量含み、焼成は良好である。23は高台付皿で、内面底部に「本」かと読める線刻が記されている。外面は皿部下端にのみ回転ヘラケズリ、皿部内面はヘラミガキ調整である。褐色で、少量の石英粒・長石粒、微量の雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良である。24は杯で、文字か記号か判別不能の線刻が底部内面に見える。外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を行い、外面暗褐色、内面褐色である。石英粒・長石粒の他にやや多めの雲母粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。25は内面黒色処理の杯で、底部内面に線刻が見えるが文字か記号か判別不能である。外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整で、外面は淡褐色、多量の雲母粒、少量の石英粒・長石粒、微量の酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良である。26は内面黒色処理の杯口縁部片で、外面に線刻が見えるが、記号か文字か判別不能である。外面褐色で、雲母末・石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

27～31は土師器甕である。調整技法は共通で、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面上半縦方向・下半横方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。底部が遺存するのは27のみで、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。27は内面下半が黒褐色、それ以外は橙褐色である。少量の雲母末・石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。28は暗褐色で、雲母末・石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。29は暗褐色で、少量の雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。30は暗褐色で、少量の雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。31は淡褐色で、少量の雲母末・石英粒・海綿骨針、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は不良である。

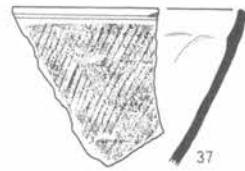
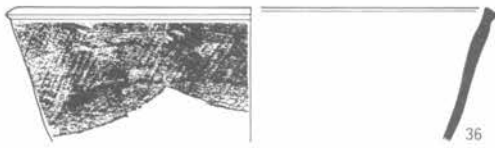
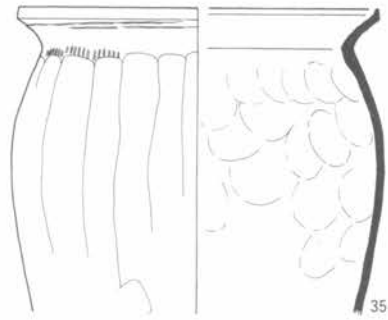
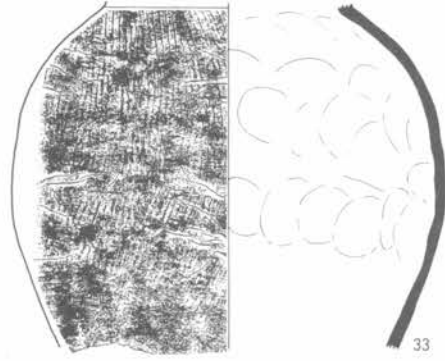
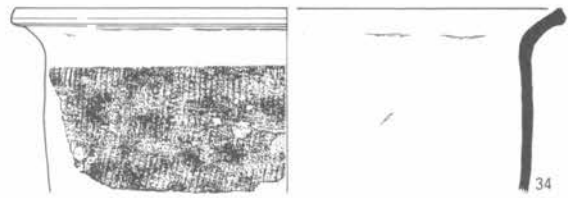
32～35は須恵器甕である。32～34は口縁部内外面ロクロ調整、胴部外面縦方向の平行タタキ、内面当具痕をナデ消している。35は一見土師器のようだが、内面には当具痕が見え、外面は縦方向の平行タタキを縦方向のヘラケズリで消している。32は暗灰褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒・還元鉄粒を含み、焼成は良好である。33は灰褐色で、少量の石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・還元鉄粒を含み、焼成は良好である。34は赤褐色で、多量の石英粒・長石粒、微量の雲母粒・酸化鉄粒を含み、酸化焰焼成であるが焼成は良好である。35は暗赤褐色で、少量の雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含みやはり酸化焰焼成であるが、焼成は良好である。

36・37は須恵器鉢形甕と考えられる。口縁端部は内外面ロクロ調整、以下は外面縦方向の平行タタキ、内面は当具痕をナデ消している。36は黒褐色で、多量の石英粒・長石粒、少量の雲母粒・還元鉄粒を含み、焼成は良好である。37は灰色で、石英粒・長石粒の他に微量の雲母末を含み、焼成は良好である。

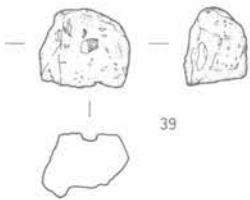
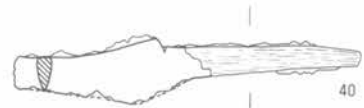
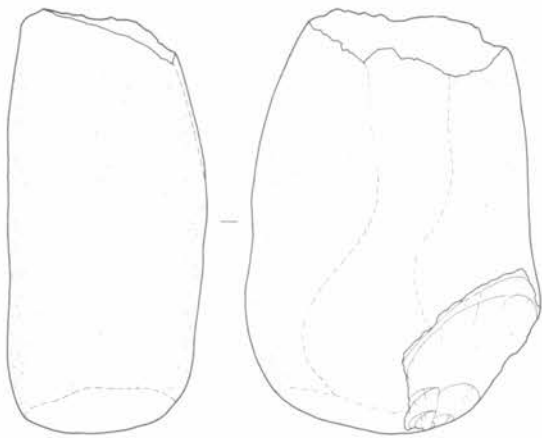
38は砂岩製砥石、39は軽石である。

40～43は鉄製品である。40は背関の刀子で、茎に柄の木質が付着遺存している。41は断面方形の棒状である。鉄鏃の筥被部分かと考えられる。42は上端に環状の折り返し部分がある。大刀の足金物の可能性もあるが断定できない。43は全体形状・用途・名称まったく不明である。

233



0 32~37 : 1/4 20cm



0 38~43 : 1/2 5cm

第77図 233竪穴住居出土遺物

236 竪穴住居出土遺物 (第78図, 図版39)

1～3は新治産と考えられる須恵器杯である。1は底部内外面に「×」の線刻が見える。外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整で、色調は灰色、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。2は外面底部回転ヘラ切り後口縁部下端回転ヘラケズリ、底部は全面手持ちヘラケズリ調整である。灰白色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成はやや不良である。3は外面底部回転ヘラ切り後口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。灰色で、白雲母粒・長石粒を含み焼成は良好である。

4・5は土師器甕である。4は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデで、色調は暗灰色、石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5は常総型で、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は内外面ヘラナデで、淡褐色、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

6は須恵器甕である。口縁部は内外面ロクロ調整、胴部は外面縦方向の平行タタキ、内面は当具痕をナデ消している。灰色で、少量の雲母粒の他に長石粒を含み、焼成は良好である。

7・8は鉄製品である。7は上端が断面台形に膨らみ棒状部分は断面方形で下方に行くに従い細くなる。芯部は上端からほぼ中央付近まで断面円形の中空である。8は刀子刃部片である。

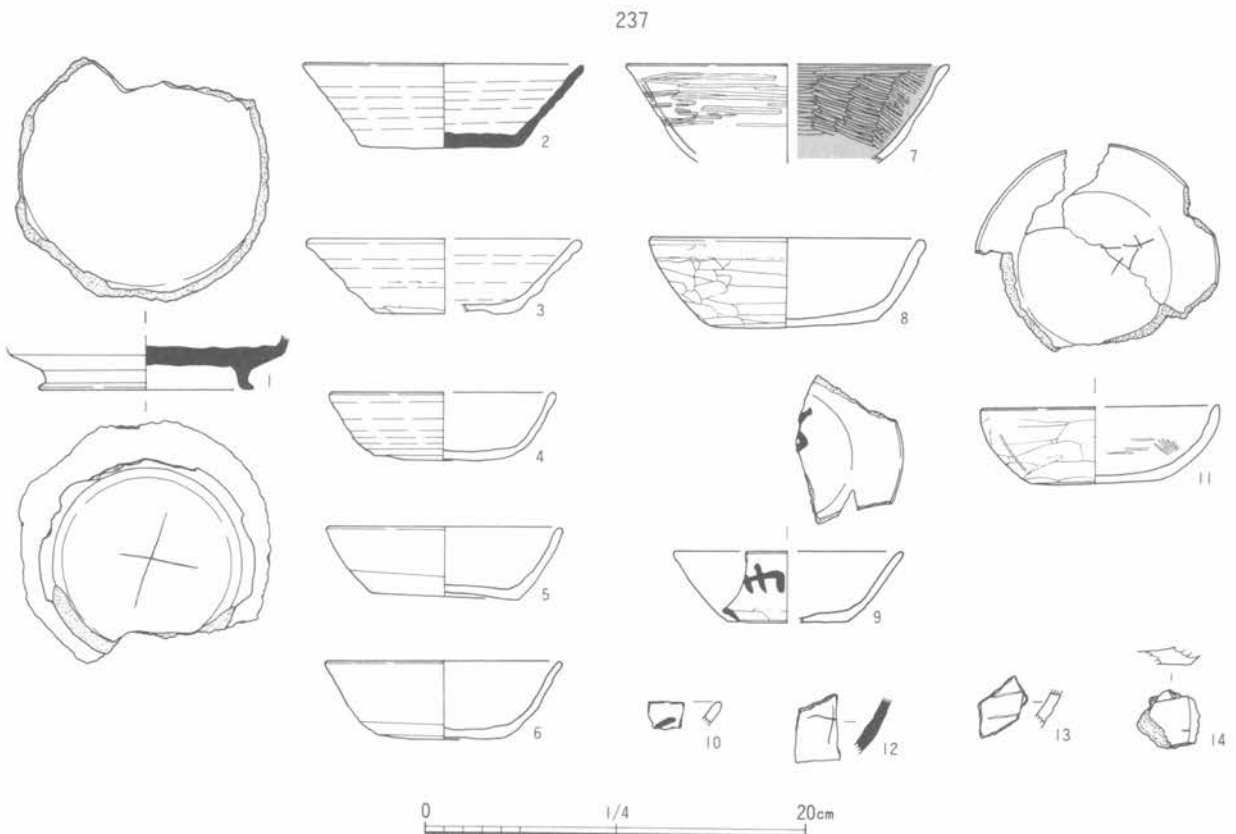
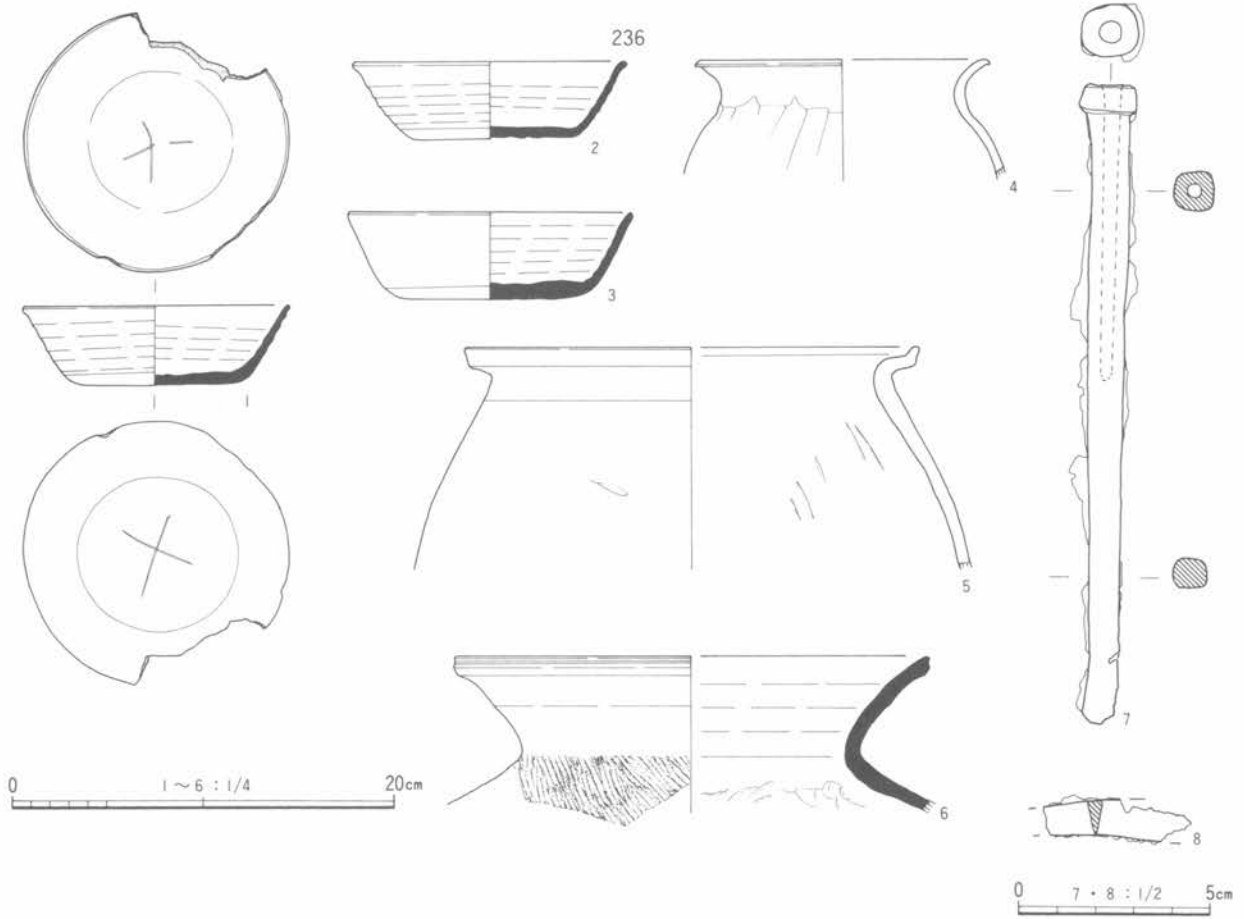
237 竪穴住居出土遺物 (第78・79図, 図版39・40)

1は須恵器高台付杯である。底部外面に「×」のヘラ書きがある。底部中央は内外面ともに研磨痕があり、転用硯と考えられる。外面底部は高台部分を除き回転ヘラケズリ調整である。灰色で、長石粒を含み、焼成は良好である。2は須恵器杯で、外面底部糸切り後無調整である。灰色で、白雲母粒・長石粒の他に少量の海綿骨針・還元鉄粒を含み、焼成はやや不良である。

3～7はロクロ土師器杯である。3～6は同様の調整技法で、外面底部回転糸切り後、口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整である。3は色調は淡褐色、長石粒の他に少量の雲母末・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。4は赤褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5は外面淡褐色、内面褐色で、雲母末・長石粒の他に少量の海綿骨針、微量の酸化鉄粒を含み、調整は良好である。6は淡褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。7は内面黒色処理で、外面は粗く、内面は丁寧なヘラミガキ調整である。外面は黒褐色で、長石粒・海綿骨針の他に少量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

8は土師器杯で、外面口縁部上位から底面全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。褐色で、長石粒・酸化鉄粒の他に微量の雲母末を含み、焼成は良好である。

9～14は文字又は記号を有する資料である。9はロクロ土師器杯で外面口縁部に「□(巾カ)」、内面底部に判読不能の墨書がある。外面底部回転糸切り後口縁部下端手持ちヘラケズリ、底部周縁回転ヘラケズリ調整である。褐色で、海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。10は土師器杯で、口縁部外面に墨書があるが判読不能である。褐色で、雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。11は土師器杯で、底部内面に「大八」の線刻が見える。外面口縁部上位から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ後口縁部粗いヘラミガキ、内面全面粗いヘラミガキ調整である。外面暗褐色、内面黒褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。12は須恵器杯で、口縁部外面に「□(×カ)」の線刻が見える。灰色で、雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。13はロクロ土師器杯で、口縁部外面に線刻が見えるが判読不能である。褐



第78図 236・237竪穴住居出土遺物

色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。14はロクロ土師器杯で、底部外面に線刻が見えるが、判読不能である。雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

15は新治産須恵器の甕もしくは甗である。口縁部は内外面ロクロ調整、胴部は外面縦方向の平行タタキで、内面は当具痕をナデ消している。灰白色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

16は土師器甗である。外面胴部上端に方形つまみが一對貼付してある。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。褐色で、長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。

17は土師器甕である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦もしくは斜方向のヘラケズリで、内面横方向のヘラナデ調整である。赤褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

18は軽石で、破断面以外全面に研磨痕がある。

19は鉄製刀子である。刃関で、切先部分以外ほぼ完存である。柄には木質が付着遺存している。

238 竪穴住居出土遺物（第79～81図、図版40）

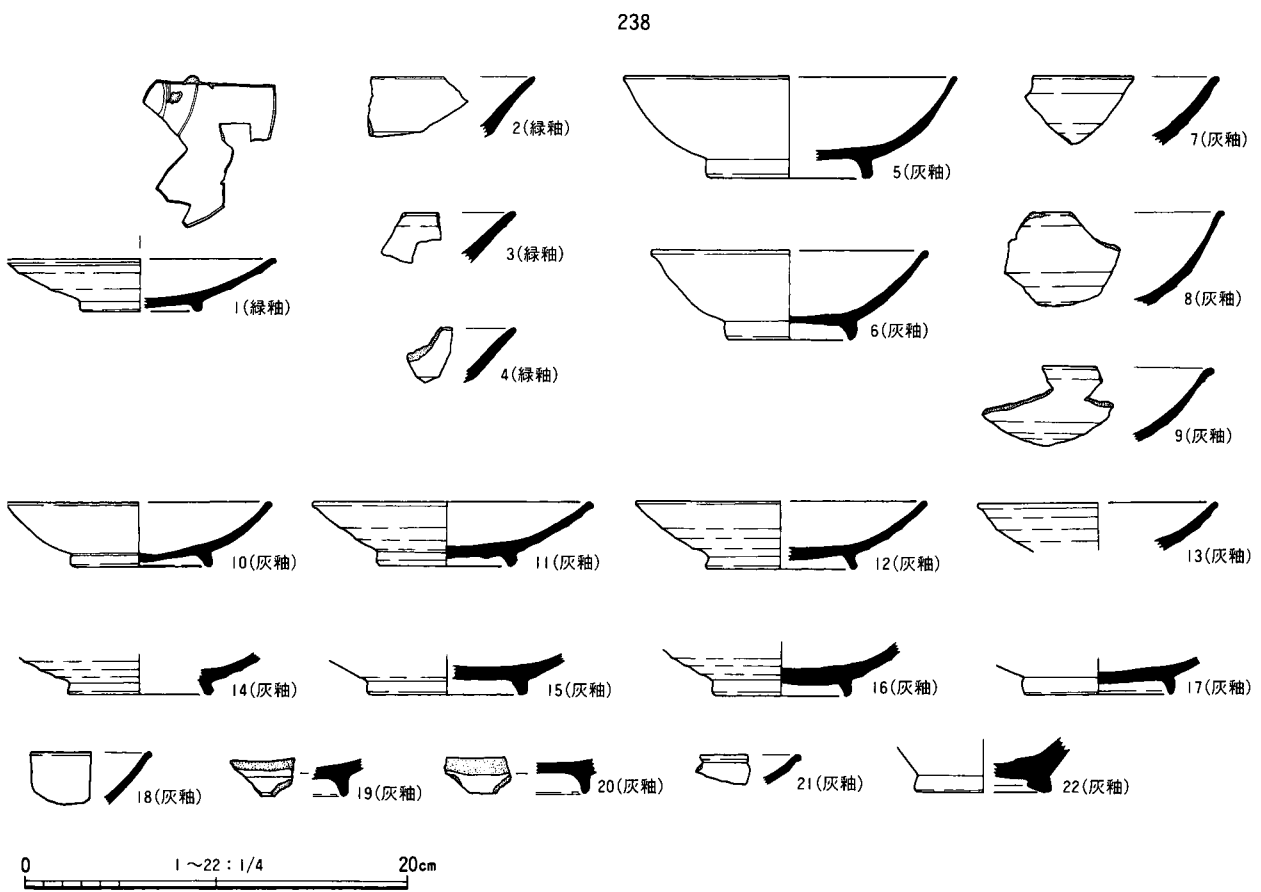
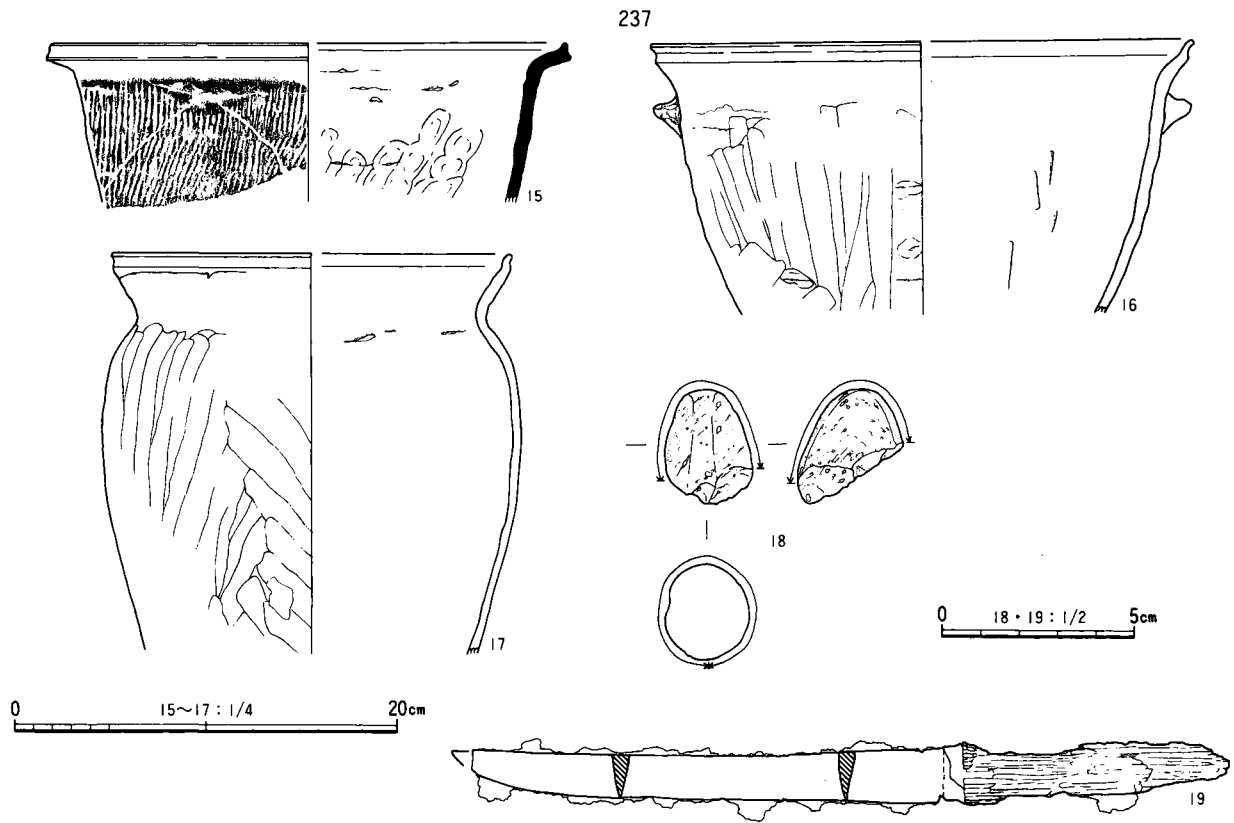
1～4は緑釉陶器である。1は付高台の輪花皿で、接地面以外は全面に施釉がなされており、内外面に三叉トチンの痕跡が見える。内面底部には陰刻花文かと思われる刻線が見える。釉は淡緑色で、器肉は灰色、長石微粒をわずかに含み、素地は硬質である。2～4は稜椀口縁部片で、同一個体の可能性が高い。釉は薄い黄緑色でのりは薄い。素地は灰白色でやや軟質である。胎土中には微粒の鉄粒をわずかに含む。

5～22は灰釉陶器である。

5～9は椀である。5は外面高台側面まで、内面は直重ね焼き接地面を除き、ハケ塗りで施釉されている。釉は淡黄緑色で、素地は灰黄色でやや軟質である。6は三日月高台で、施釉は外面は口縁部中位まで、内面は直重ね焼き接地面まで漬掛けである。釉は濃く斑状である。素地は灰色で硬質である。7は遺存部位で見ると内面全面、外面は山形に漬掛の施釉で、内面は淡緑色でやや斑、外面の釉は薄い。8は遺存部位において外面全面漬掛け、内面は底部付近を除き漬掛け施釉している。釉は淡黄緑色で薄い施釉である。素地は灰黄色でやや軟質である。9は遺存部位においては外面全面施釉、内面は底部を除き施釉している。釉は淡黄緑色で、素地は灰色で硬質である。

10～13は皿である。10は内外面ともに口縁部のみのハケ塗りによる施釉で、釉は極めて薄く痕跡のようにはしか見えないが、もともとその程度の施釉であると考えられる。内面底部にも施釉されている。直重ね焼き痕跡が明瞭である。素地は灰黄色でやや軟質である。11は内外面中位までの漬掛け施釉である。内面は淡黄緑色で、外面はほとんど透明の釉で、高台は三日月形である。素地は灰色で硬質である。12は全体に10に近い釉及び胎土であるが、釉は10に比べもっと厚めで白色に見える。13もほぼ10・12に近い釉調・施釉法・素地である。

14～20は椀と考えられるが、小片のため断定はできない。14は外面高台側面までハケ塗り、内面は直重ね焼きの接地面を除きハケ塗りで施釉している。釉は白色で薄く、素地は黄灰色でやや軟質である。15は重ね焼き痕が明瞭で、素地・釉調・施釉法は14とほぼ同じである。16は三日月高台で、内外面口縁部中位まで漬掛け施釉をしており、胎土中に気泡による膨らみが見えるような粗製品である。素地は灰色で硬質である。17は遺存部位では外面無釉、内面は直重ね焼きの接地部位を除きハケ塗りによる施釉である。内面口縁部の釉は黄緑色で、底部は薄く白色である。高台は三日月高台、素地は淡灰色で硬質である。18は



第79図 237・238竪穴住居出土遺物

遺存部位全面施釉，素地は灰白色でやや軟質である。19は14同様の施釉法で，釉は淡黄緑色，素地は灰白色でやや軟質である。20は13とほぼ同様の破片であるが，高台はやや三日月形である。

21は折縁皿口縁部片である。遺存部位は全面施釉で，釉色は淡緑色，素地は灰色で硬質である。

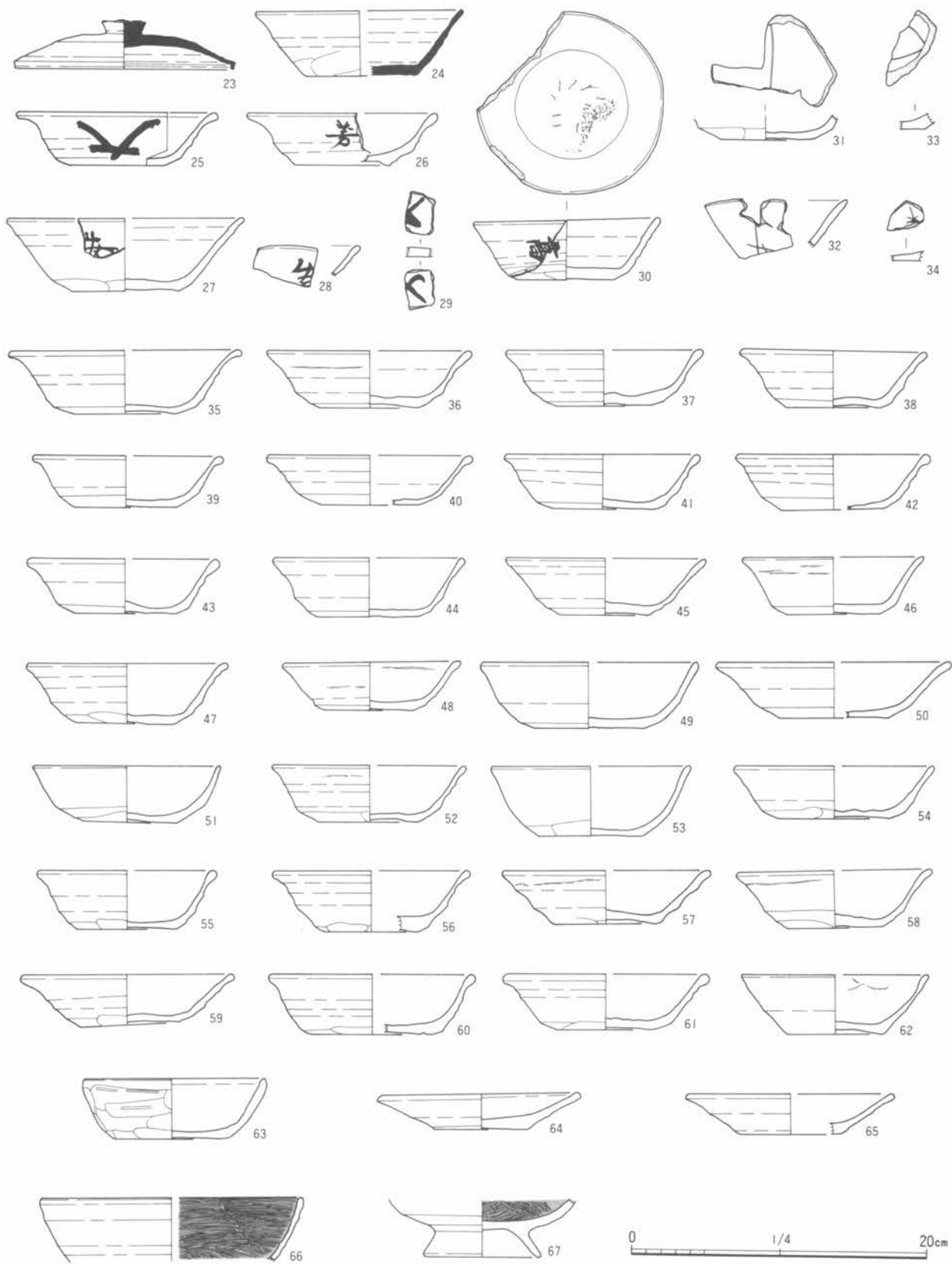
22は長頸瓶底部片である。遺存部位は無釉，素地は灰白色で硬質である。

23・24は新治産須恵器である。23は杯蓋で，かなり扁平化した擬宝珠形つまみをもち，外面上位つまみを除いた部分に回転ヘラケズリが見える。灰色で，白雲母粒・石英粒・長石粒を含み，焼成は良好である。24は杯で，外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整を施している。灰褐色で，白雲母粒の他に多量の長石粒・還元鉄粒を含み，焼成は良好である。

25～34は文字もしくは記号を有するロクロ土師器杯である。25は口縁部外面に倒位で「大」と墨書されている。外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリを行い，色調は褐色である。微量の雲母末・海綿骨針，少量の石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。26は口縁部外面に「芳」と墨書されている。外面底部のみ手持ちヘラケズリ調整で，色調は淡褐色である。雲母粒・石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。27は口縁部外面に正位で墨書があるが，遺存部位がわずかなために判読不能である。外面底部回転糸切り後，口縁部下端手持ちヘラケズリ，底部周縁回転ヘラケズリ調整である。淡褐色で，雲母粒・石英粒・長石粒の他に少量の酸化鉄粒，微量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。28は口縁部外面に墨書が見えるが小片のために判読不能である。淡褐色で，少量の長石粒・海綿骨針，微量の雲母末・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。29は底部内外面に墨書があるが，小片のためにも判読不能である。外面回転ヘラケズリ調整で，色調は淡褐色，少量の雲母粒・石英粒・長石粒，酸化鉄粒，微量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。30は口縁部外面に横位で「高」と墨書され，内面底部には油煙煤と思われる痕跡と，爪痕が円形に巡っている。外面口縁部下端から底部全面手持ちヘラケズリ調整で，色調は赤褐色，石英粒・長石粒の他に微量の雲母末・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。31は底部内面に直線の線刻が一本見える。淡褐色で，雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み，焼成は良好である。32は口縁部外面に線刻が見えるが小片のため記号か文字か判別不能である。黒褐色で，雲母末・石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。33は底部内面に記号と考えられる線刻が施されている。外面遺存部位はすべて手持ちヘラケズリ調整で，淡褐色，石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。34は底部内面に文字かと思われるヘラ書きがあるが，小片のため判読不能である。外面手持ちヘラケズリ調整で，褐色，石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。

35～62はロクロ土師器杯である。底部切り離し手法については観察可能なものと不能なものがあるが，基本的には回転糸切り技法と考えられる。35～51は外面口縁部下端から底部周縁もしくは底部全面回転ヘラケズリ調整を行っている。52～61は口縁部下端から底部周縁もしくは底部全面手持ちヘラケズリ調整である。62は底部外面回転糸切り後無調整である。

35は淡褐色で，少量の雲母末・石英粒・長石粒，微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。36は淡褐色で，少量の雲母末，微量の石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄流を含み，焼成は良好である。37は暗褐色で，石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。38は淡褐色で，少量の雲母末，微量の長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み，焼成はやや不良である。39は褐色で，少



第80図 238竪穴住居出土遺物

量の石英粒、微量の雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。40は外面赤褐色、内面淡褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。41は淡褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良で、焼き歪みが著しい。42は淡褐色で、少量の雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。43は褐色で、微量の雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。44は淡褐色で、少量の雲母粒、微量の石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。45は暗褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。46は淡褐色で、少量の石英粒・長石粒、微量の雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は不良である。47は淡褐色で、少量の石英粒、微量の雲母粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。48は外面淡褐色、内面褐色で、少量の酸化鉄粒、微量の石英粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。49は淡褐色で、少量の雲母末・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良である。50は淡褐色で、少量の長石粒・酸化鉄粒、微量の雲母末・海綿骨針を含み、焼成は良好である。51は暗褐色で、少量の石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の雲母末を含み、焼成は良好である。

52は淡褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良である。53は淡褐色で、やや多めの石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の雲母末を含み、焼成は良好である。54は暗褐色で、少量の雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。55は淡褐色で、石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。56暗褐色で、少量の雲母粒・石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。57は赤褐色で、雲母粒・長石粒の他に微量の海綿骨針を含み、良好である。58は赤褐色で、少量の雲母粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。59は淡褐色で、少量の雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。60は暗褐色で、少量の雲母粒・海綿骨針、微量の長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。61は外面褐色、内面暗褐色で、少量の雲母末、微量の長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。

62は淡褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

63は土師器杯で、外面は口縁部上位を除き全面手持ちヘラケズリ調整後口縁部上位に粗いヘラミガキ、内面はヨコナデ調整である。褐色で、少量の雲母粒・石英粒・長石粒、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

64・65はロクロ土師器皿である。調整技法は共通で、外面底部のみ回転ヘラケズリ調整で、他の部位はロクロ調整である。64は褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。65は褐色で、雲母粒・石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

66・67はともに内面に黒色処理を施している。66が底部を欠失しているために断定はできないが、おそらく両個体ともにロクロ土師器高台付碗と考えられる。66は遺存部位はすべてロクロ調整である。外面暗褐色で、石英粒・長石粒の他に少量の酸化鉄粒、微量の雲母末・海綿骨針を含み、焼成は良好である。67は外面口縁部下端から底部全面の内高台部分を除き回転ヘラケズリ調整を行っている。外面暗褐色で、少量の雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

68～71は土師器甕である。

68・69は常総型である。68は口縁部と底部を欠失している。胴部外面は上半ヘラナデ、下半縦方向のヘ

ラミガキ、内面はヘラナデ調整である。褐色で、多量の雲母粒・石英粒・長石粒、少量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。69は胴部下位から底部にかけての資料である。胴部は外面縦方向のヘラミガキ、内面は底部まで全面ヘラナデ、底部外面は木葉痕が見える。褐色で、多量の石英粒・長石粒、少量の雲母粒、微量の酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良である。

70・71は小型甕である。70は口縁部内外面横ナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整で、焼成は良好である。71はロクロ成形・ロクロ調整の資料である。暗褐色で、少量の石英粒・長石粒、微量の雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。千葉市域産と考えられる。

72は土師器で鉢状の製品かと考えられる。外面口縁部上位から内面にかけてヨコナデ、外面上位以下は手持ちヘラケズリ後にナデ調整を行っている。褐色で、少量の雲母末・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

73は手捏ね土器である。小片で外面底部は無調整、それ以外の部分はナデ調整である。淡褐色で、微量の雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

74は羽口先端部小片である。もともと小型の資料と考えられる。外面先端に黒色のガラス質付着物が見られる。

75は瓦塔の部品のようにも見えるがかなり粗雑な造作であるので、ここでは性格不明土製品として断定は避ける。直線状の凸帯をもち、凸帯部分はナデ調整、それ以外の部分はヘラケズリの後にナデ調整を行っている。褐色で、少量の雲母粒・石英粒・長石粒、微量の海綿骨針を含む。焼成は良好でかなり硬質であることから、酸化焰焼成の窯で焼かれた可能性が高い。

76～81は鉄製品である。76～80は刀子である。76は刃部先端と茎尻を欠失している。関は背と刃の両方に付いており、刃の側は緩い曲線を描く関である。77は刃部先端と茎の大半を欠失している。両関で、刃部は研ぎ減りが進んでいる。78はやはり77と同程度の遺存で、やはり両関、刃部の研ぎ減りの進んでいる資料である。79は刃部のみの資料である。80は茎のみの遺存であるが、かなり長めの茎である。81は断面正方形の棒状品である。くるる錠の鑰である可能性が高いが断定はできない。

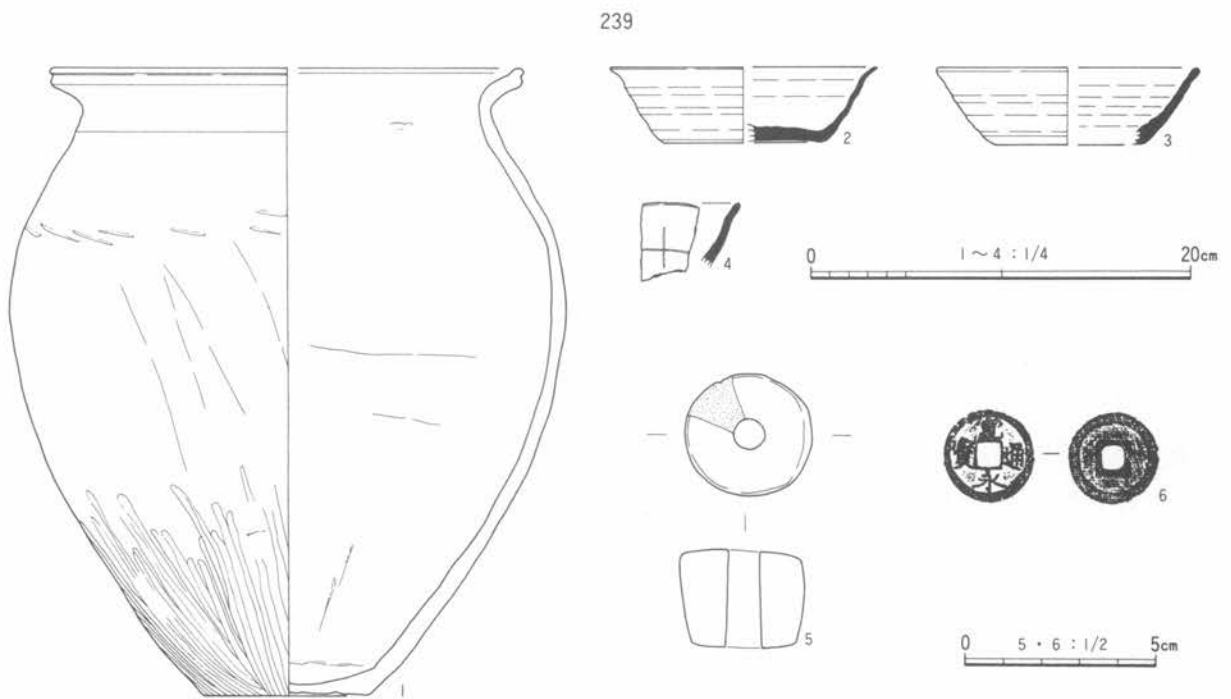
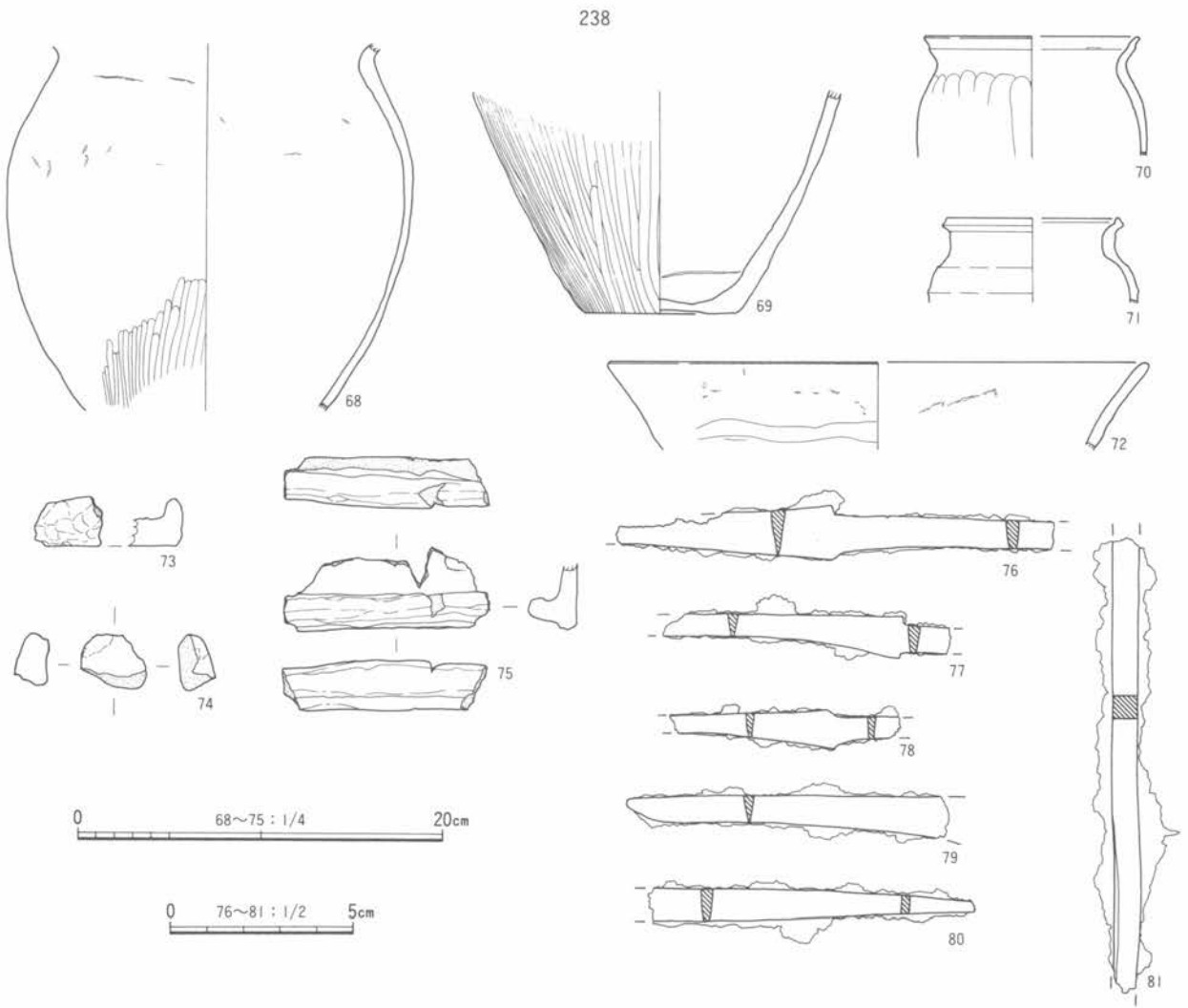
239 竪穴住居出土遺物（第81図）

1は土師器常総型甕である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面上半ヘラケズリの後に縦方向のヘラナデ、下半縦方向のヘラミガキ、内面は底部まで横方向のヘラナデ、底部外面は木葉痕が残っている。外面暗褐色、内面褐色で、多量の長石粒、少量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

2～4は新治産須恵器杯である。2は外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。灰色で、白雲母粒・長石粒・還元鉄粒を含み、焼成は良好である。3は外面口縁部下端回転ヘラケズリ、底部遺存部位は手持ちヘラケズリ調整である。暗灰褐色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。4は口縁部外面に「十」字形の線刻が記されている。暗灰褐色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

5は土製紡錘車である。暗褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

6は寛永通宝である。



第81図 238・239竪穴住居出土遺物

240 竪穴住居出土（第82図，図版40）

1は新治産須恵器杯である。外面底部回転ヘラ切り後口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整を行っている。灰色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

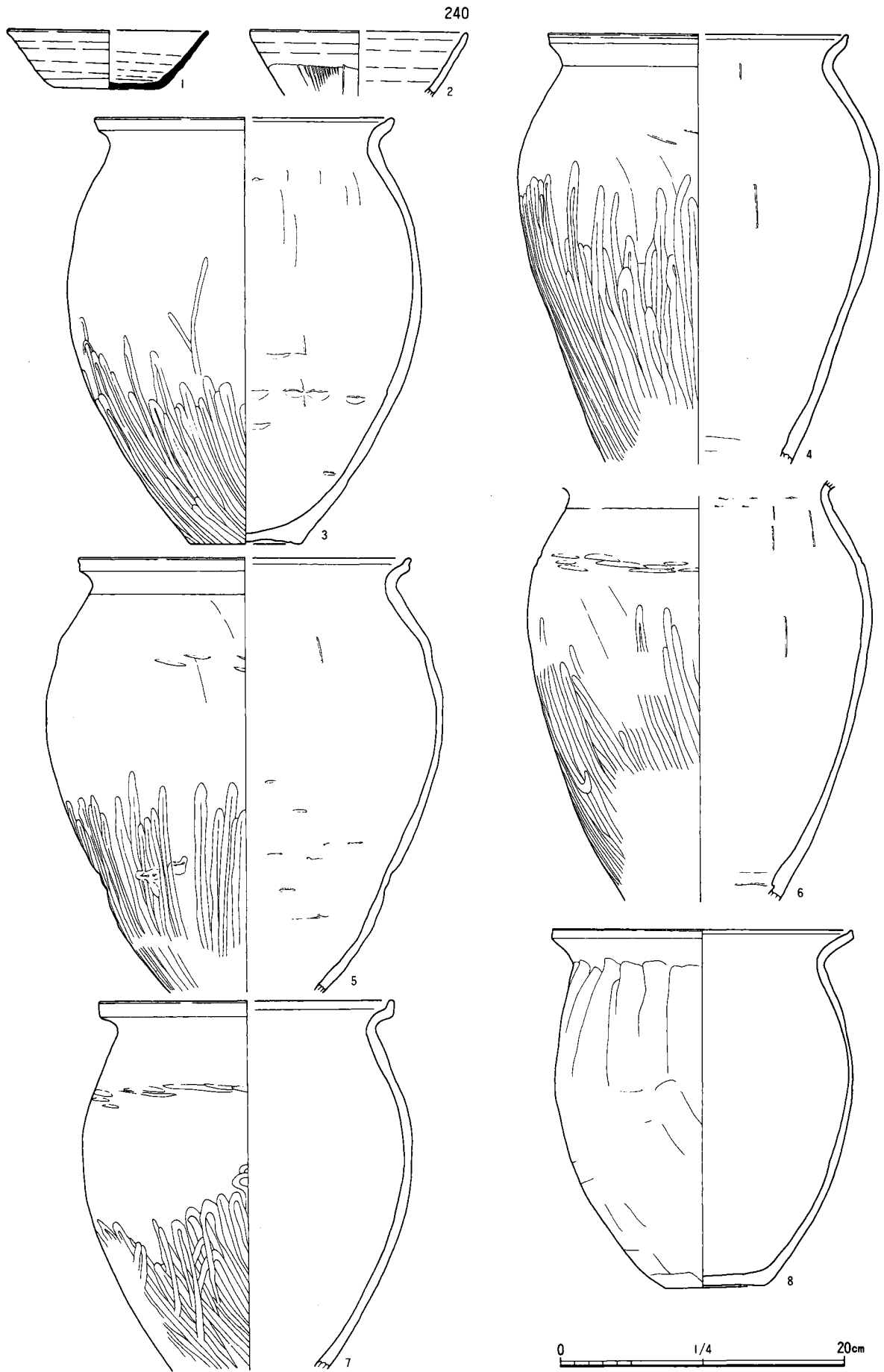
2はロクロ土師器杯である。底部を欠失している。口縁部外面下半は横方向の回転ヘラケズリ調整で、器面には工具のかんな跳びの痕跡が見える。橙褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

3～8は土師器甕である。その内3～7は常総型である。常総型については調整技法は共通で、口縁部は内外面ヨコナデ，胴部は外面上半が縦方向のヘラケズリの後に縦方向のヘラナデ，下半が縦方向のヘラミガキ，内面は底部にいたるまで横方向のヘラナデ調整である。底部が遺存するのは3のみであるが、木葉痕無調整である。3は褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。4は外面赤褐色，内面淡褐色で、雲母末・酸化鉄粒の他に多量の長石粒を含み、焼成は良好である。5は外面淡褐色，内面褐色で、長石粒・酸化鉄粒の他に微量の雲母末を含み、焼成は良好である。6は外面暗褐色，内面褐色で、多量の長石粒・微量の雲母末・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。7は褐色で、長石粒・酸化鉄粒の他に少量の雲母末を含み、焼成は良好である。8は口縁部内外面ヨコナデ，胴部は外面上半縦方向・下半横方向のヘラケズリ，内面は底部までヘラナデ，底部外面はヘラナデ調整である。暗赤褐色で、長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。

241 竪穴住居出土遺物（第83図，図版41）

1～11は新治産須恵器杯である。1は底部外面に「×」のヘラ書きが記されている。外面口縁部下端回転ヘラケズリ，底部全面手持ちヘラケズリ調整である。暗褐色で、雲母末・長石粒・還元鉄粒を含み、焼成は良好である。2は調整技法は1と同様で、灰色，多量の長石粒を含み、焼成は良好である。3は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。灰色で、白雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。4は外面口縁部下端回転ヘラケズリ，底部全面手持ちヘラケズリ調整である。灰褐色で、白雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。5は底部外面回転ヘラ切り後口縁部下端回転ヘラケズリ，底部全面手持ちヘラケズリ調整である。灰色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成はやや不良である。6は外面口縁部下端から底部全面にかけてヘラケズリが行われているようだが、器面の摩耗がひどく回転か手持ちか判別不能である。灰白色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。7は外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。灰色で、長石粒を多量に含み、焼成は良好である。8は外面口縁部下端から底部全面手持ちヘラケズリ調整である。灰白色で、白雲母粒・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。9は外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。灰色で、多量の長石粒，微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。10は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。少量の白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。重ね焼きによる色調の違いが明瞭な資料で、内外面ともに上半灰白色，下半暗灰色である。11は底部片であるが、底部周縁の破断面1/3ほどの部分に研磨痕が見られる。意図的な整形と考えられる。底部外面には間隔33mmほど空けて浅く細い二条の沈線が見える。成形技法に関わるものの可能性が高い。外面遺存部位はすべて手持ちヘラケズリ調整である。白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

12～14は土師器杯である。12は遺存部位全面赤彩処理を施しており，底部内面に「×」字状の線刻が見える。長石粒の他に微量の酸化鉄粒を含み，焼成は良好である。13は外面は口唇部を除き全面手持ちヘラ



第82図 240竪穴住居出土遺物

ケズリ後粗いヘラミガキ、内面は全面ヘラミガキ調整である。色調は口縁部が赤橙色底部及び内面器表が黒褐色である。微量の長石粒・雲母末を含み、焼成は良好である。14は内外面全面赤彩処理である。外面は口唇部を除き手持ちヘラケズリ後粗いヘラミガキ、内面は全面ヘラミガキ調整で、器肉は黒褐色である。雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。

15は土師器皿である。内外面全面赤彩処理である。外面口縁部から内面全面にかけてヨコナデ、外面底部手持ちヘラケズリ後内外面全面にヘラミガキ調整を行っている。器肉は橙色で、長石粒・酸化鉄粒を微量含み、焼成は良好である。

16はロクロ土師器甕と考えられるが、口縁部形態が特殊なことから底部が遺存していないことから、器種の断定はできない。口縁部は内外面ロクロ調整、胴部は外面ヘラナデ後下半縦方向のヘラミガキ調整を行っている。淡褐色で、長石粒の他に微量の雲母末を含み、焼成は良好である。

17は土師器常総型甕である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は内外面ヘラナデ、淡褐色で、雲母粒・長石粒・酸化鉄粒を多めに含み、焼成は良好である。

18は土師器であるが、深めの形態で口縁部を欠失しているために杯か小型甕のいずれであるのか器種の特定は難しい。外面全面手持ちヘラケズリ調整、内面ナデ調整で、色調は暗褐色、長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。

19は土師器高杯脚部片と考えられる。外面は接地面まですべて手持ちヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。黒褐色で、長石粒・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。

20は蛸壺形のミニチュア土器と考えられる。内面粘土紐接合痕を明瞭に残し、ナデ調整、外面は斜方向のヘラミガキ調整で、色調は赤褐色で外面黒斑、長石粒を少し含み、焼成は良好である。

21・22は軽石である。21は角閃石粒を含み、22は灰白色で胎土中には特に異物は見えない。

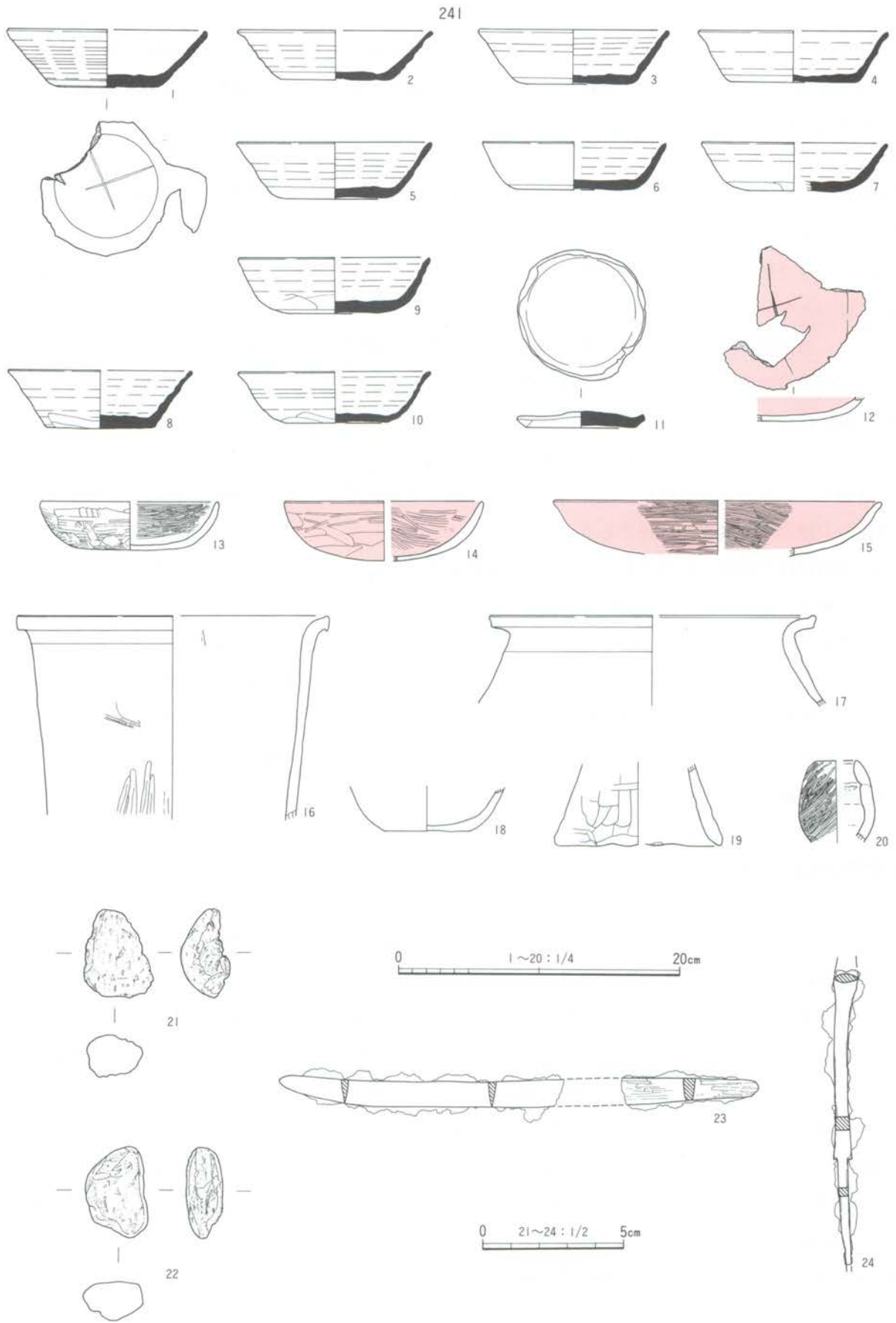
23・24は鉄製品である。24は刀子で、関部分を欠失している。茎には柄の木質が遺存付着している。24は鉄鏃で、箭先は三角形と考えられる。長い篋被をもち、茎との境は両関である。

242 竪穴住居出土遺物 (第84図)

1～3は新治産須恵器杯である。1は外面底部回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ調整で、色調は灰色である。白雲母粒・長石粒を少量含み、焼成は良好である。外面口縁部に明瞭な重ね焼き痕跡が見える。2も外面口縁部に明瞭な重ね焼き痕跡が見える。外面底部手持ちヘラケズリ調整で、色調は暗灰色である。長石粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。3は内面底部に研磨痕と思われる部分が見える。外面底部手持ちヘラケズリ調整で、色調は暗灰色である。白雲母粒・長石粒を多量に含み、焼成はやや不良である。

4～6は土師器甕である。4・5は常総型で、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は上半縦方向のヘラナデ、下半縦方向のヘラミガキ、内面ヘラナデ調整である。4は褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5は暗赤褐色で、石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。6は小型甕である。外面は全面ヘラケズリ後に胴部のみ縦方向のヘラナデ、内面は全面ヘラナデ調整である。暗褐色で、長石粒と多量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

7は土師器である。丸底の器形で、深めの杯又は鉢かと考えられる。外面手持ちヘラケズリ、内面ヘラナデ調整で、外面暗褐色、内面淡褐色で、長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、外面にマーブル状の粘土



第83図 241竖穴住居出土遺物

の素地模様が見える。焼成は良好である。

8は須恵器大甕片である。内面の広い部分に研磨痕の見えることから、転用硯の可能性が高いと考えられる。外面平行タタキ、内面は当具痕をナデ消し調整している。色調は器面灰色、器肉中央黒灰色で、長石粒をわずかに含み、焼成は良好である。

9は鉄製刀子である。刃先部分と茎の大半を欠失している。両関で、鋷が一部遺存している。

251 竪穴住居出土遺物（第84図，図版41）

1はロクロ土師器杯である。外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。色調は黒灰色の部分と橙色の部分とに分かれており、土師器ではなく須恵器である可能性もある。少量の石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

2はロクロ土師器高台付皿である。内外面縁辺部に「工万」読める文字が正位でヘラ書きされている。外面は底部中央に回転ヘラケズリ調整、他はロクロ調整、内面はヘラミガキ調整である。底部は突出のわずかな貼付高台で、底部内面に研磨痕状の擦痕が見える。橙色で、雲母末・海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み、焼成は良好である。同様の資料は千葉市南河原坂窯跡群において検出されている。

3・4は土師器甕である。ともに口唇部端部が内側に突出する。3は遺存部位はナデ調整のみ、4は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。3は淡褐色で、雲母末・石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良である。4は暗褐色で、少量の雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。

5は千葉市域産須恵器甕である。口縁部は内外面ロクロ調整、胴部は外面縦方向の平行タタキ、内面ナデ調整である。赤褐色で、石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は酸化焰焼成であるが良好である。

6は土製支脚である。淡褐色で、多量の砂粒、少量の雲母粒、微量の酸化鉄粒を含む。

7は鉄製刀子である。関付近の破片で、背関をもち刃の部分へは曲線をもって移行している。

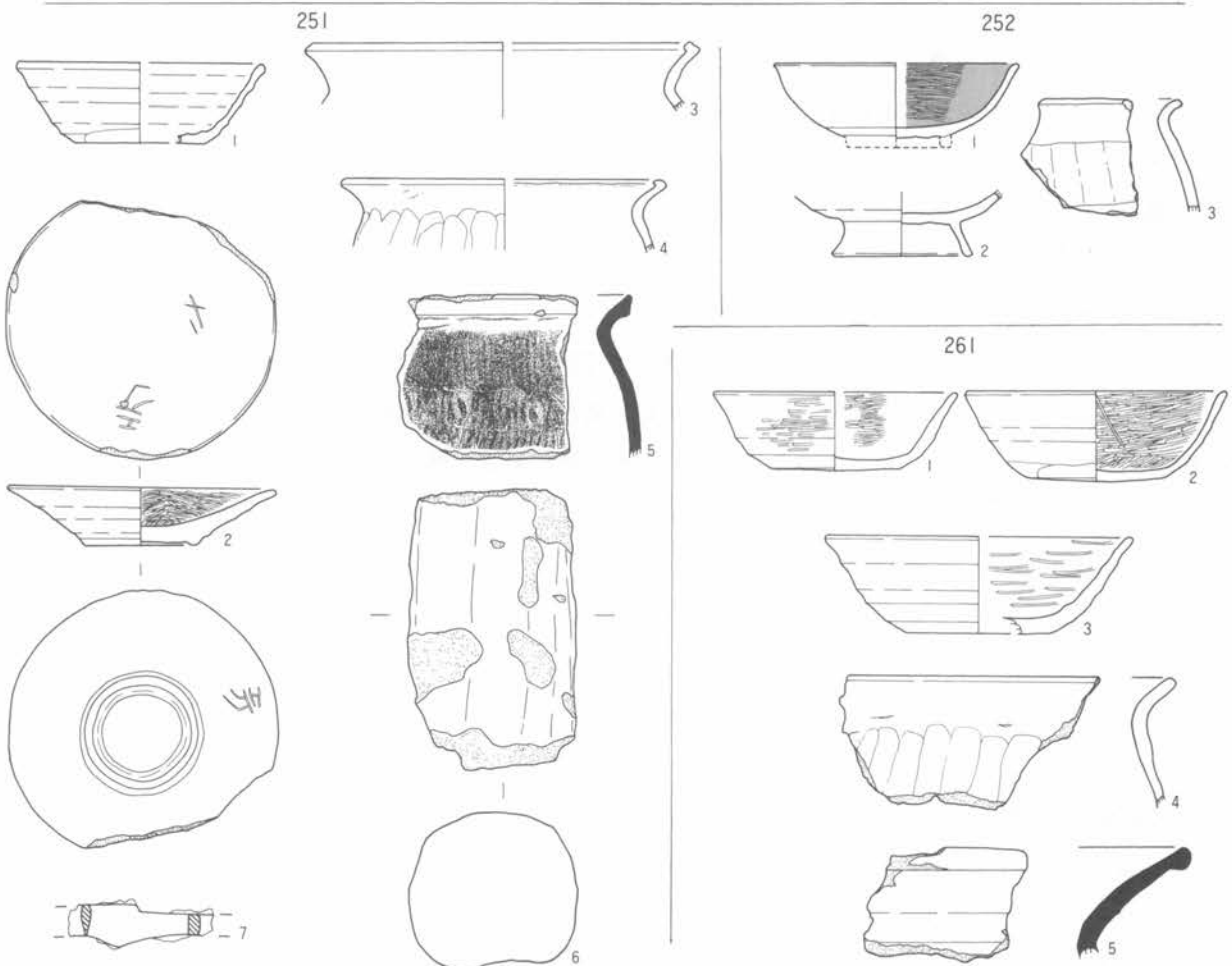
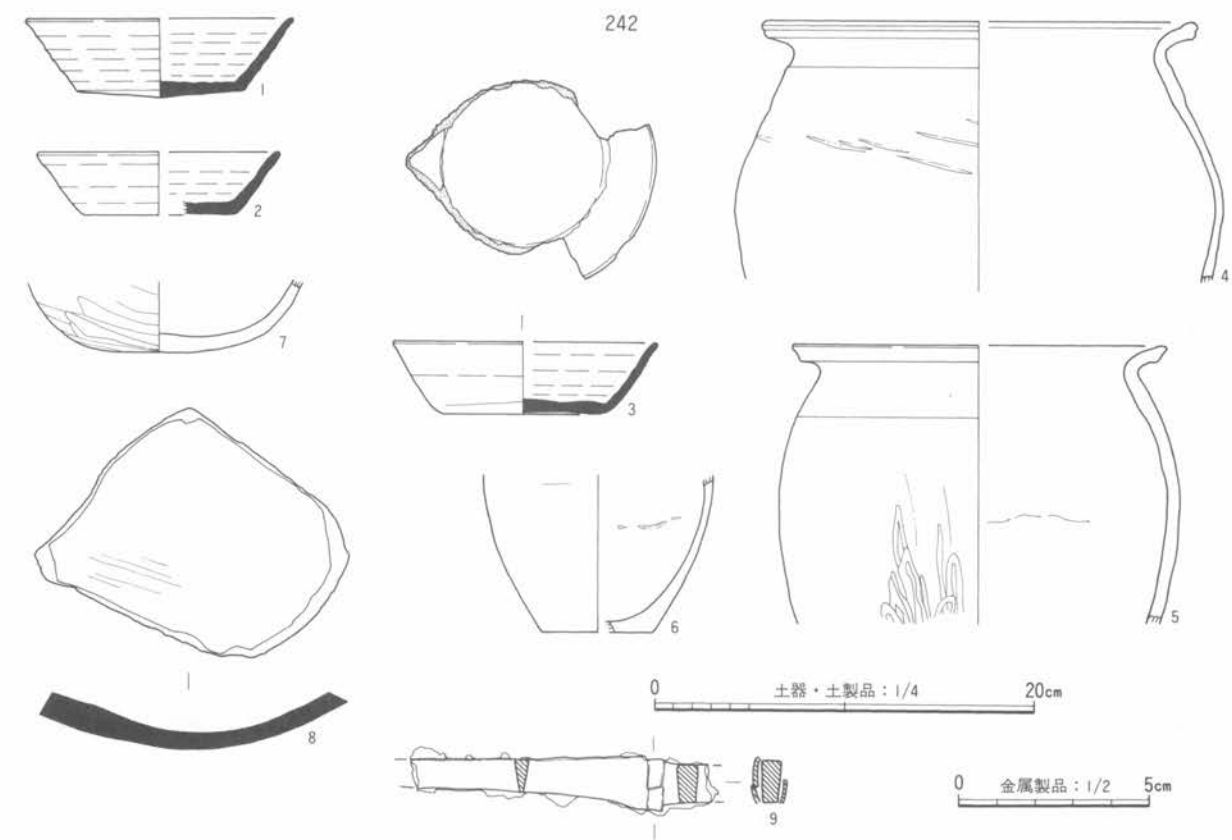
252 竪穴住居出土遺物（第84図）

1・2はロクロ土師器高台付杯である。器形は椀形に近く、1は高台を欠失しているため不明であるが、2は足高の高台をもつ。1は内面黒色処理で、外面は高台内側の底部部分が回転糸切り後無調整、高台の外側周辺部が回転ヘラケズリ調整、内面はヘラミガキ調整である。外面は淡褐色で、少量の石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。2は外面高台内側部分が回転ヘラ切り無調整、他はロクロ調整である。褐色で、少量の石英粒・長石粒、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

3は土師器甕片である。かなり鋭い作りで、色調は暗灰褐色から暗褐色であることから、いわゆる「クสบ焼成」の須恵器である可能性も否定できない。雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

261 竪穴住居出土遺物（第84図，図版41）

1～3はロクロ土師器杯である。1は外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ、外面口縁部は粗いヘラミガキ、内面は全面丁寧なヘラミガキ調整である。但し、器面は剝離が進んでいる。色調は褐色で、少量の雲母末・石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。2は外



第84図 242・251・252・261竪穴住居出土遺物

面底部静止糸切り後無調整、内面は全面丁寧なヘラミガキ調整である。色調は淡褐色で、少量の石英粒・長石粒、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。3は2と同様の調整技法である。褐色で、石英粒・長石粒の他に少量の雲母粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

4は土師器甕口縁部付近小片である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横ナデ調整で、焼成は良好である。

5は新治産須恵器甕口縁部片である。遺存部位はすべてロクロ調整である。灰色で、白雲母末の他に多量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

3 中世の遺構出土遺物

234土壙出土遺物（第85図，図版51）

1は鉄製小刀である。鞘・柄にきちんと納まった状態で副葬されていたもので、全面に木質が付着遺存しているが、木質部分の表装の有無は不明である。全長約30cm、刃渡り約21cmと復元される。木質の付着のために断定はできないが、両関の可能性が高い。

2は内耳鉄鍋である。出土状況写真（図版23）で分かるようにほぼ完形で出土したものであるが、鑄鉄製品のため、取り上げ後早々に保存処理を施したにもかかわらず、現状では修復不可能なまでにボロボロになっている。従って、遺物写真は出土状況のもののみを提示している。内耳は一对二個と復元できる。

243土壙出土遺物（第85図）

1は新治産須恵器高台付杯である。外面底部は付高台部分を除き回転ヘラケズリ調整である。色調は灰白色で、白雲母粒・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。

2は土製紡錘車片である。外面は全面ヘラケズリ後に全面ヘラミガキ調整である。色調は一部褐色、一部淡褐色である。雲母末・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。

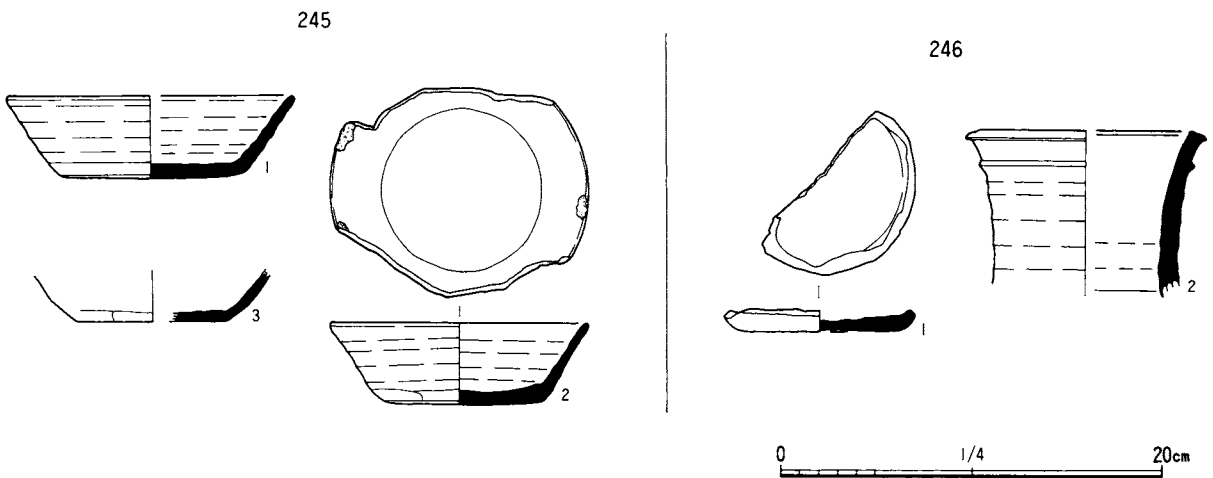
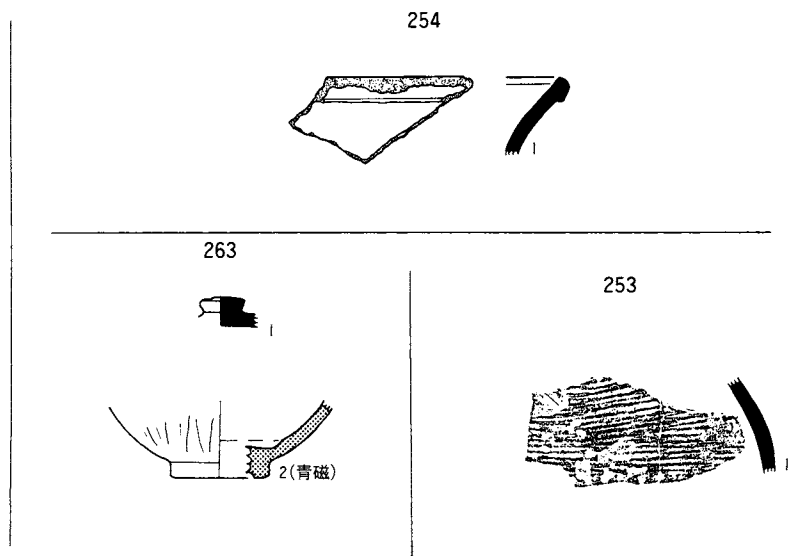
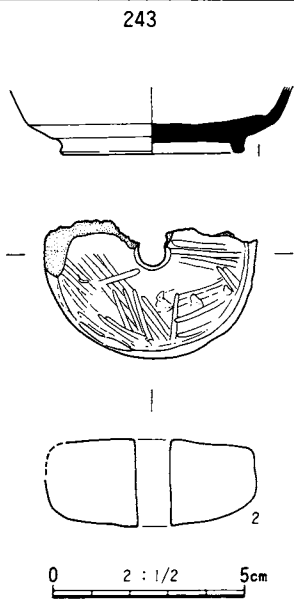
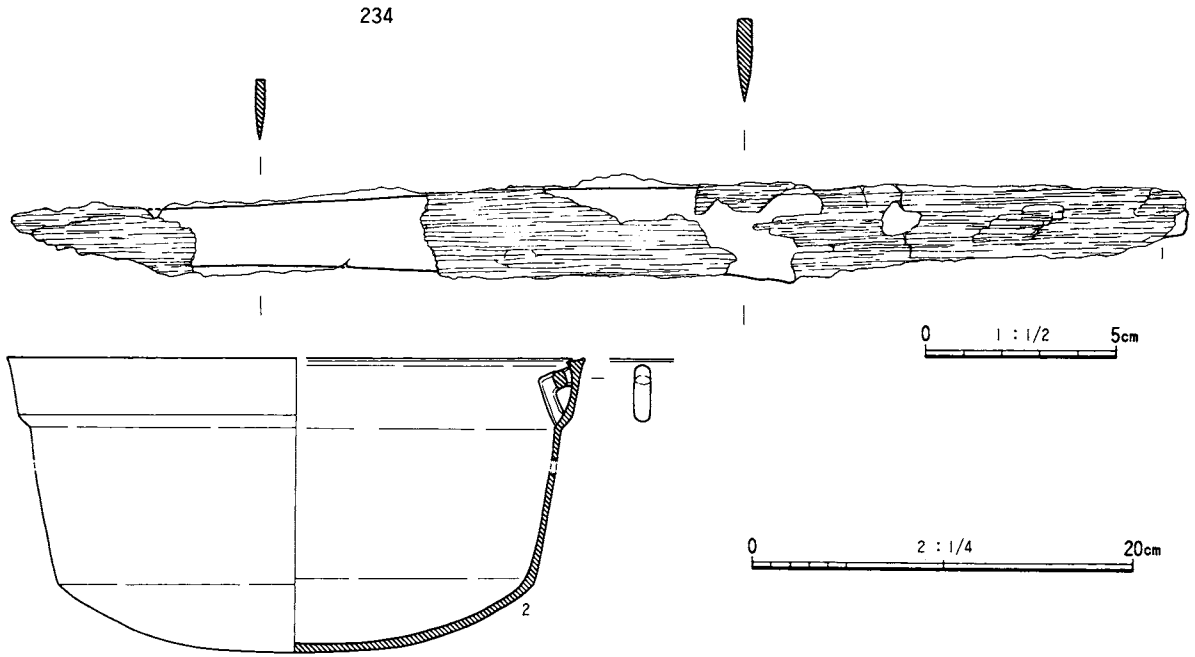
254土壙（第85図）

1は新治産須恵器甕口縁部片である。暗灰色で、白雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

263土壙（第85図，図版43）

1は新治産須恵器蓋擬宝珠形つまみ部分の破片である。灰色で、白雲母粒・石英粒・長石粒を含み、良好である。

2は青磁鎚蓮弁文椀である。高台外側面から高台内側遺存部全体に露胎部分があり、他の部分は全面施釉されている。龍泉窯産である。



第85図 234・243・254・263土壙，253・245・246溝状遺構出土遺物

4 溝・道路状遺構出土遺物

253溝状遺構出土遺物（第85図）

1は新治産須恵器甕の胴部上位片である。外面横方向の平行タタキ、内面ナデ調整である。色調は外面赤褐色、内面灰白色で、多量の白雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

245道路状遺構出土遺物（第85図、図版41）

1～3新治産須恵器杯である。調整技法は共通で、外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。1は灰色で、多量の長石粒の他に白雲母粒を含み、焼成は良好である。2は破断面が摩耗していることから、図の欠失部分は意図的に欠いたものと考えられる。灰色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。3は灰色で、長石粒の他に少量の白雲母粒を含み、焼成は良好である。

246溝状遺構出土遺物（第85図）

1は新治産須恵器杯である。外面底部回転ヘラ切り後、口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。灰白色で、白雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。

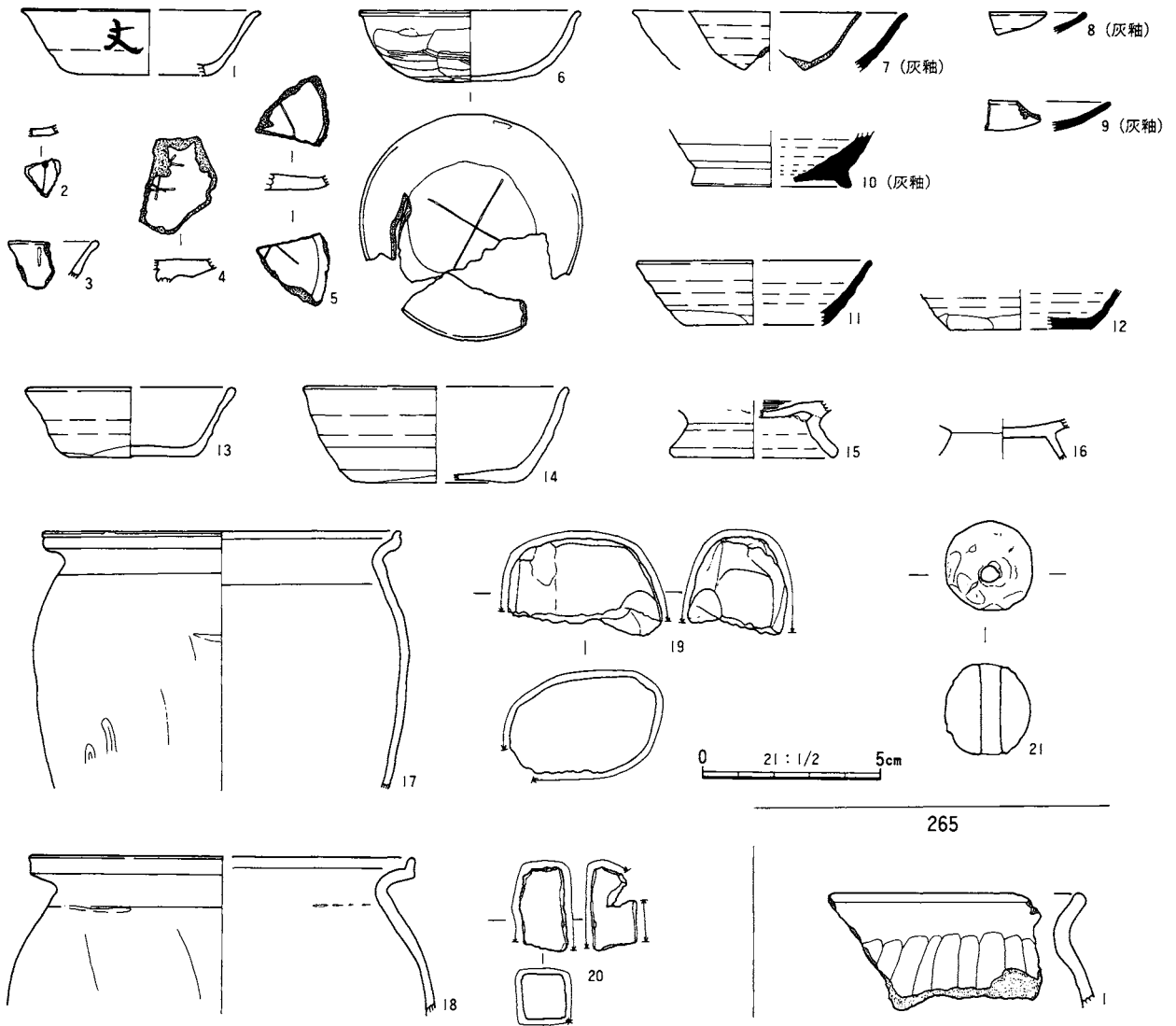
2は湖西産須恵器の頸部であるが、短い上に口径の大きいことから考えて提瓶もしくは平瓶の頸部の可能性が高い。頸部上位に断面三角の凸帯をもち、色調は灰色で内面には薄い自然釉がかかっている。還元鉄粒をわずかに含み、焼成は良好である。

M002溝状遺構出土遺物（第86図、図版41）

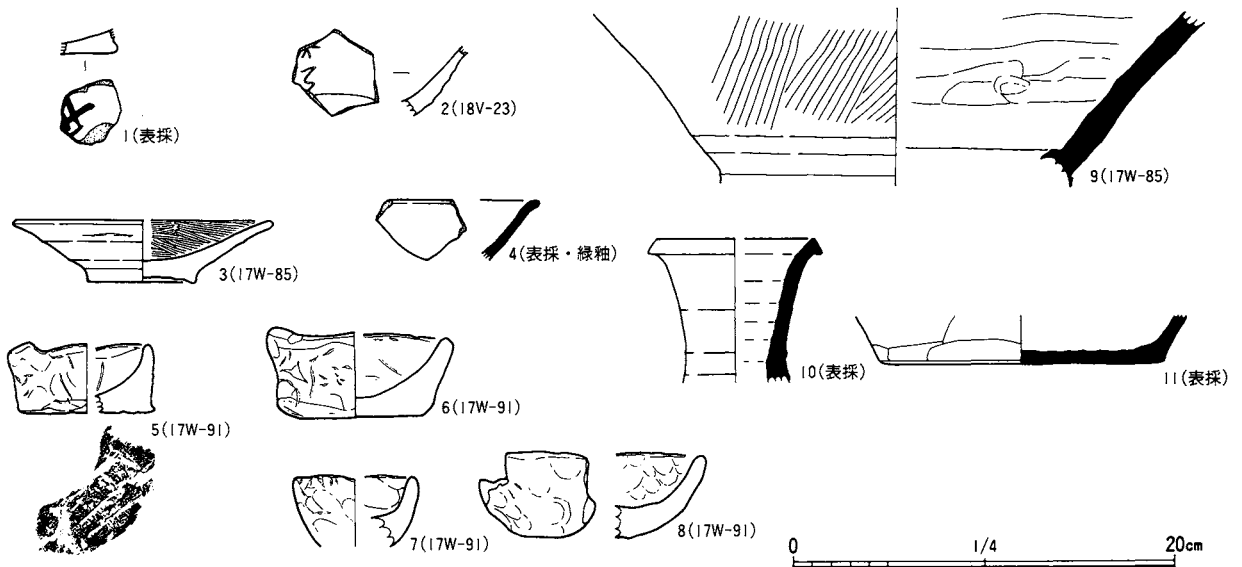
1～6は文字または記号を有する資料である。1～5はロクロ土師器である。1は杯で、外面口縁部に正位で「丈」の墨書が見える。外面底部は遺存する部位では手持ちヘラケズリ調整である。褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。2は杯で、底部外面に墨痕が見えるが小片のため判読不能である。外面は手持ちヘラケズリ調整で、色調は外面暗褐色、内面褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。3は杯で、口縁部外面に線刻らしきものが縦に一条見える。外面淡褐色、内面褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。4は高台付皿で、底部内面に線刻が見えるが部分資料のために文字か記号か判別できない。皿内面はヘラミガキ、他はロクロ調整である。外面褐色、内面赤褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5は底部内外面に線刻があるが、小片のためにどちらも文字か記号か判別不能である。外面は全面回転ヘラケズリ調整で、色調は暗褐色である。雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。6は土師器杯で、底部外面に「×」字状の線刻が見える。内面全体から口縁部上位にかけてヨコナデ、外面上位から底部全体にかけて手持ちヘラケズリ後粗いヘラミガキ調整を行っている。暗褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

7～10は灰釉陶器である。7は椀で、内外面漬掛けで、外面は中位まで施釉されている。釉色は緑灰色で、素地は灰色である。長石粒をわずかに含み、焼成は良好である。8・9は皿である。ともに漬掛けによる施釉で、8は遺存部位全面、9は内面は全面、外面は遺存部中位までの施釉である。8は素地灰色で、長石粒を微量含み、焼成は良好である。9は素地灰色で、長石粒を微量含み、焼成は良好である。10は長頸瓶底部付近の破片である。遺存部位においては施釉は見られない。外面遺存部位は高台部分を除き回転ヘラケズリ調整である。外面灰色、内面灰白色で、長石粒・還元鉄粒を微量含み、焼成は良好である。

M002



グリッド一括・表採遺物



第86図 M002溝, 265土壌, グリッド一括・表採遺物

11・12は新治産須恵器杯である。調整技法は共通で、外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。11は灰色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。12は灰色で、白雲母粒の他に多量の長石粒を含み、焼成は良好である。

13・14はロクロ土師器杯である。調整技法は共通で、外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整である。13は淡褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。14はやや深めで、色調は外面褐色、内面暗褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

15・16はロクロ土師器高台付杯である。15の高台の形態から見て双方ともに足高高台と考えられる。15は内面ヘラミガキで他の部分はロクロ調整である。色調は褐色で、石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。16は外面口縁部内側は回転糸切り後無調整、内面はヘラミガキ調整である。色調は灰褐色で、多量の雲母末の他に長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

17・18は土師器常総型甕である。調整技法は共通で、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面上半縦方向のヘラナデ、下半縦方向のヘラミガキ、内面横方向のヘラナデ調整である。17は外面褐色、内面暗褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。18は褐色で、雲母末・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

19・20は砥石である。19は安山岩製、20は流紋岩製で、遺存部位は破断面以外すべてに使用痕がある。21は土玉である。

5 その他の遺構出土遺物

265土壇出土遺物（第86図）

1は土師器甕口縁部付近破片である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。褐色で、石英粒・長石粒の他に少量の雲母粒、微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

6 グリッド一括遺物及び表採遺物（第86図）

1はロクロ土師器皿で、底部外面に墨書が見えるが小片のため判読不能である。底部外面は回転糸切り後無調整で、それ以外の部分はロクロ調整である。淡褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を微量含み、焼成は良好である。2はロクロ土師器杯で、口縁部外面に正位で二文字の線刻が見えるが、小片のため判読不能である。外面口縁部下端回転ヘラケズリ調整で、他はロクロ調整である。色調は褐色で、雲母粒・石英粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。3はロクロ土師器皿である。非常に突出度の弱い付高台で、外面高台内側は回転糸切り後無調整、皿部内面は丁寧なヘラミガキ調整、他の部分はロクロ調整である。淡褐色で、少量の雲母末・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。

4は緑釉陶器碗の口縁部片である。素地は灰色で、釉は暗緑色、外面口縁部上位に鮮やかな緑の点釉がある。

5～8は手捏ね土器である。5は底部外面に木葉痕が見え、外面はナデ、内面はヘラナデ調整である。全体に淡褐色で、部分的に黒灰色である。少量の雲母末・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。6は外面底部無調整、口縁部ナデ、内面ヘラナデ調整である。淡褐色で、内外面に黒斑が見え、微量の雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。7は全面ナデ調整で、

器表面は黒褐色，器肉は暗褐色である。雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を微量含み，雨声は良好である。8は全面ナデ調整である。器表面は全面赤褐色で，一見赤彩のように見える。器肉は淡褐色で，雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を微量含み，焼成は良好である。

9は常滑片口鉢片である。外面斜方向のハケ目調整後，下端部をヨコナデ，内面はヘラケズリの後にナデ調整で，底部に接する屈曲部分はヘラが雑に刻み込まれている。色調は暗褐色で，多量の長石粒を含み，器面はザラザラである。

10は東海産須恵器長頸壺頸部片である。遺存部位はすべてロクロ調整で，色調は灰色，長石粒を少量含み，焼成は良好である。

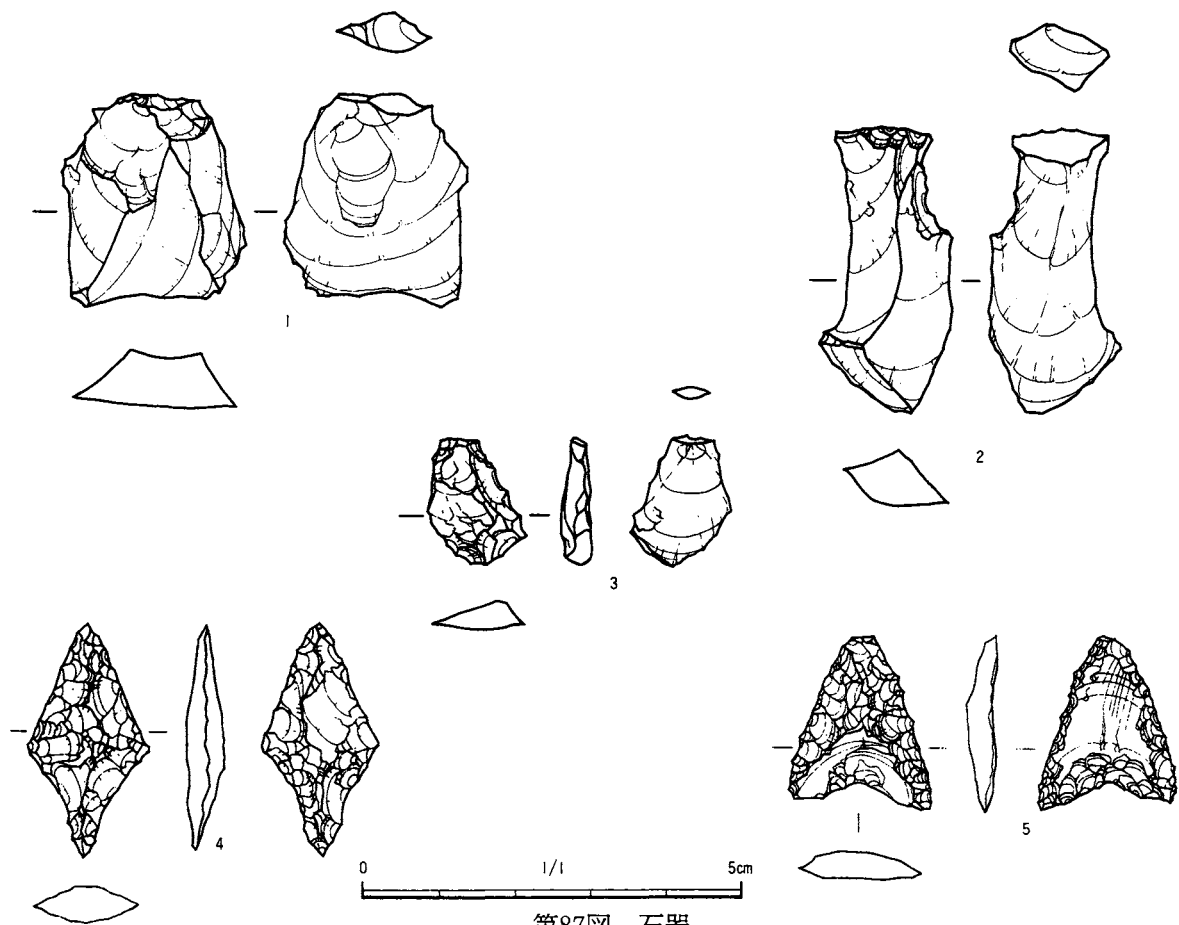
11は新治産須恵器甕底部片である。外面胴部横方向のヘラケズリ，底部無調整で，内面はナデ調整である。褐色で，雲母粒・石英粒・長石粒・還元鉄粒を多量，良好である。

7 その他の遺物

ここでは，下層検出の石器剥片，遺構に伴わない遺物及び遺構に伴ってはいるが明らかに他時期の混入遺物と考えられるものをまとめて記述する。

石器（第87図，図版46）

1は15W-57グリッドVII層出土のメノウの剥片である。2は同じグリッドのIXa層出土のメノウの剥片である。3は184竪穴住居検出の頁岩剥片である。4は同じく184竪穴住居出土の頁岩製石鏃である。5は193竪穴住居出土の黒曜石製石鏃である。



第87図 石器



第88図 縄文土器

縄文土器 (第88図, 図版47)

1～8は早期撚糸文系土器群である。1は口唇部があまり肥厚せず、口唇部と胴部に撚糸文が施文されている。2～8は胴部のみへの施文であり、この内3は口唇部直下に圧痕が施されている。

9～11は早期後半から前期にかけての土器群で、胎土中に繊維を含む。9は横方向の条痕文が施文されている。10は押引による施文、11は単節LR縄文を横位に施文している。

12～15は中期初頭の土器群である。12は口唇部表裏に縦方向の短沈線を施し、口縁部には沈線による曲線的な文様が描かれている。13は口唇上に2本一単位の連続刺突文が施されている。15は肥厚した口唇部及び口唇直下に先端の細い工具による交互刺突文が施されている。

16～19は中期阿玉台式の土器群で、胎土中に雲母を含む。16・17・19は隆帯に沿って複列の角押文が施されている。18は隆帯に沿って沈線が施されている。

20～22は勝坂式土器群である。20・22はヘラ状工具による押引文（キャタピラ文）と波状の沈線が見られる。21には三叉文が見える。

23も勝坂式の影響が強い土器で、隆帯に沿って三角形連続刺突文が施され、区画内も同様の工具により波状文が施される。胎土中に雲母を含む。

24・25は阿玉台式後半の土器群である。24は断面三角形の隆帯に指頭状工具により押圧を施している。25は地文に縄文を持ち、波状沈線文が施されている。

26・27は中期後葉加曾利E式期の土器群である。26は地文に単節RLの縄文が施文されている。27は地文に単節LRの縄文が施され、隆帯による区画と隆帯脇はナデられ、縄文は擦り消されている。

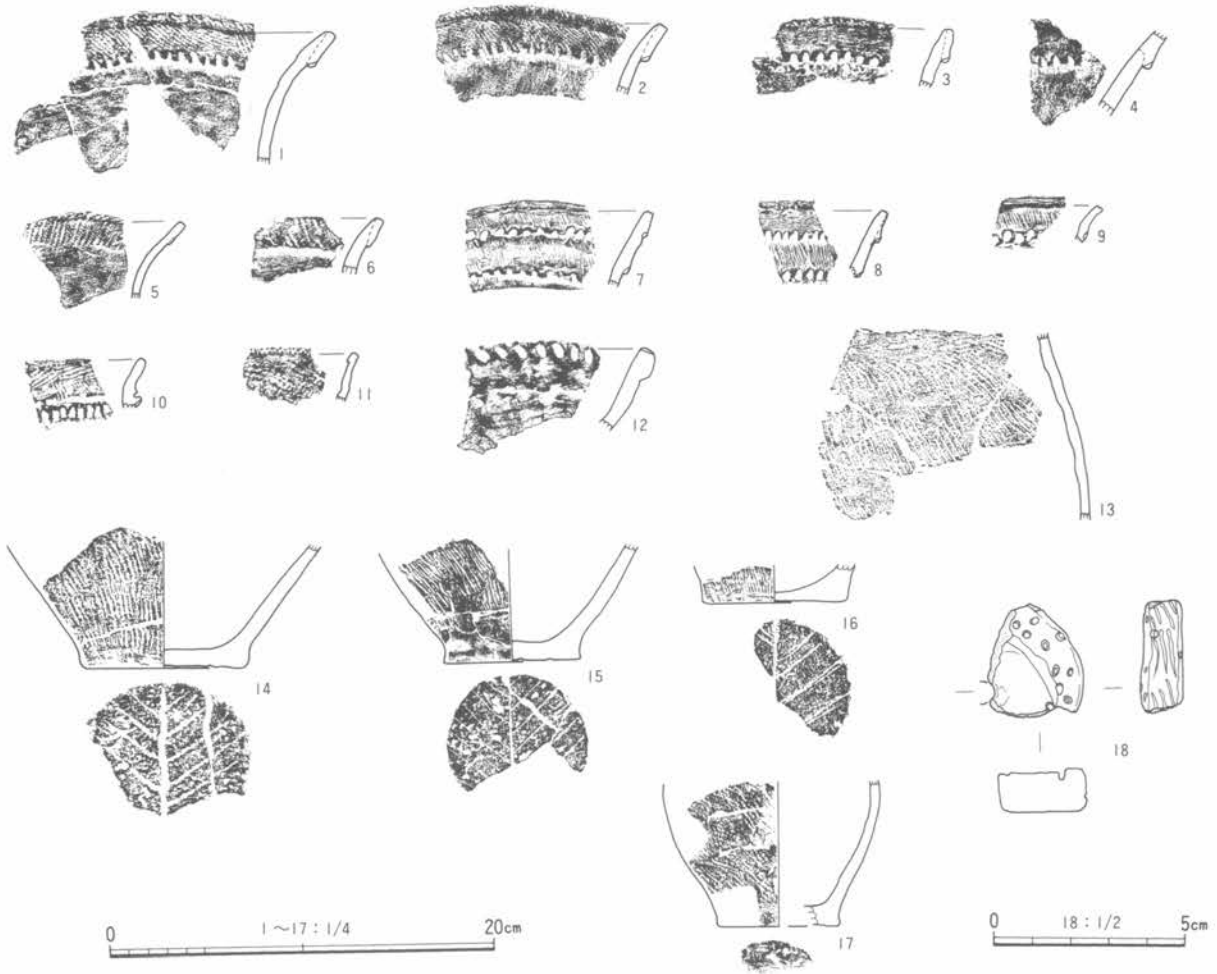
28～31は後期前半の堀之内式期から加曾利B式期にかけての土器群である。28・29は弱い押圧のある隆帯を口唇部直下に巡らせている。口唇部裏面には沈線が施されている。30は口縁部無文帯直下に刻目を持つ低い隆帯を巡らせている。地文に縄文を持ち、その上から数条の横位沈線を施すことで、帯縄文を作出している。31は押圧のある隆帯を口唇部直下に巡らせている。口唇部裏面には沈線が施されている。32は外面胴部に粗い縄文が地文として施され、その上から条線が施されている。

33・34は土器片錘である。胎土中に雲母を含む。

弥生土器 (第89図, 図版48)

すべて206竪穴住居から検出されたものである。

1～9は複合口縁を有する壺型土器口縁部資料である。1は口唇部と口縁部外側面に細縄文を巡らし、口縁貼付帯下端には刻み目が巡らされている。外面黒褐色、内面橙褐色で、石英微粒・長石微粒を多量に含み、焼成は良好である。2は1と同一個体の可能性が高いが、口縁部外面に巡らされている細縄文の撚りがやや細かいように見える。他はほぼ1と同様である。3は口唇端面にのみ附加条の細縄文を巡らし、口縁部外側面には施文はない。口縁貼付帯下端にはやはり刻み目が巡らされている。色調は褐色で、長石微粒を多量に含み、焼成は良好である。4は口唇部が摩滅しているために断定はできないが、3と同様の口縁部施文かもしくは完全無文であるかのいずれかである。やはり、口縁貼付帯下端に刻み目が巡らされている。石英粒・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。5は複合口縁と呼ぶにはあまりにも突出の弱い帯が外面に貼付されている。口唇部と口縁部外側面に細縄文を巡らしている。色調は外面暗橙褐色、内



第89図 弥生土器

面橙褐色，器肉乳橙色で，石英微粒・長石微粒を微量に含み，焼成は良好である。6は口縁部外側面にのみ細縄文を巡らしており，刻み目はない。外面暗橙褐色，内面・器肉黒褐色で，石英微粒・酸化鉄微粒を微量に含み，焼成は良好である。7・8は別個体であるが酷似した形態である。外面複合口縁の粘土帯は下段粘度帯の上に段差を設けて上段の粘度帯を貼付しており，粘度帯下端部には上段・下段ともに刻み目が巡らされている。7は口唇部には彎曲に沿った方向に，口縁部外側面には縦方向に細目の無節の撚糸文が施文されている。褐色で，雲母微粒・長石微粒・海綿骨針を微量に含み，焼成は非常に良好である。8は口縁部外面上段の撚糸文施文方向が横方向である以外は7とほぼ同様である。内外面橙褐色，器肉灰褐色で，混和物はほとんどなく，焼成は良好である。9は小片のために複合口縁の形態が7・8の様なものなのか，一般的な一段のものであるのか判別できない。施文そのものは7と同じである。外面淡褐色，内面・器肉灰褐色で，混和物はほとんどなく，焼成は良好である。

10は口縁部から頸部に移行する部分の外面横方向に粘土紐を貼付し，下端に刻み目を巡らしている。外面の撚糸文は縦方向の後に横方向に施文されている。内外面暗褐色，器肉は橙褐色で，雲母末・石英微粒を少量含み，焼成は良好である。

11はかなり小型の製品で器形は不明である。外面及び口唇上端面に附加条の細縄文が巡らされている。色調は淡橙褐色で，長石微粒・酸化鉄微粒をわずかに含み，焼成は良好である。

12は小片のため断定はできないが，小型浅鉢かと考えられる。二重口縁で口唇上端面に刻み目が巡らさ

れ、縄文の施文は施されていない。黒灰色で、長石微粒・酸化鉄微粒を微量に含み、焼成は良好である。

13は壺型土器の胴部片である。頸部外面には赤彩が施されている。外面胴部の施文は単節細縄文を用いた捺糸文である。色調は外面淡褐色、内面暗褐色、器肉黒灰色で、雲母末・石英粒・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。

14～17は壺型土器の胴部下位から底部にかけての資料である。14は胴部外面に単節細縄文を用いた捺糸文を縦方向に施し、底部外面には木葉痕が鮮明に残っている。色調は暗赤褐色で、帯土中には石英粒・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。15は胴部外面に無節細縄文を用いた捺糸文を縦方向に施している。底部外面にはやはり鮮明に木葉痕が見える。内外面淡褐色で器肉は暗灰色、胎土中には石英微粒・酸化鉄微粒をわずかに含み、焼成は良好である。16は胴部外面に無節細縄文を用いた捺糸文を縦方向に施し、底部外面にはやはり木葉痕が鮮明に残っている。外面赤橙色、内面淡褐色、器肉淡灰色で、酸化鉄微粒をわずかに含み、焼成は非常に良好である。17は小型の壺である。胴部外面に単節細縄文が施され、底部外面はわずかな遺存部位の中に木葉痕が見える。胴部外面には赤彩が施され、内面は淡褐色、器肉は黒灰色で、混和物はほとんどなく、焼成は非常に良好である。

18は弥生時代の紡錘車である。222竪穴住居から1/4程度の小片が1点のみ検出されている。上下両平坦面縁辺部に刺突文が二重に巡り、側縁面には櫛描状平行沈線が施されている。

第 3 章

白井谷奥遺跡

第3章 白井谷奥遺跡

第1節 遺構

1 弥生時代の竪穴住居

041竪穴住居（第90図，図版52）

調査区西端に近い18J-30・31グリッドに所在する。重複する遺構はないが、遺構の南側1/5ほどは調査区外にかかっているために調査できなかった。平面形は小判形の隅丸長方形で、住居主軸方位はN-49°-Wである。遺構規模は長軸復元約5.5m，短軸4.2m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.45mである。壁溝はまったく巡らされていない。床面主軸線上やや北西寄りのところに炉が設けられている。楕円形で、長軸は住居主軸に直交方向を向き0.65m，短軸は0.55m，深さは0.15mである。火床面はかなり強く被熱している。調査区外に存在すると考えられる南隅の1本を除く3本の支柱穴が検出されているほかに、北西壁際中央に1本，北隅壁際に1本支柱穴が検出されている。支柱穴は径0.25m～0.3m，深さ0.45m～0.6mである。北西壁際の柱穴は長径0.4m，短径0.25m，深さ0.05m，北隅壁際のものは径0.2m，深さ0.2mである。床面硬化範囲はやや複雑で、支柱穴に囲まれた床面中央，北東壁際，北西壁際に確認されている。このうち床面中央の南東部は特に硬化が著しく，他の硬化部分よりもやや高まっていた。

遺物の検出量は極端に少ない。

2 奈良・平安時代の竪穴住居

006竪穴住居（第90図，図版53）

調査区やや東寄りの18W-23グリッドに所在する。重複する遺構はない。カマドは北東壁東寄りのところに設けられており，住居主軸方位はN-23°-Eである。平面形は長方形で，遺構規模は南北3.5m，東西2.75m～2.9m，確認面から床面までの掘り込みの深さは最も深いところで0.6mである。壁溝はまったく巡らされていない。床面には7本の柱穴が検出されている。南東壁側に列をなして3本，北西壁側はやや列を乱して3本，南西壁側中央にやや壁から離れて1本である。このうち，南西壁側中央のものは出入口施設痕跡としての柱穴，他の6本は支柱穴と考えられる。支柱穴は径0.1m～0.3m，深さ0.1m～0.2mとかなり小型のものである。出入口施設痕跡の柱穴は長径0.3m，短径0.15m，深さ0.13mである。床面硬化範囲は平面図中に破線で示した柱穴に囲まれた大半の部分である。覆土はローム粒・大型ローム塊を含む層が多く，人為堆積である可能性が高い。

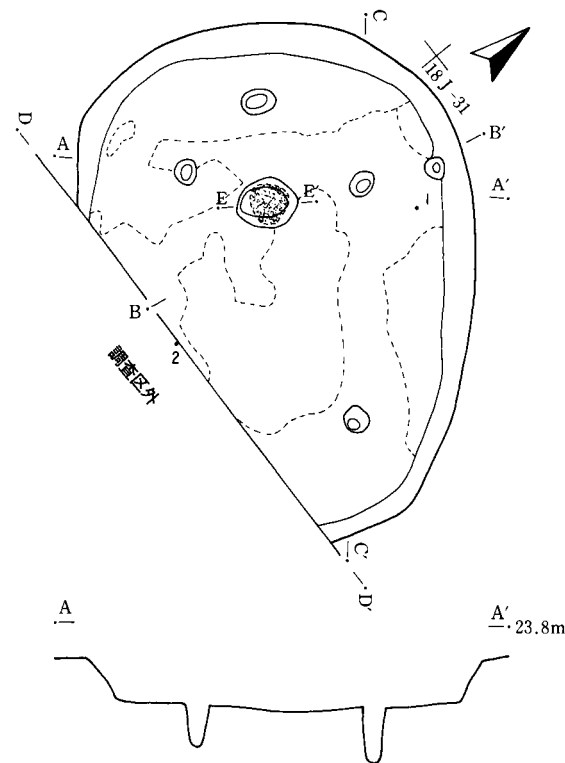
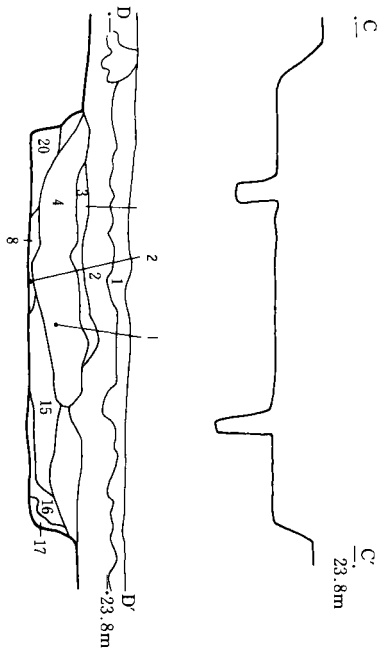
カマドは両袖の山砂が比較的高く遺存していた。細身のカマドである。

遺物はカマド周辺からわずかに検出されているが，いずれも微細な破片である。

007竪穴住居（第91図，図版53）

調査区東寄りの18N-26・27グリッドに所在する。重複する遺構はない。カマドは北壁中央に設けられており，住居主軸方位はN-7°-Eである。平面形はやや歪んだ正方形で，遺構規模は南北2.5m～2.8m，東西3.0m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.4mである。壁溝は全周している。床面には5本の

041

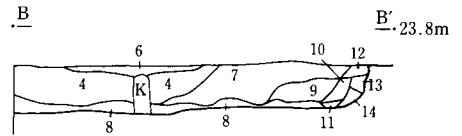


E E' 23.0m

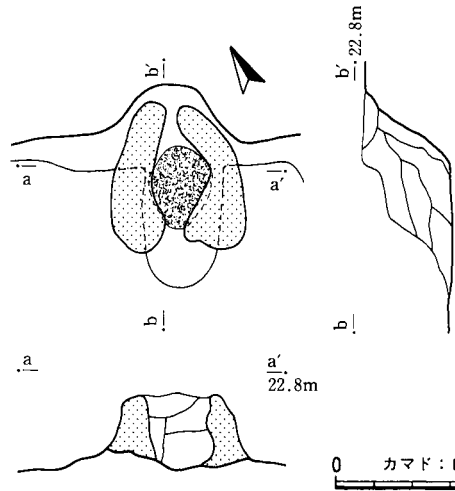
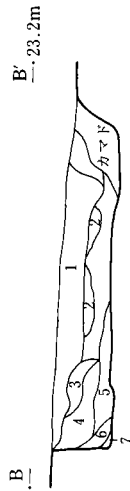
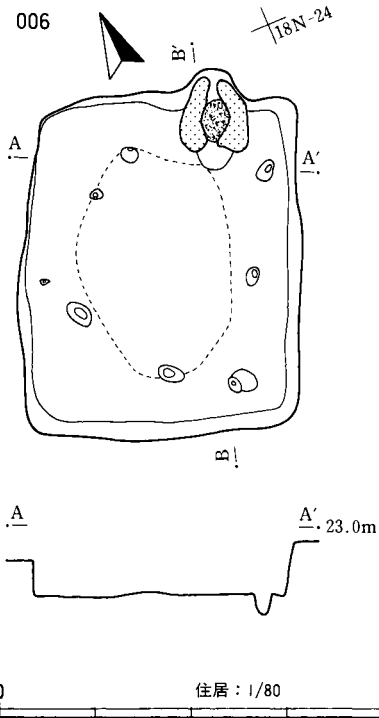
<041竪穴住居土層説明>

- 1 表土層
- 2 褐色土：炭化物・焼土粒を微量に含む
- 3 暗褐色土：黒褐色土塊を含む
- 4 黒褐色土：ローム粒を微量に含む
- 5 暗褐色土：混和物なし
- 6 暗褐色土：黒褐色土塊を微量含む
- 7 暗褐色土：混和物なし
- 8 暗褐色土：新期テフラ塊・ローム粒を微量に含む
- 9 暗褐色土：新期テフラ塊・炭化物粒を含む
- 10 暗褐色土：ローム粒を多量に含む
- 11 暗褐色土：ローム粒を多量に、焼土粒を少量含む
- 12 暗褐色土

- 13 褐色土：ローム粒主体
- 14 褐色土：ローム粒・ローム塊主体
- 15 暗褐色土：ローム粒を少量含む
- 16 暗褐色土：ローム粒を少量含む
- 17 暗褐色土：ローム塊を含む(壁面崩落土か)
- 18 暗褐色土：ローム粒を含む
- 19 暗褐色土：ローム粒を少量含む
- 20 暗褐色土



006



0 カマド：1/40 1m

<006竪穴住居土層説明>

- 1 黒褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 2 黒褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 3 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 4 暗褐色土：3層に準じ色調暗い
- 5 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 6 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 7 褐色土：ローム塊・ローム粒主体

第90図 041・006竪穴住居

柱穴と、カマド東脇に貯蔵穴が検出されている。柱穴のうち、南壁際中央に設けられている1本は出入口施設痕跡と考えられるが、他の4本は支柱穴であるとするれば並びをなさず、辛うじて対をなすのは南列の2本だけである。出入口施設痕跡柱穴は径0.1m、深さ0.15m、その他の柱穴は径0.15m～0.2m、深さ0.15mである。貯蔵穴は隅丸方形気味の楕円形で、長径0.6m、短径0.5m、深さ0.25mである。床面硬化範囲はかなり広く、図中破線で示したように東西両壁際を除く床面の大半が硬化している。硬化範囲の一部は貯蔵穴覆土上にまで巡っている。貯蔵穴覆土中には焼土粒・ローム粒・ローム塊が混入しており、居住段階のいずれかの時期に貯蔵穴としての機能を失っていたことを示している。

カマドは壁外への張り出しをほとんどもたず、火床面、両袖ともに壁線よりも内側でのみ確認されている。カマド前面の床面には山砂の分布が見える。

遺物の検出量は少ない。カマド西脇床面に比較的遺存状況の良好な個体が若干検出され、それ以外は小さな小片で遺構南西部に偏在している。

010 竪穴住居 (第91図, 図版53)

調査区東寄りの18N-38・39グリッドに所在する。011溝によって、カマド中央部分と東壁を破壊され、遺構南側2/3は調査区外にかかっており調査できなかった。カマドは北壁に設けられており、西壁走行方位はN-7°-Eである。東壁が011溝によって完全に破壊され、痕跡さえも見出せなかったことから考えて、カマドは北壁やや東寄りのところに設けられており、北壁の長さは3.8m～4.1mの間におさまるものと推測できる。確認面から床面までの掘り込みの深さは0.4mである。壁溝はカマド以西では検出されている。床面においては硬化範囲も柱穴も確認されていない。

カマドはその中心部分が011によって破壊されており、両袖の山砂が遺存していたのみである。

遺物はほぼ全面において検出されているが、量が少なく、出土層位もほとんど覆土中層であった。

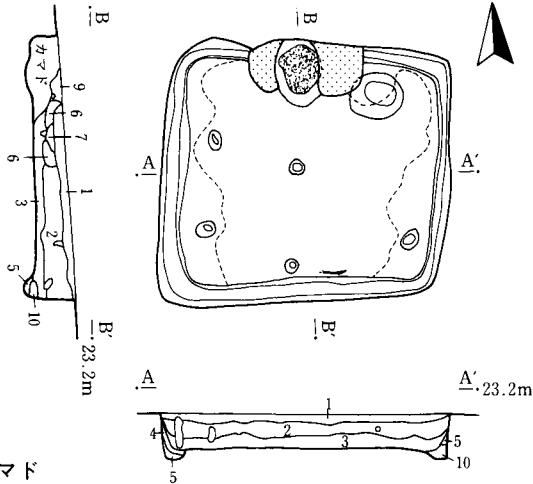
012 竪穴住居 (第91・92図, 図版54)

調査区東寄りの18P-11・12・21・22グリッドに所在する。013溝によって一部を破壊されている。カマドは北壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-3°-Eである。平面形はほぼ正方形で、遺構規模は南北3.2m～3.4m、東西3.3m～3.5m、確認面から床面までの掘り込みの深さは0.3mである。壁溝はカマド部分も含め全周している。床面には7本の柱穴が確認されている。このうち支柱穴と考えられるのは4本、出入口施設痕跡柱穴と考えられるのは南壁際中央の1本である。南西隅支柱穴のさらに南西側に2本の柱穴がつながっているが、この2本については性格不明である。支柱穴は東列の2本に抜き取り穴が付随しているために、それぞれの径はバラバラである。西列に2本は径0.3m～0.45m、4本の深さは0.35m～0.5mである。南西隅支柱穴につながる2本の柱穴は東側のものが深さ0.35m、西側の壁溝の中に食い込んでいたものが深さ0.3mである。出入口施設痕跡柱穴は径0.4m、深さ0.35mで、出入口施設痕跡の柱穴としては深いものである。床面硬化部分はカマド両脇と東壁際、西壁際の部分を除いた広い範囲である。

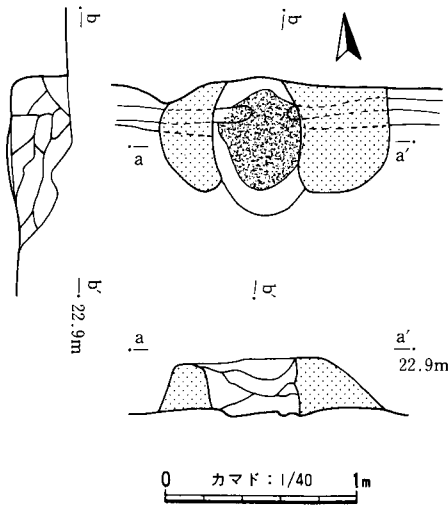
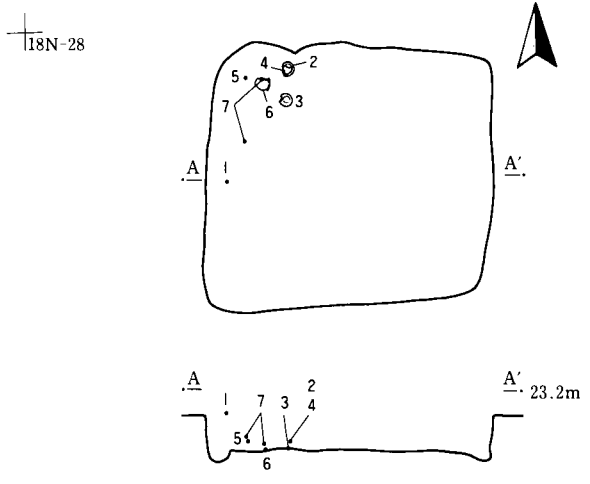
カマドはわずかに壁外にカマド尻を突き出しているが、火床面は壁線よりも内側にある。掛け口相当部分の確認面で、6の須恵器甕が潰れた状態で検出されている。

遺物はほぼ全面で検出されているが、出土層位は覆土中層以上に偏っている。

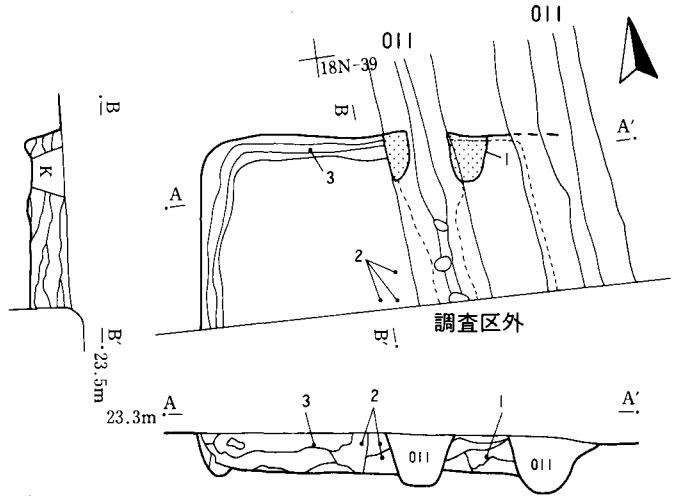
007



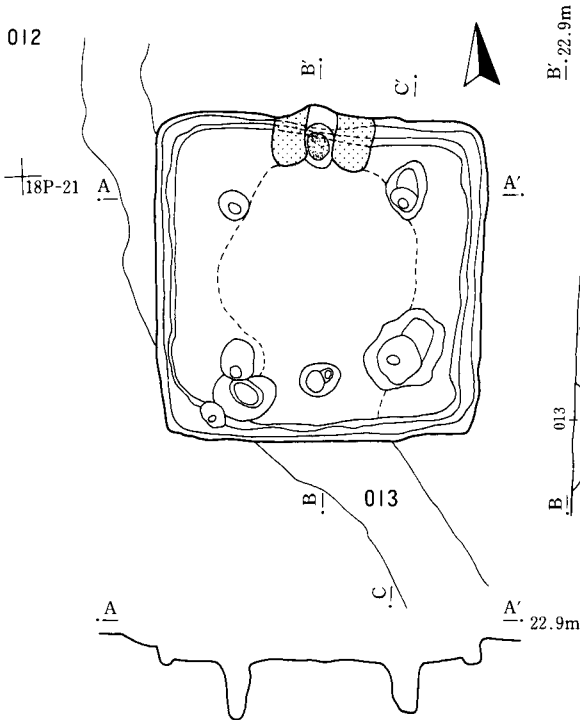
007カマド



010



012

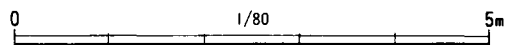


<007竪穴住居土層説明>

- 1 暗褐色土：ローム塊・焼土粒を微量に含む
- 2 暗褐色土：ローム塊・焼土粒を微量に含む
- 3 暗褐色土：ローム塊・山砂を多量に含む
- 4 暗褐色土：ローム塊を含む
- 5 褐色土：ローム塊・ローム粒主体
- 6 暗褐色土：山砂・ローム塊を含む
- 7 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 8 山砂
- 9 暗褐色土：山砂・ローム塊を含む
- 10 暗褐色土：ローム塊・ローム粒・焼土粒を含む

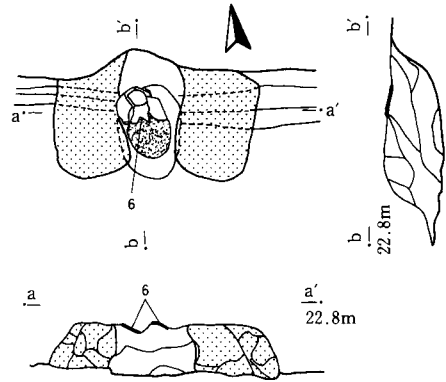
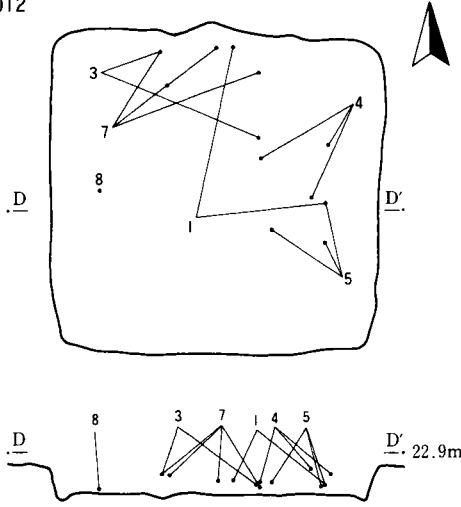
<012竪穴住居土層説明>

- 1 黒褐色土：ローム粒を含む
- 2 黒褐色土：ローム粒・焼土粒を含む
- 3 黒褐色土：ローム塊・山砂を含む
- 4 山砂主体
- 5 黒褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 6 黒褐色土：ローム粒・山砂を含む
- 7 黒褐色土：ローム粒・山砂を少量含む
- 8 黒褐色土：山砂を含む



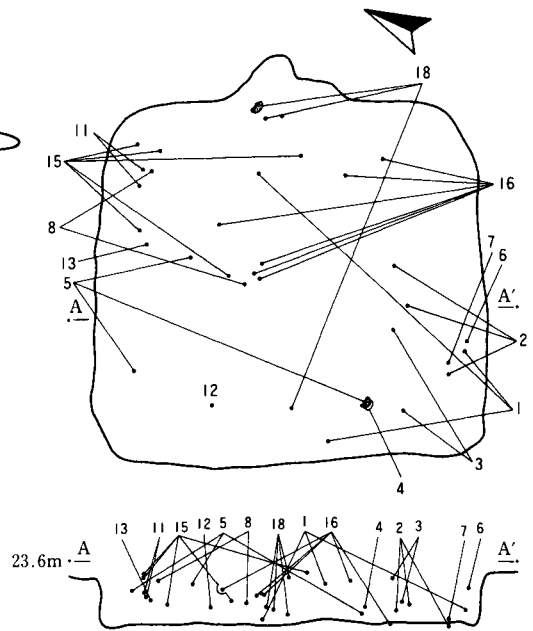
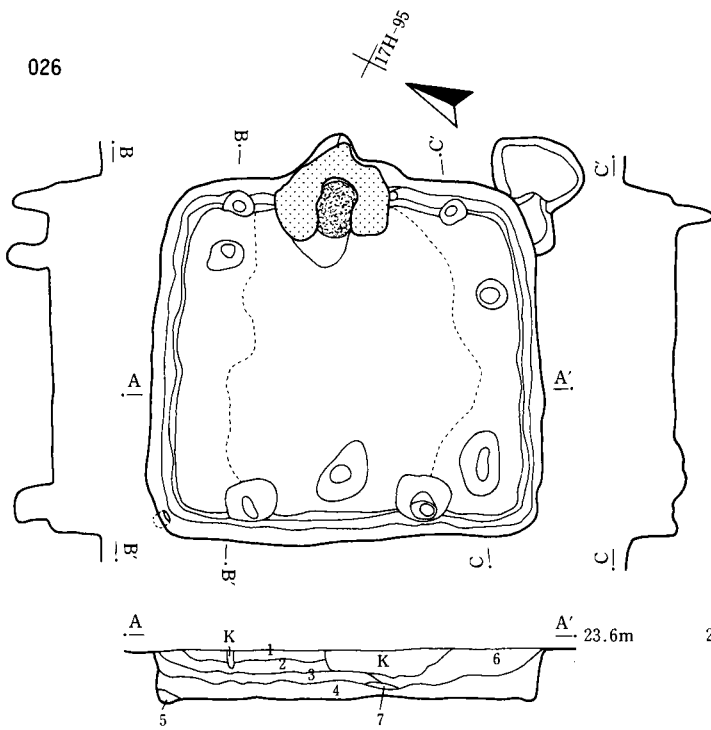
第91図 007・010・012竪穴住居

012



0 カマド : 1/40 1m

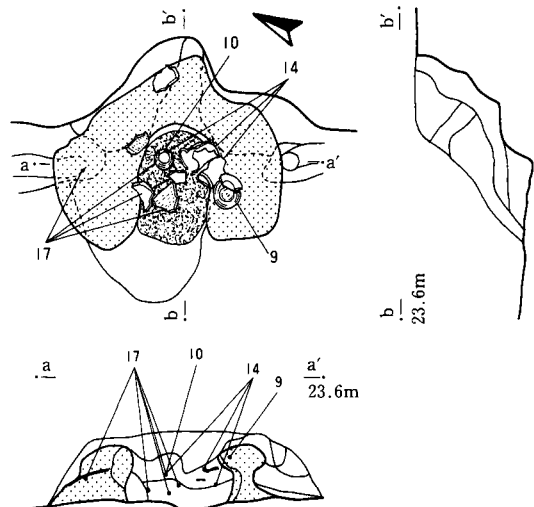
026



0 1/80 5m

<026竪穴住居土層説明>

- 1 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 2 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 3 暗褐色土：ローム粒・焼土粒を含む
- 4 暗褐色土：ローム粒・焼土粒を多量に含む
- 5 褐色土：ローム粒を多量に含む
- 6 暗褐色土：ローム粒を含む
- 7 暗褐色土：山砂を含む



第92図 012・026竪穴住居

026竪穴住居（第92図，図版54）

調査区西端寄りの17H-83・84・93・94グリッドに所在する。

遺構東隅壁上位を破壊している遺構は，断面図が存在しないために確定的なことは言えないが，以下のように考えられる。記録を見ると平面瓢箪形で，東側掘込みは深さ0.2m，西側掘込みは深さ0.3mで，その間には0.1mほどの段差がある。東側掘込みは底面全体が著しく被熱している。以上のことから中世の火葬土壌が最も妥当性が高く，または小型炭窯である可能性も残る。

カマドは北東壁中央に設けられており，住居主軸方位はN-65°-Eである。主軸方位は本遺構のすぐ南側を走る004道路状遺構の走行方位と完全に一致しており，道路状遺構による制約を受けていることが考えられる。遺構平面形は台形で，規模は東西3.7m，南北3.8m～4.1m，確認面から床面までの掘り込みの深さは0.5mである。壁溝はカマド部分を除き全周している。柱穴様掘り込みは全部で8本検出されている。このうち支柱穴と考えられるのは北東壁際壁溝中にかかっている2本と，南西壁際壁溝に一部掛かる2本であると推定されるが，南西壁際南側のものは床面精査段階では確認されず，貼床除去作業中に検出されたと記録されている。北東壁際の2本が径0.25m，深さ0.35m，南西壁側の2本は径0.4m～0.5m，深さ0.4mである。南西壁側中央の柱穴は出入口施設痕跡と考えられる。不整形で長径0.7m，短径0.4m，深さ0.2mである。南隅のものは楕円形で，長径0.65m，短径0.4m，深さ0.15mである。北東壁側の支柱穴より内側で検出された2本は，径がほぼ同じで0.3mであるが，深さは極端に異なり北側のものが0.4m，南側のものが0.1mである。床面硬化部分は広く，北西壁際と南東壁を除くほぼ全面が硬化している。そのうちでも中央部分の硬化は著しいものであった。

カマドは両袖の山砂の他に掛け口奥側天井の痕跡も確認できた。掛け口部分では10の小型土師器壺が倒立した状態で出土している。

遺物は遺構ほぼ全面で出土しているが，出土層位は覆土中層から上のものが多い。

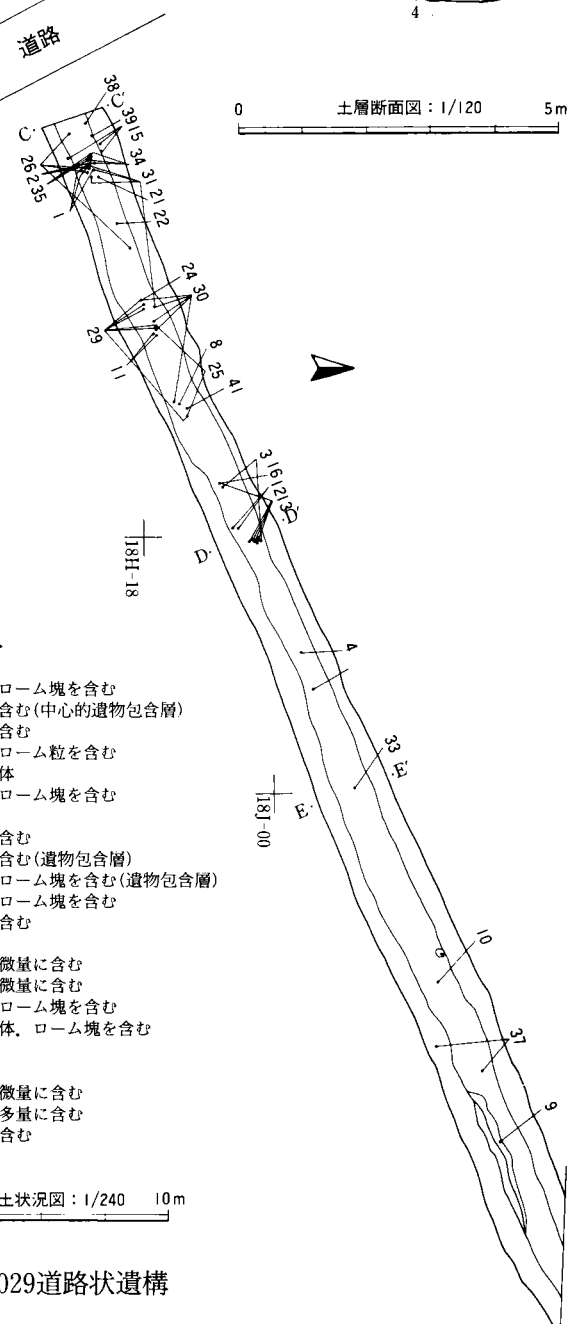
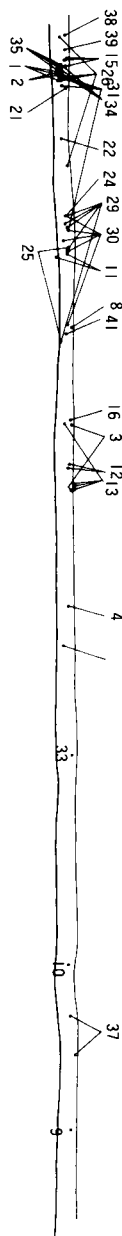
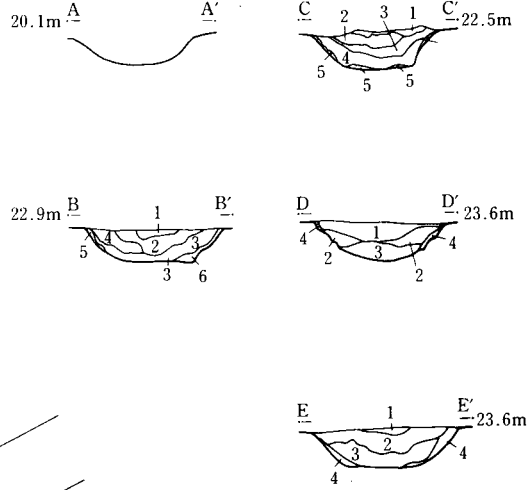
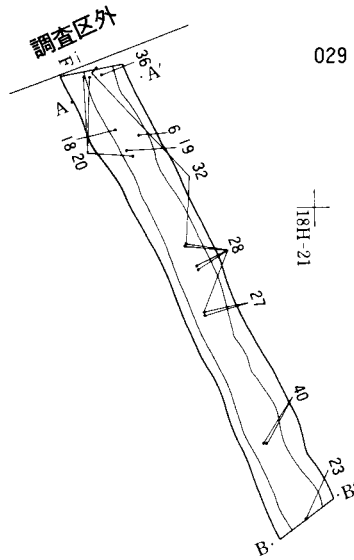
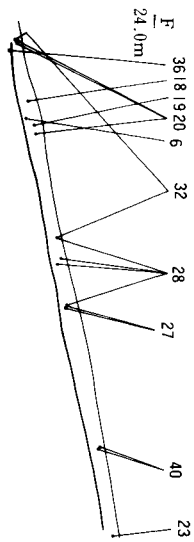
3 古代の道路状遺構

029道路状遺構（第93図，図版55）

調査区西端において検出されている。「調査報告第358集」において報告した鳴神山遺跡M004と同一遺構であり，白井谷奥遺跡から鳴神山遺跡にかけて一直線に走っている遺構である。途中の未調査区をも含めて現状で確認できる総延長距離は590mである。全調査区を見渡しても竪穴住居や掘立柱建物との重複はない。鳴神山遺跡も白井谷奥遺跡もそれほど遺構密度の高い遺跡ではないが，このほかの溝や道路状遺構のほとんどが竪穴住居との重複関係をもつことと比較した場合，これは注目すべき事象である。その上に出土遺物も古代に限定できることから考えて，本遺構は古代のものであると見てまちがいない。

溝の走行方位はN-65°-Eである。調査区内に掛かっている部分は，一部現道のために調査できなかった部分を含め61.7mである。幅は上端で2.0m～2.5m，下端で1.1m平均である。確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは最も浅いところで0.4m，最も深いところで0.7mである。遺構底面はほぼ平坦である。覆土中にはローム粒・ローム塊を含み，覆土中に硬化面が存在しないことから，道路としての使用中はかなり丁寧な管理を受け，廃絶時には人為的に埋め戻されていると考えられる。

道路状遺構としては遺物の出土量が多いが，出土層位は覆土中層付近に集中している。



<029道路状遺構土層説明>

B-B'土層説明

- 1 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 2 暗褐色土：ローム塊を含む(中心的遺物包含層)
- 3 黒褐色土：ローム塊を含む
- 4 黒褐色土：ローム塊・ローム粒を含む
- 5 褐色土：ローム粒主体
- 6 褐色土：ローム粒・ローム塊を含む

C-C'土層説明

- 1 黒褐色土：ローム粒を含む
- 2 暗褐色土：ローム粒を含む(遺物包含層)
- 3 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む(遺物包含層)
- 4 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 5 暗褐色土：ローム粒を含む

D-D'土層説明

- 1 褐色土：ローム粒を微量に含む
- 2 暗褐色土：ローム粒を微量に含む
- 3 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 4 暗褐色土：ローム粒主体、ローム塊を含む

E-E'土層説明

- 1 暗褐色土：混和物なし
- 2 褐色土：ローム粒を微量に含む
- 3 暗褐色土：ローム粒を多量に含む
- 4 暗褐色土：ローム塊を含む

0 平面図・遺物出土状況図：1/240 10m

第93図 029道路状遺構

4 中世の遺構

調査区東端に中世遺構群の密集が見られる。そのうちでも、第94図に示したように013溝状遺構と020道路状遺構に挟まれた区域には、地下式墳を中心としてかなりの量の遺構群が集中している。この区画に所在する遺構は大局的にみると主軸方位を北北西にとっているものが多く、配列についてはある程度の規制を受けているものと考えられる。時期を特定する遺物はほとんど検出されていないが、地下式墳の存在や方形土壌の集中から見ても、中世の遺構群であることは確実である。

016地下式墳（第94・95図，図版55）

18P-23・24・33・34グリッドに所在する。035地下式墳と一部重複するが、土層断面観察では前後関係を把握することはできなかった。出入口竪坑南端部分が調査区外にかかっている。遺構主軸方位はN-8°-Eである。土壌本体地下室部分の規模は床面奥行き1.2m、幅1.9m、確認面から底面までの深さは1.6mである。竪坑部分は幅0.5m、検出できた部分での奥行き1.2m、確認面から底面までの深さは1.0m～1.2mで、底面は南から北に向けて下がっている。竪坑底面と地下室部分の底面段差は0.4mである。竪坑と地下室部分との間の壁面には階段状の掘り込みや足掛け状の掘り込みは検出されなかった。天井は完全に遺存しておらず、壁面にも天井への変換点は見出すことができなかった。覆土土層断面観察によれば、大半の層にローム粒・ローム塊が混入しており、崩落等を考慮に入れても最終的には埋め戻されているものと想定される。

遺物はまったく検出されていない。

035地下式墳（第94・95図）

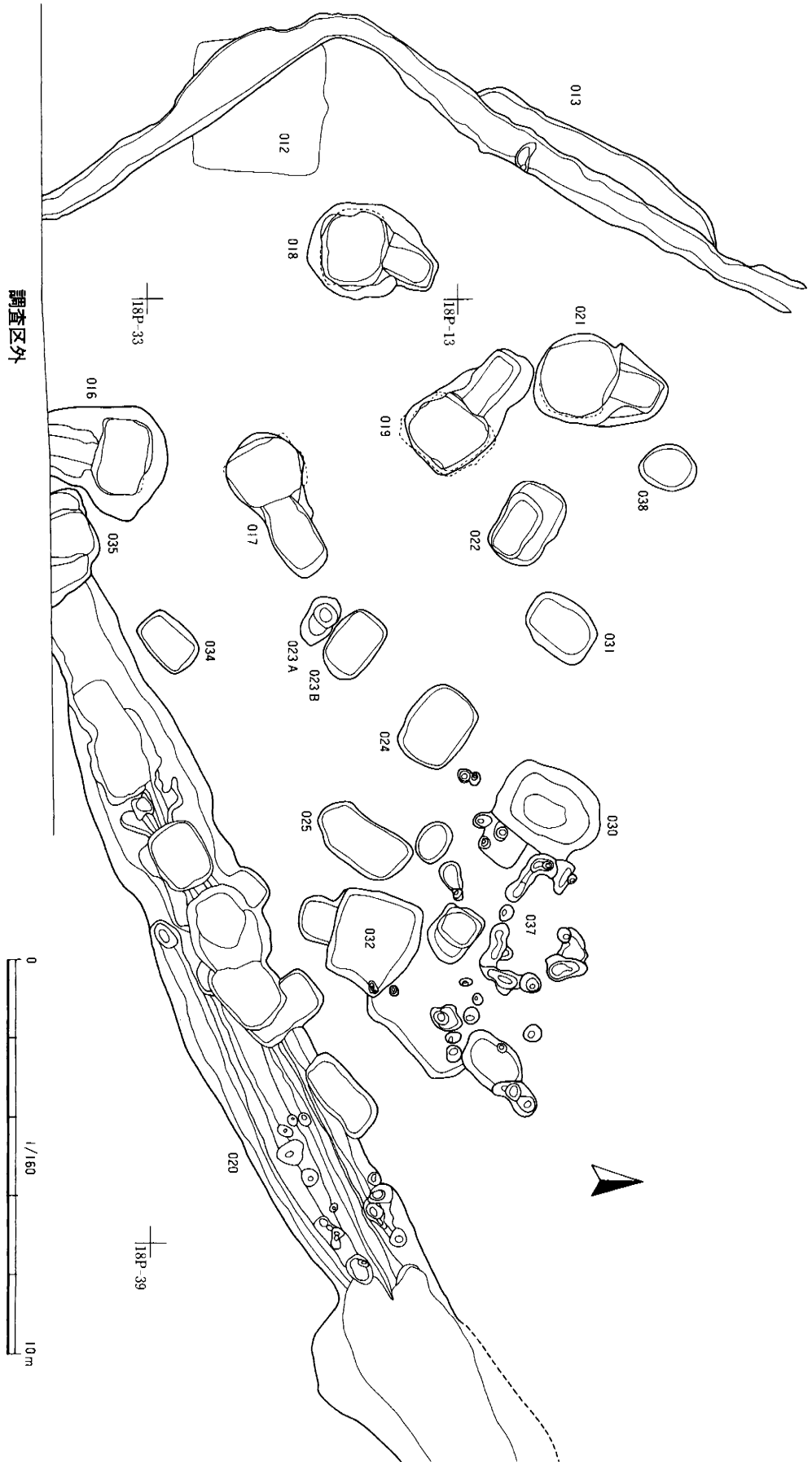
016地下式墳の東側に隣接し、020道路状遺構によって上部を破壊されている。遺構南半は調査区外にかかっている。土層断面と形態との双方から見て、2基の遺構が重複してこのような形態になっている可能性が高い。中央の遺構は上端幅1.2m、下端幅1.1m、確認面から底面までの深さ1.3mである。この東西にかかる遺構は東西幅が上端で2.4m、下端で2.2m、確認面から底面までの深さ0.8mである。覆土中にはローム塊・ローム粒の混入が多く認められる。

遺物はまったく検出されていない。

017地下式墳（第94・95図，図版55）

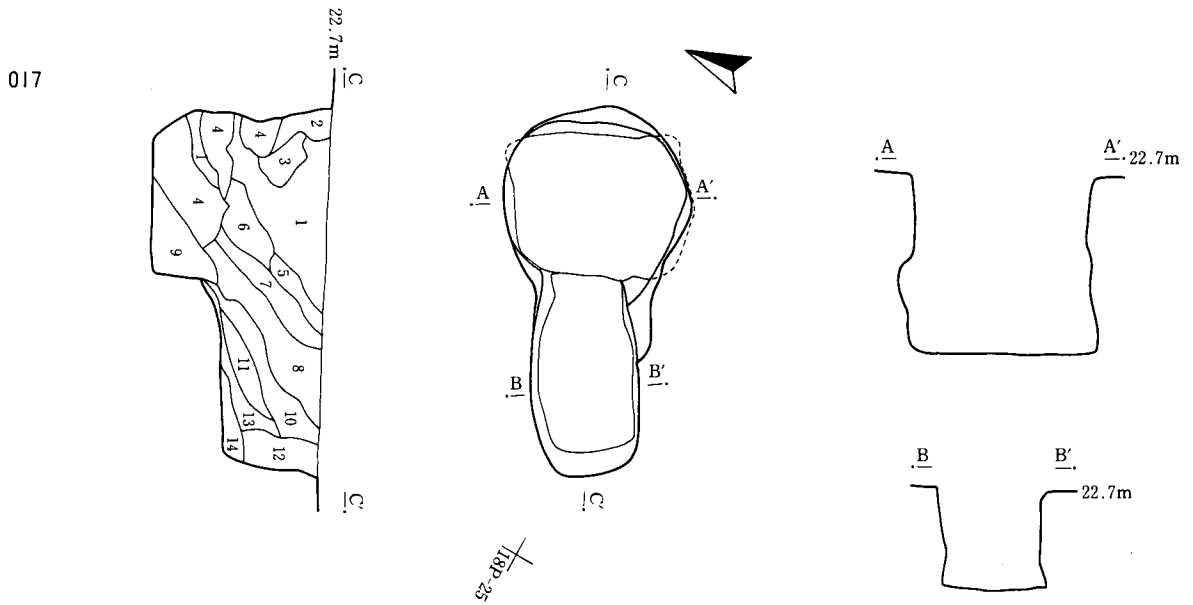
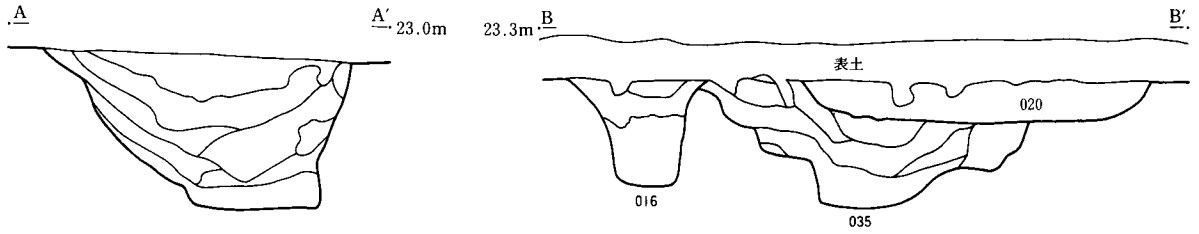
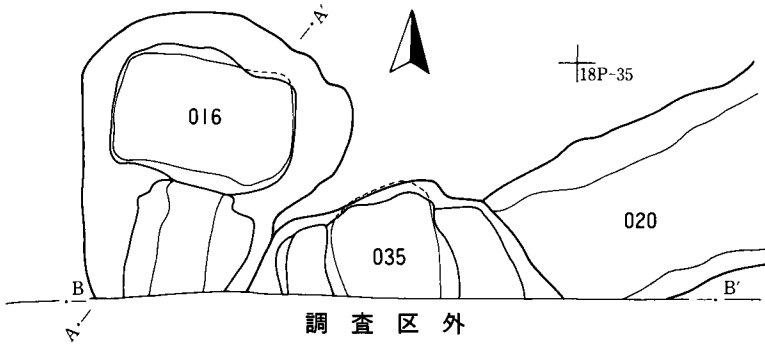
18P-14・23・24グリッドに所在する。重複する遺構はない。遺構主軸方位はS-65°-Wである。遺構本体の地下室部分に比べ、竪坑部分が長大である。地下室部分は底面で奥行き1.45m、幅1.8m、確認面から底面までの深さは1.8mである。天井部はまったく遺存しておらず、縦方向の土層断面を観察すると奥壁側上位に天井部への傾斜変換点がわずかに残っており、底面からの高さ0.6mである。竪坑部分底面は長さ1.8m、幅0.7m～1.0m、確認面から底面までの深さ1.0mで、地下室部分に向かってわずかに下がっている。

遺物はまったく検出されていない。



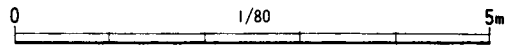
第94図 中世遺構群配置図

016・035



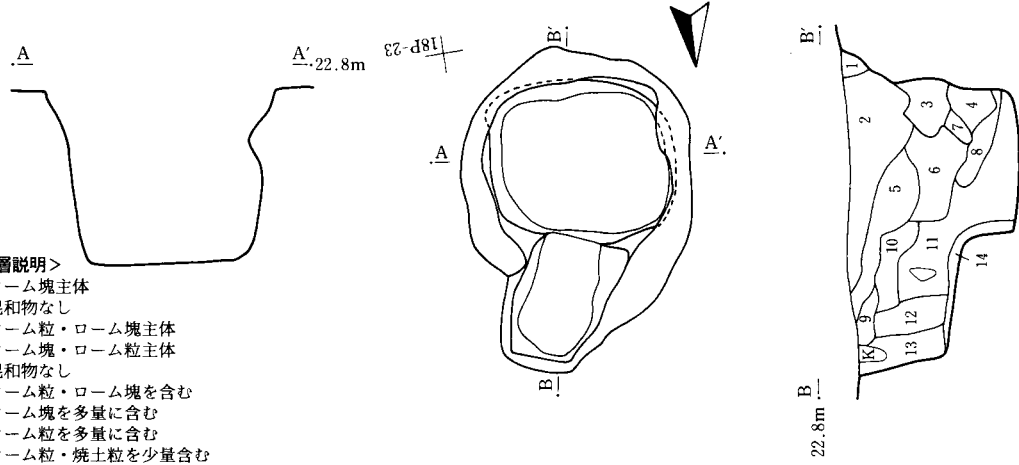
<017地下式墳土層説明>

- 1 黒褐色土：ローム粒を多量に含む
- 2 黒褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 3 暗褐色土：ローム塊を多量に含む
- 4 褐色土：ローム塊主体
- 5 黒褐色土：ローム塊を含む
- 6 暗褐色土：ローム粒を含む
- 7 暗褐色土：ローム塊を含む
- 8 暗褐色土：ローム塊を多量に含む
- 9 暗褐色土：ローム塊を含む
- 10 暗褐色土：ローム塊を多量に含む
- 11 暗褐色土：ローム塊を含む
- 12 暗褐色土：ローム塊・ローム粒を多量に含む
- 13 暗褐色土：ローム塊を多量に含む
- 14 褐色土：ローム塊主体



第95図 016・035・017地下式墳

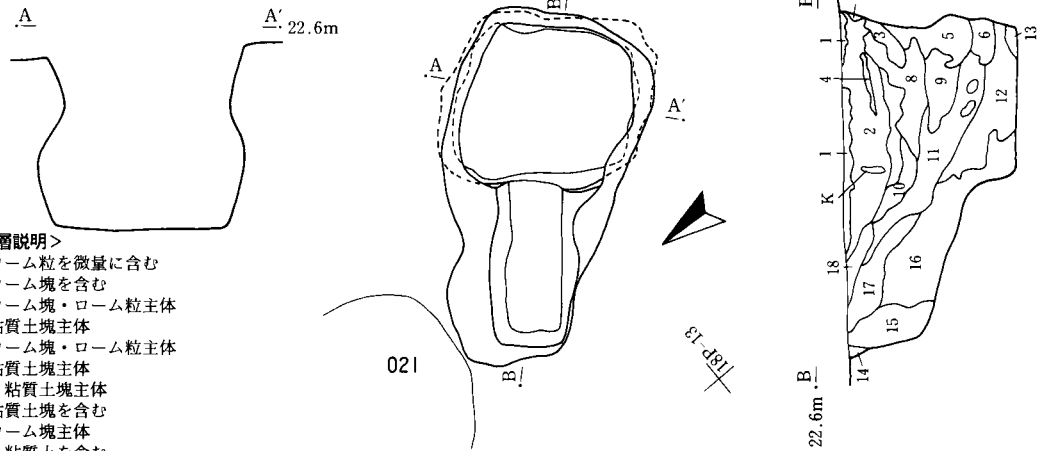
018



<018地下式墳土層説明>

- 1 褐色土：ローム塊主体
- 2 黒褐色土：混和物なし
- 3 褐色土：ローム粒・ローム塊主体
- 4 褐色土：ローム塊・ローム粒主体
- 5 暗褐色土：混和物なし
- 6 褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 7 暗褐色土：ローム塊を多量を含む
- 8 黒褐色土：ローム粒を多量を含む
- 9 暗褐色土：ローム粒・焼土粒を少量含む
- 10 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む
- 11 暗褐色土：ローム塊・ローム粒を多量を含む
- 12 暗褐色土：ローム塊・ローム粒を多量を含む
- 13 暗褐色土：ローム塊・ローム粒を多量を含む
- 14 暗褐色土：ローム粒・ローム塊を含む

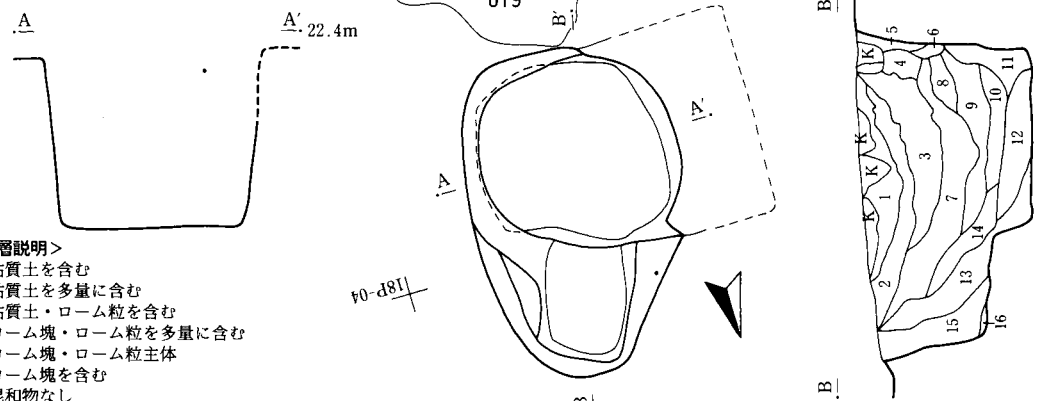
019



<019地下式墳土層説明>

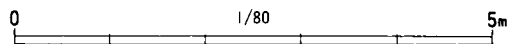
- 1 黒色土：ローム粒を微量を含む
- 2 黒褐色土：ローム塊を含む
- 3 褐色土：ローム塊・ローム粒主体
- 4 黒灰色土：粘質土塊主体
- 5 褐色土：ローム塊・ローム粒主体
- 6 黄灰色土：粘質土塊主体
- 7 暗灰褐色土：粘質土塊主体
- 8 黒灰色土：粘質土塊を含む
- 9 褐色土：ローム塊主体
- 10 暗灰褐色土：粘質土を含む
- 11 暗褐色土：ローム塊・ローム粒を含む
- 12 褐色土：ローム塊主体
- 13 黒褐色土：混和物なし
- 14 褐色土：ローム粒主体
- 15 暗灰褐色土：ローム塊を含む
- 16 黒褐色土：粘質土塊・ローム塊を含む
- 17 黒褐色土：粘質土塊・ローム塊を含む
- 18 黒褐色土：粘質土塊を含む

021



<021地下式墳土層説明>

- 1 黒褐色土：粘質土を含む
- 2 暗褐色土：粘質土を多量を含む
- 3 暗褐色土：粘質土・ローム粒を含む
- 4 暗褐色土：ローム塊・ローム粒を多量を含む
- 5 褐色土：ローム塊・ローム粒主体
- 6 黒褐色土：ローム塊を含む
- 7 黒色土：混和物なし
- 8 黒色土：ローム塊・ローム粒を多量を含む
- 9 褐色土：ローム塊主体
- 10 褐色土：ローム塊主体
- 11 灰褐色土：粘質土塊・ローム塊主体
- 12 褐色土：ローム塊主体
- 13 黒褐色土：粘質土塊・ローム塊を多量を含む
- 14 黒褐色土：混和物なし
- 15 灰褐色土：粘質土主体
- 16 暗褐色土：ローム塊主体



第96図 018・019・021地下式墳

018地下式墳（第94・96図，図版56）

18P-12グリッドに所在する。重複する遺構はない。土墳本体の地下室部分と出入口施設の竪坑とは主軸がずれている。地下室主軸はS-3°-W，竪坑主軸はS-22°-Wである。地下室底面の規模は奥行き1.35m～1.5m，幅1.7m，確認面から底面までの深さ1.9mである。天井部は遺存しておらず，土層断面図奥壁側に傾斜変換点が見え，底面からの高さ1.2mである。竪坑部分底面は奥行き1.25m，幅0.65m，確認面から底面までの深さ0.9m～1.25mで，地下室方向に向かって下がっている。遺物の検出は皆無である。

019地下式墳（第94・96図，図版56）

18P-03・13・14グリッドに所在する。021地下式墳が北側に隣接しているが，重複する遺構はない。遺構主軸方位はS-47°-Eである。土墳本体の地下室部分はやや歪んだ形態で，床面奥行きは南西壁側で1.2m，北東壁側で1.6m，幅は奥壁側で1.6m，竪坑側で1.8mである。確認面から底面までの深さは1.8mである。天井部は遺存しておらず，縦方向の土層断面に見える奥壁側の傾斜変換点の底面からの高さは1.0mである。土層断面図に見える12層がハード・ロームからなる層で，これが天井部崩落土層と考えられる。竪坑部分底面は奥行き1.6m，幅0.5m，確認面から底面までの深さは0.85m～1.3mで，地下室側に向かってかなりの傾斜で下がっている。遺物はまったく検出されていない。

021地下式墳（第94・96図，図版56）

17P-93・18P-03グリッドに所在する。019地下式墳が南側に隣接しているが重複はしていない。地下室側西壁上面は確認調査時において確認グリッドで当たっており，覆土上位をわずかに掘り過ぎてしまっている。遺構主軸方位はS-20°-Wである。地下室部分は床面の形状が円形に近いほどの不整形で，奥行きは西壁側で1.75m，東壁側で1.35m，幅は最大部2.0m，最小部1.5mである。確認面から底面までの深さは1.7mである。土層断面図に見える12層はハード・ロームの塊であり，019同様天井の崩落痕跡であると考えられる。竪坑部分は奥行き1.1m，幅0.8m，確認面から底面までの深さは1.0m～1.3mで，地下室部分方向に向かって緩やかに下がっている。検出遺物は皆無である。

030土墳（第94・97図，図版57）

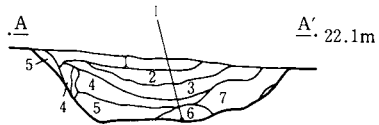
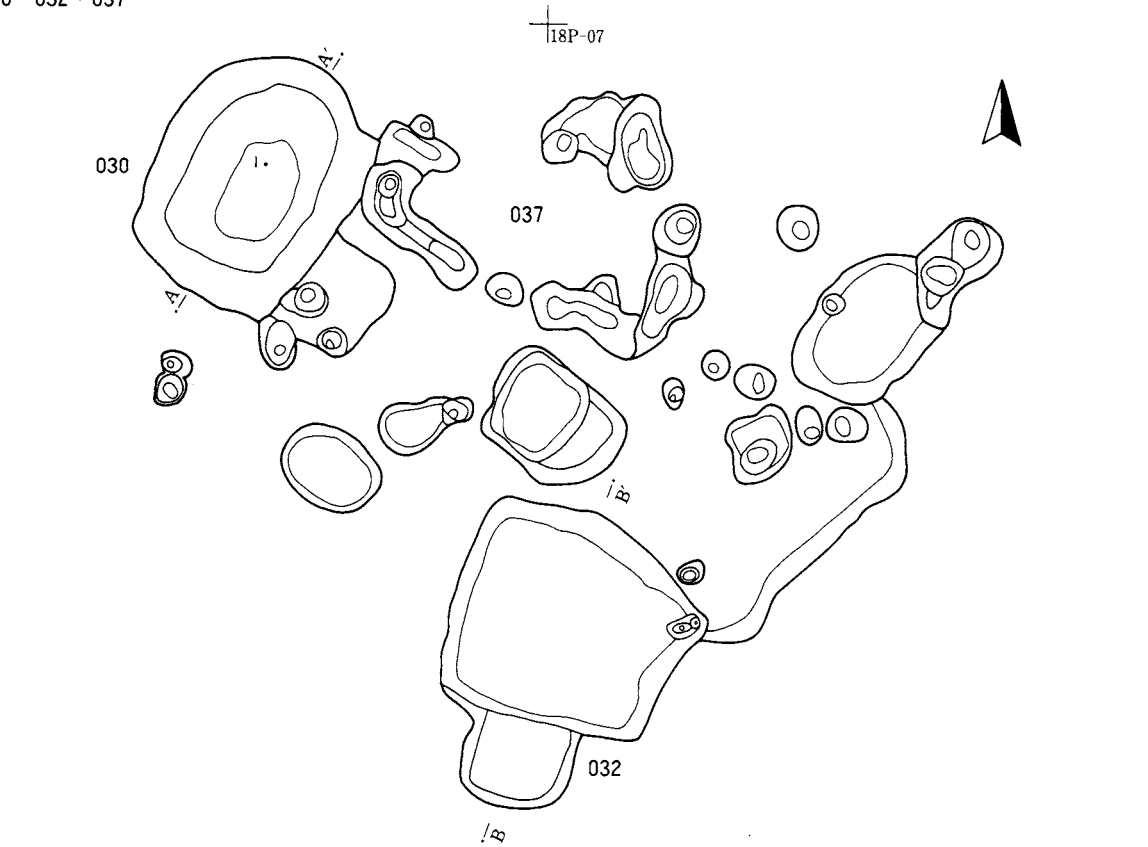
18P-06グリッドに所在する。037ピット群と一部重複する。平面形は長楕円形で，長軸方位はN-32°-Eである。遺構規模は長軸上端2.7m，下端1.2m，短軸上端2.1m，下端0.7m，確認面から遺構底面までの深さは0.6mである。遺構底面はほぼ平坦である。壁面中位から遺構底面にかけての地山は粘性が強く，ハード・ロームが灰白色粘質土層に変性している。遺構覆土層の大半にロームが混入されている。

遺構底面からは図示した須恵器片が1点検出されているが，共時性は疑わしい。

032土墳（第94・97図，図版57）

18P-16・17グリッドに所在する。遺構平面形は小型正方形部分と大型正方形部分の複合であるために，一見地下式墳のように思える。また，周囲に地下式墳が集中していることからすれば，地下式墳と判断することがごく当たり前であると考えられる。しかし，確認面から遺構底面までの深さが大型掘り込み部分でわずかに0.6m，小型掘り込み部分ではさらに浅く0.25mであることを考えると，地下式墳という答えに

030・032・037

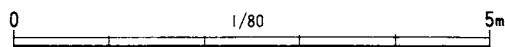
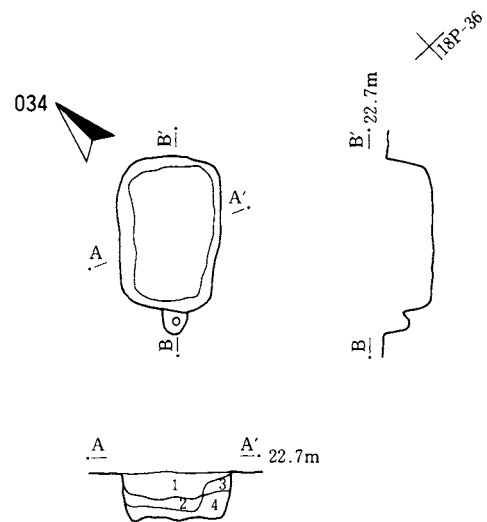


<030土層土層説明>

- 1 黒色土：混和物なし
- 2 黒褐色土：ローム粒を含む
- 3 暗褐色土：ローム粒を少量含む
- 4 黒褐色土：粘質土塊を含む
- 5 黒色土：ローム塊を含む
- 6 暗灰色土：粘質土を多量に含む
- 7 暗灰褐色土：粘質。

<034土層土層説明>

- 1 暗褐色土：ローム塊・ローム粒を含む
- 2 暗褐色土：ローム塊を少量，ローム粒を多量に含む
- 3 暗褐色土：ローム塊・ローム粒主体
- 4 暗褐色土：ローム塊・ローム粒を多量に含む



第97図 030・032・034土層，037ピット群

は到達しない。従って、2基の方形土壌の重複と考えるのが妥当であろうと思われる。大型土壌部分是不整形で、東西2.1m～2.5m、南北1.5m～2.2m、確認面から底面までの掘り込みの深さは0.6mである。小型土壌部分は南北1.0m、東西1.1m、確認面から遺構底面までの深さは0.2mである。検出遺物は皆無である。

037ピット群（第94・97図、図版57）

030土壌東側に所在し、一部030土壌と重複しているが、前後関係は不明である。柱穴様掘り込みが長方形に並ぶ遺構である。配列状況から見ると掘立柱建物と考えられるが、きれいな対をなす柱穴がないため、ここではピット群として取り扱う。柱穴様掘り込みの外側で計測すると、規模は長軸3.75m、短軸2.7mである。柱穴様掘り込み個々の掘形規模は径0.4m～1.0m、深さ0.15m～0.6mとかなりまちまちであるが、深さについては0.4m程度のものが最も多い。長方形遺構であることを前提に主軸方位を出すと、短軸方向で、N-30° -Eとなる。遺物はまったく検出されていない。

034土壌（第94・97図）

18P-25・35グリッドに所在する。東側に020道路状遺構が走っている。遺構南西壁に小さな柱穴が重複しているが、同時存在なのか前後関係があるのかは不明である。平面形は長方形で、長軸1.6m、短軸1.0m、確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.5mである。堆積覆土中にはローム粒・ローム塊が多く含まれ、人為堆積であると考えられる。検出遺物は皆無である。

022土壌（第94・98図）

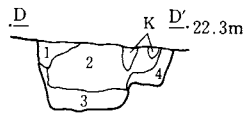
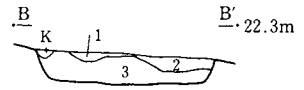
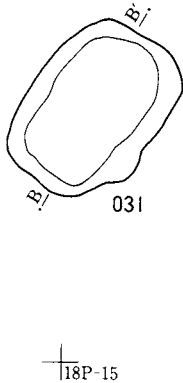
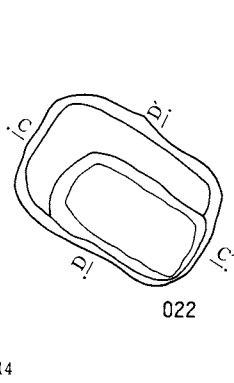
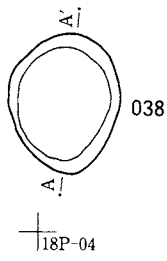
18P-04グリッドに所在する。平面形は長方形で、長軸方位はN-57° -Wである。南西壁・南東壁の2辺が揃っているために遺構底面に段を有する長方形土壌のように見える。しかし、土層断面図を見る限りにおいては、肝心の部分に攪乱が入っているために断定はできないが、大きな土壌が先にあり、これを埋め戻した後に小さな土壌を作っている可能性が高いと考えられる。従って、便宜的に新しいと考えられる小さなものをA、先に築かれたと考えられる大きなものをBとして説明する。Aは長軸1.65m、短軸0.9m、確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.7mである。Bは長軸2.1m、短軸1.5m、確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.45mである。遺物は検出されていない。

031土壌（第94・98図）

022土壌の東側に隣接しており、遺構主軸方位は022土壌の主軸方位とほぼ直角をなす。重複する遺構はない。平面形は長方形で、遺構長軸方位はN-34° -Eである。遺構規模は長軸1.9m、短軸1.35m、確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.3mである。覆土の大部分にローム粒・ローム塊が混入されている。遺物は検出されていない。

038土壌（第94・98図）

021地下式壙北東側に隣接している。平面形楕円形で、遺構規模は長軸1.45m、短軸1.2m、確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.25mである。遺物は検出されていない。



<022土壌土層説明>

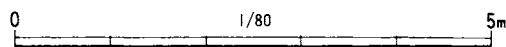
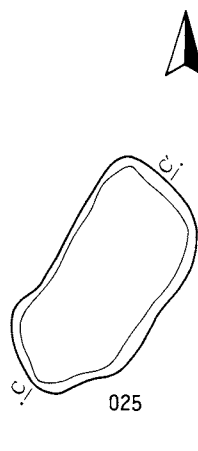
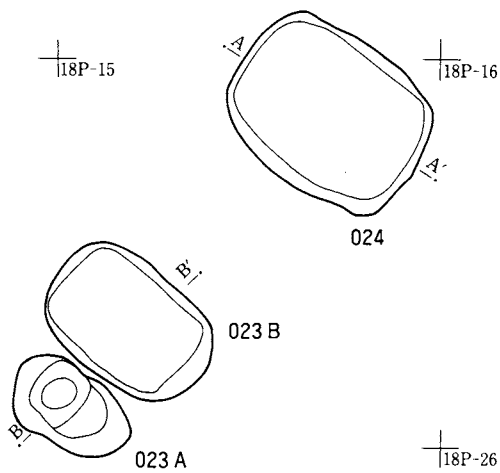
- 1 黒色土：ローム粒を微量に含む
- 2 暗褐色土：ローム塊・ローム粒を多量に含む
- 3 暗褐色土：ローム塊・ローム粒を多量に含む
- 4 暗褐色土：ローム塊を含む

<031土壌土層説明>

- 1 黒色土：ローム粒を微量に含む
- 2 黒色土：ローム粒を含む
- 3 黒色土：ローム粒・ローム塊を多量に含む

<038土壌土層説明>

- 1 黒褐色土：ローム粒を含む



第98図 022・031・038・023A・023B・024・025土壌

023A土壙 (第94・98図, 図版57)

18P-14・15グリッドに所在する。023B土壙が北東に隣接しているが重複はない。平面形は楕円形で、長径1.3m, 短径0.8mである。遺構底面は2段になっており、確認面からの掘り込みの深さは、浅い方で0.3m, 深い方で0.45mである。覆土は全体にローム粒・ローム塊を含んでいる。遺物は検出されていない。

023B土壙 (第94・98図, 図版57)

023A土壙の北東側に隣接する土壙であるが重複はない。平面形は長方形で、長軸方向はN-50° -Wである。遺構規模は長軸1.8m, 短軸1.2m, 確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.5mである。遺物は検出されていない。

024土壙 (第94・98図)

023B土壙と030土壙に挟まれているが重複はない。平面長方形で、長軸方位はN-55° -Wである。遺構規模は長軸2.1m, 短軸1.6m, 確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.4mである。遺物は検出されていない。

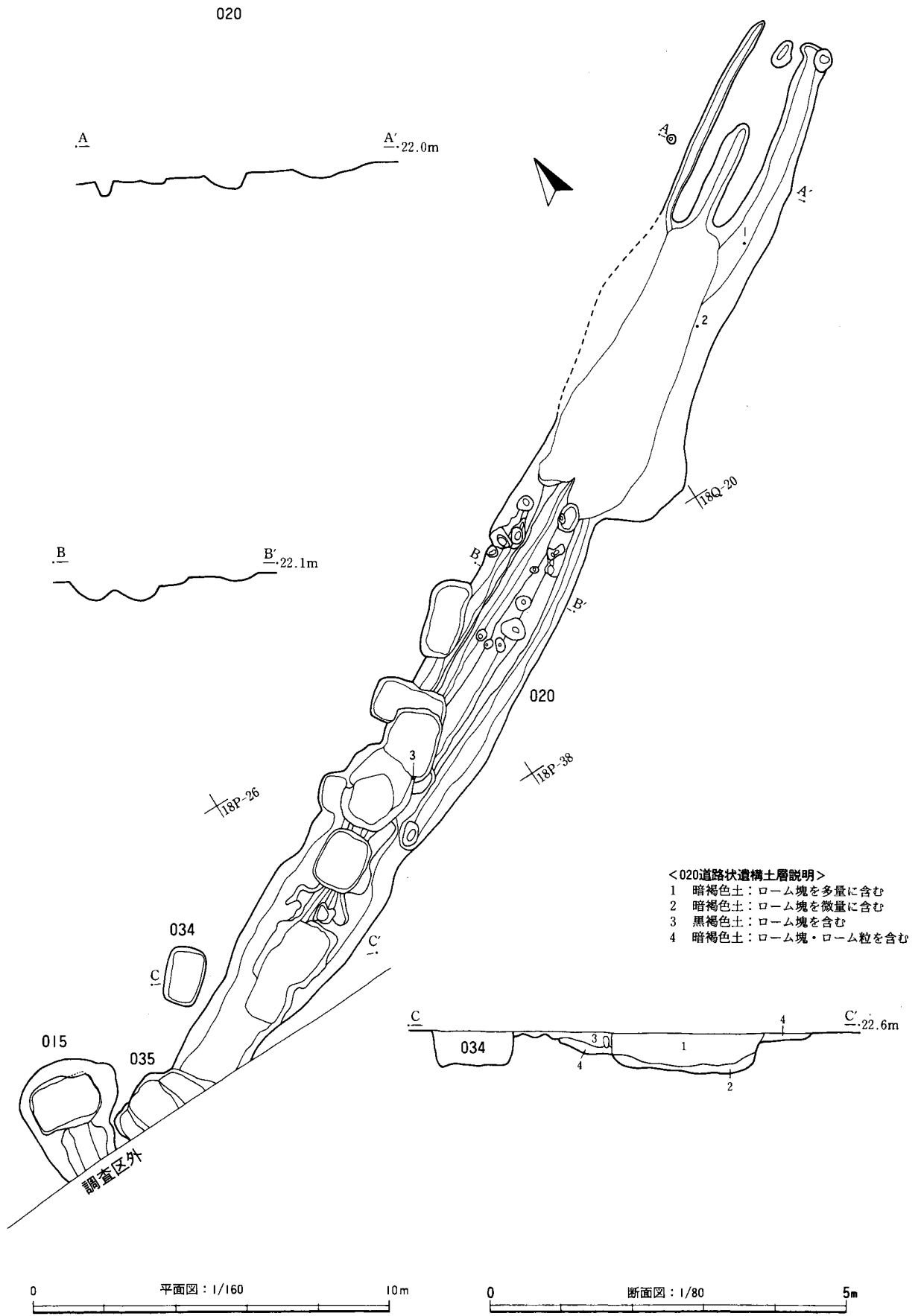
025土壙 (第94・98図)

024土壙と032土壙に挟まれているが重複はない。平面形はやや崩れた長方形である。南西部の平面形の崩れ方から考えると、南西部には小型長方形の別の土壙が絡んでいる可能性があるが、記録からは判別不能である。長軸方位はN-34° -Eである。遺構規模は長軸4.5m, 短軸1.3m, 確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.4mである。遺物は検出されていない。

020道路状遺構 (第94・99図, 図版58)

18Pグリッドに集中する中世遺構群の南東端を区切るように、N-62° -Eに走行方位をとる遺構である。検出遺物は図示したように時期がばらばらで、出土遺物による時期決定は不能である。遺構走行方位は古代の道路状遺構とした029道路状遺構に限りなく並行する方位である。また、周辺の中世遺構群において本遺構から方位規制を受けている可能性があるのは017・018地下式壙のみであり、さらに遺構番号は付していないが、本遺構を切る形で中世と考えられる長方形土壙が7基以上確認できる。以上の諸点を考慮すると、本遺構は中世遺構群の造営段階においては道路としての機能を失っていたことになり、古代の道路である可能性も完全には否定できない。しかし、最初にも記したように、この遺構が中世遺構群の南東端を区切っていることも事実であり、中世遺構群との関連という可能性を残してここにおいて説明する。

遺構南西端は調査区外にかかっており、調査範囲において確認できる総延長距離は38mである。遺構北東寄りの部分で一部遺構形態が乱れ、さらに北東端に至っては3条に並行して分岐する。遺構幅は南西端付近で1.85m, 中央部で2.8m, 北東端の3条の両外側で3.0mである。確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは南西端で0.2m, 中央部で0.75m, 北東端で0.1mである。本遺構と重複する無番号の各長方形土壙が本遺構を切って作られていることは土層断面観察によって確認できているが、その北東側で検出されている柱穴様掘り込みについては、本遺構との前後関係は把握できていない。本遺構の覆土は大方においてローム粒・ローム塊を含んでおり、人為堆積と考えられる。



第99図 020道路状遺構

013溝状遺構（第100図）

18P大グリッド西端に位置し、その東側に群集する中世遺構群の西側を区切るような溝である。012竪穴住居を破壊してはいるが、中世の遺構群との重複関係はなく、中世遺構群と共存し区画的溝としての機能を有していたと解釈するのが妥当かと考えられる。調査区域内においてはほぼ中央部分で屈曲しており、屈曲部分以南の走行方位はN-35°-W、屈曲部分以北の走行方位はN-33°-Eである。屈曲部分以南の走行方位に規制を受ける中世土壌群はほとんどない。逆に、屈曲部分以北の走行方位の規制を受けると考えられる土壌群は多い。ただし、その場合においても長方形土壌のみで、地下式墳群はまったく方位規制を受けているとは考えられない。

遺構規模は屈曲部分以北が確認延長距離14m、幅0.8m、確認面から遺構底面までの深さ0.35m、屈曲部分以南は確認延長距離16.5m、幅0.8m、深さ0.2mである。

検出遺物はない。

5 溝状遺構

ここでは029・020道路状遺構、013溝状遺構などと異なり、時期の想定が困難な溝状遺構（大半は近世以降と考えられる）について説明する。

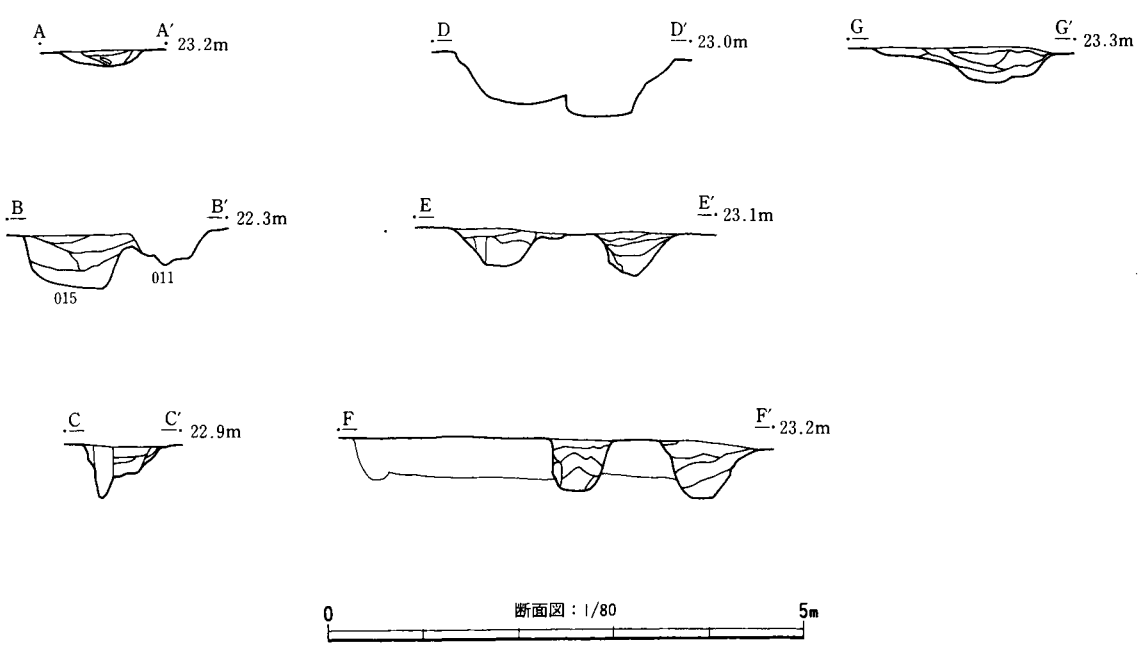
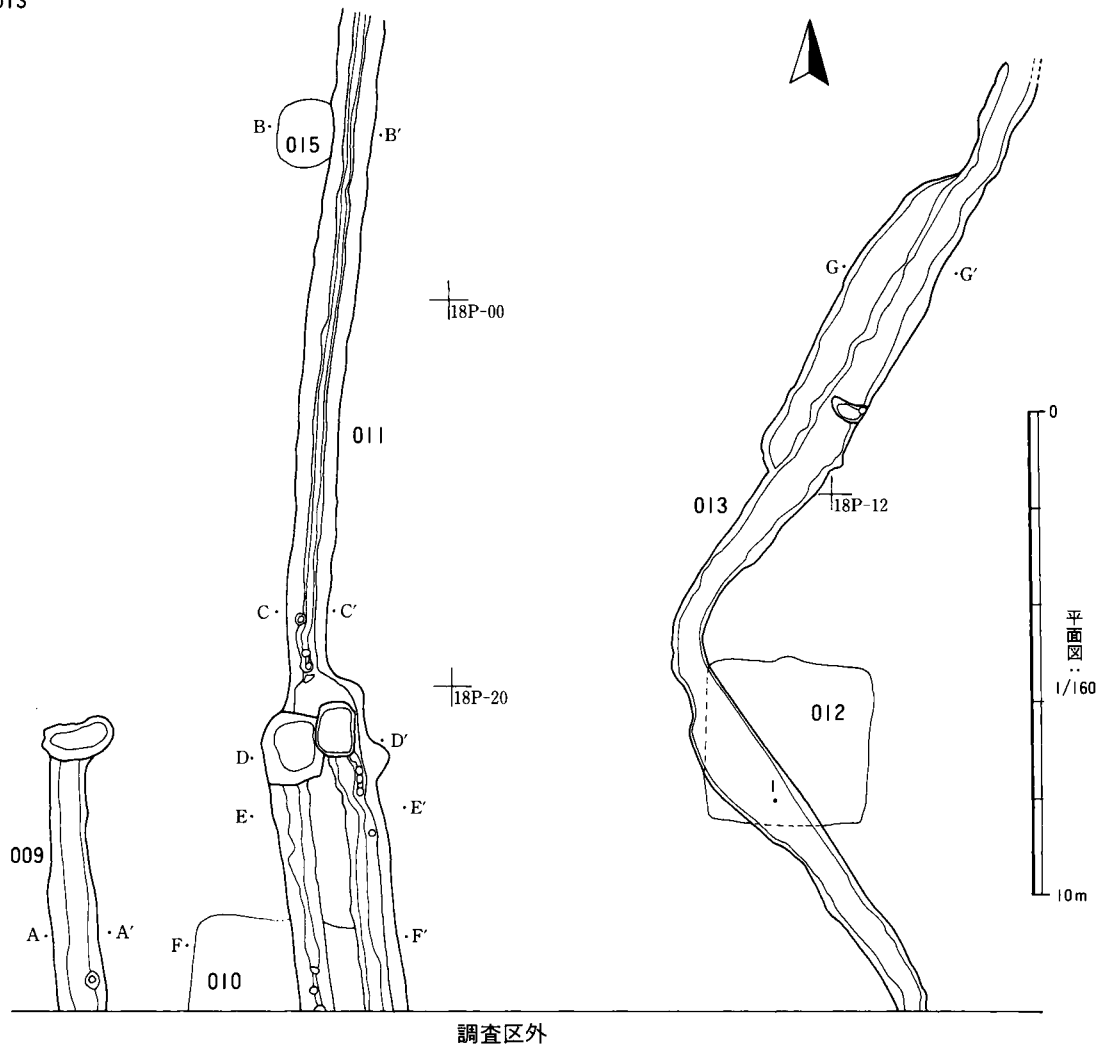
009溝状遺構（第100図）

調査区東寄りの18N大グリッドに所在する。遺構南端で調査区外に延びており、その先は調査していない。北端において空豆のような平面形態の土壌と重複しているが、同時存在の遺構であるのか前後関係にあるのかは不明である。溝の走行方位はN-3°-Wで、周辺は緩やかに傾斜しており、本遺構は等高線にほぼ直交して走っている。確認されている部分の溝延長距離は5.2mで、幅は0.8m～1.0m、確認面から遺構底面までの深さは北側が浅く0.05m、南端で0.2mである。覆土各層にはローム粒・ローム塊が含まれている。遺構北端の土壌状遺構は長軸が溝走行方位とほぼ直交する。長軸1.5m、短軸0.75m、確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.3mである。遺物の検出は皆無である。

011溝状遺構（第100図、図版53）

18N大グリッド東端に所在する。ほぼ南北に走行しており、南端はさらに調査区外へと延びている。検出部分南1/3の地点以南までは2条であった遺構が、この地点で長方形土壌と重複し、さらに北では1本となって北上する。この北側は平成10年度において企業庁分として確認調査を行っているが、途中で東に屈曲し、別の溝と合流するようである。南端においては010竪穴住居を破壊し、北端付近においては015土壌の一部を破壊している。

北側から遺構規模を記載すると、D-D'以北の1条の部分は確認延長12m、幅0.8m、確認面から遺構底面までの深さ0.3m、D-D'以南の2条になっている部分は西側が確認延長距離4.8m、幅0.65m、確認面から遺構底面までの深さ0.4m、東側は確認延長距離5.3m、幅0.85m、確認面から遺構底面までの深さ0.35mである。検出遺物はない。



第100図 009・011・013溝状遺構

033溝状遺構（第101図，図版58）

調査区東端の鳴神山遺跡Ⅲに最も近い部分に所在する。北側で西から走る小さな溝と重複している。遺構は南半分はN-15° -Eを主たる走行方位とするが、北に行くに従ってやや東寄りに弧を描いている。北半分はほぼ南北方向に走行している。遺構規模は確認延長距離15m，幅1.0m平均，確認面から遺構底面までの深さは0.3mから0.8mで，南に行くほど深くなる。検出遺物はない。

028溝状遺構（第101図）

調査区西端に所在する。走行方位はN-60° -Eである。全測図では南に20mほど離れた029道路状遺構（M004）とは一見平行に走っているように見えるが，029道路状遺構よりも方位は5°ほど北に振れている。遺構上端幅は北東から南西に行くに従って広がっている。北東端で1.0m，南西端で2.6m，確認面から遺構底面までの深さは北西端で0.2m，南西端で0.45mである。検出遺物はない。

6 その他の遺構

039方形周溝（第102図，図版58）

本遺跡において唯一の方形周溝遺構である。時期を決定できる明瞭な遺物が検出されておらず，弥生時代の方形周溝墓であるのか，7世紀以降の方形周溝遺構であるのか判別ができない。調査区ほぼ中央の17K-97・18K-06・07・08・18グリッドに所在する。N-37° -Wに主軸方位をとる。北西・北東・南東の三方向の周溝は明瞭に検出できた。しかし，南西周溝は確認段階では辛うじて認識できたものの，精査を進めて行くに従って立ち上がり不明瞭になってしまい，図化できる状況ではなくなってしまった。遺構規模は周溝外側で北西-南東：6.6m，北東-南西：6.9mである。周溝は幅0.4m～1.0m，平均的な幅は0.6m，確認面から底面までの深さは0.05m～0.2mでかなり浅い掘込みみである。周溝内側東隅には南東壁に並行に添うように長方形土壌が検出されているが，覆土はまったく締まりがなく，ローム塊が主体になっており後世のものである可能性が高い。西隅に走っている小さな溝についても，本遺構とは直接関係のない遺構であると判断する。土器小片が検出されているのみである。

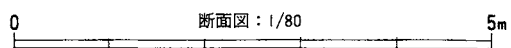
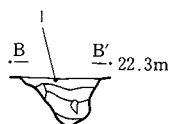
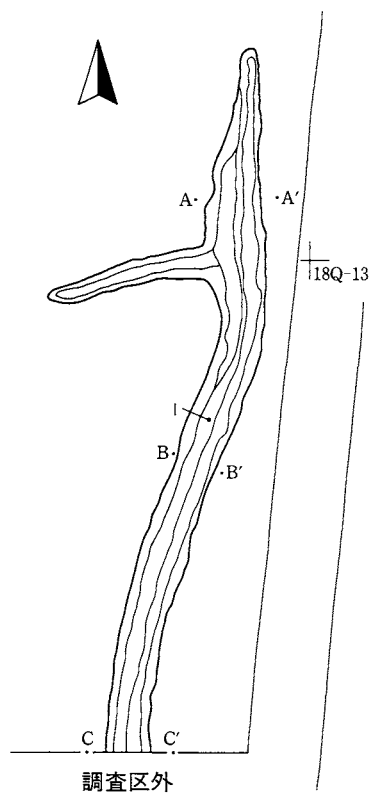
008陥穴（第102図，図版59）

調査区東寄りの18N-26・36グリッドに所在する。重複する遺構はない。平面形は細長い楕円形で，上端は長軸2.8m，短軸1.25m，下端は長軸2.4m，短軸0.15m，確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは1.7mである。遺構底面では柱穴様掘り込みなどは検出されなかった。検出遺物はない

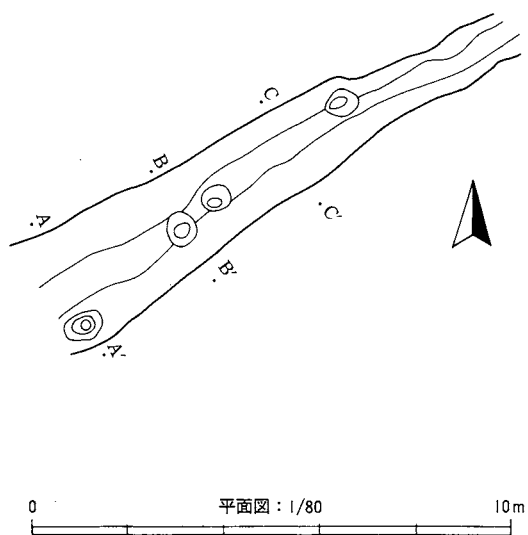
014土壇（第102図，図版59）

17N-86・87グリッドに所在する。重複する遺構，隣接する遺構はない。平面形は円形で，底面が二段になっており，一見ロクロ・ピットのような形態であるが，上屋構造もなく，単独で検出されていることを考えると，そのような機能を果たしていた遺構と判断することは不可能であると思われる。遺構規模は径0.9m～1.05m，確認面からの掘り込みの深さは一断面で0.3mである。遺構底面にある二段目の掘り込みは円形で径0.3m，深さ0.3mである。覆土全層にローム塊・ローム粒を含む。検出遺物はない。

033



028



17G-89



第101図 033・028溝状遺構

015土壙（第102図，図版59）

調査区東寄りの17N-99グリッドに所在する。011溝と一部重複し，同溝によって一部破壊されている。平面形は楕円形で長径1.45m，短径1.15m，確認面から遺構底面までの掘込みの深さは0.55mである。検出遺物はない。

027土壙（第102図）

調査区西端寄りの17H-82グリッドに所在する。重複遺構，隣接遺構は存在しない。平面形は楕円形で，長径1.3m，短径1.1m，確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.45mである。遺構底面は平坦ではなく，椀型である。覆土最下層の壁際には焼土・炭化物の混入が確認されている。検出遺物はない。

042土壙（第102図）

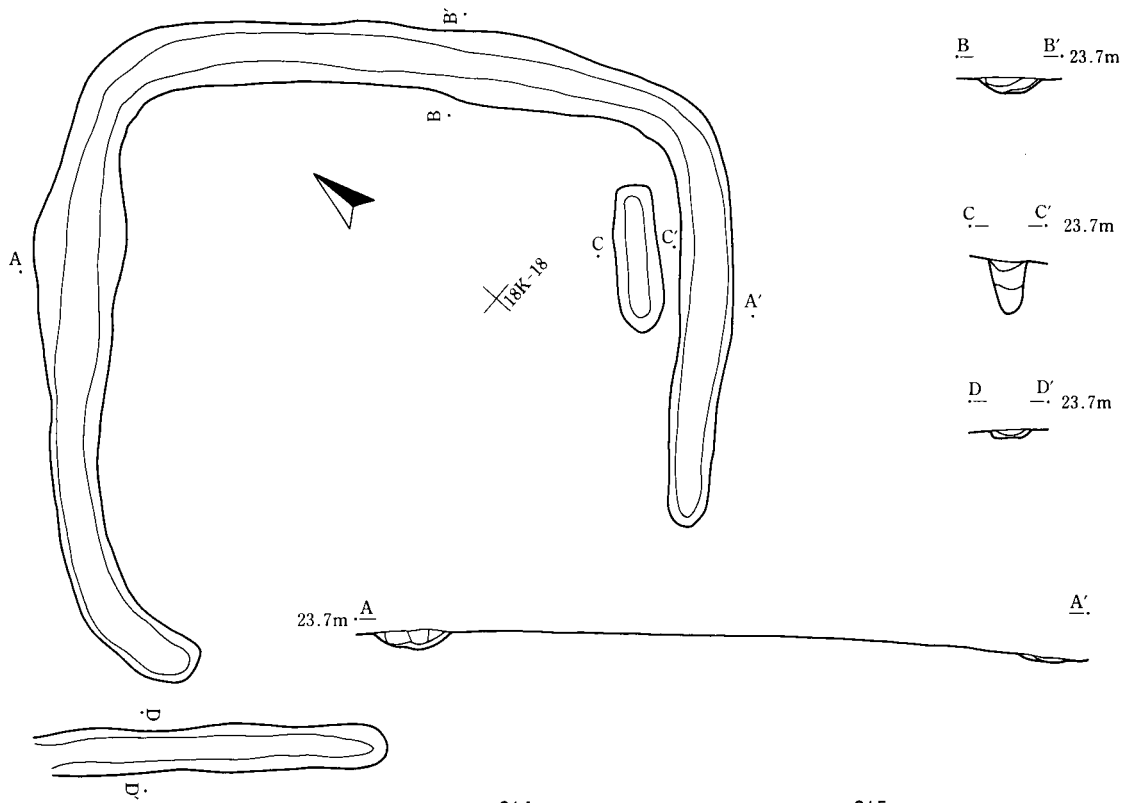
調査区西寄りの18H-29グリッドに所在する。重複遺構・隣接遺構は存在しない。平面形は円形で，径，1.3m，確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.1mの浅い遺構である。遺構底面南端には炭化物の集中が見られる。検出遺物はない。

036土壙群（第102図）

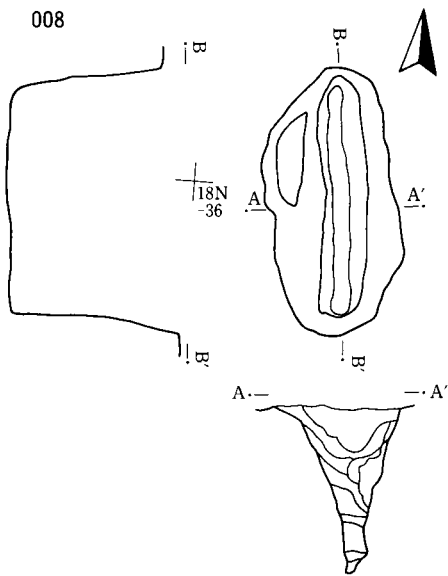
調査区東端の18Q-30・31グリッドに所在する。3基の小型土壙の集中である。図示どおりA・B・Cと仮称して説明する。Aは円形土壙と小さな柱穴様掘り込みとの重複する遺構である。円形土壙部は径0.8m，確認面から遺構底面までの掘込みの深さは0.1mである。柱穴様掘り込みは径0.4m～0.5m，確認面から底面までの掘り込みの深さ0.5mである。Bは平面形が細長い楕円形で，長径0.8m，短径0.3m，確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.3mである。Cは平面形が楕円形で，長径1.0m，短径0.75m，確認面から遺構底面までの掘り込みの深さは0.2mである。

遺物が検出されたのは唯一Aのみで，図示したように須恵器甕の破片が2点出土している。

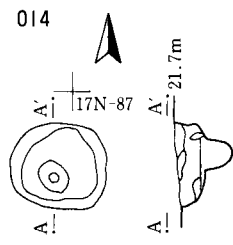
039



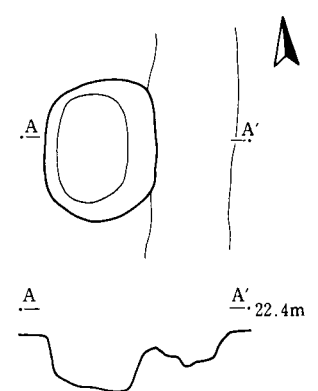
008



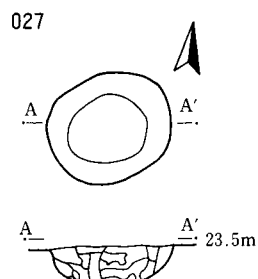
014



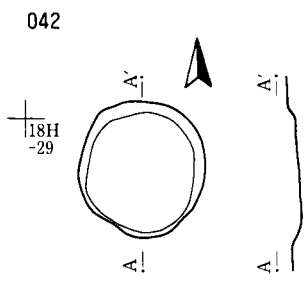
015



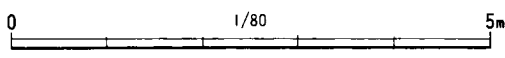
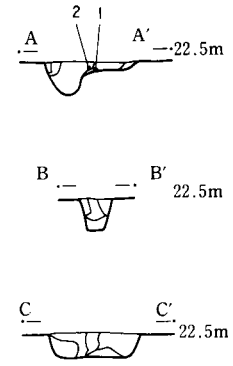
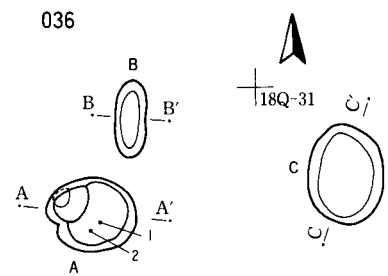
027



042



036



第102图 039方形周溝, 008・014・015・027・042土壤, 036土壤群

第2節 遺物

1 弥生時代遺構出土遺物

041 壺穴住居出土遺物 (第103図, 図版61)

1 は壺型土器口縁部から頸部上半にかけての破片資料である。複合口縁で、口唇部から口縁部外側面にかけて附加条の細縄文が巡らされ、外面頸部は縦区画中に綾杉状の沈線が充填されている。口縁部の一部に径2mmの孔が焼成前に穿たれている。橙褐色で、胎土中に石英微粒・長石微粒をやや多めに含み、雲母末を微量含む。焼成は良好である。2 は壺型土器の胴部上位から頸部下端にかけての破片資料である。胴部外面には附加条の細縄文が巡らされている。外面黒褐色、内面暗褐色、器肉赤橙色で、胎土中に雲母末・酸化鉄粒をやや多めに含み、焼成は良好である。3 は壺型土器胴部上端から頸部下端にかけての小片で、外面には附加条の結節縄文が巡らされている。色調は黒褐色で、長石粒を多量に含み、焼成は良好である。4 は鉄製品である。捻りが施されている。

2 奈良・平安時代遺構出土遺物

007 壺穴住居出土遺物 (第103図, 図版60)

1・2 は新治産須恵器杯である。1 は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。外面口縁部上半には自然釉が見え、やや黒っぽくなっており、重ね焼きの結果と考えられる。全体の色調は灰色で、白雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。2 はやはり1と同様の重ね焼き痕跡が見える。外面口縁部下端は手持ちヘラケズリ、底部は回転ヘラ切り後無調整である。全体の色調は灰色で、白雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

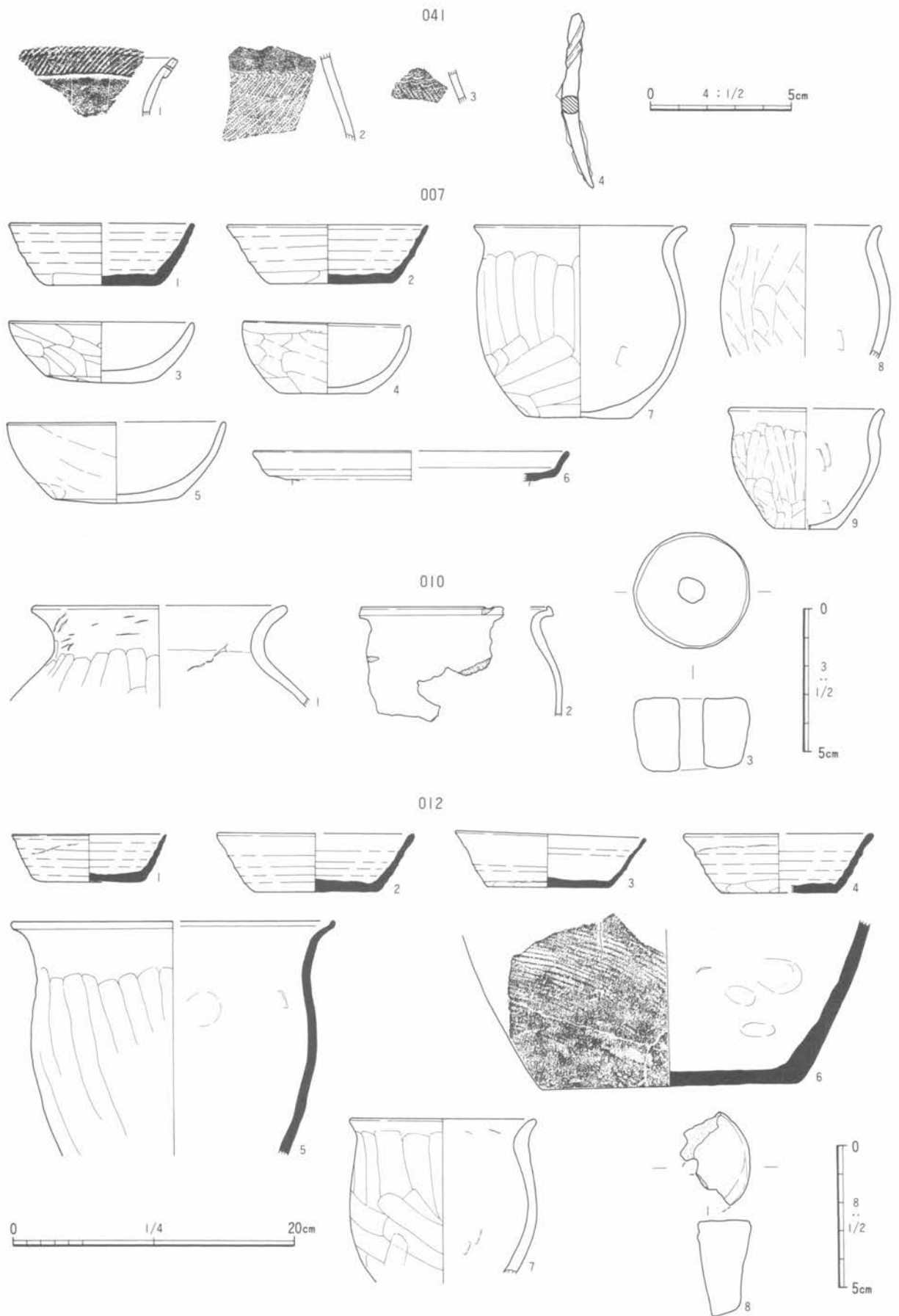
3～5 は土師器杯である。調整技法は共通で、外面はほぼ全面が手持ちヘラケズリ、内面はナデ調整である。3 は淡褐色で、石英粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。4 は全面黒色であるが、いわゆる黒色処理とは異なる。器肉は褐色である。石英粒・長石粒の他に微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。5 は前二者より大型で、色調は淡褐色である。石英粒・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。

6 は新治産須恵器高台付皿である。外面底部高台部分は完全に剝離している。遺存部位はすべてロクロ調整されている。色調は暗灰色で、石英粒・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。

7～9 は土師器小型甕である。7 は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面上半縦方向、下半斜方向のヘラケズリ、内面は底部まで横方向のヘラナデ、外面底部はヘラケズリ調整である。褐色で、石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。8 は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。褐色で、石英粒・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。9 は内外面黒色で、器肉は淡褐色である。口縁部は内外面ヨコナデ、それ以下は外面ヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。金雲母粒・末・長石粒・酸化鉄粒を含み、海綿骨針を少量含む。焼成は良好である。

010 壺穴住居出土遺物 (第103図)

1・2 は土師器甕である。1 は素口縁で、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、



第103图 041・007・010・012竖穴住居出土遺物

内面横方向のヘラナデ調整で、色調は赤褐色である。器面の状況から見て、二次的な被熱が考えられる。多量の石英粒・長石粒の他に雲母粒を含み、焼成は良好である。2は常総型甕と考えられる。外面暗褐色、内面黒褐色で、口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部はヘラナデ調整である。多量の雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

3は土製紡錘車である。

012 竪穴住居出土遺物（第103図，図版60）

1～4は須恵器杯である。1は産地不確定である。外面底部のみ手持ちヘラケズリ調整で、色調は暗灰色、長石粒をわずかに含み、焼成は良好である。2～4は新治産で、外面底部回転ヘラ切り後口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。2は黄褐色で、白雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。3は灰褐色で、白雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。4は灰色で、白雲母粒の他に多量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

5・6は須恵器甕である。5は一見土師器甕のようであるが、器表面がいわゆる「クスベ焼き」風で、内面に当具痕の見えることと、口縁部がロクロ仕上げで端正なことから須恵器と断定した。胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面当具痕をヘラでナデ消している。黒褐色で、石英粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。6は新治産須恵器甕である。外面遺存部上半は横方向の平行タタキ、下半は横方向のヘラケズリ、内面は当具痕ナデ消しである。

7は土師器小型甕である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面上半縦方向のヘラケズリ、下半斜方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。外面淡褐色、内面暗褐色で、少量の石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

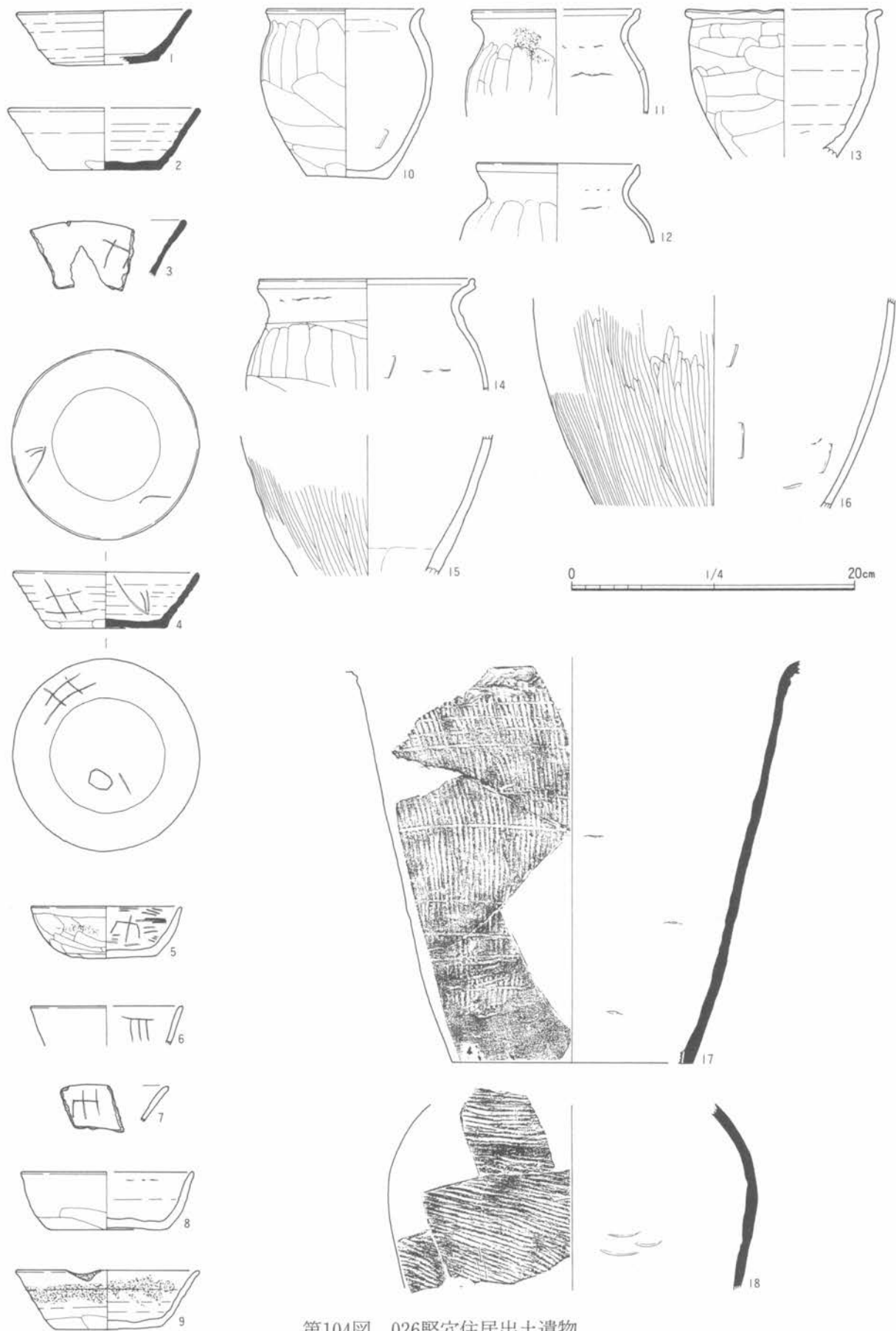
8は土製紡錘車である。

026 竪穴住居出土遺物（第104図，図版60）

1～4は須恵器杯である。1は産地不確定、他の3個体は新治産である。1は底部外面のみ手持ちヘラケズリ調整、暗灰色で、外面口縁部上位には重ね焼き痕が見える。石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。2は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。灰白色で、白雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。3は口縁部内面に線刻が見える。暗褐色で、白雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。4は口縁部外面に「卍」、底部外面に「○」と「-」、口縁部内面に「ㄷ」と「、」状の線刻が見える。外面底部回転ヘラ切り後、口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。灰色から暗灰色で、白雲母粒・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。

5は土師器杯である。口縁部外面に一部油煙煤の付着、内面に「巾」字状の線刻が見える。外面口縁部上位横ナデ、上位以下底部まで手持ちヘラケズリ調整、内面は全面ヘラミガキ調整である。淡褐色で、少量の石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

6～9はロクロ土師器杯である。6は口縁部内面に「卍」字状の線刻が記されている。淡褐色で、雲母末・石英粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。6は口縁部内面に「巾」字状の線刻が見える。淡褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。8は外面底部静止糸切り後外面底部回転ヘラケズリ、底部周縁手持ちヘラケズリ調整である。淡褐色で、石英粒・長石粒の他に多量



第104图 026竖穴住居出土遺物

の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。9は内外面口縁部中位に油煙煤の付着が見える。外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。色調は赤褐色から暗褐色で、多量の酸化鉄粒、少量の石英粒・長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。

10～16は土師器甕である。10～13は小型甕である。10～12はほぼ共通の調整技法と考えられ、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面上半縦方向、下半横方向のヘラケズリで、内面は底部まで横方向のヘラナデ、底部外面はヘラケズリ調整である。10は橙褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は極めて良好である。内面は胴部以下全面に薄く黒色の付着物があり、底部は腐蝕したように脆くなっている。11は外面頸部の一部に油煙煤の付着が見える。外面赤褐色、内面と器肉は淡褐色で、雲母末・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を少量含み、器肉は極めて薄く、焼成は良好である。12は赤褐色で、内面全体に使用痕跡としての煤の付着が見える。11同様薄い器肉で、微量の雲母末・長石粒・海綿骨針、少量の酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良である。13は特殊な器形で、口縁部は水平方向に短く突出する。口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面横方向のヘラケズリ調整である。胴部内面はナデ調整であるが、粘土紐の凹凸がかなり明瞭に出ている。色調は内面全面黒色、外面及び器肉は淡褐色である。少量の石英粒・長石粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は極めて良好である。14は中型の甕で、調整技法は10などと同様、器肉は11・12同様にかなり薄いものである。色調は淡褐色から橙褐色で、多量の酸化鉄粒、少量の石英粒・長石粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。15・16は常総型甕である。外面縦方向のヘラミガキ、内面横方向のヘラナデ調整で、15の内面下端部は横方向のヘラケズリ調整である。外面黒褐色、内面褐色で、多量の雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。16は暗褐色で、多量の雲母粒・石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

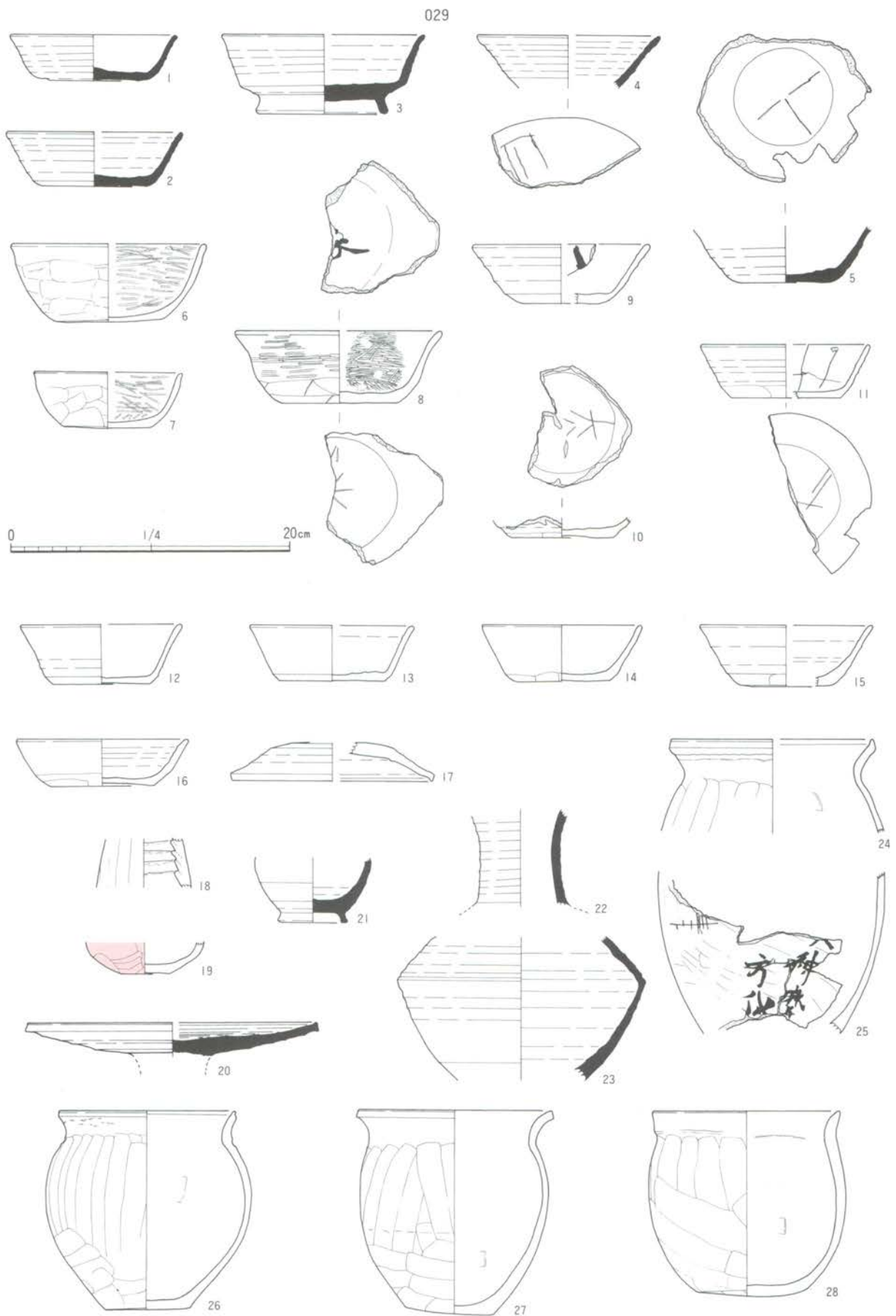
17は新治産須恵器甕である。底部はほとんど遺存していないが、五孔式であることは確実である。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向の平行タタキ、下端のみ横方向のヘラケズリ、内面は当具痕をナデ消している。色調は褐色で、多量の白雲母粒・長石粒を含み、焼成は酸化焰であるが良好である。

18は新治産須恵器甕である。胴部のみの遺存で、外面横方向の平行タタキ、内面は当具痕をナデ消している。灰色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好である。

029道路状遺構出土遺物（第105図，図版60）

1～5は須恵器である。1・2は常陸産（大淵窯産？）の杯で酷似する資料である。口縁部下端はかなり奥の部分まで指を入れて引き出しを行っており、底部外面はわずかに突出する形態である。底部外面のみ回転ヘラケズリ調整で、色調は灰白色、微量の長石粒・海綿骨針・還元鉄粒を含み、焼成は良好である。口縁部上端に重ね焼き痕跡が見え、その部分のみ暗灰色になっている。3は新治産の高台付杯である。底部外面回転ヘラ切り後外面高台内側部分のみ回転ヘラケズリ調整である。色調は暗青灰色で、多量の石英粒・長石粒、少量の白雲母粒、微量の還元鉄粒を含み、焼成は良好である。4は新治産の杯である。口縁部内面に「Ⅲ」字状の線刻が見える。遺存部位はすべてロクロ調整のみである。暗灰色で、多量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。5は新治産の杯で、底部内面に「T」字状の線刻が見える。外面底部のみ手持ちヘラケズリ調整である。灰色で、多量の石英粒・長石粒、少量の白雲母粒を含み、焼成は良好である。

6・7は土師器杯である。調整技法は共通で、外面口縁部上位ヨコナデ、上位から底部全面にかけて手



第105図 029道路状遺構出土遺物

持ちヘラケズリ、内面は全面横ナデの後にヘラミガキ調整であるが、6のヘラミガキはやや粗いものである。色調は橙褐色から褐色で、多量の酸化鉄粒、微量の石英粒を含み、焼成は良好である。また、胎土中にはいわゆる「だま」が多く見える。

8～16はロクロ土師器杯である。8は底部内面に「□(丈カ)」の墨書、底部外面に記号様の線刻が見える。外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整で、内面全面は丁寧なヘラミガキ、外面口縁部はやや粗いヘラミガキ調整である。褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。9は口縁部内面に墨書痕があるが小片のため判読不能である。外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整で、色調は暗褐色である。少量の長石粒、微量の雲母末・海綿骨針を含み、焼成はやや不良である。10は底部内面に「大八」の線刻が見える。外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリ調整を行っている。褐色で、石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。11は口縁部内面に線刻、底部内面にヘラ書きが見えるが両方とも記号と考えられる。外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整で、色調は暗褐色、少量の雲母末・石英粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。12・13は酷似する資料である。外面底部静止糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整である。色調は淡褐色で、石英粒・酸化鉄粒を少量含み、全体に混和物の少ないさらさらの胎土である。14は外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリ調整である。淡橙褐色で、石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成はやや不良である。15は外面口縁部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。淡褐色で、微量の雲母末・石英粒・長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。16は外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整である。色調は橙褐色から褐色で、少量の雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。外面口縁部上端に黒斑の部分がある。

17はロクロ土師器杯蓋である。上端のつまみは欠失している。外面上半のみ回転ヘラケズリ調整である。色調は淡褐色から黒褐色で、少量の石英粒、微量の海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

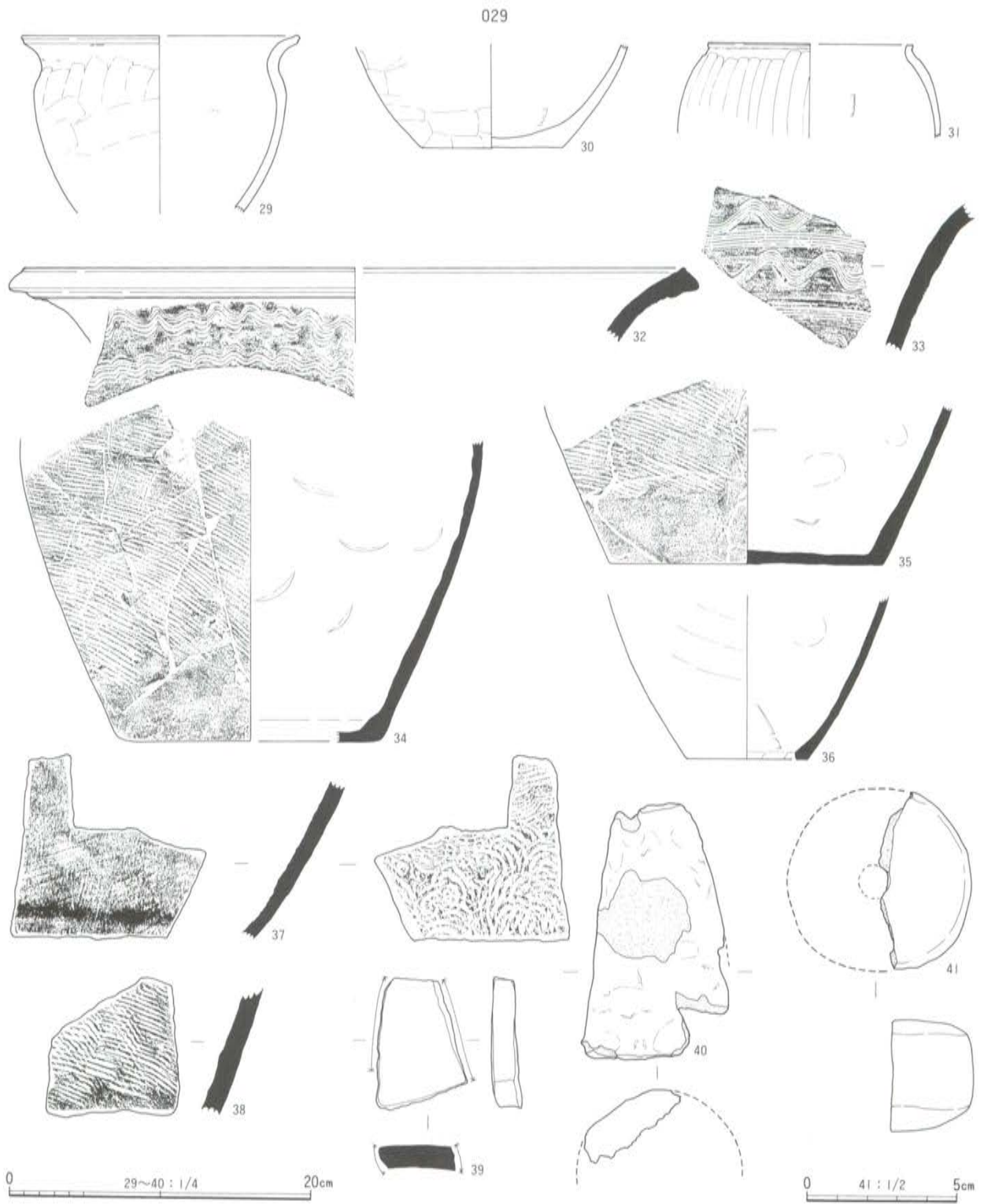
18は土師器高杯脚部片である。内面の粘土紐(紐草状)は通常とは逆の接合をしているが、本遺跡の場合他に類例があり、高杯と断定して問題ない。外面縦方向のヘラケズリ、内面ナデ調整で、色調は淡褐色、少量の酸化鉄粒、微量の石英粒・長石粒を含み、焼成は良好である。胎土中にはいわゆる「だま」が見える。

19は器種不明の土師器である。外面には赤彩を施している。外面は全面ヘラケズリで小さな平底をもち、内面は全面ヨコナデ調整である。淡褐色で、少量の酸化鉄粒、微量の石英粒・長石粒・海綿骨針を含み、焼成は極めて良好である。

20は酸化焰焼成の須恵器高杯である。脚部は欠失している。外面中位から脚部付け根まで回転ヘラケズリ調整を行っている。色調は赤褐色で、多量の石英粒・長石粒・酸化鉄粒の他に多量の微粒砂粒を含んでおり、器面はざらざらで、焼成は良好である。胎土中にわずかではあるが角閃石粒を含む。

21は須恵器の小型高台付壺である。胴部の片から上を欠失しているため、形状の復元は難しいが、肩部の屈曲から短頸壺になる可能性が高いかと考えられる。高台部分を除く外面胴部下半から底部にかけては回転ヘラケズリ調整である。色調は器表面は内外面暗灰色、器肉は小豆色である。微量の長石粒・還元鉄粒を含み、焼成は極めて良好である。

22・23は須恵器長頸瓶である。色調がまったく異なり、同一個体ではない。22は頸部の資料で、遺存部



第106图 029・020道路状遺構出土遺物

分は全面ロクロ調整である。色調は器表面黒灰色、器肉暗灰色で、少量の長石粒、微量の還元鉄粒を含み、焼成は良好である。23は湖西産である。外面胴部下端のみ回転ヘラケズリ調整である。色調は灰白色で、外面肩部に薄い自然釉がのっている。微量の長石粒・還元鉄粒を含み、焼成は良好である。

24～30は土師器甕である。24・25は接合面はないが同一個体と考えられる。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面上半縦方向、下半斜方向のヘラケズリで、内面横方向のヘラナデ調整である。石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。25は胴部外面に「□神磨方代」と墨書が記されている。調整技法はほぼ共通で、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面後半縦方向、内面方向のヘラケズリ、内面は底部にいたるまで横方向のヘラナデ、底部外面はヘラケズリ調整である。26は淡褐色で、外面片側に大きな黒斑がある。少量の石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。27は外面橙褐色で、片側に大きな黒斑がある。内面は口縁部が橙褐色であるが、胴部から底部はすべて黒色である。石英粒・長石粒の他に微量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。28は淡褐色で、外面胴部に対で黒斑が見える。石英粒・長石粒・酸化鉄粒の他に微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。29は底部を欠失している。赤褐色で、少量の雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。30は胴部下位から底部の資料である。暗褐色で、石英粒・長石粒の他に少量の酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

31は無頸の土師器甕である。口縁部と呼ぶべき部分はわずかに上方に突き出し、上端面が弱く凹んでいる。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整である。淡褐色で、多量の酸化鉄粒、少量の雲母末・石英粒・長石粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。

32～35は新治産の須恵器甕である。32は大甕口縁部片で、頸部に波状文を二単位巡らし、口縁端部外側面には幅広の粘土紐を貼付けている。色調は器表面が黒灰色、器肉中央が小豆色である。多量の長石粒、少量の白雲母粒を含み、焼成は良好である。33は頸部片で、外面に上から順に波状文・横方向のカキメを三単位巡らすようである。外面黒灰色、内面及び器肉は灰色で、多量の白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好であるが、内面器表面は剝離が進んでいる。34は胴部中位以下の資料で、外面斜方向の平行タタキ、下位が横方向のヘラケズリ、内面は当具痕をナデ消しており、底部は外面無調整、内面はナデ調整である。灰白色で、多量の白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好であるが器面はかなり粉っぽい。35は胴部下位以下の資料である。外面は上半横方向の平行タタキ、下半横方向のヘラケズリ、内面は当具痕をナデ消している。底部外面は無調整である。灰白色で、白雲母粒・長石粒を含み、焼成は良好であるが、器面はやり粉っぽい。

36は南河原坂産須恵器甕である。暗赤褐色で一見土師器のようであるが、内面は当具痕をナデ消している。外面全体から内面下端までヘラケズリ調整を行っている。長石粒・海綿骨針・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

37・38は新治産須恵器甕破片である。37は外面平行タタキ、内面青海波文タタキ調整である。器表面黒褐色、器肉小豆色で、長石粒を多量に含み、焼成は良好である。38は外面横方向の平行タタキ、内面は当具痕をナデ消している。色調は器表面灰白色、器肉は中央が暗灰色、両側が淡黄橙色のサンドウィッチ状である。白雲母粒・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。

39は東海産の須恵器甕胴部片で、破断面の内図示部分を砥石として転用している。外面は平行タタキと考えられるが、自然釉がのっており判別不能、内面はナデ調整である。暗灰色で、長石粒・還元鉄粒を少

量含み、焼成は良好である。

40は土製支脚である。底部に木葉痕がわずかに残っている。

41は土製紡錘車である。表面は手持ちヘラケズリの後に丁寧なヘラミガキ調整を行っている。

3 中近世遺構出土遺物

020道路状遺構出土遺物（第106図）

1は土師器杯である。内面全体から外面口縁部上位にかけてヨコナデ、外面口縁部上位から底部全面まで手持ちヘラケズリ調整である。淡褐色で、多量の酸化鉄粒の他に、雲母粒・石英粒・長石粒・海綿骨針を含み、焼成は良好である。

2はロクロ土師器高台付杯である。外面口縁部下端にのみ回転ヘラケズリが見え、それ以外の遺存部分はロクロ調整である。淡褐色で、少量の長石粒・酸化鉄粒、微量の海綿骨針を含み、焼成は良好である。

3は土師器高杯脚部付近片である。外面はヘラミガキ調整の後に赤彩を施している。内面淡褐色で、長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

4は青磁碗の小片である。

5は用途・名称不明の鉄製品である。器面はやや曲線を描いており、外面に円形の突起がある。

033溝状遺構出土遺物（第107図）

1は中世灰釉陶器碗と考えられる。付高台で、外面高台内側は回転ヘラケズリ、それ以外の部分はロクロ調整である。内面には緑灰色の施釉が施され、三又トチンの痕跡が見える。長石粒をわずかに含み、焼成は良好である。

030土壙出土遺物（第107図）

1は須恵器長頸瓶肩部片である。外面には自然釉が厚くのり釉垂れが起きている。素地は灰白色で、長石粒を微量含み、焼成は良好である。

036土壙出土遺物（第107図）

1・2は新治産須恵器甕の破片である。1は遺存部位においては全面ロクロ調整で、色調は灰色、少量の白雲母粒、多量の長石粒を含み、焼成は良好である。2は胴部上位の破片で、外面は横方向の平行タタキ、内面は当具痕をナデ消している。器表面灰色、器肉灰白色で、少量の長石粒、微量の白雲母粒を含み、焼成は良好である。

042土壙出土遺物（第107図）

1はロクロ土師器杯で、口縁部外面に墨書が記されているが、小片のため判読不能である。暗褐色で、雲母末・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。

013地下式墳出土遺物（第107図）

1は天聖元寶である。初鑄年1023年の北宋錢である。遺存状況は不良で、大きく3つに割れている。

019地下式墳出土遺物（第107図）

1は性格不明の鉄製品である。頭部に円孔が穿たれ、下端はややすぼまり若干尖っている。

021地下式墳出土遺物（第107図）

1は土製紡錘車である。覆土上位で検出されており、明らかな混入品と考えられる。

4 その他の遺物

グリッド一括遺物（第107図）

1は土師器甕胴部片である。外面に「□（丈カ）」の墨書が見える。外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ調整である。色調は褐色で、石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。2も土師器甕胴部片である。外面に「□□（□良カ）」の墨書が見え、鳴神山遺跡出土の類例資料から「久弥良」の可能性が考えられる。外面上半縦方向、下半横方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ調整で、色調は橙色である。石英粒・長石粒・酸化鉄粒を含み、焼成は良好である。3は新治産須恵器杯底部片で、内面に線刻が見える。外面底部回転糸切り後口縁部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。灰白色で、白雲母末・長石粒を含み、焼成は良好である。

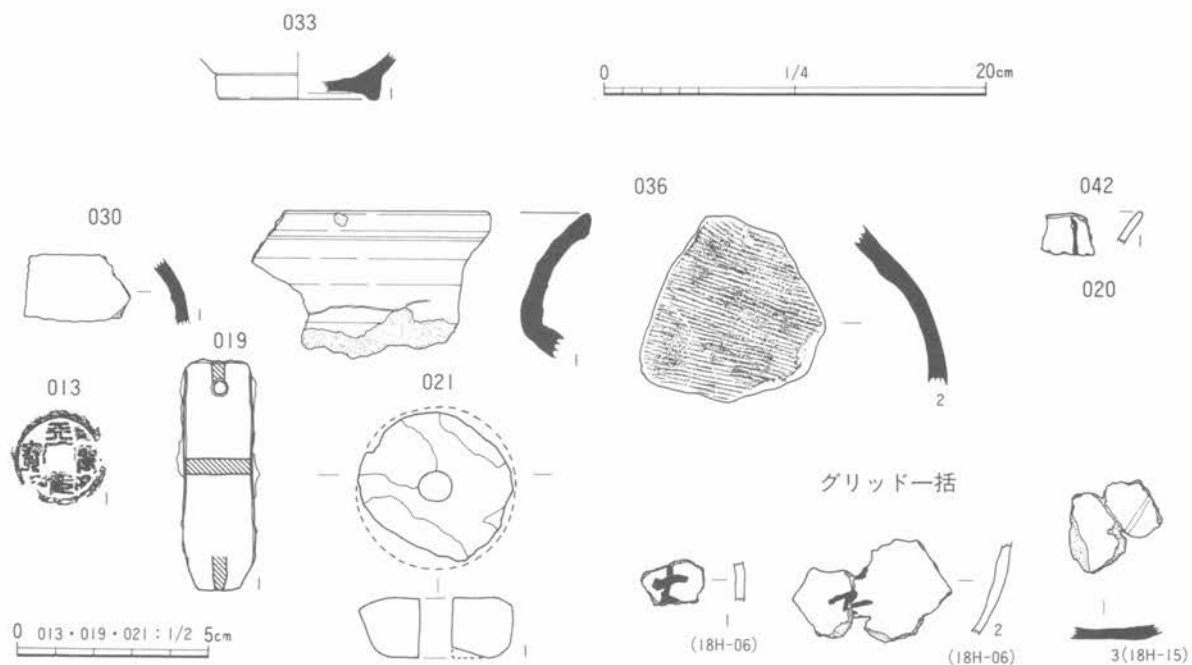
縄文土器（第108図、図版61）

1・2は早期条痕文系土器群である。ともに表裏に条痕が施されている。胎土中に繊維を含む。

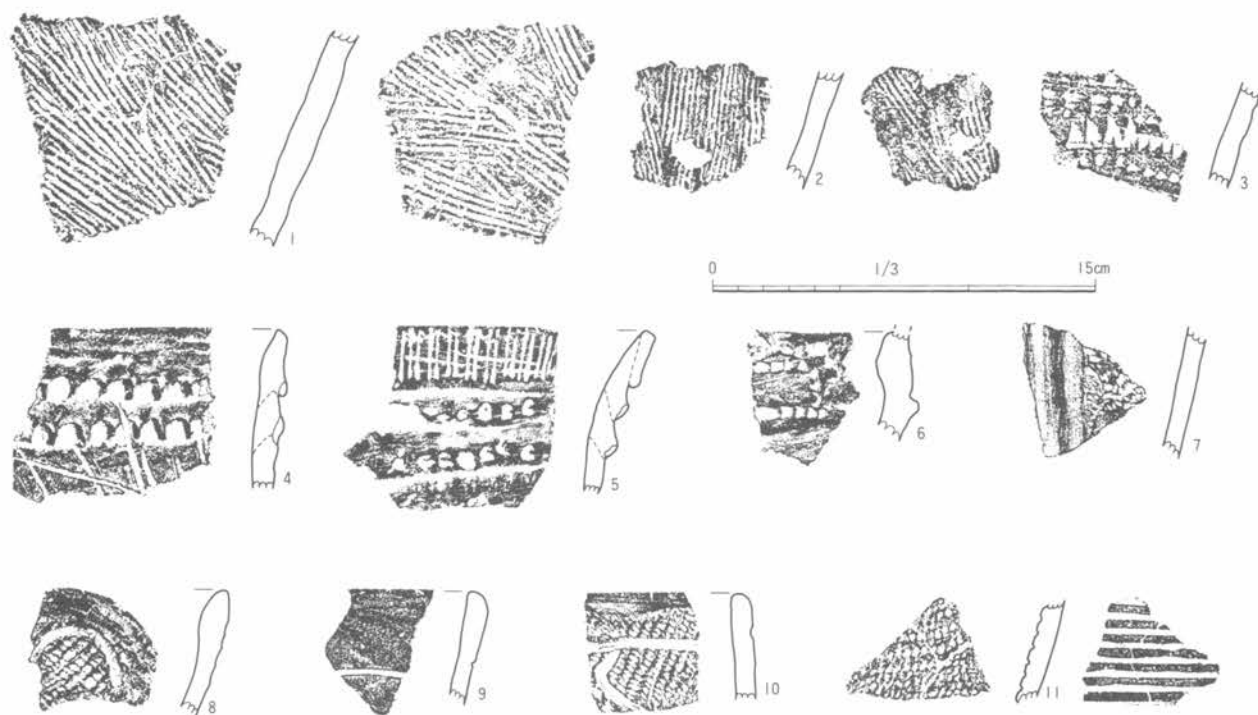
3～5は前期浮島・興津式期の土器群である。3は二種類の貝による波状貝殻文と、三角文が施されている。4は口縁部に輪積痕を残し、指頭状工具により連続刺突が施されている。胴部には沈線による文様を施す。5は折り返し状の口縁部を有し、縦位の短沈線が施されている。口縁下は輪積痕を残し、半截竹管による連続刺突が施されている。

6～8は中期の土器群である。6は阿玉台式期であり、隆帯に沿って角押文が施されている。7・8は加曾利E式期である。7は地文に縄文が施され、垂下する沈線間が擦り消されている。8は波状口縁で、沈線による区画内に縄文が施されている。

9～11は後期の土器群である。9は地文はなく、口縁部に横位の沈線が施されている。10は地文に単節LRの縄文が横位に施され、棒状工具により文様が描かれている。11はおそらく鉢形土器で、外面には縄文が施されている。内面には横位の深くくっきりした複数の沈線が施されている。



第107図 013・019・021・030・033・036・042, グリッドー括遺物



第108図 縄文土器

第 4 章

ま と め

第4章 ま と め

第1節 集落構成について

鳴神山遺跡（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）と白井谷奥遺跡とは間に小さな浅い谷をもつものの、基本的には広い平坦な台地上の同一遺跡と考えるべきである。今回報告する鳴神山遺跡Ⅲと白井谷奥遺跡との遺跡構成における最大の差は中世遺構群の存否である。白井谷奥遺跡は東端の鳴神山遺跡Ⅲと接する部分に中世遺構群の明瞭な集中地点が存在するが、一方の鳴神山遺跡Ⅲにおいては中世の遺構は非常に散発的なあり方しか見せていない。しかし、周知のとおり、中世遺構群は同一遺跡と言えども地点が異なればそのあり方はまったく異なってしまふのが普通である。従って、同一遺跡である前提はくずれないものと考えられる。

遺跡の構成の上においては弥生後期・古墳時代の竪穴住居が若干検出されている。しかしこれらはあまりにも少量であり、なおかつ該期の集落は南西にわずかに離れた地点に広がる向新田遺跡において大規模に展開していることが確認されている。以上のことから、鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡において主体となるのは奈良・平安時代と中世であると考え、本節においては奈良・平安時代の集落構成・遺物構成、中世の遺構構成を中心として記述する。

1 奈良・平安時代の集落構成

竪穴住居の展開

「調査報告第358集」においても記されているとおり、遺跡が大規模に展開するようになるのは8世紀第3四半期からである。最も古く考えられるのは鳴神山遺跡Ⅲの222竪穴住居である。検出されている須恵器杯・蓋の良好なセット群から7世紀末から8世紀初頭と考えられる。当該資料群は胎土から茨城県南西部三和窯跡群産と考えられる。ただし同窯跡群では該期の生産は現在認められていない。いずれにしても、該期の資料は単発的なもので、竪穴住居造営の主体的時期は8世紀第3四半期を待たねばならない。

鳴神山遺跡Ⅲを見る限りにおいては8世紀第4四半期において、竪穴住居数は最大に達する。次の9世紀第1・第2四半期においてやや減少し、10世紀前半の竪穴住居が若干棟検出され、古代集落としての造営期間は終了する。一方、鳴神山遺跡全体を見ると、「調査報告第358集」における鳴田浩司氏の分析によれば、9世紀中葉において竪穴住居軒数は最大を迎える。このような集落構成の変遷はかつて筆者が分析を行ったまさにb-1類型集落の典型であり（萩原1995）、八千代市村上込の内遺跡・萱田遺跡群、大網白里町大山山田台遺跡群に代表される集落変遷パターンと同様のものである。

掘立柱建物

鳴神山遺跡全体をとおして見た場合、集落展開の上で鍵となるのは掘立柱建物の展開と集落内における機能である。掘立柱建物群は鳴神山遺跡全体を見た場合全4群の集中域が確認されている。ここでは便宜的に北群、中央群、南西群、南東群とに分ける。北群は全6棟で1×1間：1棟、1×2間：1棟、2×3間：2棟、不明1棟である。中央群は全3棟で2×3間：2棟（うち1棟総柱）、不明1棟である。南西群は全17棟で1×2間：4棟、2×2間：7棟、2×3間：6棟（うち1棟総柱）である。南東群は全13棟で2×2間：4棟、2×3間：7棟、3×3間：1棟、不明1棟、さらに柵列かと思われる柱穴列1条

である。この他に2×2間、2×3間の掘立柱建物が1棟ずつ飛び離れて存在している。掘立柱建物は全体に真北を意識して構築されているが、中央群のみ主軸方位がやや西に振れている。全4群の内、南西群が最大で、全体で2棟しかない総柱建物のうちの1棟もここに存在し、さらに建物主軸方位も大略において揃っている。ただし、主体となる建物は2×2間で、2×3間の建物の棟数では南東群の方が勝っている。

単純に掘立柱建物のみで見た場合の重複は2期である。掘立柱建物は伴出遺物が少なく、時期の判別の難しいものが多いが、本遺跡の場合も例外ではない。わずかに検出されている掘立柱建物出土遺物で見限りにおいては8世紀後葉から9世紀中葉であり、大半の建物はこの時期に造営されているものと判断するしかない。問題は4群が同時存在・同時機能していたのか否かであるが、これについては判断材料が不足しており判別不能である。

次にそれらの機能である。まず、総柱建物が全体で2棟しかないことは、これらの建物群を理解する上においては重要なことである。総柱建物が倉で、側柱建物が屋という分類は単純に過ぎるかも知れないが、このような状況を考慮すると、いわゆる倉群とは判断しかねる。次に2×2間の建物が南西群に7棟、南東群に4棟存在する現象についてである。掘立柱住居としては2×3間以上というのが通常のあり方であり、2×2間というのはかなり小型のものに属すると思われる。その場合、2×2間の掘立柱建物については、住居としての機能の他に屋の外見を有しながら倉の機能を持つ穎稲屋の可能性についても考慮しなければならない。この仮定が正しいとすれば、2×2間の掘立柱建物が集落内で果たす機能は穎稲屋となる。しかし、問題は2×2間の掘立柱建物群が2×3間の掘立柱建物群と一体となって機能している状況をどのように理解するかである。大網白里町の大網山田台遺跡群に見られるように、掘立柱建物の多くが住居機能を果たした建物として位置づけられるようになっている現状において、本遺跡の2×3間の掘立柱建物について無理に他の機能を当てはめること自体が無謀である。穎稲屋と掘立柱住居の組み合わせというものが、果たして妥当な解釈なのであろうか。古代集落における掘立柱建物群の機能については、今後もその解釈が最大の問題になると思われる。

2 鳴神山遺跡M004道路状遺構・白井谷奥遺跡029道路状遺構について

二遺跡において異なる遺構番号を付してあるが、両遺跡を一直線に走る同一の道路状遺構である。鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡の所在する台地を完全に横切っていると考えられる。走行方位はN-65°-Eである。事実記載において記しているとおり、出土遺物は古代のものばかりであり、古代の遺構との重複はまったくない。このことから考えて、古代の道路と断定してまちがいないであろう。古代の遺構との重複関係がないということは、道路として機能していた期間が長く、かつ、その機能を妨げられない施設であったことを意味している。しかし、上端幅2.0～2.5m、下端幅1.1m平均という規模であり、古代の道路といっても官道になるようなクラスの道路ではない。注意すべきはその走行方位である。台地の上のみの調査であるので、谷間をどのように走っているのかは想定が難しい。周辺を広く見て他の遺跡との関連性を考慮に入れた場合、南西側では古代においてこの道路の指向性を示すような遺跡の存在は知られていない。一方、北東側に目を向けた場合、本埜村竜腹寺に所在する竜腹寺の故地「竜腹寺跡」が鳴神山遺跡から7km離れたこの溝の走行方位延長線上に存在する。竜腹寺は印旛沼にまつわる縁起から「三竜寺」伝承の一寺の可能性があると想定されるが、木下別所廃寺が本来の竜腹寺であるとの論もあり、実態はまったくわかつ

ていない。現在の竜腹寺については確実に遡れるのは南北朝期であり、はたして本遺跡が機能している段階に存在する古代寺院であるのかも判明しない。千葉ニュータウン関連の発掘調査はかなりの面積において行われているが、残念ながら竜腹寺跡と本道路状遺構の間を結ぶ区間での調査は行われていない。今後この線上において調査が行われた場合に、本道路状遺構の延長部分が検出されれば、この仮説の一部は実証されることになる。

3 中世遺構群について

白井谷奥遺跡東端の鳴神山遺跡Ⅲに隣接する部分で、中世遺構群が集中して検出されているのは、遺構の事実記載において述べたとおりである。013溝状遺構と020道路状遺構に囲まれた範囲内に集中しており、構成する遺構の主要なものは地下式墳と長方形土壇である。斎藤弘氏の論考（斎藤1996）によれば、地下式墳は、1.墓地に伴うもの、2.集落・屋敷に伴うもの、3.館・城に伴うもの、の3種類に大別できるようである。本遺構群の場合、調査区南側の実態が不明であるが、集落・屋敷・館・城に伴う可能性は低いものと考えられる。従って、本遺構群そのものが墓域である可能性が最も高い。

第2節 奈良・平安時代の遺物様相について

1 須恵器と土師器

集落構成においても述べたように、該期において最も古く位置づけられる遺物群は、鳴神山遺跡Ⅲ222竪穴住居出土の、7世紀末から8世紀初頭の須恵器杯・蓋である。これらは、松本太郎氏・郷堀英司氏・松田礼子氏のご教示によれば、胎土の特徴から茨城県三和窯跡群産の可能性が高い。下総地域、それも利根川に近い地域の特性であるが、常陸産須恵器は新治産を主体として9世紀前葉までかなり多量に搬入されている。また、鳴神山遺跡Ⅲ226A竪穴住居においては新治産須恵器と湖西産須恵器が共伴しており、時期は8世紀初頭と考えられる。湖西産須恵器は7世紀から8世紀前半においては房総半島では地域的偏りがあるものの、相当量入り込んでいることは確実である。しかし、当該地域は新治に地理的に近い関係で湖西産の比率はそれほど高くない。鳴神山遺跡の須恵器は9世紀前葉において千葉市域産と考えられる須恵器群が多量に搬入されるようになるまでは、ほぼ新治産によって占められていると言って良いであろう。新治地域では大規模な須恵器生産が行われていたことが確実であり、その供給圏は非常に広範である。

また、微量ではあるが武蔵産が入り込んでいることは注意すべきであろう。

一方、千葉市域においては現在千葉市緑区内の南河原坂・中原・宇津志野の各窯跡群が大規模なものとして確認されている。そのうち、現状で判明している限りにおいては南河原坂窯跡群が最も大規模で、鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡の千葉市域産製品も、大半は南河原坂窯跡群のものであると考えられる。千葉市域産の製品は千葉市域・山武郡域を主な供給圏としていることは確実であるが、西側は八千代市萱田遺跡群及び市川市下総国府・国分寺周辺遺跡群においてもその出土が確認されている。鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡においてもその出土量は相当量のものであった。千葉市域産須恵器の最大の問題点は須恵器・土師器の峻別が難しい場合が多いことである。鳴神山遺跡Ⅲ184・214竪穴住居出土杯群は本遺跡における千葉市域産としては最も新しい段階の遺物群で、9世紀第4四半期にかかるものと考えられる。これらを見る限りにおいては褐色から明褐色のものが多く、土師器と認定することが容易な資料群である。このことから、千葉市域産のもので須恵器と断定できるのは、9世紀中葉までのものである可能性が高い。従って、鳴神

山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡で見られる以後の千葉市域産製品は、生産地においても土師器として生産されたものと考えられる。なお、本節「文字・記号資料」においても記しているとおおり、ヘラ書き資料から完全なる南河原坂産と断定できる製品も確認されている。

土師器においてもう一点特徴的なのは、萱田遺跡群において特徴的に見られた箱形の杯である。小振りで口縁がかなり直角に近い立ち上がり方を見せるものである。萱田遺跡群においては8世紀第3・4半期においてその存在が確認されている。鳴神山遺跡Ⅲにおいても、少量であるが箱形杯は出土しており、その分布圏の一部であることがうかがえる。

2 畿内産土師器

鳴神山遺跡Ⅲにおいては畿内産と考えられる土師器甕が出土している。量的には少なく、最も遺存状況の良好な220竪穴住居出土資料のほかに口縁部から胴部上位にかけての破片資料が3点、計4点確認されている。220竪穴住居出土資料で見ると平城分類の甕Aで、時期的には平城Ⅳ期併行かと考えられる。他の破片資料についても甕Aであることは確実であるが、時期の判別は困難である。鳴神山遺跡Ⅰ・Ⅱにおいても、検出されているのはやはりこの甕Aのみである。いわゆる畿内産と呼ばれる土器群の場合、その産地がどこであるのかが常に問題になる。斎宮歴史博物館の上村安生氏のご教示によれば、219竪穴住居出土資料のみは南伊勢産として良いようであるが、他は不明である。最近、福田明美氏が畿内産と呼ばれる土師器について果たしてどれだけの資料が畿内産であるのか、という疑問を投げかけている(福田1999)。しかし、従来畿内産として認識していた資料は、正確には「京内消費土器群」であり、その産地が多様であることは当初から織込み済みのはずである。福田氏の指摘は「畿内産土師器」という名称を、「京内消費土器群」という名称に変更することによって何ら問題なく解消されるはずである。だが、現段階において「京内消費土器群」という研究者間において認知を受けていない名称を用いて、不要の混乱を招くつもりはないので、本書においては従来どおり「畿内産土師器」の名称を使用する。

さて、現在房総半島においては相当量の畿内産土師器が検出されている。時期的には平城Ⅰ・Ⅱ段階の資料が多く、しかもそのほとんどは杯A・B・Cのいずれかで、まれに皿A、高杯、杯Bに伴う蓋が検出されている程度である。甕Aについては千葉市千葉寺地区遺跡群の観音塚遺跡においても検出されているようであるが、同遺跡においては同時に杯類も検出されている。本遺跡においては杯類については破片すら確認できず、甕Aのみである。このような傾向に対する解釈としては、供膳具を持ち込む階層と煮沸具を持ち込む階層との社会的身分較差というものが第一に浮かび上がる。勿論、この解釈にしても一元的なものではなく、実態はもっと複雑なものである可能性は十分に残っている。

3 施釉陶器

鳴神山遺跡Ⅲにおいては多彩釉陶器(畿内産二彩)、緑釉陶器、灰釉陶器が確認されている。

多彩釉陶器

211竪穴住居において二彩陶器と考えられる小片が出土している。遺存部分外面の施釉は褐釉と緑釉である。あまりの小片で、器形が小壺(平城分類の壺C)である可能性が高いと言う程度のことしかわからない。鳴神山遺跡全体において数片検出されている多彩釉陶器片はすべて小壺である。房総半島において検出されている多彩釉陶器の大半はこの器形であり、多彩釉陶器のあり方としてはごく一般的なものである。

緑釉陶器

少量であるが鳴神山遺跡III238竪穴住居で4点検出されている。同竪穴住居は3軒が複雑に重複する遺構で、遺物は残念ながらそのほとんどを一括資料として取り上げているために確実な帰属が復元できない。4点の中で最も破片の大きい1は付け高台を持つ皿で、内面に陰刻花文風の沈線が2条見える。遺存部位は全面に施釉されており、内面底部には三叉トチン痕がみえる。他の3片はみな碗で、やはり施釉は全面になされている。猿投産と考えるとほぼまちがいないが尾北産の可能性もある。時期は黒笹90号窯式期後半段階と考えられる。

灰釉陶器

緑釉陶器同様鳴神山遺跡III238竪穴住居で集中的に、M002溝状遺構において数片が検出されている。比較的遺存状態の良好なものが5点、その他の小片を含め計21点が検出されている。高台はすべて付け高台で、器形は碗・折縁皿・長頸瓶である。このうち折縁皿・長頸瓶は各1点で、ほかはすべて碗である。鳴神山遺跡I・IIにおいては把手付小瓶のような特殊品も検出されている。産地は猿投が大半で、次に尾北、さらに東濃産が若干含まれている。時期は黒笹90号窯式期後半主体で、折戸53号窯式期（東濃では大原2号窯式期）までと若干の時期幅がある。なお、鳴神山遺跡III238竪穴住居からは長頸瓶の小片が多数検出されており、これは黒笹14号窯式期と考えられる。全体に見て、長頸瓶は井ヶ谷78～黒笹14号窯式期のものが多いようである。238竪穴住居・M002溝状遺構出土灰釉陶器は雑器類のみという特徴をもっている。

以上のように緑釉陶器・灰釉陶器ともにほぼ猿投産が圧倒的に多く、時期は黒笹90号窯式期後半を主体としている。関東地方全域での緑釉・灰釉陶器のあり方全体を見た場合、高橋照彦氏の分析（高橋1994）によれば、上総において井ヶ谷78号窯式期・黒笹14号窯式期の製品の検出量が突出している以外は、黒笹90号窯式期から折戸53号窯式期に検出量がピークを迎えるのはごく標準的な傾向のようである。ただし、東山道地域に属する上野・下野においては例外で、東濃産の灰釉陶器が折戸53号窯式期段階の次の東山72号窯式期段階にまで、その前段階とそれほど変わらない量で供給されている。また、本遺跡において、若干量ではあるが東濃産の製品が確認できたことは重要かと考えられる。

4 文字・記号資料

鳴神山遺跡III及び白井谷奥遺跡において特徴的な遺物は、やはり文字・記号を有する土器である。鳴神山遺跡I・II・N同様に、遺構総量で見た場合の文字・記号資料の量の多さと言う点では、鳴神山遺跡III・白井谷奥遺跡もやはり同じ傾向を示している。鳴神山遺跡IIIと白井谷奥遺跡での文字・記号資料合計は以下のとおりである。墨書資料が99個体（破片も1個体と計算。以下同様）で、うち2個体は2箇所記されている。墨書資料は基本的には文字のみで、記号は存在しないようである。朱墨を用いた資料がこの他に1点ある。線刻資料は92個体で、うち3個体は2箇所記されている。ヘラ書きは2個体である。以上を合計すると個体・破片数で総計191となる。奈良・平安時代に属する竪穴住居でこの数字を単純に割返すと、1竪穴住居当たり3点強の文字・記号資料を有することになる。鳴神山遺跡I・IIは合計984点で、同様の計算を行うと該期の1竪穴住居あたり5点弱である。いずれにしても調査を行った鳴神山遺跡全体と白井谷奥遺跡全体を合計すると、1,170点からの資料が存在するわけである。本遺跡の場合は8世紀第3四半期から出現し、9世紀第4四半期まで存続期間があるようである。このうち、竪穴住居別に出土点数を見ると鳴神山遺跡III188竪穴住居・225竪穴住居でそれぞれ25点ずつ出しており、時期はともに9世紀第2

四半期である。そのほかの文字資料を複数点出す竪穴住居を見ても、9世紀中葉を中心とした時期であることがわかる。従って、本遺跡において文字資料の中心となる時期は上記の時期であると断定して良いだろう。

多出文字資料

文字と認識されるものについて点数の多い順に個別に見て行く。

- ・「大」 墨書のみである。15点（うち2点は2箇所記されているので都合17）確認されている。鳴神山遺跡Ⅰ・Ⅱにおいては墨書118点、線刻32点が検出されている。
- ・「丈」 墨書のみである。13点確認されている。鳴神山遺跡Ⅲ208竪穴住居で12点、M002溝状遺構で1点検出されている。鳴神山遺跡Ⅰ・Ⅱにおいては墨書1点、線刻2点(?)が検出されている。この比較から見ても、鳴神山遺跡Ⅲ208竪穴住居における出土点数の突出度が注意される。
- ・「大加」 墨書のみである。6点確認されている。鳴神山遺跡Ⅰ・Ⅱにおいては墨書17点、線刻30点が検出されている。
- ・「井人」 墨書で1点、線刻で4点（内3点には2箇所記されているので都合7）検出されている。すべて鳴神山遺跡Ⅲ225竪穴住居からの出土である。鳴神山遺跡Ⅰ・Ⅱにおいては検出例がない。「井」については漢字の「井」ではなく、九字切りの変形と考えられる。
- ・「大八」 墨書1点、線刻3点で、そのうち1点は線刻の上に墨書を行っている。鳴神山遺跡Ⅰ・Ⅱにおいては墨書4点、線刻2点が確認されている。
- ・「富」 墨書1点、線刻2点である。鳴神山遺跡Ⅲ188竪穴住居においては墨書・線刻がそれぞれ1点ずつ検出されているが、線刻のものは字がかなり崩れている。鳴神山遺跡Ⅰ・Ⅱにおいては墨書16点、線刻4点が確認されている。
- ・「千万」 墨書のみである。3点検出されており、すべて鳴神山遺跡Ⅲ233竪穴住居からの検出である。鳴神山遺跡Ⅰ・Ⅱにおいては墨書7点、線刻3点が確認されている。
- ・「久弥良」 墨書1点、線刻1点が検出されている。ともに部分資料であり、鳴神山遺跡Ⅰ・Ⅱの例から判読したものである。鳴神山遺跡Ⅰ・Ⅱにおいては墨書7点、線刻14点が確認されている。
- ・「田」 墨書のみが2点検出されている。うち1点は「田カ」と読める資料であり、これについては確定的ではない。
- ・「手」 墨書のみが2点検出されている。うち、鳴神山遺跡Ⅲ190竪穴住居出土のものは確実であるが、鳴神山遺跡Ⅲ225竪穴住居出土のものについては不確定である。

以上が、文字と認識できるものの内、同一文字内容を複数見出すことができる資料である。

多出線刻資料

次に、線刻のみであるが以下の二種が多量に検出されている。

- ・「×」 線刻のみで14点検出されている。大きく記されているものから、小さく記されているものまで様々である。全体に薄い線刻が多く、また、線が二本交叉していれば一律に「×」と認識されてしまうので、点数が増えてしまうという傾向も否めない。
- ・「≠」 線刻のみで7点検出されている。漢字の草冠を意味するものであるのか、「井」のように「九字」を意味するものであるのか判別不能である。

仏教関連文字資料

次に、明らかに仏教関連と考えられる文字として以下のものがある。

- ・「波田寺」 鳴神山遺跡III188竪穴住居より墨書で1点のみ検出されている。
- ・「播寺」 鳴神山遺跡III190竪穴住居より墨書で1点のみ検出されている。
- ・「寺」 鳴神山遺跡III190竪穴住居より墨書で1点のみ検出されている。先の「播寺」と同一遺構での検出である。上にもう一字あったとすれば、「播寺」であった可能性が高い。

確実な仏教関連文字資料としては上記の3点である。「波田寺」も「播寺」も音声表記では「はたてら」であり、同一のものを表記していると考えられる。鳴神山遺跡I・IIにおいても仏教関連文字資料として、鉄鉢形土器に「佛」の墨書という直截的資料が出土している。鳴神山遺跡I・IIにおいてはこの他にも鉄鉢形土器が出土しており、仏教関連と考えられる遺物が若干検出されている。「波田寺」「播寺」「佛」が記されている土器は9世紀第1四半期乃至第2四半期の資料であり、時期的にはほぼ同一と考えられる。「調査報告第358集」において、村落内寺院とそれに伴う僧侶の活動というものを想定しているが、これらの仏教関連遺物が検出されている遺構は全体で見ても決して集中してはおらず、確実にこの空間を活動拠点としている、という断定はできない。

多文字資料

次に多文字資料として以下の1点が注目される。

- ・「□神麿方代」 墨書資料で、白井谷奥遺跡029道路状遺構で検出されている。

土師器甕の胴部外面に縦書き二条で記されている。方代の後に文字があるのかどうかは、当該資料では判断できない。鳴神山遺跡I・IIにおいては「丈尼 丈部山城方代奉」と墨書された土師器杯が検出されている。また、その他に線刻資料として鳴神山遺跡II056竪穴住居から「方代」と記された小型甕が出土しており、この個体と同一個体と考えられる未接合破片に「神」の線刻があると報告されている。となれば、「神」と「神麿」の関連性は蓋然性が高くなると考えられる。なお、「調査報告第358集」において考察しているように、「方代」は八千代市萱田遺跡群北海道遺跡で検出されている「丈部乙刀自女形代」において記されている「形代」と同じ意味であると解釈される。

以上の他にも、一点ものとして「専」「有」「原」「芳」「高」「玉」「室（異体字）」「本」「太」などが注目される。また、いずれも線刻資料であるが縦3本・横3本の直線を組み合わせた九字切りの変形と考えられる資料、三角の中に横3本線を入れた資料なども、注目すべきものである。

生産地と消費地の関係を特定できる文字資料

最後に生産地と消費地の需給関係が明瞭に復元できる資料2点について記述する。

- ・「弓字形ヘラ書き」 鳴神山遺跡III225竪穴住居出土須恵器甕底部に「弓」字形のヘラ書きが1点のみ見られる。千葉市緑区南河原坂窯跡群30号・35号住居出土杯に全く同一の記号が見られる。鳴神山遺跡I・IIにおいては墨書と線刻の資料が見られる。
- ・「工万」 鳴神山遺跡山遺跡III251竪穴住居検出の皿形土器の同一個体表裏面にヘラ書きが見られる。鳴神山遺跡I・IIでは検出されていない。この文字も先の資料同様千葉市緑区南河原坂窯跡群63号土壙出土杯底部に同様の文字のヘラ書きが見える。器形は異にしているが、文字を見る限りでは同筆である可能性も否定できない。

ヘラ書きは生産地において記されるものである。製品の発注者を表示するものであるのか製作工人を表

示するものであるのかの即断は難しい。例えば前者を考える場合、千葉県内の同一遺跡においてヘラ書きと墨書・線刻の双方に同じ文字を見るのは、現在管見に上の限りで東金市作畑遺跡の「山上」、同市久我台遺跡の「立合」、佐倉市寺崎遺跡群向原遺跡の「牟」が挙げられる。これについては製品において発注者を識別するための行為、という解釈が可能かと考えられる。一方の后者については、上原真人氏が恭仁京出土文字瓦の検討で示しておられるように(上原1989)、工房における工人の労務管理行為の結果という解釈である。勿論、国衙・国分寺級以上の施設への供給のための製品と、一般集落への供給を目的とする製品とを、同一基準に載せて解釈することが妥当なことなのかどうか、という問題は残ると思われる。

本遺跡資料の場合、「弓字型ヘラ書き」については墨書・線刻資料中に同一資料の存在することから、発注者を表示しているものである可能性が高いと考えられる。一方の「工万」については、本遺跡出土墨書・線刻資料中に同じ文字が見られないために、発注者を表示している可能性を前面に押し出すことは難しい。いずれにしても、ヘラ書きは墨書や線刻のように消費地においても記しうるものとは異なり、生産地と消費地との直接的関係を示す資料として、本来注目すべきものである。本節「須恵器と土師器」の項においても記しているとおり、本遺跡には千葉市域産と考えられる製品が相当量入り込んでいる。そのうちの多くが南河原坂産である可能性を想定していたが、この2点のヘラ書き資料によって南河原坂窯跡群と鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡との直接の生産供給・消費関係が実証できたものとする。

<引用参考文献>

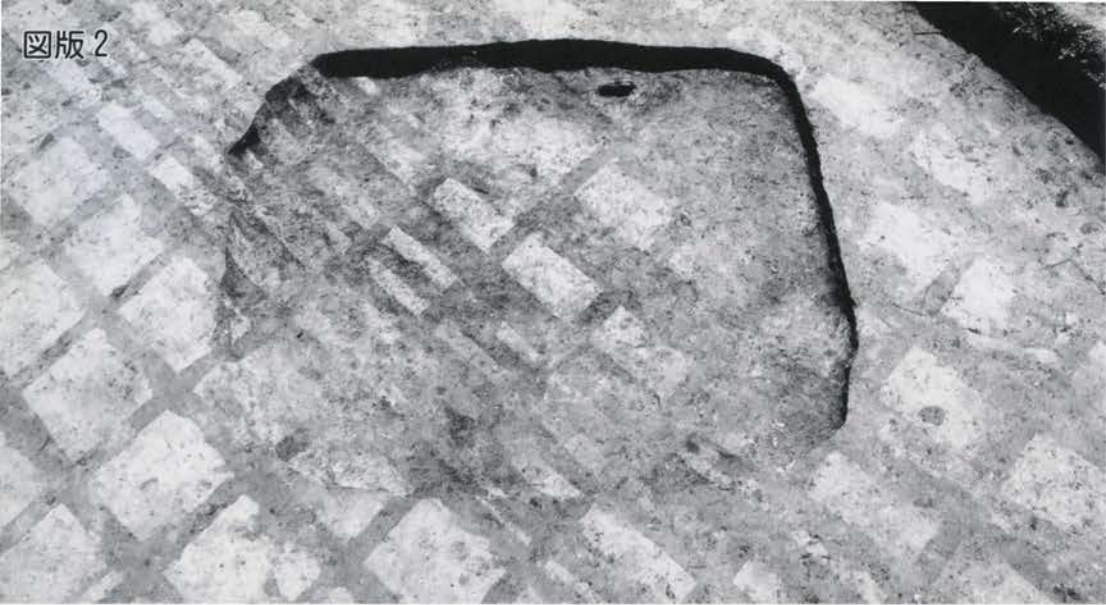
- 上原真人 1984 「天平12, 13年の瓦工房」『奈良国立文化財研究所学報 第41冊 研究論集VII』 奈良国立文化財研究所
- 上原真人 1989 「東国国分寺の文字瓦再考」『古代文化』41-12 財団法人 古代学協会
- 大橋泰夫 1999 「第1部 国衙工房の成立—下野国分寺出土瓦の分析—」『官営工房研究会報』6 奈良国立文化財研究所
- 郷堀英司 1994 「鳴神山遺跡群出土の文字資料」『研究連絡誌』第40号 (財)千葉県文化財センター
- 齊藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産—猿投窯を中心に」『古代の土器研究会第3回シンポジウム 古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3施釉陶器—』 古代の土器研究会
- 斎藤 弘 1996 「地下式土壙と葬送儀礼—栃木県下の事例を中心に—」『研究紀要』第4号 (財)栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター
- 白井久美子・栗田則久他 1992 『房総考古学ライブラリー 6 古墳時代(2)』 (財)千葉県文化財センター
- 田形孝一 1996 「集落から村落へ(1)—古代東国村落復元へのアプローチ」『研究連絡誌』第47号 (財)千葉県文化財センター
- 田形孝一 1997 「下総国印旛郡松穂郷の歴史景観—印西市鳴神山遺跡とその周辺—」『千葉史学』 第31号 千葉史学会
- 高橋照彦 1994 「東国の施釉陶器」(出典文献は齊藤1994に同じ)
- 萩原恭一 1995 「房総半島の古代集落遺跡に見る人口動態」『研究紀要』16 (財)千葉県文化財センター
- 福田明美 1999 「関東地方出土の畿内系土師器と湖西窯須恵器」『帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会共催シンポジウム 飛鳥・白鳳の瓦と土器—年代論—』 帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会
- 村田六郎太他 1996 『土気南遺跡群VII 南河原坂窯跡群・鐘つき堂遺跡』 千葉市土気南土地区画整理組合・(財)千葉市文化財調査協会

写真図版



自井谷奥遺跡

鳴神山遺跡Ⅲ



186竖穴住居全景



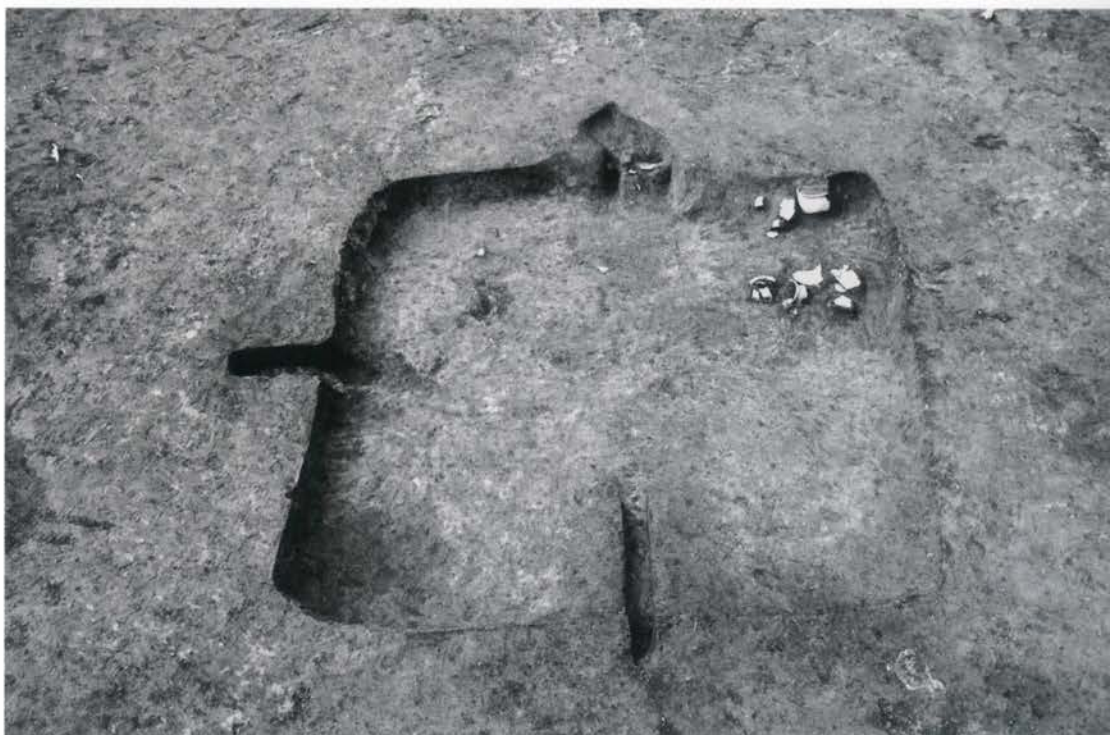
206竖穴住居全景



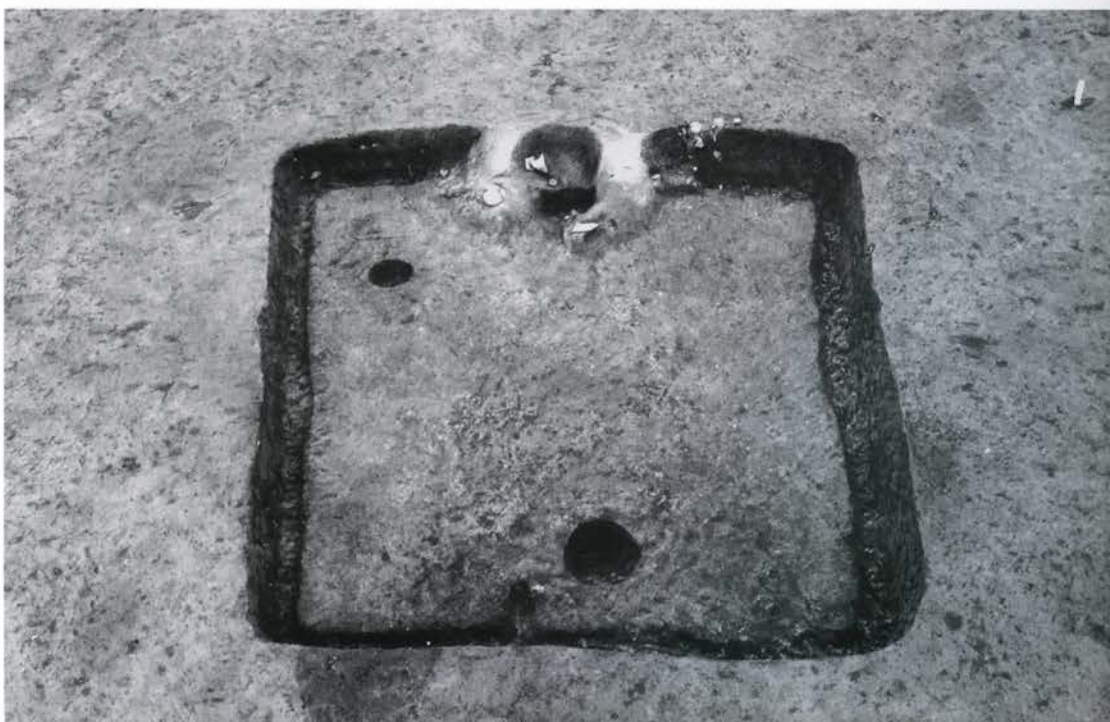
206竖穴住居
炭化材出土状况



206豎穴住居
遺物出土狀況



171豎穴住居全景



172豎穴住居全景



174 竪穴住居全景



174 竪穴住居カマド



179 竪穴住居全景

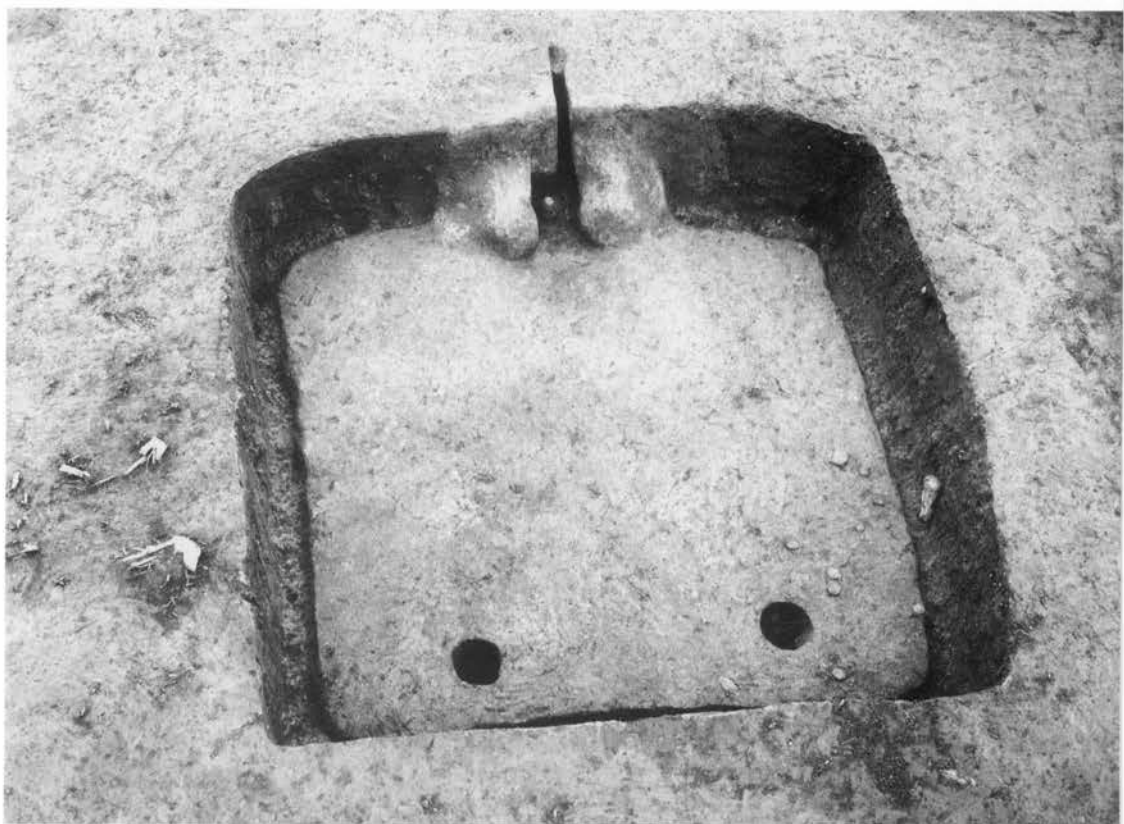
182·183竖穴住居全景



184竖穴住居全景



185竖穴住居全景





187 竪穴住居全景



187 竪穴住居カマド

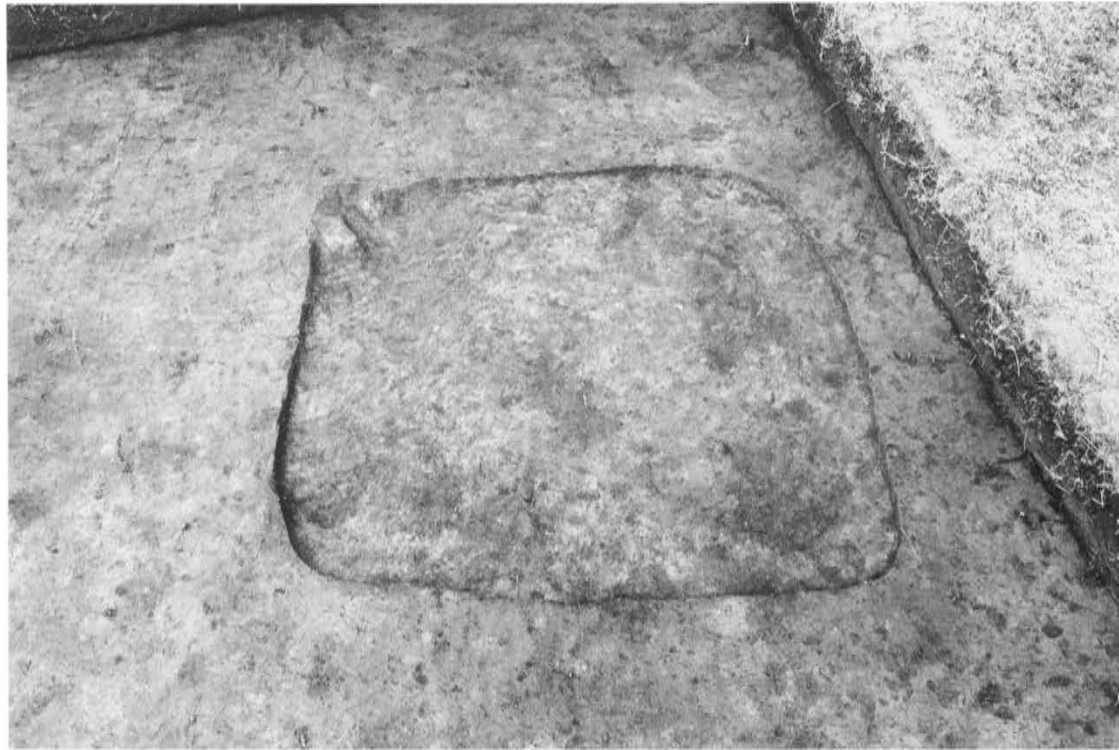


188 竪穴住居全景

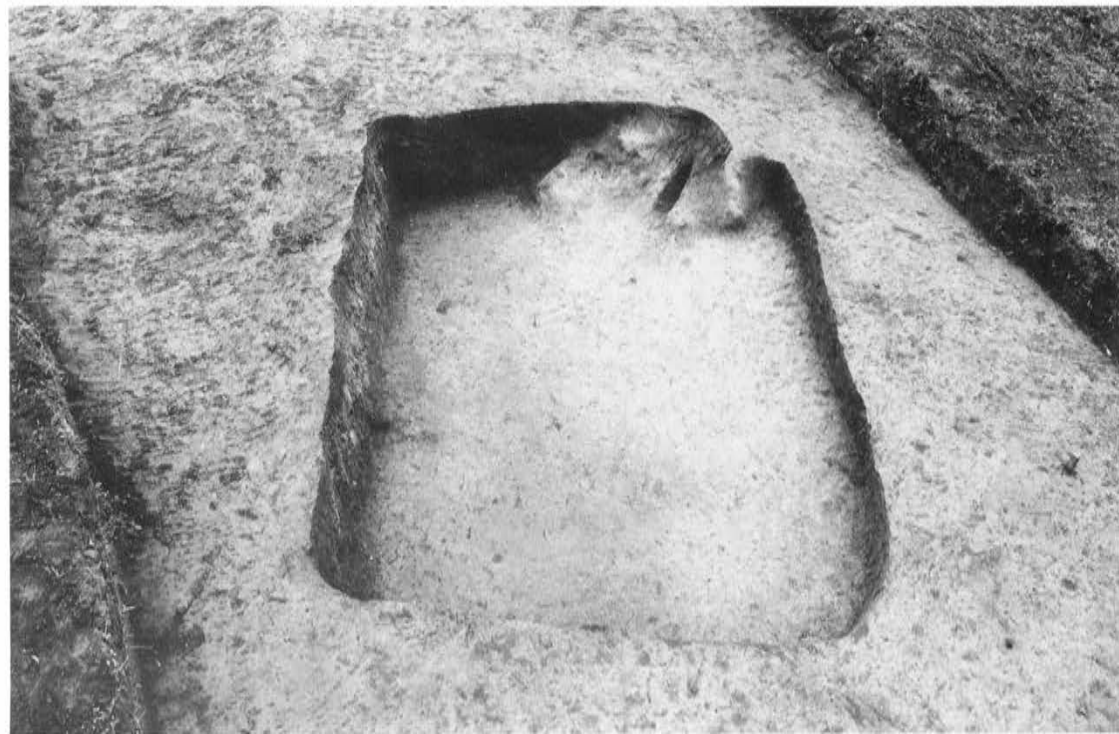
188 竪穴住居カマド

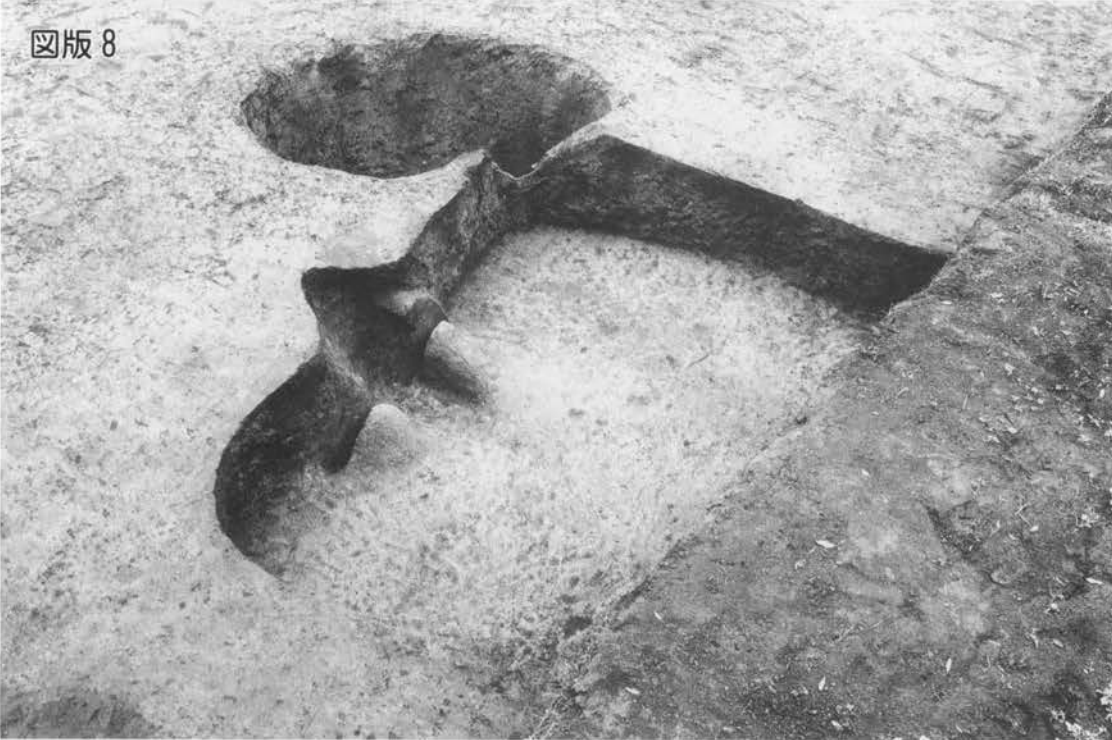


189 竪穴住居全景



190 竪穴住居全景

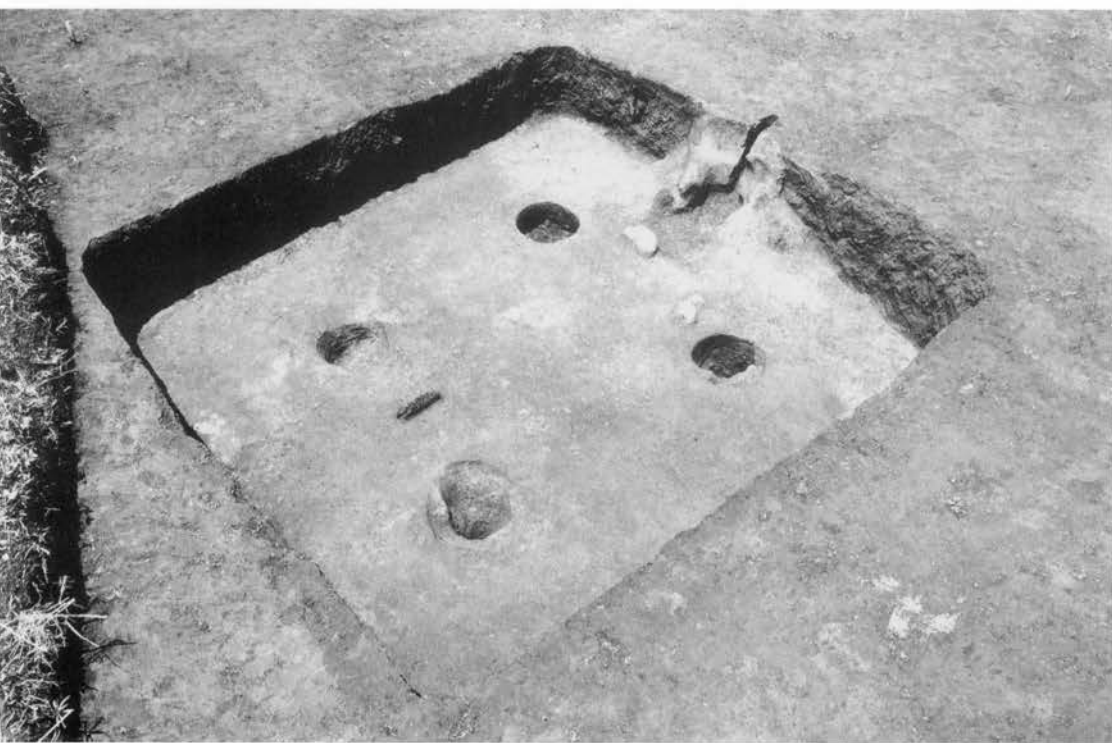




191 竖穴住居全景



193 竖穴住居全景



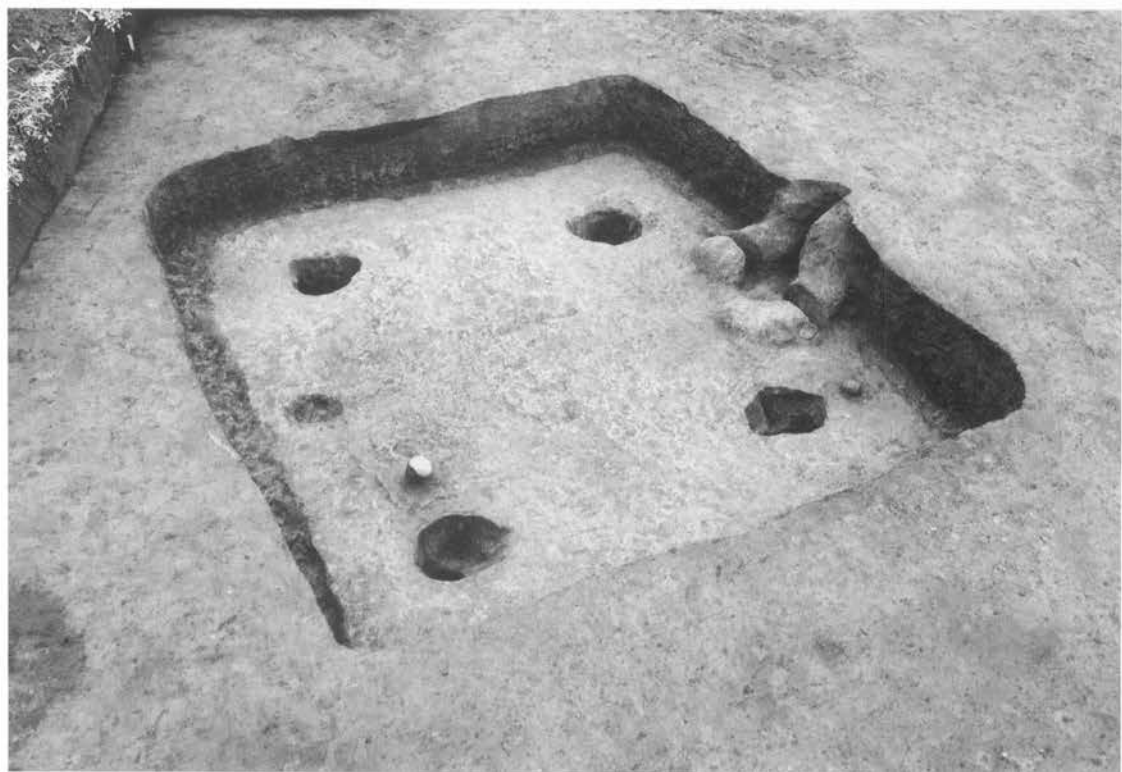
207 竖穴住居全景



207豎穴住居
遺物出土狀況



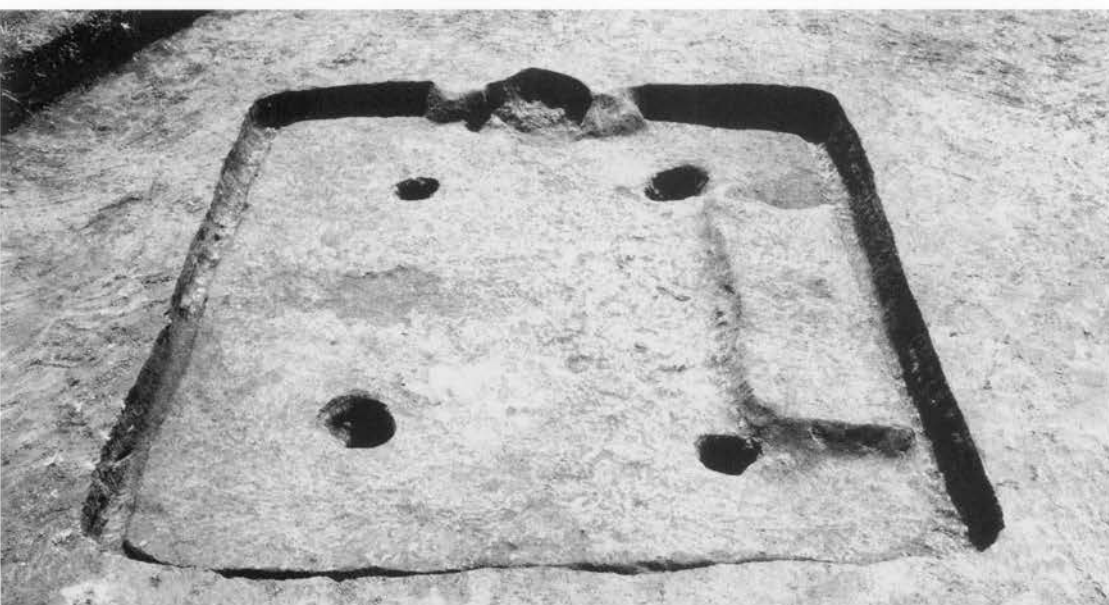
208豎穴住居全景



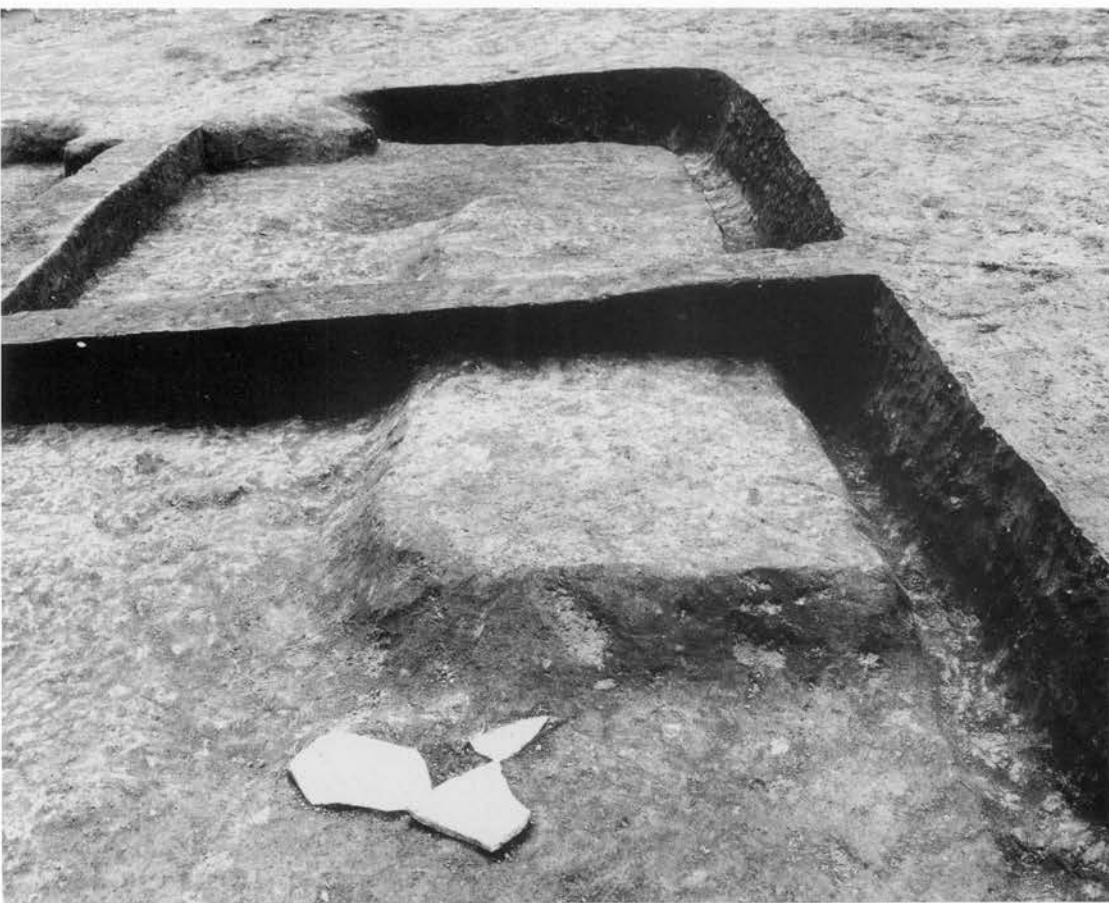
209豎穴住居全景



210 竪穴住居全景



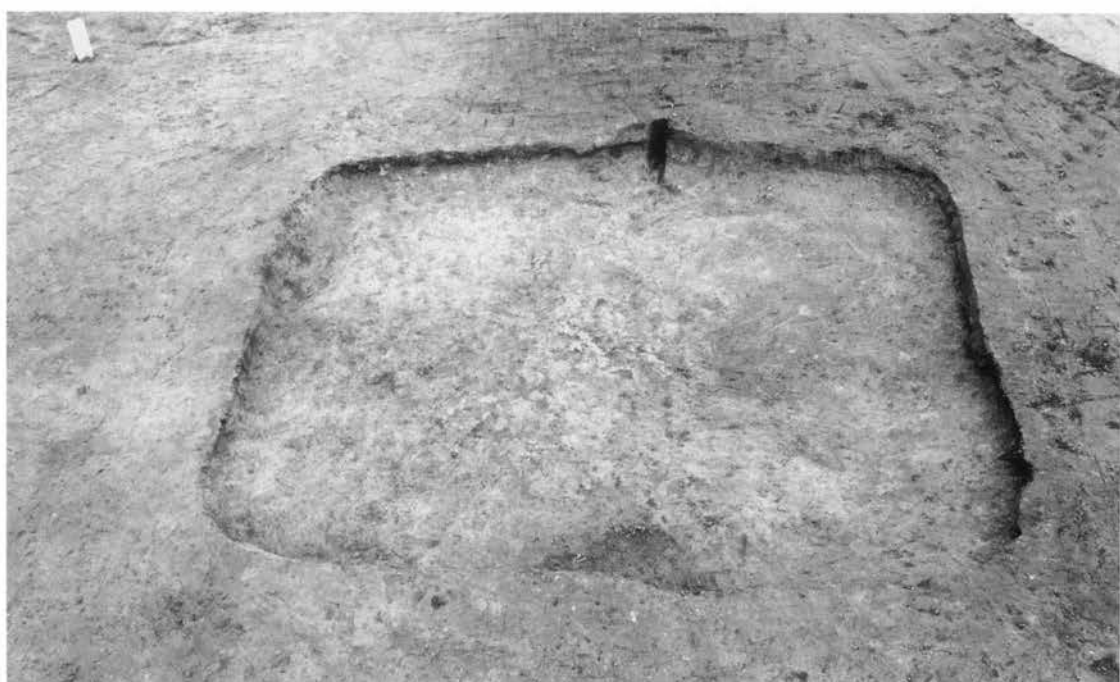
211 竪穴住居全景



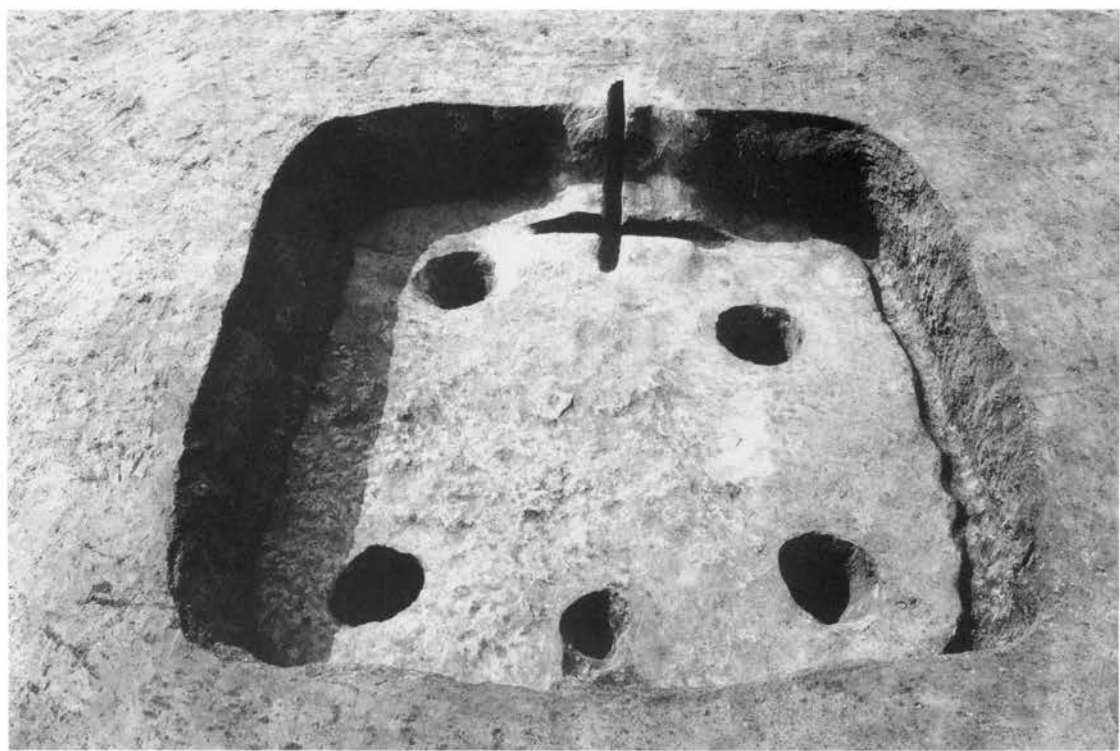
211 竪穴住居
ベッド状遺構近景



213竖穴住居全景



214竖穴住居全景



215竖穴住居全景



216竪穴住居全景



216竪穴住居
カマド内遺物出土状況



217竪穴住居全景

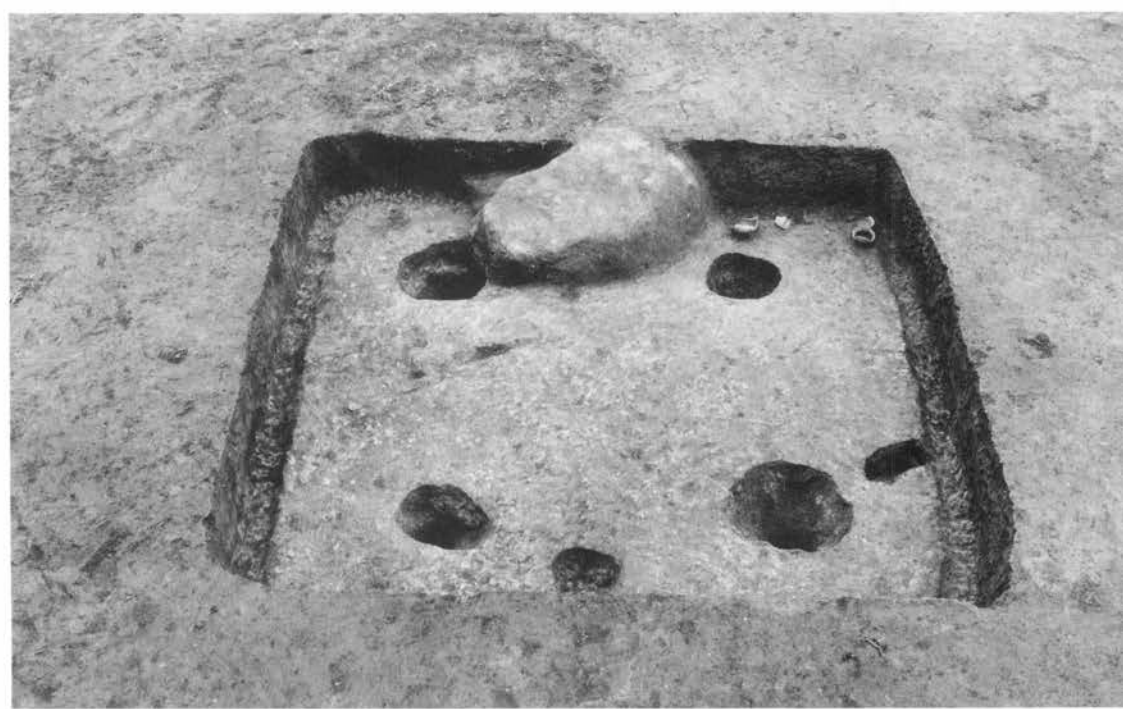
218竖穴住居全景



219竖穴住居全景



220竖穴住居全景





222竖穴住居全景
及び遺物出土状況



224竖穴住居全景



225竖穴住居全景

225竪穴住居
炭化材出土状況



225竪穴住居
カマド内遺物出土状況



225竪穴住居遺物出土状況





226A · 226B 竖穴住居全景



227 竖穴住居全景



228 竖穴住居全景



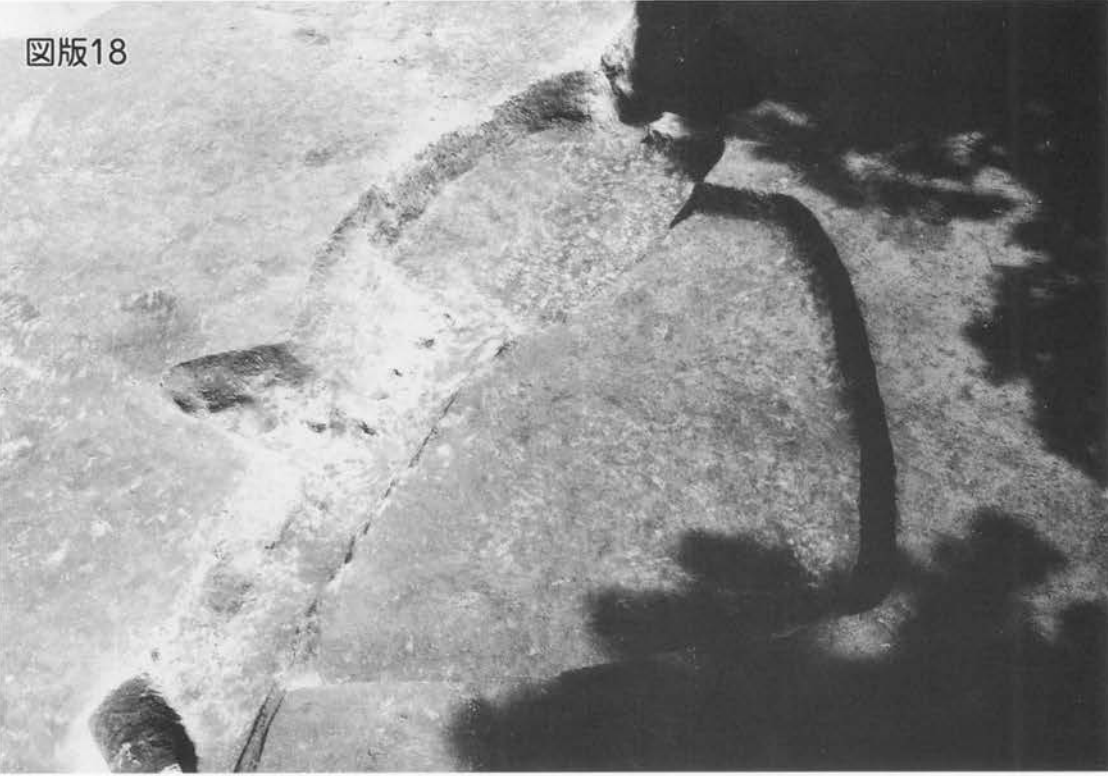
229 竪穴住居全景



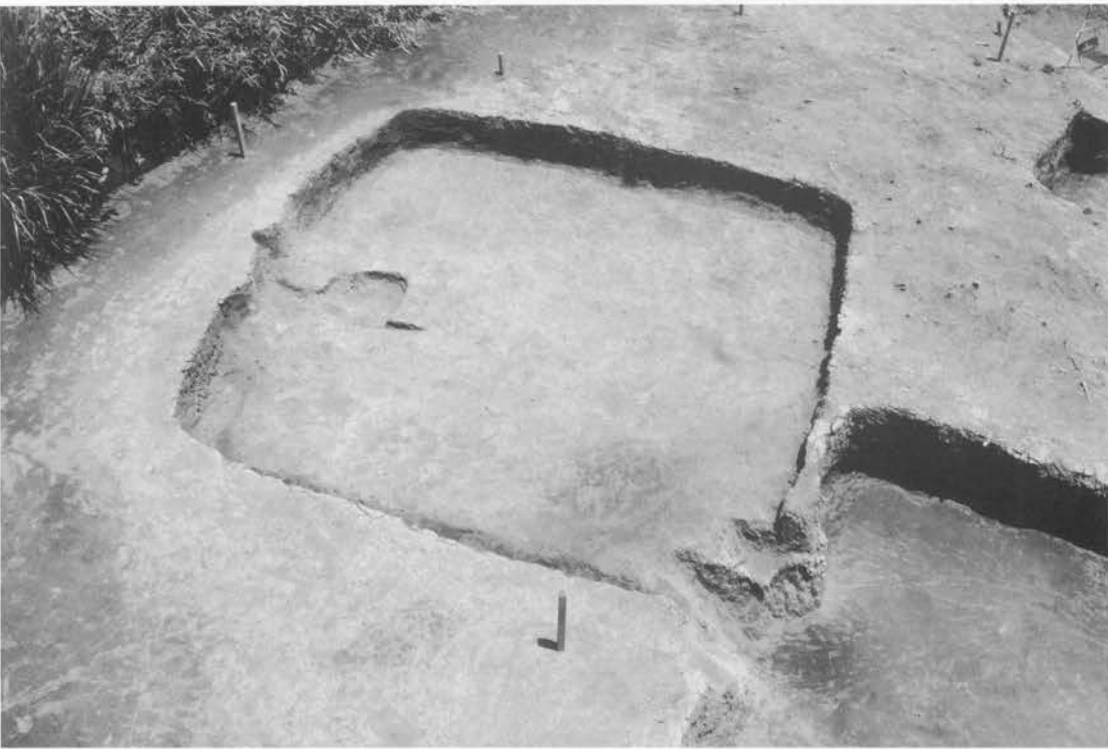
229 竪穴住居カマド



230 竪穴住居全景



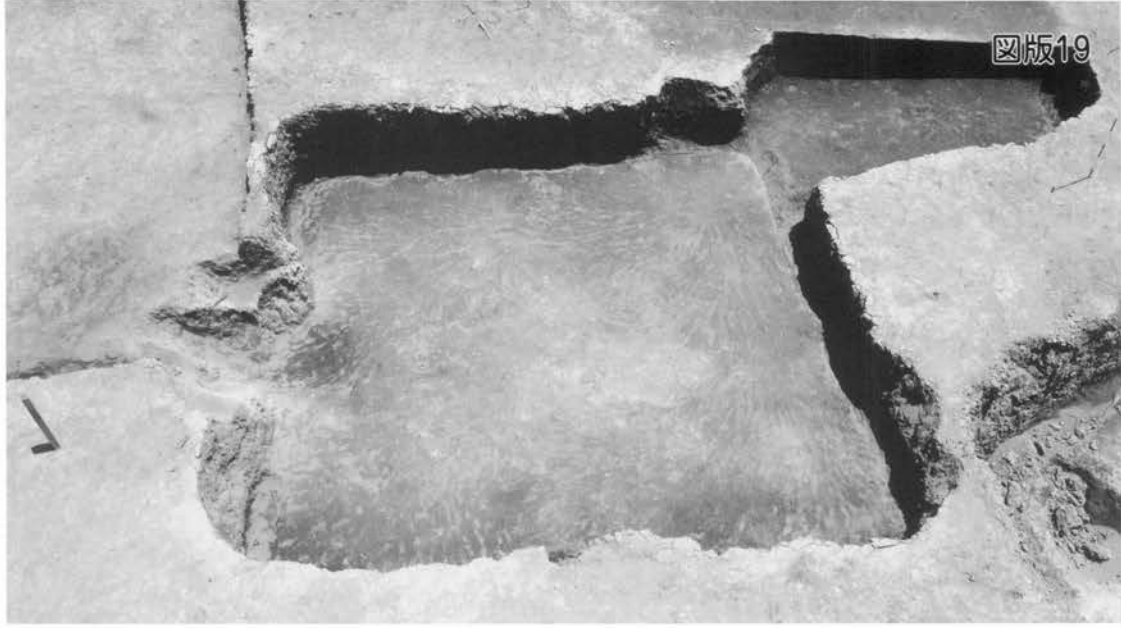
232竖穴住居全景



236竖穴住居全景



236竖穴住居遺物出土狀況



237 竖穴住居全景



217 · 237 · 238A ·
238B · 238C · 240 · 241
竖穴住居全景



238B 竖穴住居カマド



239 竪穴住居全景



239 竪穴住居カマド

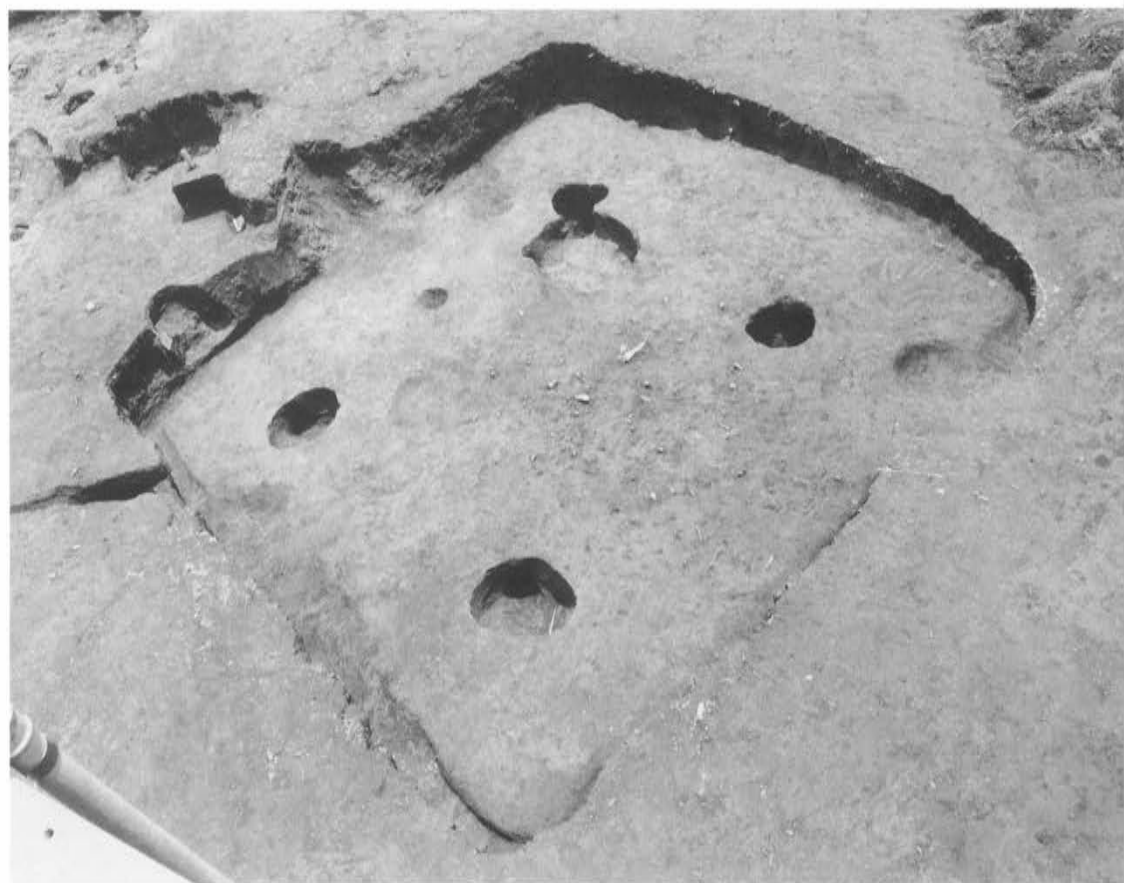


240 竪穴住居全景

240 竪穴住居
カマド内遺物出土状況



241 竪穴住居全景



241 竪穴住居
遺物出土状況

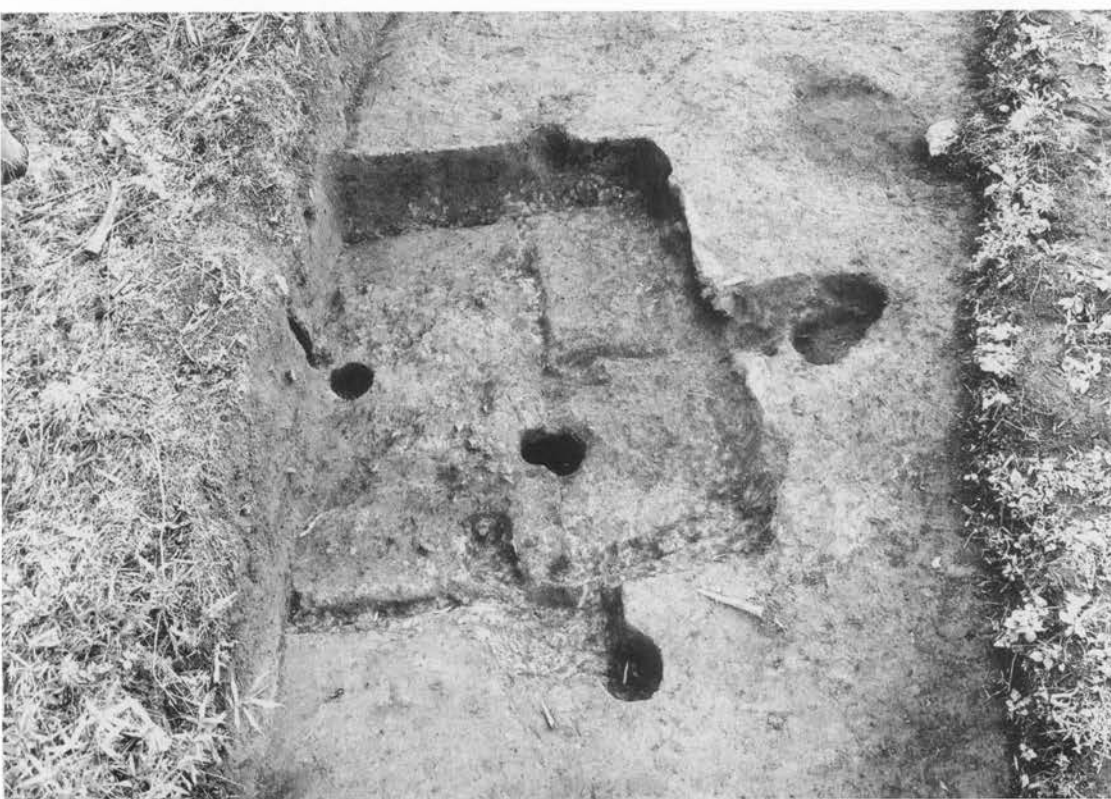




242豎穴住居全景



252豎穴住居·
265土壙全景



261豎穴住居全景



243土壙全景



234土壙遺物出土狀況



253・260溝狀遺構・
254・259・263土壙全景



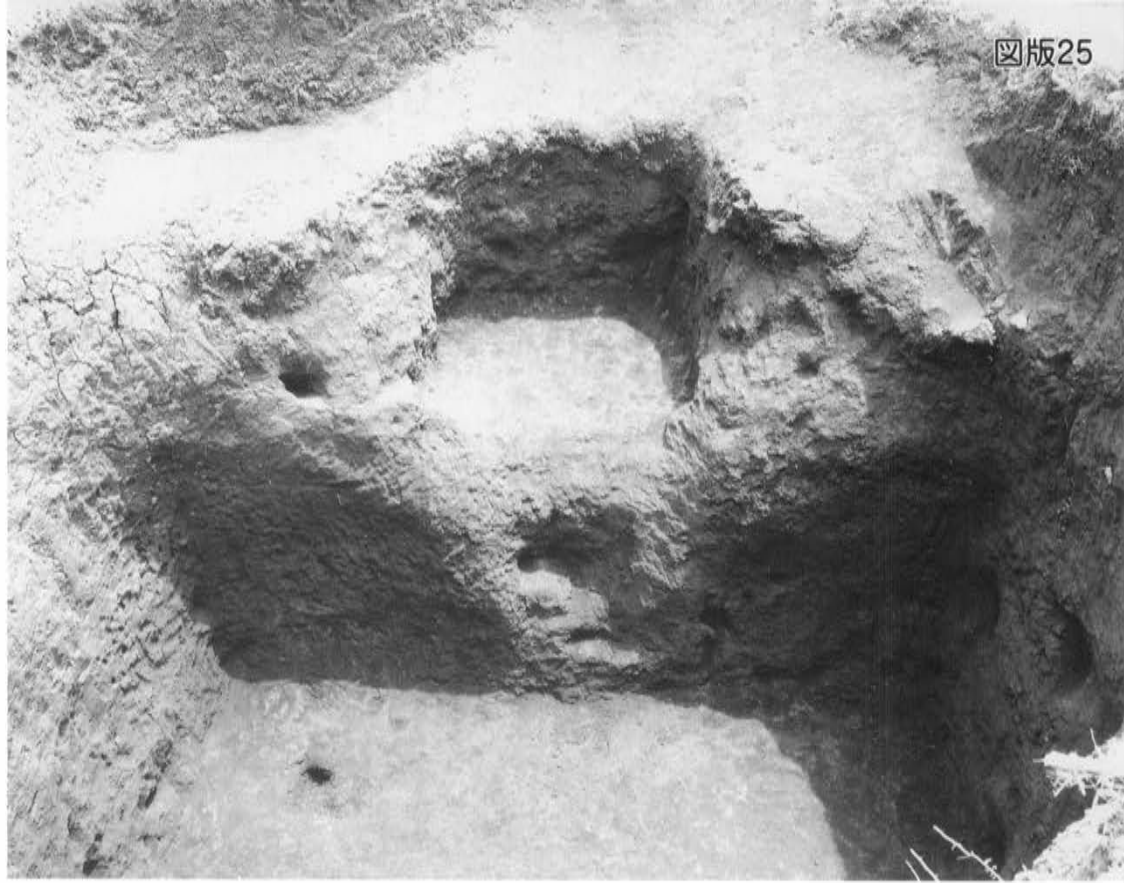
233·251竖穴住居·
255~258·262·268土坑全景



262土坑全景



235地下式坑全景



235地下式壙豎坑近景



223土壙全景



269土壙全景



244溝状遺構全景



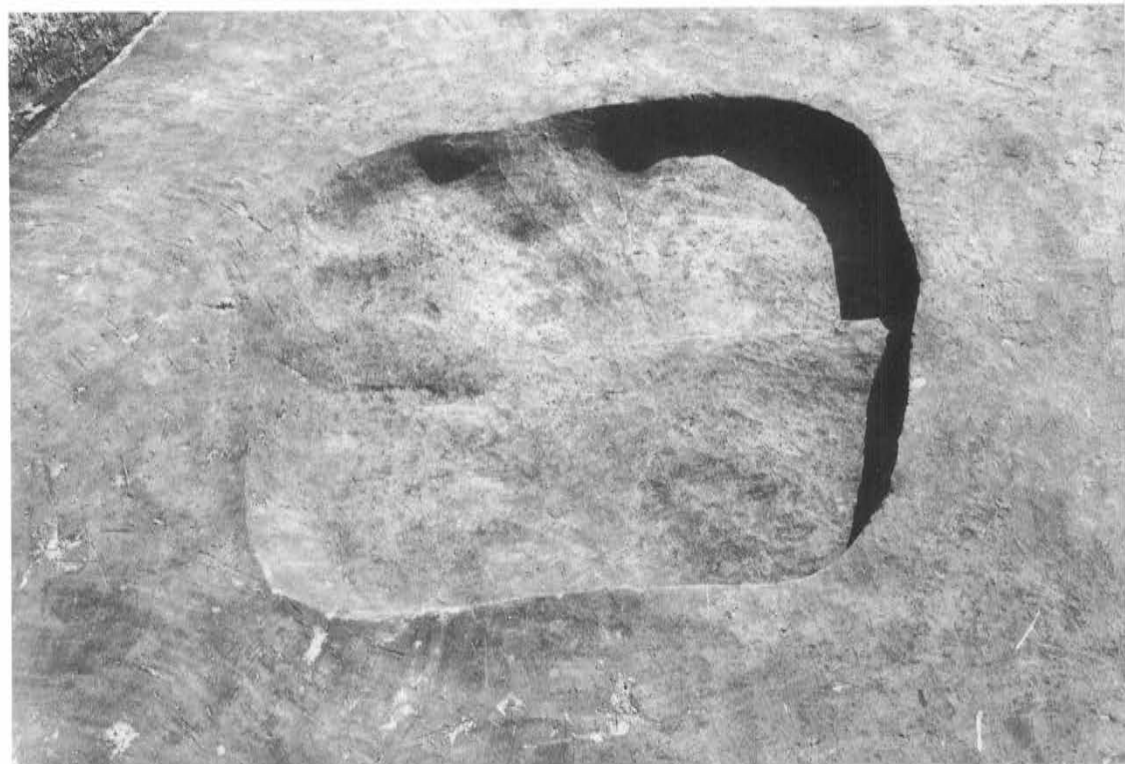
245・246道路状遺構全景



M002道路状遺構
及び調査風景



192陷穴全景



177土壙全景



194土壙全景



206-1



206-3



206-4



206-5



206-6



206-7



206-10



206-18



206-13



171-1



172-1



172-2



174-2



174-4



174-5



174-6



174-8



174-14



174-15



174-18



174-39



174-29



174-30



179-2



179-15



179-14



182-2



182-3



183-3



183-9



183-5



184-2



184-7



185-3



185-6



187-1



187-5



188-14



188-27



188-40



188-30



188-36



188-41



188-42



190-18



190-1



190-3



190-20



190-23



191-3



191-4



191-5



191-9



193-5



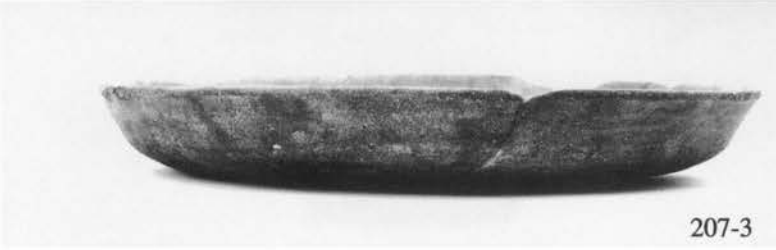
193-7



193-1



207-1



207-3



207-17



207-12



207-18



208-5



208-15



209-1



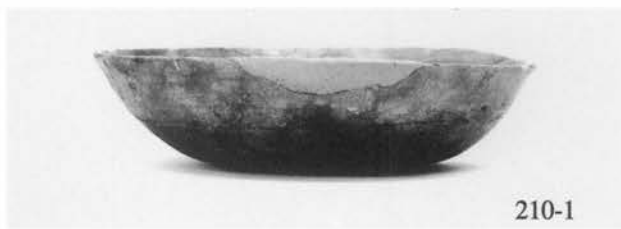
209-9



209-7



209-13



210-1



211-5



211-7



213-5



215-1



216-3



216-2



217-1



217-3



217-4



217-5



218-1



218-2



218-3



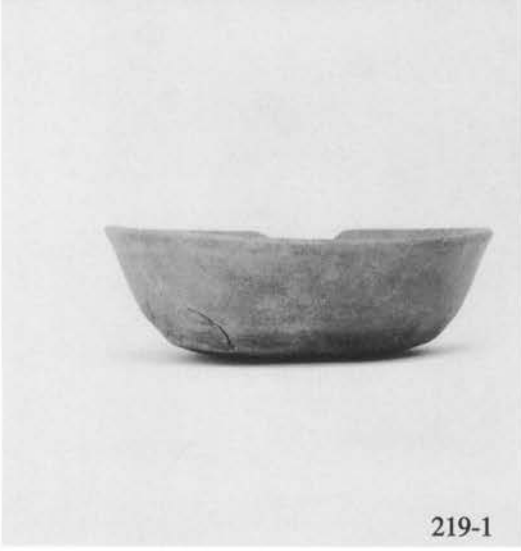
218-4



218-6



218-5



219-1



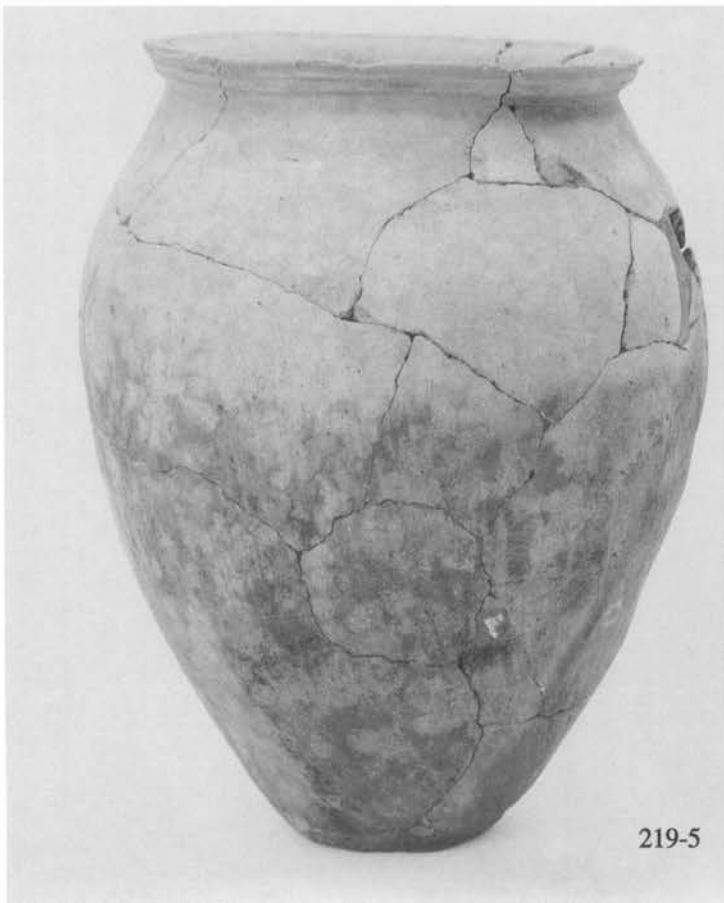
219-2



219-3



219-6



219-5



220-2



220-3



220-13



220-18



222-2
222-13



222-3
222-14



222-4
222-15



222-5
222-12



222-6
222-16



222-7
222-11



222-21



222-23



224-1



224-2



225-12



225-2



225-5



225-6



225-7



225-9



225-10



225-14



225-19



225-23



225-49



225-45



226A-6



226B-3



226B-8



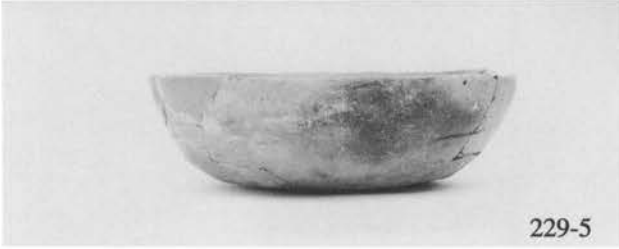
227-1



229-1



229-2



229-5



229-6



229-9



229-14



232-3



233-12



233-10



236-1



233-16



236-3



236-2



237-2



237-6



237-5



237-8



238-6



238-50



238-11



238-51



238-38



238-63



238-39



238-64



238-41



240-8



238-42



238-45



238-47



241-3



251-2



261-2



245-1



M002-6



17W-91-6



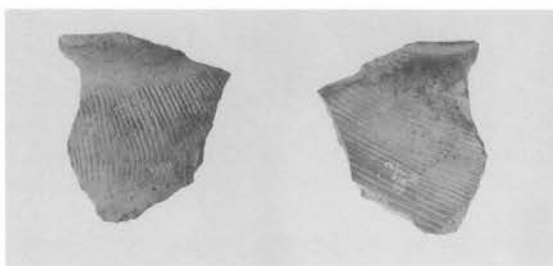
241-4



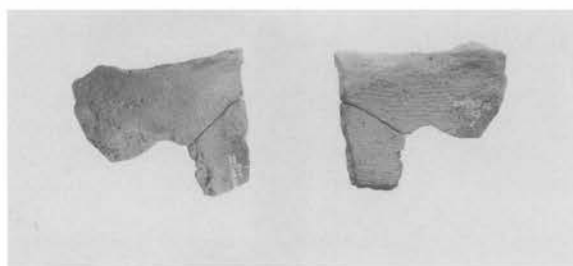
245-2



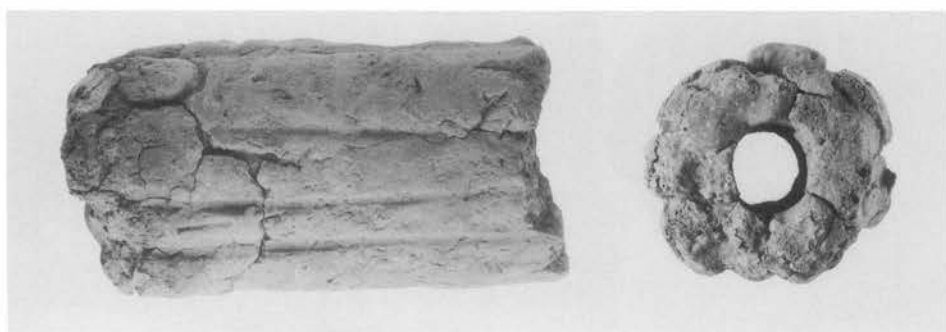
213-17



219-8



229-18



171-10



238-75



191-14



207-29



207-30



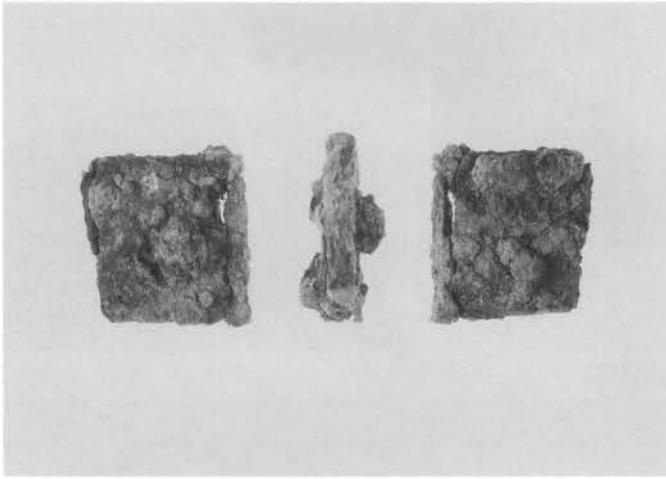
206-27



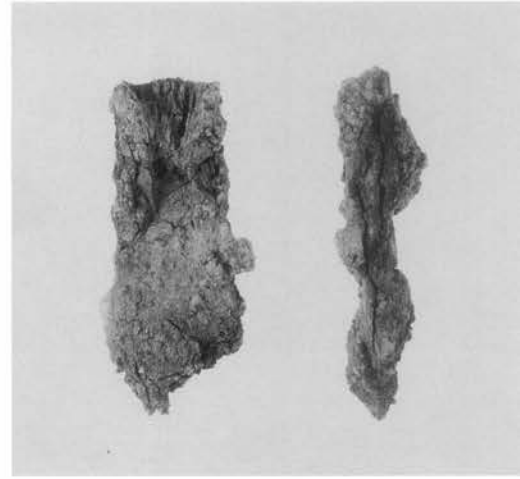
206-28



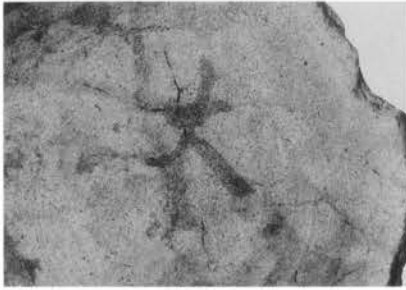
263-2



179-23



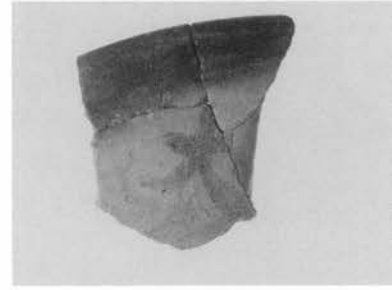
225-60



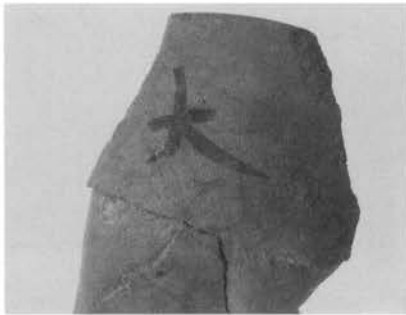
188-12



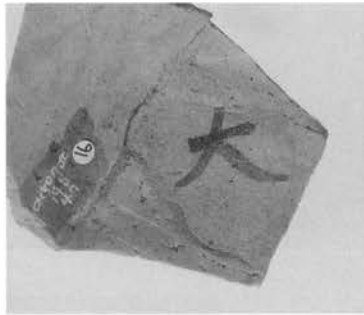
188-7



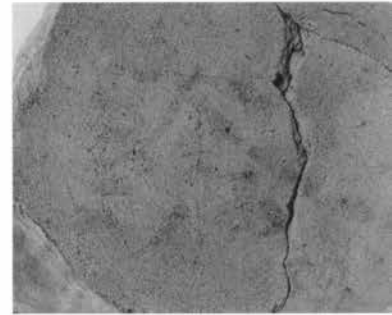
190-5



190-6



190-6



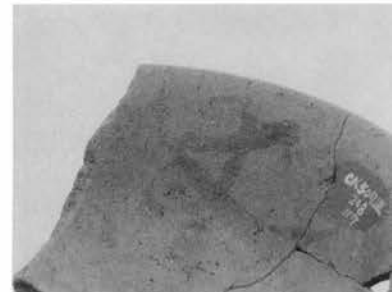
188-2



188-5



190-3



208-16



208-15



M002-1



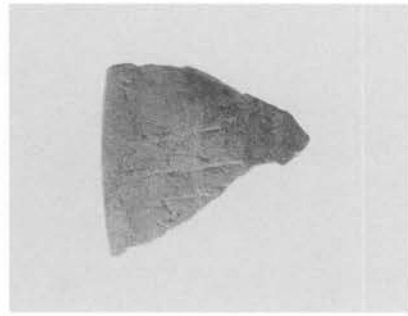
188-1



190-1



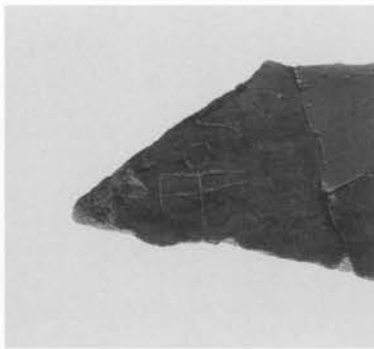
190-2



190-17



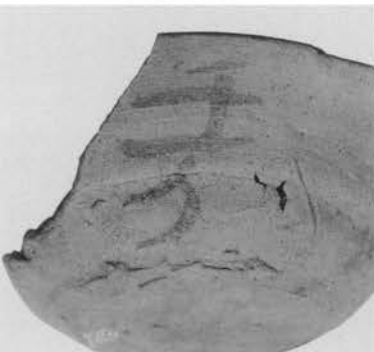
188-15



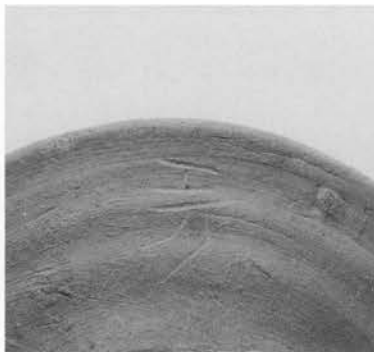
188-22



233-15



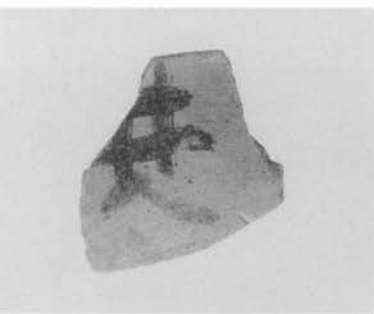
233-16



251-2 (外面)



251-2 (内面)



225-26



225-31 (外面)



225-31 (内面)



237-11



179-9



238-30



188-14



190-12



193-1



211-7



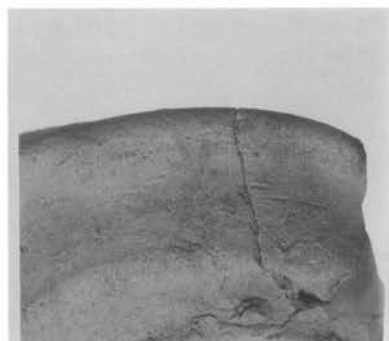
225-23



233-18



237-9



238-26



233-19



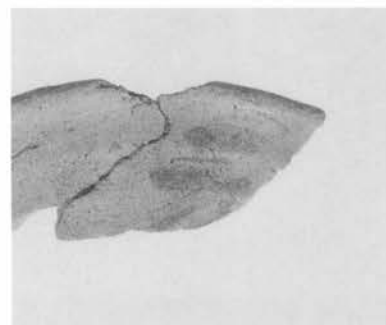
174-35



225-22



174-37



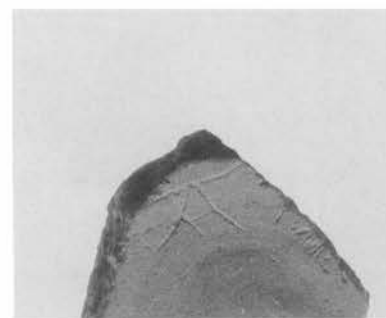
232-1



233-21



174-39



216-12



225-35



226B-1



233-23



209-2



236-1



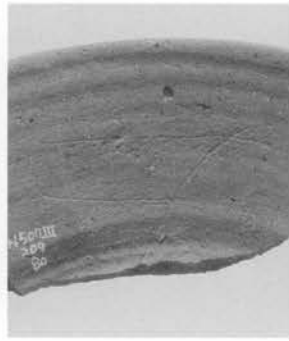
224-1



209-1



174-43



209-3



219-1



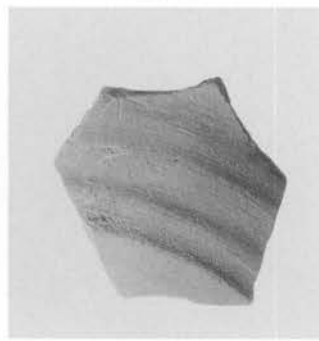
217-4



225-50

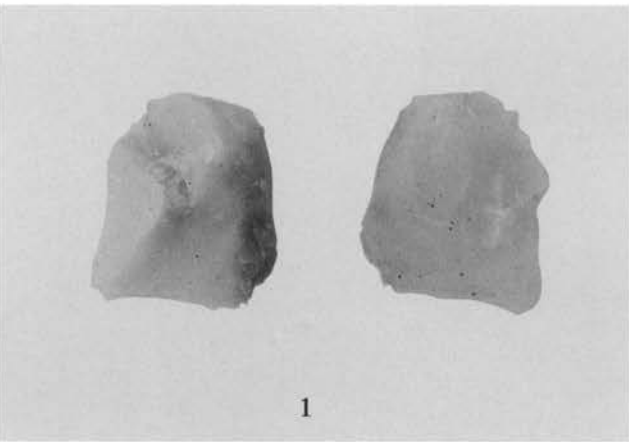


225-34

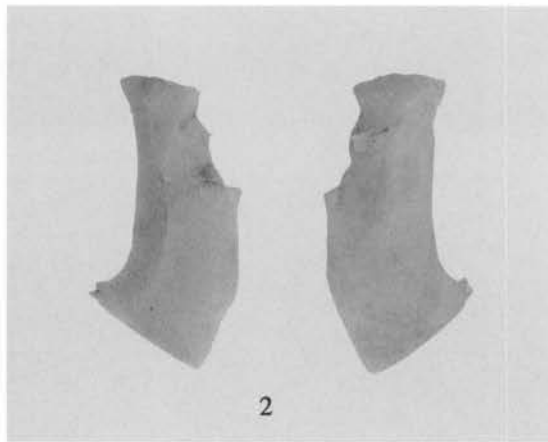


18V-23

石器



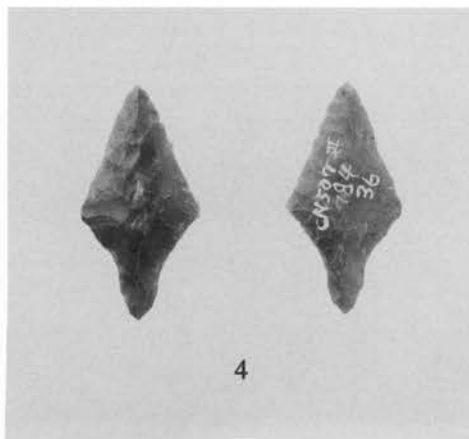
1



2



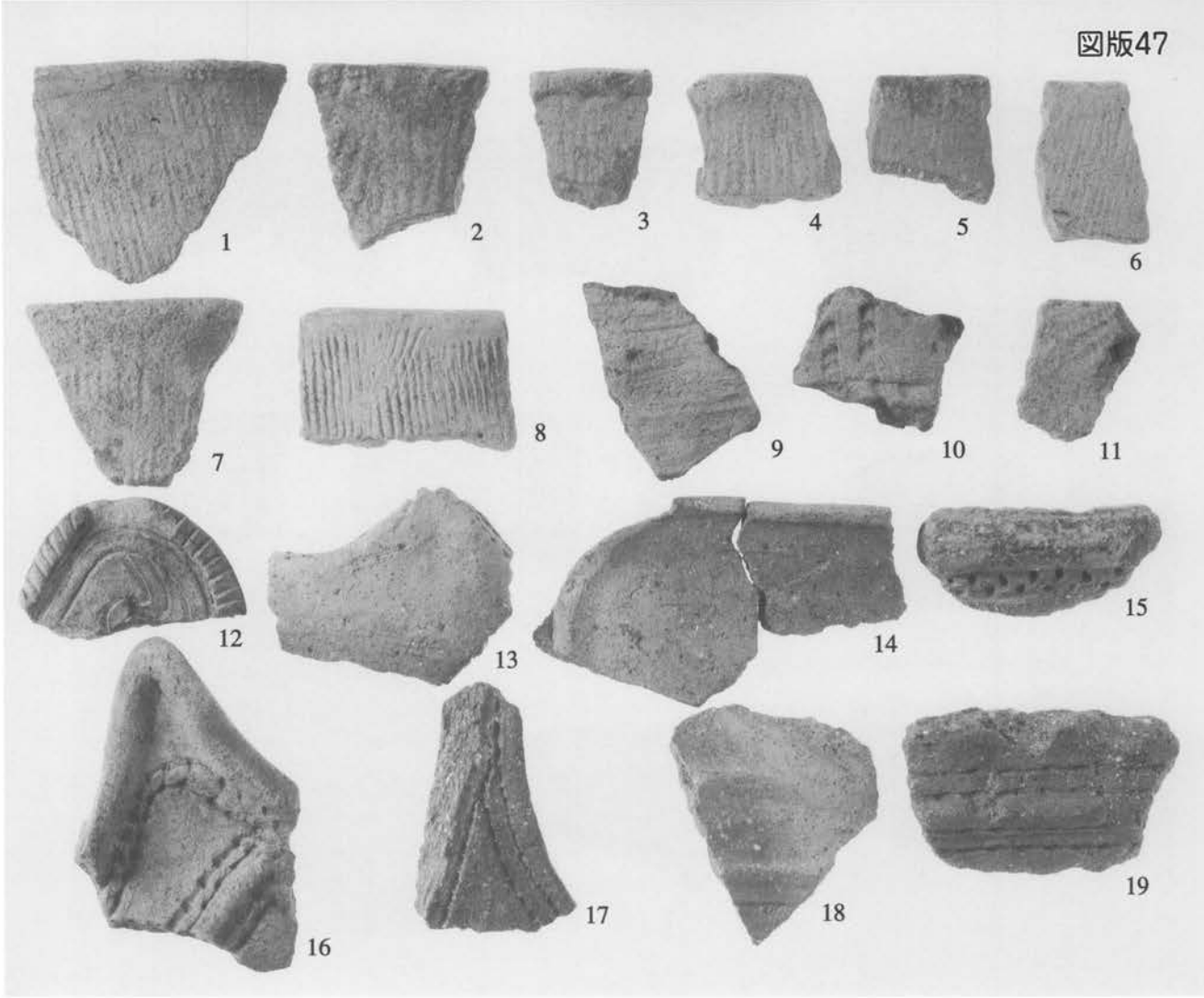
3



4

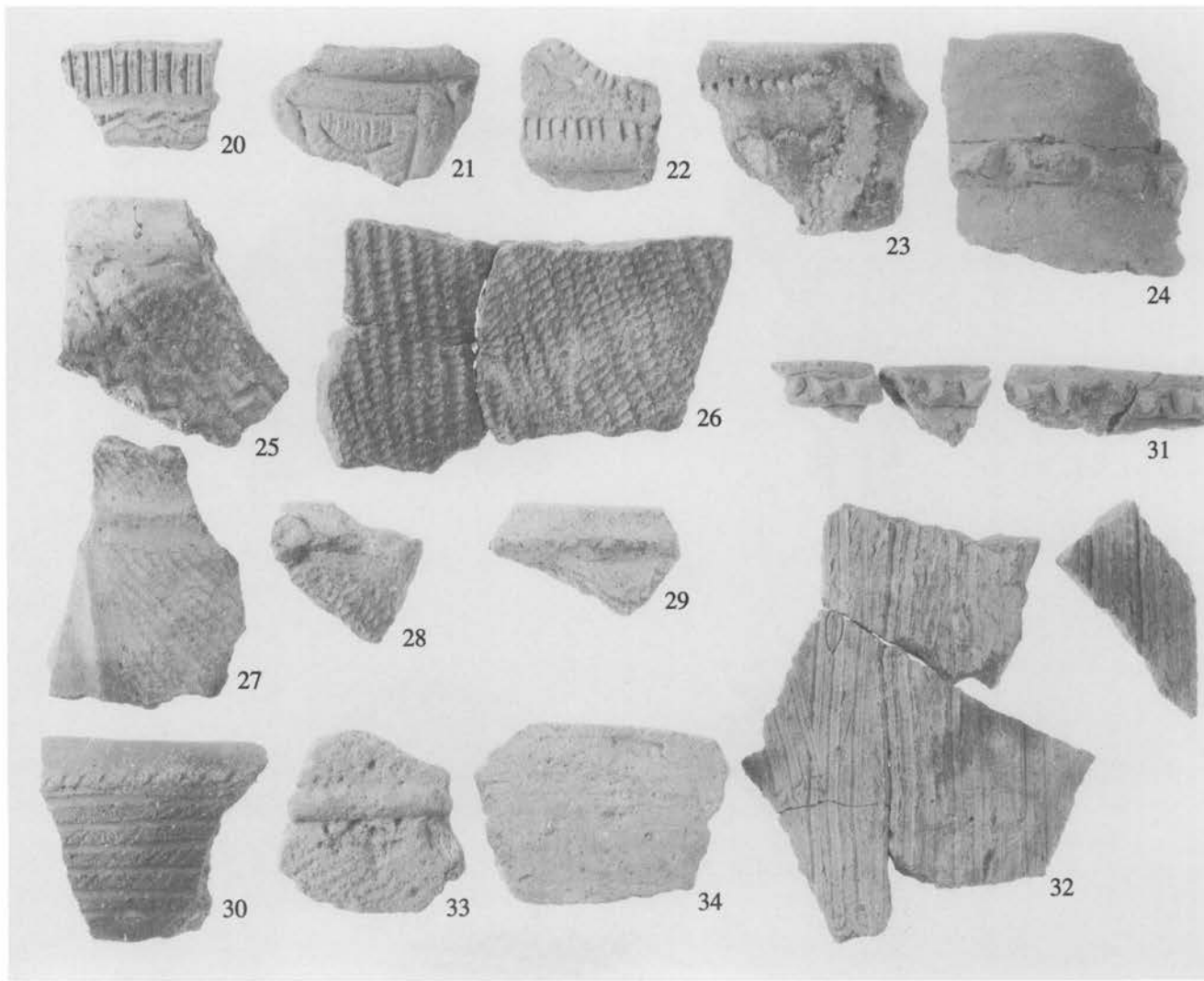


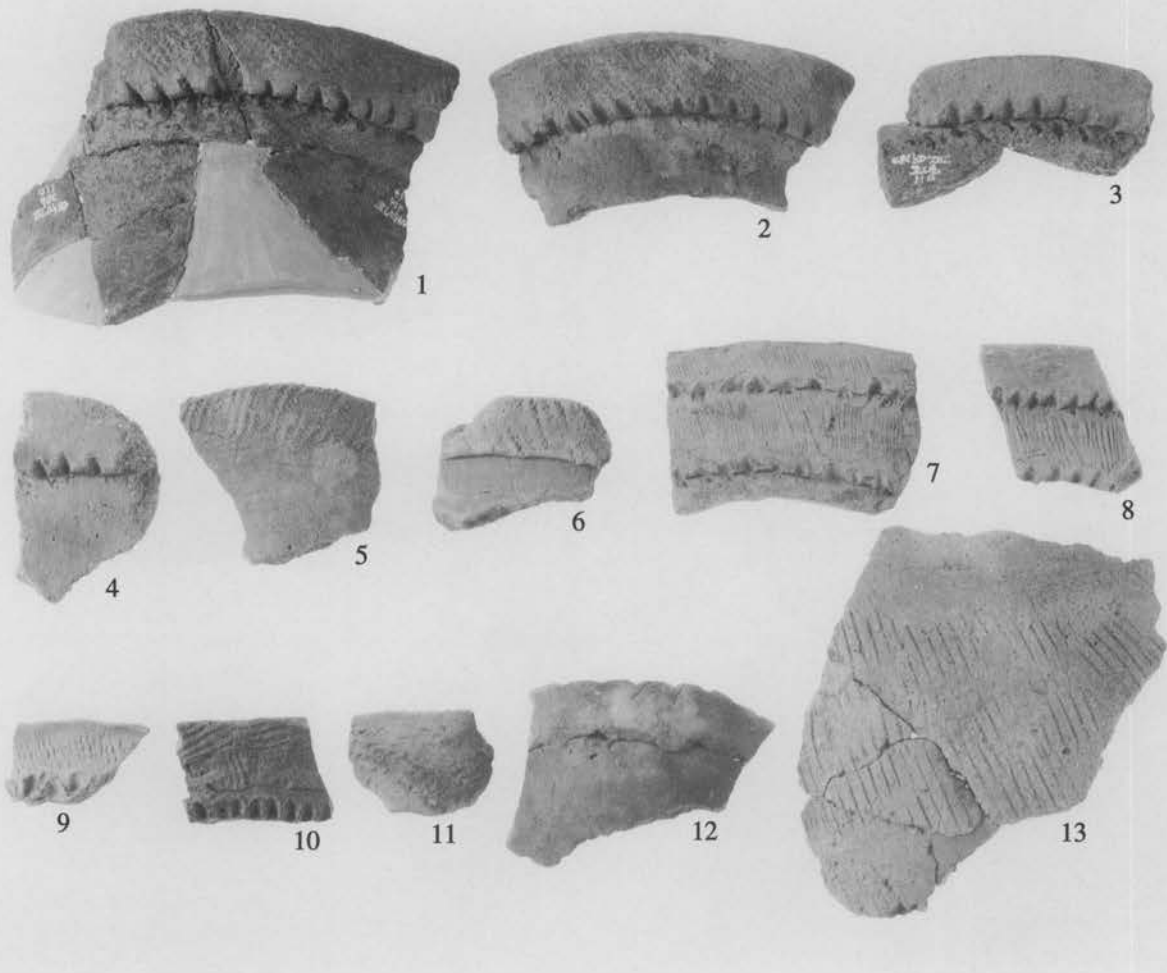
5



縄文土器 (1)

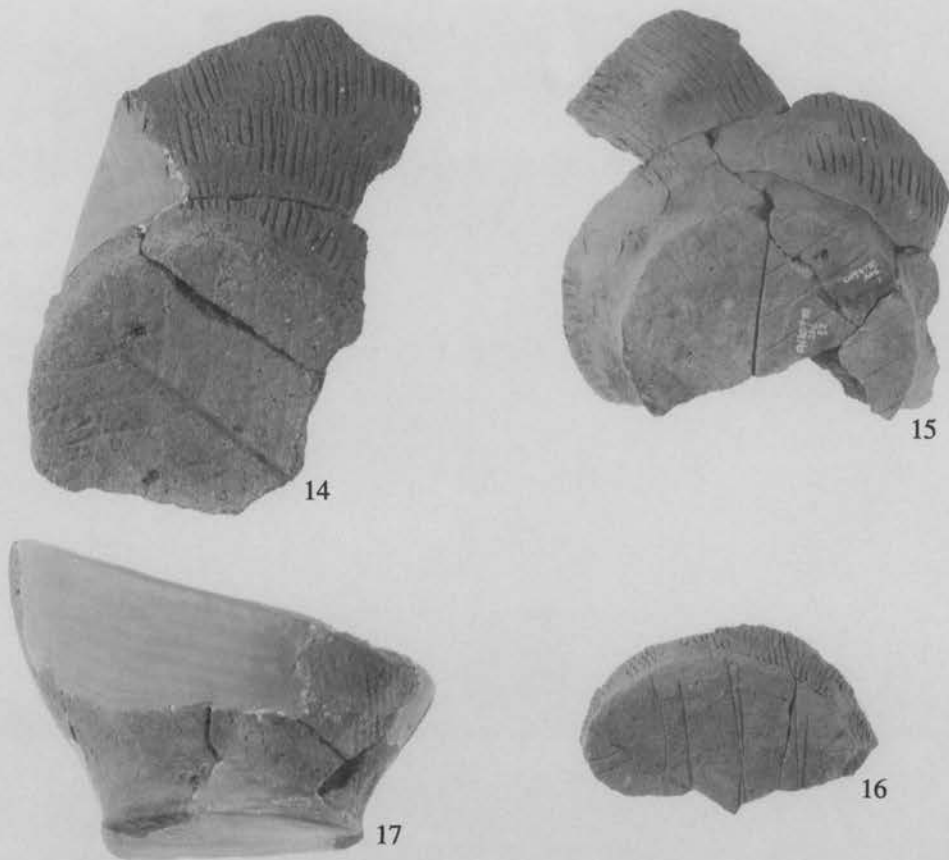
縄文土器 (2)

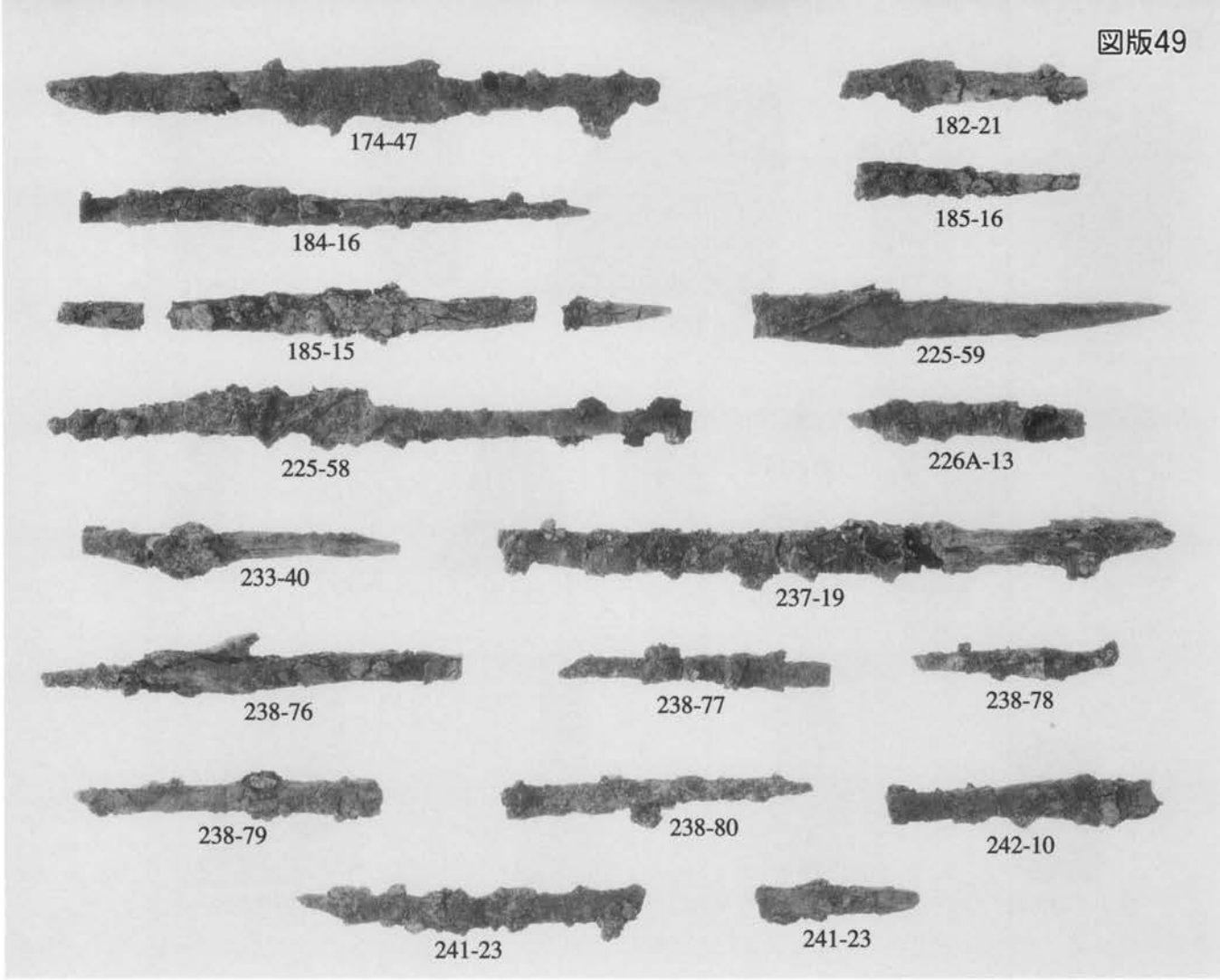




弥生土器 (1)

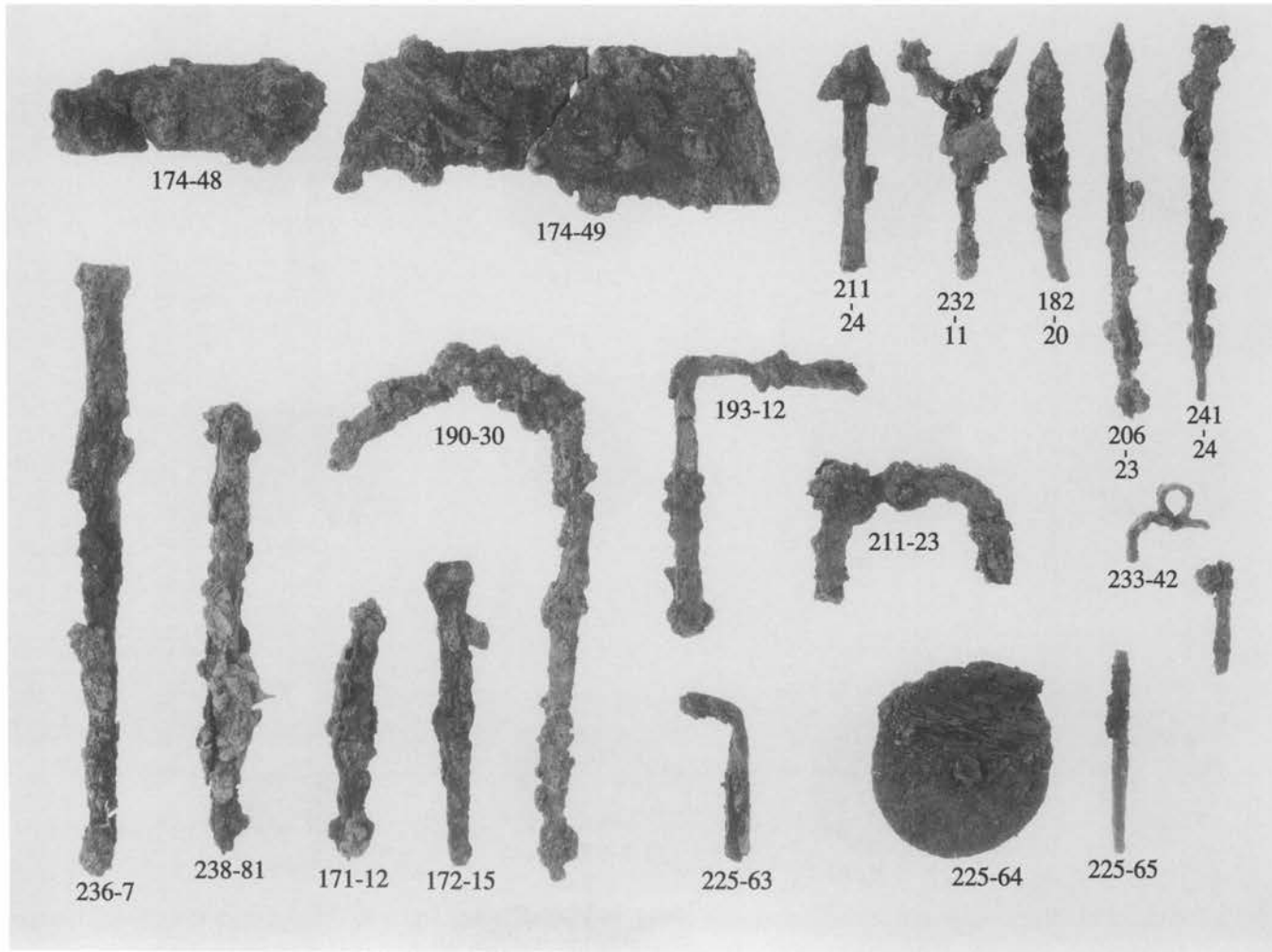
弥生土器 (2)

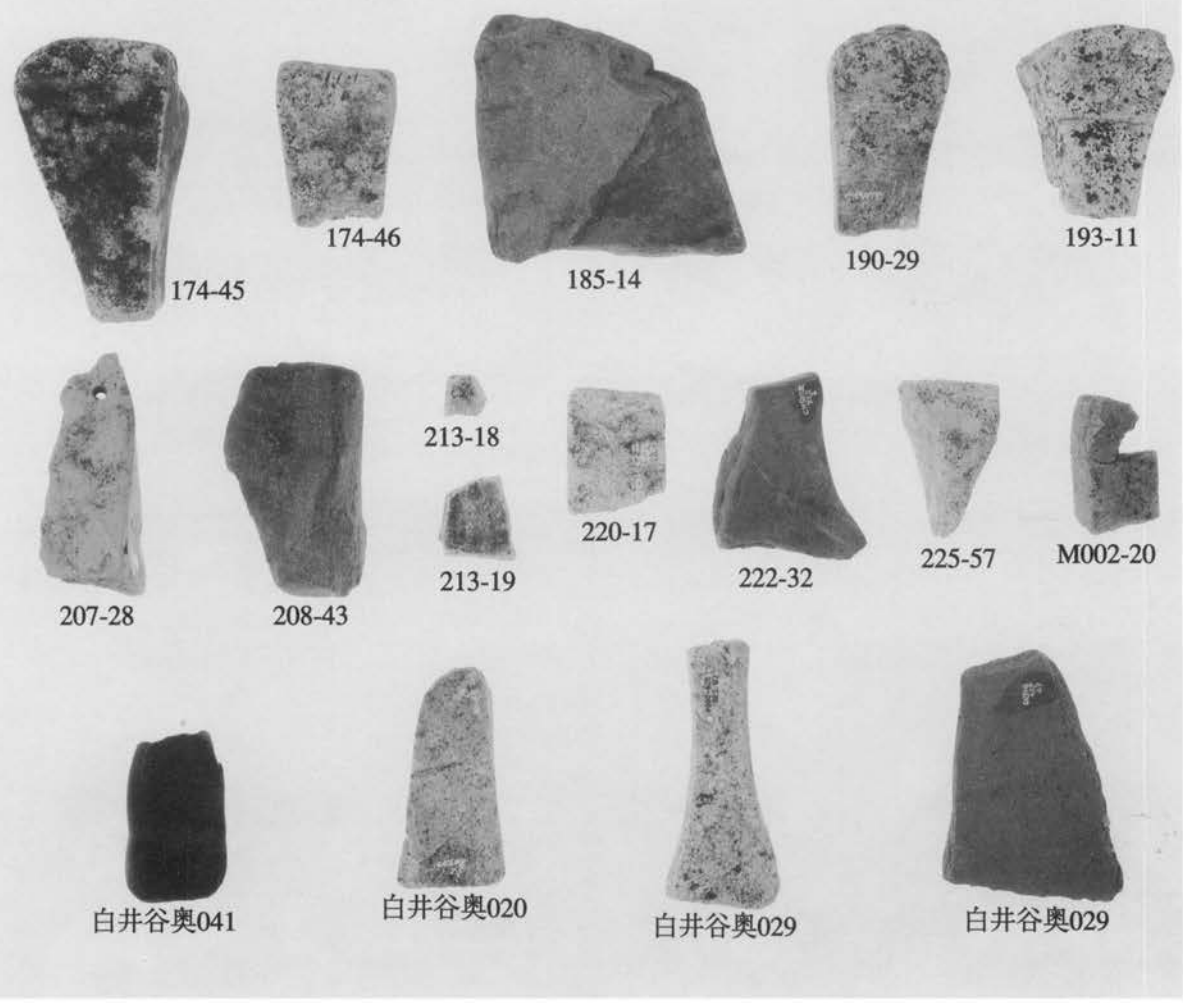




鉄器 (1)

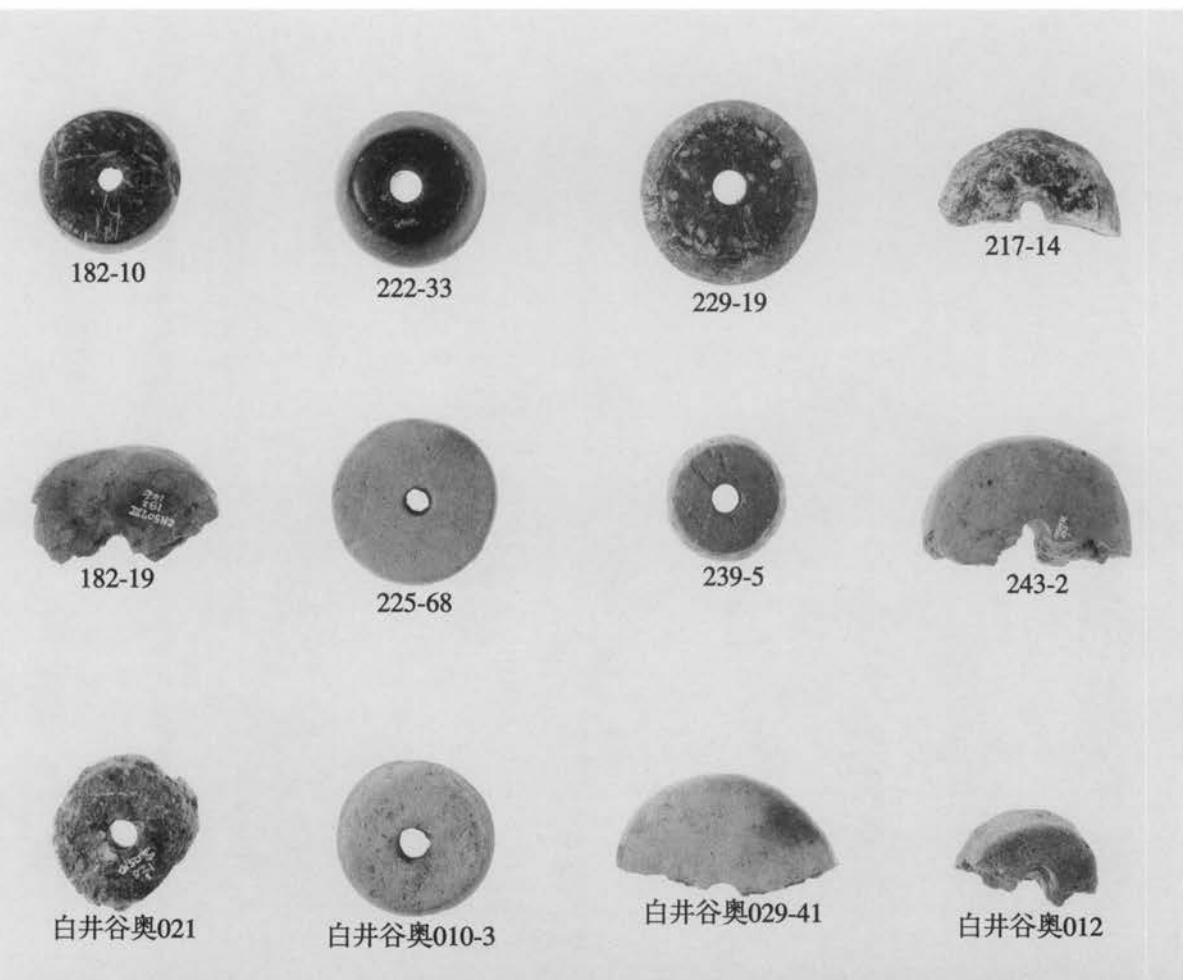
鉄器 (2)

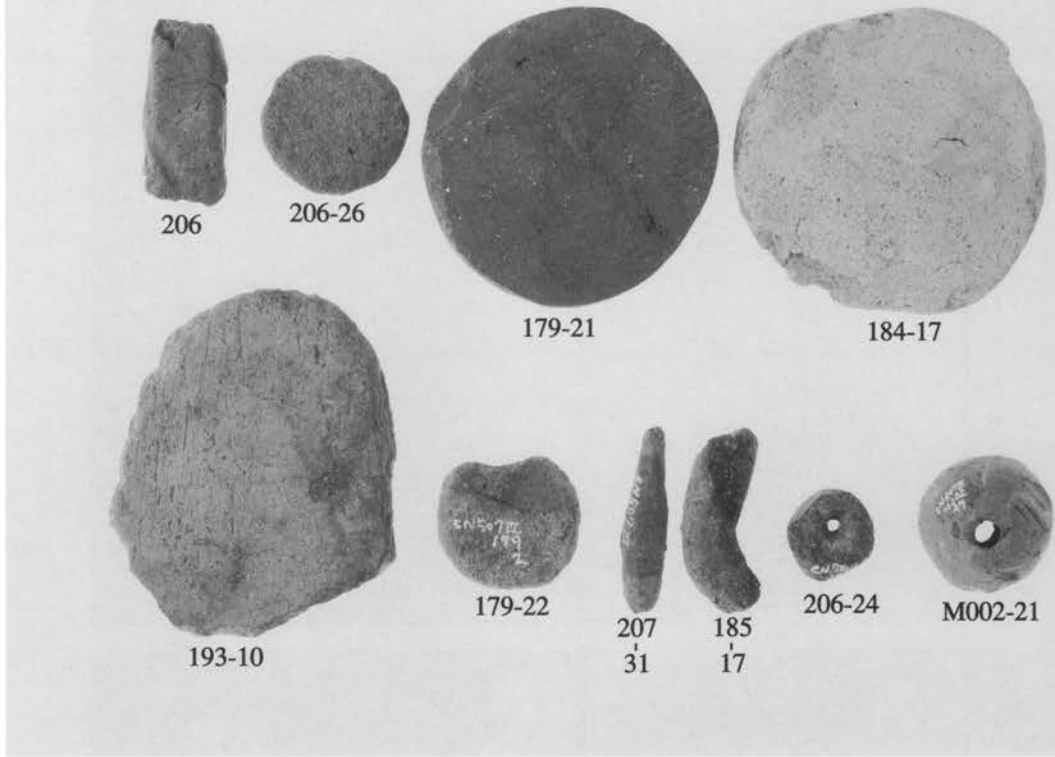




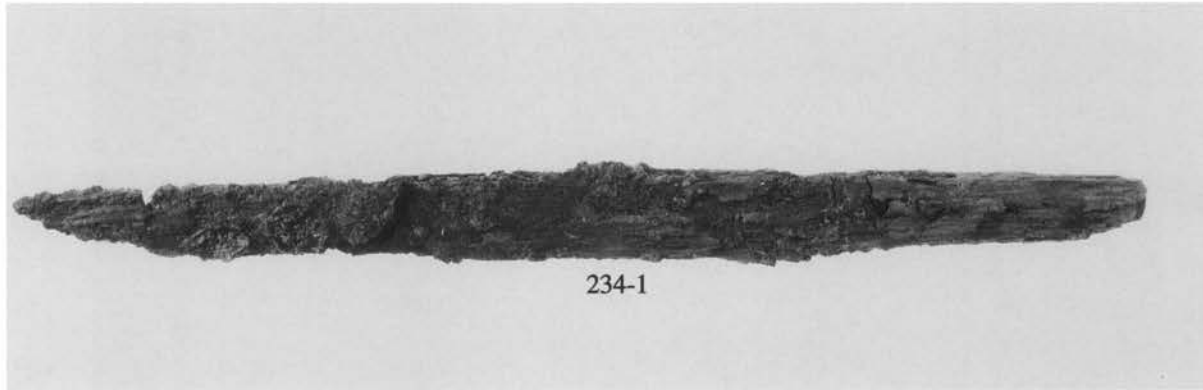
砥石

紡鐘車





土製品





041竖穴住居付近全景



041竖穴住居全景



041竖穴住居
遺物出土状況



006豎穴住居全景



007豎穴住居全景



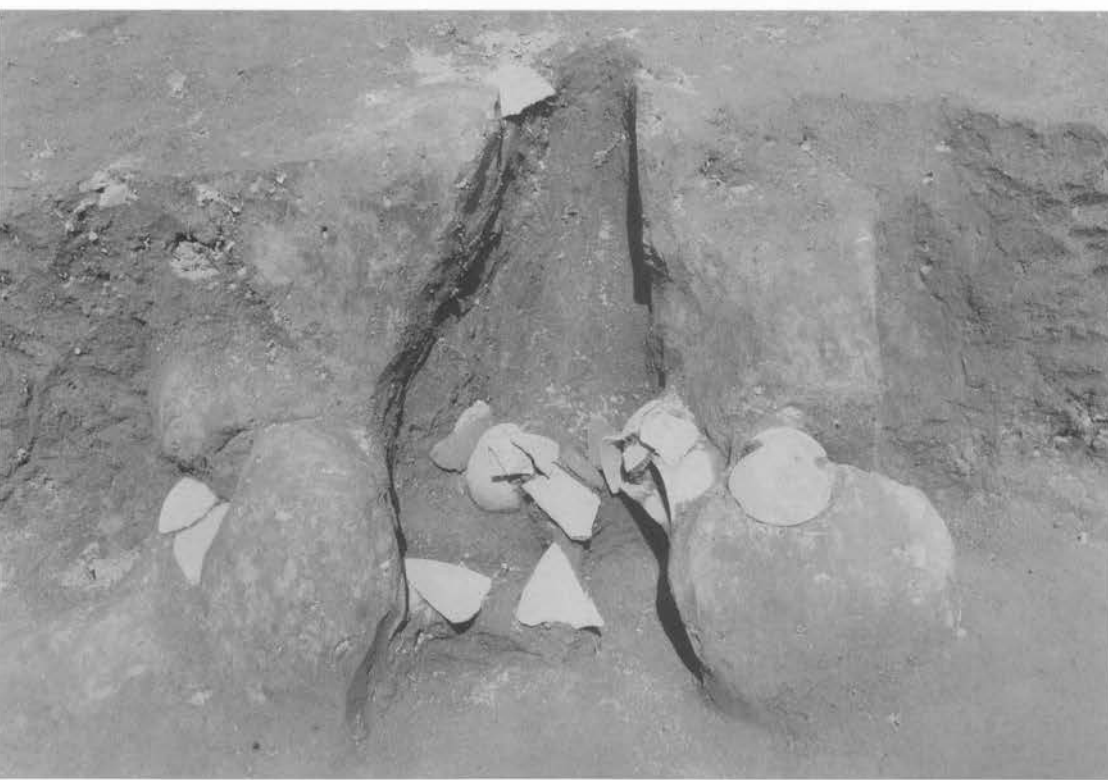
010豎穴住居・
011溝狀遺構全景



012竪穴住居全景



026竪穴住居全景



026竪穴住居カマド内
遺物出土状況



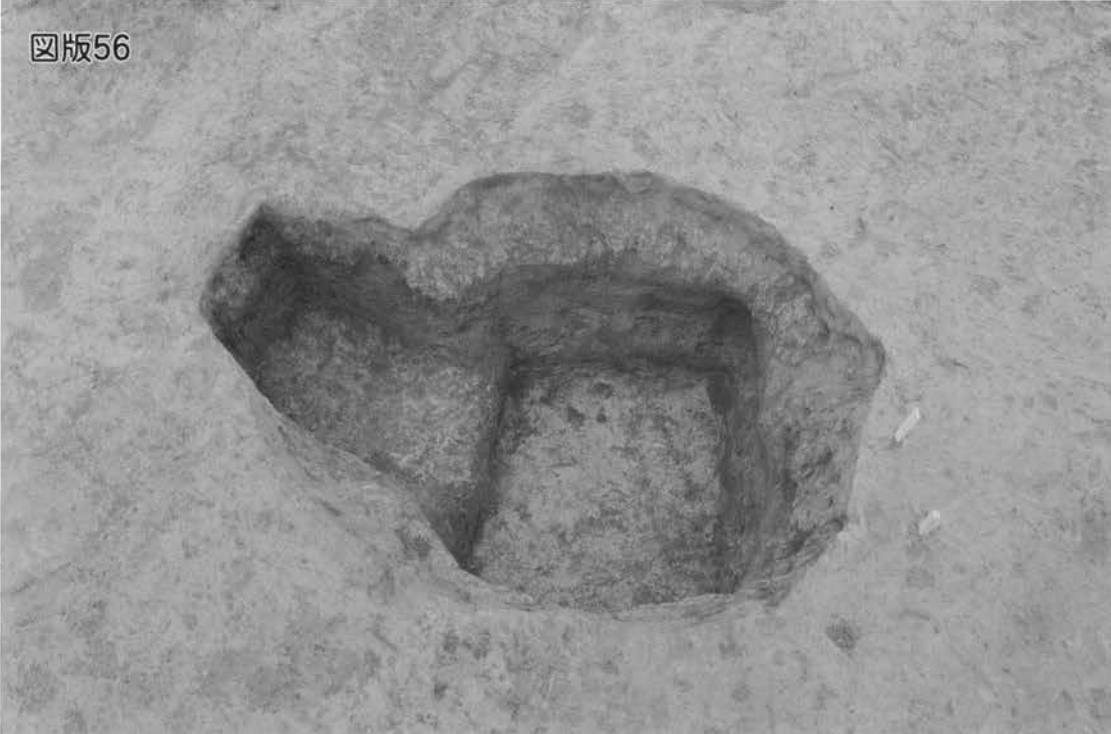
029道路状遺構全景



016地下式壙全景



017地下式壙全景



018地下式壙全景



019地下式壙全景



021地下式壙全景



030土壙全景



032土壙・
037ピット群全景



023A・B土壙全景



020道路状遺構全景



033溝状遺構全景



039方形周溝全景



008陷穴全景



014土坑全景



015土坑全景



007-2



007-3



007-4



012-1



026-4



026-9



029-3



029-13



029-16



007-7



026-10



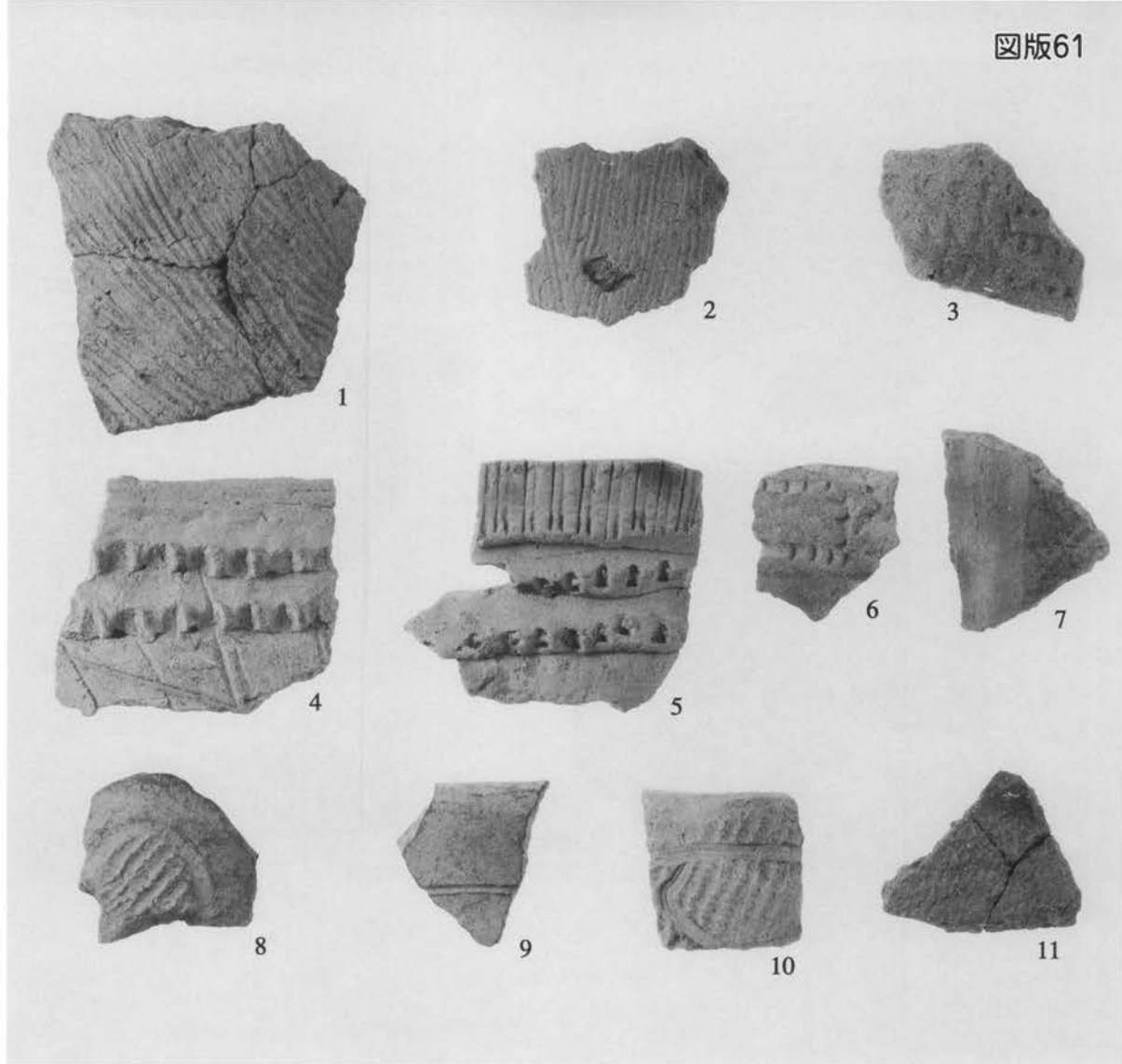
029-26



029-27

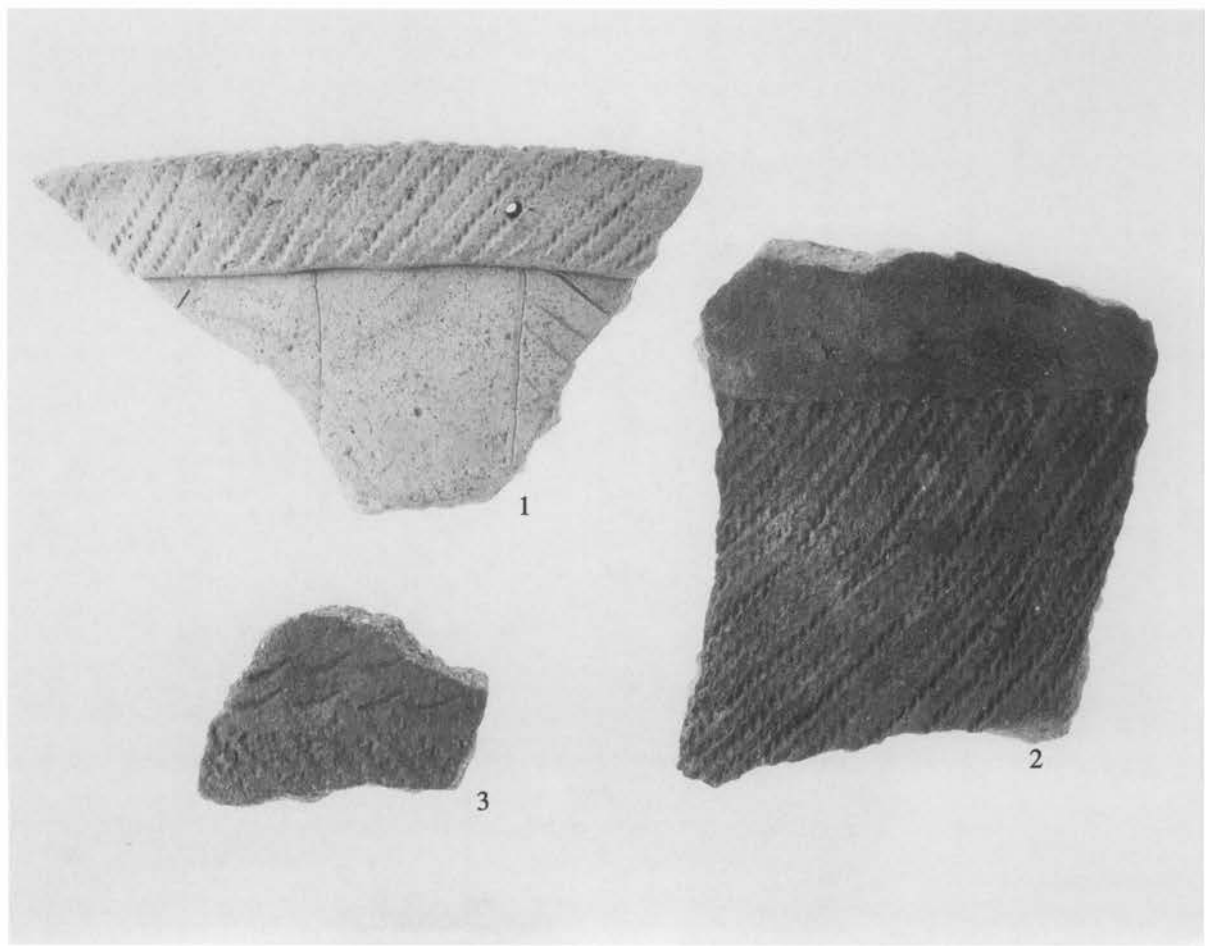


029-28



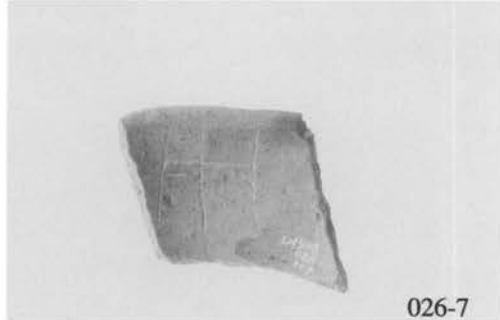
縄文土器

弥生土器

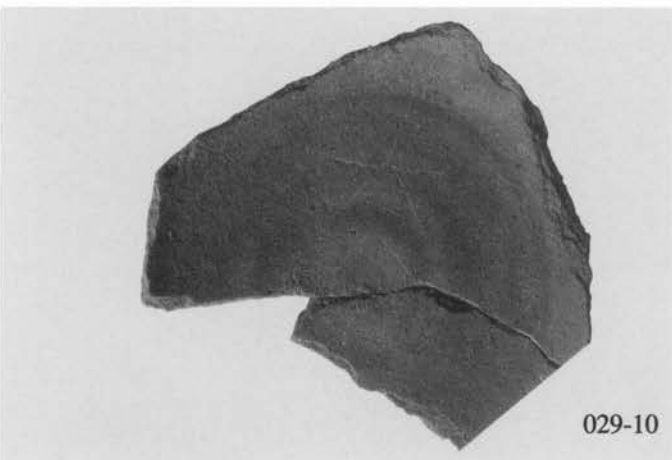




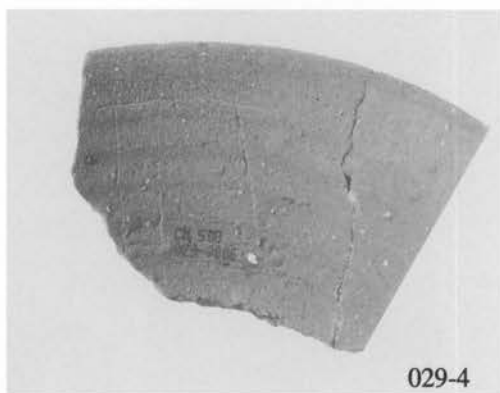
029-25



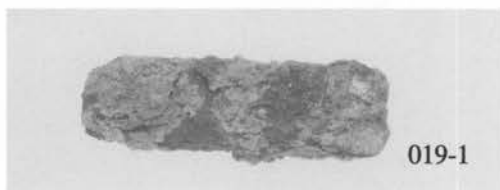
026-7



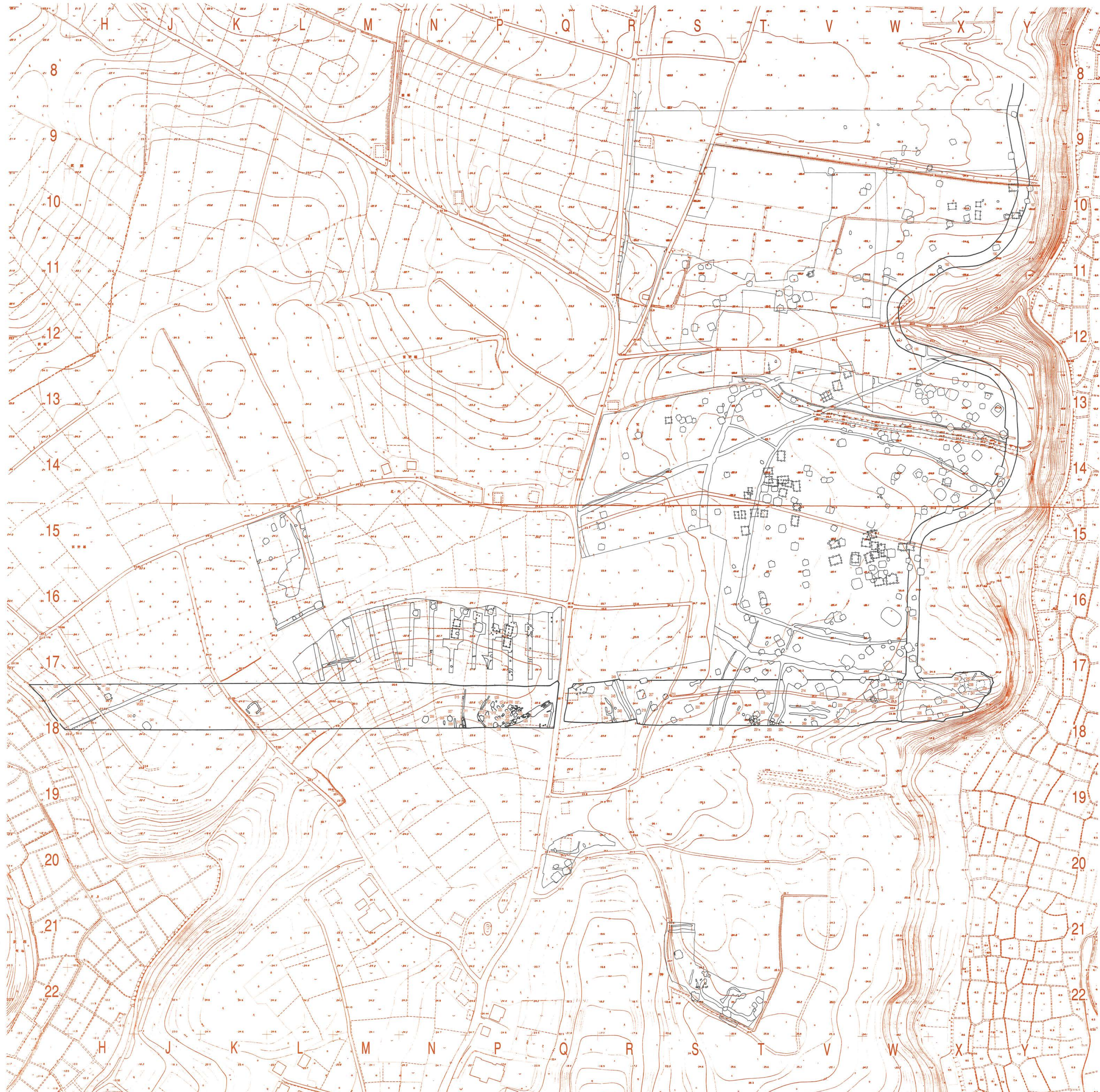
029-10



029-4



019-1



附 圖 鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡全測図 (S:1/1,250)

報告書抄録

ふりがな	ちばにゆーたうんまいぞうぶんかざいちようさほうこくしょ							
書名	千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XIV							
副書名	鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡							
巻次	XIV							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第392集							
編著者名	萩原 恭一							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2				TEL 043-422-8811			
発行年月日	西暦 2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なるかみやま 鳴神山遺跡Ⅲ	いんざいし とがみ 印西市戸神626-2ほか	12231	CN 507	35度 47分 17秒	140度 7分 19秒	19910201～ 19910330 19920401～ 19920630 19930401～ 19930615 19980810～ 19980930	3,290 2,600 3,430 520	道路建設
しろいたにおく 白井谷奥遺跡	いんざいし とがみ 印西市戸神1,043-5ほか	12231	CN 508	35度 47分 16秒	140度 7分 9秒	19930601～ 19930825 19980701～ 19980831	2,880 400	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳴神山遺跡Ⅲ	包蔵地	旧石器		剝片		墨書・線刻の文字・記号資料を多量に出土する。古代印旛郡船穂郷の中心的村落と考えられる。		
	包蔵地	縄文	陥穴 1基	縄文土器				
	集落跡	古墳	竪穴住居 2軒	土師器				
	集落跡	奈良・平安	竪穴住居 51軒 道路 1条	土師器, 須恵器, 緑釉陶器, 灰釉陶器, 三彩陶器, 金属製品				
白井谷奥遺跡	墓域	中世	地下式墳 1基 土墳墓 1基 土墳 15基	鉄鍋, 短刀 青磁, 常滑, 銭貨		鳴神山遺跡Ⅲに隣接する同一台地上の遺跡		
	包蔵地	近世	道路 2条 溝 5条 炭窯 1基					
	包蔵地	縄文	陥穴 1基	縄文土器				
	集落跡	弥生	竪穴住居 1軒	弥生土器				
白井谷奥遺跡	集落跡	奈良・平安	竪穴住居 5軒 道路 1条 方形周溝 1基	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 土製品		鳴神山遺跡Ⅲに隣接する同一台地上の遺跡		
	墓域	中世	地下式墳 6基 土坑 21基 道路 1条 溝 1条	青磁				
	包蔵地	近世	溝 4条					

千葉県文化財センター調査報告第392集

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XIV

－鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡－

平成12年3月31日発行

編 集	財団法人 千葉県文化財センター
発 行	都市基盤整備公団千葉地域支社 千葉ニュータウン事業本部 千葉県印西市戸神501
	財団法人 千葉県文化財センター 千葉県四街道市鹿渡809-2
印 刷	株式会社 み つ わ 千葉県千葉市美浜区新港213-5
